昭和十年十二月二十日發行
昭和十年十二月十五日印刷

不許複製

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者　長尾文雄
東京市芝區浜松町二丁目三番地

發行所　大東出版社
東京市芝區芝公園七號地十番

國譯一切經　經集部　十六

昭和十年十二月十五日印刷
昭和十年十二月二十日發行

國譯一切經　經集部　十六

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者　長尾文雄
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園地七號地十番
大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝(43)一一〇六番
　　芝(43)三〇四〇番

製本所　兩角製本所

貪欲の結綱を人尊は皆脱し、諸の生死苦を已に斷じて餘無く、善權方便して住して住する所無く、形に處し教化して人の爲に勞を執り、皆、衆生の爲に經典を演べ、無爲泥洹の大道に趣かしめ、所盡〔三三〕已盡きて復た盡くす所無く、所度〔三三〕已に度して復た度する所無く、佛事を施爲して廣く無量を濟ひ、復た聖慧を以て漸く彼岸に度し、獨り善くして伴無く亦た疇匹無く、正覺律に應じ、習うて習ふ所無く、心に憒亂無く專精一意に、常に慚愧を懷きて、恥の及ばざるが如く、內外淸淨なること水の澄淨なるが如く、聖慧道德は海の如くして厭くこと無く、定意三昧もて無量界に遊び、賢聖默然として以て自ら娛樂し、眞諦受證して終に疑有ること無し。今文殊師利、此の德有るを賜うて、量り難く測り難く、不思議總持法門を現じ、亦た鄙賤をして此の深藏に逮ばしめ、一切を饒益し感動する所多し。』と。爾の時、文殊師利、此の法を說ける時、七萬二千の立行の菩薩ありて不退轉地に住し、皆、深法の藏を得るに逮る。復た無量の衆生有り、皆、無上正眞道意を發す。梵釋・四天王・天龍鬼神、皆供養を興し、散花燒香し、敬を加へ微意もて文殊師利に向ひぬ。

【三三】已の字麗本、以に作り、三本宮本已に作る

菩薩瓔珞經（終）

た是の如し。道等しく、泥洹も亦た等し。之を求むるに見る可からず、亦た處所無し。是の故に道等しく、泥洹も亦た等し。』と。究竟菩薩又た問ふ『頗し巧便有り、住して住する所無くして、而も道を學ぶや。』と。文殊師利報へて曰く『住して住する所無きは道に異りや。此の法によつて道を學ばんと欲するや。』と。究竟菩薩又た問ふ『何者か是れ道にして、何者か是れ道に非ざる。』と。文殊師利言はく『住して住する所無ければ、此れ則ち道と爲す。何ぞ住によつて道を學ぶを得んや。此れ則ち然らず。有爲法より無爲法に至り、淨戒身・三昧身・智慧身より、住より學するや。此れも亦た然らず。是の故に當に知るべし。無住によりて道を學せざるなり。夫れ學道は、三十七品・空無相願・戒定慧解脱知見品・諸禪三昧・身相衆好・權現適化・布施持戒忍辱精進一心智慧解脱に緣らずして道を學するは、此の法然らず。何を以ての故に、道は學に非ず亦た學有ること無ければなり。貢高を見ず、住して所住無き、是の如きを作せば、乃ち道に應ず。三界論議の想に緣らず、復た法を見ずして無上道を成ずと、此の觀を作す者は乃ち住處有り。道性の空なる如く、泥洹も亦た空なり。是の故に正士、狐疑を泥洹道に生ずること勿れ。』と。

爾の時、究竟菩薩復た文殊師利に問うて言はく『若し善男子善女人、無上至眞等正覺を欲求せば、當に何の法を行じてか道に至ることを得べき。』と。文殊師利報へて言はく『族姓子、若し善男子善女人、初發意より乃ち成佛に至るまで、其の中間に於て道心を失はずば、五無間處に處ると雖も、亦た復た畏れず、五陰・六衰・生老病死・世間苦惱・魔若しくは魔天も能く奈何ともすること無けん。若し善男子善女人、道を欲求せば、亦た法の有常無常・有爲無爲・有漏無漏・有脱無脱を見ざれ、亦た法は是れ我所、非我所なるを見ざれ。我人壽命、善惡の所趣、悉く空、悉く寂なり、一切法性、生死泥洹も亦復た是の如し。諸の世俗法と及び、度世凡夫の佛法と學不學法と聲聞緣覺と、普ねく皆一等にして差別無し。空無相を解し、諸種の無生無行を棄捐し、此の法に於て等しく此の如き業を修し、宜しきに隨つて分別して是の如きの學を作すを、乃ち謂つて道と爲す。』と。爾の時、究竟菩薩、文殊師利を讚じて言はく『善い哉善い哉、說く所の如きは、一切を饒益す。我自ら思惟するに、敢て諸法の相に疑ひ有らず。何を以ての故に、諸法の如きは吾無く我無く、亦た壽命無し。法觀を分別するに平等無二なり。如來至眞は解脱無礙なり、唯だ佛のみ能く察して演布して說くのみ。所以は何ん。如來は以て諸漏を盡し、愛欲聲色の穢患未だ曾て復た起らず、

文殊師利言はく、『族姓子、明は闇と合す。但だ汝、見ずして、謂つて合せずと爲すのみ。』と。究竟菩薩又た問ふ、『云何が族姓子、冥は何の所にか止在する。』と。文殊師利言はく、『見る可からざる者是を闇冥と謂ふ、處して處する所無し。所以は何に、若し日出づる時、月も亦た倶に照す。豈ぞ復た明に益無しと言ふ可けんや。共に相ひ受入して離別す可からず。族姓子、且つ聽け、日出づる時の如き、冥は所在とか爲す、東に歸せんや、西に歸せんや、南に歸せんや、北に歸せんや、四維上下何れの所にか在りと爲す。斯の觀を生ずる勿れ。所以は何ん。闇は常に在り、歸趣する所無し、明も亦た是の如く闇と共に合す。當に此の義―生死は道と合す、道は則ち是れ生死なるを觀ずべし。』と。文殊師利復た究竟菩薩に語つて言はく、『近く方喩を取らん。智者は此を以て自悟せん。須彌山は東は黃金色、南は水精色、西は琉璃色、北は白銀色なり。其れ趣むく有る者は、色豈異有らんや。斯の觀を造す莫れ。所以は何ん。色は是れ一にして亦た若干無し。但だ愚者の念、謂つて異有りと爲すのみ。是の故に正士よ、道は生死と合し、生死は道と合す。其れ此れを知れば、一切諸法も亦復た是の如し。何を以ての故に。皆悉く空なるが故なり。云何が念を生じて、諸法中に於て合せずと言はば、此の事然らず。』と。時に究竟菩薩復た文殊師利に問ふ、『未解脱の者は復た解脱と合するや。』と。對へて曰く、『是の如し。』と。又問ふ、『云何が族姓子、解脱と未解脱と合するや。』と。答へて曰く、『未脱者已に脱し、已に脱すれば有脱を念ぜず無脱を念ぜず。無脱は無性なり、無性は無生なり、無生は亦た來時を見ず、亦た去時を見ず。是を謂つて道と爲し、亦た泥洹と爲す。』と。又た問ふ、『云何が無求無脱にして大道と爲す。』と。文殊師利言はく、『脱に於て有脱を念ぜざるは、是を[三]不脱と爲し、是を道と爲す。二見を生ぜざれば乃ち泥洹に應ず。』と。究竟菩薩又た問ふ、『其の道は泥洹と異るや。』と。文殊師利言はく、『不なり、族姓子、道は一にして二無し。道は則ち是れ泥洹、泥洹は則ち是れ道なり、亦た若干無し。』と。究竟菩薩復た問ふ、『頗し復た法の泥洹より出づる有りや。』と。答へて曰く、『無きなり。』と。又た問ふ、『誰か泥洹に處りて泥洹と言ふや。法有りて從來する、此は是れ俗法なりや、此は是れ道法なりや、此は生死法なりや、此は泥洹法なりや。』と。文殊師利言はく、『處所無きは則ち是れ泥洹なり。亦た往無き者、亦た來無き者、生無く、滅無く、亦た著斷無きを、其れ道と知る者も、亦た復

【三】不脱恐らくは脱の寫誤ならん。

殊師利復た究竟菩薩に告げて曰く、『若し族姓子、若し念無念に念を生ぜず、中間に意無ければ後に災異無し。設し當に念を生じて災異有るべくば、是れ則ち安からず。本より竟に至るまで有患亦た無患を脱せず。若し當に分別して有災を見ず、無災を見ざるべくば、是れを乃ち名けて、泥洹に通達して永く安隱に處すと曰ふ。復た有習無習に往還することなく、第一義に應ず。』と。爾の時、究竟菩薩言く、『云何が文殊師利、若し士夫有り、是の說を作して言はん、「空は有住なりや、空は無住なりや。空は有習なりや、無習なりや、有生なりや無生なりや。」と。若し是を言はば、其の義云何。』と。文殊師利言く、『云何が族姓子、若し空は有住なり、若し空は無住なり、若し空は有猗、無猗なり、有習、無習なり、有生、無生なり、有願、無願なり、有相〔想〕、無相〔想〕なりと、其れ是を念ぜば、云何が泥洹に至つて無習に應ずるを得ん。』と。時に究竟菩薩曰く、『云何が族姓子、空は亦た有住ならず、亦た無住ならず、亦た二に緣らず、亦た一に緣らず、復た中間無しと。此を離れば、當に復た云何が泥洹第一無習に至るを得べき。』と。文殊師利答へて言く、『若しは空は有住にして、亦た所住無く、若しは空は無住にして本と所住無く、有猗にして無猗に、有習にして無習に、有生にして無生に、有願にして無願に、有相にして無相に、本と相有ること無くして相有らざるに非ず、相も亦た無相に、無相も亦た無相なり、一切諸法も亦復た是の如く、有作を見ず、無作を見ず、有作ならざるに非ず、無作ならざるに非ず、有相無相を見ず、有異無異・有求無求を見ず、我に所作有り、我れ所作無きを念ぜず、身口意に猗つて善惡行を言はざれば、是れ乃ち第一無習に應ず。所以は何に、生死の想無く、有爲に著せず、無爲に著せず、三世の根本深固に緣らず、泥洹の永く寂して無爲なるを言はず、是を族姓子、菩薩大士、初發意より乃ち成佛に至るまで其の中間に於て是を生ぜずんば、無上の無習不習に應ずと謂ふ。』と。是の究竟菩薩復た問ふ、『云何が文殊師利、何をか菩薩、求有り、求無き、生死有り、生死無き、三世に盡あり盡なき、有至と不至とあり、常あり常なきを念ぜざるを覺欲し、復た諸法に於て禪三昧に增有り滅有るを覺すと謂ふ。是の如きを作す者、豈生死有りや不や。』と。文殊師利言く、『云何が族姓子、生死は何の所にか止處する。』と。答へて言はく、『處して處する所無し。』と。又た問ふ、『云何が道と合するや。』と。答へて曰く、『生死は則ち道と合す。道は則ち是れ生死なり。』と。究竟菩薩言はく、『云何が族姓子、日明と闇冥とは共に合するや不や。』と。

所疑無く、亦た所難無く、亦た所畏無し。若し是の如くんば、已に哀を得たりと爲す。本際に住するを得、身を安んずるを得、所歸無き者は其の歸を受くるを得、三界五無間處に處ると雖も其の勞を[一九]損せず、等心に周遍して能く道意を發し、習うて習ふ所無くば、諸法の生ずる所に、異有る可きや。眼耳鼻舌身意を以て異るべきや。大哀の菩薩の平等異なりや。』と。文殊師利言く、『且く止みね、且く止みね、族姓子。其の道と言ふは、道有るに非ざるなり。若し吾我、壽命、衆生の類有るを念ぜざれば、是の者は以て大哀を得、等心に周遍して能く道意を發し、習うて習ふ所無し。』と。究竟菩薩復た問ふ、『文殊師利、夫れ道性如は三𦊆を持せず、三界を捨てず。云何が無上至眞等正覺道を發すを得んや。』と。文殊師利曰く、『心、所持無く亦た緣有らず、亦た四大地水火風に因らず、亦た五陰—色痛想行識に猗らず、亦た六衰に於て六塵勞を興さず、有德を念ぜず無德を念ぜず、俗に著せず道心を生ぜず、罪福の念無く、慧無く、愚無く、有餘を見ず無餘を見ず、亦た戒身・定身・慧身・解說身・解脫知見身を見ず、生死の染著に泥洹の清淨に纒縛するを見ず、本無生滅著斷を見ず、亦た有常無常、苦空無我を見ず、悉く諸法の寂泊虛空を觀じ、住すること是の如き者は無所住に住し、已に等哀の平等無二なるを得て、習うて習ふ所無く、無上至眞等正覺を發すことを得、三界五無間處に處すと雖も其の勞を辭せず。』と。究竟菩薩是の法を聞き已つて、倍、復た踊躍して自ら勝ふる能はず、『唯だ願はくば文殊師利、我をして此の無習の習に逮び、泥洹第一無礙を獲、復た此の法に緣つて安隱を得しめよ。』と。文殊師利答へて曰く、『族姓子、若し學地の、習うて習ふ所無きに住するも、然も諸法に悕望有れば、便ち所緣有り、安隱を得んと欲せんに、此れ則ち然らず。所以は何ん。若し[二〇]所緣無ければ則ち安隱無し、豈緣より泥洹を得獲するを得ん。其の法や寂靜にして從來する所無く、過去の念滅、不斷を緣ぜず、現在の有計常心を想はず、未來の有對無對を慮らず、是の故に諸法は有に住せず、習うて亦た所習無し、有念を見ず、亦た所念無し、亦た有らず、亦た所安無し、[二一]亦た貢高せずして斷滅有ること無し、一切諸法は聞無く、聲無く、亦た音響無し、有餘を見ず、無餘を見ず。是を則ち名けて、安隱に處して泥洹を得、諸法に通達して起滅の想無きを得る、と曰ふ。』と。文

【一九】三本宮本は損。
【二〇】若無・所緣。無は恐らくは有の誤字ならん。
【二一】高不貢高無有斷滅。有字明本無に作る。

薩號を得るぞ。』と。淨施王、究竟菩薩に報へて曰く、『一切諸法の相―眼耳鼻口身心を受取せず、此の界を過ぐるを以ての故に諸地を超え、習うて習ふ所無し。』と。究意菩薩復た問ふ、『云何が族姓子、以て行地を過ぎて習うて習ふ所無きや。』と。淨施王菩薩、究竟菩薩に報へて曰はく、『遍ねく諸地を過ぎずして菩薩道を習ふ。何を以ての故に、一切諸法、菩薩道教を出生すればなり。』と。究竟菩薩曰はく、『云何が族姓子、諸法に復た境界有りや。何を以ての故に、諸地を超過し、習うて習ふ所無しと說く。』と。淨施王菩薩曰はく、『諸法如如なり、道性も亦た如なり、亦た來時を見ず、亦た去時を見ず。是の故に菩薩摩訶薩、道敎を出生し、習うて習ふ所無し。』と。究竟菩薩、淨施王菩薩に謂つて曰く、『族姓子、云何が發趣道心なる。』と。淨施王曰はく、『道如の如し。』と。究竟菩薩曰はく、『云何が道如の如き。』と。淨施王曰はく、『夫れ道如は亦た過去當來今現在に在らず、是の故に菩薩摩訶薩、三世中に於て道性は清淨、如も亦た清淨なるを見ず。爾して乃ち無上至眞等正覺を發す。過去は如如、未來は如如、現在は如如なるが如く、自然性は空にして、亦た來るを見ず、亦た去るを見ず、趣きて趣く所無きが如く、爾して能く無上至眞等正覺を發し、習うて習ふ所無し。』と。究竟菩薩復た問ふ、『云何が無上至眞等正覺を發し、習うて習ふ所無き。』と。淨施王菩薩曰はく、『道徑を失ふ者は乃ち能く道に發趣し、加ふるに大哀を以てして恐懼無からしめ、三界五無間處に處ると雖も、其の勞を懷かず、等心に周遍して能く道意を發し、習うて習ふ所無し。』と。究竟菩薩復た問ふ、『云何が族姓子、若しは目無くして視瞻するを得るが如し、吾今、倍、狐疑を生ず。唯だ願はくば開解せんことを。今當に我が爲に之を說き、猶豫を除去し、心をして悟ることを得しむべし。汝の云ふ所の如きは、道徑を失ふ者は能く無上道に發趣し、加ふるに大哀を以てして、恐懼無からしめ、平等法に於て亦た增減無しと。是の病、能く之を療する無し。唯だ族姓子、我が爲に演說して、心の重疑をして微輕なるを得しめよ。』と。淨施出菩薩曰く、『善い哉善い哉、族姓子、汝の問を發さしむるは、皆、佛の威神の所感なり。今、文殊師利は、衆の上首たり。因つて請求して機變を知らしむべし。』と。時に究竟菩薩、文殊師利に謂ふ、『向の我が狐疑、淨施王言ふ。云何が族姓子、能く解するやと。唯だ願はくば演說して餘難なからしめよ。』と。時に文殊師利、究竟菩薩に報へて曰く、『大哀の菩薩は三界に礙無し。若し深妙に入れば、其の法審諦にして、習うて習ふ所無く、亦た所著無く、亦た

正要法の如きは甚だ深く。若し菩薩摩訶薩有り、菩薩の記號を受くれば、則ち六十二見邪逕の道を受く。何を以ての故に、六十二見は皆菩薩を出生し、菩薩道果を出生し、道果は則ち六十二見を出生す。所以は何ぞ。菩薩道果は欲界よりせず、色界よりせず、無色界よりして得ず、有爲無爲、有漏無漏よりして得ず。何を以ての故に、菩薩の名字は得べからず、亦た處所無し、六十二見邪逕の名號も亦復た是の如し。本と竟[18]に〔意〕清淨に、形無くして、見る可からず。云何が世尊、猶ほ人有り、虛空の邊際を尋究し、青黃赤白を稱量齊限するを得んと欲する如し。復た五陰の與に名字―色痛想行識を施設して、是れ生、是れ滅、是れ有爲、是れ無爲、是れ有漏、是れ無漏、是れ有常法、是れ無常法、是れ苦、是れ樂と尋究するを得んと欲するが如し。云何が世尊、此の士夫深法中に於て慧有りや不や。』と。佛、淨施王菩薩に告げたまはく、『虛空は無形にして見る可からず。云何が字を立て、與に名號を作して、空中に於て空を求めんと欲する。此の事然らず。』と。爾の時、淨施王菩薩、佛に白して言さく、『是の如し世尊、菩薩道果及び無礙慧・三十七品・空無相願・六十二見、悉く無所有にして見るべからず、亦た虛空の無形にして護持すべからざるが如し。諸法の相は願求して得べきに非ず。何を以ての故に、本と所有無きが故に、三界を超え、三世を越過するを以てなり。若し爾らざれば、佛及び菩薩道に、便ち二見を生じ、二見有るを以て便ち二想有り、二想有るを以て便ち邪部に墮し、邪部に墮するを以て便ち五趣に入り、已に五趣に入りて生死に流轉し、賢聖を誹謗して道を非道と言ひ、亦た賢聖の法律有りと言はず。愚惑の人自ら相ひ謂つて言く、「佛は異なり、道は異なり、生死も亦た異なり。生死既に異ならば豈ぞ泥洹有らんや。亦復た佛の菩薩道を修すること無し、何かに況んや當に無礙慧を成ずること有るべけんや。」と。此の事然らず。』と。爾の時、坐上に菩薩有り、名けて究竟と曰ふ。淨施王に問うて曰く、『云何が族姓子、菩薩摩訶薩、大乘に發趣し、無礙慧を辯ぜば、無上至眞等正覺を成ずることを得ん。』と。淨施王菩薩曰く、『若し菩薩有り、初發意より無上等正覺を成ずるに至らん者、菩薩行を習ひ、習はずと爲すに非ず。亦た正法を捨てずして邪業を習ひ、亦た菩薩道を行ずるを見ず、亦た菩薩道を行ぜざるを見ず。是れを菩薩摩訶薩以て行地を過ぎ、習して習ふ所無しと謂ふ。』と。究竟菩薩復た淨施王に問うて曰はく、『云何が族姓子、菩薩摩訶薩、以て行地を過ぎ、習うて習ふ所無く、而して無上道を修して菩

【一八】三本宮本意。

空性を求むるが如し、無心は彼より疾し、況や復た亂想を生ぜんや。」虚空は量界無く、形無くして見る可からず、此の智も亦た然り、量無く、邊岸無し。」假し一切人をして、此の智慧の舟に乘ぜしめば、生死の岸に遊戯して、直ちに泥洹海に至らん。」若し人、百千劫に此の功德を歎ぜんと欲せんに、智慧の大炬明も、能く其の藏を盡すことなけん。」無盡は盡すべからず、亦た八無閑無し、能く無礙慧を誦するは、天人中の最尊なり。」初めより惡趣に墮せず、六情常に完具し、天及び人中に生じて豪貴なること衆中の上なり。」一切衆生の類、皆當に道智を成ずべし、此の正法を受持して、未だ曾て恐懼を懷かず。」正法の本を擁護して、無爲道に安處し、當に正法輪を轉じて、世間に布現すべし。」億百千劫に於て、終に生死に墮せず、必ず等正覺を成ぜんは、斯れ無礙慧に由る。」勇猛なること人中の上なり、魔の官屬を降伏し、精進智慧彊く、總持して忘失せず。」一人有りて、普ねく江河の水を飲まんと念じ、周行して四域に遊ぶも、能く其の源を盡さざるが如し。智者は權方便して、思慮して內に自ら念じ、唯だ四海の水を飲み、爾して乃ち普ねく周遍して、無上道、無礙智慧光を、成ぜんと欲し、受持し念じ諷誦せば、受莂せんこと亦た久しからじ。」佛未だ出世せずと雖も、現相、三十二、便ち爲に佛事を行じ、廣く無量の人を濟ふ。」今我、正覺を成じて三界の第一尊たり。斯れ、此の無礙大慧藏を受持せるに由るなり。」

其の世尊此の法を說きたまふ時に當り、甚深にして量り難く、思議すべからず。亦た羅漢辟支の及ぶ所に非ず。爾の時、座上の十千の天人、皆、無上正眞道意を發せり。復た三萬七千の菩薩有り、不起法忍を得、復た無量の比丘有り、有漏心、解脫するを得、四[七]〔三〕十六姟の衆生、諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。

三界品第四十五

是の時、菩薩有り、淨施王と名く。前んで佛に白して言さく、『世尊、我が佛より聞く所の

【七】宮本三。

楽しみ、獨處して畏るる所無く、禪定慧を思惟すれば、善く六神通に趣く。」衆に在つて猶ほ野の如く、一心に
して錯亂無く、威儀法を失はざる、是を微妙定と謂ふ。」定法に若干有り、息意無漏の行もて、二解脫を增上
する、是を微妙定と謂ふ。」遍ねく一切法を觀じ、安處して心移らず、一に於て復た一を數ふる、是を微妙定
と謂ふ。」道心遂に牢固に、滅意して心永く息し、純熟の人を接度する、是を微妙定と謂ふ。」恒に等正覺、
　如來法身の道を憶し、諸の色想を厭患する、是を微妙定と謂ふ。」復た六思念を修し、次第行に違はず、念
を除き思想無き、是を微妙定と謂ふ。」四雙八輩の人、從つて無爲道を生じ、無數にして有數に非る、是を微
妙定と謂ふ。」智者四禪を修して、識空定を用ひず、內外身を了別する、是を微妙定と謂ふ。」十方の諸佛等、
　遙かに此の衆生を見、眼見の色に由らずして、自然に道敎を成ず。」亦復た此の人を見て、在在に方に說法し、
　耳聲の想を生ぜず、識滅して復た著せず。」衆生想は無量なるも、一意にして而も悉く知り、二心見を興さず、
　便ち若干念を生ず。」過去の劫を憶念するに、恒沙、數ふべからず、前心、後も亦た然り、勇猛にして懈怠せ
ず。」復た無量の刹に遊びて、神足道を示現し、心、住して身自ら隨ひ、變化の法を知らしむ。」甘露道を演
說して、進趣の行を失はず、劫より百劫に至るも、無礙慧を盡さず。」智度無極に逮びて、陰持入を分別し、
　人の爲に妙法を說きて、吾我有りと計せず。」權方便[一五]道〔度〕を行じ、等分淫怒癡の因緣に垢著無く、清淨
道を知らしむ。」本と我れ自ら行を造り、解脫して畏るゝ所無し、緣等合會して成じ、諸法に處所無し。」自
ら觀じ亦た佛を觀じ、空を觀ずる法も亦た然り、生死泥洹の逕、智者乃ち覺悟す。善く智慧の性を解して、慧
の光明を求めしめば、儻載の塵闇冥に、燿然として大明を見る。」此の智を大智と謂ふ、佛智は不思議なり、
　衆生類を將導して此の無上智を成ぜん。」夫れ一切智を計するに、能く是れに過ぐる者無し、此の衆智を修す
ること具にして、大乘の道果成ず。」[一六]除智に、號有りと雖も、眞實の道有るに非
ず、此の智は衆智の上なり、一切の難を救濟す。」若し智慧を欲求するに、虛

【一五】三本宮本は度。
【一六】除智雖有號。

ず、　況や復た斯等の類をや。」　人皆是れ常と計し、　無明自ら照さず、　生死の苦を滋長す、　何に由つてか解脱に至らん。」　財施に著する所無くして、　無上道を欲求せば、　施道の二倶ならず、　何に況や永く究竟するをや。」　禁戒無我の行もて、　第一法に安處す、　亦復た此の相無きは、　念戒慧度の行なり。」　修せずして自然に得、　智、無明の根を除き、　戒、淸淨道を具し、　淨きこと月の無垢なるが如し。」　身は泡聚の沫の如く、　亦た電の目を過ぐるが如く、　意想〔根〕は野馬の如し、　戒を淨淨道と爲す。」　最勝等倫なく、　衆聖天中の天、　一切の惡に息心[三]〔止〕するは、　寂定度無極なり。」　犯戒及び持戒、　定亂に若干無し、　諸法界を分別するに、　戒を無漏道と爲す。」　忍度無極を獲て、　諸の苦惱を堪受し、　普ねく諸の衆生を慈しみ、　高下の想有る無し。」　過去の法を追憶するに、生滅して久しく停まらず、　稱譏毀譽の法、　安んぞ能く其の便を得ん。」　節節其の形を解くも、　終に惡念を生ぜず、內外の事を分別して、　身心鏗然として住す。」　怨讐來つて害し、　此の危脆の身を滅さんと欲せんに、　之を忍ぶこと地の載するが如く、　計して好惡有らず。」　忍辱の大弘誓より、　對見想念無し、　故に諸の衆生をして、　見る者欣ばざる莫からしむ。」　[四]大乘の海〔舟〕を截〔載〕らんと欲せば、　愼んで怯弱を懷くこと無かれ、　身を端し其の心を正しくせば便ち無生忍を得。」　本と無數劫より　生死中に流轉し、　一衆生の爲の故に、　躬ら弘誓の鎧を被る。」　諸法に起滅無く、　復た壞敗の想無し、　愚人は心顚倒して、　過去の慧を解せず。」　法界の性は常住なり、　學者究竟せず、　當に本末を了知すべし、　生者生ずる所なし。」　衆生、微妙の　無礙慧に深達せず、　當に巧方便を求めて顚倒心を除去すべし。」　諸佛世に興出し、　度に値ふて度せられざるも、　亦復た放捨せざる、　精進の勇力彊し。」　一切法を分別するに、　幻、野馬の光の如し、　實を求むるに果報無し、　無形を空觀する如し。」　衆生諦念せずして自ら染著の想を興す、　漸示して道教に至り、　無爲の處を知らしむ。」　方便して此の義を念ずれば、　願ふ所の者、必ず得、　一一に思惟して觀ずれば、　無礙の智慧成ず。」　內外の行を念持して、處處に空性を求め、　猗無く所著無ければ、　生死の本末淨し。」　學に進み空閑を

[三] 三本宮本は止。
[四] 麗本、欲截大乘海。三本宮本は、欲載大乘舟。

三界に染著して、受生の分を離れず。」　諸法に受取無し、上下及び中間に、散落有るを見ざる、此を大乘に趣くと名く。」　若し法と非法とを見るも、二に在つて意動ぜず、亦た二見を生ぜざらん、發趣も亦た復た然なり。」　二を有爲法と爲し、亦た無爲法と名く、二を除きて二を見ざれば、乃ち無上道に應ず。」　凡夫地を超越して未だ賢聖道に至らず、趣くを得て未だ成就せざるも亦た是れ世の福田なり。」　能く世の八法を離れて、猶ほ華の水に著かざるが如く、百劫行を超越して、爾して乃ち大乘に趣く。」　在在に正業を修し、處處に神足を現じ、人を度して度を見ず、心口意、密行す。　生死の道を退かず、心に亦た怯弱無く、意を執ること金剛の如くにして、最も無礙慧に應ず。」　虚空には善惡無く、法界恒に清淨なり、法亦た本と法無し、豈んぞ染汚するもの有らんや。」　邪法を捨るを見ずして、而も無上道を修し、復た下劣の人無き、是を大乘の相と爲す。」　諸法は本と相無く、空の如くして持すべからず、相を求むるに本と自ら空なりと、智者は當に覺知すべし。」　夫れ無礙を行ぜんと欲せば、善權を第一と爲す、彼の衆生の願を充して、將導して道場に至る。」　善友を正法と爲し、牢固として忘捨せざれば　永く陰持入を離れ、習はずして疑蓋を調ふ。」　若し佛をして出世せしめ、及以び滅度を取らんに正法は恒に存在して、終に以て變易せず。」　諸法に正證有り、善惡は朽敗せず、眞際の性も亦た然り、常住にして移動せず。」　所修極めて甚深なれば、魔界に著する所無し、諸法も亦復た然り、永く邪見の黨を離る。」　無上道を欲求して、修行法に著せず、有想無想に非ざる、是れ無礙慧に應ず。」　佛慧所著無く、[二]諸法に所生無く、起滅の道を見ること無くして、乃ち大乘行に應ず。」　或は頭目を以て施して、信心所捨無く、受者有るを見ざれば、忘想に著する所なし。　諸法は本と無生なり、尋究するに窠窟無し、法相も亦復た然り、端緒見るべからず。」　若し人、空を究めんと欲し、其の邊岸[三][崖]を知らんと欲し、晝夜思憶念せんに、唐しく其の功夫を勞せんのみ。」　愚惑は吾我に執し、常と計して離るる能はず、三塗の難に墜墮して、究竟の處を獲ず。」　眞人の賢聖道、三達に罣礙無きも、猶ほ未だ空の源を盡さ

【二】麗本は結法、三本宮本は諸法。
【三】三本は崖。

を具足し學するを得んと欲せば、必ず堅固に至り、終に無上正眞の道を成ぜん。復た次に心智、若し善男子善女人有り、一切諸法を具足せんと欲せば、當に無我の法を學すべし。云何が無我と爲す。所謂無我とは、究竟して成ずるに至るも、此れ亦無我なり、四大を分別し、本原を思惟するに、此れ亦た無我なり、一切諸佛の出世して敎化する、此も亦た無我なり、衆生の度脫する所有るを見ず、樹王の下に坐し、魔兵を降伏して悉く所有無き、是を菩薩の無我の行と謂ふ。三世總持の法本を見ず、智に著する所無く、亦た內外に在らず、悉く所有無しと分別思惟する、是を菩薩の無我の行と謂ふ』と。佛復た心智に告げたまはく、『若し復た善男子善女人、空定意に入つて、如來深法の藏の、亦た此に在らず、亦た彼に在らざるを究竟し、一切悉く無所有なりと辨知せん、若し復た善男子善女人、神足力を以て入定し、意定まりて、一切の無相法觀を顯曜せん、云何が無相と爲す、諸佛世尊の敎化する所、一切を度脫するに言敎を以てせざる、是を無相と謂ふ。云何が無相と爲す、一切諸佛は衆生の本に於て、自ら遊戲する、是を無相と謂ふ。一樹下に坐して、無上正眞の道を成ずるを得る、是を無相の行と謂ふ、是の如く心智、若し菩薩摩訶薩、此の法を習持して無我法に逮れば、便ち無上正眞の道を成ぜん。』と。

等乘品第四十四

爾の時、座中に菩薩有り、名けて淨眼と曰ふ。卽ち座より起ち、偏へに右臂を露はし、長跪叉手して、前んで佛に白して言さく、『云何が世尊、菩薩摩訶薩、大乘に發趣して、無礙慧に至らんには、何の法を修してか大乘の跡を滅すると爲す』と。爾の時、世尊、淨眼菩薩に告げて曰はく、『善い哉善い哉、族姓子、今汝の問を發せるは、皆、佛の威神の致す所なり。諦かに聽け、諦かに聽け、善く之を思念せよ。吾當に偈を以て汝の疑を發遣すべし。』と。是の時、世尊、更ち頌を說いて曰はく、「色と道とを

以て色を壞敗せずして、　平等道に趣くを得、　色と道と異らざるを觀じて、　乃ち能く大乘に乘ず。」　道性は本と壞無し、　尋究思惟し、　如爾の性も亦た然り、　道を壞敗するを見ざるは、　智者の修行する所なり。」

するに盡す可からず、　最も第一義に應じ、　此に乘じて無礙に至る。」　愚者は心顚倒して、　道を陰持入に求め、

心智菩薩に告げて曰はく、『若し菩薩有り、菩薩道觀を成就するを得んと欲せば、當に十法を行ずべし。云何が十と爲す。若し菩薩摩訶薩有り、未だ菩薩位に住し、無爲に安處せざるも、道本を究竟し、弘誓を成就し、自ら無我を觀じ、復た衆生を化して已の如く異ること無からん、是を菩薩摩訶薩の無我の行と謂ふ。復た次に心智、若し復た菩薩摩訶薩、能く無身を化して有形身を現じ、復た有身を化して無形身を現じ、有我を以て無我[九]〔形〕と爲し、無我を以て有我〔形〕と爲し、中に於て一切衆生を化導せん、是を菩薩摩訶薩、一切心智の法を具足すと謂ふ。復た次に心智、若し菩薩摩訶薩、如來至眞等正覺を成じ、無生心を成ぜんと欲して、諸法の本と樂ふべからざる法なるを解する、是を菩薩摩訶薩の無我の心、如來至眞等正覺を成ずるを得と謂ふ。復た次に心智、若し復た菩薩摩訶薩、已に空心を得、我有ること無く、亦た生滅無しと解し、復た此の法を以て一切を教化し、無我の想を知らしめ、此の智慧有りて自ら諸の深法に於て最も第一たりと稱揚せざらん、是を菩薩摩訶薩、第一無我の行を修すと爲す、と謂ふ。復た次に心智、若し菩薩摩訶薩、若しは善男子善女人有り、一切諸法の相を分別し、亦た法の衆相の本を見ず、及び其の一切諸法の本も亦復た是の如く、衆生の無我想を内外の諸法及び一切智に起さん、是を菩薩摩訶薩、無我行を修すと謂ふ。復た次に菩薩摩訶薩、若し復た善男子善女人、劫の成敗を見、劫の不成敗を見て、成を以て喜と爲さず、[一〇]敗を以て憂と爲さず、兩の中間に於て、吾我の想を起さずば、菩薩摩訶薩、無我法に逮らん。』と。佛復た心智菩薩に告げたまはく、『若し善男子善女人有り、一切身を捨てゝ、滅盡三昧入り、行本を分別して從來する所を知り、無爲を出要して大道に至る、是を菩薩摩訶薩の無我の行と謂ふ。復た次に心智、若し善男子善女人有り、無我心を得て、一切十二因緣を分別し、生者、生ずる所以を知らず、滅者、滅する所以を知らず、諸法本に於て悉く我想無き、是を菩薩摩訶薩、諸法本に於ける無我の行と謂ふ。復た次に心智、若し復た菩薩摩訶薩、一切諸法の法を分別して、亦た近きを見ず、亦た遠きを見ず、本と生ずる所無く、亦た起る所無き、是を菩薩の無我の行と謂ふ。復た次に心智、若し菩薩摩訶薩有り、不起法忍に於て、心識の悉く無所有なるを解知し、中に於て無上至眞等正覺を成ずるを得て、亦た成を見ず、亦た不成を見ざる、是を菩薩摩訶薩の無我の行と謂ふ。是の如く心智、若し善男子善女人有り、無我の行

【九】之明二本は形。
【一〇】麗本には成の一字に作り、元明二本には以敗に作る。今、元明二本に從ふ。

衆生を教化し、神足力を以て盡く三千大千世界の一切衆生を化して盡く佛形と作し、然も彼の各各相ひ教へて、爲に十二懃苦の行を說き、共に相ひ濟度すること稱量すべからず、然も彼の衆生自ら誰の爲に度せらるゝかを覺知せざらん、是を菩薩摩訶薩正法を修して不思議に應ず、と謂ふ。復た次に道勝子、若し復た菩薩摩訶薩、五道中に入りて衆生を教化し、一智慧を以て一切無形の法を分別して罣礙する所無く、普ねく有形の類をして此の正要を解して度脫するを得しめ、若し彼の衆生自ら、「我が如きは今日誰に爲に度せらるるか」を覺知せざらん、是を菩薩摩訶薩正法を修して不思議に應ず、と謂ふ。復た次に道勝子、若し復た菩薩摩訶薩、五道中に入つて衆生を教化し、一念の中に盡く能く普ねく一切諸法を見、法界を分別して、不思議を行じ、皆衆生をして此の道教を聞かしめ、同時に道を成じて罣礙する所無し、然も彼の衆生自ら、從つて聞く所と爲すを覺知せざらん、是を菩薩摩訶薩、正法を修して不思議に應ず、と謂ふ。復た次に道勝子、若し復た菩薩摩訶薩、五道中に入つて衆生を教化し、彼の衆生をして盡く神通を得、十方無量の世界に遊戲し、諸の十方諸佛の說法を聞き、諸法は幻の如く化の如しと解知せしめ、然も彼の衆生自ら我が如き今日誰に開悟せらるるかを覺知せざらん、是を菩薩摩訶薩正法を修して不思議に感ずと謂ふ。復た次に道勝子、若し復た菩薩摩訶薩、五道中に入つて衆生を教化し、三世中の一切の有形をして、等正覺を成じて皆悉く成就せしめんに、是を菩薩摩訶薩、正法を修して不思議に應ずと謂ふ。復た次に道勝子、若し復た菩薩摩訶薩、五道中に入つて衆生を教化し、深法藏に入つて妙智を分別し、過去當來現在を超越し、三界に獨步して亦た等侶無く、復た衆生をして已と異ること無からしめん、是を菩薩摩訶薩正法を修して不思議に應ずと謂ふ。是を道勝子、菩薩、根德力を[八]立〔五〕して五道中に入り、衆生を教化するに、諸法殊勝にして測量すべからず、亦た羅漢辟支の知る所に非ず、と謂ふ。』と。

無我品第四十三

爾の時、菩薩有り、名けて心智と曰ふ。前んで佛に白して言さく、『世尊、若し菩薩摩訶薩有り、身觀を分別し、無我の想を解して、云何が菩薩道觀を成就する。』と。爾の時、世尊、

【八】麗本には五根德力、三本宮本は立根德力。

摩訶薩應時の行と謂ふ。復た次に法妙、若し復た菩薩審かに自ら知り已る、衆行已に具し、衆智自在にして不思議を得たり、當に神足を以て一切を感動すべし、自ら神足を試むるに罣礙無く、一佛國より一佛國に至り、諸佛に承事し、世尊を禮敬し、努めて梵行を修し、及ばざるを稟受し、亦た衆生をして已が得る所に同じからしめん。是を法妙、菩薩摩訶薩、此の十慧應時の行を修せば、無上正眞の道を成じ、最正覺を成ずるを得、便ち能く大法瓔珞を具足せん。と謂ふ』と。

十不思議品第四十二

爾の時、道勝子菩薩、佛に白して言さく『世尊、云何が菩薩摩訶薩、五道中に入つて周旋往來し、衆生を敎化し、佛國土を淨め、無上至眞最正覺を成ずるか、不思議の大法瓔珞を行ずるか』と。佛、道勝子菩薩に告げて曰はく『諦かに聽け諦かに聽け、善く之を思念せよ。若し菩薩摩訶薩有り、無上至眞等正覺を成じ、不思議の大法瓔珞を行ぜんと欲せば、當に十法を修すべし。云何が十と爲す。若し菩薩摩訶薩有り、五道生死に入り、類に隨つて化し、一たび加趺して坐せば、十方諸佛世界を遍滿し、復た音響を以て三千大千世界を震動し、中に於て一切衆生を敎化し、悉く無上正眞道意を發さしめ、乃ち衆生をして覺知する者無からしむる、是を菩薩摩訶薩所行の正法、不思議に應ずと謂ふ。復た次に道勝子、若し復た菩薩摩訶薩、五道中に入つて衆生を敎化し、一句義を以て一切の諸佛世界を充足し、有形の類をして悉く聞知するを得しめ、然かも彼の衆生亦た自ら覺せずして、所聞の法に從つて皆無上正眞道意を發さん、是を菩薩摩訶薩、正法不思議の行を修すと謂ふ。復た次に道勝子、若し復た菩薩摩訶薩、五道中に入つて衆生を敎化し、一光明を以て遍ねく三千大千の刹土を照し、其の光を見る者、皆無上正眞道意を發して、然も形を見ず、皆一切をして解脫門に入らしめん、是を菩薩摩訶薩、正法不思議の行を修す、と謂ふ。復た次に道勝子、若し復た菩薩摩訶薩、五道中に入つて衆生を敎化し、一意一念一時の頃に、一法身を以て三千大千世界に遍滿し、皆衆生をして普ねく聞知せしめ、盡く衆生をして法界を具足せしめ、然も彼の衆生、從つて聞く所を知らずして、皆無上正眞道意を發さん、是を菩薩摩訶薩、正法を修して不思議に應ずと謂ふ。復た次に道勝子、若し復た菩薩摩訶薩、五道中に入つて

を度脫し、然る後乃ち定すべし、と。是を菩薩摩訶薩應時の行と謂ふ。復た次に法妙、若し復た菩薩深く自ら知り已る。我今當に無上等正覺を成ずべく、復た當に菩薩に決一國土、翼從、方面、所在—を授くべしと。是を菩薩摩訶薩應時の行と謂ふ。復た次に法妙、若し復た菩薩審かに自ら知り已る、我今已に衆智自在なるを獲たり、當に衆生をして我が如くして異ること無からしめ、尋いで時に彼に入りて之を教化し、普ねく衆生をして此の自在無礙の法を獲しむべしと。是を菩薩摩訶薩應時の行と謂ふ。復た次に法妙、若し復た菩薩、解脫門に入りて佛事を施行し、一切形礙の法を變化し、皆、無盡の藏に歸せしめ、亦た衆生をして已が得る所に同じからしめん、是を菩薩摩訶薩應時の行と謂ふ。復た次に沙妙、菩薩審かに自ら知り已る、我今已に無形の四空定法及び四等心—慈悲喜護—を獲たり、復た此の定を以て衆生を教化し、普ねく一切をして已が得し所に同じからしめんと。是を菩薩摩訶薩應時の行と謂ふ。復た次に法妙、若し復た菩薩、審かに自ら知り已る、威儀を執持して禮節を失はず、行くべきに行くを知り、坐すべきに坐するを知り、晝夜孜孜として道教に違はず、時に到つて入城し、左右顧視せず、衆生を福度して其の慧無量に、亦た衆生をして已が得る所に同じからしめん、是を菩薩摩訶薩應時の行と謂ふ。復た次に法妙、若し菩薩審かに自ら知り已る、衆生の根本を觀じて、度不度に應じ、彼の信施を受けば腹を量りて食し、還りて閑靜に至り、坐臥に思惟す、今受けし所の施は以て四大を支へ、道德を行じて最正覺を成ずるを得、復た此の法を以て一切を化導し、普ねく衆生をして已が得たる所に同じからしめん、是を菩薩摩訶薩應時の行と謂ふ。復た次に法妙、若し復た菩薩審かに自ら知り已る、我が今日の如き、賢聖の律に應じ、一切を導化して增減有ること無く、漸漸に前進して五道中に入り、彼の心意を察して之を度脫せしめ、若し人道に入つては爲に禁戒を說き、彼の衆生をして犯罪の苦を知らしめ、示すに正道を以てして之を度脫し、若し天道に入つては彼の天宮に處り、爲に無常磨滅の法を說き、勸め勉めて十善の行を修せしめ、天の重位を捨てゝ無上道を修せしめ、若し畜生苦痛の中に入つては、爲に抵突欺詐の法を說き、善心改更の義を生ぜしめ、若し餓鬼醜陋の中に入つては、爲に慳貪縛著の心を說き、善心を發して往を改め來を修せしめ、若し地獄の受罪人中に入つては、爲に五逆救ひ難きの法を說き、復た地獄の衆生をして心開き意解して善心生ずるを得、其の罪苦を畢つて人中に復するを得しめんと。是を菩薩

成じて、佛意三昧に入り、各各分身して衆生を敎化して、賢聖の法律に入らしめ、餘の衆生をして覺知する者無からしむるなり。復た次に彌勒、菩薩摩訶薩、一時の頃に、能く三千大千世界の一切衆生をして、菩薩道を成じ、如意定意に入らしめ、盡く山河石壁瓦石草木をして、變じて七寶爲らしめ、貧苦に給施して普ねく充足せしめ、然る後乃ち六度無極を說き、餘の衆生をして覺知する者無からしむるなり。復た次に彌勒、菩薩摩訶薩、一時の頃に、能く三千大千世界の一切衆生をして菩薩道を成じ、金剛定意に入りて、能く一切をば盡く黄金色に化して、佛の色相の如く、異有ること無からしめ、皆無上道を成就せしめ、餘の衆生をして覺知する者無からしむるなり。復た次に彌勒、菩薩摩訶薩、一時の頃に、能く三千大千世界の一切衆生をして、菩薩道を成じ、過去當來今現在に佛の根力覺意を得、空無相願を分別し、諸法悉く所有無しと覺了せしめ、餘の衆生をして覺知する者無からしむるなり。復た次に彌勒、是の如く菩薩摩訶薩は、十明智を行ぜば、無上正眞の道を成ずるに至らんこと、必然疑はず」と。爾の時、彌勒佛に白して言さく『世尊、今、如來至眞等正覺の說きたまへる所の正法を聞き、坦然として大悟す。願はくば衆生をして此の智慧に逮らしめたまへ。」と。

[七]應時品第四十一

爾の時、法妙菩薩、佛に白して言さく『云何が菩薩摩訶薩、進んで無上正眞の道を修し、最正覺を成じ、威儀應時の行を執持し、乃ち能く大法瓔珞を具足せん。』と。佛、法妙に告げたまはく『若し菩薩摩訶薩有り、無上至眞等正覺を具足して成じ、如來大法瓔珞を具足するを得んと欲せば、當に十慧大法瓔珞を修すべし、便ち能く大法瓔珞を具足せん。是に於て族姓子、若し善男子善女人有り、如來大法瓔珞應時の行を聞かんと欲せば、諦かに聽け、諦かに聽け善く之を思念せよ。云何が十と爲す。所謂十とは、若し菩薩摩訶薩、自ら時の到りて、當に無上至眞等正覺を成ずべきを知れば、便ち期を失はずして樹王の下に詣り、弘誓心を執り、心、虛空の如く、衆想を斷除せよ。是を菩薩摩訶薩應時の行と謂ふ。復た次に法妙、若し復た菩薩、審かに自ら知り已る、今我時到れり、彼の衆生を化して、姓氏字氏、局界を越えず、要らず當に一切衆生

【七】明本、經名なり。

爾の時、彌勒菩薩佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩摩訶薩、先づ何の法を習ひ、何の功德を修して、無上正眞等正覺を成じて、大法瓔珞に應ずるを得んや。』と。佛、彌勒に告げたまはく、『善い哉族姓子、諦かに聽け、諦かに聽け、善く之を思念せよ。若し菩薩摩訶薩有り、無上正眞等正覺を成じ、大法瓔珞と相應せんと欲せば、生死の根原を斷ぜんと欲せば、如來の正法を興顯せんと欲せば、無量定意を得ること世尊の如くならんと欲せば、如爾の法性、遊戲を得んと欲せば、是の如き菩薩摩訶薩は、當に無量智門を學ぶべし。云何が無量智門と爲す。彌勒善く聽け。如來至眞等正覺に十明智有り、一意一念一時の頃に、悉く無量衆生の境界を知り、分別思惟して法界を失はず、便ち無上至眞等正覺を成ず。云何が十明智と爲す。所謂十明智とは、菩薩摩訶薩、一時の頃に、能く三千大千世界の一切衆生をして盡く兜術天に生じ、共に善行を修して各異心無からしめ、餘の衆生をして覺知するもの無からしむるなり。復た次に彌勒、菩薩摩訶薩、一時の頃に、能く三千大千世界の一切衆生をして、菩薩道を成じて法法成就して、諸の賢聖と共に相ひ娛樂せしめ、異衆生有つて覺知する者なきなり。復た次に彌勒、菩薩摩訶薩、一時の頃に能く三千大千世界の其の中の衆生の、未だ根德力を立てざる者をして、同時に出家して無上梵行を修し、鬚髮を剃除し、三法衣を著し、手に應器を持ちて十二法を行じ、時到つて分衞し、一切を福度し、或時は坐禪して身觀を分別せしめ、然も衆生有つて覺知する者無きなり。復た次に彌勒、菩薩摩訶薩、一時の頃に、能く三千大千世界の一切の衆生をして菩薩道を成ぜしめ、樹王の下に詣り、吉祥の獻草に、結加〔跏〕趺坐し、內に自ら思惟すらく、今日當に無上至眞を成ぜんこと、必然疑はざるべく、先づ當に一切世界を感動して、神通得道の賢聖の人、來つて我を擁護すべし」と。餘の衆生をして覺知するもの無からしむるなり。復た次に彌勒、菩薩摩訶薩、一時の頃に、能く三千大千世界の一切衆生をして、菩薩道を成じ、皆、法輪四諦如爾の法、苦習〔集〕盡道を轉ぜしめ、亦た衆生をして、修して得度し、其の所念に隨つて三乘の果を成ぜしめ、餘の衆生をして覺知する者無からしむるなり。復た次に彌勒、菩薩摩訶薩、一時の頃に、能く三千大千世界の一切の衆生をして、諸根純熟し、五分法身を具し、衆相具足し、弘誓成就し、佛事を施行し、魔兵を降伏せしめ、然かも餘の衆生の覺知するもの無きなり。復た次に彌勒、菩薩摩訶薩、一時の頃に、能く三千大千世界の一切衆生をして、菩薩道を成じ、盡く如來等正覺を

法したまはず」と。復た菩薩有り、名けて長壽と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「世人の壽命は短かし、更樂の縛著する所、六識の嘖岬する所なり。唯だ願はくば尊、消滅したまへ」と。復た菩薩有り、名けて算數と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「一切衆生の類は、三毒に覆蔽せらる。願はくば尊、當に降神して、療するに法の醫藥を以てしたまふべし。」と。復た菩薩有り、合曼〔綾〕掌と名く。前んで佛に白して言さく、「聲、十方に震ひ、道、甘露の雨を降らす、無漏の深法藏、佛に非ずんば誰が能く宣べん」』と。爾の時世尊、諸の大衆に告げたまはく、『斯等の菩薩百千億數、各各、道法を興敬せんを勸進し、各各佛に說請慇懃なり。吾爾の時に當りて、舌相光明を放ちて、普ねく三千大千世界を照し、還つて光を攝し已つて、衆の菩薩に告ぐ。吾が今、廣長舌を得る所以は、諸法悉く所有なしと分別すればなり。復た八聲を以て十方無量の佛國を震動し、悉く聞知せしめん。』爾の時世尊、諸の大衆の與に、頌を說いて曰はく、

一切諸法本と、因緣合會して生じ、十方の諸の刹土、空寂にして皆、無形なり。」道意自然に著しく、功德衆相滿ちて、内外法は無形、無所有と分別す。」我聞く、既に成佛し、一切人を度脫せんに、大法瓔珞有り、佛土淨を莊嚴すと。卿等聞くを得て、本末空を究盡せんと欲せば、一一に當に分別して無爲の岸に至らしむべし。」吾昔、四弘誓せり、當に不度者を度すべしと、豈に諸人の請を須たん、各をして怨心有らしめんや。」吾本と初發意より、亦た人を限齊せず、但だ緣未だ道に及ばず故に復た默然たるのみ。」

爾の時、衆會の一切の菩薩、佛の偈を說きたまふを聞いて、各各踊躍して自ら勝ふる能はず。皆善い哉と稱し、歎ずること未曾有なり。如來將に法敎を敷演し、衆生を度脫して、爲に法界を成じ、三世勞苦をして悉く解脫を蒙らしめんと欲したまふ。爾の時、座上の未だ神通を得ざる凡夫學人二萬餘衆、皆、無上正眞道意を發し、各各發願して善心生じ、此の大法瓔珞を聞くことを得んと欲す。

十智品第四十

【六】明本に標名なし以下同じ。

常法を想し、係意して禪定に入り、離垢して三界を過ぎたまふ、一切人を度脫したまへ」と。復た菩薩有り、純熟根と名く。前んで佛に白して言さく、「諸佛所行の法は、唯だ人を度するを事と爲す、已に本と願ふ所を果せり。快なる哉、時に說法したまへ」と。復た菩薩有り、名けて衆生根と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「法界は不思議なり。衆生の根も亦た然なり。願はくば神足力を以て一切に示現したまへ。」と。復た菩薩有り、名けて通慧と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「光相は雪山の如く、世人の宗仰する所なり。今、一寶を覩ると雖も、唯だ願はくば二寶を說きたまへ」と。復た[五]菩薩有り、前んで佛に白して言さく、「佛道甚だ深妙なり、一切法を講授して當に三界に王たるべきは、皆諸法の本に由る」と。復た菩薩有り、名けて極微と曰ふ、前んで佛に白して言さく、「十方の諸の世尊、我等を遣はして此に來らしめたまふは、唯だ正法を聞かんと欲してなり。賢聖の默したまふを樂はず。」と。復た菩薩有り、名けて色身と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「無量の諸佛等は、戒律淸淨具はり、自ら得、復た彼に授けて、一切の願を充飽したまふ。」と。復た菩薩有り、淨音聲と名く。前んで佛に白して言さく、「十慧、十無生、十法想知滅し、十地の功德具す、十力、願はくば說法したまへ」と。復た菩薩有り、名けて常定と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「我今最も下劣にして衆智未だ廣普ならず。唯だ願はくば尊、今日、我に神足道を示したまへ。」と。復た菩薩有り、名けて無底と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「本と我、自ら誓を發せり、要ず當に言教を聞くべしと。尊今說法したまはずんば、我れ終に捨去せざらん。」と。復た菩薩有り、名けて焰光と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「佛道甚だ難しと爲す、法起に盡有ること無し、能く一切の垢を淨めて、乃ち應に道の眞に入るべし。」と。復た菩薩有り、名けて法眼と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「無量の總持門、聲天地を震はし、說法して衆生を度し、佛道を成ずるを得しめたまへ。」と。復た菩薩有り、名けて慈仁と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「諸法甚だ深奧にして、空の如く端緒無し、本無諸道に達するが故に、人中の尊と號す。」復た菩薩有り、名けて一乘と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「生死塵勞の垢、八難を垣牆と爲す。此の苦を能く濟ふ莫きに、唯だ佛のみ能く度脫したまふ。」と。復た菩薩有り、名けて盛明と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「苦なる哉、考病死、三界は大患たり。慧日既に降出したまふに、然も默して說

【五】宋元二本は「此れ菩薩名を闕く。」と夾註す。明本は「此れ元と菩薩名を闕く」と夾註す。

に白して言さく、「法法自ら相ひ生じ、三界の有に染したまはず。願はくば七覺の花を雨らして、普ねく一切人を潤したまへ」と。復た菩薩有り、名けて講法と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「衆生には緣想無し、當に法因緣を以てして、空淨心無垢なるべし。尊、當に共に分別したまふべし」と。復た菩薩有り、名けて眼通と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「尊本と此の願を行じ、當に不度者を度したまふべし。今日期已に至りぬ、願はくば空無慧を説きたまへ。」と。復た菩薩有り、名けて無頂相と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「世界甚だ愍れむべし。顚倒の衆生多く、正道に迷惑す。願はくば慧明の處を示したまへ。」と。復た菩薩有り、名けて得總持と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「過去世を憶念するに、尊と弘誓を共にせり。當に恒沙の人を度して、無爲の岸に至らしむべし。」と。復た菩薩有り、名けて無與等と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「尊今、廣長舌、花の如く面形を覆ふ。皆正法を説くに由っての故に、此の福報を獲たまふ。」と。復た菩薩有り、名けて大施と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「尊本と人に惠施して、其の報を受くるを望みたまはず。今、人中の尊を得たまひて、巍巍たること乃ち是の如し。」と。復た菩薩有り、名けて究竟淨と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「六度大智慧、當に世間に遍ねかるべし。愚惑の徒をして悉く本無の行に趣かしめたまへ」と。復た菩薩有り、名けて無著觀と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「四辯に所著無く、一切人に應對し、一一に疑を決斷したまふは、皆宿報の緣に由るなり」と。復た菩薩有り、名けて好喜と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「昔、善知識に緣り、道法門を成就し、今既に成佛するを得たまふ。非法は云何が果あらん。」と。復た菩薩有り、名けて甚深智と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「一切行を興造し、衆德自ら瓔珞したまふ。唯だ佛能く演暢して、有より邊際に至らしむ」と。復た菩薩有り、花鬘子と名く。前んで佛に白して言さく、「功德、劫を累ねて積み、[三]眞際の法無きを解し、[四]德〔得〕三界の尊たるは、斯れ聞法の報に由る。」と。復た菩薩有り、名けて色相と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「如來丈六の身、金剛にして至つて壞し難し。願はくば無形法を以て、諸の萠兆に普及したまへ」と。復た菩薩有り、觀外身と名く。前んで佛に白して言さく、「日光の照す所、普ねく一切の冥を除くが如く、今未だ佛光を覩ず、願はくば威儀の相を示したまへ」と。復た菩薩有り、具足相と名く。前んで佛に白して言さく、「常に無

【三】解無眞際法。下の開結より觀みるに、此句に疑問あり。
【四】元明二本は得。

ず。唯だ願はくば時に演説したまへ」と。復た菩薩有り、名けて行道と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「今、身色相を觀るに、一切衆行具はり、至誠、正覺に逮りたまふ。何ぞ佛事を行じたまはざる」と。復た菩薩有り、名けて離垢と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「本と尊の發願したまふ所、乃ち阿僧祇と爲す。彼の顚倒等をして、乃ち正路を覩せしめたまへ」と。爾の時復た菩薩有り、名けて無盡と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「顏を觀るに花の開くが如く、容貌等雙無く、功德八難を過ぎたまふ。何の故に而も寂然としたまへる。」と。復た菩薩有り、名けて無悕望と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「十力哀れんで出世し、天世人を教化し、此より彼岸に至らしむるは、賢聖所行の業なり」と。復た菩薩有り、名けて佛慧と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「此の虚空際より、十方世に遍滿する(もの)、皆來つて法を聽き心の垢患を洗除せんと欲す」と。復た菩薩有り、名けて人本と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「三界悉く苦患にして、亦た逃避する處無し。唯だ須らく神力もて接したまへ、爾して乃ち永く安きを得べし」と。復た菩薩有り、名けて天王と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「身垢三百五、恒に人心を染汚す。當に智慧光を以て蠲除して餘なからしめたまふべし。」と。復た菩薩有り、名けて無怒と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「我れ平等慧より、故に來りて尊を省觀し、無量の法を聽いて、本無行を修習せんと欲す」と。復た菩薩有り、名けて無欲と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「我、過去世を憶ふに、佛有り、能仁と名く。勸進して法を說かしむ。尊の如くにして異有ること無し。」と。復た菩薩有り、名けて入定と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「曾て佛道を成じ、三覆して法輪を轉じたまふと聞けり。如今何爲れぞ默して、一轉聲をも聞かしめたまはざる。」と。復た菩薩有り、名けて海相と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「今我れ通智を得るは、皆、正法を聞きてなり。彼の衆生等を愍むが故に、如來に勸請したてまつる。」と。復た菩薩有り、名けて師子吼と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「一相は本と相無く、諸法は悉く空寂にして、衆生の逹せざる所なり。尊今當に分別したまふべし。」と。復た菩薩有り、名けて大豪と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「天尊甚だ巍巍として、衆相比有ること無し。瓔珞法を聞いて、一切人を開悟せんを欲す。」と。復た菩薩有り、名けて樂居と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「花の優曇鉢の、億千劫にして乃ち出づるが如し、佛も亦た是れに過ぐ。今現れて何ぞ自ら隱れたまふ。」と。復た菩薩有り、名けて趣道と曰ふ。前んで佛

來は如より生じ、降神して生死を度したまふ。但だ當に時に說法したまふべし。何爲れぞ猶豫を懷きたまふ。」と。復た菩薩有り、名けて遠離と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「無央數劫より、時時に乃ち佛有り、日の現れ花の敷くが如し。何爲れぞ光を現じたまはざる。」と。復た菩薩有り、名けて威神と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「十力は比有ること無く、空無相願を獲たまひ、法身は安明[二]の如し。唯だ願はくば甘露を開きたまへ。」と。復た菩薩有り、名けて道力と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「空觀して想念無く、行亦た寂然として滅し、是より自ら佛を致したまふ、天人の恭敬したてまつる所なり。」と。復た菩薩有り、無所猗と名く。前んで佛に白して言さく、「衆生若干種、解脫の門を識らず。願はくば尊、前に將導して、乃ち無畏の處に到らしめたまへ。」と。復た菩薩有り、閑靜觀と名く。前んで佛に白して言さく、「人心は流水の如く、念念皆、惡を生ず。尊當に其の根を斷じ、永く滅して萌兆無からしめたまふべし。」と。復た菩薩有り、無盡意と名く。前んで佛に白して言さく、「生死の海を越度し、梵志の行を淨修したまふ。衆生は甚だ飢虛す。說法して充足せしめたまへ」と。復た菩薩有り、不違信と名く。前んで佛に白して言さく、「三界都て熾然し、衆生恃怙する無し。尊當に慈愍して、爲に眞の法要を說きたまふべし」と。復た菩薩有り、善權現と名く。前んで佛に白して言さく、「盡く一切藏に通じ、無爲の境に安處し、本無の行を究盡したまふ。今尊、何をか思慮したまふ」と。復た菩薩有り、名けて達本原と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「四大一處に聚まり、皆、宿識に由つて行じ、癡愛共に相ひ生ず。願はくば尊、法を示現したまへ。」と。復た菩薩有り、名けて山岳と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「諸佛の興る所以は、三千世を濟度し、無限の衆生をして、永く三惡道を斷たしむるなり」と。復た菩薩有り、名けて速覺と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「未だ獲ざるを今已に獲、生死の本を種えず、世尊は心常に定にまします。願はくば禪定より起ちたまへ」と。復た菩薩有り、名けて賢護と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「一切諸法の本は、生滅するも起る所無し、智三界の苦に達して、盡く諸の有漏を斷じたまふ。」と。復た菩薩有り、無與等と名く。前んで佛に白して言さく、「諸佛の法は異らず、唯だ人を化するを本と爲す。本と等意より來り、大慈今在す所なり。」と。復た菩薩有り、名けて大天と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「衆生は宿、限り有り、如來を覩ることを得るも、未だ眞諦法を聞か

【二】安明山＝須彌山のこと。

顯徳と曰ふ。前んで佛に白して言く、「神足無量の法あり、六度に增減無く、衆相もて自ら身を嚴る。願はくば尊、時に神を屈したまへ」と。復た菩薩有り、名けて一意と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「十方の諸の菩薩、盡く忍土に來詣し、正法を聞くを得んと欲す。唯だ尊、時に覺悟せしめたまへ。」と。復た菩薩有り、名けて不虛忘と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「世尊、大いに慈愍したまひ、思惟して正定に入り、無量已に量を過ぐ。時に至つて說法したまふべし。」と。復た菩薩有り、名けて喜樂と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「知無量の行を生じ、行三界の表を過ぎ、尊は今、三世に尊たり。願はくば三界の人を度したまへ。」と。復た菩薩有り、名けて本無と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「尊今、極めて神妙、道力不思議にして、成佛したまふは衆生の爲なり、何ぞ法輪を轉じたまはざる」と。復た菩薩有り、摩訶衍と名く。前んで佛に白して言さく、「三乘同一趣にして未だ正法の言を聞かず。尊今當に分別して泥洹の要を知らしむべし。」と。復た菩薩有り、名けて劫數と曰ふ。前んで佛に白して言く、「人生當に滅に歸すべく、一を捨てゝ復た一に就く。唯願はくば尊、降伏して、生せず復滅せざらしめたまへ。」と。復た菩薩有り、名けて受證と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「生老病死の痛、五陰を禍の源と爲す。十二牽連の縛あり。唯だ尊願はくば拔濟したまへ」と。復た菩薩有り、名けて不眴と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「我等居る所の刹は、此を去ること甚だ久遠なり。唯だ願はくば今、世尊、說法して我をして聞かしめたまへ。」と。復た菩薩有り、名けて捷疾智と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「尊、七覺意を具し、四等心を具足したまふ、當に諸の不悟を悟らしむべし、願はくば世尊、之を度脫したまへ。」と。復た菩薩有り、名けて常擧手と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「大人の衆相滿ち、一切法を顯揚し、已に諸著を離るゝを得たまふ、亦た衆生をして離れしめたまへ。」と。復た菩薩有り、名けて法意と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「過去の諸の如來、法を說きたまふに量有ること無し。尊今既に成佛したまふ。願はくば時に法輪を轉じたまへ」と。復た菩薩有り、名けて月盛滿と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「世間皆、常に非ず、一切皆、空に歸す、生ずる所無しと解知したまふ。尊は今人中の上なり。」と。復た菩薩有り、名けて無量稱と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「身淨くして惡を造らず、口淨くして信を言ひ、一切の上に超越し、諸天人に過ぎたまふ。」と。復た菩薩有り、名けて無與等と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「如

ば尊、時に敷演したまへ」と。復た菩薩有り、名けて無厭と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「三世衆生は苦みて、未だ八正道を聞かず、最勝今已に降りたまふ。天師を渇仰すること久し。」と。復た菩薩有り、名けて勇猛と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「是れ、無數世を以て、行を積むこと量る可からず。威神復た一切なり。願はくば一切の惱を除きたまへ」と。復た菩薩有り、名けて覺知と曰ふ。前んで佛に白して言く、「佛慧量有ること無く、演法したまふこと窮り有る無く、住本と亦た住せず、願はくば正法輪を轉じたまへ。」と。復た菩薩有り、名けて善行と曰ふ。前んで佛に白して言く、「無生本と無生なるに、今日尊に生じて、形を五濁に現じたまふ。願はくば一切人を度したまへ。」と。復た菩薩有り、名けて正見と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「三界の第一尊、天人の供養する所、法を轉じたまへば大千に震ふ。如今、寂然として默したまふ。」と。復た菩薩有り、名けて法淨と曰ふ。前んで佛に白して言く、「設ひ無數劫より、尊の功德を歎ぜんと欲して、百福業を究盡するも、未だ毫釐の如きを盡きさらん。」と。復た菩薩有り、名けて無相と曰ふ。前んで佛に白して言く、「本無は本相無きに、尊今、衆相を出し、行盡きて作佛するを得たまふ。何爲れぞ禪定に入りたまふ。」と。復た菩薩有り、不思議と名く。前んで佛に白して言さく、「一切衆生の類、生滅の苦を見ず、本を了し衆相を知る。唯だ願はくば尊、時に赴[一]〔起〕きたまへ。」と。復た菩薩有り、名けて導首と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「一切諸法は空にして因緣共に合會するなり。久しく法輪を轉じたまはずして、何爲れぞ正定に入りたまふ。」と。復た菩薩有り、名けて輪轉と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「平等にして憎愛無く、一切を愍念したまふが故に、尊今已に顧屈したまふ。何爲れぞ復た睡眠したまふ。」と。復た菩薩有り、無量辯才と名く。前んで佛に白して言さく、「大聖人中の尊、劫數を經歷して懃に今已に正覺を成じたまふ。願くば一切人を愍みたまへ。」と。復た菩薩有り、名けて生盡と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「一切衆行の本、盡く無常に歸す。常身は常身に非ず。尊今、常身を計したまへ。」と。復た菩薩有り、名けて本末空と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「虚空は邊際無し。衆生は覺悟し難し。本無如來現じたまふ、時に演ずること疑有ること勿し。」と。復た菩薩有り、名けて多悲と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「夫れ自ら利せんと欲する者は、先づ一切人を度す。尊、衆生より出でて、今本誓願に違ふ。」と。復た菩薩有り、名けて

【一】三本本宮本は起。

開悟せしめたまへ。」と。復た菩薩有り名けて師子と曰ふ、前んで佛に白して言く、「夫れ人、法を聞いて三礙形を斷除せんと欲す。尊今無上師なり。願はくば一切人を度したまへ。」と。復た菩薩有り、名けて無量界と曰ふ。前んで佛に白して言く、「佛力は畏るる所無し。法界は不思議なり。過去當來の佛、此處に說法したまふ。」と。復た菩薩有り、虛空藏と名く、前んで佛に白して言く、「本無等正覺は、染無く、汚する所無く、平等に人を度脫す。何の故に寂然として住する。」と。復た菩薩有り、名けて慧造と曰ふ。前んで佛に白して言く、「生死甚だ苦と爲す、人の淵に沒在せるが如し。尊は今、大船師なり。唯願はくば時に渡濟したまへ」と。復た菩薩有り、名けて光造と曰ふ。前んで佛に白して言く、「衆行今已に盡き、已に三界の苦を離れ、慈悲四等心あり、本誓は今在る所なり」と。復た菩薩有り、名けて法造と曰ふ。前んで佛に白して言く、「衆生界は量り難し、一切は恩愛會し、三寶久しく斷絕せり。願はくば尊、時に說法したまへ」と。復た菩薩有り、名けて無著と曰ふ。前んで佛に白して言く、「智慧の光明降照して、三毒冥、世人の五苦患を除く。唯だ尊、正法を演べたまへ。」と。復た菩薩有り、名けて無畏と曰ふ。前んで佛に白して言く、「意を執ること金剛の如く、弘誓甚だ牢固に、心淨きこと虛空の如し、願はくば諸の厄人を救ひたまへ」と。復た菩薩有り、名けて護覺と曰ふ。前んで佛に白して言く、「智人已に降形したまひて、當に無數人を度したまふべし。願はくば一切を救濟して彼岸に至るを得しめたまへ。」と。復た菩薩有り、名けて無生と曰ふ。前んで佛に白して言く、「正法は不思議にして、曉達する者甚だ少し。無數劫の積行、願くば其の功を唐くしたまふこと莫れ。」と。復た菩薩有り、名けて神足と曰ふ。前んで佛に白して言はく、「慧眼今已に降り、當に不肖人を度したまふべし。本無平等慧もて、諸の苦患を離れしめたまへ」と。復た菩薩有り、名けて雷聲と曰ふ。前んで佛に白して言く、「衆行本無慧あり、智達一切の人、明らかに諸の塵垢を斷ちたまふ。尊、今正に是れ時なり。」と。復た菩薩有り、名けて雷音と曰ふ。前んで佛に白して言く、「佛尊は一切に過ぎ、智行無數劫に、自ら生じ自然に滅したまふ、無量無過の尊なり。」と。復た菩薩有り、名けて常悲と曰ふ。前んで佛に白して言く、「尊本と、苦行を積み、生死の難を經歷したまふ。佛日今已に出づ、愚癡冥を知ること莫けん。」と。復た菩薩有り、名けて幻化と曰ふ。前んで佛に白して言さく、「一切法を思惟するに、幻化にして亦た眞に非ず。道は當に以て平等なるべし、願はく

卷の第十四

十方法界品第三十九

爾の時、世尊將に滅度せんと欲し、却後九十日當に般泥洹を取るべし。四部衆に告げたまはく、『吾昔、摩竭國に成佛し、既に成佛して後法樂講堂に在り。十方恒沙の一切の菩薩、皆來り雲集して我が所に至り、各各勸進して我をして法を說かしむ。爾の時、菩薩有り、優鉢蓮花藏と名く。我に白して言く、「世人愚多くして眞法を識らず、唯だ願はくば世尊、正義を敷演し、一切衆をして解脱を蒙るを得しめたまへ」と。復た菩薩有り、波頭摩藏と名く。我が所に來至し、前んで我に白して言く、「生死に沈溺し、五道に流轉す。唯だ願はくば世尊、甘露の門を開き、久しく飢虛者に濟度を蒙ることを得しめたまへ。」と。復た菩薩有り、名けて喜藏と曰ふ。前んで我に白して言く、「世には多く苦惱有り、十二緣に縛著し、大聖の顏を見ず。唯だ願はくば當に濟度したまへ。」と。復た菩薩有り、栴檀藏と名く。前んで佛に白して言く、「五濁の鼎沸き、世、眞の正法を識らず。慧日既に以て降る。善だ願はくば闇冥を除きたまへ」と。復た菩薩有り、金剛藏と名く。前んで佛に白して言さく、「衆生然熾劇しくして恒に五欲に貪著し、如來性を識らず。唯だ願はくば法を頒宣したまへ。」と。復た菩薩有り、名けて力藏と曰ふ。前んで佛に白して言く、「一切世、無常にして生滅し、各〻限有り。尊今既に降形したまふ、何ぞ時に法を說きたまはざる。」と。復た菩薩有り、無垢藏と名く。前んで佛に白して言く、「尊今、蓮花の如く諸の塵垢に著せず、內外悉く平等なり、如來法を布現したまへ。」と。復た菩薩有り、清淨藏と名く。前んで佛に白して言く、「天子久しく現れず、世人恒に冥に在り。尊今既に降形したまふ。唯だ願はくば時に法を說きたまへ。」と。復た菩薩有り、如來藏と名く。前んで佛に白して言く、「過去に諸の恒沙の如來等正覺出現し、皆、法を說きたまへるに、尊今、何が故に默したまふ。」と。復た菩薩有り、名けて濡首と曰ふ。前んで佛に白して言く、「世に生れて佛に値ふは難く、尊き經法を聞くは難く人、身を受くるは難く、衆生を度脱するは難し。」と。復た菩薩有り、名けて慈氏と曰ふ。前んで佛に白して言く、「一切衆の苦患は、皆、恩愛より生ず。世には非法の人多し。唯願くば尊、

げたまはく『若し菩薩有り、如來の身相を具足することを得んと欲する者、三十二大人の相、八十種好、八種羯毘音聲、圓光七尺、是の如きの相を得んと欲する者は、當に賢聖辯才を學ぶべし。一切の菩薩を攝取し、六度無極を具足し、一切智を成じ、佛法を具足せんと欲せば、當に(賢聖)辯才を學ぶべし。』と。佛復た天子に告げたまはく『若し衆生有り、諸法を斷ぜず、四大に猗らず、如來深奧の妙法に達せんと欲し、是の如きを得んと欲せば、當に賢聖辯才を學ぶべし。智慧の深淵に入り、三達智に乘じて百千三昧に遊戲せんと欲せば、當に(賢聖)辯才を學ぶべし。本の姓名號を滅し、如來の名號を成ぜんと欲し、縛著を離れ、業に居るを樂はざらんと欲し、是の如きを得んと欲する者は當に賢聖辯才を學ぶべし。是の如く天子、菩薩摩訶薩、遍ねく諸法を學び、已に大乘の迹を成じ、本題を具足し、佛國成就し、衆生清淨にして、佛法藏に於て罣礙する所無く、諸法は幻の如く、響の如く、芭蕉樹の如く、鏡中の像の如く、夢中に見る所の如く、亦た幻化の如く、悉く所有無しと解了す。是の如く天子、菩薩、諸法を解了せんに、便ち能く諸佛世尊に禮事し、一佛國より一佛國に至り、佛法〔正法〕[六]を聽受して深妙の藏に入らん。』と。佛復た天子に告げたまはく『若し善男子善女人有り、轉輪聖王の、七寶導從—四天子を領するを得んと欲し、梵天王及び釋提桓因と作らんと欲し、是の如きを得んと欲する者は、當に賢聖戒律を學ぶべし。』と。爾の時、世尊、此の語を說きたまふ時、九十八億の阿羅漢を得たるもの、皆、變悔を懷き、前んで佛に白して言さく『我等の過重し、本と習へる所を捨てて今、邊際に墮つ。唯だ願はくば世尊、愍みて敎誨を垂れたまへ。賢聖辯才を修習するを得んと欲す。』と。是の如きこと再三、佛默然として之を可とす。復た無數の衆生有り、此の法を聞き已つて、諸の塵垢盡き、法眼淨を得たり。佛、淨居天子に告げたまはく『此の賢劫中に、七百の佛を過ぎて汝當に作佛すべし。名けて智積如來・至眞等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、佛・世尊と號す。』と。

【六】三本宮本は正法。

らしむればなり。若し善男子善女人有り、身に瘡癩を生じ、膿血流溢せんに、彼の人、此の賢聖辯才を聞かば、卽ち除差するを得ん。若しくは善男子、若しくは善女人、脊曲つて天を負ひ、目は盲、耳は聾、瘖瘂にして言はざらんに、善知識に遭値し、與に四賢聖辯才を說きたまはば、卽ち解脫を蒙りて衆苦有ること無けん。是の如く天子、若し我、曩昔四賢聖辯才を得ずば、終に賢聖四辯才を成ずる能はざらん。何を以ての故に、其の功德福限量すべきこと難く、若し一劫より百千劫に至り、復た無數恒沙劫中に此の法を歎譽せんに、以て喩と爲すは無ければなり。』と。

佛復た天子に告げたまはく『吾今、其の要を略說せん。若し善男子善女人有り、如來の所に至りて頭面禮足し、此を以て首となして、乃ち十方無量の刹土に至り、禮事供養して信心不斷にして、種種の華香、繒綵幡蓋し、佛の深義を問うて功德を增益し、一切法は幻の如く化の如しと知り、兼ねて一切を化して菩薩道を說き、一一に平等の大道を分別し、菩薩の衆行の種種同じからず、衆生の性行も亦復た是の如く、種種の菩薩の境界、種種の菩薩の智慧、種種の菩薩の威儀、種種の菩薩の妙行、種種の菩薩の神足、種種の菩薩の出要、種種の菩薩の入不染著境界、種種の菩薩の惑心無く自ら娛樂する、種種の菩薩の法要、無量法を分別するが故に、種種の菩薩の通慧、衆生純熟の根を觀ずるが故に、種種の菩薩の道慧、本末定を捨てざるが故に、種種の菩薩の深觀、定意に入るが故に、種種の菩薩の弘誓、本願に違はざるが故に、種種の菩薩の勇猛、諸法を成辦するが故に、種種の菩薩の精進、懈怠を懷かざるが故に、種種の菩薩の勤苦、劫の遠近を念ぜざるが故に、種種の菩薩の大慈〔悲〕、心平等の故に、種種の菩薩の大悲、一切を愍念するが故に、種種の菩薩の喜心、未だ曾て怒を起さざるが故に、種種の菩薩の護心、一切を放捨するが故に、種種の菩薩の不淨觀、自ら內の諸法を觀ずるが故に、種種の菩薩の出入の息を數ふる、內に自ら攝意するが故に、種種の菩薩の十二緣起、自ら諸法を滅するが故に、種種の菩薩の五盛陰を觀ずる、諸想を斷ぜんと念ずるが故に。是の如く天子、菩薩摩訶薩は、諸法の不可思議を觀察し、一切の迹を淨めて一切智に應じ、一道の本を成じて一泥洹に歸し、乃ち賢聖辯才に應じ、如來所說の戒を分別す。云何が經と爲す。所謂經とは、契經・歌・授決・本末久遠事・相應・生經・方等・未曾有法・因緣經・譬喩・深藏斷結なり。是を天子、菩薩摩訶薩、此の法を學せば、便ち能く具足す。』と。佛復た天子に告

衆生を化し、深き法輪を轉じて總持門に入る、云何が總持と爲す。所爲の總持とは、樂法淸淨總持なり、菩薩此の總持に入れば、能く衆生をして法樂の樂を娛樂せしむ。』と。佛復た天子に告げたまはく『復た無邊際總持有り、菩薩此の總持を得れば、無邊際の衆生をして八解脫を立せしむ』と。佛復た天子に告げたまはく『復た無斷轉法總持有り、菩薩此の總持を得れば、諸の衆生をして聞法を不斷ならしむ。復た覺道了衆生本總持有り、菩薩此の總持を得れば、阿僧祇の衆生をして本と從來する所を知らしむ。復た行迹無礙總持有り、菩薩此の總持を得れば、自然の法、起無く滅無きことを知る。復た誦法不忘總持有り、菩薩此の總持を得れば、諸の法門を獲て法想を起さず。是の如く天子、菩薩の總持は百千億數にして、心所念に非ず、菩薩は此の總持に由つて便ち百千三昧に遊戲することを得』と。

佛復た天子に告げたまはく『四賢聖如來辯才有り、菩薩此の賢聖辯才を得れば、泥洹門に向つて礙有ること無し。云何が賢聖辯才なる。是に於て天子、或は菩薩有り、初心入定し、後心道に向ひて如來智を行じ、前心入定の意を壞せざる、是を菩薩賢聖辯才と謂ふ。復た次に天子、菩薩入定して、前念後念寂然として動かず、能く相好を具して現世人に布き、純ら菩薩を以て左右に侍衞せしむる、是を菩薩賢聖辯才と謂ふ。復た次に天子、或は菩薩有り、現に入定して、心、無量の諸佛世界に遊び、殊妙賢聖の法律を採取するに、一切衆生知覺する者無きが如し、復た次に天子、復た菩薩有り、滅盡三昧無形正定に入り、復た定より起つて無數の變を作すに、一切衆生覺知する者無し、或は現一劫より百千劫に至り、或は現一月、或は現一日乃至七日、或は現に成佛して般泥洹を取る。是を天子、菩薩辯才功德無量と謂ふ。』と。爾の時、世尊、天子に告げて曰はく『若し菩薩有り、三界に獨步し、諸佛世尊に供養せせん者、先づ當に此の賢聖辯才を習すべし。若し聲聞辟支佛に超過せんと欲する者、諸佛世尊に供養せんと欲する者、三世無量の法を盡さんと欲する者、解脫を得ること佛の解脫の如くならんと欲する者、衆生をして一時に成佛せしめんと欲する者、是の如く天子、此の菩薩摩訶薩は當に此の賢聖辯才を習し、受持諷誦して人の爲に解說すべし。多なる能はずと雖も初夜にて可なり。初夜なる能はずと雖も一時の間にて可なり。一時なる能はずと雖も彈指の頃にて可なり。何を以ての故に、三世諸佛の一切の諸道は皆此より生じ、世の光明と爲り、諸の困苦者をして自然に安隱な

の本を斷ぜず、道樹の下に坐して一切の業を捨て、國榮を悋まず、此の惠施を用つて佛道を成じ、此の聲響を出す、今日は正に是れ時なり、吾れ成佛せずんば座より起たず、要ず所覺を覺して乃ち座より起たん、と。唯だ地樹神のみ乃ち我が心を知る。爾の時、世尊是の語を說きたまへる時、十方無量恒沙の刹土に、八十億姟及び神通の菩薩有り、僉然として倶に至り、天地大動し、十方の諸佛各其の方に於て其の德を稱揚して四部衆に告ぐ、「今日菩薩釋迦文なる者、沙訶刹土に於て、當に無上正眞の道を成ずべし。汝等能く彼に至るに執任せば、威儀を攝持して往いて親覲すべし。」と。是の時、十方の諸の神通菩薩、佛の聖旨を承け、僉然として敬を興し、禮佛三匝し、各〻香華を持して忍世界に詣り、供養を興致し、道樹を圍遶す。善に稱へる無量の忍心地の如く、衣毛を竪てず、係意して前に在り、左右を顧視せず。慈心遂に盛んにして、「苦厄を愍傷し、「我が今、成佛せんと欲する所以のものは一切を矜愍すればなり」、と是の語を說きたまふ時、天地六返震動せり。爾の時、世尊直前を瞻視して七日動きたまはず、諸天龍神八部の衆、皆來つて菩薩を圍遶擁護す、「作佛を成じ、究竟を得しむるに至るまで、我亦た菩薩所行を捨てず、』と。

　復た次に天子、菩薩の神足、六聖法を行じ、進前成佛し乃ち道教に應ず。吾前に成佛し、此の六行に由つて大慈悲を行ず。云何が六と爲す、一には慈仁、不虔を哀愍す、二には惠施、周ねく一切を滿たす、三には、廣く聖慧を演べて進退有らず、四には三空慧を行じて國土を淨攝す、五には國土を攝取するに進退心無し、六には佛の印信を受けて衆生を封可[五〇]〔印〕す。是を六事もて、如來至眞等正覺を成ずるを得、と謂ふ』と。

　佛復た天子に告げたまはく『菩薩摩訶薩復た六事有り、衆生を化せんを念じて懈怠を懷かず、一切衆生の願を充足す。(云何が六と爲す）一には精進して諸の漏結を斷ず、二には苦行して道心を捨てず、三には自ら憶して身口意を攝す、四には師を追うて正法を受けんを求む、五には修德すること、衆生の爲の故なり、六には入定して根源を觀察す。是を菩薩摩訶薩、此の六事を具せば、便ち應に通慧すべし、と謂ふ。』と。

佛復た天子に告げたまはく『諸佛世尊此の六法を修し、無上正眞の道を成ずるを得、廣く

【五〇】元明二本は印。

んと欲せば、左右に侍從給使して、天王尋いで到りて無礙なり。爾の時天王釋提桓因、諸天をして其の功德を證せしめんと欲し、卽ち被らすに七寶を以て龍身を莊嚴し、時に天帝釋、此の、神龍に乘つて東西に遊觀す。爾の時に當つて伊羅鉢龍王、復た神力を以て種種の供養を化作し、天帝釋に承事恭順し、龍自ら形を化して三十二首となる。一一の首上、口に七牙有り、一一の牙上に七浴池有り、一一の池中に七百の蓮華有り、一一の華上に七百の玉女有り、一一の玉女復た七百の使人を將ゐて、倡伎樂を作し、共に相ひ娛樂す。若し復た天王釋提桓因、意、懈息せんと欲して、卽ち七寶の殿に詣るに、後に一浴池有り、名けて香潔と曰ふ。躬、浴池に入り、伊羅鉢龍王に乘りて、意を恣にして遊戲す。爾の時、天王釋提桓因、以て一の好浴池に入つて此の龍に乘り已り、衆寶雜厠もて其の身を莊嚴し、倡伎樂を作し、五欲もて自ら遊び、共に相ひ娛樂するに、樂しきこと言ふ可からず。爾の時、伊羅鉢龍王、本の形狀を捨てゝ龍身を作さず、已が神力を以て變じて三十三天の像と作り、復た一浴池に入り、及び彼の諸天と、諸の玉女を將ゐて共に相ひ娛樂するに、亦た天帝釋の如くして異ること無し。左右此の變化を觀見するに、天身龍身各ゝ異有ること無し。身、天身と同じく、色、天色と同じく、共に一浴池に在りて、變異有ること無く、釋身龍身一にして二無し。何を以ての故に、皆、宿積せる功德の致す所に由るなり。設し此の二人、本と無上正眞道を求めんに、今日成佛せんこと亦復た久しからず、行、心に從ひて得、心淨く、道成ぜん。彼の天宮は本と從來する所を知らず、去るに亦た至る所無きが如く、一切衆行は皆空、皆寂なり。天子當に知るべし、汝の今の此の身及び彼の天空の日月は、天子、悉く磨滅に歸して久しく保つ可からず、是の故に天子、當に法性を解すべし、成敗の趣むく所、起滅常に分る。唯だ泥洹のみ有り、最安最妙にして、刀劍呪術の能く摧毀壞敗するに非ざるなり』と。爾の時、世尊復た天子に告げたまはく『菩薩摩訶薩も亦復た是の如し。無礙の定意を獲、弘誓牢固に、菩薩三昧の七寶を以て自ら瓔珞し、七覺意の花を以て其の身を莊嚴し、善く無礙に住し、定意亂れず、身より光明を放つて照有らざる無く、擊法鳴鼓の聲十方に徹し、法の高幡を竪てゝ威儀を顯揚し、身鉤鎖骨の力天人に過ぎ、一切の諸度無極を增益し、自然法律に於て皆悉く成就し、肌肉軟細にして塵垢を受けず、慧法輪を演で法王中に勝れ、深く法藏に入り、諸の菩薩を以て、用つて眷屬と爲し、八解浴池にして、用つて心垢を洗ひ、衆人の弘誓

二には無生空、三には非生非無生空なり。是を三空菩薩所行と謂ふ』と。佛復た天子に告げたまはく『復た三空有り。云何が三と爲す。一には住空、二には無住空、三には非住非無住空なり』と。爾の時、淨居天子、佛に白して言さく『世尊、過去當來今現在の諸法、一切衆生、盡く生滅著斷有り、此の三空有りや不や』と。佛、天子に告げたまはく『我今、汝が與に說かん、善く之を思念せよ。云何が住空と爲す。所謂住空とは無爲寂靜是れなり。天子當に知るべし。云何が無住空と爲す。汝の身及び我は是れなり。云何が非住非無住空と爲す。一切の有形の三世諸法是れなり。』と。佛復た天子に告げたまはく『若し善男子善女人、此の三空を解せば便ち能く一切諸法を解せん。五盛陰身も亦復た是の如し。是を菩薩道と謂ふ』と。佛復た天子に告げたまはく『諸法は合無く散無く、亦た淨を見ず、亦た不淨を見ず。亦た自ら念言せず、若し我成佛せんに、當に某處に生れ、國土郡縣父母宗親姓氏名氏は、と。亦復た念ぜず、某劫中に生れ、壽命長短と。復た自ら念言せず、身は黃金色にして花樹の下に坐し、當に無上正眞の道を成ずべし、と。是を菩薩道已に能く具足し、不退轉を得、無生心を行ず、本と一相無し、況んや二相有らんや、と謂ふ。爾の時、菩薩、諸法悉く空寂に歸するのを分別して、恒に自ら將護し、弊魔の爲に便を得しめず、趣きて趣く所なく、轉じて轉ずる所無く、是の如く已に法界無量の空慧に入り、能く自ら衆相の法を嚴飾す。』と。佛復た天子に告げて曰はく『猶ほ眼と色と內外に主無く、三事共に合して乃ち眼識を成ずるが如し、痛想行識も亦復た是の如く、內外成就して乃ち諸識を成ず。』と。佛天子に告げたまはく『我今、汝が與に喩を引かん、知者は喩を以て自ら解す。猶ほ伊羅鉢龍王の如し、金福山側の中に於て止住し、七寶の殿堂、七寶の垣牆、七寶の樹木、梯階街巷皆七寶もて成り、彫文刻鏤は衆寶の成す所なり。時に彼の伊羅鉢龍王、身體絕白、雪珂の積の如く、金蓋後を逐ひ、身體は香り、瓔[四](路)悉く七寶にて成り、復た七寶を以て、以て食器と作し、純紫の磨金もて華鬘を造作し、復た七寶を以て鍾鼓樂器を作り、七處齊平、口齒齊正、容貌端嚴にして覩るに厭足無く、淸淨香潔にして、左右に廻轉するも觸礙する所無く、此の衆德有りて稱量す可からず。然も釋提桓因は三十三天を領し、天王中の尊にして、心に念ずる所有れば、彈指の如き頃に、金福山側の伊羅鉢龍王をして、臂を屈伸するが如き頃に、往いて三十三天に至らしめ

【四】三本宮本に珞字あり。

を名けて菩薩と爲すと謂ふが如し。猶ほ、菩薩其の慧眼を以て遍ねく三千大千世界の、愛欲心有り、愛欲心無き、愚癡心有り、愚癡心無き、瞋恚心有り、瞋恚心無きを觀じ、復た能く思惟して遍ねく根本を斷ぜば、是故に慧眼と名く、復た次に慧眼の菩薩、周旋往返して諸佛境界に遊び、盡く衆生心、心所念を知りて、度不度に應じ、便ち能く入化し、類に隨つて之を度す。是を名けて菩薩と爲すと謂ふが如し。猶ほ菩薩、諸の光明を以て普ねく照す所有り、諸の境界に遍ねからしめ、亦た無量の智慧を以て諸佛世尊の深奧の法を憶する、是を名けて菩薩と爲すと謂ふが如し。猶ほ菩薩、智慧光を以て乃ち能く虛空境界を照曜し、如來の神智而も前に現在し、罪門を閉塞し、泥洹の路を開き、復た十八本持に染著せず、著無く、縛無き、是を名けて菩薩と爲すと謂ふが如し。猶ほ菩薩、佛の威儀を以て、如來の獨步無侶を自ら修習分別し、名色・六入・更樂・受・有・生死、過去三世衆生の本末を一一悉知するを、名けて無等侶と爲すが如し。猶ほ菩薩、如來を紹繼して佛種を斷たず、佛事を施行し、生者生を知らず、滅者滅を知らず、本無、虛寂にして四等心を具し、亦復た本無今有、本有今無を分別し、悉空を解了して若干念を生ぜざる、是の故に名けて佛と爲すが如し。猶ほ菩薩、神通慧を得て衆生の劫の近きに有り、遠きに有るを觀じ、劫遠きも以て感と爲さず、劫近きも以て喜と爲さず、成劫敗劫亦復た是の如く、意を攝り、心を持して亂れずば、是の故に名けて菩薩と爲すが如し』と。

佛復た淨居天子に告げたまはく『若し善男子善女人、菩薩道を行ぜんには、復た當に一切諸法を思惟して、初發意より乃ち成佛に至り、吾我、我人、壽命を計せず、其の行を自然にして諸の塵垢を斷ずべし、此れを乃ち名けて菩薩道を修すと曰ふ。復た菩薩有り、道を發求せば、一切衆生の爲に苦行を荷負し、亦た復た得道者有るを見ず、亦復た能く阿僧祇無量の衆生の受證ある者、受證せざる者を度し、中に於て受決して染著する所無きは、此れを乃ち名けて菩薩道を修すと曰ふ。復た次に天子、若し善男子善女人、三空無量の深法を分別して如實に之を知らん、云何が三空と爲す、一には覺有り觀有り、二には覺無く觀有り、三には覺無く觀無し、是を三空菩薩所行と謂ふ。復た次に天子、復た三空有り、云何が三と爲す。一には盡空、二には無盡空、三には非盡非無盡空なり。是を三空菩薩所行と謂ふ』と。佛復た天子に告げたまはく『復た三空有り、一には生空、

にして究竟すべきこと難し。衆生若干、諸根同じからず。云何が無上正眞の道を成ぜんを得んと欲する。又た佛が佛の所行の如くして異有る無しと言ふを聞く。今如來に問はん、云何が佛の所行の如くして異有ること無き。唯だ願はくば世尊、一一に分別したまへ。』と。爾の時、天子、復た佛に白して言さく『菩薩所行の其の法各異り、志意の趣く所の行迹同じからじ。云何が世尊、佛の所行の如く菩薩異らずは、何を以ての故に、名けて佛と爲さざる、何を以ての故に、十力具りて魔官を降伏せざる。何を以ての故に名けて一切智と爲さざる。何を以ての故に、名けて一切諸法を覺了すと爲さざる。何を以ての故に、名けて遍ねく菩薩道を觀行すと爲さざる。何を以ての故に、佛の道場に坐して緣起を頒宣せざる。何を以ての故に、名けて最正覺と爲さざる。何を以ての故に、三世の正法、諸佛の所行を知らざる。何を以ての故に、壽一劫に住して智慧を宣布せざる。何を以ての故に、諸法に依猗して正受定意を修せざる。何を以ての故に、法界を分別し、無量慧に進み、菩薩を教誨して以て眷屬と爲さざる。』と。爾の時、世尊、淨居天子に告げて曰はく『善い哉善い哉、族姓子、汝の所問の如きは、已に諸量を過ぐ。今當に汝が與に說かん。諦かに聽け、諦かに聽け、善く之を思念せよ。天子今問へり、菩薩の所行、佛と異る無しとは、一切の善男子善女人、諸法の無形にして見るべからざるを覺了し、菩薩の弘誓廣く一切の當來過去現在の有形の類に及ぶも、展轉相成して未だ智慧淸淨の空觀を獲ざるなり、設し當に智慧を得べくば、故に名けて如來至眞等正覺と爲す。菩薩の慧に猗りて衆生を化度し、自ら得、復た彼に授くるは、是を菩薩道と謂ひ、能く三毒を斷じ十惡を興さず、如來の境界を盡くす、是を名けて十力と爲すと謂ふ。已に凡夫を越えて菩薩の行迹を立て、心、無上正眞の道より移動せざる、是を名けて菩薩と爲すと謂ひ、法界を分別し、共に相ひ受入する、是を名けて一切智と爲すと謂ふ。猶ほ諸法の本と相貌無きに、衆生を以ての故に各名號有り、就く可きに就くを知り、捨つ可きに捨つるを知り、善本を離れず、菩薩道を修する、是を名けて菩薩と爲すと謂ふが如く、猶ほ、菩薩の無一無二を分別し、自然に諸度無極を出生し、復た自ら覺了し、亦た衆人をして其の法相に同ぜしむる、是を名けて佛と爲すと謂ふが如し。猶ほ彼の菩薩、一二三諸法の生ずる所を見ず、善察して忘れず、思惟達了すらく法は何によつてか起り、法何によつてか滅する、法輪を轉ずる者は是れ何人と爲す、法を聞くは是れ誰ぞと。能く一切諸法を解知せば、是

は、當に一心定意もて、想知滅に十事有るを習ひ、過去未來現在を知ること佛の所行の如く異有ること無かるべし。云何が想知滅に十事有るぞ。一には、色形像本と所有無きを觀じて、亦た形想を起す法に染著せず、菩薩摩訶薩、佛の所行の如くして異有ること無し。爾の時、菩薩、相好度無極を修して、一一の相は、佛の所行の如くして異有ること無し。菩薩の神智變化して方無く、衆生を應化し、緣に隨つて往いて度し、佛の所行の如くして異有ること無し。爾の時、菩薩、無量の身色像を化すること第一にして、八種の音聲を以て衆生を勸導し、佛所行の如くして異有ること無し。又た彼の菩薩、佛國土を淨め、衆生の心意所念を觀察し、威儀禮節禁戒を失はず、佛所行の如くして異有ること無し。爾の時、菩薩復た定意に入り、三昧を正受し、能く衆生をして音響を分別し、强記して忘れざらしめ、佛の所行の如くして異有ること無し。又た彼の菩薩、十明慧を行じ、無限無量にして窮盡すべからず、亦た衆生をして此の法の本を習はしめ、適きに應じ時に隨つて、無上の法輪を轉じ、佛の所行の如くして異有ること無し。又彼の菩薩四無畏を得、大衆中に在つて師子吼を作し、賢聖如來の正法を斷ぜず、復た此の法を以て衆生を敎化し、皆悉く成就して無上道を得、一切智に逮んで罣礙する所無からしめ、佛の所行の如くして異有ること無し。又、彼の菩薩の口に演ぶる所の敎は、遍ねく一切に布き、三世行に入り、諸有の漏を盡して無漏の行を成じ、神通智達、能く一切を化し、佛の所行の如くして[三]異有ること無し。又た彼の菩薩は佛の無畏十力具足することを得、佛國土の衆生清淨なるを見、佛の所行の如くして異有ること無し。是の如く天子、菩薩摩訶薩、此の十事を行ずれば、進んで作佛を成ぜんに、難有ること無し。何を以ての故に、一切諸法は本と所有無し、亦た來る時あらず、亦た去る時あらず、諸法相無く、相亦た所有無し。諸法聲無く、聲本と形無し、本性自ら空なり。何を以ての故に、聲は空より出で、空に還歸し、衆生の染汚、從つて識想を起すなり。天子當に知るべし、吾れ昔求道し、無數劫より本末を分別すれども、未だ能く一法定意を究盡せず。云何が一法と爲す。所謂無念なり。菩薩、無念定意を得れば、一切法皆悉く形無しと觀ず。是の如く天子、吾今成佛し、此の一行に由つて無上正眞の道を成ずるを得たり。』と。

　爾の時、淨居天子前んで佛に白して言さく『世尊、今聞く所の菩薩所行の如き、諸法無量

【三】三本宮本によつて「異有ること無し」を加ふ。

を求めんことを冀はず、或は菩薩有り、總持門を得、法觀を分別し、不淨行を修す。或は菩薩有り、佛の定意を得、一切智を立てて、妄想を捨てず。或は菩薩有り、佛の出要を得、一切人をして出家學道せしむ。或は菩薩有り、神通慧を得、權方便を行じ、形に隨つて入らしむ。或は菩薩有り、無形觀三昧を得、虛空界に入りて不思議を行ず。或は菩薩有り、滅盡定を得。現に滅度を取りて泥洹に處らず、或は菩薩有り、七觀道を得、外に威儀を現じ、內は實に充足す。或は菩薩有り、天眼通を得、遍ねく十方無量の諸佛を察し、未聞を諮受して自ら娛樂す。或は菩薩有り、天耳通を得て、遍ねく衆聲を聞き、善惡を分別し、輒ち往いて能く度し、墮墜せしめず。或は菩薩有り、心意通を得、神足力を以て往いて之を度す。或は菩薩有り、宿命通を得、自ら宿命を知り、亦た他人の從來する所の處を知り、類に隨つて降伏し、邊際に墮せず。或は菩薩有り、漏盡通を得、能く一切衆生の結縛を斷ず。或は菩薩有り、樹王の下に坐し、佛の神德威儀法則を得、威儀成就し、種姓成就し、父母成就し居家成就す。或は衆生有り、佛の光明を得、佛の住する所に住し、心進むこと月初の如し。或は衆生有り、佛慧地に住し、能く智劍を以て塵垢を割斷す。是の如く菩薩摩訶薩、七十五法、如來深藏不思議行もて、作佛を成ずることを得、遂に退轉せず。亦た羅漢辟支の及ぶ所に非ず。是の如く天子、菩薩摩訶薩、此の衆行定意を得れば、能く三千大千世界をして盡く黃金色ならしめ、一切衆生の類を招喚〔照煥〕して、悉く無上正眞の道に向はしむ。是の如く天子、當に此の法を以て衆生を敎化すべし、乃ち菩薩律に應ず。

復た菩薩有り、十二法を修し、所行無礙に、進止行來して、菩薩道を修す。云何が十二と爲す。一には魔兵を降伏して十力行を現ず。二には與に功德を共にして生滅の想無し。三には能く神力を以て一切の願を充たす。四には無著の力に依つて佛の變化を見る。五には已が種うる所の如き善本功德を、能く一切に施して悔悋有ること無し。六には第一法を修すること、佛量に過ぐ。七には生の苦たるを知つて三有に染せず。八には無盡道本もて自ら娛樂す、九には聲聞行を知つて亦た染著せず。十には緣覺法を知つて捨離して從はず。十一には無礙道法もて九次第を行ず。十二には當に父母を眷屬化して成就せしむべし。是を天子、十二無礙淸淨の道本と謂ふ、菩薩當に修習して其の道果を成ぜんことを念ずべし。天子當に知るべし、菩薩摩訶薩

濟度して此より彼に至らしむる所有り—を作さず。何を以ての故に、本性自爾として人の爾らざらしむるもの有ること無ければなり。猶ほ甘雨時に隨つて下降し、百穀草木時に隨つて滋長せんに、然かも彼の雲雨も亦た是の念—我、潤澤する有り、長養する所有り—を作さざるが如し。何を以ての故に、本と無心の故なり。菩薩摩訶薩も亦復た是の如く、法雲一降すれば普ねく三千大千世界を潤ほし、衆生の類をして盡く潤澤を得しめ、本願を捨てずして、菩薩道を行ぜんも、菩薩亦た是の念—我は今能く法雨を降らし、普ねく三千大千世界を潤ほし、衆生の類をして盡く開解を得しめたり—を作さず。何を以ての故に、本と心意無く、弘誓の心、性は自然なるが故なり。是の如く菩薩摩訶薩、此の三昧定意に入らんに、能く衆生をして至竟清淨ならしめ、餘の清淨に非ず、能く衆生をして至竟安隱ならしめ、餘の安隱に非ず、能く衆生をして彼岸に到るを得しめ、餘の到るを得るに非ず、能く衆生をして度無極を獲しめ、餘の能く度するに非ず、能く衆生をして至竟歡喜ならしめ、餘の歡喜に非ず能く衆生をして結使を斷ぜしめ、餘の能く斷ずるに非ず、能く衆生をして良祐福田に安處せしめ、餘の能く安んずるに非ず、能く衆生をして人の信施福を受けて、一切を度せしめ、餘の能く福を受けて一切を度するに非ず、能く衆生をして賢聖の法律に入らしめ、餘の能く賢聖の法律に入るに非ず、能く衆生をして不退轉に立たしめ、餘の能く不退轉地に立つに非ず、能く衆生をして一切智を得、盡く三千大千刹土に遍ねからしめ、餘の能く三千大千に遍ねきに非ず、能く衆生をして人の爲に將導を作さしめ、餘の能く將導を作すに非ず。何を以ての故に、菩薩摩訶薩、此の定意無量の法行を習ひ、普周ねく一切をして濟を蒙るを得しめと、爲に此性弘誓の法門を開き、不可思議無限廣大にして、一人の爲のみに菩薩道を淨めず、普ねく一切の度し難き衆生に及ぼし、中に於て建立して度無極に應ず。或時には菩薩、一人を救濟せんが故に、命を沒して代つて苦惱を受け、或は菩薩有り、一人の爲の故に劫より劫に至り、初めより捨離せずして要らず得度せしめ、後乃ち自ら滅度す。或は菩薩有り、己が界を淨めんと欲して、諸の縛著を斷じ、衆生の根本を淨除し、清淨なる正法出要に安處せしむ。復た菩薩有り、懃に苦行を執り、天福に著せず、恒に五道に在つて周旋教化す。或は菩薩有り、四無畏を得、衆生を教化して怯弱を懷かず。或は菩薩有り、四辯才を得、人來つて詰問せんに、理通ずること無礙なり。或は菩薩有り、法を說くに堪任し、榮に著せず、僥倖に利

を出生するも、法界亦た是の念—我は諸法大慈大悲六度無極を出生す—を作さざるが如し。菩薩摩訶薩亦復た是の如く、諸法を出生し、衆生を教化するも、亦た、我度する所有りと念言せず。天子當に知るべし、猶ほ入定せる比丘の、衆想を斷除して心移動せざらんに、入定せる比丘亦た是の念—我今神力もて入定自在なり—を作さざるが如し。菩薩摩訶薩亦復た是の如く、所念に隨つて法悉く皆成就し、所言の眞誠本要に違はず。天子當に知るべし、猶ほ金剛の沮壞す可からざるが如し。何を以ての故に、本性自爾なればなり。菩薩摩訶薩も亦復た是の如く、法性と相應して本際を失はず。猶ほ明珠の廣く照す所有るも、明月珠は亦た此の念—我照す所有り、衆生をして其の光明を見しむ—を作さざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復た是の如し。猶ほ仙道を得る人、意に願ふ所有れば皆悉く成辦するも、彼の五通の人亦た此の念—我今念ずる所皆悉く成辦す—を作さざるが如く、菩薩亦復た是の如し。猶ほ工巧の人の、善く六藝を解し、或は刀劍を以て、或は矛矟を以て大衆を壞敗するも、彼の工巧の人亦た是の念—我今作す所は人中の最上にして、大衆を降伏すること我と等しき〔者〕有ること無し—を作さざるが如く、菩薩摩訶薩亦復た是の如く、無量三昧に入つて定意を正受し、三千大千世界を感動せしむるも、亦た自ら、我此の神力有つて諸の世界を感動せしめ、周遍せざるなし、と稱譽せず。猶ほ轉輪聖王の、本と十善五戒を修し、具足して三千大千世界を統領し、千子勇猛にして七寶具足し、諸の粟散小王盡く來つて朝賀せんに、爾の時轉輪聖王、亦た是の念—我今衆德具足し、相好は身を嚴にし、四域を統領す—を作さざるが如し。何を以ての故に、福自性、爾として相ひ違背せざるが故なり。菩薩摩訶薩も亦復た是の如く、菩薩道を修し、佛教を敬承し、恒に教化を行ひ、天人恩を蒙り、度する所の衆生稱量すべからざらんに、菩薩亦た是の念—我當に無量の衆生を濟度し、無餘泥洹界に於て般泥洹すべし—なし。何を以ての故に、空性自爾として、衆生の能く不爾ならしむるもの有るなればなり。猶ほ農夫の時に隨つて種種に作り、時節を失はず、前子は後子に非ず後子は前子に非ず、各各長大し、共に相ひ受入す。然るに彼の穀子是の念—我は生ずる所有り、彼は損ずる所有り—を作さざるが如し。何を以ての故に、本性自爾として人の不爾ならしむる者有ることなければなり。菩薩摩訶薩も亦復た是の如く、遍ねく諸法を學び、菩薩道を行じ、復た十善功德の本を以て衆生の根を淨め、皆、無爲の道に趣かしめんに、爾の時、菩薩是の念—我は今、

如し。亦た羅漢辟支の知る所に非ず。』と。佛復た天子に告げたまはく『若し善男子善女人、十清淨法を修せば、復た能く一切諸法を具足せん。云何が十清淨法と爲す、一には道は當に清淨なるべく、穢濁は道に非ず。二には道は當に一意なるべく、多想は道に非ず。三には道は當に足るを知るべく、多欲は道に非ず。四には道は當に尊敬すべく、憍慢は道に非ず。五には道は當に意を檢すべく、放逸は道に非ず。六には道は當に顯曜なるべく、自ら隱るゝは道に非ず。六には道は當に連屬すべく、無行は道に非ず。[二]〔三本皆同じく第六重ねて出づ〕七には道は當に精懃なるべく、懈怠は道に非ず。八には道は當に覺悟すべく、愚惑は道に非ず。九には道は當に教化すべく、矜恪は道に非ず。十には道は善友に近くなり、惡を習ふは道に非ず。是を天子、善男子善女人、此の十法を修すれば則ち能く一切諸法を具足すと謂ふ。猶ほ日光の永く闇冥を除きて世人を照曜し、各をして眼目を得しむるが如し。菩薩も亦復た是の如く、此の十法を習へば、便ち能く一切諸法を具足す。天子當に知るべし、猶ほ眞金の內外明淨にして、欲する所の器となり、皆悉く成就するが如し。菩薩摩訶薩亦復た是の如く、內に塵垢無く、外に照す所有り。亦た虛空の普ねく一切を覆ふが如し。菩薩亦復た是の如く、此の十法を修すれば、亦た我れ辯ずる所有りと想念すること無くして、衆生を教化して諸の結著を斷ぜしむ。復た次に天子、猶ほ須彌山王四寶を成ぜん所に、須彌山王亦た此の念―我れ四寶の所成にして、四海の中央に跱〔趾〕立す―といふ無きが如し。菩薩の四辯才を得るも亦復た是の如く、此の辯の所說應ずるが如しと念ぜず。何を以ての故に、本と想念無きが故なり。猶ほ大地の普ねく萬物樹木花果及び諸の藥草を載せて盡く皆生長せしむるも、地亦た此の念―我能く成辦して諸物を長養す―といふ無きが如し。菩薩摩訶薩亦復た是の如く、此の念―我は衆生を化して大慈悲を行ひ、一佛國より一佛國に至り、一切諸の不度者を擁護す―といふを作さず。天子當に知るべし、猶ほ四大海の水より種種の寶を出し、諸有の衆生往いて寶を採る者、意に隨つて歸らんに、海水亦た、我諸寶を生じて衆生に給與す、と念ぜざるが如し。菩薩摩訶薩亦復た是の如く、苦しめる人を救濟して七寶を給施せんに―所謂七寶とは七覺意是なり―菩薩亦た是の念―我七覺意の寶を施して善根具足し、佛樹を莊嚴し、衆好自ら嚴飾す―を作さず。何を以ての故に、本と想念無ければなり。天子當に知るべし、猶ほ法界は諸法、大慈大悲、六度無極

【二】此註三本宮本に無し。

天子に告げたまはく、『若し善男子善女人有り、師を恭敬せんに、復た當に十無礙法を修習すべし。云何が十無礙法と爲す。一には十方に遊至し、諸佛に禮事す。是を族姓子一無礙と謂ふ。二には諸の智慧に於て縛無く脫無く、斷滅の法を念ず。二無礙なり。三には諸の苦樂に於て、心寂然として滅す。三無礙なり。四には空閑處に在つて思惟し、禪定意錯亂せず。四無礙なり。五には菩薩法は、本と七出要道にして增減有ること無し。五無礙なり。六には一切の色相、本と所有無く、來る處を見ず。六無礙なり。七には本と形無く、生滅有らずと計し、無常を解知す。七無礙なり。八には一心に入定し、道本と自然にして諸法に著せず。九には一意一行、法と相應して相ひ違背せず。十には亦た內に在らず、亦た外に在らず、自然に起滅す。十無礙なり。是の如く族姓子、若し善男子善女人、十無礙を分別思惟せば、便ち能く一切諸法を具足せん』と。佛、天子に告げたまはく、『若し善男子善女人有り、一心念の頃に盡く能く一切諸法を具足せんには、當に十法第一義辯を修すべし。云何が十と爲す。一には無生智、盡智、無生滅智なり。二には四等平均にして吾我の想無し。三には安を喜び自守して四信を失はず。四には言ふ所、意の如くにして本願に違はず。五には道心牢固として法法成就し、所行正見して本相に違はず。六には六重法を修し、本無の相を觀ず。七には怨讐一等にして是非有ること無し。八には一向信心もて、本所生を了す。九には諸法を講授して法想有らず。十には金剛定意、如性を毀らず。是を族姓子、若し善男子善女人、此の十法を具すれば、便ち能く一切諸法を具足すと謂ふ』と。

佛復た天子に告げたまはく『善男子善女人、十法施を修して亦た施想無くば、便ち能く一切諸法を具足せん。云何が十と爲す。一には樹王の下に坐して心移動せず。二には恒に閑居を樂しみて憒亂に處らず。三には三向定を修し、泥洹門に趣く。四には禪寂定意して自ら亂想を滅す。五には意を檢し、道を修して永く貪著なし。六には法施財施に想念を生ぜず。七には相好自ら嚴りて、世界を照曜す。八には（勤行）方便して覺者無からしむ。九には正法を顯曜して慧の光明を示す。十には人に代つて苦を受け、相報を求めず。是を天子、若し善男子善女人、此の十施を行じて、施〔世〕想を起さざれば、則ち能く一切諸法を具足すと謂ふ。何を以ての故に。此の善男子善女人、心金剛の如くにして沮壞すべからざればなり。菩薩所行の諸法、是の

亦た不起を見ず、諸法は得て自ら成就す可からず。故に無生と曰ふ。三世の諸佛は欲無く汚無く、亦た有生ならず、亦た無生ならず。故に所起無し。三昧の正受も亦た復た是の如く、說も說く所無し、故に言教無し』と。天子、佛に白して言さく、『四依四道は有生とせんや、無生とせんや』と。、佛天子に告げたまはく、『四位四道は本と生ずる所無し。況や今生有らんや、當來にも亦た生ぜざるなり』と。爾の時、天子、佛に白して言さく、『世尊、淨地・性地・薄地・本無地・無婬怒癡地は、有生とせんや、無生とせんや』と。佛、天子に告げたまはく、『有愛、有取、乃至一切諸法、色・痛・想・行・識・癡・愛・更樂・乃至生老病死、須陀洹より乃ち無上道に至るまで、亦た有生ならず、亦た無生ならず』と。爾の時、天子、佛に白して言さく、『世尊、云何が有生、云何が無生なる』と。佛、天子に告げたまはく、『如意度無極を得ん者は、是の故に有生を見ず、無生を見ず』と。天子佛に白さく、『云何が如意度無極、亦た有生ならず、亦た無生ならざる』と。佛、天子に告げたまはく、『此岸より彼岸に至り、衆生の有生なる者、有滅なる者を見ず、亦た窠窟處所を見ず。是の故に亦た生を見ず、亦た無生を見ず』と。天子、佛に白さく、『一切諸法及び如來身は、有生に在りとせんや、無生に在りとせんや』と。佛、天子に告げたまはく『亦た有生に在り、亦た無生に在り。亦た有生を見ず、亦た無生を見ず。是の故に三耶三佛も、亦た有生に在らず、亦た無生に在らず』と。佛、天子に告げたまはく、『若し善男子善女人、此の通慧定意を得て諸法を觀了せば、有生に在らず、無生に在らず。如來の經法も亦復た是の如く、有生に在らず、無生に在らず。何を以ての故に、諸法は著無く縛無く、亦た解脫無く、是の故に四魔を降伏すればなり』と。佛、復た天子に告げたまはく、『若し善男子善女人有り、智を成就せんものは、則ち能く一切諸法を具足し、復た當に十法を修すべし。云何が十と爲す。一には善知識に親近して朋友たらむことを求む、二には大慈悲を行じて廣く一切に及ぼす、三には前人を滿足せしむること意の所念に隨ふ、四には一切界を淨め、諸結を斷ぜしむ、五には淸淨道を修し、人の爲に重任す、六には衆苦を荷負し、彼の受を譏らず、七には愚人を教化して正要を訓誨す、八には愚惑を教誘して正道を信ぜしむ、九には法と相應して彼の受を譏らず、十には一心に法を奉じて邪部と共に相ひ參預せず。是を族姓子、若し善男子善女人、正法を修持して此の定意を得れば、便ち能く一切諸法を具足す、と謂ふ』と。爾の時、世尊、復た

過去已に滅して、權に現在に還り、現在未だ動かずして、復た未來を說く。衆法相違す。云何が過去の諸佛の數は恒沙の如く、當來の諸佛の數は恒沙の如く、現在の諸佛の數は恒沙の如しと言ふや』と。爾の時、世尊告げて曰はく、『善い哉善い哉、族姓子、今汝の問ふ所は、佛の威神を承けて、汝をして此の義を問ふを得しめたまへるなり。諦かに聽け、諦かに聽け、善く之を思念せよ。吾當に汝が與に一一に分別せん』と。天子敎を受く、『是の如し、世尊』と。佛、天子に告げたまはく、『過去は云何が過去と爲すや』と。天子、佛に白さく、『漸漸に〔新新に〕[一]生滅するが故に過去と曰ふ。昨色は今色に非ざるが故に過去と曰ひ、昨身は今身に非ざるが故に過去と曰ひ、昨力は今力に非ざるが故に過去と曰ふ』と。爾の時、世尊、復た天子に問ひたまはく、『云何が族姓子、身想と知と異ると爲すや。』と。天子、佛に白して言さく『不なり、世尊。』と。佛又た問ひたまはく『名色と更樂とは異とせんや』と。天子、佛に白して言さく、『不なり、世尊』と。佛又た問ひたまはく、『出要と至道とは異有りとせんや』と。對へて曰く、『不なり、世尊』と。佛、天子に告げたまはく、『止みね、止みね、族姓子、佛藏は廣大にして汝の境界に非ず。過去智限りあり、現在智限り有り、未來智限り有り。何を以ての故に。一切諸法、法相ひ生じ、法法相ひ滅し、本と法なるもの無し、過去當來今現在無く、亦た今世後世の善行惡行無く、亦た賢聖果證有る者無ければなり。是を族姓子、云何が三世の法有りと言ふや、と謂ふ』と。爾の時、天子復た佛に白して言さく、『三世の名號、云何がして生じ、何に由つてか滅する』と。佛、天子に告げたまはく、『生本と生無く、滅本と滅無し。一切諸法亦復た是の如し。生本と生無く、滅本と滅無し。何を以ての故に、性は自然に空なるが故なり』と。爾の時、天子復た佛に白して言さく、『世尊、今日、如來、生に在りとせんや、不生に在りとせんや』と。佛、天子に告げたまはく、『如來の身は過去未來現在に於て、亦た生に在らず、亦た無生に在らず。是の故に過去未來現在無し』と。天子、佛に白して言さく、『世尊、但だ如來至眞等正覺のみ過去未來現在に無生なりや、一切諸法盡く無生なりや』と。佛、天子に告げたまはく、『一切諸法皆悉く無生にして、亦た生を見ず、亦た無生を見す』と。天子、佛に白さく、『我、人、壽命、衆生の根本、六度無極に至らんに、有生とせんや、無生とせん。』と。佛、天子に告げたまはく、『起に起を見ず、

【一】三本宮本新々。

切衆生の音響を分別し、或は一音を以て百千萬音に報へて皆道教を演べ、普ねく一切衆生の類を潤ほす。是を三無相の法と謂ふ。復た次に天子、若し善男子善女人、無上の法輪を轉じて廣く衆生を化し、皆滅度を取つて三世に染せず、諸天人民、魔若しくは魔天の未だ曾て轉ぜざる所にして佛獨り轉ずる。是を四無相法と謂ふ。復た次に天子、若し善男子善女人、一生中に於て出家して道を學び、鬚髮を剃除して禁戒を受持し、身既に淸淨にして、亦た衆人をして其の樂しむ所を樂しましむる、是を五無相法と謂ふ。復た次に天子、若し善男子善女人、性行空に合し、空に從つて往來し、無量無限、終に自ら衆生を敎化するを爲さず、超卓して空を過ぎて、罣礙する所無き、是を六無相法と謂ふ。復た次に天子、若し善男子善女人、一切衆生に於て獨歩して礙無く、諸法智に於て通慧の義を演べ、坐して光明を放てば普ねく十方無量の世界に到り、或は滅度を取つて無常の義を現じ、或は存し、或は亡び、或は相好を示し、或は相好を隱し、中に於て無量の衆生を敎化し、佛國土を淨むる、是を七無相法と謂ふ。復た次に天子、若し善男子善女人、復た通慧有り、名けて降魔と曰ふ。此の定意を得れば、四魔―愛・欲・死・天魔を降伏し、菩薩をして此の法に依猗して成就を得しむ。法王と爲つて最も前に在らんと欲せば、先づ當に此の降魔定意を習すべし。是を八無相の法と謂ふ。復た次に天子、若し善男子善女人、遍ねく諸法を學び、深く至要に入り、善本を具足し、亦た無量の衆生をして此の要に入るを得しめ、菩薩力の止觀を增長するを見、已に無盡、無生滅法を盡し、相貌を見ると雖も、本と相貌無く、坐臥して菩薩衆行を思惟する、是を九無相の法と謂ふ。復た次に天子、若し善男子善女人、十善の本を具足せん。云何が十と爲す。身三、口四、意三、衆法自在にして染著せず、無量の無爲を樂む有り、復た能く無量百千の定意を樂しみ、一一の定意、無量の衆生を化する、是を十無相の法と謂ふ。是の如く天子、夫れ法を習ふ者は、當に無法を習ふべし。無行を行と爲し、無觀を觀と爲す、是を謂つて王衆行中の妙と爲す、一切諸佛の歎譽する所なり、佛事を行ずと爲し、等侶無しと爲す』と。

「爾の時、天子、復た佛に白して言さく『云何が世尊、三世の諸佛は則ち三世無く、世尊の所說の如く、過去の諸佛還つて現在に至り、現在の諸佛復た未來に至らば、法界定まらず。云何が世尊、三世有りと言ふや。此の義然らず。何を以ての故に、

に趣かしむる、是を無盡の行と謂ふ。

復た次に天子、菩薩、無量の諸佛の世界を分別し、佛國土を淨め、衆生を教化して智慧を毀らず、所念の法の如くして之を成就する、是を無盡の行と謂ふ。復た次に天子、菩薩、佛世尊所行の如く禁戒し、解脫法を修し、此の禁戒に因つて無量の衆生を教化し、盡く無上正眞の道を發さしむる、是を無盡の行と謂ふ。復た次に天子、菩薩、過去當來今現在の諸佛の出要を觀じ、樹王の下に在つて衆魔を降伏し、心を執ること地の如く傾動すべからず。是の時、弊魔波旬、若干の變化を作し、來つて佛を恐れしむ。或は人頭獸身、或は獸頭人身、或は四眼八眼より百千眼に至る、或は猿猴虎豹と作り、來つて佛を恐れしめんに、心を執ること地の如く傾動せられざる、是を無盡の行と謂ふ。復た次に天子、菩薩、億百千劫に於て强記總持して前に現在し、或は一生より百千生に至り、或は念一劫より百千劫に至り、其の中に行ずる所、或は善も、或は惡も、一一に分別して悉く忘失せざる、是を無盡の行と謂ふ。復た次に天子、菩薩.(復た)能く三世諸行を分別し、諸善功德盡く前に現在し、彈指の頃の如きに能く三千大千世界の蜎飛蠕動の類をして、盡く無上正眞の道を成ぜしめ、或は羅漢〔緣覺〕辟支の道を成ぜしむる、星を無盡の行と謂ふ。復た次に天子、菩薩摩訶薩、復た過去無數の諸佛所度の衆生の身口意行を憶ひ、諸法を壞せず、智慧を演佈して廣く一切に及ぼす。是を無盡の行と謂ふ。是の如く天子、衆薩摩訶薩 此の師子奮迅定意を得れば、則ち能く三世の諸法を具足す。復た次に天子、或は時に菩薩、十無相法を分別す。云何が十無相法を分別する。是に於て善男子善女人、內に自ら身を觀じ、諸行を分別して諸根純熟す。或は善行有り、或は不善行あり、或る時には淸淨、或る時には不淸淨なり。復た次に天子、若し善男子善女人、外に他人の身を觀じ、一一に諸根の純熟、諸根の不純熟を分別するに、或る時には淸淨、或る時には不淸淨なる、是を天子、一無相行と謂ふ。復た次に天子、若し彼の行人、內に自ら思惟し、意を攝つて亂れず、我が所行の如く聖典に違はず、時に諸の如來至眞等正覺、出入經行、身口意と相應し、法寶を懷來して大法輪を轉じ、無生心を以て三世未度の衆生を教化し、中に於て便ち自然法輪を獲、無限無量にして悉く法律に入る、是を二無相法と謂ふ。復た次に天子、若し善男子善女人、弘誓心を發して、遍ねく三千大千世界に滿たし、智慧思惟亦た窮盡なく、音響流利、障礙する所無く、一

し。汝の居る所の天、前過去は記すべきや不や』と。答へて曰く、『不なり、世尊。過去の諸天の、其の號、名字、稱記すべからず』と。『云何が天子、汝今、此の身を有常と爲すや無常と爲すや』と。天子報へて曰く、『我が今の身の如きは、是れ有常法にして、無情法に非ず』と。佛復た天子に告げたまはく、『設し汝が今の身、是れ有常法ならば、過去の諸天は今所在すと爲すや。』と。答へて曰く『磨滅せり』と。佛言はく『云何が天子、過去の諸天悉く皆磨滅せるに、汝今、此の身のみ焉んぞ存在するを得んや』と。天子報へて言く、『過去の諸佛皆、滅度を取れるに、今日世尊、何に由つてか生ずる』と。佛、天子に告げたまはく、『過去の諸佛と、及び我が今の身と、同じとせんや不や』と。天子答へて曰く『不なり。何を以ての故に、過去の諸佛は、過去中に於て是れ過去の現なり。云何が過去の諸佛、皆悉く滅度すと言ふ』と。天子又た問ふ、『三世有りとせんや、三世無しと爲んや』と。佛、天子に報へたまはく、『三世の名は有り。然れども三世の行は異る』と。天子又た問ふ、『如來今、過去佛有りと說きたまへり。我は則ち疑はず。復た十方現在諸佛を說きたまへり。我亦た疑はず。云何が世尊、未來〔世〕佛有りと說きたまふや』と。世尊報へて曰はく、『汝今、我に問ふは、過去の三世を問ふと爲んや、現在の三世を問ふと爲んや、未來の三世を問ふと爲んや』と。天子佛に白さく、『我亦た過去の三世、現在の三世、未來の三世を問はず。今日但だ三世の諸佛を問ふ。云何が未來に說いて佛と言ふや』と。佛、天子に告げたまはく、『未來佛に二因緣有り。云何が二と爲す。或は過去の諸佛如來至眞等正覺有り、大慈悲を行じて衆相具足し、善權方便を行じて五道中に入り、衆生を教化して法界を壞せず、復た現に俗に在り、或は梵天と爲り、或は釋身を現じて佛の形像を隱す。是を菩薩摩訶薩、未來に成佛すと謂ふ。或は菩薩有り、如來慧を受け、佛事を施行し、三千大千の佛土に遊至し、諸佛世尊に供養承事し、旣に未だ成佛せず、衆相未だ具せず、或は天身と作り、或は鬼神と作り、法界を毀らず、是を天子、未來に成佛すと謂ふ。此の因緣有り。復た次に天子、過去の諸佛世尊に、復た二因緣有り。云何が二と爲す。師子奮迅三昧を得、閑靜處に在りて心に所著なく、內に自ら十法無量の功德を思惟す。云何が十種と爲す。是の菩薩、諸佛世尊の念所念の法を修する、是を無盡の行と謂ふ。復た次に天子、菩薩摩訶薩、如來の一切諸法を分別する、是を無盡の行と謂ふ。復た次に天子、菩薩、衆生を教化して盡く無上正眞の道

有轉、無轉なる』と。佛言はく、『一切世間、然熾の法を見る、是を無轉と謂ひ、一切世間、然熾の法を見ざる、是を有轉と謂ふ』と。文殊師利又た問ふ、『云何が、有轉、無轉なる』と。佛言はく、『淨き無量の福もて衆生を福祐する、是を無轉と謂ひ、淨き無量の福を見ずして衆生を福祐する、是を有轉と謂ふ』と。文殊師利又た問ふ、『云何が、有轉、無轉なる』と。佛言はく『無量の衆生の根本を淨め、一切智を成ずるは、是を無轉と謂ひ、一切無量の衆生を淨むるを見ざる、是を有轉と謂ふ』と。文殊師利又た問ふ、『云何が、有轉、無轉なる』と。佛言はく、『亦た有轉ならず、亦た無轉ならず、故に有轉、無轉と謂ふ』と。爾の時、世尊、文殊師利の與に有轉無轉を說きたまふ時、八千の比丘、三千の比丘尼有り、本末空慧、心不退轉を得るに逮び、復た無數の衆生有り、此の未曾有の法を聞いて、皆、無上正眞道意を發し、將來世に於て悉く皆、成佛して名號を同一にし、精進勇猛、我と異る無し。

淨居天品第三十八

爾の時、世尊、文殊師利の與に此の聞法轉不轉品を說きたまへる時、時に淨居天子有り、乃ち過去無量の諸佛に從つて、諸の功德を植え、諸佛世尊に承事供養し、一佛國より一佛國に至り、法藏に通盡し辯才無礙に、大慈悲を行じて空法性を得、權現して生天し、天を度せんと欲するが故に、卽ち坐より起ち、衣服を整頓し、及び諸將從儼然として起立す。時に彼の天子、前んで佛所に至り、頭面に佛足を禮して、佛に白して言さく、『世尊、我等諸天は功福を宿種して、今、天に生るゝことを得、五樂もて自ら娛しみ、左右の侍從自然に響應す。浴池に遊戲すれば快樂量り難し。何の福を修してか、天上に生るゝを得たると爲す。我が居る所の宮は、四十九由延、七寶の殿堂は世と奇妙なり、後に浴池有り、七寶の樹有りて七重に圍遶す。何の福を修してか乃ち此の德を獲たると爲す』と。爾の時、世尊、淨居天子に告げて曰はく、『善い哉善い哉、天子、乃ち能く如來の前に於て此の義を問へる。今當に汝が與に一一に分別せん。善く之を思念せよ。過去恒沙の諸佛世尊も、亦た此の義を說けり。現在未來の一切の諸佛も、亦た當に此の微妙の法を說くべし。云何が天子、我今、汝に問はん、汝當に一一に我に報ふべ

巻の第十三

聞法品第三十七

爾の時、菩薩有り、文殊師利と名く。卽ち坐より起ち、威儀を攝持し、前んで佛所に至り、長跪叉手して佛に白して言さく、『云何が世尊、名けて、法を聞いて無上正眞の道を成ずるを得、と曰ふも、聞は空等の如し、空にして聞く所無く、亦た善惡の諸法に、相貌なし、法は形相無し。云何が世尊、本末空の慧を受持諷誦すと言ふ』と。爾の時、世尊、默然として對へたまはず。時に、文殊師利復た更に佛に白さく、『夫れ聞法は、言教有つて乃ち法を聞くことを得と爲すや、言教無くして乃ち法を聞くことを得と爲すや』と。爾の時、世尊、默然として對へたまはず。文殊師利三たび佛に白して言さく、『法は生滅有りや、法は生滅無きや。一切諸佛の所轉の法輪は、有轉と爲すや、無轉と爲すや』と。爾の時、世尊、文殊師利に告げたまはく、『云何が族姓子、一切の諸佛、皆、法輪を轉じ、亦た有轉、亦た無轉なり。汝の今問ふ所は、有轉を問ふと爲すや、無轉を問ふと爲すや』と。時に文殊師利、佛に白して言さく、『世尊、今問ふ所は、亦た有轉を問ひ、亦た無轉を問ふなり』と。佛言はく、『族姓子、諸佛の正法は、亦た有轉ならず、亦た無轉なら』と。文殊師利復た問ふ、『云何が、亦た有轉ならず、亦た無轉ならざる』と。佛言はく、『諸法は空の如し、故に有轉無く、故に無轉無し』と。文殊師利又た問ふ、『今日如來、有轉と爲すや、無轉と爲すや。此の諸の菩薩衆〔生〕は、法を聞くとせんや、法を聞かざるや』と。佛言はく、『族姓子、諸法は清淨なり。衆會の菩薩も亦復た清淨なり。是を以ての故に、亦た有轉ならず、亦た無轉ならず』と。文殊師利又た問ふ、『云何が、有轉、無轉なる』と。佛、文殊師利に告げたまはく『衆生は無轉なり、本末空慧は乃ち謂つて轉と爲す。一切衆會、我身及び汝は皆、無轉と謂ひ、本末空慧は乃ち謂つて轉と爲す』と。文殊師利又た問ふ、『云何が有轉、云何が無轉なる』と。佛言はく、『有斷は無轉、無斷は有轉、生滅は無轉、無生滅は乃ち有轉と謂ふ』と。文殊師利又た問ふ、『云何が、有轉、無轉なる』と。佛言はく、『有邊際の縛著は乃ち無轉と謂ひ、無邊際の縛著は是を有轉と謂ふ』と。文殊師利又た問ふ、『云何が、

まで、盡く能く此の衆行を了知せば、便ち名けて菩薩と爲し、如來處に補す。』と。爾の時、世尊復た衆首瓔珞菩薩の與に頌を說いて曰はく、

十方に法界の、　衆生に路を示現するを聞く、　諸佛事を修行するは、　人中の菩薩尊なり。」　「衆に在つて道を成就し遍ねく菩薩の行を知り、　一切の行を超越し、　十力、礙有ること無し。」　諸佛常に擁護し、　面たり見るに前に在りて、　其の功德を稱揚し、　法、上有ること無しと歎ず。

辯才の無礙を示現せん。當來過去現在の諸佛所演の教、皆悉く具足し、變化方無く、諸法成就して、各錯亂すること無く、能く一切衆生の心垢を淨め、便ち解脫無礙の法慧を得ん。十方の諸佛、皆來つて此の善男子善女人を擁護し、諸法を成就し、十力具足して悉く所畏無からん。菩薩是の如く衆生心識の所念を分別し、一一に選擇して終に之を捨てず、一切人を立して、本末空慧を獲しめ、無量無限の十方の世界に、道教——種種の方面皆離別有り、十方世界皆合會有り。——を安處せん。復た十方無量の世界に於て、如來至眞等正覺、衆智瓔珞して前に現在す。復た無量の刹土に於て、一一の諸佛の名號姓字、皆悉く分別すること、一方面の如し。無量の諸佛世界に、無量の諸佛の姓字を分別す、十方境界の諸佛の姓字も、亦復た是の如し。菩薩摩訶薩、復た十方無量の世界をして、或は舒び、或は縮ましむ。十方世界の已に舒び、已に縮むが如く、復た無量無限恒沙の刹土をして、智慧力を以て或は舒び、或は縮ましむ。一一の名號、復た無量無限に於て如來の面を見て、復た慧力を以て或は舒び、或は縮ましむ。是の如く無量無限恒沙の諸佛刹土、諸佛の名號を分別して皆悉く分別す。是の如く十方諸佛の法界、名號を分別す。然るに諸佛世尊皆來つて、此の菩薩を擁護して、成就するを得しむ。菩薩摩訶薩、此の大乘の意を得て本末空定に入り、菩薩の威儀法則を失はず、遍ねく能く衆生の根本を觀察し、復た能く諸佛の心識所念を知る。彼の菩薩は當に名けて菩薩と爲すべからず、當に如來と名くべし。何を以ての故に、一切法を解して衆行を超越し、一切法に於て狐疑を懷かず、行、如來に等しく、一切の如來の正法を得、或は一生を知り、百千生を知り、阿僧祇を知り、無量の佛法を受持諷誦し、佛道を成就して亦た忘失せず、一切智に入りて吾我を見ず、諸佛の法を覺知し、總持强記して亦た忘失せざればなり。彼の菩薩、一切法を觀じて爲に光明を現じ、智慧光を以て愚癡冥を照して、智退轉せず、彼の菩薩摩訶薩、善權方便を以て衆生を教化して、罣礙有ること無し。彼の菩薩已に無量の法を得、耳根淸淨にして無盡の法を聞く。自然の應化、信じて而も從はず。彼の菩薩摩訶薩、無量無限、衆生をして、身變化して一に非ざらしめ、或は無央數の色の、還た合して一と爲るを現じ、復た無色より無數色に至り、衆生の類をして信解せざること莫からしめ、廣長舌を出して普ねく三千大千世界を覆ひ、復た還して一と爲す。是の如くして無央數の衆を教化す。』と。佛、衆首瓔珞菩薩に告げたまはく、『若し菩薩摩訶薩有り、十方世界の虛空邊際

は復た自ら念ずらく――我、寀然として疑はず、と。復た僞化を爲せる菩薩、此の菩薩を壞敗せんとして言はく、「汝今已に本末空慧を得たり」と。此の菩薩聞き已つて歡喜踊躍し、我今、神德菩薩所見の證明を聞くに、今當に無上正眞の道を得べし。と。斯れ則ち久しからずして、便ち六住に於て退轉し、乃ち聲聞辟支佛道に墮せん』と。佛復た衆首瓔珞菩薩に告げて曰はく、『若しくは善男子、若しくは善女人、已に六地に在り、菩薩行を具足し、復た自ら思惟すらく、「我今、寀然として八住地に在り、當に無上正眞の道を成ずべきこと亦た復た久しからず。」と、親近の善知識方便して爲に八住行法を說く。「善男子知るや不や、汝今已に八住地中に在り。自ら貢高し、餘の菩薩を輕んずること莫くば、是の如き善男子、當に無上正眞の道を成ずべきこと、亦復た久しからざらん。」と。菩薩之を聞いて歡喜踊躍し、自ら勝ふる能はず。便ち善男子の教に隨つて、閑靜の處に在つて一心に自ら念ずること是の如し。彼の菩薩は卽ち八住行中に在つて不退轉に立ち、佛事を施爲し、劫數を經歷して成佛せんこと久しからざらん。』と。佛復た衆首瓔珞菩薩に告げて曰はく、『若し善男子善女人有り、菩薩道を行じ、復た異菩薩の爲に勸勉せらる――汝今、成佛して衆生を教化せんこと、亦復た久しからざらん、と。菩薩自ら念ずらく、我に此の行無し、云何が當に無上正眞の道を成ずべき。將た此の人、我をして究竟を成ぜざらしむるに非ずと。心を執ること牢固として、便ち進前するを得、七住地に在つて不退轉を得る、是を菩薩摩訶薩、六住中に在つて退不退有りと謂ふ。』と。爾の時、衆首瓔珞菩薩問ふ、『云何が八住の菩薩卽ち成佛を得んに、胞胎を經ざること是れ有りや無きや。』と。佛言はく、『之れ有り、八住の菩薩、一切法は空の如く幻の如く、空寂無行なり、所行の法則も亦復た空の如し、衆生を度せんと欲するも亦た衆生想無し、十方の諸佛世界に往詣して、無量の法教を聽受せんに、一切諸佛は本と身想無し。亦た當に內外の無形なるを分別すべし。遍ねく諸佛に一切諸法を問うて、厭倦有ること無し、復た當に一切衆生を教授すべく、是を捨て是に就きて深く禪定に入り、坐すべくして坐するを知臥すべくして臥すを知り、若しは衆生を化するに時節を失はず、爲に深法を說いて、衆生の類をして盡く度脫するを得しむ。是の如く菩薩摩訶薩、此の如き行を具せん時、便ち佛の三昧を得、衆生を教化し、佛國土を淨めん。已に國土を淨めて、便ち菩薩の正要に入らん。已に正要に入りて、便ち能く一切の總持法門を出生せん。已に法門を具すれば、則ち能く

地に著け、長跪叉手して前んで佛に白して言さく、『唯だ然り世尊、居る所の方界此を去ること極めて遠し。願はくは問ふ所あらんと欲す。若し聽さるれば、敢へて啓す所有らん。』と。佛、衆首瓔珞菩薩に告げたまはく、『善い哉善い哉、族姓子、衆の導首と爲りて、曨矇を發開し、大法幢を竪て、慧の光明を演ずること。疑結〔問〕する所有らば、今、正に是れ時なり。如來當に爲に一一に分別し、問ひに隨つて還つて報へ、開辯するを得しむべし。』と。爾の時、衆首瓔珞菩薩即ち佛に白して言さく、『世尊、頗し一生補處の菩薩有り、更に進んで無上正眞の道を修せずして、成佛するを得んや不や。頗し一住の根德力を立つる菩薩大士、乃至八地の菩薩大士、更に進んで無上正眞の道を修せずして、頗し諸天有り、衆行具足し、不退轉に立ち、諸根具足し、復た人身ならざるに、成佛するを得んや不や。唯だ然り世尊、當に方便を以て之を發遣したまふべし。』と。爾の時、世尊、衆首瓔珞菩薩に告げて曰はく、『善い哉善い哉、族姓子、乃ち能く如來の前に於て師子吼を作すこと。諦らかに聽き、諦らかに聽き、善く之を思念せよ。初發意より乃ち成佛に至つて、菩薩所行の諸法は同じからず。或は菩薩摩訶薩有り、彈指の頃に菩薩心を求め、卽ち無上正眞の道を成じて、日夜を經ず。或は菩薩有り、初發意より弘誓を捨てず、乃ち六住に至り、進んで佛道を求めんに、便ち退轉有りて成就せず、或は菩薩有り、初發意より乃ち七住に至り、進趣して成佛し、八地を經ず。』と。爾の時、衆首瓔珞菩薩問ふ、『云何が菩薩摩訶薩、彈指の頃に菩薩心を發し、卽ち佛道を成じて、日夜を經ざる。云何が菩薩初發意より乃ち六地に至るも、退轉する者有りて成就せざる。云何が菩薩乃ち七住に至り、進趣して成佛して、八地を經ざる』と。爾の時、世尊、衆首瓔珞菩薩に告げて曰はく、『若し菩薩摩訶薩有り、彈指の頃に菩薩道を求め、日夜を經ずして而も成佛すとは、此の善男子善女人は、諸根具足し、未だ曾て生死の難を經歷せず。或は何れかの會により一旦天を修して、此の間に來生す。或は無怒佛土より此の間に來生す。或は無量佛土より、一たび如來の本末空無生滅道を說きたまふを聞いて、便ち無上正眞の道を成ず。或は菩薩摩訶薩有り、衆行具足し、如來の明慧法觀を得、復た如來の念佛・念法・念比丘僧・念天・念安般・念死亡・念修四意止・四意斷・四神足・五根・五力・七覺意・八(賢)聖道を修し、善知識に親み、婬怒癡に於て大いに慇懃ならず、善本を增益し、亦た衆生をして善根を具足せしめ、六地に在りと雖も心に猶豫を生ず――咄、我將に七佛の菩薩に非ざらんとするや。と。或

――と一一に已法の趣く所を分別せんに、當に何の法を轉じ、云何が敎化すべき。爾の時、菩薩復た自ら思惟すらく――我本と發願して諸善を具足し、遍ねく衆生を化して我が願を充足せり。――と。復た自ら威儀禮節を具足し、三世根本の行に轉入し、自ら法を轉じて不思議に入らんことを念じ、是の如く挍計して、度不度、一切世界の或は有、或は無に應じ、復た更に諸佛世界に周旋すること無限無量不可思議にして、與に共に周旋して功德業を立て、正法を斷ぜず、所趣を要誓して、大慈悲を行じ、弘誓心を執し、生死を究盡して心、缺減すること無し。何を以ての故に、一切衆智(皆)悉く具足するが故なり。復た衆生の心意所念を觀じ、應に何れの路に由つて而て將導するを得べきかと、恒に衆生を念ずること、母の子を愛するが如し。是の故に菩薩摩訶薩、此の懃苦無量の心を執る。復た無量無限三昧に入り、世界を觀察して本誓、是の如き廣大無限の用を捨てず。』と。爾の時、世尊、釋提桓因の與に頌を說いて曰はく、

菩薩初めて發心してより、　弘誓甚だ廣大なり、　要ず虛空際を盡して、　所願乃ち具足す。」　衆生を度せんとする時に當つて、　度する所有るを見ず、　三世の本を解知して、　因緣久しく[二]停まらず。」　心正しく動傾せず、　[三]正念にして道敎に應じ、　恒に善方便を求め、　次を以て解脫に至る。」　心に怯弱を懷かず、　晝夜に法を思惟し、　一行にして成佛するを得、　亦た師より受けず。」　[三]身は心に本づきて各行じ、　道力もて淸淨を知り、　出家して空野に在り、　入定して身、動ぜず。」　然熾する一切法、　普ねく十方界を照し、　自ら宿命智を修して、　乃ち衆生の根を知る。」

[四]本(末)行品第三十六

爾の時、世尊、釋提桓因の與に此の法を說きたまふ時、一切衆會、欣然たらさるは莫く、皆、無上正眞道意を發せり。

爾の時、天子有り、衆首瓔珞と名く。卽ち座より起ち、偏へに右臂を露はし、衣服を齊整し、諸根寂靜たり。先佛より已來、常に梵行を修し、三處已に盡き、果願已に辦ず。右膝を

[二] 麗本宮、三本は停。
[三] 麗本正本、元明二本正念。
[三] 身本心各行。三本宮本には各を爲とす。
[四] 三本宮本は本末。

爾の時、世尊、釋提桓因の與に此の偈を說きたまへる時、無數百千の諸天人民、卽ち坐上に於て無生忍を得、復た無數の諸天龍神有り、皆、無上正眞道意を發せり。佛復た釋提桓因に告げたまはく、『若し善男子善女人及び四部衆――比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷有り、此の如幻定意無盡の法を受持諷誦せば、便ち能く無量の法藏を具足せん。云何が無量の法藏たる。如來の辯才を具足せんと欲せば、當に此の如幻定意無盡の法藏を學すべし。復た次に拘翼、若し善男子善女人、究竟して佛慧を覺知せんと欲せば、當に此の如幻定意無盡三昧を學すべし。復た次に拘翼、若し善男子善女人、諸佛の世界に遊至して佛に親近することを得んと欲せば、當に此の如幻定意無盡三昧を學すべし。』と。佛復た釋提桓因に告げたまはく、『若し善男子善女人有り、無上の法輪を轉じて、佛の轉じたまふ所の如く、大衆中に在つて而も畏るること無きを得んと欲せば、當に此の如幻定意無盡の法藏を學すべし。復た次に拘翼、若し善男子善女人、諸佛の百千の總持を得て自ら娛樂せんと欲せば、當に此の如幻定意無盡の法藏を學すべし。』と。佛復た釋提桓因に告げたまはく、『若し善男子善女人、一切衆生の願を得、佛國土を淨め、神足變化を得んと欲せば、當に此の如幻定意無盡の法藏を學すべし。復た次に拘翼、若し善男子善女人、諸佛世界の無量の衆生をして、無量の性行を盡く一趣に同じからしめんと欲せば、當に此の如幻定意無量〔盡〕の法藏を學すべし。復た次に拘翼、若し善男子善女人、無量の世界の諸佛刹土を合して一者と爲し、色、黃金の如くならしめんと欲せば、當に此の如幻定意無盡の法藏を學すべし。何を以ての故に。一切諸佛皆此によつて生じ、過去の諸佛皆此の如幻定意によつて無上正眞の道を成ずるを得、現在の十方の諸佛世尊も亦た此の如幻定意無盡の法藏によつて無上正眞の道を成ずるを得、當來の無數恒沙の諸佛も亦た當に此の如幻定意無盡の法門を習ふべければなり。』と。佛復た釋提桓因に告げたまはく、『我今、汝が與に譬を引かん。智者は喩を以て自ら解す。猶ほ猛火の光焰赫熾なるに、復た更に薪を益し、大風に吹かれて遂に復た熾盛にして、山野を燒焚して休息有ること無きも、要ず草木盡くれば火勢は乃ち滅〔滅〕せんが如し。菩薩摩訶薩も亦復た是の亦復た是の如く、發心して學を起し、衆生を濟度せんとし、法界の趣く所、乃至は無數恒沙の刹土を分別思惟し、復た虛空衆生の根源を觀じ、復た自ら恒沙刹土、無數世界の衆生の心意に念ずる所の根原を思惟し、一一に分別し、復た自ら計挍すらく――吾れ何の智を以て彼の願を具足せん

ち諸の龍王等をして獻奉供養せしむるのみ。』と。佛復た釋提桓因に問ひたまはく、『云何が拘翼、七寶の宮殿衣被服飾は皆、龍の降す所にして本と所有無し。今復た自ら諸天の福德の故に、諸龍をして諸寶を降雨ぜしむと說く。諸龍及び寶物は有りと爲すや無しと爲すや。』と。釋提桓因、佛に白して言さく、『世尊、義說法說すれば、亦た龍有らず、亦た寶物無し。何を以ての故に、一切萬物は皆空、皆寂なり、我身及び天も亦た所有無く、龍の降らす所の雨も亦た雨有ること無く、亦た盡を見ず、亦た不盡を見ず、愚惑の人自ら識想を生ずるのみ。』と。佛、釋提桓因に告げたまはく『是の如し拘翼、菩薩摩訶薩、如幻三昧に入りて盡く一切諸法を觀ぜんに、諸法生ずる所にも亦た生を見ず、亦た不生を見ず、諸の法門の有盡無盡を見、幻化法門の有盡無盡を見、復た無量無限の敎化法門を見、復た無量無限の諸佛世尊の遊步法門を見、復た無量無限の諸根羅網を見、法門に入るを見、復た無量無限の諸物世界の成敗劫燒、心意廣大にして諸佛所行の法門を超越するを見る。是の如く拘翼、當に諸法の生無く滅無きを知るべし。但だ衆生自ら識著を生ずるを以て、未だ定意に入りて人心を觀察せず、空慧を解して無生を獲ざるのみ。』と。爾の時、世尊、天帝釋の與に頌を說いて曰はく、

出要して道門に入り、　三世の行を分別し、　展轉して五道に由るも、　有を破して有に處らず。」　菩薩は如實に觀じ、　慧明の道を分別し、　本と我が造りし所の行如今乃ち剋獲す。」　世界は皆な空の如く、　彼我、二想無く、　諸佛を恭敬して　今、無頂相を獲、　顏貌は優曇の如く、　廣長にして面門を覆ひ、　生ぜず亦た滅せず、　[九]德、天人の尊と爲る。」　拘翼當に本を念じ、　衆行缺漏せず、　勇猛にして懈怠せず、　本末空を究竟すべし。　坐[一〇]〔住〕に於て想を起さず、　趾〔峙〕立有るを見ず、　衆行の本に猗らず、　故に號して沙門と爲す。」　實は泥洹有ること無く、　亦た五道趣無し、　菩薩所遊の處は、　權化して生有るを見る。」　無央數劫より、　欲無く、　貪る所無く、　初めより悔心有ること無し、　況や當に猗著有るべき。」　是より已來、　修善して本を離れず、　一行に佛道を成じて　無上法を轉ずることを得、　生死の中に猗託して　無數の人を敎化し、　無生の法を知らしめ、　自然に道敎に應ず。」

【九】元明二本は得。
【一〇】宋宮二本は住及び時。

臥具を供給せん、受者は實に受け、施者は實に施すも、卿の如きは之を觀て實有と爲すや不や。』と。是の時釋提桓因、佛に白して言さく、『無なり世尊、何を以ての故に、一切諸法は皆空、皆寂、幻化にして眞に非ざればなり。愚者は染〔深〕著して便ち顚倒を致す。來無く去無く、著無く、縛無く、盡無く、不盡無し、幻化無形亦た猗るべからず。』と。佛、釋提桓因に告げたまはく、『是の如し是の如し、拘翼、菩薩摩訶薩も亦た復た是の如し。如幻三昧を得て自然に定意せんに、一切諸法の所起を分別し、緣無く著無く成敗を見ず、一切衆生の類を化導して度有るを見ず、度無きを見ず、度も度する所無く化も化する所無く、皆空・皆寂にして復た生滅無し。何を以ての故に、如幻定意正受三昧は、甚深微妙にして邊崖有ること無く、如幻境界は不可思議なればなり。唯だ菩薩摩訶薩有り、遍ねく能く觀察して乃ち達了することを得て、亦た生を見ず亦た滅を見ず、亦復た當に生ずる者有るべきを見ず、亦復た已に生ぜる者有るを見ず。何を以ての故に、菩薩の入る所は、不可思議にして、是れ羅漢辟支の知る所に非ず、菩薩の度する所は猶ほ虛空の如し。虛空の度する所は形無く像無く、如幻三昧も亦復た是の如く、亦た東西南北四維上下無ければなり。拘翼當に知るべし、今當に汝が與に喩を引かん。[八]猶凡夫の本と形色無く、未だ能く禪定の根本を分別せざるが如し。生ずるも亦た生を知らず、不生も亦不生を知らず、亦復た當生已生を知らず、未だ能く心所念の法を究竟せず、亦た住を見ず、亦た不住を見ず、亦た盡を見ず、亦た不盡を見ず。何を以ての故に、心本と無形にして猗著すべからず、亦た三乘の能く思議する所に非ざればなり。拘翼當に知るべし。菩薩摩訶薩、亦た復た是の如く、此の如幻三昧に入れば、一切諸法は皆前に現在し、邊際有ること無く、亦た境界無く、有も亦た有を見ず、無も亦た無を見ず。何を以ての故に、菩薩の境界は、不可思議にして、所行の法則三千大千世界に遍滿すればなり。拘翼當に知るべし、今當に汝が與に喩を引かん。猶ほ娑竭龍王意欲して雨を念ぜんに、若し六天に在れば便ち甘露を雨らし、若し四天王上に在れば能く七寶を雨らし、難陀優鉢難陀龍王及び摩那斯龍王の、六天上より雨らすには便ち衣服飾香瓔華鬘を雨らし、若し第四天上より雨らすには、自然の飮食を以て各を充足せしめんが如し。云何が拘翼、此の龍の作す所は實有と爲すや不や。』と。爾の時、釋提桓因、佛に白して言さく、『無なり世尊、何を以ての故に、但だ彼の諸天の功德より、乃

〔八〕猶如夫本無形色、未能分別禪定根本。この譬には脫文あるべし。意義通ぜず。

周旋して、諸の衆生をして皆悉く具足せしめ、佛道を成就し、諸定を分別し、善權方便を行じて諸佛所行悉く其の量に過ぎ、衆生の心に念ずる所の善惡に從ひ、皆能く分別して類に隨つて化し、無央數億千萬劫より、一心に入定して、正法を毀らず、他の異想無からん。』と。

爾の時、世尊復た邠耨文陀尼子の與に頌を說いて曰はく、

吾昔佛道を求め、　未だ菩薩別を受けず、　億百千を經歷して、　禪定移動せず、　究竟一切法に、　染著の想を生ぜず、　是に從つて作佛を得、　人中の尊たるを得たり。「〔七〕經本此れより巳下七偈を少く。」本に順じて之を記す。譯人の語なり。」

一切諸法は不可思議なり、衆生の境界も亦た復た是の如し。若し復た善男子善女人、無形三昧に入り、遍ねく三千大千世界を觀じて、應度の衆生も、亦た當に覺知すべく、無限無量の不應度者も亦た當に覺知すべく、三世の起滅も亦た當に覺知すべし。是の如く、邠耨文陀尼子、菩薩摩訶薩、此の定意を得れば、不清淨行を清淨にす。』と。

釋提桓因問品第三十五

爾の時、釋提桓因、佛に白して言さく『世尊、如來至眞等正覺は、一切諸法皆清淨ならしめ、及び諸の無量恒沙佛土諸佛世界、清淨なること空の如く、皆、所有無しと說きたまひ、今復た盡く當に一切諸法を覺知すべしと說きたまふを聞く。云何が諸法の中に於て無形にして見る可からずして、而も一切諸法を覺知せんと欲するや。』と。爾の時、世尊、釋提桓因に告げたまはく『善い哉善い哉、拘翼、乃ち能く如來の前に於て斯の義を問へること。今當に汝が與に一一に譬を引かん。智者は譬喩を以て自ら解す。猶ほ幻師の萬物・國土・城郭・宮殿・屋室・飲食・床臥・貧賤・富貴・名號姓字・父母兄弟・僕從給使を化作し、復た人の左右の衞從を幻作するが如し。此の如き幻師の見する所の化法、或は劫數を經て、須ふる所の衣被・飲食・醫藥・床「榻」、

【七】此十七字は麗本にあり。宋宮二本には此註なし。元本には、譯經人云、經本從此已下少七偈、順本記之」とあり。明本には、譯經人云、從此已下、少七偈とあり。

我は菩薩の神通智を成ず、某は神通智を成ぜず、我は菩薩の境界に入る、某は境界に入らず、我は衆行の本を過ぐ、某は衆行の本を過ぎず、我は菩薩の律を修す、某は菩薩の律を修せず、我は菩薩の刹を淨む、彼は刹を淨めず、と。是の如く邠耨文陀尼子、菩薩摩訶薩は初めより此の念――諸法に高有り下有りと分別する――無し。何を以ての故に、菩薩此の定意正受三昧を得れば、神足もて自ら意の所念に隨つて遊び、諸法に於て增減の心有らざればなり。若し善男子善女人有り、此の定意を得ん者は、衆生を周旋敎化し、佛國土を淨め、一佛國より一佛國に至り、諸佛世尊に禮事恭敬し、復た善權方便を以て與に善知識と作り、微に道教を說いて無爲道に至り、亦た衆生をして立信堅固ならしめ、相視ること父の如く母の如く兄の如く弟の如く、各異心無からしめ、展轉して共に相教授し、意の所念に隨つて盡く道果を成ぜん。是を菩薩摩訶薩、此の定意に入れば、便ち能く一切諸法を具足す、と謂ふ。』と。爾の時、世尊、邠耨文陀尼子の與に頌を說いて曰はく。

「一切諸法の本は、　歸する所の門同じからず、　各各境界異る、　所行の法も亦た然なり。」　我れ清淨の道を說けり、　衆行は盡くべからず、　今、粗、卿の與に　[四]淨と不淨の行を說けり。」　諸佛は量るべからず、　言教亦た盡くること無し、　今、粗、正要を說き、　諸道の果を分別せり。」　諸佛の義は廣大なれども、　空慧は異有るに非ず、　彼此具に成就して、　悉く解脫門に歸す。」　衆智の根門淨きは、　諸佛の[五]嘉歎したまふ所、　念を斷ち衆想を除けば、　衆智說を具足す。」　諸佛所演の教は、　恩愛の患を知らしめたまふ、　有を忘れ、　有に處らず故に人中の尊を得。」　佛本と宿行を積みて　自ら無上尊を致し、　菩薩法を具足して大乘の業を演布したまふ。」　衆智前に現在し、　盡く衆生の源を知り、　無生滅を分別し、[六]（竟に無上道を究めたまふ。）

是の時、世尊復た邠耨文陀尼子に告げたまはく、『若し菩薩摩訶薩有り、便ち諸の度無極を具足することを得ば、法界微妙の行を分別し、智慧增益して道訓を演布し、皆、周遍して四無畏を得しめ、衆智自在にして復た出要を得、不度者を度し、心に諸法を念ずれば皆前に現在し、禪智滿足し、念識を食と爲し、法界を身と爲し、總持を行と爲し、恒常に諸の佛國土を

【四】麗本は淨其不淨行。元明二本は其字を與に作る。今之に從ふ。
【五】嘉、麗本は加、元明二本は嘉。
【六】麗本に此一句なし、元明二本によつて之を加ふ。

身に度知見有るを見るは、是を不淨と謂ふ。當來過去現在の諸佛、去も亦た無數、來も亦た無盡にして、所說の道敎に各々參差無きは、是を謂つて淨と爲し、若し復た三世諸佛の言敎の增減を宣說するは、是を不淨と謂ふ。諸法は形無く亦た色像無きは、是を謂つて淨と爲し、復た諸法を以て色像を造れば、是を不淨と謂ふ。諸法は覩見す可からず、寂然として虛空なるは、是を謂つて淨と爲し、若し復た諸法の見るべきを宣說するは、是を不淨と謂ふ。諸法無量にして相、違背せざるは、是を謂つて淨と爲し、諸法に量有り、數有りと見る有れば、是を不淨と謂ふ。諸法には境無く、亦た刹土無く、衆生を敎化し、佛國土を淨むるは、是を謂つて淨と爲し、若し衆生の佛國土を淨め、衆生を化するを見れば、是を不淨と謂ふ。諸法は平等、泥洹は一性なるは、是を謂つて淨と爲し、受果し、道を成就する有るを見れば、是を不淨と謂ふ。諸法出要し、法報を念ぜざるは、是を謂つて淨と爲し、出要して法報を受くる有るを見れば、是を不淨と謂ふ。諸法盡く生じて永く形色を離るゝは、是を謂つて淨と爲し、生を離れて形色を受くる有るを見れば、是を不淨と謂ふ。諸法は常に定まり、初より變易せざるは、是を謂つて淨と爲し、動轉變易不住有るを見れば、是を不淨と謂ふ。諸法は覺知す可からず、亦た人の能く尋迹する有る無ければ、是を謂つて淨と爲し、形迹の尋ね追求すべき有るを見れば、是を不淨と謂ふ。』と。

佛復た邠耨文陀尼子に告げたまはく『若し菩薩摩訶薩有り、淨不淨を執持し修行せば、現世に便ち無盡慧三昧を得、定意を正受して、便ち能く諸佛の境界に超越し、一佛國より一佛國に至り、衆生を敎化し、佛國土を淨め、一一に諸法の趣く所を分別し、四等心を以て普ねく一切を潤し、漸を以て敎授して各度を得しめ、本と願ふ所に隨つて各充足せしめ、復た神通宿命智觀を以て、審に根本を知つて其の行迹を淨む。或時は菩薩、正受三昧に入り、神通慧を得、諸佛世尊復た威神を加へて法性を分別す——自然にして生じ、自然にして滅す、生は我が生ずるに非ず、滅は我が滅するに非ず——と。菩薩大士に是の念有ること無し——我が生ずるに由つて此の法生ずる有り、此の法滅する有り、と。菩薩摩訶薩是の念有ること無し——我今已に菩薩を成ぜり、某は菩薩を成ぜず、我は菩薩の法を成ず、某は法を成ぜず、我は究竟を成ず、某は究竟を成ぜず、我は菩薩の幻術を成ず、某は幻術を成ぜず、我は菩薩の敎化を成ず、某は敎化を成ぜず、我は菩薩の音響を成ず、某は音響を成ぜず、

有るを見、道果を見れば、是を不淨と謂ふ。百千萬行、窮盡有ること無く、悉く虚空に歸して想念無きは、是を清淨と謂ひ、漏盡斷結除縛有るを見るは、是を不淨と謂ふ。一切諸法は皆空無形にして、生者自ら生じ、滅者自ら滅し、亦た生ずるを見ず、亦た滅するを見ざるは、是を清淨と謂ひ、若し復た分別して起滅有るを見るは、是を不淨と謂ふ。一切諸法に亦た師受なく、自然に覺悟して八等行を成ずるは、是を清淨と謂ひ、若し復た師より諮受する有るを見、高下を分別するは、是を不淨と謂ふ。忍心不起にして、柔忍の心を得、諸結を斷じて永く息みて起らざるは、是を謂つて淨と爲し、若し能く思惟して本行を計せざるも、起あり、滅ありと、便ち二心有つて諸法を分別するは、是を不淨と謂ふ。夫れ道を欲求して、善知識に親しむは、是を謂つて淨と爲し、許し復た思惟して意に懈怠を懷き、中に退心有るは、是を不淨と謂ふ。本末、法を轉じ、音響、敎授するは是を謂つて淨と爲し、設し復た大法輪を轉じ、音響より敎を受くるを見る有るは、是を不淨と謂ふ。未だ諸法十二緣起有らず、尋いで能く分別して、捨して從はざるは、是を清淨と謂ひ、然熾して結を滅する有るを見れば、是を不淨と謂ふ。一切諸法は甚奇、甚特にして、去も窮む可からず、來も亦た盡きず、衆生を接度して彼岸に至るを得しむるは、是を謂つて淨と爲し、若し復た彼岸に度するを見るは、是を不淨と謂ふ。諸法未だ來らず、思惟永く滅するは、是を清淨と謂ひ、未來有り、起滅有るを見れば、是を不淨と謂ふ。現在、八十四行を分別し、如來の威顏容色を莊嚴するは、是を謂つて淨と爲し、現在、愛樂心を起し、容色に染著する有るを見れば、是を不淨と謂ふ。諸法は無生にして造作を見ず、自然に律を[三]興し、度無極に應ずるは、是を謂つて淨と爲し、若し一切諸法を造作するを見、禁戒律に應じて此の心を興せば、是を不淨と謂ふ。一切諸法は形像有ること無し、悉く無爲に歸して、無上道に應ずるは、是を謂つて淨と爲し、設し復た、彼の形色の變を見て、自ら念想を生ずるは、是を不淨と謂ふ。一切諸法は獨にして侶無し、諸法に說無し言敎を見ざるは、是を謂つて淨と爲し、說法有り、言敎有るを見れば、是を不淨と謂ふ。諸法は起らず、三世に染せざるは、是を謂つて淨と爲し、三世法に起滅有るを見るは、是を不淨と謂ふ。諸法は猗無し、三界に著せざるは、是を謂つて淨と爲し、三界に依猗し著する有るを見れば、是を不淨と謂ふ。諸法は身無し、唯だ法を體と爲すは、是を謂つて淨と爲し、法

【三】興、麗本は與に作り、三本宮本は興に作る。

求するも亦所有無きは、是を清淨と謂ひ、識神の無爲は眼界の覩る所に非ざるに、方に慇懃に其の窠窟を知らんと欲するは、是を不淨と謂ふ。一切諸法、受入を見ざれば、方に諸道の出生を求覓せんと欲して、中に於て惑はず道教を成ずるは、是を清淨と謂ひ、諸法を生ずと雖も、意に進退有り、三道心を懷くは、是を不淨と謂ふ。法界に精懃して、習智受證するは、是を清淨と謂ふ。諸の佛法一にして二ならずと知り、復た起滅無く、虛寂無形なるは、是を清淨と謂ふ。十力に任せられて十地に遠からず、進んで明慧を修し、諸の境界を化するは、是を清淨と謂ふ。諸法を觀察して永く三毒を離るるは、是を清淨と謂ふ。大乘正法もて生死を超越するは、是を清淨と謂ひ、諸法は無著なるに、自ら識想を生ずるは、是を不淨と謂ふ。諸法に教無なきに、爲に六度を生ずるは、是を清淨と謂ひ、[二]轉輪法の處所を立てんが爲と知るは、是を不淨と謂ふ。諸法の盡く一相に同じきを修習するは、是を清淨と謂ひ、諸法は生無なるに、爲に出生すと說きて、二見心を起すは、是を不淨と謂ふ。如來達聖、大法輪を轉じ、空性無形にして永く泥洹に處するは、是を清淨と謂ひ、諸法を見ず、泥洹を見ず、此の二心有つて無上正眞の道を成ぜんと欲するは、是を不淨と謂ふ。三世諸法に上中下有り、次を以て受證して戀著する所無きは、是を清淨と謂ひ、中に於て想を起して受證を見れば、是を不淨と謂ふ。本と增減無く、悉く空に歸するは、是を清淨と謂ひ、設し增減を見、諸法分別するは、是を不淨と謂ふ。諸法は無生なり、無生證を受くる、是を清淨と謂ひ、設し諸法の出生する所有るを見、爲に識想を起して其の名號を記するは、是を不淨と謂ふ。諸法の麁澁柔軟を見ざるは、是を清淨と謂ひ、若し復た分別して麁澁柔軟有るを見るは、是を不淨と謂ふ。諸法は無上なり、動轉するを見ざるは、是を謂つて淨と爲し、設し復た分別して動轉を見れば、是を不淨と謂ふ。諸法永く寂して護持す可からず、是を謂つて淨と爲し、設し復た分別して諸法を受持し、斯は是れ善法、斯は善法に非ずとするは、是を不淨と謂ふ。一切諸法內外有ること無く、身法悉く空に歸すと解知するは、是を謂つて淨と爲し、若し復た內外諸法を分別して、此れは是れ內法、此れは是れ外法と――、此の二心有るは、是れを不淨と謂ふ。一切諸法に聾して聲を聞かざるは、是を清淨と謂ひ、若し復た分別して諸法に聾有り、聲有りと、二見を起すは、是を不淨と謂ふ。諸法に一切の道品を成就するは、是を謂つて淨と爲し、出要

【二】知轉輪法爲立處所。

四意止・四意斷・四神足・五根・五力・七覺意・八賢聖行より、時有つて清淨、時有つて清淨ならず。』と。爾の時、郃耨文陀尼子、佛に白して言さく、『世尊、云何が時有つて清淨、時有つて清淨ならざる。』と。佛、郃耨文陀尼子に告げたまはく、『汝第一義に從ふの時有つて清淨に、時有つて清淨ならざるを聞かんと欲するや。三世の諸法の、時有つて清淨に、時有つて清淨ならざるを聞かんと欲すと爲んや。』と。郃耨文陀尼子、佛に白して言さく、『世尊、願樂くば第一義に從ふの、時有つて清淨に、時有つて清淨ならざるを聞かんと欲す。』と。佛、郃耨文陀尼子に告げたまはく、『一切諸法は無數にして有數に非ず。亦た住せず、亦た住せざるにあらず、是を三世法に於て清淨を得と謂ふ。若し善男子善女人有り、亦た住を見ず、亦た不住を見ず、住に於て想著して、染汚心を生ぜんに、是を不淨と謂ふ。菩薩弘誓して遍ねく一切衆生の類を救はんに、衆生を度すと雖も望想を懷かざるは、是を清淨と謂ふ。若し復た意を生じて想著を興すは、是を不淨と謂ふ。智慧光を現じて闇冥を除去する、是を謂つて淨と爲し、中に於て便ち想著を生ずる、是を不淨と謂ふ。衆生を導引して永く無爲に處らしむるは、是を謂つて淨と爲し、所度有るを見て染汚の意を生ずるは、是を不淨と謂ふ。一意一向に無爲道に趣き、亦た衆生をして己が得る所に同じからしむるは、是を謂つて淨と爲し、而かも自ら稱して我度する所有りと說ふは、是を不淨と謂ふ。道、人心に在り、類に隨つて敎化し、精進勇猛にして懈怠を懷かざるは、是を謂つて淨と爲し、修する所懃にして、心、退轉せざらんを力むるも、然も想著して無上正眞の道を成ぜんと欲する有る、是を不淨と謂ふ。諸行は空無所有なり、性本と自然なりと分別するは、是を清淨と謂ひ、復た自ら分別するも望求を斷ぜざるは、是を不淨と謂ふ。無數の身行の皆な空たるを知り、想念を生じて成辦する所有らざる、是を清淨と謂ひ、自ら功勞を歎じて身法に染著する、是を不淨と謂ふ。口に演ぶる所の敎、邊崖有ること無く、亦た自ら有無の道を念ぜざるは、是を清淨と謂ひ、能く一切を捨て、進んで威儀を修するも、無上正眞の道を成ずるを得んと欲するは、是を不淨と謂ふ。文字を分布し、諸法を總持し、强記して忘れざるは、是を清淨と謂ひ、文字諸法を出生するを見ず、空慧、道敎を成ずるを信ぜざるは、是を不淨と謂ふ。一切の諸想皆、空に歸する、是を清淨と謂ひ、本と名號なきに、爲に名號を作り、復た中に於て無上道を成ぜんと欲するは、是を不淨と謂ふ。痛・想・行・識に著する無く、縛せらるゝ無く、境界を推

修行する所の人、習意欲斷じ、未來の塵勞永く起らしめざる、是を時有つて清淨ならずと謂ふ。是の如く邠耨文陀尼子、三無學に於て一法を成就す。復た次に邠耨文陀尼子、無學の學人、現在の一切諸法を分別して、覺有り觀有り、三昧を正受し、永く斷滅して塵勞を生ぜざらしめんに、是を時有つて清淨なりと謂ふ。初習行の人、現在法に於て分別思惟し、覺有り觀有り、三昧を正受し、永く斷滅せしめんに、是を時有つて清淨ならずと謂ふ。是の如く邠耨文陀尼子、三無爲法に於て、時有つて清淨ならず。』と。佛復た邠耨文陀尼子に告げたまはく『或時、無學の學人、是の過去法に於て一切諸法の所生を分別し、一一に思惟して、覺無く觀無く、永く斷滅して塵勞を生ぜざらしめ、是の如く三無爲法を成就せんに、是を時有つて清淨なりと謂ふ。若し修行人、現在の諸法を分別思惟して、覺無く觀無く、亦た斷滅して塵勞を生ぜざらしめんに、是を善男子時有つて清淨ならずと謂ふ。三世分別三有爲法も、亦た復た是の如し。』と。佛復た邠耨文陀尼子に告げたまはく『無學の學人、復た當に三向法性の皆悉く清淨にして所有無きを分別すべし。云何が無學の學人、三世中に於て三向を分別して所有無き、是に於て、無學〔學〕人、未來法に於て一切諸法の所生を分別せんに、時有つて清淨に、時有つて清淨ならず。是を族姓子、三有爲法に於て一法を成就す、と謂ふ。』と。佛復た邠耨文陀尼子に告げたまはく、『修學する所の人、復た未來に於て、一切法、諸法所生、皆空皆寂にして所有無きを分別し、永く斷滅して塵勞を興らざらしむる。是を族姓子時有つて清淨、時有つて清淨ならず、と謂ふ。』と。佛復た邠耨文陀尼子に告げたまはく『無學の學人、現在法に於て復た當に無願正行を分別し、時有つて清淨、時有つて清淨ならず、亦た斷滅して塵勞を生ぜざらしむ。是を有爲法に於て時有つて清淨、時有つて清淨ならず、と謂ふ。』と。佛復た邠耨文陀尼子に告げたまはく『修行する所の人、現在法に於て無相正受を思惟分別し、時有つて清淨、時有つて清淨ならず、亦た斷滅して塵勞を生ぜざらしむ。是を三無爲法に於て時有つて清淨、時有つて清淨ならず。と謂ふ。』と。爾の時邠耨文陀尼子復た佛に白して言さく『世尊、唯だ此の三空三向のみ、時有つて清淨、時有つて不清淨なるや。頗し諸法有り、時有つて清淨、時有つて不清淨なるや。』と。佛、邠耨文陀尼子に告げたまはく『是の如し是の如し、族姓子、汝の所問の如し。一切諸法、時有つて清淨、時有つて清淨ならず、須陀洹より上、如來至眞等正覺に至るまで、時有つて清淨、時有つて清淨ならず。

卷の第十二

清淨品第三十四

爾の時、長老邠耨文陀尼子、佛に白して言さく、『世尊、今如來至眞等正覺の三世法を説きたまふを聞きて、諸天人民八部鬼神皆供養を興し、[一]宿衞す。菩薩摩訶薩進んで佛を成ぜば、當來過去現在の諸佛、三世の分別智慧を演說して、一切諸法の生ずる所然熾し、復た神足道力を以て化する所、三千大千世界を感動し、修行執心して本願を捨てず、國土を清淨にして衆生の跡を淨除せん。』と。是の時、長老、邠耨文陀尼子、復た佛に白して言さく、『世尊、若し菩薩摩訶薩有り、本無一相の法を修習せば、內に自ら思惟して身相を分別し、內外清淨にして染著を生ぜざらん。云何が菩薩摩訶薩、內に自ら思惟し身相を分別し、內外清淨なる』。『是に於て族姓子、若し善男子善女人有り、六度無極、諸佛の所行を行ぜば、一切諸法悉く皆清淨ならん。

云何が諸法一切清淨なる。是に於て善男子善女人、三世悉く所有無きを分別し、三乘道を成就する者を見ずば、須陀洹より乃ち如來至眞等正覺に至つて、皆、三世清淨の行を修し、內に自ら觀身し、識想を分別せんに、時有つて清淨、時有つて清淨ならざらん。云何が菩薩摩訶薩、時有つて清淨、時有つて清淨ならざる。是に於て族姓子、若し善男子善女人、三向空無相願を分別し、吾我人壽命、一切諸法を見ずば、須陀洹より乃ち菩薩摩訶薩に至り、所說清淨なり。復た次に邠耨文陀尼子、無學無著にして生滅する所なく、空觀三無學法を分別するに、時有つて清淨、時有つて清淨ならず。云何が三無學法、時有つて清淨、時有つて清淨ならざる。是に於て族姓子、未來中に於て一切諸法を分別し、所修の正法一一に思惟し、覺有り觀有り、三昧を正受せんに、時有つて清淨、時有つて清淨ならず。』と。邠耨文陀尼子、佛に白して言さく、『世尊、云何が無學無著にして生滅する所無く、空觀三無爲法を分別するも、時有つて清淨、時有つて清淨ならざる。』と。佛、邠耨文陀尼子に告げたまはく、『若し無學の學人有り、未來の一切諸法を分別し、永く除斷滅して塵勞を興さず、復た此の法を以て廣く衆生に及ぼさんに、是を時有つて清淨なりと謂ふ。復た次に善男子善女人、

【一】宿衞　菩薩名なるべきか不明なるを以て、今は斯く訓ぜり。

如來の敎を修す　深法は增減無し、　解脫人を見ず。」　聽いて無量世に徹し、　衆生の根を分別し、　專一に一を思惟し、　有無の法を成就す。」　無相にして有相に非ず、　三世の識を念ぜず、　觀了して所有無し、　人中の尊と號するを得。」　一切諸法の本は　因緣合會して成る、　無形法を思惟せんに　空寂にして本と無形なり」。　十住道地法、心念退轉せず、　一行もて正覺を成じて　復た生老死無し。」

下方此を去ること八江河沙に佛土有り、　名けて極深と曰ふ。佛を賓聚如來・至眞等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師・佛・世尊と名く。一たび加趺して坐せば、遍ねく三千大千世界を滿たす。大衆中に在つて頌を說いて曰はく。

忍智もて道果を修し、　永く三世の本を離れ、　自ら淨め復た彼を淨むるは、　乃ち賢聖の法に應ず。」　爲に無上道を說き、　周旋して方有ること無く、　權を執つて諸行を盡し、　人を度して懈怠すること無し。」　賢聖に遭遇するは樂しみなり。　法を聞いて信受するは樂しみなり。　人を度し垢を斷ずるは樂しみなり。　泥洹して永く寂するは樂しみなり。」　我れ三界を行過して　惡報業を遠離し、　善知識に親むを得、　聞法日に增益す。」　三界の表に超越し、神足もて虛空に遊ぶ、　象無きも像有るが如きは、　愚者の修習する所なり。」　六度大乘法、　忘れ已つて萬物盡きて、　十住地に昇ることを得、　故に愍んで復た來化す。」

爾の時、長老劫賓㝹、十方の佛より三世の法衆行所趣を聞いて、心開き、意解して霍然大悟し、卽ち坐より起ち、頭面禮足して本の位に還復せり。無央數の諸天・人民・天龍・鬼神・乾沓和・阿須倫・迦留羅・旃陀羅・摩休勒・人及び非人有り、皆無上正眞道の意を發す。復た無數の諸天人民有り、佛が三世法の本を演說したまふを聞きて、皆佛の德は深く義は量無く、諸佛の法身は沮壞すべからず、亦た羅漢辟支の及ぶ所に非ざるを歎ず。是の時、衆會悉く皆身中に內外の三世を分別し、進んで道場に趣き、不退轉に逮らんことを願樂せり。

近す。」　夫れ佛道を欲求せば、　慧を實に第一となす。　狐疑の業を焚燒して、　自然に所念無し。」　佛は無量の境に遊び、　慧光の照す所、　一切法を淨除して、　三世の行を分別す。」

西南此を去ること八江河沙に佛土有り、無量藏と名く。佛を忍慧如來至眞等正覺と名け、十號具足す。一たび加趺して坐せば、遍ねく三千大千世界を滿たす。大衆中に在つて頌を說いて曰はく。

諸法の本を念持し、　想に緣りて壞す可からず、　行、自然の固に至りて、　乃ち應に聖地に在るべし。」　諸佛方便を行じ、　德訓もて衆生を化し、　菩薩弘誓を修し、　四等に增減無し。」　增上無爲道は、淸淨にして所染無し、　遍ねく智慧の雲を布き、　三世の患を消滅す。」　賢聖世に在つて化し、　止觀の法を修せしめ、　一一に慧を分別して、　乃ち賢聖道に應ず。」　三世の本性は空なり、　念想不思議なり、　生滅更互に興るを、入定して乃ち除くことを得。」　三界の有に著せず、　爾れば乃ち無盡を獲、　人の爲に威儀を演じ、　永く安隱の處を獲しむ。」

西北此を去ること八江河沙に佛土有り、名けて賢善と曰ふ。佛を賢柔如來至眞等正覺と名け、十號具足す。一たび加趺して坐せば、遍ねく三千大千世界を滿たす。大衆中に在つて頌を說いて曰はく。

如來權慧を現じて　十方界を統領す、　三世空を分別するは乃ち賢聖の行に應ず。　法界は量る可からず、　空の如く窮盡無し、佛の定法忍を得れば、　二見の心を興さず。」　吾昔、受決を得、　內外の空を分別し、　今自ら正覺を致し、　三世の苦を離るゝを得たり。」　如來の廣長舌、　百福もて自ら嚴飾し、　思想心を蠲除し、　至誠にして二業無し。」　佛、衆行の本として　十二門を演暢し、　息意して道跡を成じ、　復た五道に由らず。」　猶ほ仰いで空を射んに、　勢盡きて還つて復た墮つるが如し、　三世の法を宣暢すること　無量にして窮む可からず。」

上方此を去ること八江河沙に佛土有り、名けて吉祥と曰ひ、佛を行盡如來至眞等正覺と名く、一たび加趺して坐せば、遍ねく三千大千世界を滿す。大衆中に在つて頌を說いて曰はく。

過去の諸の賢聖は、　正眞の典を頒宣し、　名色の法に染せず、　乃ち賢聖の律に應ず。」　菩薩本と發意し、　上、

說いて曰はく。

四大本と無性、自ら生じ自然に滅す。我は彼の緣を造らず、物物所有無し。」無著にして解脫を宣べ、牽引して甘露を示し、人の本と願ふ所を恣にして、各果證を獲しむ。」吾昔、施度を行じ、十方界を統領し、七覺自然寶もて一切人に充滿せり。」留つて衆生を敎化し、四無想を念ぜず、永く八不閑を離れ、恒に賢聖と俱なり。」本と三達智に從つて此の三世慧を聞き、今、三垢塵を離れて決を三世尊に受く。」行施して未だ曾て悔いず、意を專にして顚倒を離れ、諸の邪經に在る者に、之に示すに正道を以てす。」

東北方此を去ること八江河沙に佛土有り、名けて忍慧と曰ふ。佛を香盡如來至眞等正覺と名け、十號具足す。一たび加趺して坐せば、遍ねく三千大千世界を滿す。大衆中に在つて頌を說いて曰はく。

法性自然に生じ、無形にして覩る可からず、聖の禁戒律を習ふに無數にして數有るに非ず。」住本と亦た住無く、尋究するに本と無形に甚深にして測度し難し、乃ち應に聖地に在るべし。」現在法を分別して空無想に染せず、過去の生已に盡き、三世の患を離るゝを得。」身は衆患の器たり、諸の不淨を漏出す。能く捨てゝ正慧に入り、漸く無爲道に至る。」意正しくして邪に染せず、大道心を捨てず、心、淨きこと鍊金の如くば、道に趣くこと亦た難からず。」人生れて五道に在り、內身觀を分別して、三世何れよりとか爲すと、人をして愚惑を懷かしむ。」

東南此を去ること八江河沙に佛土有り、賢聖普集と名く。佛を觀世苦如來至眞等正覺と名け、十號具足す。一たび加趺して坐せば、遍ねく三千大千世界を滿す。大衆中に在つて頌を說いて曰はく。

諸佛は一切三世の空無相を觀じ、慧もて愛欲の本を斷じ、乃ち賢聖地に應ず。」造志して苦行を勸め、恒沙佛を供養し、衆智一切具はる、故に人中の雄と號す。」信を甘露の法と爲す、二見の心を生ぜず、衆に在つて師子の如く、所說十方に震ふ。」生死の諸の穢濁、根本は尋ぬ可からず、三世の患に了達すれば、如來律に親

を防制し、自然にして所染無し。」佛法は實に奇特なり、二乘の及ばさる所、權智衆變を現じ、五分法身を具す。」我亦た師受する無く、有爲の學に從らず、甘露の淵に沐浴し、解脫して身を莊嚴す。」

南方此を去ること八江河沙に佛土有り、名けて莊嚴と曰ふ。佛を嚴淨如來至眞等覺と名け、十號具足す。一たび加趺して坐せば、遍ねく三千大千世界を滿す。大衆中に在つて頌を說いて曰はく。

今日十方の佛、普ねく神足の變を現じ、各三世の本〔法〕[八]を說き、如來の業を究盡す。」一相は本と形無し、深入して邊崖無く、法を以て講じて人に授け、空の如く所念無し。」法鼓大千に震へ、十善の功德具はり、下劣の人を拯濟して永く生死海を離れしむ。」諸佛の現はるゝ所以、變化量るべからず、因緣道果を成じ、乃ち賢聖地に應ず。」十方の刹土より集まり、各三世法を說き、自然に正法に逮び、定意、前に現在す。」一一の諸の毛孔より、百千の光明を放ち、諸の道教を演說し、三毒の本を消滅す。」

西方此を去ること八江河沙に佛土有り、淨復淨と名く。佛を越淨如來至眞等正覺と名け、十號具足す。一たび加趺して坐せば、遍ねく三千大千世界を滿す。大衆中に在り、頌を說いて曰はく

衆生性は若干なる、解脫慧を觀ぜず、「三世法は常住なり、起滅するも法性の如し。」賢聖は定に入りて觀じ、十二緣を分別し、七處に三法を觀じて、悉く眞如性に歸す。」生天を願樂せず、亦た法を僥倖せざる、是を、三世を明らかにして常に善友を擇ばんを念ずと爲す。」輻を種え、明らかに慧を爲すを最も第一義と爲し、有無の想を分別す、故に人中の尊と號す。」諸法に各ゝ性有り、所行悉く空に歸す、人の空を測度するが如し、先づ當に身を分別すべし。」如來の顏を瞻覩するに、諸法自然に足り、口に八種の音を演べ、人を度すること量有る無し。

北方此を去ること八江河沙に佛土有り、名けて化成と曰ふ。佛を無染如來至眞等正覺と名け、十號具足す。一たび加趺して坐せば、遍ねく三千大千世界を滿す。大衆中に土つて頌を

【八】元明二本は法。

を稱し、　魔の爲に壞せられず、　能く心を移動すること無し。」　億百千劫より、　定意錯亂せず、自然に覺悟を得、
乃ち如來慧に應ず。」　八等正眞道もて、　諸の苦厄を運齊し、　諸の財寶を戀はず、　恒に身命を評ふ。」

爾の時、世尊、劫賓㝹の與に此の偈を說き已る。時に、座上に七億の衆生有り、三世平等の正法言教を說きたまふを聞いて、皆無上正眞道の意を發せり。爾の時、座上に復た無量の衆生有り、心猶ほ未だ悟らず、各ゝ狐疑有り、內に自ら思惟すらく、「今日如來の說きたまふ所の言教は、三世の法を演べ、受決成佛に各々前後有り。十方の諸佛も、亦た當に此の三世の法を說きたまふべきや不や」と。爾の時、世尊、彼の衆會の心中所念を知り、便ち眉門相より光明を放ち、普ねく十方無量恒沙の刹土を照したまふ。一一の光明に百千億恒沙の刹土有り、一一の刹土に百千億の蓮華有り、一一の蓮華に百千億の摩尼珠有り、一一の摩尼珠は百千億の七寶の講堂を現じ、一一の講堂は百千億の七寶の高座を現じ、一一の高座は百千億の如來至眞等正覺を現じ、一一の如來は盡く菩薩三世衆行所趣の六度無極を說きたまふ。爾の時、衆會、盡く十方無量の世界の奇特異變を見て、歎ずること未曾有なり。各各佛に白して言さく『世尊、甚奇甚特なり、未だ曾て見る所ならず、未だ曾て聞く所ならず。今日如來至眞等正覺、此の光明を放ちたまひ、普ねく諸佛所行の法則を見しむ。或は衆生の如來の前に在つて受決する者を見る。或は衆生の法を聽受する者を見る。或は衆生の三十二相八十種好を得て身を莊嚴する者を見る。』と。是の如く、衆會の見る所は同じからず。一切十方の諸佛の世界、供養を興致し、香華繒綵は遍ねく三千大千世界に滿ちぬ。爾の時、世尊、衆生の心中所念を觀察し、復た神足を以て十方無量の世界を感動し、諸の如來至眞等正覺に、三世平等の正法を演說したまはんことを請ひたまふ。東方此を去ること八江河沙に佛土有り、名けて思惟と曰ひ、佛を無念如來至眞等正覺と名け、十號具足す。一たび加趺して坐したまへば、遍ねく三千大千世界を滿したまふ。卽ち大衆に於て頌を說いて曰はく

過去衆行の趣に、　生滅の本を見ざれば、　解脫して應に受決すべし、　乃ち賢聖地に應ず。」　法性は諸有を離れ、
三世の塵を造らず、　勇猛なること衆行に超え、　花の自然に敷くが如し。」　如來敎誡を現じて、　普ねく有形の類を
潤し、　清淨なること明珠の如く、　心堅きこと安明の如し。」　諸佛の功具德はり、　永く諸の更樂を離れ、　塵欲愛

是に於て族姓子、若し菩薩摩訶薩有り、信地より乃ち無婬怒癡地に至るまで、身現在に處りて過去法の衆行所趣を聞き、疑はず難ぜず、畏懼する所無く、心卽ち開解し、霍然として大悟し、便ち如來其の名號を授けたまふを聞き、當に無上正眞等正覺を爲すべし。爾の時、弊魔波旬、化して佛形と作りて、菩薩の所に來至し、菩薩に語つて言ふ「善男子知るや不や、我が前に說ける所は、是れ、今說く所に非ず。若し能く變悔して吾が敎に從はば、便ち無上正眞等正覺を成ぜん」と。菩薩之を聞きて心遂に歡喜し、「將た波旬化して佛像と作り、來つて我が意を沮まんとするに非ずや」。とて、心、金剛の如く、壞敗すべからざらん。此の如きの善男子善女人は、凡夫地を離れて恒に聖地に在らん。是を菩薩摩訶薩、過去法を聞きて、心、退轉せず、と謂ふ』と。佛復た長老劫賓㝹に告げたまはく『汝の所問の如く、須陀洹より乃ち三耶三佛に至るまで、三世の衆行所趣を分別せんに、或は凡夫地に在り或は聖地に在らん。是に於て族姓子、若し善男子善女人有り、現在身を以て過去法を聞き、應に過去に從つて信解を得べし。反つて波旬、邪なる徑道を說き、「善男子知ると爲んや不や、過去は已に滅し、衆行は本無し。十方世界は空寂無形なり。何ぞ方便を求めて弘誓心を發さざる。是の如き行者は佛を得んこと久しからざらん。」といふに從ひ、菩薩之を聞いて便ち猶豫を懷き、「我今行ふ所は將た是の如きに非ざるか」と、卽ち本願を捨てゝ菩薩行を退き、方に魔の言敎を修習せんと欲せん是を菩薩摩訶薩、過去法に於て便ち退轉有りと謂ふ。』と。佛復た長老劫賓㝹に告げたまはく『汝の所問の如く、菩薩摩訶薩、已に聖地を得て、凡夫地を離るる者とは、善く之を思念せよ。是に於て族姓子、猶ほ人有り、身、現在に處りて過去法を聞き、心、恐懼せず、疑難する所無からん。波旬復た來りて菩薩の言を壞敗すらく、「我が說く所は權詐の合數にして、眞實の法に非ず。汝今、前の本心を捨て、更に無上至眞等正覺を發さんに、如來道を成ぜんこと正に爾く久しからざらん。」と。菩薩之を聞いて心に自ら念言すらく「吾已に受決して無上道に在り。今此れは佛に非ず、是れ弊魔波旬のみ」。と。便ち之を捨てゝ去り、與に從事せざるが如き、是を菩薩摩訶薩、凡夫地を離れ、牢として聖地に住す、と謂ふ。』と。爾の時、世尊、劫賓㝹の與に、頌を說いて曰はく。

如來等正覺は、　三世の空と分別し、永く諸の縛著を離れ、乃ち賢聖地に應ず。」　如來、其れに決を授け、國土名號

薩心卽ち逹悟して卽ち受決を得、如來至眞等正覺の十號具足す。是を菩薩摩訶薩、身現在に處り、未來法は未來未生なり不起滅の法なりと說く、と謂ふ。』と。是の時、長老劫賓㝹、佛に白して言さく『世尊、但だ、菩薩摩訶薩のみ、三世衆行の所趣を分別するや、聲聞辟支の爲にも亦た此の行有りや。』と。佛、劫賓㝹に告げたまはく『信地、見地より乃ち三耶三佛地に至るまで、皆三世無量無限不可思議の衆行有り、趣く所便ち名號を受く。』と。是の時、長老劫賓㝹、佛に白して言さく『世尊、云何が信地、見地より乃ち三耶三佛地に至るまで、皆三世無限無量不可思議の衆行有り、所趣、名號を受くることを得るぞ。』と。佛、長老劫賓㝹に告げたまはく『汝廣く。如來至眞等正覺の三世衆行所趣を分別したまふを知らんと欲せば、今當に一一に其の義を敷演すべし。信地・見地・薄地・無婬怒癡地より、須陀洹より乃ち三耶三佛に至るまで、皆悉く三世の所趣を分別す。云何が菩薩摩訶薩、信地・見地・薄地・無婬癡地より、三世衆行の所趣を分別する。是に於て族姓子、若し善男子善女人有り、解脫を信ずるを以て根力を得、八眞行を覺意して善を行じ、時有つて威就し、時有つて成就せざらんに、此の如き等の人、或は聖地に在り、或は凡夫地に在らんに、不退轉より乃ち一生補處に至る。是を菩薩摩訶薩永く凡夫を離れ、如來の決を受くと謂ふ。是を族姓子、菩薩摩訶薩信地・薄地・無婬怒癡地より各各別有りと謂ふ。』と。是の時、長老劫賓㝹、佛に白して言さく『世尊、云何が菩薩摩訶薩、信地より乃ち無婬怒癡地に至るまで、或は聖地に在り、或は凡夫地に在る。』と。佛、長老劫賓㝹に告げたまはく『若し善男子善女人有り、初發意より無上道を求め、身現在に處りて過去法を聞き、便ち信樂せずして之を捨てゝ去らん。何を以ての故に、本と信樂すること無きが故に、狐疑有り、中道に退還して究竟に至らざるなり。爾の時、弊魔波旬卽ち其の便を得、化して佛形と作り、菩薩の所に至り、菩薩に勸進して言ふ。「善男子知るや不や、我が前に說きし所は、今說く所の如くなるに非ず。是れ汝應に未來法を聞きて應に受決を得べきに、今乃ち吾が過去法を說きしを聞く。唐しく其の功を勞するのみ、果報を成ぜざらん。汝何ぞ速かに本意を捨てゝ、更に弘誓を發し、然る後乃ち無上等正覺を成ぜざる。」と。菩薩之を聞いて、心に猶豫を懷き、卽便ち退轉して凡夫地に在り。是を菩薩摩訶薩、三世法に於て無上正眞等正覺を獲ずと謂ふ』と。佛復た長老劫賓㝹に告げたまはく『云何が菩薩摩訶薩、三世の衆行所趣を分別し、牢として聖地に住して退轉せざる。

中國に處るは難く、眞人に遭遇するは難し。豪貴にして信を執るは難く、慳嫉にして惠施するは難く、縛著の受證するは難く、三世を分別するは難し。

爾の時、世尊、復た劫賓㝹に告げたまはく「若し善男子善女人有り、三世の婬怒擬の病を分別し、縛著を遠離して復た生滅無く、神足自由に變化無方ならん。此の如きの善男子善女人、三世の定意三昧に入れば、盡く過去未來現在の諸佛の所行を知り、衆善の根本悉く前に現在し、諸佛世尊八等正道もて、進んで泥洹に趣かしむ。諸佛の世に出現するの所以は衆生究盡根原〔源〕を觀察し、道門―如來の三達、三世の法、無量無限不可思議なるを知らしむ。或は衆生の應に過去法を聞くべきあれば、如來は便ち過去は滅盡し、衆行は起らずと說く。或は衆生の應に現在法を聞くべきあれば、如來便ち現在の正教は縛著を遠離すと說く。或は衆生の應に未來法を聞くべきあれば、如來便ち未來は未だ生ぜず不起滅の法なりと說く』と。是の時、尊者劫賓㝹、佛に白して言さく『世尊、云何が衆生の應に過去法を聞くべきに、如來は與に過去滅盡して衆行起らずと說くや。云何が衆生の應に現在法を聞くべきに、如來は與に現在の正教は縛著を遠離すと說くや。云何が衆生の應に未來法を聞くべきに、如來は與に未來は未だ生ぜず不起滅の法なりと說くや。』と。爾の時、世尊、長老劫賓㝹に告げたまはく『諦かに聽き諦かに聽き、善く之を思念せよ。』と。劫賓㝹、佛に白して言さく『唯だ然り世尊、願樂くば聞かんと欲す。』と。佛、長老劫賓㝹に告げたまはく『若し菩薩摩訶薩有り、三世の無量無限不可思議を觀了せんこと、是れ辟支羅漢の及ぶ所に非ず。何を以ての故に、如來の所行は彼の境界に非ざればなり。若し菩薩摩訶薩の、身は現在に處り、衆行具足して、應に過去の如來より受決すべきは、便ち現在の如來の、過去法は過去し滅盡して衆行起らずと說くを聞き、心卽ち開悟して、卽ち受別を得、如來・至眞等正覺・十號具足す。是れを菩薩摩訶薩、身現在に處り、應に過去法の過去し滅盡して衆行起らさるを聞くべし、と謂ふ。』と。佛復た長老劫賓㝹に告げたまはく『復た菩薩摩訶薩有り、身現在に處りて、應に現在法を聞くべし。現在の佛より記別を受け、如來至眞等正覺の十號具足す。是れを菩薩摩訶薩、身、現在に處りて現在の別を受け、縛著を去離して生滅の想無しと謂ふ。復た菩薩摩訶薩有り、身現在に處りて應に未來法を聞くべし。如來與に未來は未生なり不起滅法なりと說き、是の時菩

爾の時、世尊、目連の與に此の品を說きたまふ時、億那術の天人有り、皆、無上正眞道意を發して、所生の國土盡く同一相にして、三法身を誹謗する者有ること無からんと願ふ。爾の時、目連、起つて佛足を禮し、遶佛三匝して本の座に還復せり。

三世法相品第三十三

爾の時、世尊、軟首菩薩に告げたまはく『吾れ昔、成佛せんと功を積み行を累ねて、自ら如來至眞等正覺を致し、國を棄て妻を捐て榮位を貪らず、一切諸佛の法藏を宣布し、隨前適化して、之を度脫すること、猶ほ醫王の衆病を療救するに、病の輕重に隨つて然る後藥を投ずるが如し。若し衆生有り、今身現在に過去の病を種えんに、菩薩亦た知つて之を救護す。或は復た衆生の身、已に過去に、未來の病を種えんに、菩薩亦た知りて之を救護す』と。是の時、尊者劫賓㝹、佛に白して言さく『世尊、云何が善男子善女人、身は現在に處りて過去の病を種え、云何が身は過去にて未來の病を種え、云何が身は未來に在つて現在の病を種うる』と。爾の時、世尊、劫賓㝹に告げて曰はく『善い哉善い哉、族姓子、如來の前に於て斯の義を問ふこと、利益する所多し。何を以ての故に、過去當來今現在の佛の宣ぶる所の法藏は、佛事不思議の法を施爲し、佛樹を莊嚴し、成佛を進行せしむ。』と。爾の時、世尊、劫賓㝹の與に頌を說いて曰はく

清淨の聲柔軟にして、　遍ねく十方界に聞え、　諸の善根を具足し、　拔苦して衆惡を離る。」　三世の行を分別するに、　入無く、所生無し、　如來は悉く觀察し、　獨り善くして等侶無し。」　初めて弘誓心を發すは、　少許人の爲ならず、　意廣きこと虛空の如く、　恒沙數を濟度す。」　今樹王の下に在り、　衆相自ら嚴飾し、　諸の外道を降伏して正法教を奉修す。」　首に七覺の花を戴き、　身には慚愧の服を被り、　和顏忍辱心、　獨歩して難有る無し。」　畏無きこと師子の如く、　勇慧、難有る無く、　色像は月初の如く、　諦視して厭足すること無し。」　一切十方の世、悉く來つて尊を供養し、　本心の所願に隨つて　盡く解脫門に歸す。」　本と我が發願せし所、　劫數の期を限らざりしは、諸の衆生を哀愍し、　甘露の法を演べんが爲なり。」　人身を求めんと欲するは難く、　正法を聞受するは難く、　生れて

身の法を得る者は、塵垢の縛著顚倒を受けず。譬へば摩尼寶珠の光明徹照すれば、日月星辰の光明の能く過絶する所に非ざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復た是の如く、淨妙瓔珞三身の法を獲る者は、五通神仙禁呪神藥の爲に能く制持せられず。譬へば四道受證し、自ら通慧を信じ、已に五道を度すれば、衆邪の爲に留住せられざるが如く、譬へば滅盡定の人の、本行を燒盡するが如く、菩薩摩訶薩、生死の根を盡せば、信心牢固にして誹謗を興さず。譬へば士夫如意珠を得れば、意の所念に隨ひ、皆、前に現在するが如し。菩薩摩訶薩も亦復た是の如く如意正定を得ん、衆生類の純熟根を觀る者は、漸漸に訓導して、各〻無爲に至らしむ。猶ほ不退轉法の、復た生死に墮落染著せざるが如く、菩薩摩訶薩も亦復た是の如く、生死に處すと雖も畏懼を懷がず、我當に復た退轉して生死の中に在るべしと言ふ。譬へば、非男非女の人は、殊妙なる五欒の中を將ち示すも、亦た心に染著情欲を生ぜざるが如く、菩薩摩訶薩も亦復た是の如く、周旋敎化して遍へに五道に入り、知りて著せず、想念を起さず、衆生を拔濟すること稱量す可からず。』と。爾の時、世尊、目連の與に頌を說いて曰はく。

菩薩の本意の淨きこと、猶ほ金剛山の如く、執意毀る可からず、受證すること彈指の如し。」 世に在つて敎化すと雖も、緣本の想に著せず、遍ねく一切法を學んで 大法幢を竪立す。」 猶ほ、二士夫の 執意に各〻術有り、相ひ將ひて戲堂に至り、各〻其の伎を現ぜんと欲するが如し。」 須彌四寶山、縱廣甚だ峻高にして、 三百三十萬六萬由旬の數なり。 一人山頂に在つて 手に甘露の瓶を執り、 一人は山下に在り、 瓶を執つて甘露を受くるに、寫ぐ者は亦た泄さず、 受くる者は捐棄せざらんこと、 彼の人各〻凡夫にして、 未だ慧道に通ずることを獲ずば、云何が目乾連、 此れ極めて難しと爲すや不や。 難しと雖も未だ奇(あや)しむに足らず、 三法身は甚だ難し。」 億千萬劫より、 淨瓔珞を聞いて、 三身慧を分別せんと欲すること、 斯の法、最も難しと爲す。」 卿今、愁憂すること莫れ、 已に衆の苦患を超え、 三法要を聞くことを得たり、 自ら濟ひ復た彼を濟はん。」 若し族姓子有り、 篤く信じて法を修習せば、 現世に諸漏を盡し、 神通、自在に遊び、 所生の國土は淨く、 七寶の宮殿成り、 諸根悉く完具し、 [illegible]心淨きこと虛空の如くならん。

吾は師子王たり、殺を以て家業となし、肉を啖ひ其の血を飲む、此を以て常膳となす。汝既に自ら量らず、吾が牙齒の難を脫して還りて吾が口を出づるを得たり。此の恩何ぞ忘る可けんや。と。

爾の時、木雀、復た此の偈を以て師子に報へて曰はく

我は是れ小鳥りと雖も、誠に應に死を惜まざるべし。但だ王、恩を念ぜず、自ら言誓の重きを負く。若し能く小しく寛弘にして、小多惠まるれば、命を沒するも終に恨まじ、敢て議論有らざらん。と。

爾の時、師子王、竟に恩に報ひずして、之を捨てゝ去る。木雀自ら念へらく「吾が恩極めて重きに、反つて更に輕賤せらる。今當に後を追ひ要ず師子を伺ひ、便ち怨を報ぜずんば終に世に行かざるべし」。と。在在處處に終に相ひ離れず。時に師子王、復た群獸を殺し、意を恣にして之を食ひ、飽きて便ち睡眠し、畏懼する所無し。時に彼の木雀、飛んで師子に趣き、額の上に當り立ち、其の力勢を盡して一眼を啄き壞る。師子驚き起きて左右を顧視するに、餘獸を見ず。唯だ木雀の獨り樹上に在るを見る。時に師子王、木雀に語つて曰はく「汝今、何すれぞ乃ち吾が目を壞る。」と。時に彼の木雀、偈を以て師子王に報へて曰はく。

重恩、報ゆるを知らず、反つて更に害心を生ず。今汝に一目を留む、此の恩何ぞ忘る可けん。汝は獸中の王と雖も、所行に反復無し、是れより各自ら休み、復た緣對を作すこと莫からん。と。』

佛、目連に告げたまはく『時の師子王は豈に異人ならんや。斯の觀を造すこと莫れ、然る所以は、今此の勇智菩薩是れなり。是の木雀は、今の汝、摩訶目犍連是れなり。此の正士等は、是よりこのかた恒に誹謗を行ひ、如來三身の要を信ぜず、方當に地獄の難を經歷すべし。』と。

佛、復た目連に告げたまはく『若し菩薩摩訶薩有り、淨瓔珞を修して三身定を得ん者、神足遊戲して罣礙する所無く、人の爲に重任して、衆苦を荷負す。譬へば空界覆はざる所無きが如し。淨妙瓔珞三身法の者も、亦復た是の如く、一切衆生の所願を滿足す。譬へば大海の深廣淸淨にして、諸の不淨者より穢惡を受けざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復た是の如く、淨妙瓔珞三

内に自ら思惟すらく「此の五千の正士、佛の說きたまふ所の三身法寶を聞き、受持するを肯んぜずして、各々退き去る。此れ必ず緣有らん事空しからじ」と。爾の時、目連、卽ち座より起ち、偏へに右臂を露はし、長跪叉手して佛に白して言さく『唯だ然り、世尊、此の五千の正士、菩薩道を修して已に如來深法の藏に入り、聲聞辟支佛の上に行過しつゝ、今世尊が法瓔珞三身の深義を說きたまふを聞き、受持するを肯んぜずして各々退き去れり』と。佛、目連に告げたまはく『止みね止みね、族姓子、若し善男子善女人有り、此の義を聞かば、頭は破れて七分となり、沸血面孔より出でん。何を以ての故に、此の惡人等、本と無數阿僧祇劫より、恒に正法を誹謗し毀辱することを喜べばなり』と。爾の時、目連復た重ねて佛に白さく『唯だ然り、世尊、願はくば誹謗受罪の云何を說きたまへ』と。佛、目連に告げたまはく『此の五千の正士は、過去恒沙佛より已來、亦た布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧・善權方便を修するも、便ち想著を起して、悔過の心有り、如來の所に於て便ち退轉有り、方に當に勤苦の難を經歷し、千佛過ぎ去るも猶ほ得度せざるべし。此の五千の正士、最上首の者を名けて勇智と曰ふ。菩薩摩訶薩の行を修し、成佛せんと欲求すと雖も、終に得可からず。譬へば士夫の、空中に七寶の宮殿、五色玄黃の彫文刻鏤を造作せんと欲するが如し。此の如きは善男子善女人、乃ち能く作すや不や。』と。目連、佛に白して言さく『不なり世尊、何を以ての故に、虛空は無象なり、造作すべからず』と。爾の時、世尊、目連に告げて曰はく『此の勇智菩薩は、光明佛の時、師子王と作り、吾れ梵志を爲りて、清淨の業を修せり。時に師子王、晨朝に跱立して六處動ぜず身體を奮迅して、便ち大雷吼す。走獸は伏住し、飛ぶ者は墮落す。然る後乃ち曠野山澤に趣き、局界を案行して群獸を求覓す。一象王に逢ひ、剎して之を食ふ。髀骨[七]哽咽し、死して復た穌る。時に木雀有り、師子の前に在り、軟蟲を求覓し、取つて之を食ふ。師子口を張り、木雀に告げて曰はく「吾の與に此の骨を挽かば、却後若し食を得んに、當に恩に相ひ報ゆべし」と。木雀之を聞きて、口に入り、力を盡して骨を拔き、乃ち之を去ることを得たり。時に師子王、後日、食を求めて大いに群獸を殺せり。木雀側に在り、少多、恩を求むるに、師子報へず。』佛、目連に告げたまはく『時に師子王、此の偈を以て木雀に報へて曰はく。

【七】麗本鯁。三本宮本は哽。

無きも、所度各異るが故に差別有り。』と。佛復た須菩提に告げたまはく『云何が族姓子、如來變を現じ、光相具足し、遍ねく十方無量の世界に滿ち、權方便を執りて隨形適化す。全身舍利、復た此の功勳有りや不や。』と。須菩提、佛に白して言さく『世尊、本生契經所說の如し、頂王如來至眞等正覺は、十二那術劫世に在りて敎化し、說法周ねく訖りて卽ち其の壽を捨て、無餘泥洹界に於て般泥洹し、身の舍利を留めて遍ねく世界に滿たしたまふ。復た十二那[五]術劫を經て、世人の供養すること、佛存在したまふが如く、說法敎化所度亦た等し。是の故に世尊、如來色身と全身舍利とは、各差別無し。』と。爾の時世尊、須菩提に告げたまはく『頂王如來の全身舍利、世に在つて敎化したまふ、是れ本識と爲すや、本識に非ざるや。』と。須菩提言さく『非なり世尊、皆是れ頂王の威神の接する所なり。』と。爾の時、世尊、須菩提に告げたまはく『是の如し是の如し、汝の言ふ所の如し。此の頂王の威神にて、全身舍利に此の言敎有り、是の故に色身と全身舍利とは、法性同じからず。』と。爾の時、世尊、須菩提の與に便ち此の偈を說きたまふ。

　過去の頂王佛、　世に在つて敎化すること久しく、　十二那術劫、　說法增減することなし。」　周ねく訖つて滅度を取るも、　身を留めて敎を演布し、　度する所量有ること無く、　[六]一進成佛を修せり。」　舍利の識は識に非ず、　頂王の威神の故なり、　本を捨てゝ本に著せず、　澹然として無爲に入る。」　卿、今空を獲、　漏盡きて礙有ること無しと雖も、　如來の境を分別するは、　汝が狹劣の局に非ず。」

爾の時、座上に八萬四千の諸天人民有り、佛の說きたまふ所を聞きて、皆無上正眞道の意を發し、我等後に作佛せん時、皆頂王如來の如く、敎化して異らざらん、と。時に須菩提、遶佛三匝し、頭面禮足して本の位に還復しぬ。

譬喩品第三十二

爾の時、世尊、法瓔珞を說き、法身の福功德無量なるを講じたまふ。座中に五千の菩薩有り、卽ち座より起ち、頭面禮足し、遶佛三匝して、便ち退いて去る。爾の時。尊者大目乾連

【五】麗本述に作り、三本宮本は術。
【六】修一進成佛。

細入して間あるなし 所行不思議なり、 受決して乃ち得悟す。」 諸の佛國は清淨にして、變を現ずるに雙有ること無し、皆正法身に由つて 此の巍巍の尊を獲るなり。」 本無にして三道無く、 亦た正覺を成ずる無し、 皆衆生の念に由り、 優劣の心有らしむ。」 忍を諸法の藏と爲す、 行淨くして黠汚無く、 生を盡して更に造らざるは、 斯れ法身の果に由る。」 諸佛の所行を觀じ、 聞法して厭足すること無く、 一切人を化導して、 盡く正法味に同ぜしむ。」 乃ち無數劫に於て、 生死の海を究盡し、 清淨に三世を觀じて、 法身の本を了達す。」

爾の時、世尊、此の偈を說きたまふ時、無數百千の衆生有り、皆無上正眞道の意を發し、復た五百の比丘、二百五十の優婆塞有り、塵を遠かり、垢を離れて、法眼淨を得たり。是の時長老須菩提、佛に白して言さく『世尊、如來至眞等正覺は、三達無礙、神通清淨にして、法身の甚深微妙なるを演說したまふ。問ふ所有らんと欲す、唯だ願はくば大聖顧愍して開悟せしめたまへ。』と。爾の時、世尊、須菩提に告げたまはく『疑難する所有らば今正に此れ時なり。如來當に爲に一一に分別すべし。』と。時に須菩提、佛に白して言さく『世尊、如來の色身と、全身舍利と、此の二法性に何の差別有りや。』と。佛、須菩提に告げたまはく『善い哉、斯の問ひや。如來の色身は衆德積聚し、道敎を演布し、訓ふるに三業を以てす。云何が三と爲す。一は、身に清淨を行じて不善を防塞す。二には、口に眞誠を言ひて非邪を說かず。三には、意專ら道に向ひて、他異の念なし。是を三業清淨を具足して道場に至るを得と謂ふ。全身舍利も、復た眞體なりと雖も、此の三業を離れて永く言敎無し。正に威神の光明有り、恭奉して福を得可きも、故に優劣有り。』と。時に長老須菩提、復た佛に白して言さく『世尊の說きたまふ所の如くば、三業有り、各進退有るを以ての故に差別有るも、所謂色身を供養すると、及び全身舍利を供養すると、法性同一にして、法に若干無し。今如來の色身及び全身舍利を問ひまつれり、如來三業の敎誡を問はず。云何が世尊、三業を以て報答したまふ。夫れ三業は識界所攝にして、識は色身に非ず、色身は識に非ず。』と。爾の時、世尊、須菩提に告げたまはく『云何が族姓子、全身舍利の光明威德は、如來色身と異有りや無きや。』と。須菩提、佛に白して言さく『世尊、全身舍利亦た威神功德有り、人の所念に隨つて各其の願を充たす。如來色身は衆相具足し、亦た威神功德有り、衆生を接化して窮極有ること

比を爲す可からず。何を以ての故に、大千天下に七寶の塔を起し、及び大千天下の全舍利（を供養し、）及び萬色身如來至眞正覺を供養するは、皆法身に由つて供養することを得ればなり。』と。佛復た長老須菩提に告げたまはく『若し善男子善女人有り、三千大千天下に於て七寶の塔を起し、及び大千天下の中に滿つる全身舍利（を供養し）復た一億色身如來至眞等正覺に、繒綵花蓋種種の香薰を供養し、是の如く供養せんに、其の福功德寧ろ多しと爲すや不や。』と。須菩提佛に白して言さく『甚だ多し甚だ多し、世尊。』と。佛言はく『故に善男子善女人、法身の正敎を受持諷誦せんに如かず。其の福功德甚だ多く甚だ多く、譬喩を以て比を爲すべからず。何を以ての故に。三千大千天下に七寶の塔を起し、及び三千大千天下の中に滿つる全身舍利（を供養し）復た一億色身如來至眞等正覺を供養するは、皆法身に由つて供養することを得ればなり。』と。佛復た長老須菩提に告げたまはく『云何が族姓子、且つ三千大千世界を置け、若し善男子善女人有り、一佛世界より百千佛土に至りて七寶の塔を起し、中に全身舍利を滿たし、復た億百千色身如來（至眞等正覺）を供養せんに、其の福功德寧ろ多しと爲すや不や。』と須菩提佛に白して言さく『甚だ多し甚だ多し。』と。佛言はく『故に善男子善女人、法身の正敎を受持諷誦せんに如かず。其の福功德甚だ多く甚だ多く、譬喩を以て比を爲す可からざる。何を以ての故に、一佛境界より億百千世界に至つて、七寶の塔を起し、中に全身舍利を滿たし、復た億百千色身如來至眞等正覺を供養するは、皆法身に由つて供養することを得ればなり。』と。爾の時、世尊須菩提の與に頌を說いて曰はく

菩薩の善權を行ずる、　形に隨つて適化し、　空に於て識を[三]染せず、　功勳自ら身を嚴る。」　夫れ空際を盡さんと欲せば、　本無の觀に達了し、　心[四]住して形に滯らず、　正觀して自ら覺悟す。」　衆生と法界と異れども、　趣く所の解脫は同じ、　生死の岸を超越して、　復た有無の識無し。」　人本と四流に染し、　四駛の水に漂はさる、　四大各々本に還りて、　及び四果の證を成ず。」　若し復た正定に入り、　有無の慧を分別せば、　無盡の法を顯曜し、　辯才智無礙ならん。」　安般もて自ら意を攝し、　衆の亂想を起さず、　衆結顚倒の心、　鏟(サツ)るに智慧の劍を以てす。」　識相は本と形無し、

【三】麗本は不於空深識に作り元明宮三本は深字を染に作る。
【四】三本宮本は往。

を得ればなり。』と。佛復た長老須菩提に告げたまはく『云何が族姓子、若し善男子善女人有り、四天下に於て七寶の塔を起し、及び四天下の全身舍利及び四色身の如來（至眞等正覺）に、繒綵花蓋種種の香薫もて、是の如く供養せば、其の福寧ろ多しと爲すや不や。』と。須菩提、佛に白して言さく『甚だ多し甚だ多し。』と。佛言はく『故に善男子善女人、法身の正教を受持諷誦せんに如かず。其の福甚だ多く、譬喩を以て比を爲す可からず。何を以ての故に、四天下の七寶の塔、及び四天下の全身舍利を供養し、及び四色身如來至眞等正覺を供養するは、皆法身に由つて供養することを得ればなり。』と。佛復た長老須菩提に告げたまはく『若し善男子善女人有り、小千天下に於て七寶の塔を起し、及び小千天下の中に滿つる全身舍利を（供養し）、及び百色身如來（至眞等正覺）を供養し、繒綵花蓋種種の香薫もて、是の如く供養せんに、云何が族姓子、其の福寧ろ多しと爲すや不や。』と。須菩提に白して言さく『甚だ多し甚だ多し、世尊。』と。佛言はく『故に善男子善女人、法身の正教を受持諷誦せんに如かず。其の福甚だ多く甚だ多く、譬喩を以て比を爲す可からず。何を以ての故に、小千天下の七寶の塔を供養し、及び小千天下の全身舍利を供養し、及び百色身如來至眞等正覺を供養するは、皆法身に由つて供養することを得ればなり。』と。佛復た長老須菩提に告げたまはく『若し善男子善女人有り、中千天下に於て七寶の塔を起し、及び中千天下の中に滿つる全身舍利（を供養し）及び千色身如來至眞等正覺に、繒綵華蓋種種の香薫を供養し、是の如く供養を作さんに、云何が族姓子、其の福寧ろ多しと爲すや不や。』と。須菩提、佛に白して言さく『甚だ多し甚だ多し、世尊。』と。佛言はく『故に善男子善女人、法身の正教を受持諷誦せんに如かず。其の福甚だ多く甚だ多く、譬喩を以て比を爲す可からず。何を以ての故に、中千天下に七寶の塔を起し、及び中千天下の全身舍利を供養し、及び千色身如來（至眞等正覺）を供養するは、皆法身に由つて供養することを得ればなり。』と。佛復た長老須菩提に告げたまはく『云何が族姓子、若し善男子善女人有り、大千天下に於て七寶の塔を起し、及び大千天下の全身舍利（を供養し）及び萬色身如來至眞等正覺に、繒綵花蓋種種の香薫を供養し、是の如く供養せんに、其の功德福寧ろ多しと爲すや不や。』と。須菩提、佛に白して言さく『甚だ多し甚だ多し、世尊。』と。佛言はく『故に善男子善女人、如來法身の正教を受持諷誦せんに如かず。其の「福」功德甚だ多く甚だ多く、譬喩を以て

して一天下に遍ねく、隨時に種種の香花を供養せんに、其の功德福は寧ろ多しと爲すや不や』と。長老須菩提、佛に白して言さく『世尊、甚だ多し甚だ多し』と。佛言はく故に信解脫を得たる、善男子善女人の、舍利を供養して、繒綵華蓋種種の香薰するに如かず。其の功德福稱量す可からず、譬喩を以て比を爲す可からず〔二〕(彼の一天下を供養するに勝りて、塔は上なり)。何を以ての故に、七寶の塔を起して、隨時に禮敬するは、皆舍利に因つて乃ち供養するを得ればなり』と。佛復た長老須菩提に告げたまはく『復た此の塔を置け、若し善男子善女人有り、全身舍利の一天下に滿つるを供養し、時に隨つて繒綵華蓋種種の香薰を供養し、并に一天下の七寶の塔を供養せんに、其の功德福寧ろ多しと爲すや不や』と。長老須菩提、佛に白して言さく『世尊、甚だ多し甚だ多し』と。佛言はく『故に信解脫を得たる、善男子善女人の、一色身如來至眞等正覺を供養するに如かず。其の功德福稱量すべからず、譬喩を以て比を爲す可からず。何を以ての故に、此の善男子善女人の、一天下の七寶の塔及び一天下の全身舍利を供養して、繒綵華蓋種種の香薰するは、皆如來の色身に由つて供養することを得ればなり』と。佛復た須菩提に告げたまはく『云何が族姓子、若し善男子善女人の、信解脫を得るあり、二天下に於て七寶の塔を起し、并に二天下の全身舍利并に二色身如來至眞等正覺を供養して、繒綵華蓋種種の香薰せんに、云何が須菩提、其の福寧ろ多しと爲すや不や。』と。須菩提、佛に白して言さく『甚だ多し、甚だ多し世尊。』と。佛言はく『故に善男子善女人の、法身に供養し、承事諷誦翫習して懈らざるに如かず。其の福甚だ多く甚だ多く、譬喩を以て比を爲す可からず。何を以ての故に、此の善男子善女人の、二天下の七寶の塔及び二天下の全身舍利を供養し、復た二色身如來至眞等正覺を供養し、繒綵華蓋種種の香薰するは、皆法身に由つて供養することを得ればなり。』と。佛復た長老須菩提に告げたまはく『云何が族姓子、若し善男子善女人有り、三天下に於て七寶の塔を起し、并に三天下の全身舍利及び三色身如來至眞等正覺に、繒綵花蓋種種の香薰もて、是の如く供養せば、其の福寧ろ多しと爲すや不や。』と。須菩提、佛に白して言さく『甚だ多し甚だ多し、世尊。』と。佛言はく『故に善男子善女人、法身を受持諷誦して、其の福甚だ多く甚だ多きに如かず。何を以ての故に、三天下の七寶の塔、及び三天下の全身舍利、及び三色身如來至眞等正覺に、皆法身に由つて供養する

【二】此一句麗本にあり、宮本になし。

を愍念し、常に生死を滅せんことを想ひ、永く無爲の處に住す。」佛道は不思議なり、攝意は乃ち律に應ず、入定神足力の、應感量る可からず。」菩薩大乘の迹、變を現ずること恒沙の如く、敎化已に周ねく訖つて、寂然として心意を滅す。」成ずるを見るも未だ必ずしも成ぜず、猶ほ存亡の心有り、成ずるも亦た本と成無くして、乃ち解脱慧に應ず。」

爾の時、世尊、須菩提に告げたまはく、『過去無數恒沙の諸佛の說く所の道敎、衆生を濟度すること各各同じからず。或は如來至眞等正覺有り、衆生を敎化し、佛國土を淨め、一佛國より一佛國に至り、諸佛世尊に供養承事し、衆生を接度し、無餘泥洹界に於て般泥洹し、然る後、如來は乃ち滅度を取る。或は如來至眞等正覺有り、已が國土を淨め、不思議の神足變化を現じ、佛定意に入り、道敎三十七品を敷演し、或は經ること一劫より百千劫に至り、敎化終訖し、皆衆生をして衆苦を離れしめ、無餘泥洹界に於て般泥洹せしめ、然る後、如來は般泥洹を現じ、身を留めて後に在り、普ねく一切をして供養を興致し、極伎樂[一]を顯はして之を娛樂せしめ、神變、光明、六度無極にして、復た無央數の衆生をして悉く無爲の大道を得しむ。或は如來有り、世に在りて敎化し、苦行を修勤し、衆生を荷負するを人の重任と爲し、諸佛の一切の刹土に遊至し、正法を承受し、無上の大道を修し、復た彼の刹に於て神足道を現じ、無央數の諸佛の世界に於て、敎化周ねく訖りて、現に滅度を取り、復た現に全身の舍利を留めて、三千大千世界に遍滿し、衆生を育養し、佛國土を淨め、敎化既に周ねく、復た無數の衆生をして無餘泥洹界に於て般泥洹せしめ、然る後、如來は乃ち滅度を取る』と。佛復た長老須菩提に告げたまはく、『如來の法身は衆德具足し、色身敎化稱量す可からず。復た全身の舍利を留めて衆生を接度し、度する所の衆生窮盡す可からず。若し善男子善女人有り、信心牢固として三寶を恭奉し、及び三世の諸佛世尊を供養せんに、其の功德福稱量すべからず』と。爾の時、長老須菩提、佛に白して言さく『若し善男子善女人有り、佛を信じ法を信じ比丘僧を信じ、猶豫を除去し、邪見を懷かず、法身と及び現在色身とを供養し、及び全身の舍利に供養せんに、此の三功德何れか多しと爲すや』と。爾の時、世尊、長老須菩提に告げたまはく『云何が族姓子、若し人有り、信解脱を得、七寶の塔を起

【一】麗本は顯極伎樂、三本宮本は顯然致樂。

卷の第十一

供養舍利品第三十一

爾の時、尊者長老須菩提、大衆中に在つて竊に此の心を生ずらく、「今如來至眞等正覺の、極妙の法を說きたまふを聞くに、無限曠大不可思議にして、是れ辟支の及ぶ所に非ず。諸法は自然にして生滅有ること無し。云何が無生滅の法中に於て、三道三乘有らんや」と。是の時、長老須菩提卽ち坐より起ち、衣服を齊整し、偏へに右臂を露はし、右膝を地に著け、長跪叉手して卽ち此の偈を以て歎頌して曰さく

本と如來法無し、空の如くにして形有ること無し、云何が三道に於て各々三乘の行有らんや。」一相は本と無相なり、亦た生滅を見ず、學道に窮盡無し、息心を第一と爲す。」海の增減無く、流を呑んで厭くこと無きが如し、虛空正法性の、曠大なること亦復た然なり。」佛は衆聖の王たり、三界に等侶無し 無窮の慧を演布して未度者を度す。」功成じて報を念ぜず、尊豪貴を求めず、勉めて一切人を濟ひ、無上道を獲。」日の天下を照すや、闇に處するもの悉く明を蒙るが如し、聖人の神を降して生るゝや、濟を蒙るを得ざるは莫し。」四大は本と主無きも、忽然として五道に在り、三毒の根を受入し、遂に有無の想を生ず。」形累は縛著に在り、識想乃ち滋く甚し、深淵に沒在するが如く、濟はんと欲するも甚だ難しと爲す。」菩薩大乘の學、刹土各々同じからず、設し滅度を取らんと欲せんに、舍利所在とか爲す。」唯だ願はくば人中の尊、敷演して開悟せしめ、普ねく大世界の爲に 善惡の趣を分別したまへ。」

爾の時、長老須菩提、此の偈を以て佛に問ひ已り、ち坐より起ち、遶佛三匝して、本の位に還復す。爾の時、世尊、復た此の偈を以て須菩提に報へたまふ。

佛子須菩提、空慧を第一と爲す、三世の法に達 し、所說甚だ玄微なり。」念ずる所已の爲ならず、一切人

することを得」と。爾の時、世尊、舍利弗の與に頌を說いて曰はく。
「無盡清淨刹、徹聽如來の國は、本願もて追逮する所にして、衆[20]相悉く成就す。」「一切の諸賢聖は 盡く彼の刹土に[21]集まり、衆德もて自ら瓔珞し、無比の敎を演說す。」「一切の人を開化して、皆其の至味に同ぜしめ、 等定三昧に入りて、衆行悉く具足す。」「本と無數劫より、行權して願を捨てず、十力無所畏なり 故に彼の佛刹に生ず。」「世尊の普き慈蓋は、一切人を愍哀し、念想は願を離れずして、自然に正覺を成ず。」「猶ほ日光明の悉く萬品を照すが如く、菩薩所行の慈 一切普ねく恩を蒙る。」

爾の時、世尊、舍利弗の與に此の偈を說きたまふ時、十三億の衆生有り、皆、無上心を發し、彼の國に生れて聲聞聲聞乘と爲り、上、無上の梵行を修せんことを願ふ。爾の時、世尊、衆會の心中の所念を知りて、便ち笑ひたまへば、口より五色の光を出し、遶佛三匝して還つて面門より入る。時に舍利弗即ち座より起ち、衣服を整理〔頓〕し、長跪叉手して前んで佛に白して言さく、『唯だ然り世尊。佛は妄に笑ひたまはず、願はくば其の意を聞かむ』と。佛、舍利弗に告げたまはく、『汝、此の十三億那術の人も見るや不や。後將來世、此の賢劫を過ぎ、盡く同一の願もて、當に彼の土に生じ、等正覺を成じ、清淨の行を修すべし』と。

〔二〇〕麗本は想、三本宮本は想。
〔二一〕麗本は應、三本宮本は集。
〔二二〕三本宮本は整頓。

晝度清淨刹に、諸聖盡く雲集し、共に諸の道敎を說き、變化窮極なし。」清淨觀如來は、本願の致す所にして、念念に餘想無く、唯だ無上道を修す。」本を捨て闇冥を除き、佛光明慧を現じ、内外悉く清淨にして復た三毒の患なし。一切の衆生の類、法を聞いて輒ち開悟するも、菩薩三道乘には彼に生ずることを得るに緣なし。」辟支三道乘にも、亦復た生ずることを得ず、聲聞辟支乘には、乃ち彼の刹に生ずることを得。」汝等舍利弗、彼の清淨界を觀ぜんに、所度量る可からず、我が能く及ぶ所に非ず。

爾の時、世尊、舍利弗の與に此の偈を說き已るや、復た無數百千の衆生有り、内心に自ら念ずらく、「我等愚惑にして生死に沈翳し、如來無畏の大法を聞かざりき。今の如きは彼の刹の清淨善根具足すと說きたまふを聞く。我等願樂くば彼の土に生れんと欲す。」と。爾の時、世尊、彼の衆生の心中に念ずる所を知つて、便ち諸天人に告げて曰はく、『汝等後生に彼の國土清淨の處に生れ、同日同名にして盡く無上等正覺道を成ぜん』と。時に諸の衆生、佛の授決を聞きて、歡喜踊躍自ら勝ふること能はず。卽ち座より起ち、頭面禮足し、遶佛三匝して本の座に還復す。

爾の時舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、已に如來至眞等正覺、菩薩摩訶薩の三道三乘を說きたまひ、復た辟支佛菩薩の三道三乘を說きたまふを聞き、復た聲聞菩薩乘を聞き、復た聲聞辟支佛乘を聞いて、一切の衆會欣然たならざるはなし。今請ふ、如來、聲聞聲聞菩薩乘を說いて、衆の會者をして悉く開辮を得しめたまはんことを』と。爾の時、世尊、舍利弗に告げたまはく、『汝、聲聞聲聞菩薩乘を聞かんと欲せば、諦かに聽き諦かに聽きて、善く之を思念せよ。吾れ當に汝が與に一一に分別すべし』と。舍利弗、佛に白して言さく、『是の如し世尊』と。佛、舍利弗に告げたまはく、『此を去ること西北八十四江河沙數に利土有り、名けて無盡と曰ふ。佛を徹聽如來至眞等正覺と名け、十號具足す。彼の國は清淨にして衆生は柔和なり。三世の智慧、以て道敎と爲し、菩薩法を行じて總持を失はず、一切の衆生は盡く同じく一意に、正法を奉修して共に相ひ娛樂し、無量の三昧前に現在し、諸佛觀を行じて本要を失はず。彼に浴池有り、微妙なること比無く、賢聖大慈の遊戲する所の處なり。常に法輪を轉じ、不退轉を行じ、諸の菩薩をして悉く成就するを得しめ、諸有の發意、中間に退かず、盡く彼の無盡刹土に生

彼の國盡く賢聖、甘露の法を演吐し、衆の穢惡を蠲除し、生老病死無し。」諸の法典を頒宣し、人を度するに量有ること無く、盡く無爲海に趣き、寂然として滅度を取る。」

爾の時、世尊、舍利弗の與に此の偈を說きたまふ時、座上に七億那術の衆生有り、如來が舍利弗の與に聲聞菩薩大乘の行を說きたまふを聞き、此等の諸人本と聲聞の斷結受證を求めしが、今大聖が聲聞大乘菩薩の行を說きたまふを聞き、各〻座より起ちて世尊の所に至り、頭面禮足して佛に白さく、『我等願くば師子ロ刹土、法成就如來の所に生れ、清淨の行を修し、無上正眞の道を志求せんと欲す』と。佛言はく、『善い哉、善い哉、族姓子、汝等の心意曠大無崖にして、乃ち能く此の聲聞菩薩摩訶衍心を發しぬ、必ず所願を果すこと、亦た虛有ること無けん』と。時に彼の諸人、佛の授決を聞き、欣然として歡喜し、遶佛三匝し、頭面作禮[一九]〔禮足〕して、本の座に還復す。

爾の時、舍利弗、復た佛に白して言さく、『今、如來至眞等正覺、已に菩薩摩訶薩の三道三乘を說きたまひ、已に辟支佛菩薩の三道三乘を說きたまひ、復た聲聞菩薩乘を說きたまふを聞くも、未だ如來が、聲聞菩薩辟支佛乘を說きたまふを聞かず。唯だ願はくば世尊、時を以て敷演し、衆の會者をして永く狐疑無からしめたまへ』と。爾の時、世尊、舍利弗に告げたまはく、『汝、聲聞辟支佛菩薩乘を聞かんと欲せば、諦かに聽け諦かに聽け、吾當に演說すべし』と。舍利弗、佛に白して言さく、『是の如し世尊』と。佛言はく、『舍利弗、西北此を去ること一百億江河沙數を度つて彼に佛土有り、名けて晝度と曰ふ。佛を清淨觀如來至眞等正覺と名け、十號具足す。佛土清淨にして總持忘れず、菩薩所行の法不思議にして、衆生を化度し一向に修道し、諸法熾盛にして佛の聖行を得、神足變化して觸礙する所無し。彼に浴池有り、清淨無穢にして、衆果茂盛し、香氣馥芬たり。池水の中に於て種種の華―優鉢蓮華、拘牟頭華、波頭牟花、分陀利花を生ず。復た異類の奇鳥數十百種有り、彼の池中に在つて共に相ひ娛樂す。諸有の得道せる聲聞辟支佛菩薩乘の者、盡く彼の刹に生ず。池の中央に於て七寶の座有り、縱廣高下一億刹土の如く、上は衆生際を過ぐ。諸有の發意して聲聞辟支佛菩薩乘を求むるもの、盡く彼の刹に生ず。』と。爾の時、世尊、舍利弗の與に頌を說いて曰はく。

【一九】三本宮本は禮足。

礙有らしむること無かれ、」と。爾の時世尊、居士等に告げたまはく、「汝が道心を發すこと、實に有り難しと爲す。我當に汝の等正覺を成ぜんことを證すべし』と。時に諸の居士、佛の授決を聞き、卽ち座より起ち、佛を遶ること三匝し、頭面禮足して本の座に還復す。爾の時、舍利弗復た佛に白して言さく、『世尊、今如來至眞等正覺、已に菩薩摩訶薩の三道三乘の行を說き、復た辟支佛菩薩の三道三乘の行を說きたまふを聞き、諸の來會者此の正法を聞きて、皆無上平等正覺を發しぬ。應に一相行にして本際を失はず、佛事不思議の法を施爲すべし。未だ如來が聲聞菩薩の三道三乘の行を說きたまふを聞かず。唯だ願はくば世尊、今宜しく時を知り、當に衆會の與に正要を敷演し、諸の狐疑をして永く猶豫無からしめたまふべし』と。

爾の時、世尊、舍利弗に告げたまはく、『諦かに聽き、諦かに聽きに、善く之を思念せよ。吾當に汝が與に一一に分別すべし』と。舍利弗、佛に白して言さく、『是の如し、世尊』と。爾の時、佛、舍利弗に告げたまはく、『此を去ること西北百千億江河沙數を過ぎて佛土有り、師子口と名く。佛を法成就如來至眞等正覺と名け、十號具足す。現在して法を說き、大聖の所行周遍せざる無く、諸の菩薩法皆悉く具足す。土界清淨にして、威儀の禮備はり、壽命極めて長く、三惡道無く、戒の德香を以て自ら娛樂し、五分法身、以て禁戒と爲す。彼に浴池有り、清淨なること殊特、香氣苾芬として周普せざる無し。彼の土は虛寂にして石沙穢惡有る無く、泰然として亦た山河石壁無し。彼に浴池有り、深く且つ清涼にして、一切の衆聖盡く彼に集りて浴みし、共に相ひ娛樂す。池中に龍有り、神德無量にして三十二頭なり。時に隨つて雨を降らし、普ねく世界を潤ほす。池の中央に當つて七寶の高座有り、縱廣一億由旬なり。諸有の聲聞菩薩乘を得たる者、彼の七寶無畏の座に詣り、菩薩三十二殊特の業、六度四等無生滅の法を演說す。斯れ宿願に由つて乃ち彼に生ずるを得たるなり』と。爾の時、世尊舍利弗の與に頌を說いて曰はく。

聲聞菩薩乘は、　功勳不思議なり、　光明普ねく照す所、　復た名想を興さず。」　刹土は極めて清淨、　道慧自ら娛樂し、　永く諸の欲愛を離れ、　正法恒に顯曜す。」　日夜道を奉修し、　行淨くして所染無く、　法相の本を見て、　窠窟の處有るを見ず。」　佛藏は甚だ深妙に、　果實唐捐せず、　宿願の追逮する所、　乃ち彼の刹に生ずることを得。」

に至る。一切の大聖、盡く彼の土に集りて如來の六度無極を宣暢す。智慧聞施本願を離れず。十六殊勝如來の深藏、一一に達了して前に現在す。彼の土の衆生に、淫怒癡邪見の者無し。

【一〇】元本升。

彼の池に浴する者、一に盡垢と名け、二に受證と名く。若し菩薩摩訶薩有り、本誓牢固、心願清淨ならんに、彼の刹に生じ、諸根清淨に六情完具するを得、悉く浴池に詣り、自ら欲する所を恣にし、卽ち池上に於て諸の塵垢盡き、辟支佛の菩薩聲聞乘を成じ、等正覺道を得、衆相身を莊ひ、觀るに厭足なし。斯れ宿願に由りて成道せる果證なり』と。爾の時、世尊、舍利弗の與に頌を說いて曰はく。

心は衆行の本たり、導引して識崖を度る、弘誓自ら將御して、無畏にして、正覺を成ず。」忘空して形を計せず、心想法を蠲除し、三有、形累を去りて自然に覺道成ず。」佛本と空慧を修し、彼此に於て求めず、悉く前後心を滅し、是によつて道果を成ぜり。」今生は後生に非ず、假號して其の名を成す、人幻法を以て惑ひ、深淵に沒溺す。」與顯刹土は妙にて、諸聖盡く雲集し、廣曜如來尊、彼に在つて敎化したまふ。」佛心は不定なること無く、志堅くして動ずべからず、行盡きて果實を獲、乃ち彼の刹に生ずるを得たり。」池は八解の味の如く、飮む者衆の患を除き、結縛自然に解けて、便ち無上道を獲。辟支聲聞乘は、功德盡く可からず、意を執りて分散せざれば、尋いで如來の行に應ず。」光明もて人を接化し、功德業を演說し、心淨きふと明珠の如く、塵欲の爲に染せられず。」彼の刹は實に奇特にして、衆行不思議なり、願樂を欲する者有ること、吾前に未だ疑ふこと有らず。」我當に汝を扶接して、威神もて身を擁護すべし、懈怠の意を生ずる勿れ、後に於て悔ゆとも益無からん。」昔無數劫より賢聖の人に遇はず、一たび人道の本を失へば欲し求むること難しとなす。

爾の時、世尊、舍利弗の與に此の偈を說きたまふ時、座上に七千の居士有り、憍慢心を捨て、貢高を除去し、榮飾に著せずして內に自ら剋責すらく、「我等愚惑にして染俗し來ること久し。今如來の深要なる正法を聞く。」各〻座より起ち前んで佛足を禮し、卽ち佛の前に於て弘誓心を發す。「我等願樂くば彼の國に生ぜんと欲す。唯だ願はくば世尊の神力、將接して同誓中に置

の花の如く、香は一切の刹に熏る、餘道の果を受けず解脫至要の妙あり。」佛界は曠くして壃なく、所度計す可す、辟支要集の處法義を說くこと窮無し。」空を解して空有ること無く、志趣退轉せず、神仙の表に行過す、故に辟支乘を號す。」夫れ深妙なる如來の無著の行を崇めんと欲し、咸各〻齊しく發願せば、成佛、難有ることなし。」衆生は上中下　用心各〻同じからざるも、唯だ當に一意を攝して、道果は自然に至るべし。」

爾の時、世尊、舍利弗の與に此の頌を說きたまふ時、七十千の比丘有り、皆弘誓を發して彼の國に生れんことを願ひ、復た菩薩行人無央數の衆有り、願樂して身相如來至眞等正覺及び彼の刹土の諸の辟支佛を見んと欲す。爾の時、世尊、彼の衆生の心中に念ずる所を知つて、便ち頂相より光明を放ちて彼の佛國を照したまふに、掌に珠を觀るが如く晃然として大いに明らかにして、盡く彼の國の清淨無瑕の大聖賢士を見る。爾の時、世尊、光明を還攝して頂より入れたまふに、諸の菩薩、欣然として大寤し、卽ち座より起ちて、世尊の足を禮し、前んで佛に白して言さく、『今大聖の道化を布演したまふを蒙り、旣に光明を蒙りて彼の土を見ることを得、我等の身をして此の形命を捨てしめたまふ。願樂して琉璃佛刹に生れんを欲す』と。爾の時、世尊、衆の菩薩に告げたまはく、『諸の族姓子、發意曠大、弘誓深固ならば、汝等各各盡く彼の國に生じ、同時に成佛して功德成就せん』と。時に諸の菩薩、決を授けられ已つて、起つて佛足を禮し、本の座に還復す。爾の時、舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、今如來、菩薩大乘、菩薩辟支佛乘、菩薩聲聞乘、辟支佛菩薩乘、辟支佛辟支佛乘を說きたまふを聞きて、一切衆生、諸の來會者は信心成就し、各〻道證を獲たれども、未だ如來が辟支佛の菩薩聲聞乘を說きたまふを聞かず。唯だ願はくば開解し、隨時發遣して、衆の會者をして咸く、聞知することを得しめたまへ』と。爾の時、世尊、舍利弗に告げたまはく、『西北此を去ること一億七百萬江河沙數、彼に佛土有り、名けて興顯と曰ふ。佛を廣曜如來至眞等正覺と名け、十號具足す。今現在說法して人を度すること無量なり。世界淨妙の衆德具足し、志趣皆同じくして相ひ違背せず、四等平均にして一切を哀愍し、周旋敎化して本行を離れず、正法を興顯して神足變化す。彼に浴池有り、七寶もて莊嚴し、光光相ひ照して視るに厭足無し。浴池中に衆の花果を生じ、香熏苾芬として稱計すべからず。池の中央に當つて七寶の高座あり、縱廣高卑[一八〇]〔升〕、上梵天

て成佛を得るに至りぬ。」　正法は虚空の如く、　四大は因る所無し、　聚散は須臾の間なり、　生無くして起滅せず。
人身に憂慮多し、　緣對に縛著せらる　彼の土は寂然として定まり、　此の衆の患惱を脱す。」　若し群萠の類をして　精進して功德を殖〔植〕えしめ、　不死の法を獲んと欲せば、　當に彼の國に生ぜんことを願ふべし。」　正使彼の佛念じて　我土に來り至らんと欲せんに、　緣無く起想無くば、　終に此の國に來らず。」　所以は　諸の佛國は　各各殊特別なり、　宿に發する所の願に由つて　度する所各同じからず。」　法辯神妙の義、　義辯衆疑を決し、　應辯は聲の報ふるが如く此の四悉く具足す。」　若し成就を立てんと欲し、　彼の佛を願樂せん者、　弘誓曠大ならば、　立志虚詐ならじ。」

爾の時、世尊、舍利弗の與に此の偈を說きたまふ時、爾の時、座上の七萬の比丘、本と小乘を求めて漏を斷じ證を取れるものの盡く皆、意を廻らして、彼の國に生れて辟支佛菩薩大乘たらんを願ひ、復た無數の諸天人民有りて、須陀洹果に逮る。爾の時舍利弗、佛に白して言さく『世尊、如來、菩薩摩訶薩の三道三乘を說きたまひ、又復た辟支佛道の菩薩大乘を演說したまふを聞いて、一切の衆會歡然たらざるは莫く、功德具足し善心生じぬ。今願はくば聞かんと欲す、辟支佛辟支佛乘とは其の義云何。亦た衆生心をして開寤するを得しめたまへ』と。爾の時、世尊、舍利弗に告げて言はく『此を去ること西北八十四江河沙數、復た此の數を過ぎて佛土有り、名けて淸琉璃と曰ふ。佛を身相如來至眞等正覺と名く、十號具足す。彼の國は寬博にして衆穢無く、刹土は平整にして坦然として礙無し。彼に浴池有り、淸涼微妙なり。池の中央に於て七寶の高座有り、高廣なる嚴飾衆生際に至る。諸有の辟支佛辟支佛乘を得る者、盡く彼の國に現じ、周流教化して妙法殊勝の行を講論す。諸有の發願して彼に生れんと欲する者、皆本心を遂げて中間、礙無し』と。爾の時、世尊、舍利弗の與に頌を說いて曰はく。

一向に心意識、　執意動ずべからず、　本願に牽連せられて、　乃ち彼の佛土に生ず。」　德を積むこと恒沙の如く、
生死の元を拔かんを要せば本無の性、　常に定まり、　泥洹淸淨の樂あり。」　辟支緣覺乘は　執心邊崖無し、　琉璃刹土は妙にして　身相〔七〕如來の居なり。」　面は白蓮

〔七〕三本宮本は如摩尼。

盡く菩薩聲聞乘を具足し成ぜしむ。」 吾れ昔發意錯り、 苦行量る可からず、 彼の因緣の與に、 此の五濁の世に王たらず。」 今佛道を成じ、 神足自在に遊ぶと雖も、 願ひて彼の土に至らんと欲するに、 其の例に在るに由なし。 諸佛の境界は異り、 所願各同じからず、 彼の緣に與らんと欲せば、 發願せんに豈に晩きに在らんや。」

爾の時、世尊、舍利弗の與に此の偈を說き已るや、時に座上百億那術の諸天人民、皆弘誓曠大の心を發し、願樂して法觀如來の菩薩聲聞の佛土に生れんと欲す。彼の佛刹土には、菩薩大乘有ること無く、菩薩辟支佛乘有ること無く、唯だ菩薩聲聞乘有るのみ、盡く彼の國に生じ共に相娛樂するは、皆宿願に由つて彼に生ずることを得るなり。爾の時、舍利弗復た佛に白して言さく、『世尊、今如來、菩薩摩訶薩の菩薩大乘、菩薩辟支佛乘、菩薩聲聞乘を說きたまふを聞き、一切衆生、皆悉く奉行し信樂し承受す。今請ふ、如來、辟支佛の菩薩大乘、辟支佛の辟支佛乘、辟支佛の聲聞乘を說きたまはんことを。願樂くば聞いて心の狐疑を解せんと欲す』と。爾の時、世尊、舍利弗に告げたまはく、『諦かに聽き諦かに聽き、善く之を思念せよ。吾れ當に汝が與に一一に分別すべし』と。舍利弗答へて曰さく、『是の如し、世尊』と。佛、舍利弗に告げたまはく、『此を去ること西北四十四江河沙に佛土有り、名けて雷吼と曰ふ。佛を如意如來至眞等正覺と名け、十號具足す。彼の國は殊特の七寶もて成就し、衆生は賢柔にして辯才通達し、智慧海の如く、言妄に發せず、淸白の事を說きて以て禁戒と爲し、法法成就して相ひ拒逆せず。彼に浴池有り、上に說く所の如し。彼の浴池中に七寶の金剛師子の座有り。高廣にして上は衆生の表に徹す。一切の辟支佛菩薩大乘　悉く彼の國に生じ、共に相ひ敬順して貢高を懷かず、本と所造の緣、誓願に違はず、住する壽恒沙にして神足自在なり』と。

爾の時、世尊、舍利弗の與に頌を說いて曰はく、

虛空には邊際無し、 淸白の行各異る。 [一六]心、本無慧の如きは、 緣覺の由つて利〔刹〕する所なり。 緣覺菩薩乘は 昔の發意に由つて得、 光相ひ自ら嚴飾して、 優劣の行を計せず。」 永く諸の苦惱を離れ、 諸の法相を闕かず、 乃ち無數世より行じ

【一六】心如本無慧、緣覺所利。三本宮本は無際に作り、宮本は由刹に作る。

無く、唯だ菩薩辟支佛乘有るのみ。所以は何ん。皆宿願に由つて彼に生ずるを得。三十七道品の法を分別し、共に相、娛樂して道教を演布すればなり。是を族姓子、菩薩辟支佛乘所居の處と謂ふ。菩薩聲聞乘の能く逮及ぶ所に非ず』と。爾の時、世尊、舍利弗の與に便ち此の偈を說きたまふ。

如來は不思議にして、諸法各〻殊特なり、菩薩大乘の慧、刹土亦た各〻異る。」賢聖辟支乘、普ねく集まりて同じく一味にして、相勸めて現に教化し、無比の法を演布す。」清淨の音を演暢し、平等にして二心無し、宿本願の報に由つて故に彼の刹土に生ず。七寶の高座に處し、雷吼して三界に震ひ、度する所、量有ることなく、自然に法律に應ず。」生死の本を計せず、憂喜の想を懷かず、有無の行に著せず、本末空を計せず。」今汝舍利弗知らんと欲する辟支乘、國土、佛の姓號、所說の義は是の如し。」

爾の時舍利弗、復た佛に白して言さく『世尊、如來至眞等正覺の廣長舌、神口を以て說く所の菩薩大乘、菩薩緣覺乘は、今已に具に知れり。願樂くば聞かんと欲す、菩薩聲聞乘の所行の法則、其の事云何』と。爾の時、世尊、舍利弗に告げたまはく、『西北此を去ること二十四江河沙を度り已り、復た二十四江河沙數を過ぎて、彼に佛土有り、毛孔光と名く。佛を法觀如來至眞等正覺と名け、十號具足す。彼の國は清淨にして、一切の衆生は四空定を具し、神足變化、賢聖に超過す。彼に浴池有り、上の如く異ること無し。皆宿願に由つて彼に生ずるを得、鬚髮を剃除し、袈裟法服を著し、六度空無相願を具足し、度する所の衆生稱量す可からず。彼の土の菩薩聲聞乘の者は、我が國土の一生補處に勝る。然る所以は、今此の菩薩は阿惟顏に逮り、百劫教化して盡く道門に趣かしめ、各各成就して不退轉に立つが故に、彼の國の菩薩聲聞の一日化する所の濟度の衆生に、百倍千倍巨億萬倍すること、譬喩を以て比と爲すべからざるが如くならず』と。爾の時、世尊、舍利弗の與に復た頌を說いて曰はく。

清淨なること金精の如く、亦た星中の月の如く、禁戒威儀具れば乃ち彼の佛國に生ず。」法觀の大賢聖は無量の行を宿積し、虛無慧を分別し、心正しくして餘想無し。」說法して衆生を度すること、一會に恒沙數あり

彼の國に生じて等正覺を成じ、衆生を教化して窮極有ること無かるべし。彼の國の人民は壽命各等しくして中夭の者有ること無し。其の壽を知らんと欲せば、亦た無量佛國の如し。但、男女の衆生は、阿彌陀佛國の得道者に如かざるなり』と。是の時、舍利弗、佛の所說を聞いて未曾有と怪しみ、一切衆會皆狐疑を懷く。即ち座より起ち、偏へに右臂を露はし、右膝を地に著け長跪叉手し、前んで佛に白して言さく、『世尊、今如來の大乘不退轉行を演說し、大乘の翼從已が國土を成ぜるを聞く。願樂はくは聞かんと欲す。云何が大乘菩薩と爲し、云何が大乘辟支佛と爲し、云何が大乘聲聞と爲す』と。佛、舍利弗に告げたまはく、『菩薩三乘には各三品有り、辟支三乘も亦た三品有り、聲聞三乘も亦た三品有り。是に於て舍利弗、菩薩三乘を知らんと欲せば、今汝が與に說かん。菩薩大乘有り、菩薩辟支佛乘有り、菩薩聲聞乘有り、是を菩薩三乘と謂ふ。又た舍利弗、辟支佛三乘とは、辟支佛菩薩大乘有り、辟支佛菩薩緣覺乘有り、辟支佛菩薩聲聞乘有り、是を辟支三乘と謂ふ。又た舍利弗、聲聞三乘とは、聲聞大乘有り、聲聞辟支佛乘有り、聲聞無著乘有り。是を聲聞三乘と謂ふ』と。時に舍利弗、復た佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩大乘と爲す』と。佛、舍利弗に告げたまはく、『慧眼菩薩の所生の國土、慧造如來の境界是れなり。若し菩薩摩訶薩有り、弘誓心を發して小道を樂はずば、上に願ふ所の如く、盡く彼の慧造國土に生ずるを得ん』と。時に舍利弗復た佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩辟支佛乘と爲す』と。佛、舍利弗に告げたまはく、『西北此を去ること十四江河沙を過ぎ已つて、復た十四江沙數を過ぎて佛土有り。名けて淨泰と爲し、佛を無動如來至眞等正覺と名け、十號具足す。國土清淨にして淫[一五]〔婬〕怒癡無く、上下恭順にして淸虛を貴び修し、彼の土の衆生は盡く一行を修し、普ねく出家して無上正眞を學び、平等覺を修す。彼の佛境界に一浴池有り。縱廣は一佛世界にして、浴池の東口は百千萬由旬、浴池の南口は百千萬由旬、浴池の西口は百千萬由旬、浴池の北口は百千萬由旬なり。諸有の菩薩、大乘辟支佛を修する者盡く彼の國に生ず。異類の奇鳥、數十百種なるが池中に遊戲し、種種の香熏遍ねく世界に布き、七寶の樹、華果香潔を生じ、彼の池水の中に憂鉢蓮花、鉢頭牟花、拘物頭花、分陀利花、皆池水中に生じ、池の中央に當つて七寶の高座有り、縱廣高下衆生界に過ぎ、盡く諸の賢聖の居する所の處なり。時の如く舍利弗、彼の佛國界には菩薩大乘有ること

【一五】　三本宮本は婬。

三道三乘品第三十

爾の時、世尊、舍利弗に告げたまはく、『汝等此の慧眼菩薩の四辯才衆智自在なるを得、心意定を修し、大衆中に在りて、菩薩諸法の深奥なるを演暢するを觀よ。此の菩薩は久如にして當に等正覺を成ずべきや』と。時に舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、我等聲聞は所見微尠にして、豈に能く大聖の法典を測度せんや。唯願はくば世尊、道化を演布して、衆の會者をして悉く其の要を聞かしめたまへ』と。

爾の時、世尊、舍利弗に告げたまはく、『諦らかに聽け諦らかに聽け、善く之を思念せよ、吾當に汝が與に正要を宣暢すべし』と。舍利弗言さく、『是の如し、世尊』と。佛、舍利弗に告げたまはく、『西北此を去ること十四江河沙數、彼に佛國有り、衆智自在と名く。佛を慧造如來、至眞等正覺、明行成爲、善逝、世間解、無上士、道法御、天人師、と名け、佛、世尊と號す。彼の佛如來初めて道心を發すや、廣大にして崖無く。衆聖諸の受別者に超過す。彼の佛如來此の弘誓の心を發す。—若し我れ成佛せば、生死と別れ、憒鬧五濁鼎溝に處らず、我が國土をして清淨無瑕ならしめん、我旣に成佛せば、翼從成就し男女各別にして貪欲の心無からしめん。復た此の願を發す。—我が國土の一切衆生をして、光光相照して、日月星宿の光明有ること無からしめ、水精、琉璃、車渠、馬瑙、眞珠、虎珀、金銀の七寶もて、己が國を莊嚴し、我が國土をして同一水乳ならしめん。亦た我が剎をして一浴池の四天下の如き有らしめん。梟鴈鴛鴦盡く七寶身にして、悲鳴相和し共に相娛樂し、浴池の東口より流水する所の處は縱廣千由旬、浴池の南口は縱廣千由旬、浴池の西口は縱廣千由旬、浴池北口は縱廣千由旬にして、浴池の中央に當つて自然に七寶の高座有り、高下縱廣各千由旬。諸の十方無量無限無邊際恒沙の國土の大乘の菩薩、樹王の下に坐して永く心結を除き、魔宮〔官〕を降伏し、無上道を成ぜん。卽ち其の日に於て、來つて此の剎に至り、我が浴池に詣つて七寶の座に昇り、大乘不退轉の行を演說せんに、大乘の翼從、弘誓を發す者皆我が國に詣り、我が國土をして大乘菩薩無く、大乘辟支佛無く、大乘聲聞の者無からしめん。』と。佛復た舍利弗に告げたまはく、『今此の慧眼菩薩、大乘牢固として心沮壞し難し。當に

即ち佛前に於て頌を說いて曰はく。

「無著にして汚す可からず、三界の有に染せず。德香一切を淨め、法門窮盡無し。」八百六度の行は世雄の宣暢する所なり、衆生心を分別するに意趣各同じからず。」無量の諸德の本より、權現して世俗に入り、旣に善道敎を布き、超えて無爲の岸に至らしむ」。今日大いに慈哀して法を演べて窮極無し、過去恒沙の佛も法を演べてこと亦今の如し。」福業、五德を修し、倒見を降伏し、色身に身報無きは、諸佛の深奥の藏なり。」報なく報あるに非ず、泥洹の性は自ら空なり、衆生自ら念を興して、心に報無報を存す。」分別想を除くを行じ、如來業を思惟すれば、生に非ず無生に非ず、故に菩薩門に應ず。」法を說きて法有るに非ず、亦た衆生想無し、樂想もて苦想を去りて、生滅永く已に寂す。」福響自然に應じ、空の如く所著無し、一意に正覺を成じ、色報所在とか爲す。」[一四]天世間を統べて王たる、眞諦は盡す可からず、入定して非常を現じ、終に滅盡の本に歸す。」道心は內に在らず、亦復た外に在らず、苦想若干念、求道して根原〔源〕を盡す。」百千定を思惟して、生生に未だ始めより斷ぜず、係意して乃ち斷心せば、亂想何に由つてか生ぜん。」菩薩所行の業、法門各同じからす、無量の法を欲し求めば、當に衆生に於て求むべし。」法法自然に生じて、法慧に窠窟無し、生を尋めるに本と生無し、何ぞ法の原〔源〕本有らんや。」智を積みて百劫を過ぎ、慧を修して懈怠せず、進んで八等行を成す、故に人中の尊と號す。」有報も有報に非ず、亦た色身の相無し、衆智の業を瓔珞して現身に俗を敎化す。」表裏紫金の如く音響極めて柔輭〔軟〕なり、所說唐捐せず、聞く者皆得度す。」我は螢火の光の如く、自ら照せども彼を益すること無し、佛日は大千を照して闇冥の處を知らず。」豈に敢へて朝露を以て江海の潤を增益せん、佛大聖の威を承く故に菩薩門を說く。」菩薩慧光を放ちて永く衆生の冥を除き、愚惑の根本を拔きて賢聖の道前に在り。」

【一四】統王天世間。

法相法門有り、菩薩此の法門を得れば、一一に諸法の相貌を分別す。復た無形相法門有り、菩薩此の法門を得れば、一切諸法、現じて前に在り。復た劫數法門有り、菩薩此の法門を得れば、苦行を執懃して生死を離れず。復た道行法門有り、菩薩此の法門を得れば、五行を思惟して、不淨想を觀ず。復た深入法門有り、菩薩此の法門を得れば、深く法[二一]〔諸〕寶無盡の藏に入る。復た化導法門有り、菩薩此の法門を得れば、一切衆生の類を育養す。復た來往法門有り、菩薩此の法門を得れば、周旋教化して心に懈怠無し。復た成就法門有り、菩薩此の法門を得れば、道果成熟して五趣を捨てず。復た徹照法門有り、菩薩此の法門を得れば、一意入定して若干想無し。復た無量法門有り、菩薩此の法門を得れば、所行の衆法、不可思議なり。復た如來禪定法門有り、菩薩此の法門を得れば、現在無量の空行を修習す。復た應響法門有り、菩薩此の法門を得れば、衆願を具足して永く意想を除く。復た變化法門有り、菩薩此の法門を得れば、分身に散形に願ふ所自由なり。復た無闕減法門有り、菩薩此の法門を得れば、衆生の意想の所念を淨除す。復た通達來往法門有り、菩薩此の法門を得れば、一一の毛孔、衆生界を淨む。復た無形法門有り、菩薩此の法門を得れば、教化無形にして法界清淨なり。復た無礙法門有り、菩薩此の法門を得れば、無量の衆生、四非常を離る。復た苦音法門有り、菩薩此の法門を得れば、習苦の衆生をして永く縛著を離れしむ復た習[二二]〔集〕音法門有り、菩薩此の法門を得れば、縛著の衆生をして永く習緒[二三]〔縛〕を離れしむ。復た盡音法門有り、菩薩此の法門を得れば、有盡の衆生をして無盡の泥洹に至らしむ。復た道音法門有り、菩薩此の法門を得れば、六十二塵勞の心を興さず。復た威儀法門有り、菩薩此の法門を得れば、進止に行來に儀則を失はず。復た眞性法門有り、菩薩此の法門を得れば、眷屬を分別して卑賤に處らず。復た直視法門有り、菩薩此の法門を得れば、五陰を分別して一向に道を趣むく。復た天行法門有り、菩薩此の法門を得れば、往いて天人に入り、清淨の本を修す。復た人行法門有り、菩薩此の法門を得れば、人道衆生に入り、誘進して度せしむ。復た畜生行法門有り、菩薩此の法門を得れば、隨形入化して、悉く道門に歸せしむ。復た餓鬼法門有り、菩薩此の法門を得れば、勸めて貪を除きて悕望する所無からしむ。復た地獄法門有り、菩薩此の法門を得れば、現身入化して善心を發さしむ』と。爾の時、慧眼菩薩

〔二一〕宋宮二本は諸。
〔二二〕元明二本は集。
〔二三〕宋宮二本は習傳、元明二本は集傳。

く一切を熏ずべし。復た善權法門有り、菩薩此の法門を得れば、隨形適化して度者を見ず。復た曉了法門有り、菩薩此の法門を得れば、音響を分別して取りて之を度す。復た無我法門有り、菩薩此の法門を得れば、諸法空無所有なるを解知す。復た善住法門有り、菩薩此の法門を得れば、弘誓堅固にして心、動轉せず。復た無數身法門有り、菩薩此の法門を得れば、一一に分別して衆生を限らず。復た善入法門有り、菩薩此の法門を得れば、盡く衆生を化し、進んで法律に入る。復た法自在法門有り、菩薩此の法門を得れば、正法を堪受し、下問を恥ぢず。復た淨妙法門有り、菩薩此の法門を得れば、諸の佛國に遊びて法弱を懷かず。復た無侶法門有り、菩薩此の法門を得れば、心、自ら寂を樂しみ一切を嬈はさず。復た無量功德法門有り、菩薩此の法門を得れば、眷屬成就して、果實報を得。復た放光明法門有り、菩薩此の法門を得れば、遍ねく一切諸の闇冥に在るを照す。復た無欺法門有り、菩薩此の法門を得れば、口行を具足して四過を犯さず。復た勸德法門有り、菩薩此の法門を得れば、諸の及ばざるを愍れみ、不死の法を雨らす。復た依憑法門有り、菩薩此の法門を得れば、盡く衆生をして歸趣有らしむ。復た拔濟法門有り、菩薩此の法門を得れば、功德心を增益し、心淨きこと空の如し。復た無際法門有り、菩薩此の法門を得れば、度して成就するを得る者有るを見ず。復た等行法門有り、菩薩此の法門を得れば、衆智を分別して邊際有ること無し。復た平等法門有り、菩薩此の法門を得れば、諸道に種種の乘有るを說かず。復た一意法門有り、菩薩此の法門を得れば、發意して趣道する者有るを見ず。復た虛空法門有り、菩薩此の法門を得れば、諸の等定に入りて意分散せず。復た然熾法門有り、菩薩此の法門を得れば、廣く一切無窮盡の法を演ぶ。復た分別法界法門有り、菩薩此の法門を得れば、一一に法界の興る所を分別す。復た越境界法門有り、菩薩此の法門を得れば、一切を救護して彼岸に至るを得しむ。復た究竟法門有り、菩薩此の法門を得れば、諸法窠窟を出生するを見ず。復た淨觀法門有り、菩薩此の法門を得れば、衆生を識らず清淨の法を見る。復た滿足法門有り、菩薩此の法門を得れば、劫數を以て、以て遠きを現ずと爲さず。復た出要法門有り、菩薩此の法門を得れば、一切智を行じて法想を起さず。復た出生法門有り、菩薩此の法門を得れば、一切法の深奧を義を出す。復た利根法門有り、菩薩此の法門を得れば、一趣の道を聞いて不退轉に立つ。復た次第法門有り、菩薩此の法門を得れば、諸法を修習して本要を失はず。復た

の法門を得れば、無生心を發して動還を見ず。復た法瓔珞法門有り、菩薩此の法門を得れば、國土を莊嚴し衆生を淸淨にす。復た深奥法門有り、菩薩此の法門を得れば、深く法藏に入りて七覺意を具す。復た無畏法門有り、菩薩此の法門を得れば、諸法に安處して賢聖の行を說く。復た除垢法門有り、菩薩此の法門を得れば、諸法に安處して染著する所無し。復た淨行法門有り、菩薩此の法門を得れば、三向―空無相願―を分別す。復た法身法門有り、菩薩此の法門を得れば、一切の無著空行を分別す。復た法力法門有り、菩薩此の法門を得れば、無量の空界に大智慧を獲。復た無礙法門有り、菩薩此の法門を得れば、道敎を敷演して罣礙する所無し。復た大慈法門有り、菩薩此の法門を得れば、潤ひ一切に及びて妄想を捨てず。復た大悲法門有り、菩薩此の法門を得れば、苦難を拔濟して塵勞を生ぜず。復た喜心法門有り、菩薩此の法門を得れば、一切の忿怒心を蠲除す。復た護心法門有り、菩薩此の法門を得れば、四諦不二の法を分別す。復た廣施法門有り、菩薩此の法門を得れば、三想を除去して吾我を計せず。復た神通法門有り、菩薩此の法門を得れば、十方無量の世界に遍遊す。復た無盡法門有り、菩薩此の法門を得れば、義趣を分別して三句法を修す。復た演暢法門有り、菩薩此の法門を得れば、功德具足す、來道を懷くが故に。復た淸淨法門有り、菩薩此の法門を得れば、口過を淨除して十惡を興さず。復た十力法門有り、菩薩此の法門を得れば、金剛心を執りて沮壞す可からず。復た無量善根法門有り、菩薩此の法門を得れば、便ち能く如來の神力を具足す。復た如來行滅法門有り、菩薩此の法門を得れば、吾我、我人、壽命を起さず。復た息意法門有り、菩薩此の法門を得れば、永く生老病死の苦を斷ず。復た增益法門有り、菩薩此の法門を得れば、諸善功德日日に增長す。復た歡喜法門有り、菩薩此の法門を得れば、一切の道を渴仰する者を充飽せしむ。復た無怒法門有り、菩薩此の法門を得れば、心の緣著を除きて顚倒の想無し。復た悕望法門有り、菩薩此の法門を得れば、衆生の三法本行を成就す。復た無念法門有り、菩薩此の法門を得れば、盡く衆生をして三毒の念無からしむ。復た法義法門有り、菩薩此の法門を得れば、諸法を出生して次第を失はず。復た速疾法門有り、菩薩此の法門を得れば、根元を分別し、[10]道行迹を成ず。復た思惟法門有り、菩薩此の法門を得れば、內外を分別し、諸の不淨を觀ず。復た香熏法門有り、菩薩此の法門を得れば、當に戒德の香を以て普ね

【10】麗本は成道行迹、三本宮本は成道而行。

す。復た無等法門有り、菩薩此の法門を得れば、如來深奥の義を分別す。復た法要法門有り、菩薩此の法門を得れば、如來不思議の法を宣暢す。復た善根法門有り、菩薩此の法門を得れば、諸根を分別して永く五道を離る。復た幻化法門有り、菩薩此の法門を得れば、無盡曠大の法を分別す。復た攝行法門有り、菩薩此の法門を得れば、句義を分別して形像法なし。復た稱可法門有り、菩薩此の法門を得れば、便ち能く虚想法の者を充飽す。復た一[五]（得）意法門有り、菩薩此の法門を得れば、善根淳熟して四無畏を得。復た法海法門有り、菩薩此の法門を得れば、善業具足して道性を捨てず。復た光炎法門有り、菩薩此の法門を得れば、普く光炎を現じて法を演ずること無盡なり。復た神足法門有り、菩薩此の法門を得れば、廣く諸界に遊びて三道に染せず。復た日月光明法門有り、菩薩此の法門を得れば、遍ねく苦惱を照し拔濟して度を得しむ。復た無生法門有り、菩薩此の法門を得れば、方同導化して自然の[六]津に應ず。復た無極[七]（之）慧法門有り、菩薩此の法門を得れば、三界の患を超えて度有るを見ず。復た智生法門有り、菩薩此の法門を得れば、盡く諸法の歸趣する所の處を知る。復た無著法門有り、菩薩此の法門を得れば、智慧光を以て闇冥を蠲除す。復た根原〔源〕法門有り、菩薩此の法門を得れば、四法不思議行を分別す。復た因緣法門有り、菩薩此の法門を得れば、十二癡行の本を分別す。復た道慧法門有り、菩薩此の法門を得れば、法性如來三等を闕かず。復た忍智法門有り、菩薩此の法門を得れば、樹王下に坐して魔官[八]〔宮〕を降伏す。復た弘誓法門有り、菩薩此の法門を得れば、衆生を捨てずして滅度を取る。復た苦行法門有り、菩薩此の法門を得れば、麻米を食するを現じて諸行具足す。復た獨歩法門有り、菩薩此の法門を得れば、自ら奇特を現じて與に等しき者無し。復た心淨法門有り、菩薩此の法門を得れば、心垢を蠲除して染著する所無し。復た究竟法門有り。菩薩此の法門を得れば、此衆生をして出要道に入らしむ。復た無欲法門有り、菩薩此の法門を得れば、貪著を除去して染著の心無し。復た法處法門有り、菩薩此の法門を得れば、一切を愍哀して本願を捨てず、復た道業法門有り、菩薩此の法門を得れば、諸根を分別して上人の法を立つ。復た心不轉法門有り、菩薩此の法門を得れば、道心を發す者不退轉に立つ。復た法藏法門有り、菩薩此の法門を得れば、道慧淸淨にして慧の果證を受く。復た化道[九]〔導〕法門有り、菩薩此

〔五〕三本宮本得字なし。
〔六〕三本宮本は律。
〔七〕三本宮本之字あり。
〔八〕三本宮本は宮。
〔九〕三本宮本は導。

れ如來の色身無報なる』と。文殊師利又問ふ、『云何が族姓子、如來の色身の無爲報と泥洹の無爲報と、是れ一なりや異なりや。假し是をして一ならしめば、亦た如來無し、云何が無報有らん。說いて二無有らば、則ち如來の色身は泥洹報に非ず』と。爾の時、慧眼菩薩、文殊師利に報へて曰はく、『本無の如來至眞等正覺の四大色身は、現法中に於て、亦た是れ有報、亦れ是れ無報なり。滅盡涅槃は是を無報と曰ふ』と。爾の時慧眼菩薩復た文殊師利に報ふ、『衆生所行の六度無極、若し人、布施して、亦た施想無く、亦復た受施者有るを見ざれば、是を施を爲して施度無極を具足すと謂ふ。若し復た人有り、戒身具足して戒を毀らず、亦復た持戒者有るを見ずば、是を戒に於て戒度無極を具足すと謂ふ』と。慧眼菩薩復た文殊師利に語る、『若し善男子善女人有り、恒に忍辱を修し、輕慢する者有るも憍慢を生ぜず、亦た自ら念じて忍辱有るを見ざる、是を忍度無極を具足す、と謂ふ。若し善男子善女人有り、懃めて精進を加へ、十六聖行を修して、人の懃めて精進する者を見ずば、是を進度無極を具足すと謂ふ』と。慧眼菩薩復た文殊師利に語る、『若し善男子善女人有り、攝意入定して三觀を分別し、亦た人の定意を立つる者を見ず、心、十方無量の世界に遊びて承事供養し、一切法は幻の如く化の如しと觀ぜば、是を禪度無極を具足すと謂ふ』と。慧眼菩薩復た文殊師利に語る、『若し善男子善女人、如來の無量の法界を宣暢せんに、眼識は清淨不可思議なり、一一に分別するに、悉く所有無し、若し耳に聲を聞きて從來する所を知り、鼻、彼の香を嗅ぎて從來する所を知るも、一一分別するに所有無く、舌、味を嘗めて從來する所を知り、如來の心識、諸法を分別するに神足無量なり。是を智度無極を具足すと謂ふ』と。慧眼菩薩復た文殊師利に語る『復た定意有り、無盡法門と名く。菩薩摩訶薩此の無盡法門を得れば、三乘を超越して菩薩號を成ず。復た觀察法門有り、菩薩摩訶薩此の法門を得れば、法界を觀察して二地に住せず。復た色像法門有り、菩薩此の法門を得れば、如來法無盡の藏を成ず。復た不退轉法門有り、菩薩此の法門を得れば、清淨法を[三]轉〔持〕じて色像を見ず。復た廣濟法門有り、菩薩此の法門を得れば、彼の衆生を化して自ら己の爲にせず。復た佛[四]普〔音〕響法門有り、菩薩此の法門を得れば、法の甘露を雨らして一切を潤澤す。復た諸佛境界法門有り、菩薩此の法門を得れば、現に微妙の眞如性法を說く。復た現教法門有り、菩薩此の法門を得れば、刹土を莊嚴し、翼從成就

【三】三本宮本は持。
【四】三本宮本は音。

積の如し。是れ有想の報とせんや、無想の報なりや』と。

文殊師利、慧眼菩薩に報へて曰はく『如來の色身は是れ有想の報なり、如來の法身は是れ無想の報なり』と。慧眼菩薩又た問ふ『施して貪求を去り、內心淸淨にして、想著を除去せば乃ち大果を獲。六度の法は無想の報に非ず、云何が乃ち法身の報を成ぜん』と。時に文殊師利、慧眼菩薩に報へて曰はく『云何が族姓子、如來の色身は有と爲すや、無と爲すや』と。慧眼菩薩報へて曰はく『族姓子の所說の如くば、如來の色身は是れ有報にして無報に非ず。我が觀察する如きは、如來の身は亦た有報に非ず、亦た無報に非ず』と。時に文殊師利復た問ふ『云何が如來の(色)身は亦た有報に非ず、亦た無報に非ざる』と。慧眼、文殊師利に答へて曰はく『如來の身は衆の功德具はり、妙色莊嚴し、觀るに厭足なし。其の形を見る者は皆無上正眞道の意を發す。是を色身の報と謂ふ。云何が如來の色身は無報なる。是に於て族姓子、如來世に在りて教化終訖したまへば、神を無爲に潛めて終に變易無く、一相無形にして沮壞すべからず。是を如來の色身は無報なりと謂ふ』と。爾の時、文師殊利、復た慧眼菩薩に問うて曰はく『云何が族姓子、如來の形相は不可思議なり。有形を以て無報なるや、無形を以て無報なるや』と。慧眼報へて曰はく『如來の身は或は有形にして無報なり、或は無形にして無報なり。云何が有形にして無報なる。如來至眞等正覺、世に在して無量の衆生を教化したまひ、皆果證を得、無爲道を獲る、是を如來の色身は有形にして無報なりと謂ふ。云何が無形にして無報なる。是に於て如來の色身世に在して教化したまひ、神足變を現じて說法を終訖り、無餘泥洹界に於て般泥洹を取りたまふ、是を如來の色身は無形にして無報なりと謂ふ』と。

爾の時、文殊師利、諸の衆生の心中に念ずる所、各狐疑有り、未だ能く有報無報に暢達せざるを知り、復た慧眼菩薩に問うて曰はく『云何が族姓子、如來の色身は幻の如く化の如きに、云何が幻化法中に於て而も無報有る。一切衆生は法性を得ること、道果の清淨なるが如し、若し眼界の所攝ならば、云何が衆生の道性に於て無報なるを得る』と。又、慧眼に問ふ『如來の色身は不可思議にして、說法を終訖して寂然として滅度し、生老病死無く、已に色身を捨てゝ復た受形したまはずば、一相無相にして、亦た見る可からず。權りに假號を說くも亦た眞實無し、如來は亦た如來無く、亦た佛無し。云何が無爲道を以て、是

卷の第十

賢聖品第二十九

爾の時審諦菩薩、即ち坐從り起ち、佛に白して言さく、『世尊、我も亦た六度清淨の行を宣暢するに堪任す』と。佛審諦菩薩に告げたまはく、『若し堪任せば、如來の前に於て便ち之を說く可し』と。爾の時審諦菩薩、佛に言さく、『世尊、若し菩薩摩訶薩有り、六度清淨の法を修習し兼ねて八門〔闕〕ー諸佛の禁法ーを修せば、此の善男子善女人、六度の法に於て清淨の行を具足せん』と。淨意菩薩、佛に白して言さく、『若し善男子善女人有り、十方の諸佛世尊を禮し、正敎を承受して修習奉行せんと欲せば、此の如き等の善男子善女人は、六度の法に於て清淨具足せん』と。那羅延菩薩前んで佛に白して言さく、『若し善男子善女人有り、諸結を斷じて染汚を生ぜざらしめば、六度の法に於て清淨具足せん』と。淨法界菩薩、佛に白して言さく、『若し善男子善女人有り、自然法性を解して道門を毀らずば、六度の法に於て清淨具足せん』と。善解幻菩薩、佛に白して言さく、『若し善男子善女人有り、八法を分別して榮辱を除去せば、六度の法に於て清淨具足せん』と。過量菩薩、佛に白して言さく、『若し善男子善女人有り、大衆中に在つて無上法輪を轉じ、身口意を攝して他異念無くんば、六度の法に於て清淨具足せん』と。法藏菩薩、佛に白して言さく、『四空定を解して我人の想無く、法界を思惟して智本を毀らざらば、是を六度清淨具足す、と謂ふ』と。心淨菩薩、佛に白して言さく、『若し善男子善女人有り、〔二〕眼根〔本〕を攝して識相を興さず、耳鼻身口意も亦た復た是の如くば、六度の法に於て清淨具足せん』と。師子大將、佛に白して言さく、『衆生翳に沈みて永く闇冥に處す、慧光を布現して道趣を知らしめば、六度の法に於て清淨具足せん』と。時に菩薩有り、名けて慧眼と曰ふ。文殊師利に問ふ、『云何が菩薩摩訶薩、身口意を攝して戒性を毀らずば、六度に於て清淨具足する』と。是の時、文殊師利、慧眼菩薩に報ふ、『諸の菩薩摩訶薩、空無我を解し、施して報を想ふ無くば、六度の法に於て清淨具足せん』と。慧眼菩薩又た問ふ、『云何が族姓子、如來の色身は衆德具足し、三十二相八十種好あり、身の黃金色は猶ほ金

〔一〕三本宮本は闕。
〔二〕三本宮本は眼根本。

を分別し、意を攝りて戒を持し、戒性を毀らず、若し人毀辱せんも憂感を懷かず、是を智に於て戒性を具足すと謂ふ。若し復た善男子善女人、智度無極に於て忍辱を修行し、心、虛空の如くして穢惡を受けざらんに、是を智度無極に於て忍辱心を得、と謂ふ』と。佛復た等行菩薩に告げたまはく、『若し善男子善女人、智度無極を得、意を攝りて精進し、懈怠心を去り、眼界の不可思議なることを分別し、懈怠の者を見ては勸めて精進せしめんに、是を智度無極に於て精進を具足す、と謂ふ』と。佛復た等行菩薩に告げたまはく、『若し善男子善女人有り、智度無極を得、禪定を分別して心分散せず、一意一念に百千劫を經、意を攝りて自ら伏し、三十六度に於て皆悉く分別せんに、是を等行菩薩摩訶薩、衆行の根原〔源〕と謂ふ』と。爾の時、世尊、等行菩薩の與に是の語を說く時、無量の衆生、本と發心して緣覺に趣ける有るもの、今皆意を廻らして無上正眞の道を發せり。復た無數の諸天世人有り、盡信の行を得て、大乘を離れざりき。

て施度無極を具足し、施度を具すと雖も、戒人を攝持して、戒性を毀らざらしめ、暴逆者を見れば勸めて忍辱せしめ、若し人懈怠せば、勸めて精進せしめ、或は衆生有り、六十二見に著し、心意錯亂して虚無泥洹の大道を識らざれば、彼の衆生を攝して、一意に禪定し、亂想を除去して二見を生ぜざらしめ、或は衆生有り、永く闇冥に在つて愚癡心を懷かんに、權方便を以て彼の衆生を攝して慧明を見しむ』と。佛復た等行菩薩に告げたまはく、『若し善男子善女人有り、初發意より菩薩心を修せば、一度中に於て便ち當に六度無極を具足すべし。云何が一度中に於て便ち能く六度無極を具足する。或は衆生有り、一心に持戒して戒性を毀らず、持戒中に於て布施を具足し。彼の受を譏らずして常に忍辱を行じ、若し衆生有り毀辱せらるれば、亂想を興さず瞋恚の心無く。日夜精懃して懈怠の心無く。禁戒を持すと雖も定意亂れず、戒性中に於て禪を毀らず。智慧を演布して愚闇の心を除く。是を菩薩、戒度無極に在つて便ち能く六度無極を具足す、と謂ふ』と。佛復た等行菩薩に告げたまはく、『若し善男子善女人有り、初發意より菩薩心を修し、忍度無極を得、心意を降伏して貢高を念ぜずば、忍度無極に於て復た當に六度の法を具足すべし。忍心を捨てずして布施を行じ、施す所有りと雖も想著を起さず、中に於て戒性の法を具足し、若し人、撃打せんも亂想を起さず、自ら心意を攝して、忍度無極を具足修習し、定意を具足して禪法を毀らず、忍度中に於て禪行を具足し。若し復た善男子善女人、已に忍度を得、五陰の成敗所起を分別し、三毒を思惟して癡愛によることを知り、道慧を以て永く所生無きを觀察せん。是を善男子善女人、忍度中に於て六度の法を具足すと謂ふ』と。佛復た等行菩薩に告げたまはく、『若し善男子善女人有り、初發意より菩薩心を修せば、禪定中に於て復た當に六度無極を具足し、衆生を攝取して亂想を除去すべし。云何が菩薩禪定中に於て六度を具足する。是に於て善男子善女人、空を觀じて身相の起滅を見ず、定心亂れずして布施を行じ、衆生及び財寶を見ず、[七]亦た心―今我が施す所、後に大報を得て、佛土を莊嚴するも本と清淨無し。―生ぜざれば、便ち能く智度無極を具足す』と。佛復た等行菩薩に告げたまはく、『若し善男子善女人有り、初發意より菩薩心を修せば、知度無極に於て六度を具足せん。云何が善男子善女人、智度無極に於て六度を具足する。是に於て善男子善女人、已に能く智度無極を修習し、無想を分別して他の異行なく、一一に名身句身

【七】この間に持戒・忍辱・精進を略するを以て、「乃至」の語あるべきなり。

崖無く、神智は量有ること無し、[五]身苦の本を以てせず、永く三世の難を除く。諸佛瓔珞法、自ら覺りて師受すること無し。心、定なること虛空の如きは、[六]常想樂想の緣なり。」吾無數劫より一入定して空を離れず、一意に一道を成ず、故に人中の尊と號す。」復た無數劫に於て諸の世尊に承事し、生を盡して無著に逮り、自ら最正覺を致せり。」諸佛、世に在りて化し、正法修道の樂もて、能く佛國土を淨め、三有の樂に染せず。

爾の時、世尊、此の偈を說き已つて、復た等行菩薩に告げたまはく『若し善男子善女人有り、五不可思議深奧の法を奉持修習せば、十方諸佛悉く來つて擁護し、衆魔の爲に能く便を得られざるなり』と。佛復た等行菩薩に告げたまはく『若し善男子善女人、初發意より菩薩心を行ぜんに、當に五法不可思議を行ずべし。云何が五と爲す。一には、己の定意を以て遍ねく衆生に施し、盡く佛處に在りて不退轉ならしむ。二には、三道に猗らずして果證を受く。三には、無量の法海皆現じて前に在り。四には、衆相法門、智辯を具足す。五には、分身敎化して六度慧を得。是を族姓子、初發意より菩薩心を行じ、此の五法不可思議を行ぜんに、便ち能く如來の衆行を具足す、と謂ふ』と。佛復た等行菩薩に告げたまはく『若し善男子善女人有り、五苦法の本を思惟分別せん。云何が五と爲す。一には、色の原〔源〕を分別して識著を生ぜず。二には、思の百八痛に苦樂有ること無し。三には、永く衆想を斷ちて亂意を興さず。四には、十二因緣の本と此の行無きを解す。五には、識神無形にして究盡すべからず。是を等行菩薩、若し善男子善女人、五苦法の本を分別思惟せば、佛藏に親近して賢聖衆道の原〔源〕を離れず、と謂ふ』と。佛〔復た〕等行菩薩に告げたまはく『若し善男子善女人、初發意より菩薩心を修せんに、復た五法有りて窮盡す可からず。云何が五と爲す。一には、無數の功勳窮盡すべからず。二には、八十四智窮盡す可からず。三には、如來の法慧窮盡す可からず。四には、諸法の要定窮盡す可からず。五には八種の音響窮盡す可からず。是を等行菩薩、若し善男子善女人、初發意より菩薩心を修し、此の五法窮盡す可からざるを修せば、便ち能く如來の法を具足す、と謂ふ。』と。爾の時、世尊復た等行菩薩に告げたまはく『若し善男子善女人(有り)、初發意より、菩薩心を修し、六度不可思議法を修行せん。云何が六と爲す。是に於て善男子善女人、身を惜まず、前に索むる所に隨つて、人意に逆はず、中に於

【五】不以身苦身。
【六】常想業想緣。

初めて道心を發すに、復た五事有り。云何が五と爲す。一には、三世を分別して空無を離れず。二には、己の國土を淨めて衆生を育養す。三には、眼識を分列して外入を受けず。四には、神足神通もて、念則ち前に在り。五には、現在衆智もて自ら瓔珞す。是を等行菩薩摩訶薩、初發意より此の五法を修して成就を得、疑難有ること無く、前に進んで成佛して怯弱を懐かず、と謂ふ』と。佛復た等行菩薩に告げたまはく、『若し善男子善女人、菩薩心を發し、當に五法を行じて自ら瓔珞すべし。云何が五と爲す。是に於て族姓子、〔一には〕若し菩薩初めて道心を發し、等しく定意に入れば、能く十方の天下をして盡く七寶と爲らしむ。二には、己が國土の衆生をして婬怒癡を斷ぜしむ。三には、己成佛する時、三空慧を修す。四には、一相を莊嚴して慧根を離れず。五には、六神通を行じて、自ら稱記せず。是を善男子善女人、初發意より菩薩道を行じ、此の五法を行じて自ら瓔珞す、と謂ふ』と。佛復た等行菩薩に告げたまはく、『若し善男子善女人有り、初發意より菩薩道を行ぜんに、復た五法有り。云何が五と爲す、一には、如來の無形相法を思惟す。二には、諸佛の要誓本性に違はず。三には、自ら本命を識り、從來する所を知る。四には、我人壽命を計せず、五苦難を離る。五には、法は本と自爾にして起滅を見ず。是を善男子善女人、此の五法を修して自ら瓔珞す、と謂ふ』と。佛復た等行菩薩に告げたまはく、『若し善男子善女人有り、初發意より菩薩道を行ぜんに、當に五法不可思議を行ずべし。云何が五と爲す。一には、諸佛の神德、不可思議なり。二には、諸佛の篋藏不可思議なり。三には、行果〔業〕[三]受報、不可思議なり。四には、諸佛の刹土、不可思議なり。五には、演布道教、不可思議なり。是を善男子善女人、初めて道心を發し、此の五行不可思議を修し、乃至成佛して自ら瓔珞すと謂ふ』と。爾の時、世尊大衆に在りて、此の偈を說きたまはく、

諸佛不思議なり、　道を宣暢するも亦然なり、　衆生の本を思惟するに、　本末覩る可からず。」　四聖諦の炬を執りて　彼の無明根を照し、　常思〔想〕[四]に常有ること無く、　結縛の病を除かんことを念ず。」　劫數は窮有ること無く、盡無く、　盡有るに非ず。　但だ衆生の惑の爲に　本無心を知らんと欲す。」　夫れ學、先に在らんと欲して　深奧の法を聞受するは、　亦二乘行の　能く用つて測度する所に非ず。」　佛本と自ら五道の淵を蠲除せんと計誓し、　行盡くるは等心に由る、　故に人中尊と號す。」　佛慧は邊

【三】元明二本は業。
【四】三本宮本は想。

を得ば、便ち能く百佛刹土の衆生の心中所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを觀じ、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく『復た定意有り、知萬佛刹土衆生心中所念なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く萬佛刹土の衆生の心中所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを觀じ、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく『復た定意有り、知億佛刹土衆生心中所念なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く億佛刹土の衆生の心中所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを觀じ、其の本行に隨つて之を度脫せん。是の如く菩薩摩訶薩は、此の定意に於て、盡く諸の三昧王を具足するを得たり。』

佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく『若し善男子善女人有り、此の法門を奉持修習せば、便ち如來の衆相具足するを獲ん』と。爾の時、世尊、淨一切地菩薩に告げて曰はく『若し善男子善女人有り、此の三昧定意を得ば、善權方便有つて衆生を敎化し、復た十事の功德の業を得る有り。云何が十と爲す。一には、口氣淸淨にして人多く信用す。二には、本意を失はず彼の受を識らず。三には、善く明かに算數して六十四變を知る。四には、空無形相の法を分別す。五には、當來の法を知りて無緣を解脫す。六には、現在法に於て證法を成ぜんことを念ず。七には、過去行を憶ひ、以て無相なるを知る。八には、無相法に於て本と自然無し。九には、起滅自然にして三世に著せず。十には、菩薩の定意次第を失はず。是を菩薩摩訶薩、定三昧に入れば、便ち能く億佛刹土の衆生の心中所念に婬怒癡有り、婬怒癡無きを觀察し、其の本行に隨つて之を度脫す、と謂ふ』と。

無斷品第二十八

佛復た、等行菩薩に告げたまはく、『若し善男子善女人有り、初發意より、菩薩心を發し、五法を修行して、怯弱を懷かず。云何が五法なる。一には、前人に道心を捨てざることを勸進す。二には、法界を分別して法性を毀らず。三には、一意淸淨にして他の異想無し。四には、權方便を行じて未度者を度す。五には、三十二業を得て定意亂れず。是を等行菩薩摩訶薩、初發意より菩薩心を守り、此の五法を修して道意を捨てず、と謂ふ』と。佛復た等行菩薩に告げて曰はく『若し善男子善女人有り、

と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意有り、知八四天下衆生心中所念なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く八四天下の衆生の心中所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡無きことを知り、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意有り、知九四天下衆生心中所念なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く九四天下の衆生の心中所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きことを觀じ、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意有り、知十四天下衆生心中所念なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く十四天下の衆生の心中所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを知り、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意有り、知百四天下衆生心中所念なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く百四天下の衆生の心中所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り婬怒癡無きを觀、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意有り、知千四天下衆生心中所念なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く千四百天下の衆生の心中所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きことを觀、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意有り、知萬四天下衆生心中所念なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く萬四天下の衆生の心中所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界に、婬怒癡有り、婬怒癡無きことを觀じ、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意有り、知億萬四天下衆生心中所念なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く億萬四天下の衆生の心中所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを知り、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意有り、知一佛國衆生心中所念なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く觀察して一佛境界の衆生の心中所念を知り、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを知り、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意あり、知十佛刹土衆生心中所念なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く十佛刹土の衆生の心中所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界婬怒癡有り、婬怒癡無きを觀じ、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意有り、知百佛刹土衆生心中所念なり。菩薩此の定意

生〔の心識所念〕を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り婬怒癡無きことを知り、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意有り、知瞿耶尼衆生心なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く瞿耶尼衆生の心意を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを知り、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛、淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意有り、知欝單曰〔越〕衆生心中所念なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く欝單曰〔越〕の衆生心を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを知り、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意有り、知一四天下衆生心中所念なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く一四天下の衆生の心中所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを知り、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意有り、知二四天下衆生心中所念なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く二四天下の衆生の心中所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを知り、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意あり、知三四天下衆生心中所念なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く三四天下の衆生の心中所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを知り、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意有り、知四四天下衆生心中所念なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く四四天下の衆生の心中所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを知り、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意有り、知五四天下衆生心中所念なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く五四天下の衆生の心中所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを知り、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。

佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意有り、知六四天下衆生心中所念なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く六四天下の衆生の心中所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを知り、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意有り、知七四天下衆生心中所念なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く七四天下の衆生の心中所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを知り、其の本行に隨つて之を度脫せん』

婬怒癡無きを觀じ、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。爾の時、世尊復た淨一切地菩薩に告げたまはく、『若し善男子善女人有り、無形觀三昧に入りて、遍ねく衆生の心識の所念、衆生若干の所念の同じからざるを觀ん。復た三昧有り、觀衆生心と名く、菩薩摩訶薩此の定意を得る者は、便ち能く人道衆生の〔心識所念〕を觀察して、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを知り、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た族姓子に告げたまふ、『復た定意有り、知閱叉心なり、菩薩摩訶薩此の三昧を得ば、遍ねく閱叉の心識所念に婬怒癡有り、婬怒癡無きを觀じ、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意有り、知諸能心なり。菩薩此の定意を得ば、便ち能く龍道衆生の心識所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを知り、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地に告げて曰はく、『復た定意あり知阿須倫心なり、菩薩摩訶薩、此の定意を得ば、便ち能く阿須倫道の衆生の心識所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界の婬怒癡有り、婬怒癡無きを觀じ、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た族姓子に告げたまはく、『復た定意あり、知諸天心なり、菩薩此の定意を得ば、便ち能く天道衆生の心識所念を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを知り、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た族姓子に告げたまはく、『復た定意有り、知梵天心なり。菩薩摩訶薩、此の定意を得ば、便ち能く淨志天〔道衆生の〕心〔意識所念〕を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを知り、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た族姓子に告げたまはく、『復た定意有り、知欲界衆生心なり。菩薩摩訶薩、此の定意を得ば、便ち能く欲界衆生〔の心識所念〕を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り婬怒癡無きことを知り、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た族姓子に告げたまはく、『復た定意あり、知地獄〔衆生〕心なり。菩薩摩訶薩、此の定意を得ば、便ち能く地獄の衆生〔の心識所念〕を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを觀じ、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た族姓子に告げたまはく、『復た定意有り、知弗于逮衆生心なり。菩薩摩訶薩、此の定意を得ば、便ち能く弗于逮衆生〔の心識所念〕を觀察し、遍ねく十方無量の世界に婬怒癡有り、婬怒癡無きを知り、其の本行に隨つて之を度脫せん』と。佛復た淨一切地菩薩に告げて曰はく、『復た定意有り、知閻浮地衆生心なり。菩薩摩訶薩、此の定意を得ば、便ち能く閻浮地衆

意亂れず、三昧正受して罣礙する所無く、佛の所住の處皆悉く履行し、法界に染せず、吾我の想を去る。卽ち座より起ち、偏へに右臂を露はし、右膝を地に著け、長跪叉手して、前んで佛に白して言さく、『問ふ所有らんと欲す。若し聽さるれば、敢へて陳ぶる所有らん』と。佛言はく、『善い哉善い哉族姓子、如來に疑を懷く所を問はんと欲せば、今正に是れ時なり』と。淨一切地菩薩、佛に白して言さく、『世尊、云何が善男子善女人、諸佛を供養して諸佛の想無く、諸法の本に於ても亦復た是の如く、衆生を度すと雖も衆生の念無く、菩薩道を行じて本意を失はず、諸願を具足して德行充滿し、受決して心、淨く明慧を離れざらん』と。爾の時、世尊、淨一切地菩薩に告げて曰はく、『若し善男子善女人、大乘行の本、不可思議深奧の藏を分別思惟せんには、先づ當に習學して定意正受し、亂想の行を除き、然る後に乃ち六度無極を具し、自ら身空と觀じ、他人の心も亦復た是の如しと觀ずべし。若し善男子善女人、等しく定三昧に入り、心動轉せず、悉く能く一切衆行を分別せんに、云何が善男子善女人、定三昧に入りて、一切法に於て思惟分別して、錯謬有ること無き。是に於て族姓子、若し菩薩摩訶薩有り、根を立て、力を得て、不退轉に逮らんに、便ち能く入定して自ら身本の本と從來する所を觀じて、悉く起滅、來るも從來する所を知らず、去るも從去する所を知らざるを、一一に分別して悉く知らん。此の善男子善女人、定意より起つて復た外身に入つて定意し、一一に衆生の類を分別して、復た無量の諸佛刹土に、形を受くる者、形を受けざる者有るを見ん。或る時には善男子善女人、復た更に定に入り、內外の身を觀じて、彼身と我身とは、發趣に異有るも、身行共に同じとし、我が觀ずる所の如きは、大乘に趣く者は衆生を捨てず、緣覺を求むる者は亦た清淨を佛土に求めず。弟子學者は承聲受敎して三有を離る。是を內外觀定すれば身行共同にして、發趣異有りと謂ふ』と。佛復た淨一切地に告げて曰はく、若し善男子善女人有り、此の等定に入り、三昧を正受し、悉く無量の世界をして盡く化敎に從ひ、化に從つて度を得て、意の樂しむ所に隨ひ、其の心意を恣にして百千三昧に遊び、中に於て意を攝して而も錯亂せざる、是を善男子善女人大乘に趣く者は衆生を捨てず、と謂ふ』と。佛復た淨一切地菩薩に告げたまはく、『若し善男子善女人有り、一身定に入り、便ち能く衆生の心本に、婬怒癡有ると、婬怒癡無きとを觀察し、其の本行に隨つて之を度脫せん、此の善男子善女人は一身定より起つて復た衆多身定に入り、衆生の類の婬怒癡有り、

は、凡夫地に在り、應に稱して菩薩と爲すべからず、應に決を受けて如來の號を得べからず』と。是の時、目連復た佛に白して言さく、『若し善男子善女人有り、餓鬼中に生じて餓鬼形を受け、善く菩薩の父像、舍利弗の祖、善施長者の母を見るに、受形苦惱して、腹は泰山の如く、咽は細鍼の如く、咽長千丈にして千萬あり、一萬に千節あり、漿水を得と雖も化して膿血と爲り、眼は深井の如く、千丈の崖の如く、然して苦痛を受くること稱量すべからず、餓〔飢〕火の爲に燒かれ、死を求むれども得ざるに、然も佛世尊は大慈悲を以て、即ち舍利弗を遣はし、各、其れに決を授けて道心を發さしめたまふ。然るに衆生有り、内に自ら念を生ずらく、『餓鬼は苦惱無量にして、飢寒苦毒稱計すべからず、然るに今、如來返つて彼に決を授け、我に決を授けたまず』と。此の如き等の善男子善女人は、凡夫地に在り、應に稱して菩薩と爲すべからず。應に受決して如來の號を得べからず』と。爾の時、世尊、目連に告げて曰はく、『善い哉善い哉、族姓子、菩薩の受決無礙の行を宣暢するに堪任す。眞佛の子は思欲の生に非ず』と。爾の時、弊魔波旬へ内に自ら念を生ずらく、『咄、我が所行は、將た謬らざるか。今、尊者大目揵連の所説を聞くに、諸人の爲ならず、正に我が爲のみ』と。是の時波旬即ち坐より起ち、貢高を除去し、憍慢の心を捨て、前んで佛所に至り、頭面禮足し、前んで佛に白して言さく、『世尊、我今愚惑して久しく邪見に處し、未だ眞の道を識らざりき。今、釋提恒因、我に統べらるゝに、如來今日先に其に決を授けたまへり。我即ち意を興して是非心を生じぬ。唯だ願はくば世尊、我が過を悔ひ、欲の本を消滅し、榮冀に著せざるを受けたまへ』と。佛、弊魔波旬に告げたまはく、『汝今、座上に彌勒菩薩を見るや不や』と。波旬佛に白さく、『唯だ然り、世尊。』と。佛、波旬に告げたまはく、『此の彌勒菩薩、當に汝に決を授け、菩薩の號を得しめたまふべし』と。

淨智除垢品第二十七

東方此を去ること三十七恒河沙數に佛土あり、名けて莊嚴と曰ふ。佛を一意如來・至眞等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と名け、佛世尊と號す。彼の佛如來、一菩薩を遣はしたまふ。名けて淨一切地と曰ふ。衆行の本を具し、定

衆に非ず、我が徒の類に非ず。如來何爲れぞ先に此れに決を授けて我に別を授けざる」と。此の如き等の善男子善女人は、凡夫地に在り、應に稱して菩薩と爲すべからず。應に受決して如來の號を得べからず』と。目連復た佛に白して言さく、『若し善男子善女人有り、無上法輪を轉じ、六通變化して觸礙する所無く、權詐巧にして便ち衆生を攝取し、此の菩薩摩訶薩、便ち如來の爲に決を授けられん。復た衆生有り、三毒等分に在り、愛心未だ盡きず、未だ能く適化して諸佛に承事せず、內に自ら狐疑して是の念を生ずらく、「今此の人を觀るに、辯ずる所有るが如きも、是れ如來の威力の所感たり」と。此の善男子に、審に此の化有るが爲に、彼此中に於て猶豫の想を生ずる、此の如き等の善男子善女人は、凡夫地に在り、應に稱して菩薩と爲すべからず。應に受決して如來の號を得べからず』と。是の時、目連復た佛に白して言さく、『世尊、若し善男子善女人有り、生じて龍中に在り、菩薩の心を發し、衆行具足して缺漏する所無く、便ち如來の爲に決を授けられん。或は衆生有り、內に自ら思惟すらく、「我、人身を得、諸根具足し、正法に明達し、六情完具するに、如來は何爲れぞ我に決を授けずして、今乃ち返つて更に此の龍に決を授くる」と。此の如き等の善男子善女人は、凡夫地に在り、應に稱して菩薩と爲すべからず。應に受決して如來の號を得べからず』と。是の時、目連復た佛に白して言さく、『若し善男子善女人有り、已に天身を得て菩薩心を發し、諸の縛著を斷ちて戀慕する所無く、己の榮位を捨て、五樂を遠離し、六情を閉塞して清淨の法を修し、世の八法を離れ、十惡に墮せず、便ち如來の爲に決を授けられん。然るに衆生有り、內に自ら念を生ずらく、「今此の天を觀るに衆行未だ足らず、未だ此の形、復た人身を捨てず。何爲れぞ如來は此れに決を授けて我に別を授けざる」と。此の如き等の善男子善女人は、凡夫地に在り、應に稱して菩薩と爲すべからず。應に受決して如來の號を得べからず』と。是の時、目連復た佛に白して言さく、『或は衆生有り、地獄形を受くるも、佛の神力を以て往いて其に決を授けたまふ、「我が如きは昔日佛の爲に遣はされて提婆達兜に決を授けたり。」然るに衆生有り、內に自ら念を生ずらく、「地獄形を受くれば苦痛無量にして、鑊湯燋煮に死して更に生れ、刀山劍樹爐炭鐵輪・火車熾風銅柱碓臼、中に於て苦痛を受け、毒無量なり。爾の時に當つて何ぞ道心有らん。如來今日返つて更に決を授けたまひて、如來の號を得ぬ。然るに我等已に人身を得れども、我に決を授けたまはず」と。此の如き等の善男子善女人

方便を以て一切の諸の不及者を將導し、衆菩薩等の神通大智あるもの、不皆退轉地を授決する

【三】三本宮本は上。

を得たり。此の賢聖等を、我は則ち疑はず。今釋提桓因は我が部界に在り、我が使ふ所爲り、先に如來の爲に決を授けらる。我が如きは、今日、心、魔行を離れ、榮冀愛欲の中に在らざるに、何の故に如來我に決を授けざる』と。爾の時、世尊、魔波旬の心中に念ずる所を知り、便ち目揵連に告げたまはく、『汝能く如來の前に於て、諸の菩薩摩訶薩の記別を受くるを說くに堪任するや』と。是の時、目連佛の威神を承け、卽ち座より起ち、佛に白して言さく、『我能く菩薩摩訶薩の受決の法を說くに堪任せん』と。佛目連に告げたまはく『說くに堪任せば今正に是れ時なり』と。目連、佛に白さく、『若し菩薩摩訶薩有り、諸の空法に於て染著心を生じ、便ち自ら貢高し、前學を輕蔑せんに、此の如き等の善男子善女人は、凡夫地に在り、應に稱して菩薩と爲すべからず。應に受決して如來號を得べからず』と。目連復た佛に白して言さく、『若し善男子善女人有り、人の受決するを見て便ち增上心を生じ、「我今豪貴なり、斯の人は卑賤なり」とせん、此の如き等の善男子善女人は、凡夫地に在り、應に稱して菩薩と爲すべからず、應に受決して如來の號を得べからず』と。目連復た佛に白して言さく、『若し善男子善女人、佛の明慧を得、三觀空無相願を分別して、便ち如來の爲に決を授けられん。然るに衆生有りて、此の人の受決するを見、便ち憎嫉の心を生じ、如來何爲れぞ先に此の決を授くるとせん。此の如き等の善男子善女人は、凡夫地に在り、當に稱して菩薩と爲すべからず。應に受決して如來の號を得べからず』と。是の時、目連復た佛に白して言さく、『若し善男子善女人有り、佛の神足、四無所畏を得、諸の空界に遊びて法輪を轉じ、善權方便もて罣礙する所無く、所演の法敎皆益する所有れば、便ち如來の爲に決を授けられん。然るに衆生有り、世俗智を得て辯才第一にして、古を知り今に明にして、三世に通達し、內に自ら思惟して此の念を生ず、「我が苞〔包〕攬する所、事として貫かざるは無し、如來何爲れぞ我に決を授けずして、今乃ち返つて更に此の人に決を授くる」と。此の如き等の善男子善女人は、凡夫地に在り、應に稱して菩薩と爲すべからず。應に受決して如來の號を得べからず』と。目連復た佛に白して言さく、『若し善男子善女人有り、無生法忍を得、四等具足し、十方無量の世界に遊至し、本と此の佛に從つて道心を發し、更に異佛に從つて其の記別を受けん。然るに衆生有り、內に自ら念を生ずらく、『此れは我が

號す。唯だ願はくば世尊、啓白する所を聽こしめしたまへ』と。佛言はく、『善い哉善い哉、拘翼、疑難する所有らば、今正に是れ時なり』と。釋提桓因、佛に白して言さく、『世尊、若し善男子善女人有り、如來無著の行を興顯し、授決の八因緣法を具足せば、我等諸天は當に此の善男子善女人を護るべし、竟に成就するに至るまで、終に中退して羅漢辟支佛道に墮せさらん』と。爾の時、釋提桓因、卽ち佛の前に於て頌を歎じて曰く、

本と無く所著無く、永く諸の惡趣を離るゝに、云何が如來今、決を授けたまふに高下有る。昔、無數劫より、功勳量る可からず、功を積み衆德を累ね、一切衆相具はる。如來は諸法の本なり、生滅靡斷無し、尊今已に決を授け、高下の相を論說したまふ。定を得て[一]思を起さざらん、生滅所有無く、諸法は幻化の如し、名號は眞實ならず。本と從來する所を知り、無生法を願樂し、三達智を演說して、限より無限に至らん。今、天帝釋に縛解、諸結盡くるを爲し、願はくば尊、記別せられよ、久如正覺に逮(いた)らん。

爾の時、世尊、偈を以て釋提桓因に報へて曰はく、

汝今天帝釋、功德衆行至り、乃ち無數世より德を積みて光明尊たり。今天帝身と爲り、大小の劫數を經、三十六成敗するも、本要誓を捨てず。千佛兄弟過ぎ、復た賢劫の名無し、中間永く曠絕し、二十四中劫なり、後に乃ち佛有りて出で、十力畏るゝ所無し、淸淨の德あり普尊といひ、刹土は普忍と名づく。彼の佛は極めて長壽、在世の壽七劫にして、敎化已に周ねく訖り、永く寂して滅度を取る。遺法世に在りて化し、亦復た七劫を經、漸漸に法沒盡し、三尊の名を聞かず。中間復た迥絕し、當に復た五劫を經べく、汝彼の刹土に於て、當に如來の位を紹ぐべし。我今汝に決を授く、本無如來の印、號して無著尊と名く、三界に最も第一たり。獨步して等侶無く、法を說いて窮盡なく、當に阿僧祇、無量の衆生の類を化すべし。

爾の時、釋提桓因、如來已に決を授けらるゝを聞き、頭面禮足し、佛を遶ること三匝して、復た故の座に還る。是の時弊魔波旬、心に自ら念言すらく、『今日如來至眞等正覺、衆生を敎化し、無著[二]〔上〕法輪を轉じ、善權

【一】思　三本宮本忍に作る。

を分別し、衆生に染著の想有るを計せず、初めて道心を發し、此の念を生ぜず。—我後に成佛せんに、爾所の衆生を度し、爾所の衆生を度せず、—心は虚空の如く沮壞す可からず、以て如來の四無所畏を獲、空觀三昧、善權方便を得。是の故に受決して己身に自ら知り、餘の者も亦た見る』と。佛復た族姓子に告げたまはく、『若し善男子善女人有り、如來の決を受け、己身に覺らず、餘の者も知らざらん、斯の如き等の人は、未だ七住不退轉地に在らず。善權方便有り、三尊を信樂し、諸佛世尊に供養承事すと雖も、然も未だ如來無著の行を得ず。未だ能く佛國土を淨め、衆生を敎化せず。是の故に受決して、自ら覺知せず、餘の者も見ず』と。佛復た族姓子に告げたまはく、『若し善男子善女人、如來の決を受け、遠き者は決を得、近き者は得ざらん、此の如き等の人は、彌勒身是れなり。何を以ての故に。此の善男子善女人は、諸根具足し、如來無著の行を捨てず。是の故に受決して、遠き者は自ら覺り、近き者は知らず』と。佛復た族姓子に告げたまはく、『若し善男子善女人、如來の決を受け、近き者は覺知し、遠き者は見ず、亦た衆會の能く測度する所に非ざらん、此の如き等の人は、菩薩位に在るも、未だ能く賢聖の行を演說せず。今の師子膺菩薩是れなり。衆相具足し、法本を捨てず、無想法中に於て法性を壞せず。是の故に受決して、近き者は覺知し、遠き者は見ず、亦た衆會の能く測度する所に非ず』と。佛復た族姓子に告げたまはく、『若し善男子善女人、如來決を授けたまひて、近き者亦た知り、遠き者も亦た見ん、此の如き等の人は、衆行具足し、不思議無量の佛事を行じ、生死の海を超えて無爲の岸に至る。何を以ての故に、此の善男子善女人、諸根具足し、如來無著の行を捨てず、十方無量の世界に遍遊し、不思議を作して佛の神德を顯せばなり。今の柔順菩薩是なり。是の故に近き者亦た知り、遠き者亦た見る』と。佛復た族姓子に告げたまはく、『若し善男子善女人、如來の決を受け、近き者は知らず、遠き者も見ざらん、此の如き等の人は、衆行未だ具はらず、未だ善權方便を得ず。復た五欲の中を去離すと雖も、未だ能く悉く如來の法藏を備へず。今の等行菩薩是なり』と。佛復た族姓子に告げたまはく、『若し菩薩摩訶薩有り、八因緣法を奉持修習せんに、我今、之を視ること、己の如く異無からん。亦た十方の諸佛世尊の爲に擁護せられん』と。爾の時、釋提桓因、即ち座より起ち、前んで佛所に至り、頭面禮足し、一面に在つて立ち、須臾の頃に前んで佛所に至り、長跪叉手して佛に白して言さく、『世尊、我は拘翼と名け、天帝釋と

られ、自ら覺知せず、餘人も亦知らずば、是れを如來、衆生に決を授けたまひ、自ら覺知せず餘人も亦た知らずと謂ふ』と。佛復た明觀菩薩に告げたまはく『若し善男子善女人有り、大衆中に在つて如來の決を受けん、然も此の受決の人、乃ち未行に在りて如來に近づかず。如來に近づく者は自ら我は決を受けたり、と謂ふ。是を如來衆生に決を授けたまひて、遠き者は覺知し、近き者は覺らずと謂ふ。復た次に明觀菩薩摩訶薩、若し善男子善女人有り、大衆中に在りて如來の爲に決を授けられんに、如來に近き者は便ち自ら今日如來而かも我等に決を授けたまふ、と覺知し、如來を遠き者は、復た自ら、如來今日我等に決を授けたまふ、と稱說す。然かも此の衆生は、未だ應に決を受くべからず。是を如來衆生に決に授けたまふに、近き者は覺知し、遠き者は覺らずと謂ふ』と。佛復た明觀菩薩摩訶薩に告げたまはく『若し善男子善女人有り、諸佛世尊の爲に決—當に成佛すべき時、其の號是の如し—を授けられ、近き者は覺らず、遠きも亦た知らず。是を如來衆生に決を授けたまひて、遠近の衆生皆覺知せず、と謂ふ』と。佛復た明觀菩薩に告げたまはく『若し善男子善女人有り、大衆中に在りて如來の爲に決を授けられんに、近き者亦た覺り、遠き者亦た知り、餘人は見ず。是を如來八因緣法もて衆生に決を授けたまふに、近き者亦た覺り、遠き者も亦た知りて、餘人は見ず。と謂ふ』と。爾の時、世尊、四部衆—比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷—菩薩摩訶薩・天龍鬼神・乾沓和・阿須倫・迦留羅・眞陀羅・摩休勒・人及び非人に告げたまはく、『汝等頗し明觀菩薩の記別を受くるを見しや』と。對へて曰く、『非なり、世尊』と。佛復た族姓子に告げたまはく、『若し菩薩摩訶薩有り、如來の決を受けんに、初めて道心を發すより、別を受くること同じからず。今此の明觀菩薩は、如來の決を受け、已自ら覺知するも餘人は覺らず。此の如き等の人は、未だ如來の四無所畏を獲ず、心に自ら誓を發すも、未だ廣く衆生に及ばず。亦復た未だ善權方便を得ず。是の故に決を受けて、已自ら覺知するも餘の者は覺らざるなり』と。佛復た族姓子に告げたまはく、『若し善男子善女人有り、如來の決を受け、衆人盡く見るも自ら覺知せざるは、此の如き等の人は意を發すこと弘く普ねく、廣く衆生に及ぼし、四無畏を得、心を發すこと曠大にして、善權方便有りて衆生を敎化するなり。是の故に受決して餘者盡く覺るも已は自ら知らず』と。佛復た族姓子に告げたまはく、『若し善男子善女人有り、如來の決を受け、已身に自ら知り、餘の者も亦た見ん、此の如き等の人は、七住地に在りて空觀

を莊嚴し、衆の相好を成じ、八種の音聲梵天に過ぎ、其の衆生、佛の音響を聞いて解脫を得る者有るは、斯れ亦復た是れ、如來無著聖賢の行なり。若し復た善男子善女人、一一に空無相願を思惟し、復た染著して是非の想を興さず、此の三觀に緣つて、當に無上正眞道の意を成ずべきは、斯れ亦復た是れ、如來無著聖賢の行なり。若し善男子善女人有り、無數の諸佛世尊より菩薩別を受け、當に無上正眞道意を成ずべく、畢に志牢固として終に中退せず、亦た衆魔の能く沮壞する所とならざるは、斯れ亦た復是れ、如來無著聖賢の行なり』と。爾の時、明觀菩薩、是の如來無著聖賢の行を說く時、八十四億の衆生の類有つて、願樂して如來無著聖賢の行を求めんと欲し、復た無數の衆有り、明觀菩薩に親近し、以て師宗と爲さんことを求む。復た無量の衆生有り、各〻斯の念を生ずらく、『今日明觀菩薩摩訶薩、久如當に無上正眞道意を成ずべし。』と。爾の時、世尊、衆會の心に各〻此の念を生ぜるを知りて、便ち明觀菩薩に告げて曰はく『汝今、すでに能く如來無著の行を宣暢せり。如來の聖慧は窮盡すべからず。却後無數阿僧祇劫、上方此を去ること五十恒河沙數の諸佛刹土に佛あり、無垢如來至眞等正覺と名く、純(もっぱ)ら一乘有りて衆生を敎化し、緣覺弟子の名を聞かず。汝當に作佛し、號して明觀如來・至眞・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、佛世尊と號すべし。汝當に作佛し、其の號是の如かるべし』と。爾の時、衆會の一切衆生、如來の明觀菩薩に決を授くるを見、或は衆生の、覺知する者あり、覺知せざる者あり。爾の時世尊、人心の各〻狐疑を懷くを觀察し、佛其の意を知り、便ち明觀菩薩に告げて曰はく、『如來至眞等正覺の、大衆中に在つて菩薩に決を授くるに、覺知する者と覺知せざる者と有り。八因緣有り、云何が八と爲す。善男子善女人、如來の決を得て、當に無上平等正覺を成ずべからんに、一切衆人の能く知る者なきは、是を如來、衆生に決を授けて、已身自ら覺するも、餘人は知らず、と謂ふ。復た次に明觀、若し善男子善女人有り、大衆中に在つて如來の爲に決を授けられ、餘人盡く見るも、已は覺知せざらば、是を如來、衆生に決を授け、餘人盡く見るも、已は覺知せず、と謂ふ。復た次に明觀菩薩摩訶薩、若し善男子善女人有り。諸佛世尊の爲に決―汝當に成佛して其の號是の如かるべし―を授けられ、已れ決を受くるを知り、餘人も亦た見るは、是を如來、衆生に決を授けたまひ、已自ら覺知し、餘人も亦た見ると謂ふ。復た次に明觀菩薩摩訶薩、若し善男子善女人有り、大衆中に在り、如來の爲に決を授け

非ず。色性は自ら空にして亦た色有らず。我色、彼色、本と所有無し。色空は本と空なり、色性は自ら空なり、諸法自然にして復た自然無し。諸法は熾然して、本と自然なし。色を觀ずるに、生無く亦た生を見ず。生自ら生無し、況や當に色有るべき。但だ衆生は癡心に潤ほされ、自ら悟る能はずして遂に苦惱を致し、生死に墜墮し五道に流轉し、身死し、名滅して復た更に受身す。如來大聖は染著する所無く、從來する所を知りて諸の縛著を離る。衆行の根元は悉く空に歸す。痛想行識も亦復た是の如し。識を觀ずるに識に非ず、亦た有識に非ず。識性は自ら空にして亦た識有らず。我識、彼識、本と所有無し。識空は本と空なり、識性は自ら空なり。諸法は自然にして、復た自然無し。諸法は熾然して本と自然無し。識を觀ずるに、生無く亦た生を見ず。生は自ら生無し、況や當に識有るべき。但だ衆生は癡心に潤ほされて、自ら悟る能はずして遂に苦惱を致し、生死に墜墮し、五道に流轉し、身死し名滅して復た更に受形す。如來大聖は染著する所無く、從來する所を知りて諸の縛著を離る。衆行の根元は悉く空に歸す。無著の衆行も亦復た是の如し。自ら無上正眞道の意を致す。何に況や善男子善女人、聞きて則ち佛法衆を信解するをや。斯れを乃ち名けて無著の行と曰ふ』と。是の時、明觀菩薩、復た佛に白して言さく、『若し善男子善女人をして、如來無著の行を聞き、便ち是の中に於て菩薩心を發さしめんに、是の念有りと雖も、亦た諸佛世尊を供養せずば、斯れ如來無著の行に於て耗減有らん。若し復た善男子善女人、意に懈怠を欲せば、復た無著の行を樂修するに堪へず。能く自ら剋責して無著の行を念じ、一念の頃だも忘失せざれば、便ち無上至眞道意を發すを得。何に況や篤く信じて奉行するをや。若し善男子善女人、如來の金剛三昧を得、弘誓心を發して沮壞すべからざるは、斯れ皆、如來の無著聖行に由つて成就するを得。若し復た善男子善女人、三昧を得れば、王三昧を名けて奮迅勇と曰ふ、若し菩薩摩訶薩、此の三昧を得れば、便ち能く諸魔の官屬を降伏す。此の善男子善女人は、皆無著の聖行に由つて成辦あり。若し復た善男子善女人、空法無量の聖行を信ずることを得、四意止を修して念念に成就し、內外の空寂無形を分別するは、斯れ皆、如來無著聖賢の行に出づるなり。若し善男子善女人、四神足を得て、心識自由に、坐臥經行に罣礙無く、遊んで十方無量の世界に至り、諸佛世尊に禮事供竭するは、斯れ亦復た是れ、如來無著聖賢の行なり。若し善男子善女人及び菩薩摩訶薩、四意斷より、十八法、三十七品に至るを得、佛土

得たり。復た比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の五百餘衆有り、皆須陀洹道を得、復た無央數の天龍・鬼神・乾沓和・阿須倫・迦留羅・眞陀羅・摩休勒・人及非人、志大乘に趣くもの、皆、無上平等道の意を發せり。

無著品第二十六

是の時世尊、四部衆―比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷―及び諸の菩薩摩訶薩・天龍鬼神八部の衆に告げたまはく、『若し菩薩摩訶薩有り、一切智に逮(いた)らんと欲し、菩薩位に上らんと欲し、金剛三昧を得んと欲し、魔官屬を降伏するを得んと欲せば、一切諸法門總持に逮らんと欲せば、此彼の處を離れんと欲する者、佛樹を莊嚴せんと欲せば、是の善男子善女人は、當に如來無著の行を習すべし。復た次に善男子善女人、佛國土を淨め、衆生を敎化し、一佛國より一佛國に至り、諸佛世尊に承事禮敬するを得んと欲せば、當に如來無著の行を學ぶべし。若し善男子善女人有り、如來奇特の法甚だ尊重するを得んと欲せば、若し衆生有り、三界に於て色陰形を受けず、五患を離れ、五道に處らざらんと欲せば、斯の如き等の善男子善女人は、常に當に如來無著の行を修習すべし』と。佛復た告げたまはく、『善男子善女人、吾が般泥洹の後、正法漸く衰へんに、多く衆生有り、法服に倚託して小利養を貪り、詐りて道心を發するは、正法を虧損し、清淨の意無し。斯の如き等の人は、三寶至賢の行を信ぜず、我が衆に在りと雖も、我を離るゝこと甚だ遠し。若し復た善男子善女人、如來無著の行を修習せんに、凡夫にして未だ菩薩位に上らざるに在りと雖も、心を執ること牢固として、道意を捨てざらば、斯の如き等の人は、正使(たとへ)億百千萬由延の外に處在するも、猶、我を去ること近し。何を以ての故に、如來無著行を修習するが故なり』と。爾の時、菩薩有り、名けて明觀と曰ふ。卽ち座より起ち、頭面に禮足し、前んで佛に白して言さく、『世尊、云何が名けて如來至眞の無著の行と爲す。唯願はくば世尊、一一に分別して諸會者をして各ゝ開辯を得せしめたまへ』と。佛明觀菩薩に告げて曰はく、『我今汝に問はん。汝當に我に報ふべし。云何が族姓子、汝何を以ての故に明觀と號するや。色を用つてか、痛想行識を用つてか、身に因つてか、名に因つてか、何等を用つての故に明觀と號するか』と。是の時、明觀菩薩佛に白して言さく、『世尊、色を觀ずるに、色に非ず、亦た有色に

卷の第九

有受品第二十五

是の時勇進菩薩、佛に白して言さく、『世尊、今如來の、甚深の法、諸賢聖の律所入の門を說きたまふを聞けり。其れ聞いて此の法を知了する者有り、亦た著を見ず亦た脫を見ず。空無法に於て所損無、諸法の從來する所有り、從去する所有るを見ず。若し善男子善女人、深く此の法の從來する所無く從去する所無きを觀ぜんに、爾れば乃ち明達にして名けて解脫と爲す。一切諸法は各各別異し、其の言見する所悉く各〻離散して合偶有る無し。復た諸法に於て想念を生ぜずして而して成ずる所有り。亦復た解脫あるを念ぜずば、觀ずる所の諸法は、亦た內に有らず亦た外に有らず、亦た遠有る無く亦た近有る無し。得慧の菩薩は深く本無を了す。其の是を知る者は貢高の心を去り、憍慢を生ぜず。是を善男子善女人、諸善法に於て解脫を得、便ち無生滅地に住するを得と爲す。其の住する所の者は住有るを見ず。復た諸法の住に於て所住無く、亦た諸法の見に於て見る所無し。是を善男子善女人、其の性行を正しうして非邪を念ぜずと謂ふ。其の正見を作す者は、便ち內性に於て色相を觀了し、亦た色有る無く、亦た色を見ずして色有るなり。何を以ての故に。一切法を知り、空無形を觀じ、其の本と空にして色の如く色有る無きを知り、一切法に於て亦た受有らず、亦た受無からず。是を善男子善女人、一切法に於て解脫を得と謂ふ』と。是の時、勇進菩薩、此の有受品を說く時、十三億の衆生有り、此の法を聞き已つて、皆、不起柔順法忍を得、異口同音に、各、斯の言を稱ふ『今日勇進菩薩大士、諸著を離れ、亦た我等をして此の法を成辨せしむ。我等仁者、當に此の法を以て餘人に敎授すること、我が如く異無く、悉く解脫を得、畢に著する所無かるべし』と。爾の時、世尊、勇進菩薩に告げて曰はく、『夫れ泥洹心は亦た內に在らず、亦た外に在らず。亦た復た兩中間に在らず。たゞ有受の菩薩の生滅なき處、諸の菩薩の心と道と等しくして二無く、亦た若干無し。道心適(たまく)、等しくして若干無いは、一切人に於て必ず平等無二の心有り、是を菩薩と謂ふ。故に名けて等しくして差別無しと曰ふ』と。是の時、坐中に五百の天子有り、如來平等の法有受無受を聞き、諸の塵垢盡きて法眼淨を

是を菩薩摩訶薩の無行瓔珞と謂ふなり』と。尊者須菩提、此の空性有行無行菩薩瓔珞を說く時、十三億の發意の菩薩あり、本と等意如來の所に從つて初めて道心を建て、自ら是より來つた中間に懈怠し、今長老須菩提の諸法虛寂にして生滅著斷無しと說くを聞き、各ゝ還りて意を勵まし、悉く無上正眞道意を發し、進んで本誓願を求め、菩薩瓔珞の有行無行を成就せんと欲せり。

爾の時、尊者邠耨文陀尼子、即ち座より起ち前んで佛所に至り、頭面禮足し、長跪叉手して佛に白して言さく、『世尊、若し善男子善女人(有り)、空行法性を思惟分別し、諸法に於て吾我の心を生ぜずば、是を有行と謂ひ、意を攝して常に定まり、心虛空の如くにして、三界に著せざる、是を無行と謂ふ。若し(復た)善男子善女人、諸法無生の心を講論し、金剛三昧も八地を超越して、本の習緒を捨つる、是を有行と謂ふ。若し復た善男子善女人、滅意度を得、一意に其の身を莊嚴瓔珞し、無上正眞道意に進趣し、成佛を以て、以て快樂と爲さず、衆生に在りと雖も勤勞を爲さず、金剛の心、沮壞す可からざる、是を菩薩瓔珞の有行無行と謂ふ』と。此の如き等の九萬二千の漏盡の阿羅漢、と各各菩薩瓔珞の有行無行を宣暢せり。

謂ひ、結使に於て畢竟有り、畢竟せざるを見ず、亦た塵勞の患を興造し生ぜざる、是を無行と謂ふ。是の如きは、善男子善女人、菩薩瓔珞の有行無行なり』と。迦旃延子、佛の前に於て此の有行無行を說き已つて、起つて佛足を禮し、本の座に還復せり。爾の時、尊者離越卽ち座より起ち、前んで佛足に禮し、佛に白して言さく、『世尊、我亦た菩薩瓔珞の有行無行を說くに堪任す』と。佛、離越に告げたまはく、『說くに堪任せば、便ち之を說く可し』と。離越、佛に白して言さく、『世尊、若し善男子善女人(有り)、無生法に於て生死を越度し、度有るを見ざらんに、是を有行と謂ふ。泥洹空に淪んで寂然として無形に、衆生想有らざらんに、是を無行と謂ふ。復た次に世尊、若し善男子善女人、賢聖の律を得、諸の果證を受け、十二法を修せんに、是を有行と謂ひ、若し一切法本は[五]因緣の聚散なりと觀じ、盡きん生ぜず、更に證を受けずと知らんに、是を無行と謂ふ。復た次に善男子善女人、諸佛世尊の常に說く所の法は、苦習〔集〕盡道、賢聖寶藏にして、進んで泥洹を取り、起滅の法無き、是を有行と謂ふ。賢聖道品の法及び泥洹の道を見ざるは、是を無行と謂ふ。是の如きは、善男子善女人、菩薩瓔珞の有行無行なり』と。是の時に尊者須菩提復た座より起ち、前んで佛足を禮し、佛に白して言さく、『若し善男子善女人有り、本無の行より一切智に至り、無形にして見る可からずと觀了せんに、是を有行と謂ふ。本無の諸法を出生するを見ず。菩薩瓔珞も亦復た是の如く、菩薩瓔珞を見ず、亦た菩薩瓔珞に非ざるを見ず、是を無行と謂ふ』と。爾の時、世尊、須菩提に問ひたまはく、『云何が族姓子、汝何等の議〔義〕を以て斯の言を作し、此れは是れ菩薩瓔珞、此は菩薩瓔珞に非ずとす』と。須菩提、佛に白して言さく、『世尊、若し善男子善女人、究竟法に於て斷滅を生ぜず、常想を興計せんに、是を菩薩有行瓔珞と謂ひ、若し善男子善女人、本無法中に於て諸法悉く空、內空、外空にして滅空を起さず、所生空、道空、泥洹空無く、一切諸法皆空なること空の如しとする、是を菩薩無行瓔珞と謂ふ』と。須菩提復た佛に白して言さく、『世尊、若し善男子善女人、空定淨意を得る者、賢聖法律に於て、一切諸法の窠窟を具足し、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛より、上、如來至眞等正覺に至りて、泥洹の路を莊嚴具足せんに、是を菩薩摩訶薩有行瓔珞と謂ふ。若し復た善男子善女人、五十五法虛空正要を修行し、一一分別して、心、流馳せず、皆、空に歸し、空無法中に於て生漏著斷無き、

【五】麗本は由緣、三本宮本は因緣。

法門を得、復た三億の衆生有り、諸漏盡き意解して阿羅漢を得たり。爾の時、尊者賓頭盧、復た座より起ち、前んで佛に白して言さく、『我亦た菩薩瓔珞の有行無行を說き、善男子善女人をして之を修行するを得しむるに堪任す』と。世尊告げて曰はく、『善い哉善い哉、族姓子、若し能く說かば、今正に是れ時なり』と。爾の時、賓頭盧、佛に白して言さく、『世尊、若し善男子善女人、初禪地に於て、五陰に惡露不淨なるを分別し、中に於て貪著すべき無しと思惟する、是を有行と謂ふ。若し定意に入りて無所有の處にして眞に非ざるを觀じ、他人の身も亦復た是の如しと觀ずる、斯を無行と謂ふ。復た次に世尊、若し善男子善女人、現身の臭處より、不淨の流出する、是を有行と謂ひ、深く本末を觀じて之れを空たるを知る、是を無行と謂ふ。復た次に世尊、善男子善女人、二禪地に於て、四行を具足するは、是を有行と謂ふ。二禪地盡く空に歸すと知るは、是を無行と謂ふ。復た次に世尊、若し善男子善女人、自ら能く開悟し、衆生類を敎へて、淨心を去離して不淨想を起すは、是れを有行と謂ふ。淨想本と所有無しと解了するは、是を無行と謂ふ。復た次に世尊、若し善男子、善女人、三禪を思惟して塵勞を淨除し、自ら成辦する所有るを稱歎せざらんに、是を有行と謂ふ。塵勞の成と不成を見ざるは、是を無行と謂ふ。復た次に世尊、若し善男子善女人、四禪地に在りて五陰を思惟し、繫意して忘れざらんに、是を有行と謂ふ。四禪を分別して永く苦樂の諸縛結著無からんに、是を無行と謂ふ。是の如く善男子善女人、菩薩摩訶薩は、瓔珞の有行無行を寂觀す』と。爾の時、尊者賓頭盧、此の法を說き已つて本の座に還復せり。是の時、尊者大迦旃延、卽ち座より起ち、世尊の足を禮し、前んで佛に白して言さく、『我今、如來の前に於て、有行無行を說き、衆生類をして之を修行するを得しむるに堪任す。若し善男子善女人、十六聖行に於て狐疑を起さざる、是を有行と謂ふ。縛著を思惟するに、本性自ら無く、亦た十六聖行の名無し、是を無行と謂ふ』と、迦旃延復た佛に白して言さく、『若し善男子善女人、三毒婬怒癡の法を拔斷し彼の衆生の心中に念ずる所を察し、無明の心有りや無明の心無きや、愛欲の心有りや、愛欲の心無きや恚害の心有りや恚害の心無きやを悉く能く分別して錯謬無からんに、是を有行と謂ふ。若し善男子善女人、三毒は本と所有無く、生者を見ず滅者を見ず、虛寂にして形無しと觀知せんに、是を無行と謂ふ』と。迦旃延子復た佛に白して言さく、『若し善男子善女人、結使聚に於て皆畢竟せしめ、亦た更に造りて塵勞を興起せざる、是を有行と

と爲すを聞きぬ。我が觀省する如くば、如來の正法は、我が聲聞の有行無行に非ざるなり。然る所以は、弟子緣覺は諸根淳淑にして復た平等正覺を闚望せず。我、如來に於ては則ち無行なり。若し如來をして、慧海を捨て、諸の衆智を去らんと欲し、弟子緣覺爲るの道を求めしめば、如來は我に於て則ち無行なり。又世尊言はく、一切諸法は皆虛、皆な寂、生滅著斷無し、と。審かに是の如くば、何ぞ復た弟子緣覺は聖例に在らずと限制し、益〻我等九萬二千人の悉く皆、六通なるをして倍狐疑を生ぜしむる。又佛の言を聞くに、我法曠大にして亦邊涯無し、吾我を計し衆生に著するあらずと。若し當に爾るべくば、如來今日、清淨法界に於て則ち闕有るなり』と。爾の時、世尊目連に告げて曰はく、『善い哉、善い哉、族姓子、乃ち能く如來の前に於て此の[三]門〔問〕を宣暢せり。我今汝に問はん、汝當に一一に我に報ふべし』と。目連對へて曰はく、『是の如し世尊』と。『云何が目連、行に報有りや』と。目連、佛に白して言さく、『世尊、行には報有り』と。又目連に問ひたまふ、『何ものぞ是れ行報なるや』と。目連、佛に白して言さく、『其の緣對に隨ひ、善には善報有り、惡には惡報有り』と。佛復た問ひたまはく、『云何が目連、善には善報あり、惡には惡報有りや』と。目連、佛に白して言さく、『三塗八難、拷掠榜笞、是を惡報と謂ひ、泥洹永寂して復た生滅無き、是を善報と謂ふ』と。佛、復た目連に問ひたまはく、『云何が族姓子、今日本無の如來は報を獲ると爲すや不や』と。目連對へて曰はく、『不なり世尊』と。佛、目連に問ひたまはく、『云何が族姓子、今の如來至眞等正覺の、身に黃金色、衆相を具足するが如きは、是れ何の報とか爲す』と。目連、佛に白して言さく、『如來の相好形質の報は、泥洹の報に非ざるなり』と。佛、目連に問ひたまはく、『汝の體は泥洹せるや、云何が善に善報有るを知る、是れ泥洹の報なりや』と。目連、佛に白して言さく、『一切諸法は皆悉く假號にして、眞實有るに非ず。所謂泥洹、泥洹は亦た假號のみ。故に泥洹と說く。須らく善に善有るべきなり』と。爾の時、世尊、目連に告げて曰はく、『如來は汝に於て則ち無行なり。亦是れ假號にして眞實有るに非ず。汝、無上等正覺を求めんと欲せば、如來の所に於て則ち無行なり。亦た是れ假號なり。假號法中に於て、有行無行を分別せんと欲するも、此れ則ち然らず』と。爾の時、世尊、此の假號の法を說きたまへば、九億の衆生有りて弘誓の意を發し、願樂して有行無行の菩薩瓔珞に逮ばんと欲す。復た無量の衆生ありて總持

【三】門。三本宮本問。

求めんに、得可しと爲すや不や』と。舍利弗、佛に白して言さく、『不なり世尊。眼識は無形にして見る可からず』と。佛言はく、是の如し、是の如し、舍利弗、是れを乃ち名けて有行の空性と曰ふ。復た次に舍利弗、若し善男子善女人、空に於て空を離れ、空識に染せず、心を息し永く滅して想著を興さず、默然として言無からんに、斯を乃ち名けて無行の空性と曰ふなり』と。佛復た舍利弗に告げたまはく、『若し善男子善女人、耳に外聲を聞き、鼻、外香を嗅ぎ、舌、外味を知り、身、外の更內の樂を知り、意法體、外行を知る。此の識を思惟するに、亦た外より來らず、亦た內より生ぜず、妄分別に由つて乃ち此の患を起すなり。云何が族姓子、五陰法界爾りと爲すや不や』と。舍利弗、佛に白して言さく、『是の如し世尊。斯れ、識法に由つて諸の塵勞を生ずるなり』と。佛、舍利弗に告げたまはく、『云何が族姓子。若し有目の士、法識を思惟して、塵勞の何に從つて來り、復た何によつて滅すと爲すかを分別し、塵勞の窠窟を欲し求めんに、得べしと爲すや不や』と、舍利弗、佛に白して言さく、『不なり世尊、法識は無行にして見る可からず』と。佛言はく、『是の如し、舍利弗。是れを乃ち名けて有行の空性と曰ふ』と。佛復た舍利弗に告げたまはく、『若し善男子善女人、空に於て空を離れ、空識に染せず、意を滅して永く寂し想著を興さず、靜然として語無く、亦た道教無きに、斯れを乃ち名けて無行の空性と曰ふなり』と。佛復た舍利弗に告げたまはく、『夫れ諸法の性は住して變易せず。法起れば則ち起り、法滅すれば則ち滅す。起るも亦た起る所以を知らず、滅するも亦た滅する所以を知らず。有目の士にして之を觀察して、亦た起を見ず、亦た滅を見ず。故に號して本無の、如來、至眞等正覺、明行成爲、善逝、世間解、無上士、道法御、天人師、號佛世尊と爲す。三界を超過するを、天人尊と爲す。若し善男子善女人有り、此の深法要たる有行無行の法本を受持諷誦せば、便ち衆相〔想〕の慧を具足するを得ん』と。佛此の有行無行の法を說きたまふ時に、百億那術の衆生有り、皆な本の行を捨てて牢固たる誓を執り、進んで佛乘不退轉地に趣く。復た諸天世人無央數の衆有り、皆、道忍を得て凡夫地を離る。是の時、尊者大目犍連、復た座より起ち、頭面禮足し、前んで佛に白して言さく、『我亦た有行無行不思議の法を暢達演說するに堪任す』と。佛言はく、『善い哉、族姓子、若し說くを樂はゞ、今正に是れ時なり』と。目連、佛に白して言さく、『世尊、今如來衆法を[三]包識〔道識〕して、以て有行無行

【三】包識。宮本道識。

謂ふ』と。是の時長老阿若拘隣、菩薩摩訶薩に有行無行を說き已つて、卽ち佛足を禮す。佛言はく、『善い哉、善い哉、族姓子、如來深妙の法を宣暢したまふ。甚奇甚特なり。實に未だ曾て有らざるなり。汝の座に還復して、常の威儀の如くなれ』と。是の時、尊者舍利弗、卽ち座より起ち、齊しく法服を整へ、長跪叉手して佛に白して言さく、『世尊、疑を抱きて日久し、問ふ所有らんと欲す。唯願はくば世尊、一一發遣したまへ』と。佛、舍利弗に告げて言はく、『善い哉族姓子、問ふ所有らんと欲せば、今正に是れ時なり。如來一一に當に汝が問ひに訓ふべし』と。時に舍利弗佛に白して言さく、『世尊、云何が有行と爲し、云何が無行と爲す。世尊の言の如く、現に造るは則ち有行、本と無きは則ち無行ならば、今、如來に問はん、有行の無行に至るが爲に、乃ち無行と名くるや。有行は常に有り、無行は常に無きが爲に、乃ち無行と名づくるや。若し有行を言はゞ、卽ち尊者大迦葉の宣ぶる所の有行は、錯謬有る無からん。假し無行ならしむれば、則ち言教無からん。云何が言教無きの法を以て、言教有らしめんや。唯だ願はくは世尊、一一に分別したまへ』と。佛、舍利弗に告げて言はく、『云何が舍利弗、有行の體性は空と爲すや不や』と。舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、有行の體性は空なること空の如し』と。佛復た舍利弗に問ひたまはく、『云何が族姓子、無行の空性は如何』と。舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、無行の空性は卽ち有行の空性是れなり』と。佛、舍利弗に告げたまはく、『若し無行の空性卽ち有行の空性ならば、今大迦葉、何を以ての故に、但だ有行を說いて有行の空を說かざる、亦た無行を說かざる、亦た無行の空性を說かざるや』と。舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、云何が有行の空性、云何が無行の空性なる』と。佛、舍利弗に告げて言はく、『諦かに聽け、諦かに聽け、善く之を思念せよ。吾當に汝が與に其の義を敷演すべし』と。對へて曰はく、『是の如し世尊』と。佛、舍利弗に告げたまはく、『云何が族姓子、五陰身を成ずる、四大成就して、本との生ずる所を捨し、此の如き衆生、若し外に色を見れば、眼識中に於て自ら塵勞を起して、此の識の外より來らず、亦た內より出でざるを分別し、識の分別に由つて乃ち此の患を生ず。云何が族姓子、五陰法界は爾りと爲すや不や』と。舍利弗言さく、『是の如し、是の如し、世尊、皆、眼識に由つて此の塵勞を起すのみ』と。佛復た舍利弗に告げたまはく、『云何が族姓子、若し有目の士有り、眼識を思惟して、塵勞の、本と何より來り、何によつて滅すと爲すやを分別し、塵勞の窠窟を欲し

得しめたまふ。是を無行と謂ふ』と。時に大迦葉復た佛に白して言さく、『世尊、若し善男子善女人有り、本と道心無くして、凡夫地に在り、卽ち能く指授して道意を發さしめ、至竟成就して終に中墮して、二地中に在らざる、是を無行と謂ふ。復た次に世尊、若し善男子善女人有り、無數劫より積功累德して大弘誓を發すらく、若し我成道して某國に在りて生じ、某聖弟子に遭遇せんに、翼從亦各々是の如からむと。然かも彼の善男子善女人、本との所願に違ひ、中ごろ賢聖に遭ひ、佛の出世有れば、卽ち彼の佛に從つて滅度を取る、是を無行と謂ふ』と。爾の時世尊、迦葉に告げて言はく、『止みね、止みね耆年。汝今滓濁偏狹の心の能く測度する所なり。何を以ての故に、立根得力の菩薩摩訶薩すら、猶尙未だ悉く有行無行ならず。況や汝小節の悉くすを得んと欲するをや。此則ち然らざるなり。汝の座に還復して常の威儀の如くなれ』と。時に大迦葉、容顏常に變りて極めて大いに慚愧し、佛の足下を禮し、本の座に還復せり。爾の時、長老阿若拘隣、復た座より起ち、前んで佛に白して言さく、『世尊、我今如來の前に於て、道敎の有行無行を頒宣するに堪任す』と。佛言はく、『善い哉(善い哉)族姓子。今正に是れ時なり。汝の所陳を恣にせよ』と。時に阿若拘隣、佛に白して言さく、『世尊、若し善男子善女人有り、八正道を修し、八法中に於て狐疑を起さゞる、是を有行と謂ふ。若し復た善男子善女人、無量の法慧を得、八法を分別して悉く所有無く、本と一法無し、況や八正有らんや、名號の法無く、亦た窠窟無き、斯れ乃ち名けて第一最勝無行の法と曰ふ。復た次に世尊、若し善男子善女人、四禪行に於て一一思惟して意分散せず、繫意明に在り、法宜〔儀〕を失はず、必ず所果有ること、狐疑有ること無き、是を世尊、第一有行と謂ふ。若し復た善男子善女人、初より竟に至り、端坐して諸の無形法を思惟し、出生の本と端緒無く、名號虛詐にして眞に非ず、有に非ざるを見ざる、斯れ乃ち名けて無行の法と曰ふ』と。時に長老阿若拘隣復た佛に白して言さく、『若し善男子善女人、空慧を分別して心、空に染せざるも、空に於て空を求め、顚倒の想を生ずる、是を有行と謂ふ。若し空慧に於て染汚を生ぜず、妄見を興さず、若干の意—本と自ら本と無し、況や當に今有るべき—を起す、是を無行と謂ふ。復た次に世尊、若し復た善男子善女人、內に明慧を思ひ、空寂に定意し、心を持すること牢固として增無く減無き、是を有行と謂ふ。內外六情は主無し、本と六情無し、況や今識有らんや、識は三世に非ず、三有に著せず、と分別する、是を無行と

する所以を知らざる、是を有行と謂ふ。三毒の根本は自ら形兆無く、永く起滅無しと觀ずる、是を無行と謂ふ』と。觀進菩薩曰さく、『律を奉じて犯す所無く、亦た犯す有るを見ざる、是を有行と謂ひ、本と律有る無く、亦た犯す有る無く、本性自爾なる、是を無行と謂ふ』と。常喜菩薩曰さく、『分別して十二法門を解脱する、是を有行と謂ひ、亦た解脫及び諸の法寶の起有り滅有るを見ざる、是を無行と謂ふ』と。宣暢菩薩曰さく、『法生苦生に本と處所無き是を有行と謂ふ。苦の本際を知つて觀る可からさる、是を無行と謂ふ』と。修道菩薩曰さく、『大道一相、泥洹無形にして、無上の道を志求するを見ざる、是を有行と謂ひ、演ずる所の道教に精微無く、法界自然にして能く廻轉するなき、是を無行と謂ふ』と。講法菩薩曰さく、『建立する所の道不可思議にして、穢濁に處ると雖も、處所無きが如き、是を有行と謂ふ。五淨及び五濁の性の、虛にして眞に非ず、亦た所有無しと了知する、是を無行と謂ふ』と。爾の時十方無央數江河沙數の諸菩薩等、各各自ら有行無行を說き已つて、各々還復して坐す。時に大迦葉便ち座より起ち、衣服を整へ、長跪叉手して、前んで佛に白して言さく、『世尊、我も亦た有行無行を說くに堪任す。若し聽さるれば敢て、所懷を宣べん』と。佛、迦葉に告げたまはく、『今大衆集、渴仰し來ること久し、若し說くに堪へば、今正に是れ時なり』と。爾の時、大迦葉、佛に白して言さく、『世尊、若し善男子善女人有り、正律十二頭陀難得の法を奉持して、漏失する所、毫釐許りの如きも無く、亦た想を起して是非心を生ぜざる、斯れ乃ち名けて第一有行と曰ふ』と。時に大迦葉復た佛に白して言さく、『若し善男子善女人、一意に念ずる所專精にして忘れず、能く道教を演べて各々志趣を充たし、乃至成佛するも大誓を改めざる、斯れも亦た名けて第一有行と曰ふ』と。時に大迦葉復た佛に白して言さく、『若し復た善男子善女人、學を進め、禪觀法門を修習し、諸の通慧に於て染著する所無く、道を志求するものを各々歡喜せしめ、復た能く誘導して道遙を將示し、前人の心果其の願ふ所に隨つて、大乘を求むれば畢志成就し、中間の罣礙に墮落せしめず、若し復た辟支佛を得んと欲せば、亦復た將護して無爲を得しむる、斯れ亦た名けて第一有行と曰ふ』と。時に大迦葉復た佛に白して言さく、『若し善男子善女人有り、無行法を修習するを得んと欲せば、一切衆生の罪根深固にして拔濟す可きこと難し。然も此の罪人我と緣無く、由つて得度無し。然るに我が世尊は微に權巧漸伺方便を設け、彼の去就を知り、爲に因緣を造つて覆蓋を蒙るを

亦た道を見ず、復た法性無き、是を無行と謂ふ』と。轉法輪菩薩曰さく、『樹王の下に在つて、四道の果證を頒宣演暢する、是を有行と謂ひ、法無法の想を説きて、亦四道を見ざるは、是を無行と謂ふ』と。自観菩薩曰さく、『色痛想行識の空を説くは、是を有行と謂ふ。亦た五陰の成敗を見ざるは、是を無行と謂ふ』と。衆智菩薩曰さく、『其の四意止を観じ、内外空を知る有るは是を有行と謂ひ、意止の本と從つて來去する所無く、亦た至る所無しと分別するは、是を無行と謂ふ』と。多聞菩薩曰さく、『諸法乃至三十七品を熾然する、是を有行と謂ひ、亦た熾然及び一切諸法を見ざる、是を無行と謂ふ』と。法身菩薩曰さく、『一切諸法の動轉有るものと、動轉せざる者とを見るは、是を有行と謂ひ、亦た動轉と、動轉せざるに非ざるとを見ざるは、是を無行と謂ふ』と。無怒菩薩曰さく、『一切法は自然なり、法観も亦爾なり。法観は自然にして一切法も亦爾なり、是を有行と謂ふ。本と諸法無く、亦た法観無き、是を無行と謂ふ』と。上首菩薩曰さく、『佛慧知の虚寂なるを分別する、是を有行と謂ひ、佛の深慧は本性自爾にして、亦た名號無しと観ずる、是を無行と謂ふ』と。道議菩薩曰さく、『五分法身を了して遠離する無きは、是を有行と謂ひ、一一に性自ら無形にして亦た起滅無しと観察するは、是を無行と謂ふ』と。本祚菩薩曰さく、『一切諸法は亦た倚る所無く、内空に倚らず、亦た外空に倚らざる、是を有行と謂ふ。内外空及び一切諸法の亦た生ずるを見ず、亦た滅するを見ず、悉く著する所無しと了する、是を無行と謂ふ』と。權現菩薩曰さく、『周旋往來して、諸佛に禮事し、亦た佛土の淨及び不淨、衆の好惡を見ざる、是を有行と謂ふ。己身及び諸の佛國の好惡清濁を見ざる、是を無行と謂ふ』と。無想著菩薩曰さく、『諸法は亂れず、澹然として移らず、苦樂は是れ常、非常、若しくは好、若しくは醜と計せざる、是を有行と謂ふ。無量の智慧悉く空に歸して、亂定苦樂好醜を見ざる、是を無行と謂ふ』と。大慈菩薩曰さく、『諸法の有趣無趣を見ざる、是を有行と謂ひ、永く趣有ること無く、亦た趣を見ざる、是を無行と謂ふ』と。忍行菩薩曰さく、『空、無相、願及び虚空識界の眞如一性なるを解する、是を有行と謂ふ。空、無相、願亦た是れ空、空亦た是れ空、無相、願にして、復た報應無き、是を無行と謂ふ』と。寶掌菩薩曰さく、『一定意に入りて、悉く諸佛の威儀所行法則の道を知る、是を有行と謂ふ。禪定に入ると雖も、永く法相無き、是を無行と謂ふ』と。喜慶菩薩曰さく、『三毒の根本は、自然に起滅して、生じて生ずる所以を知らず、滅して滅

す、法有る無きに非ざる、是を無行と謂ふ』と。是の如く菩薩摩訶薩、有行無行に於て、便ち菩薩瓔珞を具足するを得たり。無量菩薩曰さく『佛量に過ぐるを以て限る可からざる、是を有行と謂ひ、亦た量を見ず、亦た非量を見ざる、是を無行と謂ふ』と。心念菩薩曰さく『六神通を以て諸佛國に遊び、自ら神通道を稱し、譽歎せざる、是を有形と謂ひ、國土の接度する所有るを見ざる、是を無行と謂ふ』と。賢護菩薩曰さく『能く一切を化して、盡く佛形と爲す、是を有形と謂ひ、亦た化を見ず、復た佛を見ざる、是を無行と謂ふ』と。無邊際菩薩曰さく『佛界の無量なるを、總持して忘れざる、是を有行と謂ひ、本と總持無く、亦た三寶無き、是を無行と謂ふ』と。常悲菩薩曰さく『諸有の衆生の大乘心を發す、是を有形と謂ひ、亦た大乘無く、復た道有ること無き、是を無形と謂ふ』と。不思議菩薩曰さく『佛は不思議なり、正法も亦た然り、法は不思議なり、受報も亦然り。是を有形と謂ふ。亦た思議を見ず、亦不思議を見ざる、是を無行と謂ふ』と。周旋菩薩曰さく『空慧は是れ一にして、慧有らざるに非ず、是を有行と謂ふ。慧亦た虛寂にして、亦た慧有らず、亦た慧無からず、是を無行と謂ふ』と。法造菩薩曰さく『如來は一なり、眞際も亦た爾なり、是を有行と謂ふ。亦た如來を見ず、亦た眞際を見ず、一無く不一無き是を無行と謂ふ』と。善權菩薩曰さく『慧觀もて一切の諸法を分別する、是を有行と謂ひ、亦た慧觀無く、復た諸法無き、是を無行と謂ふ』と。無與等菩薩曰さく『一相無相なる、是を有行と謂ふ。亦た相を見ず、亦た無相を見ざる、是を無行と謂ふ』と。是の如く菩薩摩訶薩、有行無行に於て、便ち能く菩薩瓔珞を具足せり。功勳菩薩曰さく『亦た生を見ず、亦た不生を見む。是を有行と謂ふ。生亦た生無く復た無生無き、是を無行と謂ふ』と。覺悟菩薩曰さく『有常、無常、是を有行と謂ふ。亦た常を見ず、亦た非常を見ざる、是を無行と謂ふ』と。成就菩薩曰さく『身行を造らず、亦た所著無き、是を有行と謂ふ。亦た造るを見ず、亦た造らざるを見ざる、是を無行と謂ふ』と。願樂菩薩曰さく『口行を造らず、亦た所著無き、是を有行と謂ひ、亦た造るを見ず、亦た造らざるを見ざる、是を無行と謂ふ』と。無處所菩薩曰さく『意行を造らず、亦た所著無き、是を有行と謂ひ、亦た造るを見ず、亦た造らざる、是を無行と謂ふ』と。無礙智菩薩曰さく『覺と覺する所無きとは、是を有行と謂ひ、亦た覺を見ず、亦た衆生(有る)の想を起さざるは、是を無行と謂ふ』と。香積菩薩曰さく『道の本無、法性の不異を解する、是を有行と謂ふ。

本無の如來業、道慧藏第一なり。諸度無量の智、漸く如來境に入る。」大道に三乘無し、況や四道の果有らんや。淨きこと虛空の如きを、觀ずるに耆年の迦葉是なり。」我今斯の心の、非有亦た不〔非〕無なるを觀じて、多く無量の變を現じ、佛の弘誓を捨てず。」久遠より以來、神足瓔珞を修す、六度曠大の法に、何ぞ聲聞の名有らん。」佛界に疆畔無く、所化も亦同じからず。故に衆生をして惑ひて、謂つて道若干と爲さしむ。」

爾の時、座上に無央數の衆生有り、如來の此の偈を說くを聞き已つて、悉く皆發意し、信樂して道慧深藏甚深の法を聞かんと欲し、皆無上正眞道の意を發す。復た無央數の衆生有り、正心に解脫して盡信の行を得たり。

有行無行品第二十四

爾の時、無頂相菩薩、卽ち座より起ち、偏へに右臂を露はし、長跪叉手して前んで佛に白して言さく、『我能く如來の前に於て、有行無行を說くに堪任せん』と。佛曰はく、『善い哉、善い哉、族姓子、若し能く說かば、今正に是れ時なり』と。無頂相菩薩、佛に白して言さく、『世尊、若し菩薩摩訶薩有り、本無を解了せば是を有行と謂ふ。本無の自然空寂無形なる、これを無行と謂ふ』と。廣進菩薩曰さく、『彼の佛土に現じ、神足もて敎化する、是を有行と謂ふ。國土を見ずして衆生を化する、是を無行と謂ふ』と。知生菩薩曰はく、『泥洹寂靜にして起滅無き、是を有行と謂ひ、泥洹及び泥洹の相を見ざる、是を無行と謂ふ』と。法寶菩薩曰さく、『道と非道とを說く、是を有行と謂ひ、亦道有るに非ず亦た道無きに非ざる、是を無行と謂ふ』と。淨妙菩薩曰さく、『淸淨法觀、是を有行と謂ふ。亦た淸淨法觀を見ざる、是を無行と謂ふ』と。趣道菩薩曰はく、『佛の神力を見る、是を有行と謂ふ。亦た佛を見ず、亦た神力無き、是を無行と謂ふ』と。普施菩薩曰さく、『現に定に入る有る、是を有行と謂ひ、亦た修行を見ず、亦た定に入るを見ざる、是を無行と謂ふ』と。月光照菩薩曰さく、『佛の身相遍ねく三千大千世界に滿つるを見る、是を有行と謂ふ。亦た、佛及び相好を見ざる、是を無行と謂ふ』と。哀世菩薩曰さく、『吾我壽命有る、是を有行と謂ひ、亦た壽命を見ず、亦た吾我を見ざる、是を無行と謂ふ』と。無畏菩薩曰さく、『法を說きて法想無き、是を有行と謂ひ、亦た法を見

菩薩を遣はし、忍界に來至し、世尊の所に至つて頭面禮足し、一面に在つて坐す。上方此を去り衆生〔香〕界を過ぎ、復た二恒〔江河〕沙世界を過ぎて佛土有り、名けて普慈と曰ふ、佛を弘等如來至眞等正覺と名く。此の光明を見、尋いで五千の菩薩を遣はし、忍界に來至し、世尊の所に至り、頭面禮足し、一面に在つて坐す。下方此を去ること三十二億江河沙數に佛土有り、名けて堅固と曰ふ。佛を不捨弘誓如來、至眞等正覺と名く。釋迦文佛の大光明を放つを見、復た十千大士を遣はし、下方より世尊の所に來至し、頭面禮足して、一面に在つて坐す。是の時、世尊、衆の坐已に定まるを見て、便ち諸の來會者に告げたまはく、『吾今當に有行無行を說くべし、諦かに聽け諦かに聽け善く之を思念せよ。若し善男子善女人、須陀洹より乃し阿羅漢に至り、未だ如來道慧藏を得ざる者、斯等の類は聖例に在らず』と。爾の時坐上に九萬二千の無著阿羅漢有り、異方世界より來りて忍土に詣り、如來に從つて法瓔珞の有行無行を聽かんと欲し、今世尊の此の如きの敎―善男子善女人、須陀洹より乃し阿羅漢に至り未だ如來道慧藏を踐まざる者、斯等の類は聖例に在らずと吐きたまふを聞く。是の時、九萬二千の得道せる阿羅漢は、諸漏已に盡き、縛結已に解け、更に生を受けず、如實に之を知る。(爾の)時に、摩訶迦葉、阿若拘隣、舍利弗、摩訶目揵連、賓頭盧、摩訶迦旃延、離越、須菩提、滿願子の九萬二千人等、卽ち座從り起ち、頭面もて如來の足を禮し、佛を遶る三匝し、各自長跪し、前んで佛に白して言さく、『世尊、我等四果を得、六通淸徹すと雖も、猶尚凡夫行人にだも如かず。然る所以は、今如來の道慧深藏を說きたまふを聞くに、我等の入る所の境界に非ず。唯だ願はくば世尊、斯の法を聞くを得、久寐の衆生をして永く猶豫無からしめたまへ』と。爾の時、世尊默然として對へず、時に大迦葉重ねて佛に白して言さく、『我等羅漢は稱して佛子たるを獲と雖も、皆是れ如來の咎にして我等の過に非ず。何を以ての故に。若し如來をして誓つて三乘無からしめば、我等豈に等正覺を成ずるに非ざらむや。何爲れぞ如來聖例に在るを聽されざるや』と。時に、大迦葉及び九萬二千の眞人、盡く袈裟を脫ぎ、哀號悲泣して、五體地に投ず。爾の時に當つて、三千大千の刹土、六變に震動す。諸天、龍、鬼神、阿須倫、迦留羅、眞陀羅、摩休勒、乾塔惒、人及び非人、未曾有と怡しむ。爾の時、世尊、諸人の心中の狐疑を解かんと欲し、便ち右手を舒べ、迦葉を扶け起して、各〻復た坐せしめたまふ。爾の時世尊、卽ち斯の偈を說きたまふ。

爾の時、佛、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及び諸の大衆の普ねく來會する者、及び菩薩摩訶薩に告げたまはく、『誰か能く如來の前に於て、有行無行不可思議衆智の門を[二]說くに堪任するぞ』と。爾の時、一切大衆、如來の有行無行不可思議衆智の門を說きたまふと聞きて、默然として對へず。爾の時、世尊舌相光明を放ちて、普ねく無數無量の國土を照し、無量の衆生をして皆光明を見せしめたまふ。其の光を見る者、皆無上正眞道の意を發せり、時に東方此を去ること十億江河沙數、是の數を過ぎ已つて佛土有り、蓮華淨と名く。佛を淨教如來、至眞等正覺と名く。釋迦文の大光明を放つて普ねく三千大千の佛土を照すを見て、卽ち菩薩萬二千人を遣はして忍土に至り、世尊の所に至り、頭面禮足して、一面に在つて坐す。南方此を去ること十億江河沙數の諸佛國土に佛有り、一道と名く。復た光明を見、尋いで菩薩八千大士を遣はし、來りて忍界に至り、如來の所に至りて佛を遶ること三匝し一面に在つて坐す。西方此を去ること七江河沙等の諸佛世界に佛有り、名けて無礙如來、至眞等正覺と曰ふ。此の光明の普ねく照す所有るを見て、卽ち千二百の大士の盡く神通を得るを遣はし、魔界を行過して忍土に來至し、如來の所に至り、頭面禮足して一面に在つて坐す。北方此を去ること十三億江河沙數に佛土有り、名けて如（鄉本妙）像と曰ふ。佛を正意如來、至眞等正覺と名く。復た光明の普ねく三千大千世界を照すを見て、尋いで五萬の菩薩の、悉く皆神足あり、六通清徹せるを遣はして、忍界に來至し、世尊の所に(至つて)、頭面禮足し一面に在つて坐す。東北角方此を去ること八江河沙數に佛土有り、名けて除垢と曰ふ。佛を等行如來、至眞等正覺と名く。此の光明を見て、復た菩薩七千大士を遣はして、忍土に來至し、如來の所に至り、頭面禮足して一面に在つて坐す。東南角此を去ること三億佛土に佛國有り、名けて積寶と曰ふ。佛を善積如來、至眞等正覺と名く。復た光明を見、尋いで七百正士の皆神通を得、無礙慧を獲たるを遣はし、忍界に來至し、世尊の所に至り、頭面禮足し、一面に在つて坐す。西南角此を去ること十江河沙數の諸佛國土に、佛土有り名けて一相と曰ふ。佛を等慧如來、至眞等正覺と名く。此の光明を見、尋いで千五百の大士を遣はし、忍界に來至し、世尊の所に至つて頭面禮足し、一面に在つて坐す。西北角此を去ること十四億江河沙數の諸佛國土に國土有り、名けて淸淨と曰ふ。佛を衆德如來、至眞等正覺と名く。此の光を見已つて、尋いで五千の

【二】說。恐らく聽の誤りか。

ろ多しと爲すや不や』と。淨觀菩薩佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し世尊』と。佛言はく、『故に善男子善女人の法瓔珞の業、其の功德福稱量す可からざるに如かず。何を以ての故に。一恒沙の衆生、八地中に在り、童眞行に立ち、十二妙法を成就して心意惑はず、敎化に堪任し、四法行七觀行を修し、五淨法を修し、五觀行を行じ、及び八法及び十八法、三十七品、空無相願を修し、法瓔珞の業、其の功德福稱量す可からず、一一成就して狐疑無く、皆法瓔珞に由つて諸道の果報を具足するを得ればなり』と。佛復た淨觀菩薩に告げて曰はく、『云何が族姓子、一恒沙の衆生、九地中に在り、必ず當に堅住して佛無量の神德の業を得べく、盡く諸法を捨て〻復た修習せず進んで當に成佛して復た退轉無かるべくば、其の功德福寧ろ多しと爲すや不や』と。淨觀菩薩佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し世尊』と。佛言はく、『故に善男子善女人の法瓔珞の業の、其の功德福稱量す可からざるに如かず。何を以ての故に。一恒沙の衆生、九地中に在り、童眞行に立ち、十二妙法を成就して心意惑はず、敎化に堪任し、此の如きの比、十方恒沙及び前一地二地乃至九地を滿す、故に法瓔珞の業、其の功德福稱量す可からず、一一に成就して狐疑無く、皆法瓔珞に由つて諸道の果報を具足するを得ればなり』と。爾の時、世尊淨觀菩薩に告げたまはく、『我が今日の如き如來至眞等正覺は、三界の獨尊にして、盡く三千大千世界を統ぶ。故に天中の天と號す。斯れ、法瓔珞の業に由つて成就するを得、其の功德福稱量す可からず、深要なる諸道の果報を具足す』と。爾の時、菩薩有り、名けて辯通と曰ふ。卽ち座より起ち、長跪叉手し、前んで佛に白して言さく、『若し善男子善女人有り、心意に樂を好み、法瓔珞を修習するを得んと欲せんに、云何が心を用ひん、當に何法を行じてか、法瓔珞の慧を成就するを得べき』と。佛言はく、『善い哉、善い哉族姓子、若し善男子善女人有り、法瓔珞を修習するを得んと欲せば、當に妄想を去りて識著を生ぜず、諸念具足して衆定に入るを得、十方無量の世界に遊至し、一佛國より一佛國に至りて諸佛世尊に承事供養すべし。何を以ての故に、皆識著の想無きに由つて諸道の果報を具足するを得ればなり』と。

受迦葉勸行品第二十三

浄觀菩薩に告げて曰はく、『云何が族姓子、一恒沙の衆生、皆六地に在り、六度無極―布施、持戒、精進、忍辱、一心、智慧―を行じ、十二法を修して心意惑はず、教化に堪任し、及び四法行、七觀行を修し、五淨法を修し、五觀法を行じ、及び八法及び十八法、三十七品、空無相願を修せんに、其の功德福寧ろ多しと爲すや不や』と。淨觀菩薩佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し世尊』と。佛言はく、『故に善男子善女人の法瓔珞の業、其の功德福稱量す可からざるに如かず。何を以ての故に。一恒沙の衆生、六地中に在り、六度無極―布施、持戒、忍辱、精進、一心、智慧―を行じ、十二法を修し、教化に堪任し、及び四法行、七觀行を修し、五淨法を修し、五觀行を行じ、及び八法及び十八法、三十七品、空無相願を修する法瓔珞の業、其の功德福稱量す可からず、一一に成就して狐疑無く、皆法瓔珞に由つて諸道の果報を具足するを得ればなり』と。佛復た淨觀菩薩に告げて曰はく、『云何が族姓子、一恒沙の衆生、七地中に在り、不退轉に逮り、十三法を行じ、畢に志堅固にして當に無上等正覺を成ずべく、四無畏を得、四辯才を得、六度無極―布施、持戒、忍辱、精進、一心、智慧―を行じ、十二法を修して心意惑はず、教化に堪任し、及び四法行、七觀行を修し、五淨法を修し、五觀行を行じ、及び八法及び十八法、三十七品、空無相願を修せんに、其の功德福寧ろ多しと爲すや不や』と。淨觀菩薩佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し世尊』と。佛言はく、『故に善男子善女人の法瓔珞の業、其の功德福稱量す可からざるに如かず。何を以ての故に。一恒沙の衆生、七地中に在り、不退轉に逮び、十三法を行じ、畢に志堅固にして當に無上等正覺を成ずべく、四無畏を得、四辯才を獲、六度無極―布施、持戒、忍辱、精進、一心、智慧―を行ひ、十二法を修して心意惑はず。教化に堪任し、及び四法行七觀行を修し、五淨法を修し、五觀行を行じ、及び八法及び十八法、三十七品、空無相願を修し、法瓔珞の業、其の功德福稱量す可からず、一一に成就して狐疑無く、皆法瓔珞に由つて諸道の果報を具足するを得ればなり』と。佛復た淨觀菩薩に告げて曰はく、『云何が族姓子、一恒沙の衆生、八地中に在つて、童眞行に立ち、十二妙法及び五慧業を成就し、十三法を行じ、畢に志堅固にして當に無上等正覺を成ずべく、四無畏を得、四辯才を獲、六度無極―布施、持戒、忍辱、精進、一心、智慧―を行じ、十二法を修して心意惑はず。教化に堪任し、及び四法行、七觀行を修し、五淨法を修し、五觀行を行じ、及び八法及び十八法、三十七品、空無相願を修せんに、其の功德福寧

福寧ろ多しと爲すや不や』と。淨觀菩薩佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し世尊』と。佛言はく、『故に善男子善女人の法瓔珞の業の、其の功德福稱量す可からざるに如かず。何を以ての故に。一恒沙の衆生、一地を超えて第二地に住し、八法幷に十八法、三十七品、空無相願を修行し、一一に成就して狐疑無く、皆法瓔珞に由つて諸道の果報を具足するを得ればなり』と。佛復た淨觀菩薩に告げて曰はく『云何が族姓子、若し一恒沙の衆生有り、一地二地を超えて三地中に在り、五淨法を修し五觀法を行じ、八法幷に十八法、三十七品、空無相願を修行せんに、其の功德福寧ろ多しと爲すや不や』と。淨觀菩薩佛に白して言さく『甚だ多し、甚だ多し世尊』と。佛言はく『故に善男子善女人の法瓔珞の業の其の功德福稱量す可からざるに如かず。何を以ての故に。一恒沙の衆生、一地二地を超えて三地中に在り、五淨法を修し、五觀法を行じ、幷に八法及び十八法、三十七品、空無相願を修し、一一に成就して狐疑無く、皆法瓔珞に由つて諸道の果報を具足するを得ればなり』と。佛復た淨觀菩薩に告げて曰はく『云何が族姓子、若し一恒沙の衆生有り、一地二地三地より四地中に住し、四法及び七觀行幷に五淨法を修し、五觀法を行じ、八法幷に十八法、三十七品、空無相願を修行せんに、其の功德福寧ろ多しと爲すや不や』と。淨觀菩薩佛に白して言さく『甚だ多し、甚だ多し(世尊)』と。佛言はく『故に善男子善女人の法瓔珞の業あり、其の功德福稱量すべからざるに如かず。何を以ての故に。一恒沙の衆生、第四地に在り、四法及び七觀行を修行し、五淨法を修し、五觀法を行じ、八法及び十八法、三十七品、空無相願を修行し、一一に成就して狐疑無く、皆法瓔珞に由つて諸道の果報を具足するを得ればなり』と。佛復た淨觀菩薩に告げて曰はく『云何が族姓子、若し一恒沙の衆生有り、五住地に在り、十二法を修して、心意惑はず、教化に堪任し、及び四法行七觀行を修し、五淨法を修し、五觀法を行じ、八法及び十八法、三十七品、空無相願を修行せんに、其の功德福寧ろ多しと爲すや不や』と。淨觀菩薩佛に白して言さく『甚だ多し、甚だ多し世尊』と。佛言はく『故に善男子善女人の法瓔珞の業あり、其の功德福稱量す可からざるに如かず。何を以ての故に。一恒沙の衆生、五地中に在り、十二行を修して心意惑はず、教化に堪任し、及び四行を修し、五淨法を修し、五觀行を行じ、七觀行を行じ、八法及び十八法、三十七品、空無相願を修業し、一一に成就して狐疑無く、皆法瓔珞に由つて諸道の果報を具足するを得ればなり』と。佛復た

佛言はく、『故に善男子善女人、法瓔珞の業を受持諷誦せんに如かず。功徳福稱量す可からず。何を以ての故に。一恒沙の衆生、悉く斯陀含を得、一一に成就して狐疑無く、皆法瓔珞に由つて諸道の果報を具足するを得ればなり』と。佛復た淨觀菩薩に告げたまはく、『云何が族姓子、若し一恒沙の衆生有り、盡く阿那含果を得、復た狐疑無く、悉く皆成就せんに、其の功徳福寧ろ多しと爲すや不や』と。淨觀菩薩復た佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し、世尊』と。佛言はく、『故に善男子善女人、法瓔珞の業を受持諷誦すれば、其の功徳福稱量すべからざるに如かず。何を以ての故に。一恒沙の衆生、悉く阿那含を得、一一に成就して狐疑なく、皆法瓔珞に由つて諸道の果報を具足するを得ればなり』と。佛復た淨觀菩薩に告げたまはく、『云何が族姓子。若し一恒沙の衆生有り、盡く阿羅漢果を得、復た狐疑無く、悉く皆成就せば、其の功徳福寧ろ多しと爲すや不や』と。淨觀菩薩復た佛に白して言さく、『甚だ多し甚だ多し、世尊』と。佛言はく、『故に善男子善女人、法瓔珞の業を受持諷誦せんに、其の功徳福稱量すべからざるに如かず。何を以ての故に。一恒沙の衆生、悉く阿羅漢を得、一一に成就して狐疑無く、皆法瓔珞に由つて諸道の果報を具足するを得ればなり』と。佛復た淨觀菩薩に告げたまはく、『云何が族姓子。若し一恒沙の衆生有り、悉く辟支佛を得、一一に成就して狐疑無からむに、其の功徳福寧ろ多しと爲すや不や』と。淨觀菩薩佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し世尊』と。佛言はく、『故に善男子善女人、法瓔珞の業を受持諷誦せば、其の功徳福稱量す可からざるに如かず。何を以ての故に。一恒沙の衆生、悉く辟支佛を得、一一に成就して狐疑無く、皆法瓔珞に由つて諸道の果報を具足するを得ればなり』と。佛復た淨觀菩薩に告げたまふ、『云何族姓子。若し一恒沙の衆生有り、一地の行を成じ、意を發して道に趣き、十八法、三十七品、空無相顧を修せんに、其の功徳福寧ろ多しと爲すや不や』と。淨觀菩薩佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し世尊』と。佛言はく、『故に善男子善女人、法瓔珞の業を受持諷誦せんに、其の功徳福稱量す可からざるに如かず。何を以ての故に。一恒沙の衆生、悉く一地の行を成ずるを得、意を發し道に趣き、十八法、三十七品、空無相願を修し、一一に成就して狐疑無く、皆法瓔珞に由つて諸道の果報を具足するを得ればなり』と。佛復た淨觀菩薩に告げたまはく、『云何が族姓子。若し一恒沙の衆生有り、一地を超えて第二地に住し、八法を修行し、幷に十八法、三十七品、空無相願を修せんに、其の功徳

其の功德福稱量す可からざるに如かじ』と。爾の時、世尊、淨觀菩薩に告げたまはく『善い哉善い哉、族姓子、乃ち能く如來の前に於て師子吼をなせり。云何が族姓子、若し善男子善女人有り、此の法瓔珞を受持し、諷誦し、復た恒沙の衆生有り、五戒を成就せんに、其の福寧ろ多きや不や』と。淨觀菩薩、佛に白して言さく『甚だ多し、甚だ多し世尊』と。佛言はく、『故に善男子善女人、法瓔珞無盡の藏を得るに如かず。其の功德福稱量すべからず、百倍千倍萬倍巨億萬倍、譬喩を以て比と爲す可からず。何を以ての故に、一恒沙の衆生、五戒を成就せば、皆法瓔珞に由つて諸道の果報を具足するを得ればなり』と。佛復た淨觀菩薩に告げたまはく『云何が族姓子、若し一恒沙の衆生有り、盡く五通を得、皆悉く成就し、加ふるに五戒十善を修せんに、其の功德福寧ろ多しと爲すや不や』と。淨觀菩薩、佛に白して言さく『甚だ多し、甚だ多し、世尊』と。佛言はく『故に善男子善女人法瓔珞の業を受持、諷誦せんに如かず。其の功德福稱量す可からず。何を以ての故に、一恒沙の衆生悉く五通を得、各各成就し、皆法瓔珞に由つて諸道の果報を具足するを得ればなり』と。佛復た淨觀菩薩に告げたまはく『云何が族姓子、若し一恒沙の衆生有り、四等心—慈悲喜護—を行じ、第一禪第二第三第四禪を行じ、喜安を念持して自ら守り、復た四空定を行じ、一一具足せんに、其の功德福寧ろ多しと爲すや不や』と。淨觀菩薩、佛に白して言さく『甚だ多し、甚だ多し、世尊』と。佛言はく『故に善男子善女人法瓔珞の業を受持諷誦せんに如かず。其の功德福稱量すべからず。何を以ての故に。一恒沙の衆生、四等心—慈悲喜護—を行じ、第一禪第二第三第四禪を行じ、喜安を念持して自ら守り、四空定を行じ、皆法瓔珞に由つて諸道の果報を具足するを得ればなり』と。佛復た淨觀菩薩に告げたまはく『云何が族姓子、若し一恒沙の衆生有り、盡く須陀洹果を得、諸の妄想を斷じ、皆悉く成就し、了了に通達せんに、其の功德福寧ろ多しと爲すや不や』と。淨觀菩薩佛に白して言さく『甚だ多し、甚だ多し、世尊』と。佛言はく『故に善男子善女人、法瓔珞の業を受持諷誦せんに如かず。其の功德福稱量す可からず。何を以ての故に。一恒沙の衆生、悉く須陀洹道を得、一一に成就し、皆法瓔珞に由つて諸道の果報を具足するを得ればなり』と。佛復た淨觀菩薩に告げたまはく『云何が族姓子。若し一恒沙の衆生有り、盡く斯陀含果を得、復た狐疑無く、悉く皆成就せんに、其の功德福寧ろ多しと爲すや不や』と。淨觀菩薩復た佛に白して言さく『甚だ多し、甚だ多し、世尊』と。

巻の第八

無識品第二十二

爾の時、菩薩有り、名けて淨觀と曰ふ。卽ち座より起ち、偏へに右臂を露はし、右膝を地に著け、長跪叉手して、前んで佛に白して言さく、『若し善男子善女人有り、此の經典を受持諷誦せば、我其れに代つて歡喜せん。何を以ての故に。皆過去の諸の如來、無所著、等正覺の修行せる所、當來の諸の如來亦た當に此の法を習して成就するを得べし。我が今日の如き、如來至眞等正覺、此の法を頒宣して、善權方便もて衆生を化導したまふ』と。爾の時、淨觀菩薩、復た佛に白して言さく、『若し菩薩摩訶薩有り、此の法を宣傳し、現世人に功德を布くに二十行有り。云何が二十と爲す。總持瓔珞、法界を壞せず。種姓瓔珞、居家成就す。善權瓔珞、諸法を減耗せず。化生瓔珞、胞胎を受けず。淨教瓔珞、法を欺誹する無し。法身瓔珞、解性清淨なり。受入瓔珞、空行成就す。衆生瓔珞、一切を化するが故に。滅度瓔珞、塵垢無きが故に。生盡瓔珞、本と心識無し。無量瓔珞、垢自ら淨きが故に。劫數瓔珞、遠近無きが故に。知生瓔珞、本無を歎ずるが故に。道德瓔珞、行自ら滅するが故に。大乘瓔珞、諸根具足するが故に。解脫瓔珞、衆生を見ざるが故に。法王瓔珞。說法無窮の故に。無厭瓔珞、受法して疲れざるが故に、文字瓔珞、强記して忘れざるが故に。法界瓔珞、行具足するが故に。法本瓔珞、本と泥洹無きが故に。法性瓔珞、生滅無きが故に。弘誓瓔珞、道性自性[一]〔廣博〕の故に。眞如瓔珞、善本具足するが故に。清淨瓔珞、離生して本無の故に。無礙瓔珞、通達往來の故に。法起瓔珞、三處に著せざるが故なり。若し比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷有り、法瓔珞を受持諷誦すれば、便ち當に二十の功德を具足し、法門を總持すべし』と。爾の時、淨觀復た佛に白して言さく、『若し善男子善女人有り、三千大千世界に遍滿する、一一の衆生、七寶の塔を起さんに、善男子善女人此の法を諷誦するに如かず。法瓔珞は其の功德福稱量す可からず。何を以ての故に、諸佛世尊、皆由つて成就するを得ればなり。若し善男子善女人有り、七寶の塔を遍ねく三千大千世界に起さんも、善男子善女人、法瓔珞の業を受持し諷誦せんに、

【一】元明二本廣說。

して言さく、『云何が有佛の境界は則ち有行なる、無佛の境界は則ち無行なる』と。佛、法造菩薩に告げて曰はく、『行に三事有り、一は恒に空澤に在り、二は虚空界に在り、三は人衆中の大寂泥洹に在り』と。爾の時、法造菩薩復た佛に白して言さく、『云何が有痛と爲し、云何が無痛と爲す』と。佛言はく、『初めて檀を行ぜんと欲するは、是を謂つて痛と爲し、施して悔無きは、是を無痛と謂ふ。戒を習して犯さゞるは、是を謂つて痛と爲し、戒心牢固なるは、是を無痛と謂ふ。心を執ること地の如く、忍辱を捨てざるは、是を謂つて痛と爲し、忍能く衆に和して彼此を離れざるは、是を無痛と謂ふ。法を奉ずること慇懃にして初めより變悔なきは、是を謂つて痛と爲し、法に進んで舊の如く、道の本を捨てざるは、是を無痛と謂ふ。久しく定心を得ると雖も無相に在るは、是を有痛と謂ひ、道本を壞らず、意を一にして亂れざるは、是を無痛と謂ふ。衆生を化導し、攝するに一道を以てするは、是を謂つて痛と爲し、吾我を見ず、相著の心を去るは、是を無痛と謂ふ』と。

可き有りや、記す可からざるや』と。佛言はく、『族姓子、泥洹法界は記す可からざるなり』と。法造佛に白して（言さく）、『泥洹無記ならば、云何が過去恒沙の數ふ可からざるを說いて、名けて無餘泥洹と曰ふ』と。佛言はく、『止みね止みね族姓子、汝の言ふ所の如くば、此の法は權詐にして名號性無し。所謂泥洹は有に非ず、無に非ず、有形に非ず、無形に非ず。但だ衆生の空に著し、空に染し、法界に著し、法界に染して、有形の無形に至るを知らず、無形の有形に至るを知らざるが爲の故に、如來をして此の義を說かしむるのみ』と。法造菩薩、佛に白して言さく、『世尊、若し空をして空の如く、亦た是れ有形、亦た是れ無形ならしめば、如來今日、體有形とや爲ん、體無形とや爲ん、假に體無形ならしめば、今日如來未だ無餘泥洹界に入らずして、云何が無餘泥洹界の無形たるを知りたまふか。若し如來をして無餘泥洹界の無形たるを知らしめば、過去の諸佛も亦た當に是の如かるべし。何を以ての故に。世尊、言はく、法性は常住にして變易せず。過去の諸佛恒沙數の如く、不起不滅の故に、號して本無如來と爲す』と。佛、法造菩薩に告げたまはく、『善い哉（善い哉）族姓子、汝の言ふ所の如し。過去の諸佛は、現在當來に各〻想有ること無し。過去は當來に非ず、當來は過去に非ず、過去は現在に非ず、現在は過去に非ず。我が說く所、其の義是の如し』と。法造菩薩、復た佛に白して言さく、『過去の想無想、現在の想無想、當來の想無想は異有りと爲すや、異らざるや』と。佛、法造菩薩に告げたまはく、『過去は今に非ず、今は現在に非ず、各[三二]有るも異無し』と。法造菩薩、佛に白して言さく、『云何が有行となし、云何が無行となすや』と。佛、法造に告げたまはく、『淸淨法身を離るゝは是を無行と謂ふ。戒身・定身・慧身・解脫・身度知見身は、是を有行と謂ひ、離るゝは則ち無行なり。三十七品、須陀洹より乃し佛に至るは是を有行と謂ひ、離るゝは則ち無行なり』と。法造（佛に白して言さく）、如來至眞等正覺、今、有行無行を說きたまふ。云何が有行となし、云何が無形となすや』と。佛言はく『族姓子、地大・水大・火大・風大・色・痛・想・行・識は是を有行と謂ひ、空性、法性、無形像性は是を無行と謂ふ』と。佛、族姓子に告げたまはく、『如來至眞等正覺は亦たは有行に在り、亦たは無行に在り。云何が有行に在り、云何が無行に在る。有佛の境界は是則ち有行なり、無佛の境界は是れ則ち無行なり。故に有行、無行と謂ふ』と。法造菩薩復た佛に白

【三二】有の字。三本宮本によつて加ふ。

ち疑ひ無し。若し無形たらしめ、求は則ち有想、得は則ち無想ならば、無形の法は護持す可からず。云何が、護持す可からざるの法に、求有り得有らむや』と。佛言はく、『止みね止みね、族姓子。吾今汝に問はん。此の虚空界は有形なりや無形なりや。』法造菩薩、佛に白して言く、『世尊、此の虚空界は、空なること空の如し、有形に非ず無形に非ず』と。佛言はく、『族姓子、云何が空なること空の如く、有形に非ず無形に非ざるや』と。法造菩薩、佛に白して言さく、『世尊、內外法の有形無形は、空なること空なる、無餘泥洹道の如し。是を非有形非無形と謂ふ』と。佛復た法造菩薩に問ひたまふ、『云何が無餘泥洹は、有形に非ず無形に非ざる』と。法造、佛に白して言さく、『虚空界は眼識の所攝なり。此を以て之を觀るに有形に非ず無形に非ず』と。佛復た法造に問ひたまはく、[二九]『眼識〔旣に眼〕は空なりや非空なりや』と。對へて曰く、『非なり世尊』と。佛復た問ひたまはく、『若し眼識空に非ずば、云何が識を以て空を知る』と。法造菩薩曰さく、『識、空に非ざるを以ての故に知る、空にして空の如きは有形に非ず無形に非ず』と。佛復た問ひたまふ、『云何が族姓子、汝の言ふ所の如く、識を以て無識を知らば、頗し、無識有つて有識を知るや』と。法造、佛に白して言さく、『本無の如來は是れ』と。佛復た問ひたまはく、『云何が、本無の如來と爲とす』と。[三〇]答ふ、『住せず變易せず法界を壞せざるが故に、號して本無の如來と爲す』と。佛復た問ひたまはく、『族姓子、壞せず住せずとは、族姓子、果を以てなりや』と。對へて曰く、『非なり世尊』と。佛言はく、『云何が住せざるを本無の如來と爲すを知る』と。法造、佛に白して言さく、『過去は無形なり、現在は住せず、當來は未だ至らず』と。佛言はく、『汝今已に此の法性を得たりや』と。對へて曰く、『非なり世尊』と。佛言はく、『未だ三世の住不住法を知らずして、云何が有形無形を知るや』と。法造（復た）佛に白して言さく、『世尊、今問はん、如來至眞等正覺は有餘泥洹に在りと爲すや無餘泥洹に在りと爲すや』と。佛言はく、『我今亦は有餘泥洹に在り、亦は無餘泥洹に在り』と。法造菩薩、佛に白して言さく、『世尊、云何が亦は有餘泥洹に在り、亦は無餘泥洹に在る』と。佛言はく、『我が三十二相の此の色身を成ずるが如きは則ち有餘泥洹なり。過去の諸佛の恒沙數の如きを觀ずるに、無形にして見る可からざるは則ち是れ無餘泥洹なり』と。法造復た問ふ、『云何が世尊、泥洹法界は記す

【二九】麗本旣眼に作り、元明二本には眼識に作る。
【三〇】元明二本によつて、答の一字を加ふ。

と。佛言はく、『云何が、族姓子、戒身・定身・慧身・解脫身・度知見身は有想と爲すや、無想と爲すや』と。法造菩薩佛に白して言さく、『世尊、戒身・定身・慧身・解脫身・度知見身は皆是れ有想にして無想に非ざる[二八]耶』と。佛復た問ひたまはく、『云何が族姓子、四意止・四意斷・四神足・五根・五力・七覺意・八賢聖道・空無相願・須陀洹より乃し佛に至るは、有想と爲すや、無想と爲すや』と。法造菩薩佛に白して言さく、『世尊、一切諸法より佛に至る、皆是れ有想にして、是れ無想に非ず』と。佛復た問ひたまふ、『云何が族姓子、一切諸法より乃し等正覺に至る、皆是れ有想にして、是れ無想に非ざれば、何者か是れ無想なり耶』と。法造菩薩佛に白して言さく『本無慧、無餘泥洹慧、是を無想と謂ふ』と。佛復た法造菩薩に問うて曰はく、『云何が族姓子、汝今已に本無慧、無餘泥洹慧を得たりや』と。對へて曰さく、『非なり、世尊』と。佛言はく、『族姓子、云何が本無慧、無餘泥洹慧は、是れ無想にして有想に非ずと知るや』と。爾の時、法造菩薩、即ち偈を以て報へて曰く。

昔、天中天、　如來等正覺より　本無慧、　無餘泥洹道を說きたまふを聞けり。」　無生は有生に非ず、　寂然として想著無く、　澹然として變易せず、　安靜にして起滅無し。」　今故に如來に報ふ、　本無は想有る無く、　無著にして汚す可からず、　何に況や衆念有らむや。」　佛復た偈を以て、　法造菩薩に報へて曰く、　如來等正覺は、　三達して所礙無きも、　諸の法想を分別して、　猶ほ未だ根原を盡さず。　泥洹は寂然として定まり、　法性は壞す可からず、　想は轉不轉に在り、　何をか無想とするか。」　過去恒沙の佛の、　法說義も亦た然り、　設し本無にして無想ならば、　云何が衆生を化するぞ。

爾の時法造菩薩、佛に白して言さく、『世尊。云何が是れ有想、云何が是れ無想なる』と。佛言はく、『族姓子、佛を求むるは是れ想なり、佛を得るは是れ無想なり。清淨法身を求むるは是れ想なり、清淨法身を得るは是れ無想なり。五分法身を求むるは是れ想なり、五分法身を得るは是れ無想なり。四意止の初より乃至空無相願まで、須陀洹より、乃し佛に至るまで、求むるは是れ想なり、得るは無想なり』と。爾の時、法造菩薩佛に白して言さく、『世尊、清淨法身、一切諸法より乃し等正覺に至る、有形と爲すや、無形と爲すや。若し有形たらしめば、我則

【二八】耶の字無きを可とせん。

受を識らず。亦復た此の若干の意―我勝れ彼如らず―を生ずるなく、復た此の心―彼勝れ我如かず―無し。或は復た心―彼と我と等しく、我と彼と等し―を生ずる、是を八事といふ。復た次に照明菩薩摩訶薩、若し善男子善女人、無量の諸法不可思議にして、諸の五趣に入り、心中の所念を彈指の頃に悉く皆之を知り、愚癡心有るも愚癡心無きも、愛欲心有るも愛欲心無きも、瞋恚心有るも瞋恚心無きも、一一に分別して悉く皆之を知る、是を九事と謂ふ。復た次に、照明菩薩摩訶薩、若し善男子善女人、諸の十方諸佛の世界に遊び、人民に勸進して佛事を施爲し、便ち五趣受形の惱を説き、復た天に生ずと雖も是れ常道に非ず、人身は百變して生死無量なり、抵突の畜生には終に解脱無し、貪餮の餓鬼は、受形醜陋なり、地獄は報を受け罪畢つて乃ち出づ、唯だ泥洹のみ有つて快樂無比なりと、徑路を指示して無爲に進趣せしむる、是を照明菩薩摩訶薩、十事の行と謂ふ。是れ二乘の能く及び知する所に非ず。』と。

無想品第二十一

爾の時座上に法造菩薩有り、如來至眞等正覺の十光明慧を説きたまふを聞き、欣然踊躍して、卽ち座より起ち、偏へに右臂を露はし、右膝を地に著け、前んで佛に白して言さく、『敢へて問ふ所有り。尊聽さるれば乃ち當に陳啓すべし。』と。佛、法造菩薩に告げて曰はく、『族姓子、今大衆雲集して悉く畏るる所無し。疑難する所有らば便ち之を問ふ可し。』と。時に法造菩薩、佛に白して言さく、『世尊、云何が有想、云何が無想なる。云何が有行、云何が無行なる。云何が有痛、云何が無痛なる。』と。佛、法造菩薩に告げたまはく、『善い哉善い哉、族姓子。汝の問ふ所は皆佛の威神を持す。諦かに聽け、諦かに聽け。善く之を思念せよ。吾當に汝が與に一一に分別すべし。』と。法造菩薩言さく、『願樂はくば聞かむと欲す。』と。佛言はく、『族姓子、我今汝に問はん。汝當に一一に我に報ふべし。云何が族姓子、最正覺は有想と爲す耶、無想と爲す耶。』と。法造菩薩言さく、『最正覺は是れ有想なり耶[二七]、無想に非ざる耶』と。佛言はく、『云何が族姓子、清淨法身は有想と爲すや、無想と爲すや』と。法造菩薩、佛に白して言さく、『世尊、清淨法身は是れ有想にして、無想に非ず』

【二七】耶の字。恐らくは誤にして、無きを可とせん。

具足して、下劣を樂はず。十には、無上道を修して、法意を捨てざるなり。是を族姓子、如來至眞等正覺、此の十法を修して、乃ち如來十光明慧に應ずと謂ふ。猶ほ、族姓子、摩尼珠光の神德無量なるが如し。其の光明は一天下を照し、二天下を照し、三天下を照し、四天下を照す。此の光明は千世界二千世界三千世界を照す。小千世界中千世界を照し、復た三千大千世界を照す。復た摩尼神珠を得る有り、一佛世界二佛世界三佛世界、乃至無數三千大千世界を照す。其の光明の德稱量す可からず。無情の光其の德是の如し、況んや如來至眞等正覺、大光明を放ちて普ねく無量の諸佛國土を照し、其の中の衆生有形の類光明を見る者、除三垢淨にして、皆無上正眞道意を發すをや。復た次に照明菩薩摩訶薩、若し善男子善女人有り、篤信に承受して如來慧を信じ、大光明を獲るに十事行あり。云何が十と爲す。未曾有の法を如來悉く知る、是を一事と謂ふ。未だ曾て轉ずる所あらずして、善權方便もて、能く佛法衆の覺知する所を現ずる、是を二事と謂ふ。諸の外法に於て未だ自在を得ざれば、各各狐疑して是非心を起し、見ずして見ると言ひ、縛せずして縛と言ひ、解せずして解すと言ひ、持せずして持すと言ひ、成せずして成ずと言ふ。諸法中に於て悉く自在を得れば、如實如爾にして、實に虛妄無く、諸佛世尊をして、一切法に於て悉く自在を得、諸の法界に於て罣礙する所無からしむる、是を三事と謂ふ。復た次に族姓子、譬へば人有り、一念の頃に、諸の心垢を淨め、豁然大寤するが如く、復た劫數の期を經歷せず、一佛國より一佛國に至り、衆生を敎化して礙有る無く、盡く三有を超えて以て難しとせざる、是を四事と謂ふ。復た次に照明菩薩摩訶薩、或は劫燒に遭ひて其の間曠絶し、前佛過ぎ去りて、後佛未だ出でざるも、法性は恒に住して變易せず。弘誓の如來至眞等正覺有り、便ち能く澄神し、寂定虛空なるも、無餘泥洹に於て滅度を取らず。然る所以の者は、其の本要弘誓重きに由るが故なり。是を五事と謂ふ。復た次に照明菩薩摩訶薩。如來至眞等正覺、人心を觀察して、化を受くべき者、化を受けざる者を、如來悉く知ること、如實にして虛ならず、如來悉く此の欲界より有想無想天に至るの心識所念の、若しくは善、若しくは醜、若しくは苦、若しくは樂を知り、便ち能く中に於て敎化して度せしむ、是を六事と謂ふ。復た次に照明菩薩摩訶薩、如來の化身は測度す可からず、無量の諸の佛刹土に遊び、禪の解脫九次第法を行ずる、是を七事と謂ふ。復た次に照明菩薩摩訶薩。若し善男子善女人有り、五德行を修し、忍辱の心を懷き、彼の

佛。衆祐・世尊と號し奉る。今日身の諸支節より光明を放ち、遍ねく十方無量の世界を照し、盡く衆生の類をして自ら宿命の本と從來する所を識らしめ、一光明の德、度する所無量なり。凡夫學地より上み無學に至り、皆此の光を蒙りて濟度を得。如來何んぞ恒に此の光を放ちて無量の衆生の類を濟度せざる。云何が照明菩薩、汝の問ふ所は爾りと爲すや不や。』と。答へて曰く、『是の如し是の如し、世尊、甚奇甚特なり。向に問はんと欲せし所の其の義是の如し。』と。『云何が族姓子、如來當に此義を以て報へ見るべし。光明の示現せる衆定法門は、言教を以てすべからず。敎化する所有り、汝復當に我に報ふべし』『云何が世尊、今此の日月四天の下を照し、光を蒙らざるなし。時に日月の光、時有つて益有り、時有つて損有りや不や。』と。我時に答へて曰く、『無きなり族姓子。』と。佛言はく、『汝の問ふ所の者は爾りと爲すや不や。』と。答へて曰く、『是の如し世尊。』と。『時に汝復た當に是の問を作すべし、日月の光明は普ねく照す所有り、常に虧損する無し。「如來今日大光明を放つ。時有りて損有り、時有りて損無きや。」と 我復た當に此の義を以て汝に報ふべし。「云何が族姓子、日月の照す所は、晝を以て夜と爲し、夜を以て晝と爲すや不や。」と。汝當に我に報ふべし。「不なり世尊、日月の光明は晝を以て夜と爲し、夜を以て晝と爲す能はず」と。我言く、「族姓子、是の如し是の如し、如來の光明は能く晝を以て夜と爲し、夜を以て晝と爲す。是を各各差別と謂ふ。」と。族姓子、汝復た當に此の義を以て我に問ふべし、「云何が世尊、若し塵霧五翳日月の光を蔽へば照す所有る無し。今如來の光明も亦た塵翳ありや。」と。我言く、「不なり族姓子、何を以ての故に、如來の光明は內外通徹し、塵霧の過絕する所有るに非ず、三界を超過して無上尊たり。」と。云何が照明・汝復た當に是の問を作すべし、「如來の光明は障礙する所無し。衆生の三毒是が塵翳と爲すや不や。若し是れ翳たらば、日月の五翳と復た何の異あらむ。」と。時に我答へて言く、「善哉善哉、族姓子。快說なり斯の言や。吾今汝が與に一一に分別せん。如來の光明は不可思議なり、三界を超過して等有ること無しと爲す。法光明は十藏行あり。云何が十と爲す、一には勇猛道場にして諸法を毀たず。二には、諸法無盡にして四無畏を得。三には、辯才通利にして世の八法を離る。四には、六通徹達して罣礙する所なし。五には、妙法を演暢して、怯弱を懷かず。六には、放逸を行ぜずして、永く五蓋を離る。七には、慈悲喜護もて、普ねく一切愍れむ。八には、諸佛國に遊びて、一切を化導す。九には、根門

て幻の如く、能く世界諸法の出づる所を知り、一佛刹より一佛刹に至り、乃至無數億百千世に、一一に衆生の根原を分別し、復た能く威儀禮節を思惟し、坐して坐を知る可く、臥して臥を知る可し。復た彼の劫無數億百千世[二六]〔界〕に於て、根義、苦義、空義、無形像の義を分別し、爲に空觀、無名字觀、內觀、外觀、非衆生觀、淨不淨觀を說き、平等無二に大乘行を習し、無爲不退轉行に進趣せん。』と。爾の時、世尊、諸の來會者の與に、狐疑を解釋せんと欲し、卽ち座上に於て、便ち身の諸の支節毛孔より光明を放つて、悉く十方無量の世界を照したまひ、其の中の衆生蜎飛蠕動有形の類、盡く此の光を見て、自ら宿命根本の法を識れり。復た光明に於て、此の言敎の苦義、空義、無形像の義を聞き、卽ち彼の劫に於て百劫の事を見て千劫の事を知り、億劫の事を知り、億百千劫の事を知り、無限劫の事を知り、阿僧祇劫の事を知り、無量劫の事を知り、無邊劫の事を知り、無數劫の事を知り、無際劫の事を知り、無稱劫の事を知り、不思議劫の事を知り、不可平量劫の事を知り、無窮盡劫の事を知り、復た無限無量不可稱計諸佛刹土衆生起盡劫の事を知る。復た菩薩摩訶薩所行の法則威儀禮節を見て、專意修習して本行に違はず。爾の時、菩薩、此の光明を見て心意開解し、復た自ら己身の諸の毛孔に入りて定意し、復た十方無量の衆生、億百千劫に修行の本とする所を見たり。爾の時、菩薩摩訶薩、復た彼の三昧より起つて、諸佛の光〔明〕の、前の如く異らざるを見たり。爾の時、菩薩有り、名けて照明と曰ふ。卽ち座より起ち、偏へに右臂を露し、長跪叉手して、佛に白して言さく。『世尊、向に如來至眞等正覺の身の諸の支節毛孔の光明を見しに、盡く十方無量の世界を照し、皆衆生をして自ら宿命無量の世事を識らしめたりき。亦た諸の菩薩摩訶薩をして神力自在ならしめ、復た能く身の諸の支節毛孔に入りて定意するを得しめ、亦た十方衆生をして宿命を知らしめたりき。甚奇甚特なり不可思議なり。唯だ願はくは世尊、敢て問ふ所有り、若し聽さるれば乃ち陳說するを得ん。』と。爾の時、世尊、已に彼の意を知り、便ち照明菩薩に告げて曰はく。『汝の問ふ所は皆是れ如來の境界なり。諦かに聽け諦かに聽け、善く之を思念せよ。汝の問ふ所吾知るや不や。』と。答へて曰はく、『是の如し世尊、如來諸法の藏、願はくは具に演說して永く狐疑無からしめたまへ。』と。佛言はく『、族姓子、汝向に問ふ所、如來・至眞等正覺・明行成爲・善逝 世間解・無上士・道法御・天人師・

【二六】三本宮本は世界。

深法藏を具せんと欲して、先づ空無相を修し、神足德を敎誡〔戒〕するは、嚴淨度無極なり。」如來の一切智は、人の本末空なるを知りて、爲に四諦法を說くは、果實度無極なり。」大聖は人中の尊にして、廣訓に涯有ること無し、智業五法を成ずるは、篋藏度無極なり。」五業五行を成じ、五願五道を斷じ、五性五分身なるは、五業度無極なり。」若し能く德業を修し、本を求めて本と業なくして、衆の道果を然熾するは、廣曜度無極なり。」十慧十樂道、十法悉く具足し、十住十所從なるは、十妙度無極なり。」三千二百福、一一の衆相具はり、容顏の好きこと比無きは、自淨度無極なり。」慈哀して一切に勸め、務めて道果を成ぜしめ、劫を累ねて無量の德あるは、畢竟度無極なり。」衆の德本を興建し、吾我人を見ず、故に人中の尊と號するは、無窮度無極なり。」善權の適化する所、巧便盡く可からず、隨時に法を隱現するは、盡生度無極なり。」三界に福報して、諸の眷屬を別たず、佛の威儀の德を現ずるは、成就度無極なり。」吾今瓔珞を說き、諸佛の寶印もて、佛土淨を莊嚴するは、華鬘度無極なり。」此の法を受持する有らんに、福を獲ること十二德[三五]〔億〕、身に心識具はると計するは、成辦度無極なり。」耳目自ら聰明にして、自ら本と更る所を識り、辯智通達利あるは、宿命度無極なり。」恒に十方の佛を見て、此の總持を稟受し、法を聞きて輒ち解寤するは、法要度無極なり。」言ふ所人信用し、終に誹謗せられず、身體皆具するを得るは、戒香度無極なり。」

光明品第二十

爾の時、世尊、善男子善女人に告げたまはく、『若し菩薩摩訶薩有り、尊復尊大梵天王所問の句義不思議の法を受持諷誦せば、便ち當に身相不二の法門を得、眼入淸淨にして法界自在を得べし。菩薩摩訶薩、定意正受せば、卽ち己身の諸毛孔間に於て、一一の毛孔に法界自在を現じ、衆生を接度すること窮盡す可からず、法界淸淨の行を壞せず。若し菩薩摩訶薩、此の定意に入れば、便ち能く一切の諸法を具足し、亦能く現に諸法を化し

【三五】三本宮本は億。

なり、了するに眞際の法を以てするは、成願度無極なり。」三達五通智もて、往く所罣礙無く、淨刹に衆生を化するは、遊〔猶〕識度無極なり。」本と無くして今日有り、有も亦本生に非ず、緣行の苦樂を致すは、緣對度無極なり。」本覺は不思議にして、變を現じて量有ること無く、分身還つて合して一なるは、神智度無極なり。」亦た彼此に處らず、亦た法界に住せず、身を觀じて身無きが如きは、行業度無極なり。」生に著すること量有る無く、緣りて生老病を致す、內外悉く空寂なるは、無人度無極なり。」本と平等慧に由り、往來有るを見ず、三を解して三法無きは、等定度無極なり。」三行に三事有り、覺觀すれば覺有ること無し、進んで泥洹路に趣くは遍現度無極なり。」諸法種を覺觀し、三十七品を生じ、進んで泥洹路に趣くは、安穩度無極なり。」無學の覺觀法は、亦た生滅を見ず、坐臥の自在に由るは、不起度無極なり。」人を觀じて所觀なく、諸法主を見ず、現行に起滅無きは、無量度無極なり。」人生れて衆苦に遇ひ、無數身を經歷す、此の衆難を滅せんと欲するは、修學度無極なり、此の四大身を受け、欲滅して方あるなく、智達悉く觀察するは、斷欲度無極なり。」諸法純熟の性より、諸の功德業を淨め、此を積みて、佛を致すを得るは、三垢垢度無極なり。」衆生の願を充足し、各をして成就するを得しめ、悉く滅盡に歸するは、禁戒度無極なり。」佛の敎化する所の處は、要は空性を以て本とす、無を說いて無を見ざるは、歡喜度無極なり。」若し衆生類有り、五德行を修せんと欲し、無量の法を合聚するは、衆慧度無極なり。」五分法身を修し、戒定慧解度し、量盡きて量有る無きは、法本度無極なり。」最初に生有る無く、佛無く、亦た衆無し、因緣自ら造行するは、自起度無極なり。」當に無量の苦―生老の衆痛惱―を受くべし、形の胞胎を受くるなきは、勇進度無極なり。」諸佛恒に定に入り、淚を衆生に雨らすが故に、三等六度の法あるは、望斷度無極なり。」諸の善本を修習し、覺意して諸定に入れば、生ずと雖も能く生を離るゝは、識相度無極なり。」功勳億劫を過ぎ、諸の更樂に著せず、善を念じて道本を修するは、離塵度無極なり。」入定して歡喜を得、心を無量空に遊ばし、一一に衆相を別つは、成道度無極なり。」

神、大道に歸するは、向門度無極なり。」總持に十事有り、身口意を本と爲す、十を除きて十を成就するは、報應度無極なり。」能く衆生類の與に無上慧を示現し、德、衆聖の表に過ぐるは、斷苦度無極なり。」清淨空にして無形なり、正覺道を見ず、將に解脱に導入せんとするは、道趣度無極なり。」設ひ百劫中に於て、賢聖人を恭奉するも、一道の本に如かざるは、垂慾度無極なり。」昔吾れ初めて受決し、先づ無生慧を獲、猶、劫數期を經るは、空慧度無極なり。」正覺は發心に本づき、十號の本を成就し、既に獲ること求むる所の如きは、橋梁度無極なり。」聖德大に過ぎ、光澤邊有ること無く、玄化、衆生を度するは、恩純度無極なり。」俗中に在りて敎ふと雖も、嚴訓所誓の如く、廣く無量の寶を宣ぶるは、隨時度無極なり。」、若し人、世の無常諸變易を觀ず、壽命積ること無量なるは、住劫度無極なり。」我が經歷せる所の如きは、現在自ら〔目〕覩る所、五陰身を厭患するは、淨觀度無極なり。」泥洹を欲求すと雖も、身の想著を除去し、現在定を念修するは、無犯度無極なり。」十八本持法、念滅緣入法もて、妄想を起さゞるは、吉藥度無極なり。」受法に三義有り、自ら身口意を專にし、求を斷じて空を念ぜざるは、了達度無極なり。」一一に身を分別す、佛法衆も亦然なり、入定して諸想を觀ずるは、無邊度無極なり。」諸佛は無盡藏にして、無量定を演出す、遍ねく一切界を觀ずるは、究竟度無極なり。」諸佛の常威儀は、修戒を最も第一とす、安詳の法に出入するは、攝心度無極なり。」感應する所有らんと欲せば、要ず當に先づ入定すべし、本末空を了知するは、平等度無極なり。」佛本と修習する所、觀身して貪る所無し、自ら利し復た彼を利するは、行際度無極なり。」前後法を觀察し、有無の境を超越し、自在に諸想寂するは、衆敎度無極なり。」身法に三事有り、殺、盜、婬を犯さゞるなり、專精に法界を求むるは、本行度無極なり。」口に四過を犯さず、妄に說く所有らず、自ら護り、復た彼を護るは、等覺度無極なり。」意法に三事有り、衆の亂想を起さず、佛所住の處を得るは、堅固度無極なり。」本と等空より來り、敎化世界に滿ち、求を斷じて空に著せざるは、如實度無極なり。」行は三世に由つて起る、愛欲の縛に染著する

ず、故に人中の尊と號するは、攝意度無極なり。」未だ本無の慧を受けず、道意移轉する有るも、光を世間に現ずるは、發意度無極なり。」滅度に四品あり、皆な三毒の本に由る、名けて人中の尊と號するは、種類度無極なり。」道に亦、三相あり、眞如、法性、本なり、現在に三報を獲るは、成就度無極なり。」如來眞實法は、能く護持する有るに非ざるも、身空の本を分別するは、懐來度無極なり。」得涌測る可からず、心形倶然として住し、道もて心の塵垢を練るは、往來度無極なり。」本と心意有る無し、自ら生じて自然に滅す、我本と亦、自ら無きは、空寂度無極なり。」佛は三世に由らず、當來現在の道、轉易して常停せざるは、速疾度無極なり。」法相は常に自ら住し、神識は自ら流轉す、刹に非ず、刹有るに非ざるは、禁靜度無極なり。」身法に六行あり、想意の所造に非ず、[二四]苦ろに三十七を行ずるは、須宣度無極なり。」彼吾の所造に非ず、爲に非常空と說く、諸の佛法を出現するは、世界度無極なり。」神智廣長舌の所說は言教の如し、斯れ功德の成ずるに由るは、心通度無極なり。」惠施に恩義を知る、愼みて僥倖すること有るなく、唯だ道を自ら將に護らむとするは、現法度無極なり。」道もて深義の法、神通解脫禪を行じ、權を以て隨時に化するは、衆德度無極なり。」法身に欲心を思ふは、此れ最眞正に非ず、彼の泥洹性を獲るは、滅色度無極なり。」隨宜適化の前に、塵勞の屈を爲す勿れ、殊勝奇特の變は、降伏度無極なり。」初めより苦心を經る無れ、造化は逮ぶ可からず、戒身自然に具はるは、德意度無極なり。」信意三寶に向ひ、下下して自ら高くするなく、本に達して苦を究盡するは、除癡度無極なり。」諸の識慧を分別し、吾我の法に著せず、自然に聖に通達するは、自至度無極なり。」十二緣を宣暢し、一一に而も了別し、三藥もて三愛を除くは、攝口度無極なり。」現に諸の刹土を化し、虛無の慧を演布し、亦た身に猗著せざるは、察衆度無極なり。」人を度すること恒沙の如く、法を聞くこと量る可からず、虛空界を周遊するは、等無度無極なり。」八法無生度、善權一切を照し、諸法の相を見ざるは、常法度無極なり。」衆慧に所礙無く、修習して更樂を去り、

【二四】苦。明本は若。

覺、過去の法を玄鑒し、彼彼自然に化するは、深藏度無極なり。」未來に生本あり、受苦量有る無し、方便して未來を斷ずるは、本壽度無極なり。」現在無量の行、衆生量る可からず、形に隨つて往いて化生するは、淨刹度無極なり。」法門品を說くに當つて功福〔德〕盡あるなし、功福報を望まざるは、道樹度無極なり。」神足行に本有り、所說の法同じからず、現法に增損有るは、周旋度無極なり。」無量の智は礙無く、所說に虧損無く、道意甚だ深くして固きは、演暢度無極なり。」佛法に二相無し、唯だ身意の淨なるに在り、法處猗著無きは、不住度無極なり。」神通道を得と雖も、算術の法を習はず、行訖〔說〕[三]いて具足せざるは、非來度無極なり。」如實に一有るに非ず、亦た若干想無く、行盡きて一に致るを得るは、供養度無極なり。」諸佛世尊等、法に於て自在を得、化身して自在を得るは、法法度無極なり。」既に前の無數を知る、無量劫を計り難し、敎盡きて復た流化するは、舒遲度無極なり。」當來の阿僧祇の無量の衆生類よ、唐しく勤勞せずと知るは、普接度無極なり。」種種の類を觀察して、過去無量の佛が亦た眞如の法を說くは、無猗度無極なり。」實は亦た實に非ず、實は亦自然に生じ、實は亦た常住に非ざるは、身轉度無極なり。」文字もて道法に通じ、行迹に疑難無く、三世の苦を疑はざるは、身本度無極なり。」本無の法を計せず、智、無量より生じて、世の盡く惑たるを觀ずるは、敎授度無極なり。」初發意より來た、恒に衆生類を愍み、城國邑に處らざるは、離衆度無極なり。」身の支節、身の相は諸の穢濁なりと分別し、本と無形なりと解知するは、無著度無極なり。」法性は常住に非ず、亦た今後世に非ず、法を離れて果を獲ざるは、未來度無極なり。」亦や與に處を同じうせず、行迹各差別あるも、盡く滅度に歸するは、齊等度無極なり。」實空は離る可からず、況や當に實空無かる可きをや、善を念じて力めて學を勸むるは、達妙度無極なり。」一切の衆相具はるも、本と一形たる無し、法を空慧より得るは、自生度無極なり。」本との無怒佛を念じ、善覺尊に沒命して、是に由つて今、成佛せるは、立志度無極なり。」受形して謗らるゝと雖も、榮辱に屈せられ

【三】三本宮本は說。

受を爲すも、高下の意を懷かず、意、三界の表に超ゆるは、獨歩度無極なり。」行は本と因緣無し、緣盡きて則ち無行なるは、神德度無極なり。」三痛は苦樂に由り、報應は其の法に隨ふ、苦無く、樂痛なきは、痛止度無極なり。」七覺行を成就し、三處自然に滅し、陰入復た生ぜざるは、愛止度無極なり。」色を尋ぬるに本と空よりして、以て諸法の想を生ず、我れ本と彼を造るに非ざるは、見正度無極なり。」無行亦た無報なり、端坐して所念無く、思惟して自ら道を成ずるは、常作度無極なり。」意を執りて動ず可からず、澹然として虛空の如く、有に非ず、有ならざるに非ざるは、布行度無極なり。」正使後に滅度するも、定意錯亂せず、有常想を念ぜざるは、廣行度無極なり。」法を轉ずるも法想無し、況や受法の人有らむや、悉く空寂なりと解了するは、知時度無極なり。」聲、世界に彌滿し、皆妙なる法音を演ぶ、聲本と自ら無生なるは、無聲度無極なり。」身を愼み口を守護し、意、非邪を念ずる莫く、道[二]〔行〕と相違せざるは、無憎〔增〕度無極なり。」諸の法界を思惟して、法輪の行を壞せず、九次第を具足するは、法界度無極なり。」無畏は盡す可からず、內外遠近無く、四の諸受入を離るるは、無量度無極なり。」形色法を壞せず、亦た與に相應せず、自然相を敗らざるは相應度無極なり。」道行本と一無し、甚深にして量る可からず、根原の適化に隨ふは、隨智度無極なり。」如し法を解せんと欲する有れば、現法に境界あり、便ち能く根原を尋ぬるは、無盡度無極なり。」億百千劫より衆生類を敎化し、悉く成就せしめんと欲するは、方便度無極なり。」隨時に方便を現じ、三有に染著せず、諸陰蓋を拔斷するは、等慧度無極なり。」諸の法門を總持し、正行の本を失はず、自ら己を稱歎せざるは、滿足度無極なり。」生法は生有るに非ず、盡法は盡有るに非ず、生盡本無を知るは、[三]空〔音〕響度無極なり。」譬へば人の音聲の如く、等正覺の所說の、悉く空無に歸するは如實度無極なり。」諸根錯亂せず、衆相の具を護念し、清淨にして本無に歸するは、道慧度無極なり。」人の結は無量の縛にして、能く壞する所有るに非ず、自然に聖達に通ずるは、化生度無極なり。」如來最正

〔二〕三本行。
〔三〕空三本宮本は音。

無極なり。」　一切衆を度脫して、　劫の遠近を限らず、　眞道に男女なきは、　順一度無極なり。」　菩薩道を修せんと欲し、　先づ身口意を淨め、　十惡行に從ふなきは、　本淨度極無なり。」　一意に道教を念じ、　永く欲界の行を離れ、　中間に想を起さざるは、　滅欲度無極なり。」　諸法は名號無きに、　色に著して功報を求む、　色も亦、[一八]本色に非ざるは、　離色度無極なり。」　菩薩記別を受くるは　如來の印可する所なり、　行盡きて更に造らざるは、　補處度無極なり。」　有數本と無數なり、　無數も亦復た然り、　起も亦た起を見ざるは、　斷結度無極なり。」　滅生は有生に非ず、　無生も亦復た然り、　生の常生に非ずと知るは、　無生度無極なり。」　無有は本と有に非ず、　非有も亦復た然り、　有の有に非ずと解するは、　一向度無極なり。」　一も亦た本と一に非ず、　無一も亦復た然り、　一も亦た本と無住なるは、　無名度無極なり。」　假號は本無に出づ、　權詐は眞實に非ず、　無著にして滅盡に歸するは、　懷道度無極なり。」　人本と積行に從り、　世は幻化の如しと觀じ、　衆多の想を以てせざるは、　絕迹度無極なり。」　一切劫を經歷し、　拔擢して劫數を離れ、　諸の音響に著せざるは、　無聲度無極なり。」　人の眼もて色を視るが如し、　色本と眼候に非ず、　猶ほ識の內に[一九]分別するがごときは、　無識度無極なり。」　聲香味、[二〇]細滑、　意法も亦復た然り、　本と此の識有る無きは、　自然度無極なり。」　無色にして諸法を觀じ、　無痛にして更樂生存、　威儀衆行の具するは、　造行度無極なり。」　本と此の生有る無し、　貪識此生を樂み、　隨形して生分を受くるは、　斷貪度無極なり。」　神識は本と無形なり、　性本と自然に息し、　後に六入の苦を受くるは、　斷入度無極なり。」　五道の淵を離れんを念じ、　虛空觀を思惟し、　法の大幢を竪立するは、　顯曜度無極なり。」　想無く、　亦た生ぜず、　師に從つて稟受せず、　能く中より自寤するは、　越次度無極なり。」　諸法は虛空の如く、　思欲の數に非ず、　悉く衆の音響を解するは、　聞說度無極なり。」　其の聲淨く妙好にして、　所說滯礙無く、　六更樂を起さざるは、　妙法度無極なり。」　諸法に量有る無し、　如來盡く超過して、　道智三達は通ずるは、　正觀度無極なり。」　現に師の稟

[一八]　麗本本無、元明二本は本色。
[一九]　麗本內外別、三本宮本は內外別。
[二〇]　六欲の一、細滑欲、身體の輭細滑澤に貪著すること。

滅するは、百福度無極なり。」宿願盡す可からず、積行今乃ち獲、誠信日初の如きは、擇法度無極なり。」勤念して深要に入り、無量の法を捜求し、「謙恭にして下下の意なるは、牢固度無極なり。」菩薩に八法有り、修行して道場に至り、解慧もて空に著せざるは、無想度無極なり。」若し空慧に猗らむと欲し、空の眞實に非ざるを知り、「[一六]慧本と三礙あるを知るは、空相度無極なり。」法有り戰格と名く、奮迅無畏の定にして、亦た怯弱を懐かざるは、衆智度無極なり。」因緣各相生ず、生死は是れ道の本たり、二事相離れざるは、拔苦度無極なり。」一生[一七]〔相〕は本根〔相〕に非ず、亦、衆生根〔相〕無し、識神有に染〔深〕著するは假號度無極なり。」眞の道に形質無く、微妙不思議なり、道實に道有るに非ざるは、震動度無極なり。」諸の佛土の淨を觀ずるに、淸淨にして瑕穢無く、常に平等道を以てするは、神通度無極なり。」菩薩常に觀察して、形相の法に著せず、生じて五道に過ぐるを知るは、無名度無極なり。」或は一法を修する有り、衆行の表に超越し、最勝にして自然に達するは、越次度無極なり。」空觀の一切人は、息心して所念無く、應に一の所汚無かるべきは、齊限度無極なり。」大聖の德は無量にして、塵欲に染せられず、塵勞の原を究盡するは、無底度無極なり。」本と五道有る無く、塵垢に由りて生ず、幻化にして常想に非ざるは、聖慧度無極なり。」諸法は相受入す、菩薩の修行する所なり、衆苦の本を見ざるは、無我度無極なり。」亦、劫數に在らず、生死に形兆無し、當に來つて常に停らざるべきは、速疾度無極なり。」四非常―苦・空・無我・身―を分別し、慧を以て自ら莊嚴するは、修治度無極なり。」如し人、空を行ぜむと欲せば、修禪して乃ち果獲し、定意の錯亂せざるは、志審度無極なり。」口より無量の音を出すも法性を毀らざること、月の衆星の滿なるが如きは、果實度無極なり。」神足は量る可からず、慧海は恒沙の如し、善權もて自在を攝するは、受入度無極なり。」若し衆生を化せんと欲し、入定して心を觀察し、先づ權慧を以て導くは、漸現度無極なり。」佛の經は數ふ可からず、唯佛のみ能く之を記して、諸法相應の相たるは、勸樂度

【一六】慧本知三礙。
【一七】三本に生を相に、根を相に、染を深に作る、三本に從へば「一相は本相に非ず、亦衆生相なり、識神深く有に著す」となる。

若干念を興さず、故に[一一]今自ら尊を致すは、離世度無極なり。」日の初めて光を放てば人の自ら[一二]〔目〕見る所あらしむるが如く、吾今道教を演ぶるは、現明度無極なり。」無數阿僧祇に如來は不思議に、各各道教を布くは無生度無極なり。」正使億百千の七寶もて世境[一三]〔界〕を滿すも一意念に如かざるは一意度無極なり。」不起亦不滅、本とよつて來る所を知り、三世觀を解了するは、梵行度無極なり。」若し能く慧本を崇め、次第に越序せず、道を修めて二心無きは、玄寂度無極なり。」大慈不思議にして、廣く衆生類を濟ひ、師子一雷吼するは、普聞度無極なり。」諸有の衆生類、空無法を信樂し、理に順つて所犯無きは、造行度無極なり。」內に六重法を修し、靜を樂しみて閙に處らず、自ら宿命行を識るは、知本度無極なり。」今世に胎分を受け、欲滅して修行に勤め、一たび命根識を失ふは、受決度無極なり。」諸法嬈亂せず、淸白法を修行し、生を念じて生の本を離るるは、無本度無極なり。」人の五道の淵に遊ぶや、河の大海に奔るが如く、速駛して復た還らざるは、歸趣度無極なり。」常に世間苦を念じ、念離れて與俱にせず、獨逝して憂を懷かざるは、無雙度無極なり。」諸の穀子、稻麻諸花果を種うるに、本と子、苗を生ずるに非ざる如きは、變易度無極なり。」人生れて道を學ばされば、死に臨んで變悔あらむ。離を欲して懈怠することなきは、學進度無極なり。」若し根本を拔かんと欲すれば、復た其の識を種うる勿れ、此れ盡きて是に過ぐるなきは、香熏度無極なり。」諸の世間法は悉く空にして無所有なりと觀じ、當に是れ法に非ずと觀ずべし、不動度無極なり。」諸の福業を勸助し、一一に所礙無く、十住行に[一四]登るは、一生度無極なり。」悉く諸の法門を觀じ、總持して忘失無く、諸の法界相應するは、斷結度無極なり。」若し虛空に遊ばんと欲し、神足に所礙無く、人無く我想無きは、習行度無極なり。」一一に法を思惟し、輕く擧りて所礙無く、身を以て空を量度するは、神足度無極なり。」如實に人の本を觀じ、道行に所違無く、二見の心を[一五]興さざるは、正定度無極なり。」鏡に面像を觀るが如く、信已に瑕穢無く、塵勞自然に

〔一一〕麗本令。三本宮本今。
〔一二〕三本明本は目。
〔一三〕三本宮本は界。
〔一四〕麗本は登訴に作り、元明二本登於に作る。
〔一五〕麗本與。三本宮本興。

り。」　我れ擧足の時に當り、入城して行分衞し、　福祐に貧富無きは、　不擇度無極なり。」　分衞し訖りて周遍し、還つて靜房室に詣り、　道法自ら娛樂するは、　思惟度無極なり。」　日夜恒に經行し、　誰か應に先度すべきを觀じ、　本弘誓に違はざるは、　淸淨度無極なり。」　是を以て恒に自ら修し、　世事の與に諍はず、　自ら離れ復た彼に離るるは離趣度無極なり。」　四大各〻性有り、　高下亦た同じからず、　識神分別に由るは、　法義度無極なり。」　菩薩自ら空を觀じ、　微として省察せざること無く、　諸の惡業を防護するは、　慧見度無極なり。」　諸の刹土を諦觀し、苦樂の想を興さず、　諸法の甚深を解するは、善法度無極なり。」　進む可くして其の進むを知り、　亦た狐疑を懷かず、　出要に二道無きは、　虛寂度無極なり。」悉く諸行の本を觀じ、　報を受くる亦清淨にして、　功德業を求めざるは、忘施度無極なり。」　過去は復た生ぜず、　未來は見る可からず、　現在自然の法なるは、　願求度無極なり。」泥洹に體性無く、　亦た受入の處無し、　諸の受法の報を觀ずるは、　知[10]〔如〕本度無極なり。」　意を三昧定に靜め、永く亂意と別れたる　無常、苦、無我は、　體行度無極なり。」　如實に法を觀察し、　一として動ず可からずと知り法本の心を壞せざるは、　自然〔在〕度無極なり。」　悉く法無我を知り、　生生に生を見ず、　諸法輪行を轉ずるは、曠濟度無極なり。」　能く諸の法性を滅し、　亦た解脫を求めず、　誠信もて五道に遊ぶは、　盡生度無極なり。」如來は密行に至り、　心意識も亦た然り、　無生心を逮得するは、　了達度無極なり。」　吾が本との所行を計するに、住壽恒沙劫、　功勞自然に著はるるは、　行跡度無極なり。」　生死の本と從る所、　幻の如くにて眞實無し、　寂滅して汚す可からざるは、　匿藏度無極なり。」　賢聖の十二品、　悉く無爲に歸し、　無生にして永く生ぜざるは、　行勝度無極なり。」　念ずるに、昔、香林に在り、　端坐して道を思惟し、　形體の傾側せざるは、　初禪度無極なり。」又、本と師子の曠普講堂所に在り、　無想諸天衞れるは無きは、　二禪度無極なり。」　復た此の賢劫の、　護法大城中に於て、　自ら隱れて道教を求むるは、　三禪度無極なり。」　如今此の座に於て、廣く無量の法を演べ、　內外所礙無きは、　四禪度無極なり。」　行道沾汚無く、

【一〇】　三本宮本如。

だ斯等の類有らざるは、　廣及度無極なり。」　虛空に邊際有り、　須彌稱量す可きも、　豈に大導師の無限度無極あらむや。」　無央數劫より、　諸德本を積累し、　行〔德〕[六]盡きて更に造らざるは、　流轉度無極なり。」　世雄の慈蔭普ねく　潤、衆生類に及び、　法を聞いて疑滯せざるは、　信解度無極なり。」　勇猛、衆生に超え、下劣心有る無く、　魔官屬を降伏するは、　忍意度無極なり。」　吾昔誓願を發し、　自ら身命を惜まず、　故に自ら獨り持〔特〕[七]出するは金剛度無極なり。」　若し中間に疑有りて、　最正覺を成ぜざるも、　功德を累ぬる無量なるは、　人尊度無極なり。」　爾れば乃ち道は玄妙、　法藏は不可思にして、　三有の表に超過するは、　純熟度無極なり。」　一相見る可からず、　眞如の性も亦た爾り、　本を捨てて其の末に就くは、　無礙度無極なり」。　敎へずして自然に寤り、　師無くして一切智あり、　獨り善くして所憂無きは、　無尤度無極なり。」　六十二見、　愛欲の諸羅網を壞し、　生死の門を閉塞するは、快樂度無極なり。」　息心して自ら意を滅し、　沾汚の心を懷かず、　心を執ること大海の如くなるは、　無違度無極なり。」　身は怨讎の如く、　諸孔より不淨を流すを觀じ、　內外法を分別するは、　解本度無極なり。」　一心一念の頃も、　流馳して制す可からず、　樹王の下に至り坐するは、　弘誓度無極なり。」　法行蓮華の如く、　常に三道敎を以てし、　處すと雖も染著せざるは、　一意度無極なり。」　意を等しくすること大道の如く、　永く小節心を除き、　三十三法盡くるは、　無垢度無極なり。」　人、出要を求むるに當り、　內外法を分別し、　思惟して捨離せざるは、　精進度無極なり。」　身を觀ずるには當に法―五陰は聚散の行なり―を觀ずべし、　人の掌珠を觀るが如くなるは、　眞諦度無極なり。」　四魔の垢を破碎し、　憍慢の山を摧壞し、　慧火もて三毒を焚くは、　捨離度無極なり。」　卿等設し疑有らば、　各自本を宣說するに　當に智慧光を以てすべきは　照曜度無極なり。」　足下の衆相明らかに、　印文炳然として現はる、　諸有此の相を觀るは、　恩澤度無極なり。」　鹿腨〔膞〕[八]金剛の如く、　內外朗然として現じ、　峙立して傾側せざるは、　端嚴度無極なり。」　皮毛極めて軟細にして、紅葉のごとく　水に著かず、　一一の衆好具るは、　行足度無極な

〔六〕宮本德。
〔七〕元明二本。特。
〔八〕三本膞。宮本膞。
〔九〕麗本趾。元明二本峙。

せず、亦た壽命に著せず、空無願無相なるは、根門度無極なり。」「本と平等慧より、今自ら正覺を致し、金剛意を捨てざるは、三觀度無極なり。」道德に慇懃にして、日夜常に經行し、法說亦義說するは、進趣度無極なり。」知足は道の第一なり、捨意して貪する所無し、三十七道品は、無爲度無極なり。」菩薩の刹土は淨く、種姓雜錯せず、恒に眞正の家に生ずるは、豪族度無極なり。」神を降して母胎に處し、嬰兒の相を示現し、心を執ること淨にして垢無きは變化度無極なり。」旣に母胎を出づるを得、足を擧げて行くこと七步、足足七姟を度るは、示現度無極なり。」常に金机の上に在り、現に香水を以て浴し、無量の諸佛集まるは、勸進度無極なり。」三十二相具はり、八十好莊嚴し、天地六反動ぜるは、容顏度無極なり。」諸法に形相なし、現ずるに色相の法を以てし、獨步して侶有ることなきは、最尊度無極なり。」一一法界を思ひ、本との要誓を失はず、諸法悉く響の如きは、默然度無極なり。」賢聖八等の行に、止觀無想の行に、空無慧を捨てざるは、一入度無極なり。」常に妙道法を以て、諸法門を講授し、一切人を勸導するは、法響度無極なり。」十善は衆行の本、著無く染す可からず、一を修して一を成ずるを得るは、不退度無極なり。」世人慳貪を懷き、永く幽冥に處す、導引[四]〔該〕するに無量の法なるは、學習度無極なり。」如來は所著無く、法を受けて捨離せず、永く衆生の居を離るるは、獨拔度無極なり。」父王の宮に處すと雖も、寂靜にして道を思惟し、五欲の樂を貪らざるは、無穢度無極なり。」身は乾樹皮、亦は久朽せる灰の如しと觀じ、自ら察して識想無きは、出息度無極なり。」一數一を離れず、止觀本行願より、意を係〔繫〕けて目前に在るは、道智度無極なり。」人は生死に處する事久しく、本末[五]〔來〕空を計せず、能く捨てて與俱にせざるは、總持度無極なり。」所以に四辯を獲、法義捷疾智もて、無量の義を宣暢するは、應適度無極なり。」無數の大聖集、法を聞きて欲して厭なく無く、平等に大智に通ずるは、等慧度無極なり。」設し復た無量の、成敗の諸の劫數に於て、未だ如來藏を盡さざるは、遠離度無極なり。」一生百千生に、如來の德を究めんと欲し、未

【四】麗本該。三本宮本は引。
【五】三本宮本は來。

無礙度無極なり。」　智幻は三界を超ゆ、　行幻も亦復た然り、　八正道の清淨なるは、　道品度無極なり。」　世幻は眞實に非ず、　賢聖は染著せず、　愚者の常想を抱くは、　通慧度無極なり。」　六塵と外の六入は、　十二牽連の法たり、名色の更樂に由るは、　緣想度無極なり。」　行は愚惑より生じ、　無數の念を流馳す、　若し當に有形を念ずべきは、　具足度無極なり。」　虛空は邊際無く、　亦た行迹を見ず、　生死の岸を尋ぬるを得るは、　自然度無極なり。」　人壽長短有り、　今世亦た後世なり、　唯だ道のみ澹然として安きは、　澹然度無極なり。」　法界に各性有り、受入の處を見ず、　猗無く染す可からざるは、　無懐〔壞〕度無極なり。」　佛土央數無く、　法智不思議、　慧海量る可からざるは、　受入度無極なり。」　人智に增減なし、　賢聖の行平等にして、　空無慧を分別するは、　陰蓋度無極なり。」　本と無數世より、　苦行、量有る無く、　劫數の期を念ぜざるは、　閑靜度無極なり。」　兜術天に在りて、無形法を論講せるを念じ、　無量の人を導引するは、　無二度無極なり。」　樂に著して以て歡ばず、　苦に處して亦た憂へず、　見諦して道を成就するは、眞實度無極なり。」　神を閻浮內に降し、　法を鹿野に轉じ、　世の穢濁を盡捨するは、望斷度無極なり。」　菩薩行成就して、　六塵勞に著せず、　甚深の法を學[三]知するは、　牢固度無極なり。」　智術權方便もて、　深入して礙有ること無く、　無量身を分別するは、　在所度無極なり。」　無量劫を勇超し、　生死の本を窮盡し、　莊嚴佛土の淨なるは、　微妙度無極なり。」　人能く本源を信じ、　生死に滯らず、　心正しくして亂想無きは、　一想度無極なり。」　施を行じて他を見ず、　亦た去來の想無く、　物を虛空の如しと觀ずるは、　無厭度無極なり。」　世は世有るに非ずと觀じ、　亦た三塗の苦無く、　自ら濟ひ、復た彼を濟ふは、　大慈度無極なり。」　設し衆生の類の　染著して三有に在るを見ば、　觀導するに正敎を以てするは、　大悲度無極なり。」　無量界を周旋し、信を執ること安明の如く、　顏を和げて常に一心なるは、　歡喜度無極なり。」　菩薩初めて意を發すは　一人の爲の故ならず、　曠く濟ひて邊崖無きは、　放捨度無極なり。」　我が初めて生ずる時に當つて　佛土は黃金色にして、　道場を莊嚴するは、　神感度無極なり。」　自ら名想を滅

【三】麗本智。三本宮本は知。

巻の第七

随行品第十九之餘

行過して三界に超え、無形にして覩る可からず、普ねく三千世を照すは、法懸度無極なり。」一意一念の頃に衆の相好を具足し、塵勞に染せられざるは空界度無極なり。」若し能く法を宣暢し、普ねく諸の萠類を潤ほし、四諦如爾の相なるは、苦盡度無極なり。」佛土普ねく清淨にして三乘心有ること無く、自然に道教に通ずるは、定意度無極なり。」人は本と空より生じ、法界に增減無し、諸法の本に違はざるは方便度無極なり。」幻化眞實ならず、行いて三界の表を超え、無量國[一]〔劫〕を超過するは、通達度無極なり。」無想の衆生等は、識に猗つて慧を解せず、賢聖の往來を得るは、微識度無極なり。」自然如爾の性にして、法慧は所益多し、四大の本と自然なるは終始度無極なり。」吾我人を見ざれ、壽命は衆行の本なり、一相として相有る無きは無形度無極なり。」無數の諸の佛土にて、佛道場を莊嚴し、佛光明を演出するは、法寶度無極なり。」意を攝して亂有る無く、永く三毒の心を除き、平等にして若干無きは、誠信度無極なり。」識に猗れば五道に由り、縛著を解く能はず、苦の根源を拔濟するは遠離度無極なり。」復た胞胎に處すと雖も、慾に染せられず、永く婬怒癡を離るるは解脫度無極す。」佛法甚だ深妙にして神力三界に過ぎ、形を現じて五濁に在るは忍辱度無極なり。」若し復た苦樂に遭ふも、增減の心を生ぜず、意を執ること虛空の如きは無疆度無極なり。」道は、空より生ぜず、亦た人心を離れず、分身して虛空に滿つるは滅盡度無極なり。」吾我人を見ず、本無の相を壞せず、一行より正覺を成ずるは觀世度無極なり。」不生亦た不滅、生死の本有る無し、此より彼岸に至るは、超越度無極なり。」衆苦は本と無形、本[二]〔大〕智は境界に由る、心識毀るべからざるは、幻行度無極なり。」幻に二根本有り、行幻と深智幻となり、能く此の幻法を解するは

〔一〕國。三本劫。
〔二〕本。三本宮本大。

盡く道門に向ひ、衆智自在慧なるは、無恚度無極なり。」世の與に炬明と作り、衆生の爲に眼と作り、歸趣する所を知らしむるは、大道度無極なり。」十力の世に現ずる所、憂苦の人を拔斷す、智慧の諸有を壞するは、神慧度無極なり。」閑靜處に樂在して、本所行を修習し、能く衆生に變現するは、徑路度無極なり。」無量劫中に於て、苦を守つて苦を捨てず、十法寶を具足するは、無離度無極なり。」觀定は空等の如く、普ねく能く照す所有り、自ら觀じ復た彼を觀ずるは、等性度無極なり。」諸の佛刹土を觀じ、衆智もて自ら瓔珞し、遍ねく十方界に遊ぶは、寂然度無極なり。」復た無量の法有り、如來の宣暢する所、法本に非ざるを消滅するは、牢固度無極なり。」衆生受化に應じて聞法すれば便ち得寤し、斯等の宿識利なるは捷疾度無極なり。」一切諸法の本は有に非ず亦無ならず、道の無想より生ずるは八法度無極なり。」智慧の無量を照すは師子の畏無きが如し、無常法を觀見するは無生度無極なり。」法を說いて說有らず、人を度して度有る無く、善權百劫を過ぐるは無染度無極なり。」沒せず亦た盡きず、一切人を照曜し、如來慧を宣暢するは無欲度無極なり。」法を說いて法想無く、吾我人を見ず、大慈もて有無を度するは轉輪度無極なり。」衆鳥は池の青蓮芙蓉の間に樂しむ、禪寂して永く想を除くは、無事度無極なり。」說法に三事有り、其の本末空を除き、此の無量界を度するは、無猗度無極なり。」人の根源を念察し、彼の心識意を觀じ菩薩の誓を離れざるは、畢竟度無極なり。」時に隨つて方便を行じ、苦を以て心を經ず、永く增減の意を捨つるは如法度無極なり。」幻術眼識に著すれば出生有るを見ず、耳識の彼の聲を聞くは、解空度無極なり。」若し彼の大幻師、諸飲食を現化せんに、鼻識もて而も分別するは、香熏度無極なり。」化の所造の如きは其の義思ふ可からず、究盡するを得んと欲せば味識度無極なり。」本と我れ更樂を造りて身に諸法の本を想ひ、意を攝して自然に伏するは權現度無極なり。」清淨なる音響を以て十方界に周遍す、戒德の香も亦た爾なるは、無犯度無極なり。」幻術は眞實ならず、愚癡等を誑惑す、眞實法に導引するは、眞際度無極なり。」衆生根を推尋するに聖にやれば能く測る無し、大聖人を權化するは、立教度無極なり。」清淨なること蓮華の如く、終に塵垢を受けず、衆行の表に越次するは、撿意度無極なり。」

て定有ること無く、總持して忽忘せず、一切智慧足るは博聞度無極なり。」受慧に四品有り、他は覺するも自ら知らず、是に緣りて七空に逮ぶは、捷疾度無極なり。」佛道は究盡し難く、心の能く測る所に非ざれども、悉く道觀無きを知るは、七覺度無極なり。」三十七の如來の聖道徑を分別し、一意、想を起さゞるは名身度無極なり。」遠近の法に包識し、無礙道を念ぜず、十號一一異なるは、無數度無極なり。」深要の法を講授し、心に怯弱を懷かず、無相を願求せざるは、智力度無極なり。」正八等慧に入り、空性行を壞せず、內に自ら法を思惟するは、逮果度無極なり。」名色若干に變じ、〔一〇〕愛は塵勞の病に入る、本無に達する能はざるは善察度無極なり。」十法は空無變なり、意念縛著の想、外入を去らんと念ぜざるは、限齊度無極なり。」世の苦人の憂畏端數無きを愍念し、權方便を建立するは、現仕度無極なり。」心堅きこと金剛の如く、有爲の能く壞するに非ず、濡いに甘露の法を以てするは、深要度無極なり。」本と虛空慧に因り、解脫して所礙無く、智明塵垢を去るは、見聞度無極なり。」賢聖の律を奉ずるを知り、戒聞慧定心あり、道意志力强きは、無闕度無極なり。」身の本と無形なりと知り、生死の法を煎熬し、濟然として虛寂に歸するは、解縛度無極なり。」智者は俗變に隨ふも、終に更樂に著せず、結を除き、苦の本を斷ずるは、尊上度無極なり。」人中の世雄の師、無量世を行過して、至誠にして欺を懷かざるは、言應度無極なり。」心に不思議を念じ、深法藏を究盡し、如來界を分別するは、道覺度無極なり。」如來の十句義の、各各形相無く、寂然として音聲無きは、授決度無極なり。」身は空無形なりと觀じ、淸淨にして所染無く、本無の法を增上するは、行盡度無極なり。」如來記莂を授け、如如不變易にして、生滅の本を見ざるは、本淨度無極なり。」正覺の敎授する所、一切衆を捨てず、盡く覆護を得しむるは無比度無極なり。」人の爲に橋梁を作り、一切法を究盡し、漸漸に深藏に入るは、離苦度無極なり。」衆生類を敎化して、法境界を離れず、道場に進趣するは、自守度無極なり。」衆生の歸趣する所

【九】開。三本聞。

【一〇】愛。三本宮本は受。

度無極なり。」禪定して念待無く、息心して所著無く、八解池に遊戯するは至誠度無極なり。」人、五苦法を知り、仰いで無爲道を修す、六通の無漏法は、賢聖度無極なり。」神通もて世間に遊び、常に聖賢の律を習ひ、內外法を觀ぜざるは、無名度無極なり。」行を習して憍慢無く、顚倒心を懷かず、諸の結縛を起さゞるは、無穢度無極なり。」若し復た死尸觀に淨と不淨とを念ぜず、內外に所著なきは、無慢度無極なり。」威儀法律の如く、擧動虛妄ならず、衆智もて自ら衞護するは無對度無極なり。」無身を道要と爲す、塵の所染と爲らず、坐臥必常に定まるは自守度無極なり。」聖人は俗を愍念して、爲に甘露の法を雨らし、無量慧を演暢するは、受化度無極なり。」博く多くの恩惠を施し、覺觀して心本を除き、苦惱患を蠲除するは、格戰度無極なり。」心に無量の法を念じ、無量の變を示現して、通慧の本を尋憶するは、奮迅度無極なり。」內法に所念無きも恒に外塵に染せらる、彼の無生智を以てするは、從願度無極なり。」衆定もて自ら瓔珞し、眼識、想を起さず、彼も亦自ら有らざるは無移度無極なり。」衆の智慧を修習し、解脫して知見を度し、不死の漿を飮まんと欲するは甘露度無極なり。」淨觀して貪著無く、慧度空無異にして、四道果を分別するは、流轉度無極なり。」猶ほ士夫有り、堪忍して塵勢を受くるが如く、心慧に塵染無きは、隨願度無極なり。」相相各、報有り、行有り法有るに非ず、四禪行を超越するは、生盡度無極なり。前世は本行に由り、人を恚怒すること無く、自然に八難を離るゝは、超越度無極なり。」常人の念ずる所、合會には別離有り、聖の弘誓心に等は分別度無極なり。」極照本有なる以て、外有る無きを徹觀し、形累自然に滅するは無見度無極なり。」虛空界に往詣し、速疾にして所礙無く、中間法を念ぜざるは應律度無極なり。」本と一法たり、志趣に各別あり、世に隨つて其の色に染するを了するは解縛度無極なり。」三毒の本を分別すれば、行盡きて乃ち應に行ずべし本と我有るに非ずと知るは身本度無極なり。」心遊びて自在を得、慾を觀ずること熾然するが如く、五道趣を消滅するは、淸涼度無極なり。」三有に在りて五欲法に貪著することを願ふ無く、永く八無[一九]閑〔間〕を離るるは言說度無極なり。」起滅し

色本と色有るに非ざるは　清淨度無極なり。」　無生は衆慧の本、　常想は眞有るに非ず、　教化有るを見ざるは、智力度無極なり。」　過去無數劫に　佛有り我が號の如し、　平等の法本を修せるは、　無形度無極なり。」　大辯の如來出で〻　愛欲の塵を消滅し、　衆生の類を教訓するは　信根度無極なり。」　佛有り無礙と名く、　苦行すること無量劫、意を攝して放逸ならざるは　守戒度無極なり。」　次を弘誓佛と名く　教化に高下無く、　意等しきこと虚空の如し忍辱度無極なり。」　佛有り大願と名く、　生死の根を究盡し、　無數の身を變化するは慇懃度無極なり。」　道本と自ら清淨にして　虚空慧を見ず、　無形にして見る可からざるは　慈悲度無極なり。」　更樂の八十六は　菩薩の修行する所にして、　三毒の本有る無きは不起度無極なり。」　賢聖十六心　悉く所有無しと知り、　諸の法界を壞せざるは無身度無極なり。」　一心一念中にも　禪定觀を離れず、　復た一意より起るは　無想度無極なり。」　虚空に邊涯無く寂意に染汚無し、　一を捨て〻一に著せざるは　定意度無極なり。」　吾本と此の行に應じ、　寂然として想念なく、息意の處に現在するは無礙度無極なり。」　禪定もて自ら滅意し、　淨觀もて三想を滅し、　道慧自然に淨なるは除染度無極なり。」　佛境は不思議なり　衆生界も亦然り、　法性自然に寂するは　無形度無極なり。」　能く生死の難を度し、三界の苦を念ぜず、　忍意して想を起さゞるは　澹泊度無極なり。」　三世の定意に入りて、　盡く衆生の根を知り、　自ら內外身を觀ずるは無願度無極なり。」　八部鬼神界　彼に隨つて教化し、　爲に神足力を現ずるは滅跡度無極なり。」　善權もて衆生を教ふるも、　本末空を離れず、　四無畏を分別するは　無我度無極なり。」　內外身を思惟し、　空無慧を分別し、　吾我有るを觀ぜざるは　法意度無極なり。」　生れて賢聖に遇ふの樂みあり　八解所著無く、衆の想念を興さざるは如幻度無極なり。」　正法に男女無し、　意は思想に由つて生ず、　深法見る可からざるは惡露度無極なり。」　身を無量の形に分ち、　復た還つて合して一となり、　能く覺知する者なきは、　身密度無極なり。」如來は衆相具はり、　色身世間に遊び、　神足もて教化するは無猗度無極なり。」　凡夫未だ學に入らず、　內外身を觀ぜず、　聖慧の甚だ深妙なるは、　相好度無極なり。」　本と神足より起り、意法に高下無し、　菩薩の無形觀は安樂

るは淨意度無極なり。」　意を執ること金剛の如く、　清淨にして瑕穢なく、　永く有無の界を離るる道果度無極なり。」　古昔諸の世尊、　此の元吉樹に坐し、　四魔の怨を降伏せるは忍力度無極なり。」　神識虚空に在り、　初めより恚怒の心無く、　亦た塵垢を生ぜざるは超越度無極なり。」　神力、無量　一切諸世界に超え、　亦た可欲に著せざるは無垢度無極なり。」　夫れ空を究盡せんと欲すれば內淨く外も亦然り、　非常想を分別するは因緣度無極なり。」　光明諸界を照し　諸の闇昧を蠲除し、　若干想を起さざるは　斷垢度無極なり。」　慧觀に三法有り、　永く欲怒癡を除き、　色に染せられざるは智行度無極なり。」　說く億千劫より〔一七〕意志弘誓故もて、　衆生類を見ざるは淨教度無極なり。」　八等大道行、　內外に我想無く、　佛界法界淨なるは無量度無極なり。」　人本と其の行を修し、　十二緣を拔斷し、　貪を除き有に著せざるは一意度無極なり。」　人道の行を修せんと欲し、　先づ身口意を護り、　十善衆行の本なるは應法度無極なり。」　我れ本と礙を造らず〔一八〕根本にして所在たり十慧無量の智は、　本無度無極なり。」　法界は不思議なり無畏法を成就し、　生死の根本を盡すは、　重擔度無極なり。」　如來は慈慧等しく、　養育に高下無し、　染汚心を除去するは無望度無極なり。」　大乘の意を發趣し、　諸の有礙を接度し、　生死の本を見ざるは遠離度無極なり。」　弘誓して勤苦を執り、　諸の定意に遊戲し、　常に反復の心を懷くは忘報度無極なり。」　衆生平等慧もて、　諸の根本を盡知し、　塵欲心を懷かざるは權慧度無極なり。」　大道甚だ妙と爲す、塵欲に動かされず、　三空本意を捨つるは究竟度無極なり。」　此の賢劫中に於て　諸佛世に興出し、　拔苦して三礙なきは、　周旋度無極なり。」　身より平等の光を放ち、　無數の衆を接度し、　生を知りて生に染せざるは　善友度無極なり。」　無上道を成ぜんと欲して善知識に親近し、　能く苦の本際を盡すは無盡度無極なり。」　四道に往來する無く、　住壽無數劫にして、　道の根本を究盡するは無變度無極なり。」　生死を究盡せんと欲せば　退轉心を懷く勿れ、　勇健にして壞す可からざるは立志度無極なり。」　行施に所愛なく、　亦た三想を興さず本末悉く自ら空なるは、　辯慧度無極なり。」　道力虛空の如く、　五陰身を計せず、

〔一七〕三本宮本立志。
〔一八〕根本爲所在。癡を說明せるものならん。

り。」　三界に猗著して　塵勞を造立せず、　神通慧を修習するは快樂度無極なり。」　住無く往[一五]來〔還〕無く　亦た法性を壞せず、　永く塵勞の疇を滅するは無變度無極なり。」　色の如きは本と無色なり色性常に自然なり、　三世の苦を了知するは滅意度無極なり。」　外の塵垢を受けず、　定意に他想なく、　生盡きて更に造らざるは無受[一六]〔愛〕度度極なり。」　變を現ずる無央數、　終に自ら己の爲にせず、　道慧三礙無きは本際度無極なり。」　入定して三想を除き、　我人壽を見ず、　信を執つて馳騁無きは衆智度無極なり。」　空無相願法の、　三昧衆道觀もて、　寂然として一意を滅するは　懷來度無極なり。」　道は無量法を生じ、　是より彼に到るを得、　三世苦に玄達するは受樂度無極なり。」　生は大災たり、　諸の法界を穿漏すると知り、　一を捨てゝ染著せざるは衆妙度無極なり。」　慈悲四等心もて　普ねく一切を潤し、　化導して尊卑無きは大智度無極なり。」　四大因緣形は、　體性轉ず可からず、　解脫門に達せんと欲するは三向度無極なり。」　若し劫に盡燒せんと欲するも、　恐懼心を懷かず、　自然に道力に通ずるは無想度無極なり。」　亦た自ら念を生せずして、　若干想を分別し、　佛慧窮有る無きは大海度無極なり。」　功勳衆行に過ぎ、　本業量有る無く、　一無く一を見ざるは　離群度無極なり。」　弘誓の具足願もて、　身の無形相を觀じ、　四魔の患を破壞するは莊嚴度無極なり。」　無念は諸法の本なり泥洹は寂然として淨なり。　諸佛所遊の處深藏度無極なり。」　無相は見る可からず、　一より乃ち成佛まで、　心本の法を去離するは一義度無極なり。」　諸の道果究盡して、　三窠窟有らず、　慧照邊涯なきは立本度無極なり。」　生死の諸の艱難にも、　無爲にして澹然として安く、　五塵垢を生ぜざるは、　總持度無極なり。」　遍ねく無量世に遊び、　衆生類を敎化し、　生死の苦を經歷するは斷苦度無極なり。」　現に母の胞胎に處して、　實に有に染著せず、　心、淨きこと虛空の如きは本慧度無極なり。」　報を受くる有るを見ず、　諸の明慧を果證し、　四道本を分別するは修荷〔持〕度無極なり。」　本と無量世より　法界不思議なり、　平等無二の心は廣慧度無極なり。」　佛法甚だ深妙にして　二乘の及ぶ所に非ず、　無量の行を超越するは無疑度無極なり。」　先づ其の眼根を淨め、　心本の行を淨修し、　菩薩道を慕及す

〔一五〕來、三本宮本還に作る。
〔一六〕受。三本宮本愛。

亦た悕望して諸法を僥倖する有らず、　有に非ず所生無きは、　積行度無極なり。」　彼此の岸を念ぜず、　生死の海を超越し、　一切の根を究盡するは無盡度無極なり。」　十六不思識の　亦十六慧と名くる　苦より無法に至るは　無著度無極なり。」　生死は底有る無く　或は出で或は隱沒す、　盡く能く觀了知するは　性空度無極なり。」　身法の三十二、汚染不淨行を　一一に能く分別するは　無著度無極なり。」　眼識に內外有り、　外身の入るを受けず　無畏にして所動無きは慈心度無極なり。」　我が如き佛樹に坐して　金剛座を莊嚴し、　降魔して畏るゝ所無きは大慈度無極なり。」　衆生類を愍念し、　人を度して度を見ず　曠く濟ひて疆り有る無きは自離度無極なり。」　過去は復た生ぜず、　當來の塵に染せず　慧心內外無きは無疑度無極なり。」　內外の陰持入に、　諸の塵垢を生ぜず　一を守つて放逸せざるは神足度無極なり。」　眼、外色に著せず、　舌も亦復た味を知るも、　貪著想を除去するは　無形度無極なり。」　菩薩心を分別し、　淨觀して所著無く、　道、平等慧によるは　威儀度無極なり。」　自ら宿命智を識り、　本と從來する所を知り、　復た想念を興さざるは、　現生度無極なり。」　智者世に在つて化し、　苦を盡して餘有る無く、　生死の本を拔斷するは　苦行度無極なり。」　愍は慈母の育に過ぎ、　慧普ねくして高下無く、內に自ら身を見ざるは　無貪度無極なり。」　德、無量の境に遊び　覺知するもの有る無く、　亦自ら稱歎せざるは　法身度無極なり。」　復た諸佛より　空慧無量の法を受け、　自然に苦際を盡すは　不起度無極なり。」　道、平等慧により　三有の想に染せず、　是によつて神足を獲るは　無我度無極なり。」　凡夫は四に縛著し、　三界の患を離れず、　生を盡して更に造らざるは通慧度無極なり。」　無央數劫より　定意錯亂せず、　意も亦移易無きは、　本際度無極なり。」　神智邊涯無く、　永く有に貪著するを除き、　不起忍を逮得するは寂滅度無極なり。」　道慧七品を觀じ、　法界に參差無く　一相の見る可からざるは無形度無極なり。」　泥洹は生滅無し、　行迹に所有無く、　能く彼此の中を離るるは隨行度無極なり。」　無明は衆行の本、　十二海を流轉す、　識に染せられざるは無著度無極なり。」　爾の如く四聖諦は　諸の道果を出生す、　滅意四禪に由るは定意度無極なり。」　如來の八解脫は、　無苦亦無樂なり、　能く現在の結を滅するは無患度無極な

受敎して忽忘せざるは、總持度無極なり。」復た能く變化を現じ、諸の佛刹を感動して、亦た自ら貢高ならざるは、滅意度無極なり。」過去世を追念し、普ねく菩薩道を修し、內の諸漏に著せざるは、觀行度無極なり。」諸の佛土を修治し、清淨にして瑕垢なく、無量の人を度脫するは、法界度無極なり。」衆生の根無量なれども身體極めて清淨にして、內外有に染せざるは、了法度無極なり。」生の貪るに足らず權現に方有る無きを知り、衆の想念を生ぜざるは、無等度無極なり。」身法の若干種、亦た塵垢を生ぜず、身體相を莊嚴するは、功德度無極なり。」無央數劫より積累して法本を修し、積累已の爲にせざるは、神通度無極なり。」六情有に著せず、無量慧を分別し、虛空際を過ぐるを得るは、一心度無極なり。」生れて人中の難に在り、身を受くる量有る無きも、眼外色に著せざるは、無念度無極なり。」意を執りて貪著無く、生生亦た息せず自ら內の衆行を滅するは、空觀度無極なり。」無畏にして所著なく、內外の法を見ず、道意に若干無きは、神智度無極なり。」佛身本と自ら淨く、塵垢に染せられず、智百劫を過ぐるに達するは、無心度無極なり。」前心は今心に非ず、生生して絕えず、一意にして所起無きは、大智度無極なり。」億百千の衆生、度するも亦た度を見ず、心念に非邪無きは、娛樂度無極なり。」行盡きて苦の證を受け、三世の本を達知し、小乘の意有らざるは、本末度無極なり。」苦に於て苦を念ぜず、四非常を了知し、生を盡して更に身無きは、聖諦度無極なり。」本と無量佛より受決して當に佛と作るべく、亦た自ら歡慶せざるは、等施度無極なり。」心は本と不思議にして、德、無有の量に超え、有無の觀を分別するは、靜寂度無極なり。」五道は衆苦の原にして淸白の法を生ぜす、八等過道行は現身度無極なり。」人體は本と無法にして法界の相を見ず、上智百行に過ぐるは。無畏度無極なり。」一心一念の頃に受證すれば難有る無し、永く諸の漏法を離るるは、大聖度無極なり。」本末永く自ら離るれば亦た吾我を見ず、神力虛空の如きは、知足度無極なり。」自ら威儀を攝持し、諸の相好に著せず、自ら守つて所犯無きは親近度無極なり。」吾れ無數世より諸の世尊を供養し、諸の法界を毀らざるは、無願度無極なり。」

り。」身口意を守護し、攝して放逸無からしめ淨響普ねく照曜するは、八道度無極なり。」三覺觀に猗らず亦起滅を生ずる無く、意を息して復た生ぜざるは、無言度無極なり。」清淨なること蓮華の如く、博く聞きて染する所無く、常に衆生を訓化するは淨敎度無極なり。」平等にして二想無く、偏局心を懷かざること日の虚空を照すが如きは、慧觀度無極なり。」仁智は量る可からず、無生は見る可からず、施心、無量慧なるは、道智度無極なり。」三千世界の起滅所有無きを觀じ善く一切を覺寤するは、無想度無極なり。」生の本と無主［生］にして因緣諸法を生ずと知り、有無の道を成就するは、平等度無極なり。」無礙道を總持し、解脫して慧を成就し、分別して我想無きは、空淨度無極なり。」生死に五難有るは世俗塵に染著するなり、空無量の境に遊ぶは、權智度無極なり。」已に生死の縛を脫し、解脫中に遊戲し、淸淨にして亂想無きは、果報度無極なり。」世に在りては苦行を現じ、心を執ること金剛の如く、已に三有の道を超ゆるは、自然度無極なり。」或は虚空界に在つて法を念じて亂想無きこと空に所容有るが如きは、無形度無極なり。」快なる哉、無生の道永く諸の塵勞を斷じ、往來有るを見ざるは、無行度無極なり。」神足に四事有り、恒に十方の刹に遊び、身心倶に虚寂なるは、明慧度無極なり。」本と平等心より一意所染無く、心、無量界を超ゆるは微妙度無極なり。」生世苦を觀了し一相所起無く、道心轉ず可からざるは、金剛度無極なり。」無學にして梵行を修し九次第を超越し、行盡きて熾然ならざるは、瓔珞度無極なり。」道、三慧觀より、定慧の行を分別し、自ら息して心起らざるは、無量度無極なり。」四惡道を濟拔し、越次に證を受けず、自然に無明を滅するは、等分度無極なり。」道敎は實に微妙にして精進するも踰ゆ可からず、平等にして二法無きは、衆行度無極なり。」世に生ずれば衆の苦難あり、常に無上道を習ひ有無の迹を見ざるは、衆想度無極なり。」生死は限礙多く、智慧光を覩ず、道力以て宣暢するは、積行度無極なり。」九禪法を成就し、世俗智に染せず、一一に想を分別するは、戒訓度無極なり。」所以に法を顯現し、一切人を愍念し、度、無度を見ざるは寂意度無極なり。」無量界に遊至し、諸の賢聖に承事し、

ず。」生死の海は疆なく、曠大にして邊涯無し、六神足道に乘ずれば乃ち其の淵に遊ぶを得。」愚惑種を愍念し、翫習して捨離せざるは、形、芭蕉樹の皮有つて裏に實無きが如し。」我今樹王の下に諸道品を瓔珞し、功勳百億を超え、世雄にして尊きこと第一なり。」今日等倫なし、現に五濁に生ずるも、塵垢の爲に染せられざること、蓮華の無著なるが如し。」當に其の心を守護して、塵勞に惑はされず、内に八正覺を以て身心の法を瓔珞すべし。」外は諸の相好を以て諸の國土を莊嚴し、明慧もて二觀を修すれば相好自ら嚴飾なり。」本と四大より成り、成敗に所有無し、前念は後念に非ず、新新に塵勞を成ず。」心を一切に施し、高下に所逆無く、内に度無極を具して、猗無く所處無し。」戒を守りて常に一心に、彼を觀じて所犯なく、衆の道德を擁護し、戒性行を闕かさず。」三地に十法有り、形無くして見る可からず、權詐して生死に入り、世の徑路を示現す。」世に生じては衆の苦患、憂畏無數の變あり、聖人能く往來し、此を以て危となさず。」大道は本と形無し、無生慧有るに非ず、相相に度無極して、而して自ら身を瓔珞す。」眼視は上下に眴(まじろ)き、遠く觀るに疆有る無し、度無極を修淨して、此の無礙報を獲。」脚跟細平正にして、大聖の座を修治す、今、無垢報を獲て、具道して度無極なり。」蹲は重金を布くが如く、亦た塵水を受けず、足を擧ぐれば旋風の如く、機關に觸礙なし。」心華は塵に著せず、内に悅べば色、外に發す、皆、忍辱の報に由る、故に度無極と號す。」心を執ること金剛の如く、道地法を演布し、過ぎし無量の世を知り、無礙度を具足す。」口に八種の音を演べ、悉く諸の言教を布き、至誠にして有に染せず、是を不欺度と謂ふ。」道、三觀想に由りて能く平等慧に逮る、心、是非に著せざれば無生度に應ず。」初めて弘誓心を發すは、少許の人と爲さず、自然に道覺を成ずる、是を具空度と名く。」神足佛土に遊び、身心に限礙無く、一意移易無きは、神足度無極なり。」本と色に由つて有に墮す、色は常有るに非ずと知り、今此の色身を受くるは、衆好度無極なり。」痛法に内外有り、苦に非ず樂有るに非ず、内外法を蠲除するは無行度無極なり。」五根に五法有るは要ず十八持に由る、分別して五を除去するは無報度無極な

行、二住地を過ぎたり。」　爾の時諸佛集まり、普ねく十方より來り、一下劣の爲の故に無救を免れしめんと欲せり。」　諸佛各ゝ手を伸べ、障へて罪に至らざらしむるも、罪力蔽ふ可きこと難ければ手を攘ひ、牽ひて獄に入る。」　諸佛其の後を尋ねて、復た地獄中に到り、彼の罪人を救ひ、衆の苦惱を離れしめむと欲す。」　如來は神智力もて、身より大光明を放ち、普ねく地獄中を曜せば、晃として同一色の若し。」　罪人光明を見て、復た身の痛想なく、皆悉く光明を蒙りて地獄の難を離るゝを得。」　唯だ彼の一衆生のみ、諸佛も救ふ能はず、五逆と[三]不愼行と、乃ち是の苦惱を致す。」　吾れ是れより以來、進行して懈怠せず、生死の苦を以て中に悔心を變ずること有らず。」　今既に成佛するを得たり、字を釋迦文と號し、五陰身を壞敗して衆德普ねく備具す。」　罪を受くること終竟なく、善根の原〔源〕を識らず、行の盡きん衆德を超え、乃ち虛空性に應ず。」　恐るらくは今亦た當に罪を受けて救ひ無き者あるべし、神力の能く制住して往かざらしむる所に非ず。」　空性は淸淨と雖も、行滿つれば乃ち具るを得、神足五通法は、未だ能く此の惱を離れず。」　五陰各ゝ性有り、造る所一品に非ず、忍智度無極は、行具りて乃ち成ずるを得。」　道は諸法の本を生じ、無有の法を滋長す、志を立つる[四]安明の如く、終に沮壞す可からず。」　譬へば士夫あり、空施畔齋を爲すが如し、此れなほ冀はくは得べきも、罪を免れんと欲すること甚だ難し。」　七寶の諸宮室、象馬、國財寶、斯れ盡く幻化の如し、暫くも常停せず。」　轉輪聖王の位は、四天下を統領するも、是れも亦磨滅の法なり、無常にして久存せず。」　彼の修行人の、色の根原を分別し、本と自爾と解知するが如き、是れを色陰を成ずと謂ふ。」　身痛に百八あり、內外中間の法なり痛の出生する所を知れば、是れ痛陰法に應ず。」　想は野馬の遊の有を壞して所有無きが如し、想を抑制して生ぜざる、是を想陰に應ずと謂ふ。」　三行は三法を成じ、三を滅すれば乃ち三に應ず、三毒の根を拔斷すれば、三世の有に染せず。」　五法已に成具し、識、無識を受けず、內外の六塵無き、是を謂つて識陰と爲す。」　四方便道を執り、四無畏慧に乘じ、四道果證を超ゆ、故に四聚要に應

〔三〕三本宮本不順行。
〔四〕安明＝安明山卽ち須彌山。

して苦に往來し、今世より後世に就く、咄嗟此の苦惱を、聖に非ずんば孰か能く濟はん。」諸天は受福の堂なり、四梵亦復た然り、行は清淨果に由る、德を人中の上と爲す。」思惟するに古昔より來、本と三惡趣なきに、本と造りて今自ら受く、何すれぞ復た疑ある。」若し諸の世尊をして道敎を顯曜せざらしめば、便ち如來の所に於て、其の過を議說すべし。」吾亦汝を愍念す、生を受けて本に達せざるを、此の如きの衆生類は聖なる訓敎を受けず。」過佛に量有る無きに、汝は覩聞せざるに由る、從來の恒沙の佛、豈に從つて濟を蒙るを得んや。」人心霍然として寤れば、劫數の期を待たずして、一聞に便ち成佛し、諸の法界を歷ず。」但だ群品の黨を念ふに、道に慇懃ならず、所以に自ら墜落して、永く五道の淵に處る。」鳥の虛空を飛ぶや翅に憑つて乃ち逝くを得るが如し、人は止觀定無くんば何に由つてか空慧を獲ん。」生死は限齋なし、道力は百行に過ぐ、染むるに無形服を以てせば、自ら道果成ずるを致さん。」五陰は本と無形なるも、爲に形色の相を作す、德、釋梵に過ぐれば、無相法を說くことを爲す。」行人は外色を、內識往いて分別すと觀ず、彼の色は我が造るに非ず、我心自ら往いて染するなり。」色は本と我が本に非ず、色性竟に有無なり、我識と計するに亦爾り、本と何に從つて生ずる所ぞ。」爾れば乃ち自ら覺悟すれば、外色は自ら空寂なり、內識も亦復た爾り、澹然として本と無生なり。」人、非常空を念じ、自ら身の本法を觀ずれば、爾れば乃ち彼に至るを得、永く無爲の岸に處る。」本と五陰身を受け、脫せんと欲すれども未だ離るゝ能はず、受胎は是れ大患なり、未だ離れずして何の益あらむや。」[二]人、能く明慧を修し、億

五分法身具はり、戒定慧解成じ熏ずるに道德の香を以てし、世の臭穢を蠲除す。」

劫に懈怠せざれば、衆德自然に具はる、故に無等倫と號す。[三]」意に戾れば習俗に隨ふ、尊に處て憍を爲さず。隨行高下に從へば、永處の安きに立たしむ。」或は三塗の苦に入り、爲に權慧智を現じ、外には代つて苦を受くるが如きも、內心には染する所無し。吾れ昔、無數世に、菩薩道を修行し、以て信念を盡くす獲、

【二】「能」：麗本解に作す、三本宮本能に作る。【三】戾意隨習俗。この句後の三句と相應せざるが如きを以て今の如く訓ぜり。

る、是を隨行得と謂ふ。」 諸佛の法異ならず、分別して其の人に隨ふ、過去已滅の行、豈復た根兆有らむや。人智の修習する所、信を守りて權法と爲し、自ら吾我の想を滅する、是を隨行得と謂ふ。」 久遠より以來、衆生有に染著し、有だも竟に自ら知らず、豈に無想法を識らむや。但だ大聖たる人、分別して其の類に隨ひ、導引するに正要を以てす、是を隨行得と謂ふ。」 劫數も亦彈指の如くなる可からしむること難からず、癡惑の人を寤し難く、善に就くは乃ち難しと爲す。一身復た一身より、億萬姟を經歷して、愍むに無念想を以てし、度せずんば終に捨せず。行本と自然に由り、利鈍に各品あり、今、大光明を蒙る、是を隨行得と謂ふ。」 本と我れ自ら行を造り、今復た其の報を受く、行盡くれば三界無く、獨立して猗る所なし。人想、衆の常想は、是れ聖律敎に非ず、能く彼此の想を捨つる、是を隨行得と謂ふ。」 身と計すれば本と自ら無し、況や識神念有らむや。愚惑の衆生類、初より捨離する能はず、道忍に五行あり、初念中も亦然り、不淨觀を思惟する、是を隨行得と謂ふ。」 身淨了して瑕垢なく、終に邪業を造らず、口の眞誠なる所以は、本と欺無きに由るが故なり、道潤及ぶ所の處、輒ち濟ふ所有るを得るは、前に麁澁あるに由る、豈、潤の及ばざるを怨まん。弘誓は恒に平等にして麁と細とを念ぜず、行等しくして彼此無し、是を隨行得と謂ふ。」 人其の難を超ゆるを知り、自守して他念なく、自ら濟ひて復た彼を濟ふ、是を隨行得と謂ふ。」 人の五色を視るが如き、自ら其の識想を起し、痛陰是に由つて滋く、大災患を離れず。」 識法は見る可からず、緣より若干念を生ず、一生復た一滅、免れんと欲すれども甚だ難しと爲す。」 道慧に五相あり、成敗法を分別す、行盡きて窠窟無し、時に識竟に〔一〇〕所在す。」 一形は一行を受け、身身磨滅せず、夫れ、其の樹を伐らむと欲し、盡さむと欲せば根を捨つるなかれ。」 識根蔓莚を爲すも、至る所礙あるなき、力士諸仙道、誰か能く其の本を尋める。」 唯、三界の尊あり、能く攝して逸せざらしめ、燒くに智慧の火を以てし、闇冥の處を知る莫し。」 無明衆行の災なり、善根の本を抑過す、洗ふに八解水を以てし、垢を除きて塵埵なし。」 生死

【一〇】所在。恐らくは「何くに在る」の誤字か。

爾の時、天龍・鬼神・阿須倫・迦留羅・旃陀羅・摩休勒・人と非人、及び諸の菩薩摩訶薩、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、各自、念を生ずらく、我等如來の神智變化無量なるを觀んと欲して、諸の世界に遊び、故處に還復するも覺知する者無し。と。

時に梵天有り、名けて尊復尊と曰ふ。他方の佛刹より來り、三禪を行過して復た畏る所無し。卽ち座より起ち、偏へに右臂を露はし、叉手長跪して頌を作つて曰さく、

天尊の三達智は　悉く三世の本を觀じ、　惑を斷じ狐疑を去り、　爲めに神智道を現ず。」　如爾の性自然にして、行過して三有を超ゆ　菩薩瓔珞慧は總べて何等を行ずると爲す。」　道樹にて諸法の本なる、　無生心第一より　自寤して師受なし、　何の行に隨つて得ると爲す。」　下劣の地を超越し、　上、菩薩道を慕ひ、　四要法を宣暢す、　梵行清淨の本なり。」　天世衆生の類、　念念各同じからず、　想を滅して起らざらしむるは　何に由つてか成ずるを得たる。」

法界は本と自ら空、　受慧に若干あり、　一行もて佛たるを得たるは　復た何等に由りて辨ぜる。」　生死の十二海に　流轉して尙ほ停らず、　佛慧邊際無く、　尋究して之を度す。」　道本と一相に從り、　斷滅して生ずる所なしと、外身の塵勞を觀ず、　內法も亦復た然り。」　來處は此を去ること遠し、　願樂して法を聞かんと欲す。　唯だ尊、一一に演じて　永く塵湮無からしめたまへ。」

爾の時世尊、尊復尊に告げて曰はく。『善い哉、善い哉、族姓子、能く如來の前に於て斯の義を問ふこと。今當に偈を以て一一に分別すべし。』と。

本と無數世より、　善知識に親近し、　本末空を見ざる、　是を隨行得と謂ふ。」　無量の法を思惟し、　本末空を分別し、　道果染汚せざる、　是を隨行得と謂ふ。」　所念邪に處らず、　正法の本を離れず、　一相本と自ら寂なる、是を隨行得と謂ふ。」　十力、三千に王として、　永く彼此の岸を度し、　本無の法を修行し、　五陰苦を消滅し、　慧明所照の處、　上、空無際に徹し、　善化本敎に隨ふ、　是を隨行得と謂ふ。」　空性澹然として安く、　無願相も亦然り、　三定等しく伴有る、　是を隨行得と謂ふ。」　其の入定の時に當つて　諸法に所有無く、　身―染一身―を捨す

む。』　十地の菩薩種、　獲る所の禪同じからず　本慧に若干無し、　息心を第一と爲す。」　現在の十六法、　中に於て自ら娛樂するも　三毒本に猗らずんば　乃ち十句義に應ず。」　無量界を超越して、　本觀行を失はず、　諸の衆生を度脱する　是を三禪行と謂ふ。」　諸法は夢幻の如く、　有に非ず不有に非ず、　盡く一切類を化す、　是を三禪行と謂ふ。」　未だ十地に在らずと雖も、　能く佛事を施作し、　能く種種の變を現ずる　是を三禪行と謂ふ。」　無等十二輪もて、　本無行を暢演し、　諸の根本を受入する、　是れを三禪行と謂ふ。」　生死に量有る無し、　三有道に滯らず、　識神自然に轉ずる、　是を三禪行と謂ふ。」　人既に非常を知り、　世の榮寵に著せず、　眞人彼此を斷ずる、　是を三禪行と謂ふ。」　有情は有情に非ず、　無情も亦復た然り、　道行三界を過ぐる、　是を三禪行と謂ふ。」　生死本と兆無し、　因緣にて諸法有り、　彼彼相知らざる、　是を三禪行と謂ふ。」　慈愍して普ねく育養し、　身想の本に著せず、　法性に高下無き、　是を三禪行と謂ふ。」　菩薩根本の行たる、　惟（唯）空無相願にて　泥洹門に趣くを得る、　是を三禪行と謂ふ。」　道は四等心に從り、　弘誓動ず可からず、　十慧衆道に超ゆる、　是を三禪行と謂ふ。」

檀度無極を具して、　下劣人を拯濟し、　隨所に其の念を充す、　是を三禪行と謂ふ。」　戒を守りて犯す所無き、　吉祥瓶を護るが如く、　念念に雜想せざる、　是を三禪行と謂ふ。」　忍辱行の本より、　受對して心變せず　無想なること虛空の如き、　是を三禪行と謂ふ。」　無數劫に精進し、　終に懈怠を懷かず、　衆生類を教訓する　是を三禪行と謂ふ。」　三禪行を正受し、　一意念じて變ぜず、　十方界を感動する、　是を三禪行と謂ふ。」　智慧の大海淵、　平等にして二有る無く、　諸の妄想を蠲除する、　是を三禪行と謂ふ。」　善權に方法無く、　變現に量有る無く　貴賤有りと計せざる、　是を三禪行と謂ふ。」

爾の時世尊此の偈を說き已つて、百千億の衆生皆、無上心を發し、三禪行を得たり。

隨行品第十九

佛言はく、『故に八地の菩薩の三禪行を修するに如かず。其の功德福稱量す可からず。何を以ての故に、八地の三禪は、七地の三禪の及ぶ所に非ざればなり』と。

佛復た淨菩薩に告げて曰はく、『云何が族姓子、九地の菩薩、三禪を具足し三千大千世界に遍滿せば、其の功德福寧ろ多となすや不や。』と。

淨菩薩、佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し、世尊。』と。

佛言はく、『故に十地の菩薩摩訶薩の三禪行を修するに如かず。其の功德福稱量す可からず。何を以ての故に、十地の三禪は、九地の三禪の及ぶ所に非ざればなり。』と。

佛復た淨菩薩に告げて曰はく、『云何が族姓子、十地の菩薩、三禪を具足し三千大千世界に遍滿せば、其の功德福寧ろ多となすや不や。』と。

淨菩薩佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し、世尊。』と

佛言はく、『故に一生補處の菩薩摩訶薩に如かず。何を以ての故に、一生補處の三禪は、[九]十住〔地〕の三禪の及ぶ所に非ざればなり。』と。

佛復た淨菩薩に告げて曰はく、『云何が族姓子、一生補處の菩薩、三禪行を修し三千大千世界に遍滿せば、云何が族姓子、其の功德福寧ろ多となすや不や。』と。

淨菩薩、佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し、世尊。』と。

佛言はく、『故に如來至眞等正覺の、須臾の間三禪を念じて其の功德を得るに如かず。功德福稱量すべからず。一切諸佛世尊は、是の三禪に由つて一切諸法を具足するを得ればなり』と。

爾の時世尊便ち斯の偈を說きたまふ。

三禪は諸佛の母なり一切法を出生し、　衆生の苦を拔濟し、　人中の尊たるを得し

【九】住。元明二本に地に作る。

三地の三禪の及ぶ所に非さればなり』と。

佛復た淨菩薩に告げて曰はく、『云何ぞ族姓子、四地の菩薩摩訶薩、三禪を具足し、三千大千世界に遍滿せば、其の功德福寧ろ多となすや不や。』と。

淨菩薩、佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し、世尊。』と。

佛言はく、『故に五地の菩薩の三禪行を修するに如かず。其の功德福稱量す可からず。何を以ての故に、四地の三禪は、四地の三禪の及ぶ所に非さればなり』と。

佛復た淨菩薩に告げて曰はく、『云何が族姓子、若し五地の菩薩摩訶薩、三禪を具足して三千大千世界に遍滿せば、其の功德福寧ろ多となすや不や。』と。

淨菩薩、佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し、世尊。』と。

佛言はく、『故に六地の菩薩の三禪行を修するに如かず。其の功德福稱量す可からず。何を以ての故に、六地の三禪は、五地の三禪の及ぶ所に非さればなり』と。

佛復た淨菩薩に告げて曰はく、『云何が族姓子、六地の菩薩、三禪を具足して三千大千世界に遍滿せば、其の功德福寧ろ多となすや不や。』と。

淨菩薩、佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し、世尊。』と。

佛言はく、『故に七地の菩薩の三禪行を修するに如かず。其の功德福稱量す可からず。何を以ての故に、七地の三禪は、六地の三禪の及ぶ所に非さればなり』と。

佛復た淨菩薩に告げて曰はく、『云何が族姓子、若し七地の菩薩、三禪を具足して三千大千世界に遍滿せば、其の功德福寧ろ多となすや不や。』と。

淨菩薩、佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し、世尊。』と。

佛言はく、『云何が族姓子、若し三千大千刹土の衆生を盡く梵天と爲し、一一の梵天神德無量ならば、其の功德福寧ろ多となすや不や。』と。

淨菩薩、佛に白して言さく、『甚だ多なり、甚だ多なり、世尊。』と。

佛言はく、『故に一地の菩薩摩訶薩の三禪行を修するに如かず、其の功德福稱量す可からず、譬喩を以て比と爲す可からず。』と。

佛復た淨菩薩に告げて曰はく『云何が族姓子、若し善男子善女人、已に一地に在つて菩薩號を得、三千大千世界に遍滿せば、其の功德福寧ろ多と爲すや不や。』と。

淨菩薩佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し、世尊。』と。

佛言はく、『故に二地の菩薩摩訶薩、三禪行を修せば、其の功德福稱量す可からざるに如かず。何を以ての故に、二地三禪行は、一地の能く及ぶ所に非ざればなり』と。

佛復た淨菩薩に告げて曰はく『云何が族姓子、若し二地の菩薩をして皆成就せしめ、三千大千世界に遍滿せば、其の功德福寧ろ多となすや不や。』と。

淨菩薩、佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し、世尊。』と

佛言はく、『故に三地の菩薩摩訶薩の三禪行を修するに如かず、其の功德稱量す可からず、何を以ての故に、三地の菩薩は二地の及ぶ所に非ざればなり』と。

佛復た淨菩薩に告げて曰はく『云何が族姓子、若し三地の菩薩摩訶薩、三禪を具足して三千大千世界に遍滿せば、其の功德福寧ろ多と爲すや不や。』と。

淨菩薩、佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し、世尊。』と。

佛言はく、『故に四地の菩薩摩訶薩の三禪行を修するに如かず。其の功德福稱量す可からず。何を以ての故に、四地の三禪は、

の故に、世人に顯現せず。』　諸佛より受教し、　諸の定意に遊戲すれば、　人中に神龍として歩み四無所畏を獲。』
如來は別に諦あり、　一一不思議にして　猗なく所染なし　故に人中尊と號す。』　凡そ人世典を學び　齊しく無想に
至る可しとも、　一句義もて生死とともに處らざるに如かず。』

爾の時、世尊此偈を說き已つて、『云何が族姓子、審かに此の義、有情無情を解するや不や。』と。答へて曰く、『是の如し、世尊、實に等倫なし。若し善男子善女人有り、無情に有情、有情に無情の義を諷誦受持せば、便ち能く一切諸法を具足せん。何を以ての故に、諸佛世尊一切賢聖は、皆此の義に由つて成佛するを得たればなり。自今已後我等善男子善女人、皆、當に是の善男子善女人、無情を有情とし、有情を無情とするを受授諷誦する者を擁護すべし。何を以ての故に、我が所觀の如來所說の如きは、過去當來今現在佛、皆此義に由つて成就するを得たればなり。我等も亦當に此の法義に逮るべし。』と。

爾の時、菩薩あり、名けて無觀と曰ふ。卽ち座より起ち、偏へに右臂を露はし、叉手長跪して佛に白して言さく、『世尊、我等八人、此の賢劫中に於て、當に是の善男子善女人の是の句義を受持諷誦する者を擁護すべし、便ち當に十功德福を獲べし。云何が十と爲す。一には無形相法を得、二には法藏に深入す、三には辯才第一なり、四には無量法を得、五には捷疾智を得、六には弘誓心を捨てず、七には定意自在なり、八には衆生念を逆知す、九には無生心を立つ、十には行本と自然なり。若し、善男子善女人、此の句義を受持諷誦せば、便ち當に十功德を獲べし。若し三千大千刹土の中に滿つる善男子善女人をして、皆菩薩道を成就し得せしむとも、是の善男子善女人が此の一句義を受持諷誦するに如かず。何を以ての故に、諸善功德皆是に由つて生ずればなり』と。

爾の時世尊、淨菩薩に告げたまはく、『云何ぞ族姓子、三千大千刹土の衆生をして、盡く釋提桓因たらしめば、其の功德福寧ろ多と爲すや不や。』と。

淨菩薩(佛に)白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し、世尊。』と。

佛言はく、『故に信を立つる善男子善女人の、三禪の本を修する、其の功德福甚だ多く、甚だ多きに如かず』と。

野苑に在り。」　先づ四明慧―苦習盡道慧―を說き、　未だ覺悟せざる者の爲に三說乃ち成就す。」　一切無量の衆、初めて甘露の法を聞き、　皆、無生心を得て、　復た生滅有る無し。」　此生を現ずと雖も　神、無量界に遊び、　在在に法輪を轉じ、　處處に變化を現ず。」　此に於て作佛せんと現じて、　十月母胎に處す、　聖人に塵垢無し、　五欲に耽在せず。」　是故に精進して學し、　有無の識を離れむを念ぜば、　體性行自然にして、　法界を毀らず。」　過者は量る可からず、　來者も亦盡くるなし、　現在復た變易するは神識所在するが爲なり。」　識は生死の本たり、　流浪して窮り已むこと無し。　無爲の岸に至らむと欲せば三禪を第一と爲す。」　無色法を得て、　染むるに無形服を以てし、無に於て自ら娛樂せんことを願ひ、　三有に處することを願はざれ。」　念ふに我れ本と牢誓して、　本際の衆生の爲に―　故らに復た俗人に隨ふも、　弘誓心を闕かず。」　菩薩の三本を行ずる互に勝負心有り、　我今乃ち自ら達して、精進中の最たり。」　如來所現の變は、能く思量する有る無し。　或は巖石の間に處し、　寂然として言說無し。」內の六塵〔根〕を分別するに　我無く人想無し、　外法も亦當に爾るべし、　常想は常想に非ず。」　吾、初發意より　立行己の爲にせず、　今、先寤するを得と雖も　豈餘者の爲にせざらんや。」　力めて勤學する所以は　本の所願に負かむことを恐るればなり、　故に未度者を度す、　是を如來の誓と謂ふ。」　佛本と初めて願を發し、　劫數の難を念ぜず、塵欲に處ると雖も　此の苦亦久しからず。」　正法本と無の[八]一にして　差品に三號有り、　道は日月の照すが如く　高下心有る無し。　一智及び一慧は　本と一願より成ず、　我今一を捨てず、　故に第一尊を號す。」　二觀は一法に從り、　念に從り三苦を過ぐれば、　本と苦境界無しと　法身自ら分別す。」　菩薩は權慧を執つて　人をして法想なからしむ、　眞人の意は常に淨く　起無記を念せず。」　恒に大慈心を以て　衆生の闕を念ぜず、　是に由つて自ら瓔珞し法義具足する慧あり。」　道本は自ら無我なり　此れ衆生を出づる口なり、　衆生を本と自ら無我なりと說く可からず。」

今當に有行と說いて、　漸く道迹を見しむべし　常想無きを知らしめば　久しうして當に自ら覺寤すべし。」　世に在つて聖行を修し、　終に義本を失はず、　文字を以て

【八】元明二本二に作る。二の時は「本と二なし」となる。

本無量善を積みて 自ら仁中の聖を致す。 道等しくして三本なきに 心に内外の淨を計す。」 性行に若干あるも行法に異あることなし 但世の爲に掛ずれば 分別して差品あるのみ。」 過行に累劫あり 未だ曾て想念を起さず、故に遊心無疆なり 虚空に滯あることなし。」 地を至誠の本と爲す 能く穢不穢を忍ぶ、 慧心の含容する所 度不度を見ず。」 聖人の行は甚だ奇にして 能く此の衆苦を忍び、 億劫に功徳を行じて 乃ち一法の本を成ず。」 三定―空無相 無願―もて諸法を行じ、 衆智十力慧もて 無生の處に超越す。」 本音響の慧を修して 八聲甚だ淨妙に 五陰行を分別して 思想の貪を蠲除す。」 生死の本に沈湮して 出要の路を求めず、 三本本を捨てずして 乃ち道要を出でよ。」 自ら宿命通を識れば 法身不思議にして 有を壞して無等を成ず、 是の力沮むべからず。」 虚空は量界なく 一に非ず二三に非ず。 本誓願に隨行して 衆の妙道を淨修せよ。」 生死滓濁の法は 愚士の貪愛する所、 慧觀に染著なければ 永く愚惑の法を除く、 菩薩は寂靜を樂み 無量の法を思惟す。 現在に生滅せず 有に非ず不有に非ず。」

自ら宿命智を識れば本との生死の根を觀ず、 人の江海に臨めば爾乃はち戰慄して懼るゝが如し。」 弘誓[六]度無極は、道地行を平正にし、 坐臥に深藏に入り、 常に穢汚の行を離る。」 地水火風空に神識は猗りて著住す、 禪窟の處を欲求するも神識の趣を知らず。」 「人」も亦復た然るを信ず、 因緣共に合會するのみ 識、四大空を離るれば各の趣く所を知らず。」 法海は涯有る無く、內外塵を受入するも、 本性自ら清淨にして汚染を識別せず。」 大道本と法無し、 法を觀じて內外淨く、 去來今を念ぜざれば世智等雙無し。」 衆一切の音、 有量無量の法は 劫數磨滅の法と曉れ豈常存するもの有らむや。」 能く衆生の厄を斷ずれば、 永く四魔地を離る 貪嫉本と性無し、 爾して乃ち淨觀に應ず。」 本と樹王の下に坐し、 初夜中も亦然り、 一心一意止、 定意復た亂るるなし。」 七日體傾かず、 咸く三世の法を察し、 一を滅し復た一なし、 是れよりり乃ち覺寤す。」 今既に成佛するを得 未度者を愍念し 與に[七]無上の法を轉じ、 麗

【六】度無極＝到彼岸。
【七】與。麗本に興に作り、三本與に作る。

著するなく亦染せず　故に號して天尊と爲す。」　道の生ずるは自ら生ぜず　因緣にて乃ち道あり　法法自ら知らず　虚寂何をか道と爲さん。」　人本と生死に處るも　流浪して自ら覺らず、　精進して懈怠せずんば　漸漸に聖律に應ぜん。」

心珠素より自ら明かにして　外の光明を假らず　日月に五翳あり　何ぞ能く照す所あらん。」　佛の本行清淨にして心慧に瑕塵なく　自ら濟ひ復た彼を濟ひて　至る所罣礙なし。」　能く諸の悕望を斷じ　諸の縛著を蠲除し　照すに諸法の光を以てして　愚冥の闇を知るなし。」　泥洹の性清淨にして　往還あるを見ず　深微にして觀る可からず　澹然として變易せず。」　禪の一定意に入りて　諸の十方を感動し　神足道力强くして　八等虧損せず。」　所以に弘誓を發し淚を雨らして衆生を愍み　咸代りて苦を受けんと念ず　此れ實に奇特と爲す。」　人は無常を計ぜず　三界の榮に貪著すること　風の落葉を吹くが如く　流轉して所趣に隨ふ。」　虚空は邊際なく　道行亦無邊なり　空は報ゆるに音響を以てするも　虚寂は根本なし。」　人本と母胎を出づれば　行に隨つて五趣に染し　善惡の人形を追ふこと　影の其の身に隨ふが如し。」　若し能く五陰を滅せば　神識空に還歸し　復た生老死せず、　是の處實に快樂なり。」　若し諸の佛藏を知れば　深奧にして觀る可からず　界を越え三世を超えて　生死の岸を顧眄す。」　本と我れ愚惑の爲に　此の然熾の鑊に入るも　今此の災を離るるを得て　清淨の淵に遊戲す。」　我れ今苦を免れ自ら離ると雖も彼れは離れず　獨善は弘誓に非ず　何ぞ必ず滅度を取らん。」　復た現生に來還し　權化して塵勞に處り　曠く濟ひて涯あることなく、　劫數の期を厭はず。」　日に度すること恒沙の如く、　已の如く等侶なし。　毫釐の如きだも、　自らの功勳を宣揚せんを計せず。」　度を念ぜざる者は近く、　未だ度せざる者は遠しと爲す。　心識は澹然として一にして、　至竟罣礙なし。」

色相は是れ身に具はり、　容好は雙比なし、　諸根遂に純熟するを乃至大慧と爲す。」　利根にして行を具足するも、　覺寤は猶復漸なり。　愚癡の者に會値へば、　此れ乃ち甚だ難しと爲す。」　菩薩、定意に入れば、　有無の想を念ぜず、　獨步して所畏なく、　德諸の山岳に過ぐ。」　行者に五品あり、　進退中間の法なり。　立志は安明の如く、心堅くして動く可からず。」　六度の大神慧あり　神足もて往來を通じ、　法界に三念なし　故に能く法輪を轉ず。」

若し當に爾るべくんば、諸法は亂なり、諸法は不定なり、諸法は無常なり、汝今復た說く、亦有情ならず亦無情ならず、故に無所立に立つと』と。

爾の時に淨菩薩、默然として報へず。佛言はく、『族姓子よ、汝、何等の義を觀じてか、默然として報へざる』と淨菩薩言さく、『我れ第一義中の無言無說を觀ずるが故に默然たるのみ』と。

佛言はく、『是の如し是の如し、族姓子よ、一切諸法は皆悉く假號なり、假號法中に於ては、眞に非ず有に非ず、染汚心を以ての故に衆生達せず、各自ら稱して此は是れ泥洹なり此は是れ生死なりと說くも、第一義淸淨觀を以てせば、亦泥洹なく亦生死なし』と。

爾の時に世尊便ち斯の偈を說きたまふ。「一切諸の法界は　本無にして所有なし　生死達觀せずして、　謂つて法自爾と爲す。」　三世俗を經歷し　進んで菩薩道を求むるも　退轉して恒沙の如し　豈本無に達するあらんや。」　十力、現世を哀れみ　群品等を慇念し　爲に假號の法を演べ　至道の明を知らしむ。」　解脫して等侶なく　速疾に法音を演べ無量の衆生の類に　充たすに法甘露を以てす。」　大道に形像なし　有情無情に非ず　但染汚心を生じて　三禪本を獲ざるのみ。」　若し本を修習せんと欲せば　七無漏を淸淨にし　九淨地を宣揚せよ、　是を道門に趣くと謂ふ。」　初の道場に趣かんと欲し　繫著の十四心を　佛を得て乃ち當に滅し　然る後道果を成ずべし。」　十六の諸の聖諦　菩薩の諸の法印もて　甘露慧を授莂し　因つて號して如來と爲す。」　三十二の法本　菩薩の神通の慧もて　三世の患を消滅して漸く泥洹に至る。」　夫れ佛道を求め　佛刹土を莊嚴し　聲十方世に遍ねからんを欲せば　禪を修して得獲せん」。　無漏の三禪行は　諸佛深奧の藏なり　衆生の爲に誓を立て　爲に無死の法を說く。」　行盡きて行を造らず　果亦果報なし道は平等の慧よりし　心一にして邪念なし。」　四信は如來の寶なり　六種を世塵と爲す　七覺淸淨覺もて　八道具はりて乃ち成ず。」　世俗の五通道は　鳥の虛空を逝くが如し　命を係けて地大に在り　生死の難を免れず。」　六通の大乘道は　虛空の淵に遊戲し　至竟退轉せず　斯れ安くして有餘に非ず。」　慧觀もて淸淨に達し　悉く闇冥の中を照し

佛言はく、『族姓子よ、我に辟支佛阿羅漢心なし、然れども慈悲喜護あり。是を有情に無情なりと謂ふ』と。
淨菩薩曰く、『如來有情に無情になりと。もし無情に無情なるありや』と。
佛言はく、『有り』と。
淨菩薩問うて曰く、『何者か是なる』。
佛言はく、『我れ今心滅して無爲に託在す。是を無情に無情なりと謂ふ』と。
淨菩薩問うて曰く、『無爲亦有情、無情亦有情は、假號と名くるや。云何が世尊、「我れ今心滅して無爲に託在すと言ふや」と。
佛言はく、『族姓子よ、是の如し是の如し、汝が言ふ所の如し。一切諸法は皆盡く假號にして、是れ亦無情に有情なり、有情に無情なり』と。
淨菩薩復た佛に白して言さく、『世尊の說きたまへる所の如くんば、諸法は亂、話法は不定、諸法は無常なり、云何が假號法中に於て、復た有情に無情、無情に有情と說くや』と。
佛言はく、『云何が族姓子、我今當に第一義を以て汝に問ふべし、汝常に以て一一我に報ふべし。汝今有情なりや、無情なりや』と。答へて曰はく、『有情なり』と。
佛言はく、『汝が情は何の所立なるや』と。答へて曰く、『無情に立つ』と。
佛言はく、『汝今有情ならば、云何が無情に立つ』と。答へて曰はく、『有趣を捨て無きが故に、無情に立つ』と。
佛言はく、『無情は既に無爲なり、何の所立なるや』と。答へて曰く、『無所立に立つ』と。
佛言はく、『汝今何等の法を用ひてか、無所立に立つ』と。答へて曰はく、『我れ今有情を見ず、無情を見ず、故に無所立に立つ』と。
佛言はく、『族姓子よ、汝は一切諸法は假號なりと言ふ、云何が假號法中に於て、有情と無情に說き、有情に無情と說くや。

佛言はく『是の如し是の如し、族姓子よ、是を有情に無情なりと謂ふ』と。

佛復た淨菩薩に向ひて曰く『云何が族姓子、如し今如來至眞等正覺、最後に十四の諸の塵垢を降伏せば、爾の時に復た三禪行ありや不や』と。答へて曰く『無きなり、世尊』と。

佛言はく『是の如し是の如し、族姓子よ、是を有情に無情なりと謂ふ』と。

佛復た淨菩薩に告げたまはく『今已に汝が爲に無情に有情なると、有情に無情なるとを說きたり、便ち能く如來道教を具足し、菩薩位に上り道場に進趣すること、猶ほ月光の衆星中の明にして、普ねく一切を曜し照を蒙らざるなきが如し。菩薩摩訶薩此の無情に有情なると、有情に無情なるとを具ふれば、便ち能く如來の聖行を具足し、身黃金色にして衆德巍巍たること、猶ほ紫磨金山のごとくと衆智自在なり』と。

爾の時に淨菩薩、佛に白して言さく『世尊、今日如來至眞等正覺は、無情に有情になりや、有情に無情なりや』と。

爾の時に世尊、淨菩薩の此の義を問ふを聞き已つて、便ち身の支節より光明を放ちて普ねく無量の諸の佛刹土を照し、盡く金色ならしめ還つて光明を攝む。便ち淨菩薩に告げて曰はく『善い哉善い哉、族姓子よ。今無相の法を以て如來に此の義を問ふや。如來至眞等正覺は已に九地を過ぐるが故に、無情に有情にして得、佛乃至道場を成ずるに至る。是を有情に無情なりと謂ふ。何を以ての故に。皆衆生に想著あるに由るが故なり。』と。

爾の時に淨菩薩、復た佛に白して言さく『世尊の說きたまへる所の如きは、衆生を以ての故に有情に無情なりと。如來今日未だ離れざるや』と。

佛言はく『已に離る。處ると雖も亦染せず』と。

又問ふ『云何が世尊、如來は別情もて、乃ち有情に無情ならしめば、唯有情に無情あるのみなるや』と。

佛言はく『族姓子よ、如來には復た別情なし、更に有情に無情なるあり、但第一義を以てするが故に有情に無情なり』と。

淨菩薩復た問ふ『云何が無情に於てし、云何が有情に於てするや』と。

と。

佛言はく『族姓子よ、四法界の如し。一法界は諸界を增して損あり、諸界は悉く一界を增して損あり。此れ有情に由つて增し、無情に由つて增さず』と。

淨菩薩復た佛に白して言さく『世尊の言の如し。我れ今當に有情の無情に至り、無情の有情に至るを說くべし。今如來は但有情の無情に至るを說きたまへるのみ、如來の無情の有情に至るを說きたまふを聞かず』と。

佛言はく『善い哉善い哉、族姓子よ。今汝が問を發する者は、皆佛の威神なり、我れ今汝に反問せん、當に一一我に報ふべし。云何が族姓子、若し善男子善女人あり、初め學地に在りて學法七無漏觀を成就せば、是の時復た凡夫の過去當來現在心ありや不や』と。答へて曰く『無きなり、世尊』と。

佛言はく『是の如し是の如し、族姓子よ、是を有情に無情なりと謂ふ』と。

佛復た淨菩薩に問ひたまはく『云何が族姓子、如し今無學、九淸淨道を修せば、爾の時復た七無漏觀ありや不や』と。答へて曰く『無きなり、世尊』と。

佛復た言はく『族姓子よ、不退轉菩薩、虛空觀を得て十六聖行を修せば、爾の時無學は九淸淨道を修するや不や』と。答へて曰く『不なり、世尊』と。

佛言はく『是の如し是の如し、族姓子よ、是を有情に無情なりと謂ふ』と。

佛復た問ひたまはく『云何が族姓子、如し今八住菩薩、佛形相を得て三十二聖諦を獲ば、爾の時復た九淸淨道ありや不や』と。答へて曰く『無きなり、世尊』と。

佛言はく『是の如し是の如し、族姓子よ、是を有情に無情なりと謂ふ』と。

佛復た淨菩薩に問ひて曰はく『云何が族姓子、九地の菩薩は爾の時に復た三十二聖諦ありや不や』と。答へて曰く『無きなり、世尊』と。

爾の時に淨菩薩、佛に白して言さく、『世尊、轉輪聖王の如きは天の坐に在りて、意に所念あれば念を尋ねて卽ち至る。爾の時の有形有情の、王念に便ち至るは、有情にして至ると爲すや、無情にして至るや』と。

佛言はく『此れ有情は王念に便ち至ると雖も、彼れ王意を知つて至るに非ず』と。

淨菩薩、佛に白して言さく、『彼れ有情なりと雖も何ぞ輪寶・珠寶に異らんや』と。

佛言はく『云何が族姓子、輪寶・珠寶も亦念に由つて至る、然れども此の二者は音響言教あるや不や』と。

淨菩薩言さく、『言教あることなし』と。

佛言はく、『是の如し族姓子よ、有情は念を以ての故に至ると雖も、言教を取らず』と。

淨菩薩復た佛に白して言さく、『云何が世尊、若し轉輪聖王の心念に便ち至り、輪寶・珠寶をして言教あらしめんと欲せば得るや否や』と。

佛言はく、『得るなり。何を以ての故に。轉輪聖王の威力は、然も便ち言教あらしむればなり』と。

淨菩薩言さく、『轉輪聖王は通に非ず感に非ず、云何が無情をして言教あらしめんや』と。

佛言はく『轉輪聖王は世俗通を得たり、能く世物をして念所應の如くならしむるも、但、未だ有情の物をして無情に至らしむる能はざるのみ』と。

淨菩薩復た言さく、『云何が有情の物をして無情に至らしめんや』と。

佛言はく『族姓子よ、今當に汝が爲に一一分別すべし。有情の物を無情に至らしめ、無情の物を有情に至らしむ、善く之を思念せよ、今當に汝が爲に說くべし。轉輪聖王の彼の有形有情の衆生を觀るが如きは、愛して樂しむ者は未だ捨離する能はず、永く存して終に變易なからしめんと欲し、自ら己身を念じて王の聖位を受け、但其の福のみを覩て磨滅を覩ず。是を無形の物を有情ならしめんと欲すと謂ふ。善男子善女人の已に道迹を成ぜし如きは、恒に自ら思惟す、我れ今捨つるが故に復た愛樂せず、此の形を滅して識に染するなからんと欲す。是を有形にして情を滅すと謂ふ。』と。

遇ひたてまつる。彼に從つて三禪慧を受け、今に至りて方に乃ち之を得たり。』と。

佛、來會者に告げたまはく、『爾の時の吉滿國王とは豈異人ならんや。斯の觀を造すこと莫れ。何を以ての故に。爾の時の吉滿國王は、今の我が釋迦文佛如來至眞等正覺なればなり。是れ彼より已來、今乃ち此の三禪を獲て、本行自ら成佛して道場に坐するを致す』と。

爾の時に世尊、復た頌を說いて曰はく。

我が積みし功德を念ずるに　無數佛を經歷せるも　諸の塵勞に遭遇して　未だ自ら拔濟する能はざりき。」　其の間に復た恒沙の無數佛を供養し　妻子國財もて施すも　未だ此の三法を獲ず。」　後、光明尊に遇ひて　始めて此の尊慧を得、　其の間に淨行を修し　始めて三禪法を寤る。」　澹然として憂畏なく　生なく染汚なく　衆相自ら嚴飾す　故に人中の尊と號す。」　我が平等の慧に由つて　衆の想著を起さず　此の天世人を化して　三界の尊を典領す。」

爾の時に世尊、此の偈を說き已る。時に座上に百千億の衆生あり、皆無上正眞道の意を發す。復た諸天世人あり、隨所に道を念じて各自ら成就す。爾の時に菩薩あり、名けて淨と曰ふ。佛に白して言さく、「夫れ轉輪聖王の四天下を典るや、便ち能く七寶を具足し、然る後乃ち名けて轉輪聖王と爲す、如來至眞等正覺に七法度無極あり、然る後乃ち名けて至眞等正覺と爲す。今問ふ、如來の七法を有形と爲すや無形と爲すや』と。

佛言はく、「止みね止みね族姓子よ、吾れ今汝が機辯を解す。族姓子の問ふ所の如くんば、如來の七法は則ち形あることとなし。何を以ての故に。此の法は甚深にして窮盡すべからず、但、衆生の爲の故に窮盡あるを現ずるのみ、然れども此の七法は窮盡あることとなし』と。

爾の時に淨菩薩、佛に白して言さく、『轉輪七寶は復た形ありや、形あることなきや』と。

佛言はく、『亦有形有情なり、亦有形亦無情なり。云何が有形有情なるや。玉女寶・象寶・馬寶・典藏寶・典兵寶、是を有形有情と爲す。云何が有形無情なるや。輪寶・珠寶、是を有形無情と爲す。』と。

[三]の深要を鑿むるなり、　二を現在慧と爲し　道觀是を三と謂ふ。」　能く此の義趣を盡すは　三禪の無量行なり。此れ亦不可思の究盡三法行なり。」　又恩愛の本を知りて　漸漸轉た定に入り　既に師より受け　後乃ち道覺を成ず。」　或は三千世を現ずること　人の掌に珠を觀るが如く　一一淨觀に入りて　諸の塵勞を洗浴す。」　若し人[四]定を圖度するに　斗斛を以て量らんと欲せば此の心を建つ可しと[五]雖も　豈當に此の理あるべき。」　心念に邊涯なく　生生に息あるなきこと水の海に趣くが如し　增減あるを見ず。」　況や人の心の本根原を量ることを得んと欲し　心の所念を尋ねんと欲するも豈に當に此の理あるべき。」　聖人の降り示現して世に出づる所以は　故と空を量度し斛斗の量を知らしめんと欲すればなり。」　念の生生を分別して　前後及中間に　一一悉く能く知れば　生死の本を斷種す。」　人心は一類に非ず　行の若干種を造る　自ら本際を墜墮して　遂に自ら淵に陷る。」　過去の諸の恒沙の諸法は悉く同等なり。　皆三禪行に由つて無上道を成ずることを得。」　將來の諸の如來も　亦當に此の行を執して　諸の衆生を安處し　倶に同じく道覺を成ずべし。」　我が今成佛して　此の諸の世界に王たるが如きは、　亦三世の慧に由つて　無上道を成ずるを得たり。」

爾の時に世尊此の偈を說き已つて、便ち善男子善女人に告げたまはく、『過去無數恒沙劫中に佛ありて、出現まします、名けて見無如來・至眞等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、佛、世尊と號したてまつる。亦此處に於て成佛したまふ。時に國王あり、名けて吉滿と曰ふ。此に於て治化せり、人民熾盛に、五穀豐熟し、七寶成就す。所謂七寶とは珠寶・輪寶・玉女寶・馬寶・象寶・典藏寶・典兵寶なり。復た千子あり、多伎勇悍にして六藝備具す。爾の時に吉滿大王、年既に衰末にして王位を捨て、彼の如來至眞等正覺に從つて梵行を淨修せんと欲し、卽ち王位を授けて第一太子に與へ、便ち見無佛の所に詣り、梵行を求修し、彼の佛に追尋して、十二年中此の三禪を修す、時に猶ほ未だ一句の義をも解せず。復た彼の佛に從つて世を去つて已來、中間二十大劫に佛なし。後に佛の出づるあれば、復た彼の佛に詣りて梵行を修す。是の如くして十二億那術の諸佛を經歷し、一一の諸佛の梵行を淨修したまふ所、復た彼に從つて來りて無數の諸佛を供養したてまつり、久久にして後乃ち光明如來至眞等正覺に

【三】深。麗本に染に作り三本宮本に深に作る。
【四】定。三本宮本には空に作る、
【五】雖。恐らくは雖字の誤字か。

巻の第六

【一】無量逕品第十八

佛告げたまはく『善男子善女人の三禪行を奉持し修習する者は、便ち能く諸善功德を具足することを獲、諸の佛國に遊んで諸佛世尊を供養し承事す』と。

爾の時に世尊、大衆中に在して、便ち斯の偈を說きたまふ。

過去の恒沙の佛は　皆三禪法に由れり　無相不願の法は　乃ち聖律行に應ず。」　三禪根本の法は　自ら泥洹を得るを致す　正使無量に誦するも　未だ其の法を盡す能はず。」　若し一士夫をして住壽無量劫ならしめ　中に於て宣說せんと欲するも　三禪の本を盡さざらん。」　自ら過去識を觀ずるに　意の能く宣ぶる所に非ず　未來識も亦然り　識有るに非ず無きに非ず。」　無形にして見る可からず、然れども生死病を種ゆ　九地法を思惟して　後乃ち覺寤するを得。」　梵行清淨の法は　如來敎を擁護す　一一分別せんと欲するも　未だ如來身を暢べず。」　三世無等の尊　有の諸の欲網を破り　牽連の諸の縛著　永く盡きて餘なし。」　世を觀ずるに諸に變あり　生生常に停まらず、況んや識本の身の六窠窟を現ずるを知らんと欲するをや。　本と我れ有を造らず、　有に染すれば乃ち垢を生ず。　皆三禪法にて　乃ち道樹下に坐するに由れり。」　若し族姓子あり　施心して量計せんと欲し　如來身を分別するに　【二】未だ悉く毫毛をも知らず。」　過去の諸の法界は　一一不思議なり、　斯れ此の三禪に由りて　乃ち名號を稱するを得たり。」　若し識本を計せんと欲し　有法に非ずと分別せば　所趣無數に變じて　乃ち三禪行に應ず。」　我が生既に安く　亦能く衆人を安んず　然れども人の思想多し　我れ導引して知らしめん。」　我れ本等定に從って　行觀もて三禪を覺る。　有地の識想に非ず　過去行を超越す。」　生本と我人よりして　流轉して五道に趣く　能く一生の垢を盡して　乃ち三禪に應ずと謂ふ。」　究竟するに三法あり、　審かに本

【一】逕。宮本宋本經に作り、明本にはなし。
【二】麗本は未悉如に作り、宋宮二本は未悉如に作り、元本は未悉知に作る。今、元本に從ふ。

法を知るなり。二には神足もて未來法を知るなり。三には神足もて現在法を知るなり。若し善男子善女人、此の三法を具すれば、便ち能く具足して道場に至ることを得。云何が神足もて過去法を知るや。是の九地に於ける善男子善女人は過去法を知ること虛空想の如く、過去の衆生の有欲怒癡染汚心の者、無欲怒癡不染汚心の者を分別し、一一分別して所著なし。是を神足もて過去法を知ると謂ふ。云何が神足もて未來法を知るぞ。是の九地に於ける善男子善女人は未來受形の衆生を知り、有欲怒癡染汚心の者と無欲怒癡不染汚心の者とを一一分別して所著なし。是を神足もて未來法を知ると謂ふ。復た次に九地の善男子善女人は、現在一切の衆生の有欲怒癡染汚心の者と無欲怒癡不染汚心の者とを知り、一一分別して所著なし。是を神足もて現在法を知ると謂ふ。是を九地に三法を成就して道場に進趣すと謂ふ。

復た次に九地の善男子善女人は、復た三法ありて道場に至ることを得。云何が三と爲す。一に身淨、二には口淨、三には意淨なり。此の三法を具して道場に至ることを得。云何が身淨なる。身已に無量の德行を越過し、本行已に滅して更に身行を造らず、身身通達して罣礙する所なし。是を九地の菩薩の身淨と謂ふ。云何が口淨なる。無量敎を出して未だ曾て甚深の妙藏を虧損せず。是を口淨と謂ふ。云何が意淨なる。染著を除去して塵垢を受けず。是を意淨と謂ふ。』と。

爾の時に月光照菩薩、便ち斯の偈を說く。

「身淨うして瑕穢なく　內外に所染なし　德高うして等侶なく　永く欲怒の名を滅す。」　口淨うして諸敎を演べ　諸の過失を漏さず、　乃至滅度を取りて　口敎に窮りあることなし。」　意淨うして貪著を除き　慈愍に增減なし　生を無量中に受け　不寤者を覺寤せしむ。」　九地に法界を過ぎて　有に非ず亦無ならず　此等の善男子は　已に如來の境に入る。」　我れ本と無量世より　學を勤め師侶を追ふも　由ほ未だ此の行を履まず　況や餘の墜落せる者をや。」　行を守りて所著なく　一を積みて作佛を得　行過して三界を出で　人中に師子吼す。」　是を九地の善男子善女人、三法を成就すと謂ふ。

を善男子善女人、九地中に於て三禪を成就すと謂ふ。復た次に九地の善男子善女人、當に復た三禪行を修し坐道場に至り違失せざるべし。云何が三と爲す、一には觀、二には行、三には本なり。若し三禪を成就せば便ち能く具足して道場に至ることを得。云何が觀と爲す。法界を分別し衆の根本を知りて衆相を莊嚴する、是を謂つて觀と爲す。云何が行と爲す。佛樹に往詣し身の色相を現ずるも諸漏已に盡きて塵垢の染汚する所と爲らず、諸佛如來の常行したまふ所の四は常法に非ず。是を謂つて行と爲す。云何が本と爲す。菩薩摩訶薩自ら念ずらく、我れ今弘誓して已に備はる、當に衆生をして此の弘誓を備へしむべしと。是を謂つて本と爲す。善男子善女人の此の三行を具する者は、便ち能く具足して道場に至ることを得。復た次に善男子善女人復た當に三禪を具して道場に至ることを得べし。云何が三と爲す。一には空空、二には空想、三には空識なり。若し此の三空を具すれば便ち能く具足して道場に至ることを得。云何が空空と爲す。所謂空とは內法空外法空を觀じ、一世界二世界乃至無數阿僧祇世界を觀ず。是を謂つて空法と爲す。云何が空想と爲す。便ち定意に入りて盡く世界を觀じ、亦念に有空無空、有我無我を生ぜず、是を謂つて空想と爲す。何をか空識と謂ふ。定意に入る時復た是の觀を作す、吾れ今衆生の念を以て更に他想なし、當に衆生を淨むること我の如く異なからしむべし。然れども此の衆生に無量識あり、吾れ今當に何の識を以て彼の衆識を化すべき。吾れ今當に空識を以て此の世界をして皆悉く空の如くならしめ、彼の衆生をして識著を分別せしむべし。是を善男子善女人、九地中に於て此の三禪を具すと謂ふ。復た三法あり修行すべき所なり。云何が三と爲す。一には世界を分別す、二には衆生界を分別す、三には第一義を分別す。若し此の三法を修すれば便ち能く道場に進趣して所畏なし。云何が世界を分別す。盡く能く遍ねく一切諸界を觀ずるに淸淨者不淸淨者あり、皆悉く了知して亦錯謬なく、意に隨つて選擇して佛土を修治す。是を世界と謂ふ。云何が衆生界なる。復た當に遍ねく一切衆生を觀じ常に權便を以て之を敎化し、弘誓曠大の心を捨てず、劫數を經歷して以て難と爲さざるべし。是を善男子善女人、衆生界を成就すと謂ふ。云何が第一義を成就する。一一衆生の義趣を分別するに悉く空に歸す、我人壽命なく亦一二なし、一切法に至るも亦復た是の如し。是を第一義を分別すと謂ふ。若し善男子善女人、三法を成就せば、便ち能く具足して道場に進趣す。復た三神足法あり。云何が三と爲す。一には神足もて過去

なるべきや、內未來身あるべき、內未來身なかるべきやと。是を善男子善女人、七地中に於て三禪を成就すと謂ふ』と。

佛復た月光照に問うて曰はく、『云何が善男子善女人、七地中に於て他の內過去身を觀ずるに過去身ならざるか、他の內未來身は未來身ならざるか』と。答へて曰く、『善男子〔善〕女人、他の內過去身を觀ずるに他の內過去身あるに非ず、他の內未來身を觀ずるに他の內未來身あるに非ず』と。

佛言はく『止みね止みね、族姓子よ、汝が境界に非ず。何を以ての故に。七地の善男子善女人、他の內過去身を觀ずるに亦他の內過去身あらず、他の內未來身を觀ずるに唯だ他の內未來身あるなし。汝何を以ての故に善男子善女人、七地中に於て內未來身を成就すと說く』と。

月光照菩薩、復た佛に白して言さく『我が他の內未來身を觀ずるが如きは、有に非ず無に非ず、是の故に成就すと說く』と。

佛復た月照光菩薩に問うて曰はく、『云何が八地の善男子善女人、八地中に於て三禪を成就するや』と。答へて曰はく、『若し善男子善女人、端坐思惟す、內過去身を觀ずるに內過去身まく、內未來身を觀ずるに內未來身なし、他の內過去身を觀ずるに內過去身なく、他の內未來身を觀ずるに內未來身なし。或は時に善男子善女人、自ら內過去身を觀ずる時、有に非ず無に非ず猶ほ虛空の如く、未だ內未來身を滅する能はず。或は時に內未來身を觀ずる時、未だ內過去身を滅する能はず。或は時に他の內過去身を觀ずる時、未だ他の內未來身を滅する能はず。他の內未來身を觀ずる時、未だ他の內過去身を滅する能はず。是を善男子善女人、八地中に於て三禪を成就すと謂ふ』と。

佛復た月光照菩薩に問うて曰はく、『云何が九地の善男子善女人、九地中に於て三禪を成就するや』と。答へて曰はく、『若し善男子善女人、端坐思惟して內を觀ず、過去身ありや、過去身なきや。自ら內未來身を觀ず、未來身ありや、未來身なきや。善男子善女人、此の觀を捨て已つて復た他の內過去身を觀ず、過去身ありや過去身なきや。他の內未來身を觀ず、內未來身ありや、內未來身なきや。此の觀を捨て已つて復た是の思惟を作す、我れ本と內過去身なく過去身なし、本と內未來身なく未來身なし、何に況んや當に他の外過去身あり過去身なかるべき。他の外未來身に未來身なし、執心牢固にして本誓を捨てず。是

來身を觀ずるに、未來身ありや未來身なきや。復た自ら思惟すらく、我れに初地二地三地の過去身なし、亦未來身なし、何に況んや當に四地內過去身あるべけんや、四地內に過去身なし、四地內に未來身〔あり〕、四地內に未來身なし。是を善男子善女人、四地中に於て三禪を成就すと謂ふ』と。

爾の時に世尊、復た月光照菩薩に問うて曰はく『云何が五地の善男子善女人、五地中に於て三禪を具足するや』と。答へて曰く『若し五地の善男子善女人、端坐思惟して內に過去身を觀ず、過去身ありや過去身なきや。內に未來身を觀ず、未來身ありや未來身なきや。復た自ら思惟すらく、我れ今已に一地二地乃至四地を捨つ、四地中に於て內に於て過去身を觀ずるに過去身なく、內に於て未來身を觀ずるに未來身なし。復た此を捨て已つて他の內過去身を觀ずるに過去身なく、他の內未來身を觀ずるに未來身なし、況んや我れ五地に於て內に於て過去身ありや過去身なきや、他に於て未來身を觀ずるに未來身なきや、是を善男子善女人、五地中に於て三禪を具足すと謂ふ』と。

世尊復た月光照菩薩に問うて曰はく『云何が六地の善男子善女人、六地中に於て三禪を具足するや』と。答へて曰く『若し六地の善男子善女人、端坐思惟して我れ無身なりと觀じ無我身中に於て內を觀ず、過去身ありや、過去身なきや、內に於て未來身を觀ず、未來身ありや、未來身なきや。是を六地の善男子善女人、六地中に於て三禪を成就すと謂ふ。六地の善男子善女人、無我身を捨て已つて他に於て內を觀ず、過去身ありや、過去身なきや。他に於て內を觀ず、未來身ありや、未來身なきや。復た自ら思惟すらく、他に於て內に過去身を觀ずるに過去身なく、他に於て內に未來身を觀ずるに未來身なし。是を善男子善女人六地中に於て三禪を成就すと謂ふ』と。

佛復た月光照菩薩に向うて曰はく『七地の善男子善女人、云何が七地中に於て三禪を成就するや』と。答へて曰はく『若し善男子善女人、閑靜處に在つて端坐思惟し、內に過去身を觀ず、過去身ありや、過去身なきや。復た內に未來身を觀ず、未來身ありや、未來身なきや。善男子善女人復た是の念を作す、我れ今已に一地を捨つ、內過去身に過去身なく、內未來身に未來身なし、乃至六地の內過去身に內過去身なく、內未來身に未來身なし、云何が當に七地中に於て內過去身あるべき、內過去身

答へて曰はく『猶ほ二地菩薩の無上至眞等正覺を發すが如く、内身を見ず外身を見ず、係念して前に在り、便ち自ら思惟すらく、我れ今内身に内過去身ありや、内過去身なきや、内未來身ありや、内未來身なきやと。此の觀を捨て已つた復た更に思惟すらく、我れ今已に内身なく已に外身なし、云何が内身に於て内過去身を求め内未來身を求めんやと。是を二地の菩薩、已が内外身に於て三禪を具足すと謂ふ。爾の時に二地の菩薩、復た是の念を作す、我れ今内外身に於て悉く皆分別す、當に復た次に觀ずべし他の内外身の法は我と異ありや不や、轉た自ら前進して他の内外身を觀ずるに過去身ありや、過去身なきや、未來身ありや、未來身なきやと。是の善男子善女人の二地に在る者は、他に於て過去身を觀ずるに過去身なく、他に於て未來身を觀ずるに未來身なし。是を二地の善男子善女人、他の過去身に於て三禪を成就すと謂ふ』と。

世尊復た月光照菩薩に問うて曰はく『云何が三地の善男子善女人は三地中に於て三禪を成就するや』と。

答へて曰はく『若し三地の善男子善女人、端坐思惟す、内に於て過去身を觀ずるに過去身ありや、過去身をきや、内に於て未來身を觀ずるに未來身ありや、未來身なきや。復た自ら思惟すらく、我れ初地の内過去身なきや不や、過去身も亦復た初地の内未來身なきや不や、未來身に亦復た初地の他の内過去身なきや不や、過去身も亦復た初地の他の未來身なきや不や、未來身に復た觀ず二地の内に過去身を觀ずるに、過去身ありや過去身なきや、内に未來身を觀ずるに、未來身ありや未來身なきや。復た自ら思惟すらく、我れ二地の内過去身なきや不や、過去身も亦た復た二地の内未來身なきや不や、未來身も亦復た二地の他の内過去身なきや不や、過去身も亦復た二地の他の未來心なきや不や、未來身は我が今、我が三地中の内過去身に内過去身なしと觀ずるが如し。復た自ら内未來身を觀ずるに内未來身なく、自ら地中に於て他の内過去身を觀ずるに他の内過去身なく、他の内未來身を觀ずるに他の内未來身なし、況や當に我れ身あり身なかるべけんや。是を善男子善女人、三地中に於て三禪を具足すと謂ふ』と。

爾の時に世尊、復た月光照菩薩に問うて曰はく『云何が善男子善女人、四地中に於て三禪を具足するや』と。

答へて曰く、『若し四地の善男子善女人、端坐思惟して内に於て過去身を觀ずるに、過去身ありや過去身なきや。内に於て未

身に於て過去を觀ずと謂ふ。未來も亦復是の如し』と。

爾の時に世尊、月光照菩薩に問うて曰はく、『阿那含は過去法を獲すや、未だ過去法を獲ざるや』と。

答へて曰はく、『阿那含は過去法を獲るも未だ過去法を盡さず。何をか過去法を獲るも未だ過去法を盡さずと謂ふや。然るに阿那含の身は過去に在り法は未來に在る、是を過去法を獲るも未だ過去法を盡さずと謂ふ。又復た阿那含の身は未來に在るも法は已に過去なり、此れ亦過去法を獲るも未だ過去法を盡さず。復た次に善男子善女人、若し阿那含は身未だ過去ならず身未だ現在ならざるも、法は已に過去なり法は已に現在前なり。是を阿那含は過去法を獲るも未だ過去法を盡さずと謂ふ』と。

世尊復た月光照菩薩に問うて曰はく、『斯陀含は過去法を獲、過去法を盡すや』と。

答へて曰はく、『斯陀含は過去身ありと雖も過去法を獲ず過去法を盡さず』と。

『云何が斯陀含は過去身あるも過去法を獲ず過去法を盡さざるや』と。

答へて曰はく、『斯陀含は過去身已に滅し過去法未だ盡きず、未來法は自ら觀じ已つて過去法亦無所有なり。阿那含に過去身なく過去法あるが如し。是の故に斯陀含は爾らず。猶ほ明鏡に其の面像を觀るに面面相見るが如くならざるが如し。是の故に斯陀含は如かず、阿那含識は純錬金の如く、斯陀含識は未錬金の如し。故に差別あり』と。

佛復た問ひたまはく、『云何が族姓子、汝が言ふ所の如くんば、阿那含は過去法を獲て過去法を盡し、未來法を獲て未來法を盡す、已に所を成就するも未だ法を成就せざるや』と。

答へて曰はく、『然らず。錬金と爲すと雖も猶ほ未だ器を成さす、金の名あるべきも未だ形像あらず』と。

佛言はく、『善い哉善い哉、族姓子、善く此の義を說きたり。阿那含は過去法なくして過去法を盡し、未來法なくして未來法を盡すが如く、今、阿羅漢の如きは過去法を獲て過去法を盡すや、未來法を獲て未來法を盡すや』と。

答へは曰はく、『過去法を獲るも未だ過去法を盡さず、未來法を獲るも未だ未來法を盡さず。是の故に差別あり』と。

爾の時に世尊、月光照菩薩に問うて曰はく、『云何が二地の菩薩、三禪行を具するや』と。

佛言はく『有身なるや無身なるや、何を以ての故に說かざる』と。
答へて曰く『有身なり』と。
佛復た問うて曰く『身は法身と爲すや四大身と爲すや』と。
答へて曰く『是れ父母身なり』と。
佛言はく『汝今父母身を以て、云何が三禪を成就する』と。
月光照菩薩、佛に白して言さく『我が如きは初に如來至眞等正覺を求め、樹主下に坐して畏なく亦恐懼心なく、便ち三界の然熾法を念じて、卽ち自ら思惟すらく「過去の諸佛は悉く般泥洹し、爲に能く幾所の衆生、過去の須陀洹、過去の斯陀含、過去の阿那含、過去の阿羅漢、過去の辟支佛を度したり」と。復た自ら思惟すらく「未來に於ても亦復た是の如し」と。是を一地の菩薩、一禪行を具足すと謂ふ。我が如き一地の菩薩、三界を觀見して、一地に本を行じて羅漢辟支佛の上に越次す。是を一地の菩薩、二禪を成就すと謂ふ。若し一地の善男子善女人、內外を分別して身の三空を守り、法教を演說して差錯あることなければ、是を一地中に三禪を成就すと謂ふ』と。
佛復た月光照菩薩に問うて曰はく『汝何ぞ斯陀含阿那含の三禪を說かざるや』と。
答へて曰く『若し善男子善女人、已に見地に在りて便ち自ら思惟す「已身の內過去身內未來身亦此の身あらず、亦佛想なく亦法想なく亦身想を見ず」。是を內過去身に三禪を具足すと謂ふ。云何が內未來身に三行を具足するや。爾の時に斯陀含復た自ら內外を觀じて諸の塵勞を捨て、三禪地に於て係念して忘れず。自ら證を獲と雖も自相を壞せず、猶ほ法法自相にして自ら名身・句身・味身を分別するが如し。復た外の無量の衆生を觀じて佛想を興さず、佛想を成就すれば平等無二にして、悉く淸淨にして往來を見ず近遠をあることなからしむ。是を斯陀含、內未來身に於て三禪を具足すと謂ふ。復た次に善男子善女人、端坐思惟して以て不還道を得、便ち自ら分別す、吾れ今定もて受證の地に在り、諸法自然の相を壞かず、審に自ら證明す、吾れ已に一を過ぎ已に二過ぎ已に三を過ぎてた復往來せず、生死に處在して心意澹然として移轉す可からず。是を善男子善女人、已

內過去身を觀ずるに、本と何に從つて生じ復た何に從つて滅するや」と。復た自ら思惟して咄嗟す、「此の身は本と所生なく本と所滅なし」と。善男子善女人、卽ち此の身を捨て已つて復た更に求觀す、「我が今此の身は何に從つて生ずと爲すや何に從つて滅すと爲すや。未來身は亦復た然るや」と。便ち自ら思惟す、「內未來身は何に從つて生ずと爲すや何に從つて滅すと爲すや」と。便ち自ら念を生ず、「此の內未來身も亦生あらず亦滅あらず」と。是を善男子善女人、學地に於て內身に三禪を具足すと謂ふ。云何が學地に內身を觀じて他身に於ふ三禪を具足するや。是の時に善男子善女人、此の身を捨て已つて自ら外身を觀じ、內過去身は本と何に從つて生じ本と何に從つて滅するや、[六]便ち自ら思惟す。他の內過去身は何に從つて生ずと爲すや何に從つて滅すと爲すやを咄す。復た自ら思惟す、「此の內過去身は亦生ぜず亦滅ぜず」と。復た此を捨て已つて更に求觀す、「此の內過去身は已に復た生ぜず、已に復た滅せず。此の內未來身は何に從つて生ずと爲すや何に從つて滅すと爲すや」と。便ち自ら念を生ず、「此の內未來身は亦生ぜず亦滅せず」と。是を善男子善女人、他身の內過去未來身に於て三禪を具足すと謂ふ』と。

佛、月光照菩薩に告げて曰はく、『云何が無學地の善男子善女人、三禪を具足するや』と。

月光照菩薩、佛に白して言さく、『善男子善女人、漏地に趣いて無漏法を斷ぜんと欲して、便ち自ら思惟す。結加趺坐して內に自ら思惟す、「此の內過去身は亦生ぜず亦滅せず」と。爾の時に無學の善男子善女人、此の觀を捨て已つて復た更に思惟す、「我れ今已に內過去身を觀ず、當に復た我を觀ずべし、我が過去身は亦滅を見ず亦生を見ず、亦劫あることなく、亦生死なく亦刹土なし。」と。是を善男子善女人、無學地に於て三禪を具足すと謂ふ。』と。

世尊復た月光照菩薩に問うて曰く、『云何が一地の菩薩は諸行を盡さずして三禪を具足するや』と。

答へて曰く、『無身觀を以て身念を觀じ、無念本を以て念行を失はず、聲を以てせずして音響を受け、初菩薩地を過ぎ三たび信地を過ぎ三たび一切諸法を越ゆ。是を善男子善女人、三禪を具足すと謂ふ』と。

世尊、月光照菩薩に問うて曰く、『云何が族姓子、汝の一地の三禪を見ざるや』と。

答へて曰く、『有界を見ず、是の故に說かず』と

【六】便の字大正藏、使守に作るも、恐らくは便の誤なるべし。

し十地の禪に至るや』」と。

月光照菩薩、佛に白して言さく『世尊、我の如きは如來の所聞に從る、其の中の諸事諸有、欲界の衆生の若は男子女人、初發意より乃至成佛まで初めより道地に在りて未だ菩薩位に處らず、中に便ち三禪を得て過去禪あり未來禪あり現在禪あり。是れ善男子善女人、此の三禪を得て、正に自ら身中の過去身、身中の未來身、身中の現在身を知しと雖も、未だ他身中の過去身を知る能はず、未だ他身中の未來身を知る能はず、未だ他身中の現在身を知る能はず。此の如し善男子〔善〕女人、云何が身中の過去身を知る。是に於て世尊、若し坐禪の時、便ち自ら身を觀じて不淨想を起し、便ち自ら思惟して、我が此の身を咄して磨滅の法と爲し、一意一念に唯不淨を知るも、未だ其の趣く所を知らず。爾の時に善男子善女人、復た自ら思惟すらく「我れ今此の身を捨て已つて當に更に求觀すべし、我が今身の如きは無我を解知したり、然も外物も復た是の如く、一一に分別するに悉く無所有なりと知る」と。是を現在身に於て便ち能く過去未來を思惟すと謂ふ。復た次に善男子善女人、自ら己身外物を觀じ已つて、此の心を捨てて當に更に求觀すべし、我が今此の身は悉く皆分別するに非有非無なり、彼の衆生は我が身の如くなるや不や、便ち外人內の過去身を分別し、此の身の磨滅すること久しからざるを咄嗟し、便ち不淨想を起す。已に不淨想を生じて外人內の過去身は己の如く異るなきを知る。若し善男子善女人、此の外人內の過去身を捨て已つて復た當に觀を生ずべし。云何か此の人の內の過去心は、何に從つて生ずと爲し何に從つて滅すと爲すや。復た自ら思惟して、且らく外人內の過去心を捨て、便ち復た外人內の未來心を思惟す、[四]咄哉、此の身は何に從つて來ると爲し何に從つて滅すと爲すや。是を善男子善女人、菩薩位に在る者、便ち能く三禪の行を具足すと謂ふ』と。

佛復た月光照菩薩に向うて曰く『云何が學地に三禪法を修するや』と。

月光照菩薩、佛に白して言さく『若し善男子善女人、已に信地に在れば名けて學人と曰ふ。便ち前進して所趣の道に向はんと欲し、即ち六靜處若は樹下塚間無事及び虛空露[五]靖に詣り、便ち能く結加趺坐くて端心に思惟し、自ら三禪行法を具足せんと欲す。是の時に善男子善女人、內に自ら思惟すらく「自ら

【四】嚴本には咄哉と作し三本宮本には咄我に作る。
【五】靖の字元明二本は地に作り宮本は精に作る。

八明慧を分別すれば大衆中に在つて畏懼する所なきこと、猶ほ勇健國王に所典の領あり、諸の親附者ありて皆王教を承け闕失あることなきがごとし。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。聖慧法教を得て法印を以て封ぜらるれば、則ち能く悉く無量の慧門を備ふ。云何が無量の慧門と爲す。諸佛は不可思議なり、諸佛の剎土は不可思議なり、諸法は不可思議なり、諸法の法性は不可思議なり、比丘僧は不可思議なり、僧法は不可思議なり、僧剎は不可思議なり。是の如き法行に復た四事あり。云何が四と爲す。一には本と無數より劫限を經歷して、恒に一意を爲して錯謬せず。若し善男子善女人あり、一行本を守つて有盡無盡を知り、諸佛の有盡無盡を知れば、乃ち能く平等の道行を具足す。』と。

爾の時に菩薩あり、月光照と名く。卽ち座より起ちて佛に白して言さく、『世尊、我れ今、有盡無盡の諸法門行を說くに堪任す、云何が菩薩摩訶薩、四法本に於て五行を具足して、便ち能く盡く如來の根本を知るぞ。云何が四と爲す。一には世に在つて盡く去就を知り道法世法を分別する。是を一法を成就すと謂ふ。復た無形色相定意を以て諸の國土を感じ、彼の國土に於て衆生を敎化し無爲の敎を示現する。是を善男子善女人、二法を成就すと謂ふ。復た次に善男子〔善〕女人、已身の法に於て自ら身を見ず、能く無量の衆生を度し、終に衆生の法界を捨てざる、是を三法を成就すと謂ふ。復た次に善男子〔善〕女人、如來の三法の行本を分別す、云何が三法の行本と爲す。一には經行なり。去るべくして去を知り、來るべくして來を知り、坐すべくして坐を知り、意を明想に係けて心、憒亂せず。二には坐禪なり。若し座に詣り結加〔跏〕趺坐せんと欲せば、便ち衆想を去り一意一心にして其の身を轉ぜず。終竟に禪定にしては初めより錯亂せず。若し復た興作して諸の善事を施せば、所造必ず成じて他餘の想なし。是を三法中に於て四法を成就すと謂ふ。復た次に善男子〔善〕女人、過去當來現在に於て、盡く當生未生已生を知り、便ち能く中に於て師子吼を作して本行の法を失はざる、是を五法を成就すと謂ふ。復た次に善男子〔善〕女人、菩薩摩訶薩は當に復た如來の三行を覺知すべし。如來の禪定は世俗禪に非ず、亦羅漢辟支佛の禪に非ず、亦一地二地乃至十地の禪に非ず。何を以ての故に。餘の禪は限あれども如來禪は亦限あることなければなり』と。

爾の時に世尊、月光照菩薩に告げて曰はく、『云何が族姓子、世俗禪と爲すや、學禪と爲すや、無學禪と爲すや、一地より乃

答へて曰く『本と形あることなく本と生あることなし。苦を見ず非苦を見ず。是を本滅と謂ふ。言ふ所の起滅とは、我心現在して能く此の心をして潜伏して起らざらしむ。是を起滅と謂ふ』と。

佛言はく『云何が族姓子、過去心現在心なるや、過去心は現在心に非ず、現在心は過去心に非ず。云何が本滅起滅なるや』と。

答へて曰く『本とは無滅、起とは無滅なり』と。

佛言はく『族姓子、本滅起滅は何に由つて生ずるや』と。

答へて曰く『無生の故に生ず』と。

爾の時に世尊、本滅菩薩を歎じて曰はく『善い哉、善い哉、族姓子。乃ち能く如來の前に於て快く是の言を作す。所謂死苦とは死せんと欲する時に臨んで、捨身受身して中間に停住し、未だ當來過去現在に趣く所を知らず。爾の時に當つて神便ち恐怖す。是を死苦と謂ふ。是を菩薩、十八明慧に於て十四法を成就すと謂ふ。復た次に族姓子、若し男子女人、無我・苦・空・非身を分別せば、此の四行を具して便ち能く如來莂を受けん。云何が四と爲す。是に於て族姓子、若し善男子善女人、我を無我、非有色を非無色と計し、無所有を解了する者、是を無我と謂ふ。若し復た善男子善女人、法界を思惟するに苦に根本なし、苦あるに非ず亦生滅あらずと說く。是を苦無苦を分別と謂ふ。衆生の無量想の虛空界に遍滿するが如く、遍ねく此の想は本と識の所生にして皆空に盡くことを知る。是を乃ち空と爲す。云何が非身と爲すや。所謂非身とは我れ我が分別を得て、我に我なく、見に見なく、聞に聞なく、有見に非ず、有聞に非ず。是を非身と謂ふ。是を菩薩、十八明慧に於て十五法を成就すと謂ふ。復た次に族姓子、[三]我が如の如く諸佛如と諸佛法如と異らず、不有佛法不有如も、亦復異らず。是を菩薩、十八明慧に於て十六法を成就すと謂ふ。復た次に族姓子、若し善男子善女人、如來至眞等正覺は本行願に於て等分衆生の三毒の多少を知り、三毒三淸淨法を見ず。是を菩薩、十八明慧に於て十七法を成就すと謂ふ。復た次に族姓子、若し善男子善女人、自ら過去の無數恒沙劫を念じ、復た現在の無數恒沙劫を知り、復た當來の無數恒沙劫を知り、中に於て一一分別して無所有なり、是を菩薩十八明慧に於て十八法を成就すと謂ふ。若し善男子善女人、十

【三】如我如諸佛（法）如與諸佛法如不異不有佛法不有如亦復不異。―この一節訓じ難し。三本宮本には（法）字なし。

男子善女人、若しは有形無形、若しは有聲無聲、中に於て悉く無所有なりと分別す、是を善男子善女人、十八法に於て八法を成就すと謂ふ。復た次に善男子善女人、七觀所生の四諦聖法總持十八空行を知る、是を善男子善女人、十八法に於て九法を成就すと謂ふ。復た次に善男子善女人、無形法性は亦有生に在り亦無生に在るを知る。中に於て悉く無所有なりと分別す、是を菩薩、十八明慧に於て十法を成就すと謂ふ。復た次に善男子善女人、無量の世界を觀ずるに起あり滅あるを知る、猶ほ幻師の鏡中の像を觀るが如し、是を菩薩、十八明慧に於て十一法を成就すと謂ふ。復た次に善男子善女人、復た當に七苦の根本を知るべし。云何が七と爲す。一には此の心彼より出でず、彼の心亦此に在らざるを知る。二には彼の苦心も無我無人なり、此の苦心も無我無人なり。三には諸佛の世界は思議すべからず、如來眞至等正覺は盡く能く彼の量を度る。四には若し善男子善女人、内に自ら苦空非我を思惟せば、身あるを見ざること鏡の像を照すが如し。五には若し我れ受形して十身法を斷ぜば、亦十身の本と我が有に從るを見ず。六には無畏法を以て彼の受を嬈そばず、諸の教を受くることある者は心移易せず。七には觀行・無行・本行・我行・未來行・非有非不用・非無非不無、此を七苦行と號す。是を菩薩、十八明慧に於て十二法を成就すと謂ふ。復た次に善男子善女人、無量空を觀じ無量空想に於て、自ら念を生ぜず亦彼の念を見ず。何を以ての故に。無量世界は空無相なるを以ての故なり。是を菩薩、十八明慧に於て十三法を成就すと謂ふ。復た次に善男子善女人、復た常に無量の四苦を觀ずべし、云何が四苦と爲す。閻浮利内に於て無量の衆生の諸苦の原本を觀ずるなり。一には生苦、生の本末を知つて恒に胎厄を念ず、二には老苦、形異り色變りて壯意存せず。三には病苦、一大增せば則ち一病增し、四大增せば則ち四病增す。一大滅すれば則ち一病滅し、四大滅すれば四病滅す。云何が族姓子、病を起滅と爲すや不起滅と爲すや』と。

爾の時に菩薩あり、本滅と名く。前んで佛に白して言さく、『四大は本滅にして起滅に非ざるなり』と。

佛言はく、『族姓子、云何が四大は本滅にして起滅に非ざるや』と。

答へて曰はく、『本と四大なく今生本有に非ず。是の故に本滅にして起滅に非ず』と。

佛言はく、『族姓子、云何が本滅と爲し、云何が起滅と爲すや』と。

『復た次に善男子善女人、菩薩摩訶薩は復た能く盡く諸佛の設教の有定有量無量を知る。云何が族姓子、菩薩摩訶薩は諸佛世尊の此の三昧に入り、盡く諸佛所設の教の有量無量を知り、盡く能く一切諸佛の口行を說き身行を說き意行を說きたまふを知る。或は復た示現して十方世界に遊び、東方無量世界を度し所度の界を度して、東方諸佛の設教を失はず。南方無量世界を度し所度の界を度して、南方諸佛の設教を失はず、西方無量世界を度し所度の界を度して、西方諸佛の設教を失はず。北方無量世界を度し所度の界を度して、北方諸佛の設教を失はず。東北方無量世界を度し所度の界を度して、東北方諸佛の設教を失はず。東南方無量世界を度し所度の界を度して、東南方諸佛の設教を失はず。西南方無量世界を度し所度の界を度して、西南方諸佛の設教を失はず、西北方無量世界を度し所度の界を度して、西北方諸佛の設教を失はず、復た上方無量世界に遊び所度の界を度して、上方諸佛の設教を失はず、復た下方無量世界に至り所度の界を度して、下方諸佛の設教を失はず。』と。

爾の時に世尊、廣長舌を出し大光明を放つて、普ねく無數十方の世界を照し、盡く衆會をして如來至眞等正覺の甚深の設教を說き所度の界を度したまふを聞かしむ。此に十八慧明あり、是に於て族姓子族姓女、便ち能く如來の設教を具足し、能く界をして非界の想あらしめ、能く非界をして界の想あらしめ、彼の世界に於て一觀法を說く。是を善男子〔善〕女人、十八慧明に於て一法を成就すと謂ふ。復た次に善男子〔善〕女人、未來無數世の事を豫察し、及び過去現在の佛非佛、菩薩非菩薩を知る。是を菩薩十八慧明に於て二法を成就すと謂ふ。復た次に善男子〔善〕女人、過去は無量無緣無數にして、盡すも盡くるを見ず起るも起るを見ず。是を菩薩十八慧明に於て三法を成就すと謂ふ。復た次に善男子善女人、內外に四非常行を分別し、中に於て自ら觀じて身行具足する者、是を菩薩十八慧明に於て四法を成就すと謂ふ。復た次に善男子善女人、佛界は無量にして思議すべからず、便ち能く諸佛の二事を分別して、癡愛は悉く性空と知る、是を善男子善女人、十八慧明に於て五法を成就すと謂ふ。復た次に善男子善女人、若し能く一一に內外空を觀ずれば、我は彼の有に非ず彼は我が有に非ず、一一に空寂にして無所有なりと知る。是を善男子善女人、十八法に於て六法を成就すと謂ふ。復た次に族姓子、虛空は無相なれば虛空の與に相を作す可からず、中に於て自ら身は彼の空等の如しと分別する者、是を善男子善女人、十八法に於て七法を成就すと謂ふ。復た次に善

けん。」　我れ今尊神を承け、　少欲にして自ら演說す、　唯願はくは聖顏に在つて、　諸の佛藏に近づくを得ん」
と。

爾の時に力盛菩薩、此の偈を說き已つて、便ち佛に白して言さく『云何が世尊、若し分別あれば如來の十力は沮壞すべからず。云何が如來の十力は沮壞すべからざる。一には如來發意して無上等正覺を求むれば沮壞すべからず。是を菩薩の有識無識と謂ふ、復た和合を知りて彼此に本末を見ず。是を菩薩の有識無識と謂ふ。衆生の行本を觀じて自然を了り、乃ち無量本の從つて來る所を知る、是を菩薩の有識無識と謂ふ。一切諸法は本と形あることなし、癡に積由するが故に便ち此の識を生ず。此の癡を分別すれば從つて起滅する所を知らず、是を菩薩の有識無識と謂ふ。衆智を分別するに三事の行本あり。明あるに從つて還つて四顚倒に墮つ、四顚倒に於て了して幻化と爲せば、亦倒を見ず亦非倒を見ず。是を菩薩の有識無識と謂ふ。復た四事に於て衆生の本末を觀じて五行を具足する者は、尋いで能く思惟して、卽ち五事を成ず。若し善男子〔善〕女人、本と無行に於て行ずるも行迹なし、何をか五と爲す。一には念、二には轉念、三には本、四には癡、五には無盡なり。是を菩薩摩訶薩の有識無識と謂ふ。復た識法あり思議すべからず、無或は善權、人の測る所に非ず。四事行あり、諸佛の刹土を覩見するに生起滅あるも、便ち能く成就せば起滅を見ず。是を菩薩の有識無識と謂ふ。如來至眞等正覺、過去當來現在を觀じて、亦過去當來現在の根本を見ず。若し五趣に生ぜば五趣の衆生形を受け已つて、五趣を分別するを得て彼の所入に隨ふ。復た能く分別して有形根無形根を受く。若し菩薩摩訶薩已に天根を受けば龍根を受けず。然りと雖も龍根を受けんと欲して、便ち能く諸の法雨を降らす。若し善男子〔善〕女人、閱叉根を得て彼の閱叉根を離る。阿須倫根を受けて復た能く有識無識を具足す。彼の阿須倫根を捨てて彼の乾沓和根を受け、彼の根を捨て已つて便ち能く有識無識を具足す。旃陀羅魔〔摩〕休勒、人と非人も、亦復た是の如し。是を菩薩摩訶薩、法藏に通盡して思議すべからずと謂ふ』と。

無量品第十七

佛言はく『汝已に自ら識は識あることなしと說けり、今に非ず、未來に非ず、過去に非ず。汝は今是れ誰とか言ふや』と。

答へて曰く『識と言はんと欲するや、種姓生なるや』と。

佛言はく『我れ此の識の菩薩生を問ふに非ず、但識を有と爲すや無と爲すやを問ふのみ』と。

答へて曰く『識は有に非ず無に非ず』と。

佛言はく『是の如し是の如し、族姓子よ。』と。

爾の時に種姓生菩薩、佛に白して言さく『云何が世尊、今日如來至眞等正覺の如きは、識に從つて有と說き無と說くと爲すや、識に從らずして有と說き無と說くと爲すや』と。

佛の言はく『汝、何等の義を以て如來に問ふや』と。

種姓生菩薩、佛に白して言さく『向に如來問ひたまはく、「汝今、有識無識を說くや。當來今現在過去ありや、當來今現在過去なきや」と。我れ報じて曰く、「無なり、世尊、今世尊の言の如く、今當來過去識なし、我と如來と識は何所にか在らん」』と。

佛言はく『我れ已に先に說けり、有識に非ず無識に非ずと。但如來至眞等正覺の爲に、若干法を以て衆生を覺寤せしむるのみ。云何が族姓子、若し善男子〔善〕女人、此の法を體知する者は、便ち能く一切諸法を具足す』と。

爾の時に菩薩あり、名けて力盛と曰ふ。即ち座より起ち、復た佛に白して言さく、『我も亦有識無識を說くに堪任す』と。力盛菩薩、即ち佛前に於て頌を說いて曰く、

本と十力尊に從つて、　此の有無識を聞く、　賢聖八等道、　無礙慧を演暢するに、　音聲各各異り、　衆生界同じからず、　施惠に等想なし、　稱號して十力と爲す。」　若し我れ後に成佛せば、　諸の法界を分別するに、　一行無二に從はん、　唯願はくは識を說くを聽したまへ。」　道は本と我に從つて生じ、　我に由つて識を生ぜず、　計了するに思想なし、　有識無識に非ず。』　小を積みて大行に至り、　乃ち自ら覺寤を致す、　生死は量るべきに非ず、　神識豈盡すべ

別して、過去衰の過去衰に非ざるを知り、未來衰の未來衰に非ざるを知り、現在衰の現在衰に非ざるを知り、中に於て想著を起さざる者、是を有識無識と謂ふ。』と。

種姓生菩薩、佛に白して言さく、『世尊、今日、如來前に於て、音響菩薩の有識無識を說くを聞き、復た衆相菩薩の有識無識を說くを聞く。云何が世尊、言ふ所の識とは云何が識と爲すや』と。

佛言はく、『空等の如くなり』と。

種姓生菩薩、復た佛に白して言さく、『世尊、云何が空等の如きや』と。

佛言はく、『不生不滅不著斷なり』と。

種姓生菩薩、佛に白して言さく、『今、如來に識の起る所を問ひまつる、乃ち空を以て我に報ずるや』と。

佛言はく、『然らず。我が今說くところの識は、有に非ず無に非ず。故に有識無識と號す』と。

種姓生菩薩言く、『識は有相と爲すや無相と爲すや』と。

佛言はく、『識は亦有相に非ず無相に非ざるなり』と。

種姓生菩薩、佛に白して言さく、『云何が識は有相に非ず無相に非ざるや』と。

佛言はく、『本と有相ならず、亦今相に非ず。故に本識は今識に非ず、今識は本識に非ずと曰ふ。故に識は有相に非ず無相に非ずと曰ふ』と。

爾の時に種姓生菩薩、佛に白して言さく、『若し有相をして識に非ず無相をして識に非ざらしめば、何を以ての故に、識を識と說かん』と。

佛言はく、『識の起る所に隨ふ。識起れば則ち起り、識滅すれば則ち滅す。是の故に有相に非ず無相に非ず』と。

佛復た族姓子に告げたまはく、『云何が種姓生菩薩、汝今、識は有なりや』と。

答へて曰く、『無なり、何を以ての故に。無形無像にして、今有に非ず、過去有に非ず、未來有に非ざればなり』と。

有識無識と謂ふ。行執あるを見ず行執なきを見ず、諸法は一相にして悉く無悉く有なる、是を菩薩摩訶薩の有識無識と謂ふ、種姓を分別して此れは清淨識なり、此れは清淨識に非ず、我が相好成就し、彼の相好成就せずと、悉く能く觀了して無所有なる、是を菩薩摩訶薩の有識無識と謂ふ。時節を分別して、諸佛を觀見するに、此の劫に佛あり彼の劫に佛なし、佛あるを以て喜悅を懷かず、正使佛なきも亦復た感へず、是を菩薩の有識無識と謂ふ。我れ復た衆生の類の、權方便ある者、權方便なき者を觀見し、中に於て想行を起さず、是を菩薩の有識無識と謂ふ。復た衆生を觀じて其の年歲限數を知る、或は衆生の前劫よりして得度すべき者あり、或は衆生の後劫よりして得度すべき者あり、或は衆生の現在劫よりして得度すべき者あり、亦此の劫の有度無度を見ざる、是を菩薩の有識無識と謂ふ。』と。

爾の時に菩薩あり、衆相具足と名く。即ち座より起ち、前んで佛に白して言さく、『世尊、我も亦如來の前に於て有識無識を說くに堪任す。』と。復た此の偈を以て頌を說いて曰はく、

恒沙の諸佛に於て、　此の衆の德業を造り、　心に等正覺を念じ、　行を積んで宿命を識る、」　我、人、壽に著せず、生死に根本なし、　眞相に形兆なく、　今人中の尊に遭ふ。」　三世平等の慧、　識に非ず無識に非ず、　行盡きて行を造らず、　乃ち弟子に決を授く。」　一識亦一なし、　深法要を覺寤して、　諸の佛刹、　無量の諸の佛土を超越す。」　本と無數世より、　說くを聞いて乃ち寤るを得たり。　願はくは如來前に於て、　識無識を說くを聽したまへ。」　深妙の法を分別して、　今人中の尊に遭ひ、　盡く泥洹の境に達す、　唯願はくは之を說くを聽したまへ。

と。

爾の時に衆相具足菩薩、佛に白して言さく、『世尊、我が今日の如きは號して衆相具足と曰ふ。相起るも相の起るを知らず、相滅するも相の滅するを知らず、是を菩薩摩訶薩の有識無識と謂ふ。』と。

衆相具足菩薩、佛に白して言さく、『世尊、我が自ら念ずるが如きは、昔、識慧如來至眞等正覺に從つて此の要を說くを聞けり。諸の衆生あり、初發意より乃至成佛まで識相を見ず、是を菩薩の有識無識と謂ふ。若し善男子〔善〕女人、一一に六衰六入を分

た當に分別すべし。過去行に亦過去なく、亦未來行なく亦現在行なし。現在行に於て現在過去行を觀じて、亦現在過去行を見ず、現在に於て現在未來行を觀じて、亦現在未來行を見ず。諸行を觀了すれば悉く無所有なり。若し善男子〔善〕女人、過去中に於て過去識を觀じて、亦過去識を見ず、未來識に於て亦未來識を見ず、現在識に於て亦現在識を見ず、過去識に於て亦過去未來識を見ず、過去中に於て亦過去現在識を見ず、亦識を見ず。若し善男子〔善〕女人、未來中に於て過去識未來識を見ず、未來中に於て未來過去識を見ず、未來現在識を見ず。若し善男子〔善〕女人、現在識に於て過去識を見ず、未來識を見ず、現在中に於て現在過去識を見ず、現在中の未來識を見ず。是を善男子〔善〕女人、五陰の本末空を分別すと謂ふなり』と。

非有識非無識品第十六

爾の時に形響菩薩、佛に白して言さく『世尊、向に如來至眞等正覺の已に衆生の根本を說きたまふを聞きたり。我が今日の如きは、如來の威神を承けて有識無識を說かんと欲す。唯願はくは世尊、聽さば果敢に當に說くべし』と。佛言はく『族姓子說くを樂はじ便ち說け』と。形響菩薩、即ち佛前に於て偈を以て佛を讚したてまつる、

世尊に大弘誓あり、　衆生の根原を知らんとす、　今日已に神尊の口言の教を聽くを得たり。」　本と無數の佛より、
恒に此の要を聞かんことを求め、　今聖尊の教を蒙り、　有無の教を說くを聽く」。　昔我れ無數劫に、　諸の聖尊に
承事し、　我が今の如きは已に、　音響辯第一を獲たり。」　相も亦相あらず、　亦有無を見ず、　塵なく諸垢なく、
今人中の尊と號す。」　人生れて本と生なし、　況んや我れ復た生あらんや。　我が無生の意を以て、　小慧の本を說かんと欲す。」　敢て愚情を以て如來教を宣暢せず、　自ら昔の行本を憶ひ、　唯聽いて敢て疑はず。」　生死に量りあることなし、　受身復た受身、　至竟、　狐疑を懷く、　唯之を敷演するを聽せ。」

と。

爾の時に形響菩薩、此の偈を說き已つて、前んで佛に白して言さく『世尊、第一義を解して彼識此識を別たざるもの、是を

聖行あり聖行なし、空觀あり空觀なし。若し善男子善女人、五陰を分別す、何に由つて生じ、何に由つて滅するぞ。色本と無生にして如今生あり。色を有に非ず無に非ずと解するに、或は色の有あり、或は色の[二]無あり。過去當來今現在の色も亦復た是の如し。本と色あることなければ本色を見ず、過去中に於て過去色を見ず、未來中に於て未來色を見ず、現在中に於て現在色を見ず。過去色は現在色に非ず未來色に非ず、未來色は過去色に非ず現在色に非ず、現在色は過去色に非ず未來色に非ず。菩薩摩訶薩は盡く能く分別して一一悉く知る。復た次に善男子〔善〕女人、痛法を分別して痛に所起なきを解知す。過去の痛を觀ずるに本と此の痛なし、亦此の痛は過去あるに非ざるを知る、過去痛は未來現在に非ず、未來痛は過去現在に非ず、現在痛は過去未來に非ず。何を以ての故に。未來痛に本と此の痛なければなり。若し善男子〔善〕女人、現在痛を觀ずるに亦前痛に非ず、亦後痛に非ず、過去痛に非ず、未來痛に非ず。痛亦自ら痛を知らず、然る後乃ち本淨末淨を知る。若し善男子〔善〕女人、復た當に過去の五陰想を思惟すべし。法に本と此の想なし、過去の五陰想は未來現在想に知らず、未來想は過去現在想を知らず、現在想は過去未來想を知らず、想に想あるなし。若し善男子善女人、未來中に於て未來想を分別するに、未來想は自ら未來想を知らず、未來想は過去現在想を知らず、未來過去想は未來〔過去想〕を知らず、過去想は未來現在想を知らず。若し善男子〔善〕女人、現在中に於て過去想を分別するに過去想あることなく、未來想を分別するに亦未來想あることなく、現在想を分別するに亦現在想あることなし。現在過去に於て亦過去想なく、現在未來に於て亦現在未來想なく、現在想に於て亦想あるなし。若し善男子〔善〕女人、復た當に過去に於て五陰行は何に由つて生じ復た何に由つて滅するかを分別すべし。過去行は亦行ならず、過去行を分別するに過去行に非ず、過去行は未來行に非ず現在行に非ず、未來行は過去行に非ず現在行に非ず、現在行は過去行に非ず未來行に非ず、過去未來行は過去未來行に非ず、過去現在行は過去現在行に非ず。何を以ての故に。行本と無所有にして亦行あらざればなり。若し善男子〔善〕女人、未來中に於て便ち當に未來行を具足すべし。未來中に於て過去行を見ず、現在行を見ず、未來中に於て未來を見ず、過去行は未來を見ず、現在行亦未來現在行を見ず。何を以ての故に。本と此の行あることなければなり。若し善男子〔善〕女人、現在中に於て復

【二】無の字麗本本に作り、三本無に作る

に由つてか如來に從つて、而も自ら有行無行と說くや』と。
無盡慧菩薩、復た佛に白して言さく、『本と自覺に從つて今始果の如し。唯願はくは世尊、敷演宣暢したまへ』と。
佛言はく、『善い哉、善い哉、善男子よ。汝が言ふ所の如し、善く之を思念せよ。今日如來、當に汝が爲に其の敎を敷演すべし。
云何が族族子、汝本と發意して無上等正覺を成じたるは、有行に從と爲すや無行に從ると爲すや』と。
答へて曰く、『有行に從らず無行に從らず』と。
佛言はく、『云何が族姓子、若し有行に從らず無行に從らずんば、云何が等正覺を成ずるを得ん』と。
答へて曰く、『有は如如、[一]無も亦如如。是の故に有行に從らず無行に從らず』と。
佛言はく、『汝本と何を以てか此の問を發せざる。吾れ先に已に有行無行を說きたり』と。

本末品第十五

爾の時に世尊、將に菩薩の行を示現せんと欲して、卽ち本淨三昧に入り、一切衆生をして悉く過未來現在の諸法の本末を見しめ、復た衆生をして諸佛を見しむ。無量世界の諸佛世尊に、成就する者あり、成就せざる者あり、或は一地より乃至十地まで、現在身行あり不現在身行あり、一切衆生をして一一分別せしめんとしたまふ。爾の時に如來、等正覺に著する所なく、將に衆生を度せんと欲して便ち笑ひたまひ、面門より大光明を出し、乃ち無量恒沙の剎土を照したまふ。欲界より上有想無想天に至るまで、悉く光明を見るに、彼の光明より無量の衆生の根本を演出す。云何が衆生の本末と爲すや。是に於て善男子善女人、一法を修行して無量の智慧便ち能く具足し、佛國土を淨め衆生を敎化するなり。
爾の時に世尊、諸會等の諸の無著行に告げたまはく、『云何が無著行なる。初發意より乃至成佛まで、五十四法は空行に著せず。是に於て善男子善女人、常に當に思惟して須臾を離れざるべし。云何が五十四と爲す。
一には五陰を分別して、起には亦起を知り滅には亦滅を知る。然も彼の五陰に生あり生なし、

【一】無の字麗本如に作り、明本無に作る

無盡慧菩薩、佛に白して言さく『若し善男子善女人あり、有行無行を修習せば、便ち能く一切諸法を具足し等正覺を成ぜん。云何が有行無行なる。諸法は生ぜず滅せず、過去當來今現在なし。是を無行と謂ふ。必ず終に諸法は過去當來今現在なりと分別す。是を菩薩の有行と謂ふ。無量に名身あるも本末を見ず、無量に句身あるも本末を見ず、無量に味身あるも本末を見ず。是を菩薩の無行と謂ふ。若し善男子善女人、三世の法に生あり滅あるを知るも、中に於て分別すれば無所有なり。是を菩薩の有行と謂ふ』と。

爾の時に無盡慧、復た佛に白して言さく『未だ究竟せざるの法を究竟せしめ、未だ滅盡せざるの法を滅盡せしむ。是を菩薩の無行と謂ふ。若し菩薩摩訶薩あり、過去當來今現在に於て、有量を見ず無量を見ずんば、是を菩薩の有行と謂ふ。復た次に善男子〔善〕女人、初に道心を生じて無上正眞道を行じ、稱譏苦樂利衰毀譽を以て其の中を甘樂せず、是を菩薩の無行と謂ふ。三千大千世界の如きは、其の中の衆生は一意一心に、三世斷滅の法を分別す。是を菩薩の有行と謂ふ。復た次に善男子〔善〕女人、無量劫中に於て勤苦行を行じ、如來の言教を聞受するを得んと欲す。是を菩薩の無行と謂ふ。復た次に善男子〔善〕女人、四等心を行じて四等を以て以て自ら稱歎せず。是を菩薩の有行と謂ふ。不染不汚には過去當來今現在なし。是を菩薩の無行と謂ふ。若し善男子〔善〕女人、義に非ず無義に非ず、有成に非ず無成に非ず、亦有對ならず亦無對ならず。是を菩薩の有行と謂ふ。或は國土清淨にして所染なきを以て、自ら國土に成就する所あるを見ず。是を菩薩の無行と謂ふ。若し復た諸法に於て妄見を生ぜずして所起なく、無盡法を以て能く自ら纓絡〔瓔珞〕す。是を有行と謂ふ。亦有ならず亦無ならず、是を菩薩の無行と謂ふ。復た次に善男子〔善〕女人、一刹土を觀ずること空の如く異なく、異刹を以て一國に係在せず。是を菩薩の有行と謂ふ。復た自ら、本と三世の諸佛菩薩摩訶薩あり、過去當來今現在あるを觀見する。是を菩薩の無行と謂ふ。復た次に族姓子よ、若し善男子〔善〕女人、一一分別するに、界は我が界に非ず、世は我が世に非ず、有は我が有に非ず。是を菩薩の有行と謂ふ。復た次に族姓子よ、三界の行を分別するに所行なく、作を見ず亦不作を見ず。是を菩薩の無行と謂ふ。』と。

爾の時に如來、無盡慧菩薩に問うて曰はく『汝何等の法に住して此を說くや。無行は有行より起り、有行は無行より起る。何

卷の第五

生佛品第十四

爾の時に座上に菩薩摩訶薩あり、分別說施と名く。普ねく無量の諸佛世尊に於て衆德の本を造る。卽ち坐より起ち前んで佛に白して言さく『善い哉、善い哉。世尊。頗し如來至眞等正覺あり、過去世未來現在に於て、一時一日の中に過去の三事、未來現在の三事を知らば、成佛するを得るや、不や』と。

答へて曰く『無し、何を以ての故に。如來至眞等正覺は其の變化に隨つて國土を觀見し、衆生に應適して乃ち所成あるのみ。猶ほ菩薩摩訶薩の、國土を以て國土と爲さず、衆生を以て衆生と爲さざるが如し。法界を分別するに法智の所生なり。如來の神智は世俗智に非ず、世俗智は欲色界より有想無想天に至るを、乃ち世俗智と謂ふ。今日の如來至眞等正覺は已に此の智を過ぐ。云何が諸法を出生し、如來至眞等正覺を成ぜん。此の事然らず。何を以ての故に。如來は如如なり如來は如如なり世界は如なり、諸法性は如なり、不思議は如なり、未來は如なり、彼の世界に於ける劫數は如なり、如來劫數は如なり、一如なり、不二如なり、諸有は如なり、諸法性空は如なり、亦生せず亦滅せず、亦著斷なければなり。諸佛世尊の出したまふ所の名號は、彼の劫數に於て無限無量にして稱記すべからず。長あるを見ず亦短を見ず、亦生を見ず亦滅を見ず。云何が諸法を出生するや。無形は見るべからず、未來未だ起きず、無記は有記を見ざること、無形法の種種異るが如し、名句身亦爾り、味身亦爾り、各各身なく、各各句身なく、各各味身なし。何を以ての故に。一切諸法各各虛空にして亦善あらず亦惡あらず、亦福あらず福あらざるに非ず、或は行あり或は行なければなり。』と。

爾の時に菩薩あり、無盡慧と名く。此の性空如如の無法を得て、卽ち坐〔座〕より起ちて佛に白して言さく『我れ今、如來前に於て有行無行の如、空性如如の法を說くを堪任す』と。

佛言はく『善い哉、善い哉。族姓子、汝が說く所を恣にせよ。』と。

現在の衆生を捨てて、頗し現在に於て一心二心の衆生をして、無上等正覺を成ぜしむるや不や』と。

佛言はく、『無し。何を以ての故に。汝本と發意せる心係りて在るあり、汝が本願に非ざればなり』と。

無畏菩薩、佛に白して言さく、『世尊、且らく一心二心を捨て、復た未來の衆生の塵勞を捨て、復た現在の初心を捨て、復た現在の一心二心を捨てて、今發願せんと欲す、現在塵勞の衆生に於て得べきと爲すや、不や』と。

佛言はく、『不なり、何を以ての故に。已に此の境を過ぎたればなり』と。

時に無畏菩薩、佛に白して言さく、『世尊、今日の如來は、九品中に於いて何れの地に在りと爲すや』と。

佛言はく、『吾れ過去の三、未來の三、現在の三を捨て、復た未來の初心に於て等正覺を成ずべし。未來初心の衆生をして等正覺を成ぜしむるや、不や』と。

佛言はく、『無なし。何を以ての故に。汝が身は未來に非ざればなり。云何が等正覺を成ずることを得て、未來の衆生を度せんと欲するや。此の事然らず』と。

無畏菩薩、佛に白して言さく、『世尊、我れ今、未來の初心に墜墮す。復た弘誓願を發して未來一二の心に於て等正覺を成ぜんと欲するや、不や』と。

佛言はく、『然なり。汝が所願を果す。何を以ての故に。汝本と無數阿僧祇劫に、恒に弘誓廣大の心を發し、即ち此の身に於て當に上方清淨世界に昇り、中に於て成佛すべければなり。今の汝が如きを無畏如來至眞等正覺と號す』と。

無畏菩薩、別を受くることを得已つて、歡喜踊躍して即ち自ら面のあたり清淨世界を見るに、所化の衆生、已の如く異るなし。何を以ての故に。皆佛の威神もて彼をして悉く見しむればなり。

爾の時に無畏菩薩、佛に白して言さく、『世尊、我れ今復た弘誓心を發して、無數恒沙の諸佛を供養す。願はくは未來塵勞の衆生を度し中に於て等正覺を成ぜんと欲す、獲べきや、不や』と。

佛言はく、『不なり。汝、道を求めて已來、心、中際せず、一二を除いて塵勞の衆生中に在りて、如來・至眞等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師を成じ佛世尊と號す』と。

爾の時に無畏菩薩、前んで佛に白して言さく『我れ初に發心して無上正眞道を求めたるが如くんば、未だ自ら何の道を求めんと爲すやを知る能はざりき。今如來の九品行を說きたまへるを聞きて、今始めて弘誓の大心を發せんと欲す、過去の初心の未だ塵垢を受けざる者を度せんと欲す』と。

佛言はく、『止みね止みね。族姓子。汝今已に初心に墜墮す。云何が初心に於て無上等正覺を成ずることを得んと欲するや。此れ則ち然らず』と。

無畏菩薩、佛に白して言さく『世尊、今、過去の初心に於て已に墜墮す。願はくは過去に生心の衆生を度し、普同等慧にして無上等正覺を成ずることを求めんと欲す』と。

佛言はく、『汝今已に此の境を越えて下地に墜墮し、未だ衆生を拔濟し無上等正覺を成ずることを成辦する能はず』と。

爾の時に無畏菩薩、復た佛に白して言さく『云何が世尊、過去塵勞の衆生に於て、弘誓心を發して無上等正覺を成ずるを得るや不や』と。

佛言はく『無し。何を以ての故に。過去の無數已に滅し已に盡く。今現身の塵勞を盡すに非ず。是を以ての故に無上等正覺を成ずるを得ず』と。

爾の時に無畏菩薩、佛に白して言さく『我れ今過去三分に於て永く所得なし、上に在つて亦下に在らざるが故に。無上至眞等正覺を得ず。何を以ての故に。汝本と弘誓心を發す、彼に非ず此に非ざるが故に成ずるを得ず。』と。

無畏菩薩、佛に白して言さく『云何が世尊、我れ今未來の一二を捨て未來の塵勞を捨てんと欲す、復た現在の初心に從つて無上等正覺を成ずるを得べきや不や』と。

佛言はく『不なり。汝本と發意せる心係りて在るあり。如來至眞等正覺は、其の變化に隨つて國土を觀見して應に適係りて在るあるべし。汝が本願に非ず』と。

無畏菩薩、佛に白して言さく『世尊、未來中に於て一心二心を捨て、復た未來中に於て塵勞の衆生を捨て、復た現在に於て

受くれば方に當に心を滅して垢を除くべし。云何が衆生心と爲す。如し衆生あり、劫より劫に至り、乃至百千劫に復た無數生死の塵勞を盡せば、然れば此の菩薩摩訶薩は、要ず當に彼の無數の塵勞を滅し及び無數の衆生を濟ふべし。是を無畏菩薩、過去中に於て三事を成就すと謂ふ。無畏當に知るべし。如來至眞等正覺は、當來世に於て亦當に三法を具すべし。云何が三と爲す。當來心の如きは未だ現在を受けず、是れ亦進むべし。復た次に無畏よ、未來心已に一日を經ば便ち塵垢あり。菩薩摩訶薩、要らず當に一日の塵垢を滅すべし。族姓子、當に知るべし、未來移轉は一劫より百劫に至り、乃至無數阿僧祇劫にも、如來至眞等正覺は、此の身識及與塵勞を知りたまふ。是を未來中に於て當に此の三法を具すべしと謂ふ。』と。

佛、復た族姓子に告げたまはく『如來至眞等正覺は、現在中に於て復た當に是の三法を具すべし。云何が三と爲す。初識は現在に未だ塵勞に染せず。即ち彼の識をして一日に滅度せしむ。若しくは一若しくは二に便ち塵勞を生ぜば、能く一二及與塵勞を滅し、然れば彼れ乃ち成佛するを得ん』と。

佛、復た族姓子に告げたまはく、『若し現在に於て、一身より百千身に至りて諸の塵勞を生ぜば、是を菩薩摩訶薩、現在中に於て三法を具足すと謂ふ。』と。

佛、復た無畏菩薩に告げたまはく『過去の初心もて一日に度する者は、即ち是れ過去の普施如來至眞等正覺なり、過去の生心もて得度を蒙る者は、即ち是れ無等如來至眞等正覺なり、過去の衆生〔心〕もて得度を蒙る者は、即ち是れ原本如來至眞等正覺なり。未來の初心もて得度を蒙る者は、即ち是れ空色如來至眞等正覺なり、未來の一二〔身〕もて得度を蒙る者は、即ち是れ空門如來至眞等正覺なり、未來の無數身もて得度を蒙る者は、即ち是れ定意如來至眞等正覺なり。現在の初心もて得度する者は、即ち是れ無身如來至眞等正覺なり、現在の一二身もて得度する者は、即ち是れ善星宿如來至眞等正覺なり、現在の無數身もて得度する者は、即ち是れ月光如來至眞等正覺なり。云何が族姓子、汝、九品中に於て何所をか志趣するや。過去の初心に從はんと欲すると爲すや。過去の生心なりや。過去の衆生心なりや、未來の初心に從はんと欲すると爲すや。未來の一二心なりや。未來の無數劫なるや。現在の初心に從はんと欲すると爲すや。現在の一二心なりや。現在の無數心なりや。』と。

生を濟度し、皆無餘泥洹界に至つて般泥洹するを得しめんと欲すればなり。菩薩摩訶薩、此の四聖諦を得れば、衆生は悉く無所有なりと觀了す。空觀菩薩は自ら身あらず、亦衆生なくして弘誓の心を執り、空を以て空を擧げ、無數劫に於て功を積み德を累ぬ。諸佛の世に出現するを觀見するに、諸法を分別して形貌あることなく、世利たる利衰・毀譽・稱譏・苦樂に著せず、亦衆生・我・人・壽命・當來過去現在の心識を知り、一一分別して能く成就せしむ。』と。

爾の時に無畏菩薩、復た佛に白して言さく、『云何が世尊、衆生の類は稱記すべからず。是れ羅漢辟支の及ぶ所に非ず。過去恒沙の無央數の佛、頗る發意するあり、菩薩道を求めて、言ふ、我れ久久にして當に無上正眞の道を成ずべし、我れ能く虛空際を盡し、虛空際の衆生の根本を知り、已に能く虛空の衆生を分別し、復た能く識の有趣無趣を分別すと。是の如き等の衆生、盡く一日の中に能く成道せしめんこと、此れありや不や』と。

爾の時に世尊、無畏菩薩に告げて曰はく、『當來過去今現在の識は汝が境界の能く分別する所に非ず。今汝の問を發する者は皆佛の威神なり。何を以ての故に。如來至眞等正覺は乃ち能く一一深法を宣暢したまへばなり』と。

佛、族姓子に言はく、『過去識は汝が問ふ所の如し。盡く識の天上人中の四道乃至八部を流轉するを知り、識の經歷する所、趣く所を、盡く能く分別す』と。

無畏菩薩、佛に白して言さく、『如來至眞等正覺は、弘誓心を發して、盡く能く過去當來今現在を拔濟したまふ。云何が一日の中に盡く成佛するを得るや』と。

佛言はく、『無畏菩薩の問ふ所甚だ大なり。今當に汝が爲に一一分別して其の趣く所、問ふ所を知るべし。過去識は過去中に於て過去識をして成佛するを得しめず。未來中に於て未來識をして成佛に至るを得しめず。何を以ての故に。過去識は本と過去識に非ず。未來識は未來識に非ず、現在識は現在識に非ざればなり。無畏菩薩、當に知るべし、過去の成佛に三事行あり。云何が三と爲す。初心あり、生心あり、衆生心あり。云何が初心と爲す。無畏菩薩、當に知るべし。本と如來至眞等正覺なし、卽ち彼に於て之を敎化すれば、同日同時に盡く佛道を成ぜん。是を初心と謂ふ。云何が生心なる。所謂生心とは、已に塵垢を

は無相の法を以て、衆生を敎化し佛國土を淨む。佛ありと雖も佛想あることなく、法ありと雖も法想あることなく、比丘僧ありと雖も比丘僧想あることとなし。是を文殊師利菩薩摩訶薩、已に無相法を得、不退轉に住して礙あるなしと謂ふ。譬へば人あり、夢中に於て或は國王となり、或は轉輪聖王となり、覺め已つて便ち夢中の所作を憶うて忘失せざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復た是の如し。諸の衆生の如來至眞等正覺を成ずるを觀じて、亦成相あるを見ず、亦成相なきを見ず。

爾の時に佛、諸會の大衆に告げたまはく、『爾の時に大身如來、說法したまふも淸淨無形にして見る可からず。豈異人ならんや。斯の觀を造すこと莫かれ。何を以ての故に。爾の時の大身如來は今の文殊師利是なり。』と。

爾の時に世尊、便ち此の偈を說いて言はく、

過去無數世の、　佛を大身尊と號す。　此に於て正覺を成じ、　邪部行あることとなし。」　恒に無相の法を以て四聖諦を分別す。　權に現じて世界に遊び、　現に諸受する所あり。」　佛道は不思議なり、　神力は極む可からず。　衆生の類を敎化して、　盡く同じく一相と爲す。」　吾れ今自ら成佛し、　三界の第一尊たり。　彼の爲に染せられず、　生老死を更へず。」

と。

爾の時に世尊、此の偈を說き已るや、無量の衆生ありて、皆無上正眞道の意を發せり。

成道品第十三

爾の時に菩薩あり、無畏と名く。曾て過去無數の諸佛を供養し、已に總持を得て三世成敗の所趣を分別す。卽ち座より起ち偏へに右臂を露はし、叉手し長跪して佛に白して言さく、『唯然り世尊、今、如來至眞等正覺の、四賢聖難有の法を說きたまへるを聞くに、未だ曾て所聞あらず、未だ曾て所見あらず。若し善男子善女人あり、四聖諦の名を受持し諷誦せば、便ち能く人の與に良祐福田と作らん。何を以ての故に。世尊、此の善男子〔善〕女人、弘誓を興建して自ら身の爲にせず、空際に於て衆

不起法忍を得たり。

四聖諦品第十二

爾の時に佛、文殊師利に告げたまはく、『過去無數阿僧祇劫に佛あり、大身如來・至眞等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と名け、佛。世尊と號す。剎を空寂と名く。正に此の處に於て無上等正覺を成じ、四部衆の與に微妙法たる四賢聖諦を說く。廣く衆生を化し皆無餘泥洹界に至つて滅度を取らしむ。云何が四聖諦なる。一には無量聖諦と爲す。菩薩此の聖諦を得れば、一念の中に自ら心垢を滅し、亦能く他の心垢を滅して、塵垢の有盡無盡を見ず。二を行盡聖諦と名く。菩薩此の聖諦を得れば、一念の中に盡く衆生をして身口意の行を覺了し、若しは善も、若しは惡も、盡く道門に趣かしめ、悉く衆生をして無餘泥洹界に至らしむ。三を速疾聖諦と名く。菩薩此の聖諦を得れば、能く一切衆生をして彈指の頃に盡く佛道を成ぜしめ、無限無量不可稱數一日に成道す。復た無數阿僧祇剎土の衆生の類をして、各善心を生じて諸佛世尊に興敬し供養せしむ。香華繒綵もて倡伎樂を作し、阿僧祇の諸佛剎土化して一寶蓋と作り、用つて供養すること、諸天世人の上に出過し、盡く天上自然の飲食衣被床臥具病瘦醫藥を持し、一念の頃に悉く能く成辦す。四を名けて等聖諦と曰ふ。菩薩此の聖諦を得れば、能く一切衆生をして盡く同一趣にして若干相なく、無餘泥洹界に於て般泥洹せしむ。猶ほ焰幻野馬の如し。世界は空寂無形にして護持すべからず。菩薩摩訶薩も亦復た是の如し。衆生を敎化し佛國土を淨むるも、亦衆生の得者する者あるを見ず。亦復た受化する者を見ず。衆生あらざるに非ず、衆生なからざるに非ず。淨衆生あらざるにあらず淨衆生なからざるに非ず。濁あらざるに非ず、濁なからざるに非ず。受胎あらざるに非ず、受胎なからざるに非ず。不有に非ず、不無有に非ず。生死あらざるに非ず、生死なからざるに非ず、一一分別するに悉く無所有なり。十二因緣を知る亦復た是の如し。癡より十二因緣に至る、有に非ず無に非ず。猶ほ野馬の如し。世界は護持すべからず、近なく遠なし。衆生を化すと雖も化あるを見ず。菩薩摩訶薩も亦復た是の如し。諸の如來至眞等正覺を觀ずるに、起あるを見ず、滅あるを見ず。亦有相ならず亦無相ならず。如來至眞等正覺

て外想を起さず。諸法は定意もて己が國の淨きを現ず。諸法は善觀して劫數を以て限りと爲さず。諸法は行を樂しんで永く恩愛を離る。諸法は明を現じて癡想を生ぜず。諸法は貪を去つて施度無極を具足す。諸法は所犯あることなくして戒度無極を具足す。諸法は恚想を起さずして忍度無極を具足す。諸法は精進して懈怠あるなく、進度無極を具足す、諸法は亂意を興さず、心を攝して起さず常に禪を樂しみ禪度無極を具足す。諸法は盡く愚惑を除いて他の異念なく、智度無極を具足す。復た四意止と名くるあり。菩薩摩訶薩の修する所の行法なり。云何が四意止と爲す。若し善男子〔善〕女人あり、內身の意止を分別するに、頭より足に至り一一分別して不淨觀を生ず。自ら己身を觀じ他人身を觀じ、自ら己心を觀じ他人心を觀ずるに、內外の諸法は悉く皆是の如し。菩薩摩訶薩、復た自ら諸法の四意斷・四神足・五根・五力・七覺意・八賢聖道を觀ず。是を菩薩摩訶薩の無相行と謂ふ。

佛、復た族姓子に告げたまはく『菩薩摩訶薩、自ら身を觀じ已つて他人身を觀じ、一一分別して頭より足に至りて、不淨想を起す。是を菩薩摩訶薩、內外身の悉く無所有なるを觀ずと謂ふ』と。

爾の時に世尊、卽ち此の偈を說いて、頌を歎じて曰はく、

「心意識に猗らず、　諸行の本を分別すれば、　道存して想念なし。　乃ち賢聖諦に應ず。」　佛慧に邊涯なく、合離あるを見ず、　成佛するは無相に由る。乃ち果實行に應ず。」　佛道は本と二なく、亦復た一相なし。眞人は慈もて善く普ねく、若干の法を示現す。」　本と我れ我を造らず、有に染して五陰を成ず。聖諦の慧は無量なり、　進趣して自ら意を滅す。」　有ならず亦無ならず、生死して染著を起す、　相を滅すれば自ら成佛す。故に天中天と號す。生れて人道に値ふこと難し、六根完具すること難し、十二緣を滅すること難し、天に生じ福を受くること難し、賢聖に遭遇すること難し、定に入りて想を除くこと難し、　內外身を觀ずること難し、　聖敎を面受すること難し。

と。

爾の時に世尊、此の偈を說き已るや、座上の諸天人民天龍鬼神八部の衆、皆無上正眞道の意を發し、復た無數の衆生あり、

ふ。菩薩摩訶薩、空觀定意を得て、十二因緣を分別するに、癡を緣じて行あれば便ち緣報あるも、癡は本原に非ず、何に由つてか行あらん。身口意の法三事相因つて乃ち諸法を生ず。所以に如來は無數劫に於て、十二因緣を分別思惟して、今成佛するを得て始めて信解するを得たり。吾れ初發意より菩薩道を求め、捨身受身して十二因緣を分別し、苦本を思惟するも未だ其の原を盡さず。今我れ如來至眞等正覺を成じて、乃ち十二因緣を暢達するを得たり。』と。

佛、復た過行菩薩に告げたまはく、『汝今、如來の前に在つて十二因緣を說くと雖も、未だ其の本を具する能はず。何を以ての故に本と無なるや。如來至眞等正覺は、住壽、恒沙劫を經て、十二因緣を宣說するも、猶ほ盡す能はず。何に況んや汝今盡すことを得んと欲するをや』と。

爾の時に彼の比丘、如來の前に在つて極めて慚愧を懷き、「將我れ神足を失ふことなきを得んや」と。即ち座より起ち、頭面もて世尊の足を禮し、便ち退いて去る。

心品第十一

爾の時、座上の諸の欲天人、諸の色天人、天龍・鬼神・乾沓惒・阿須倫・迦留羅・旃陀羅・摩休勒、如來至眞等正覺の、此の甚深の法を說きたまふを聞いて、皆渇仰あり、如來の正心定意を見ることを得んと欲す。

爾の時に世尊、衆生の心中の所念を知り、衆會の心をして定三昧ならしめんと欲す。爾の時に世尊、即ち座上に於て面現定意に入る。今、諸の菩薩摩訶薩、皆盡く之を見る。此を去る十五江河沙數に佛土あり、名けて如幻と曰ひ、佛を等心如來・至眞等正覺・明行成爲善逝・世間解無上士・道法御天人師と名け、佛・世尊と號す。彼の國淸淨にして想著に猗らず、餓鬼・畜生・地獄道あることなし。所行純厚にして自ら我を計せず、心、小に趣かず、亦聲聞辟支佛の音なくして、一切會をして悉く之を見せしむ。爾の時に世尊、彼の定より起ち、復た月盛定意に入り、一切衆生をして盡く金色を見て、悉く十方諸佛の無相行を說くを聞かしめたまふ。云何が無相と爲す。諸法は寂然として澹泊無形なり。諸法は不起にして諸の恚怒を忍ぶ。諸法は心を攝し

佛言はく、『比丘は法相を壞せず。猶し幻師の此の地に住して其の幻法を現ずるが如し。然れども彼の幻法は此の地を損せず、地亦幻法を損せず。然れども此の幻師、此の化を造作して晝夜あるなし。其れ此の幻法を見る者あれば、悉く皆信解す。菩薩摩訶薩も亦復た是の如し。神足力を以て十二因緣を分別すれば、佛境界の其の刹土を現ずるなく、本と世あることなきも今現に世あり。復た有佛刹土を以て能く無佛刹土を現じ、無色刹土を以て有形色を現ず。一を以て二を壞せず、二を以て一を壞せず。何を以ての故に。彼の幻法の如きは能く一切世界をして盡く幻術の如くならしむること、猶ほ一切世界の人の喜ぶ所に隨つて盡く幻法と爲るが如し。幻は若干ありて一法に非ず。或は幻法あり、名けて無量諸法門と曰ふ。菩薩、此の幻法を得れば、便ち能く一切諸法を現ずること、皆幻法の如し。已に幻法を得れば便ち幻智を得て忘失せず。已に幻智を得れば便ち幻行を得て能く衆苦を盡す。菩薩摩訶薩、已に幻智行幻〔幻行〕を得れば、便ち能く中に於て幻智を以て盡く能く衆行を分別し、一一思惟して本際を失はず。彼の幻法の如きは內地に依らず。外法を現ずる亦外に依らず。諸の衆生をして內法あるを現ぜしむ。菩薩摩訶薩も亦復た是の如し。空性を以て內外分別せず、我れ當に一切世界を越ゆべしと言ひ、亦世界を以て內外の空法に在らず。何を以ての故に。虛空は性爾にして法界を壞せず。法界は空性を壞せざればなり。菩薩摩訶薩、中に於て虛空性を得て、種種に一切法界を觀ずるに、亦法界を觀ぜず、亦法界を壞せず。但、此の世界に若干形ありと見ず、亦衆生の善行惡行の報を見ざるにあらず。一一分別して其の事を究尋するに、性空自ら爾り能く爾らしむるなし。觀じ已つて復た觀じて三有を分別す。中に於て十二因緣を校計するに、癡に由つて眼識を起すに三行事あり。云何が三と爲す。猶ほ族姓子の眼に外色を見るも、或は善不善を盡く分別せざるが如し、斯れ本識に由つて無明、染を行ずるなり。或は復た善男子善女人、身口意を起して三不善法を行じ、意に漸く自ら悟つて我が本と造る所を咄る。無明の本に由つて今乃ち十二因緣を致し、無明に從ひ自ら改むること能はざるを知る。復た次に善男子善女人、癡に由つて行を致し、衆罪の根原は罪に由つて生ず。我れ今當に寂靜定意を念ずべし。此の十二因緣を觀じて癡に由ると爲すや、行に從ると爲すや。復た自ら無明澹靜隱匿の法を思惟するに、何に由つてか能く諸の緣著を出づるや。我が身口の行造に非ずんば、由つて生を得るなし。是を菩薩摩訶薩、三行を分別して無所有なりと謂

せる剎土を觀見するに、衆生種を淨め、彼の佛國土に因つて道教を演布す。阿僧祇の諸佛如來は盡く所出の處を知り、一一分別して亦我想なし。復た諸佛如來至眞等正覺に於て、深法要を聞いて奉持承事し、諸法の本を捨てず。爾の時に菩薩、亦自ら有我無我を見ず、菩薩行を行じて行あるを見ず。是を有に因つて無相を起すと謂ふ。中に於て自ら相を滅せず、身、觀を生ずと雖も、亦自ら覺知する所なきを見ず。已に所覺なくして亦此の念、吾我の想を起すなし。自ら校計し已つて便ち能く一切諸法を分別するに、無明は行を緣じ、行は識を緣じ、識は名色を緣じ、名色は更樂を緣じ、乃至生老死も亦復た是の如し。』と。

爾の時に具行菩薩、復た是の念を作す『一切諸法は因緣もて相生じ、因緣もて相滅す。初發意より乃至成佛まで、一一諸法の相を觀了するに、緣生ずれば則ち生じ、緣滅すれば則ち滅す、無明滅すれば則ち行滅し、行滅すれば則ち識滅し、識滅すれば則ち名色滅し、名色滅すれば則ち更樂滅し、更樂滅すれば則ち愛滅し、愛滅すれば則ち受滅し、受滅すれば則ち有滅し、有滅すれば則ち生滅し、生滅すれば則ち老病死憂悲苦惱滅す。要を取つて之を言へば、五盛陰は衆行の本なれば、猗るなかれ猗るべからず。然れども起行從來する處を知り、彼に於て自ら省みて諸の法界を觀ずるに、法慧淸淨にして辯才を捨てず、菩薩摩訶薩、十二因緣を思惟分別するに、云何が無明は行を緣ずるや。是に於て善男子〔善〕女人、無明の本に由つて善惡行を造り、盡く十二の諸の不善本を生じ、漸漸に五盛形を成ず。是を無明は行を緣ずと謂ふ。

爾の時に過行比丘、卽ち座より起ち、偏へに右臂を露はし右膝を地に著けて、叉手して佛に白して言さく『我が學ぶ所の十二因緣甚深の法の如きは、我れ今當に說くべし。無明、行を緣じて便ち十二を生じ、行、識を緣じて便ち十二を生じ、識、名色を緣じて便ち十二を生じ、名色、更樂を緣じて便ち十二を生じ、更樂、六入を緣じて便ち十二を生じ、六入、愛を緣じて便ち十二を生じ、愛、受を緣じて便ち十二を生じ、受、有を緣じて便ち十二を生じ、有、生老病死憂悲苦惱を緣じて復た十二を生ず。我が解する所の十二因緣の如きは、癡滅すれば則ち行滅し、行滅すれば則ち識滅し、識滅すれば則ち名色滅し、名色滅すれば則ち更樂滅し、更樂滅すれば則ち六入滅し、六入滅すれば則ち愛滅し、愛滅すれば則ち受滅し、受滅すれば則ち有滅し、有滅すれば則ち生老病死憂悲苦惱滅す』と。

佛言はく、『是の如し是の如し、族姓子よ。三趣の衆生をして佛道を成ぜしめんと欲するも、此の事然らず』と。

因緣品第十

佛、族姓子に告げたまはく、『若し善男子善女人あり、定眼識定耳識を受持し諷誦せば、便ち十功德を獲ん。云何が十と爲す。是に於て菩薩摩訶薩、無等心を以てせば虛空像を獲、言教を以てしては衆行を敎化し佛國土を淨めず。善男子善女人、自ら無數形識の本末を知り、其の虛寂にして悉く無所有なるを知つて、無生法忍を起す。復た次に族姓子よ、菩薩摩訶薩あり、道場に坐するに當つて、便ち能く法界清淨を具足す。但、如來の一相無相の爲のみ。或は菩薩あり、一法印を得て、無量の如來の法敎を演說す、師より受くるに非ず自然に覺るなり。復た次に族姓子、一法を行ずる、本と廣大無底にして、無相法を以て諸法本を生ず。云何が無相、有相を生ずるや』と。

佛言はく、『外に色あれば、靑あり、白あり、赤あり、黑あり、黃あるが如し。』と。

解釋菩薩言はく、『如來所說の神は虛空に在り。過去當來現在に非ず。亦五陰名あることなし。云何が靑黃赤白黑と言ふや。此の因緣の法は不可思議なり。衆生自ら緣想を起すに由つて、行あれば則ち識あり、識に由つて癡を生ずれば則ち人身を成ず。』と。

解釋菩薩、佛に白して言さく、『世尊の言の如くんば、虛空は無形なれども、四大色地水火風に由つて色あり。今、如來に問ふ、云何なるをか名けて地水火風靑黃白黑と曰ふや。世尊の言の如くんば、靑黃白黑空識、空中に在り。何を以てか靑黃赤白中の靑黃赤白は盡く空に非ずと說かざるや』と。

答へて曰はく、『然らず。何を以ての故に。各各自ら空なればなり。空性は有性を知らず。有性は無性を知らず。猶ほ菩薩摩訶薩の一念の頃に、無量恒沙の刹土諸佛世界を知るが如し。成劫敗劫に一一之を知り、其の中を了知して他相なし。諸法は因緣もて自ら生じ自ら滅す、本と我れ空に因つて生じ生じて滅せず。復た無量阿僧祇の刹土を觀じ、諸の菩薩の慧を受けて莊嚴

上士・道法御・天人師と名け、佛・世尊と號す。世に出現して人壽千歳、國土淸淨なり。一日の中に十方無數盡虛空界の有形の類と現じ、盡く同一日に皆無上正眞の道を成じ、卽ち一日に於て盡く般泥洹を取りき』と。

爾の時に解釋菩薩、復た佛に白して言さく『平等如來、至眞等正覺は旣に成佛し已り、復た一切衆生、十方無量世界虛空無邊際の衆生をして、盡く同一日に皆佛道を成ぜしめば、云何が今日復た天道・人道・畜生・餓鬼・地獄道あらんや』と。

佛、解釋菩薩に告げて曰はく『止みね止みね、族姓子。吾れ先に已に人身を說き、餘道を說かず』と。

爾の時に解釋菩薩、復た佛に白して言さく『世尊、頗し菩薩摩訶薩あり、弘誓心を發せば、一日の中に五趣の衆生をして己と同じく同日に成佛せしむるや不や』と。答へて曰はく、『無し。何を以ての故に。衆生の性行志趣同じからず。豈當に餓鬼・畜生・地獄形を以て成佛すべけんや。此の事然らず。何を以ての故に。終に非身を以ては人中の尊を成ずるを得ざればなり、權化示現して假に遍ねく濟ふべし』と。

佛、復た解釋菩薩に告げて曰はく『無數の諸佛は過去に本と弘誓心を發し、一切衆生有形の類及び虛空界をして悉く成佛し、盡く般泥洹せしめたり。然も彼の如來至眞等正覺は、卽ち其の日に於て、先づ三趣の衆生を化し、其の苦本を拔いて盡く人身に復せり。人道を得已つて諸根具足し六情完具し、然る後、一日の中に同じく佛道を成じて衆相具足せり。我が今日の如來至眞等正覺の如きは、神智自在辯才無礙にして悉く滅度を取る』と。

爾の時に解釋菩薩、佛に白して言さく『弘誓の菩薩、衆生を敎化するに、其の中の苦行、無量劫を經たり。何を以ての故に。三趣の衆生に卽して悉く佛道を得せしめざるか』と。

佛言はく『成道を得べからず。云何が族姓子、此の三趣道は三善道に非ず。云何が中に於て佛道を成ずることを得んと欲するか。此の事然らず。猶ほ人あり、七寶を求めんと欲するが如し、七寶の積を捨てゝ反つて空に從つて求むるも、此の人能く獲るや不や』と。答へて曰はく『不なり世尊。』と。

生の根原を備ふる能はず。或は菩薩あり、自ら其の刹を淨め、婬怒癡なき衆生は其の國土に生じ、其の國に生ずと雖も、苦の本を盡さず。或は菩薩あり、弘誓心を發す「若し[三]我が滅後己が刹土に在りて生るゝ者は、我が國人をして三乘の名なからしめん」、此の菩薩等は定眼識通定耳識通を得ず。復た菩薩あり、弘誓心を發す、「我れ本と誓願して無上正眞道を求め、我が國人をして盡く同一行たらしめ、國土清淨にして同一形像たらしめん」と。彼の所願の如きは已に得て疑はざるも、此の如き等の菩薩は、猶ほ未だ定眼識通定耳識通を得ず。復た菩薩あり、大弘誓心を發す、「我れ後に成佛する時の如くんば、諸有の衆生の我が國に在る者は、一日にして成道して盡く滅度を取らん」と、此の如き等の菩薩摩訶薩は、猶ほ未だ定眼識通定耳識通を得ず。復た菩薩あり、弘誓心を發す、「若し我れ後に作佛する時、我が國土の一切の衆生をして日を同じうして成佛せしめん」と、此の如き等の菩薩は、便ち定眼識通定耳識通を得』と。

爾の時に解釋菩薩、佛に白して言さく、『世尊、頗し菩薩摩訶薩あり、弘誓心を發す、若し我れ成佛する時は、一切衆生皆一時に成佛するを得ん」と、不や』と。

佛言はく、『有り。過去無數阿僧祇劫に佛あり。名けて住無住如來・至眞等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、佛・世尊と號す。國土を法妙と名け、人壽三萬歲なり。爾の時に住無住如來の壽十萬歲にして、弘誓心を發し、己が國土の衆生をして同日同時に盡く佛道を成ぜしめ、即ち彼の日に於て盡く滅度を取りたり』と。

爾の時に解釋菩薩、復た佛に白して言さく、『頗し如來至眞等正覺あり、弘誓心を發せり、「若し我れ後に作佛する時、我が十方世界虛空神識をして盡く佛道を得しめん」不や』と。

佛言はく、『不なり。何を以ての故に。衆生の境界は思議すべからず、虛空邊際は涯底あることなく、過去は滅盡して稱量すべからず、將來の生者も亦限りあることなければなり』と。

佛、復た族姓子に告げたまはく、『此の賢劫の前に過去無數阿僧祇劫あり、其の數を過ぎ已つて、復た無數阿僧祇劫を過ぎて、佛あり、平等如來・至眞等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無

【三】麗本に我後生に作り、三本宮本に我滅後在に作る今は三本に從ふ

或は四天下五陰を現じ、或は寶山五陰を現じ、或は須彌山五陰を現じ、或は鐵圍山五陰を現じ、或は大鐵圍山五陰を現じ、或は人世城郭村聚五陰、遊戲浴池所居處五陰を現じ、或は諸天所居宮殿五陰を現じ、或は龍宮五陰を現じ、或は八部鬼神五陰を現じ、或は欲界衆生形を現じ、或は色界を現じて色界の衆生形と作り、或は或は無色界を現じて無色形と作り、或は小世界を現じて小世界形と作り、或は千世界二千世界、乃至三千大千世界を現じ、或は衆生受果報不受果報を現じ、一時一日一月一歳に、成劫敗劫清濁好醜善趣惡趣、諸佛出世菩薩翼從を、盡く能く分別す。是を定眼識通定耳識通と謂ふ。諸の如來の神識を得ば感動して十方佛國に到り、諸佛世尊を承事供養す。復た諸菩薩を見て、衣被・飲食・床褥・臥具・病瘦醫藥を興致し供養す。復た佛國の清淨なる者、不清淨なる者を見る。復た衆生の梵行を修する者、梵行を修せざる者を見る。五趣の衆生の行を受くる同じからず修する所各異るを見る。是を菩薩摩訶薩、定眼識通を得、定耳識通を得ば、盡く過去當來今現在の事を觀じて失ふ所なしと謂ふ。復た次に菩薩摩訶薩、眼識通を得て、權に無數の衆生に境界不可思議を現ぜんに、便ち能く種種の珠寶を變化す。諸衆生、往いて珍寶を取る者あれば、悉く之を施與して皆充足せしむ。或は復た諸佛國土に本行清淨を示現し、皆已に畢れば故らに更に新を造らず。是を菩薩摩訶薩、定識眼通を得、定識耳通を得ば、盡く能く一切衆行を具足すと謂ふ』と。

爾の時に解釋菩薩、佛に白して言さく『世尊、定眼識通を得、定耳識通を得ば、此等の善男子善女人は、何れの地に在りと爲すや、諸佛を供養するは幾時と爲すや』と。

佛言はく『是の善男子善女人は、定眼識通定耳識通を得て、已に過去恒沙の諸佛を供養し、已に總持不退轉行を得て、諸根已に具はり相好成就し、父母端正にして種姓成就す。復た菩薩あり、諸佛世尊を供養するを得て、一佛國より一佛國に至り、諸佛世尊に承事供養すと雖も、然も未だ眼識通耳識通を得ず。或は菩薩摩訶薩あり、眼通を得たりと雖も、未だ衆行の本を具足する能はず、神足力を以て十方無量世界に遊至し、諸佛世尊に承事供養す。或は菩薩摩訶薩あり、眼通耳通を得たりと雖も、未だ定識を得ざる者は、悉く衆生の所念を知る能はず、佛國土を淨め衆生を敎化する能はず。或は菩薩摩訶薩あり、六通清徹し内外無礙なるも、四法門行を具足する能はず、或は菩薩あり、一佛刹に在つて周旋敎化して染著する所なきも、未だ悉く衆

世尊告げて曰はく、『有常泥洹を說かず、亦無常神通を說かさるに非ず。但、我れ神通もて有を知り無を知るが故に之を說くのみ』と。

爾の時に世尊、復た族姓子に告げたまはく、『若し善男子善女人あり、有常神通を得ば、便ち名けて如來至眞等正覺と爲す。無常神通を得ば、此の人或は聖地に在り、或は凡夫地に在り。是を二事各差別ありと謂ふ』と。

爾の時に解釋菩薩、佛に白して言さく、『世尊、如來至眞等正覺、已に眼識神通を得ば、盡く能く過去當來現在の三世の衆生を了見し、乃ち名けて神通と曰ふ。復た言はく、耳に過去當來現在の無數世の聲を聽くと。若し眼に過去色を見ると言ふや、過去は已に滅す。未來色は未だ形兆あらず。眼識は現在の法界なれば則ち我れ疑はず。唯願はくは世尊、無間の衆生をして永く開悟を得せしめたまへ』と。

爾の時に世尊、解釋菩薩に告げて曰はく、『諦らかに聽き諦らかに聽き、善く之を思念せよ。吾れ當に汝が爲に其の義を分別すべし。云何か族姓子、衆生あり已に天眼を得るが如きは、遍ねく一切有形の色相を觀じて、盡く能く分別して亦疑惑なし。過去色を憶ふに忽然として前に在り、盡く皆之を了して障礙なし。耳識神通も亦復た是の如し、念ずれば亦前に在り、耳に所障なく悉く皆之を了す』と。

解釋菩薩、復た佛に白して言さく、『今聞く所の如くんば倍す狐疑を生ず。云何が眼通耳通は、過去の事を見、過去の聲を聞くや。我が現在の自識宿命の如きは、便ち能く自ら宿命の事を知り、我が耳識の如きは現在に現在の事を知るも、云何が過去未來を知るを得んや』と。

佛、解釋菩薩に告げて曰はく、『或は眼通限定識あり、或は眼通非眼定識あり。或は耳通耳定識あり、或は耳通非耳定識あり。若し菩薩摩訶薩、眼識定通、耳識定通を得ば、便ち能く之を見ること初受形より今後身に至り、若しくは大若しくは小と、其の間分別して定意通を失はず。菩薩摩訶薩も亦復た是の如し。此の定意に入る者は一佛境界を觀じ、復た此の界を壞して無數の刹土を觀ず。中に於て變現して五陰を成就し五陰を成就せず。或は小五陰を現じ、或は他五陰を現じ、或は水五陰を現じ、

若し善男子〔善〕女人あり、初に羅漢辟支佛道を求め、菩薩道を行ずるに及んで、中に於て退轉して凡夫地に在りて成就せざる者、是を無常神通と謂ふ。復た次に菩薩摩訶薩あり、已に自識宿命通を得て、自ら無數の宿命を知る。初に道意を發して功德を建立し、諸佛世尊を承事供養して定んで道果を獲。復た自ら憶ふて未だ四大を受けざれば空に倚つて色に著せざるを識る。是を乃ち名けて自識宿命と曰ふ。或は菩薩あり、知他人心通を得るも、彼彼の受身、彼彼の受形を、然も本と從來する所を知る能はず。是を世俗の他心智と謂ふ。復た善男子〔善〕女人あり、既に神通知他人心智を得て、盡く能く內外の神通を具足す。是を自識神通知他人心智と謂ふ。各各別あり。若し善男子〔善〕女人あり、已に眼通を獲ば內外清淨にして、盡く三世の衆生の根原を見る。或は菩薩あり、天眼を以て一千の刹土を見る、或は菩薩あり、二千の刹土を見る。或は菩薩あり、三千大千の刹土を見る。或は菩薩あり、天眼を以て一佛國を見。二佛國を見、三佛國を見る。中に於て悉く有退轉者不退轉者を知る。是を菩薩摩訶薩、天眼通を得て、悉く諸界を知つて無所有なりと謂ふ』と。

佛、復た族姓子に告げたまはく、『若し菩薩摩訶薩あり、已に耳通を得て、盡く十方の諸刹の音響を聞くに、善音あり善音なし、好音あり好音なし。復た善男子〔善〕女人あり、一千二千三千の刹土を聞く。或は菩薩あり、一佛國〔土〕二佛國土三佛國土、乃至無數佛國の音響を聞く』と。

爾の時に佛、解釋菩薩に告げて曰はく、『六事の法に於て便ち具足するを得て各差別あり』と。

爾の時に解釋菩薩、佛に白して言さく、『世尊、如來は大慈もて無量辯を說き、一一に衆生を分別すること牢固にして、六神通の不可思議を說きたまふ。是れ羅漢辟支佛の能く及び知る所に非ず。世尊の言の如くんば、六通は法行に著するなしと演說したまふも、猶ほ狐疑を懷く。世尊の言の如くんば、有常神通は泥洹法を說き、無常神通は有爲法を說く、若し善男子〔善〕女人をして有爲神通を得しめば、便ち身意卽ち滅度すと爲すや』と。

佛言はく、『然らず』と。

解釋菩薩言く、『一切諸法は無生無滅なりと。今日如來の身識卽ち滅度せば。何ぞ以て復た言教あらんや』と。

しと爲す。是を六法各各差別すと謂ふ』と。

爾の時に解釋菩薩、佛に白して言さく、『世尊、有常通の菩薩、此の通を得ば、盡く有形質者は生生絶えずと知り、無常通の者は[二]（菩薩此の通を得ば、盡く形質あるもの）生生にして滅す。（と知る）。今觀見するが如くんば前生は後生に非ず、云何が稱して生生絶えずと言ふや。復た次に如來、自識通を得るを以て盡く宿命を識り、一身二身より百千身に至り、一劫二劫より百千萬劫に至らば、今身は後身に非ず、此の身は前身に異る。今識は後識に非ず、此の識は後に異る。識此の識を離るれば則ち衆生に同じ。云何が世尊、言つて自識宿命通と稱するや。又世尊言はく、『菩薩摩訶薩、知他人心通を得ば、盡く、一切衆生の心識の所知を知る』と。自識心通は亦已心他心を知り、知他人心通は亦已心他心を知る。此の二神通に何の差別ありや。世尊の言の如くんば、「菩薩摩訶薩、眼通を得ば、十方を觀見して欲界より上有想無想天に至るまで、皆悉く有受形・不受形の者、有受善惡報・不受善惡報の者を觀見す。」と。復た言はく、「耳通を得たる菩薩は悉く十方の有苦樂の聲・無苦樂の聲の者を聞き、受善惡報・不受善惡報の者を聞く」と。眼通は亦見、耳識は亦聞く、此の二何の差別ありや。唯願はくは世尊、重ねて演べて分別し、我等をして永く狐疑なからしめたまへ』と。

佛、解釋菩薩に告げて曰はく、『菩薩摩訶薩、有常通を得ば、諸法を覺了するに、法性に住して變せずと知り、菩薩摩訶薩、無常通を得ば、諸法には皆變易ありと覺了す。是を無常通と謂ふ。復た次に諸法の體性は自爾にして、佛あるも佛なきも亦生滅なし。是を有常通と謂ふ。復た次に諸法の無常通とは、悉く磨滅に歸して亦久しく存せず、生生に住せず。是を無常通と謂ふ。復た次に菩薩摩訶薩、有常通を得ば、便ち如來の諸法、四意止・四意斷・四神足・五根・五力・七覺意・八賢聖道を具足すと爲す。是を有常通と爲す。復た次に諸法は、當來過去現在、善法惡法悉く無所有なり。是を無常通と謂ふ。復た次に菩薩摩訶薩は復た衆生の三乘道を發し、應に羅漢を得べきは、師を求めて覺悟し、果、所願の如く、必然として疑はざるを觀ず。復た衆生の緣覺心を發し、獨り曠野に處し其の所果の如く必然として疑はざるを見る。復た衆生の菩提心を發し、其の所願の如く必然として疑はざるを見る。是を菩薩摩訶薩の有常神通と謂ふ。

【二】三本宮本に（・）の中の文句あり。

『云何が世尊、有常神通、無常神通、自ら宿命を識る神通、他の宿命を識る神通、眼識神通、耳識神通、此の六法義に何の差別ありや』と。

爾の時に世尊、解釋菩薩に告げたまはく『是の如し是の如し。汝が問ふ所の如し。此の六神通各各異ならず。今當に汝が與に說くべし。菩薩摩訶薩、有常通を得て盡く萬物を觀ずるに、生生絶えず、前生は是れ前生、後生は是れ後生なり。若し一劫を經て百千劫に至るも、劫起れば則ち起り劫滅すれば則ち滅す。此の識を觀見するに亦腐敗せず。何を以ての故に。無明の根深くして敗ることを得べからざればなり。復た次に無常通とは、亦復た一切衆生の有形の類を觀見するに、生者滅者あり、一劫より乃至百千劫まで劫起れば則ち起り劫滅すれば則ち滅す。彼の受形を知るに悉く磨滅に歸して常存せず。是を菩薩摩訶薩、有常通と無常通と各各差別すと謂ふ』と。

佛、復た解釋菩薩に告げて曰はく『是に於て族姓子よ、若し菩薩摩訶薩、若し自識通を得ば、便ち能く自ら一身二身を見て百千身に至り、劫より劫に至る其の中の經歷を盡く能く自ら識る。「我れ某國某縣に生れ、姓字是の如く種姓是の如し」と。復た自ら初に受けし四大受形若干を識知し、悉く能く善惡の行を分別するを、自ら自識通と謂ふ』と。

佛、復た族姓子に告げたまはく『菩薩摩訶薩、他人の神通智を得ば、此の欲色界より乃至有想無想天まで、盡く能く一一の所趣を分別し、一歲より百千萬歲に至り、一劫より百千萬劫に至る、其の中の成敗し經歷する所の處を、盡く能く分別し悉く皆識知す。是を菩薩摩訶薩、他人を知るの神通と謂ふ』と。

佛、復た族姓子に告げたまはく『菩薩摩訶薩、眼識通を得て、三千大千世界を觀ずるに、受形者不受形者を知り、悉く能く有形を見るに、一歲より百千萬歲に至り、一劫より百千萬劫に至るまで、皆悉く觀見して錯亂せず。是を菩薩摩訶薩、眼神通を具して所著なしと謂ふ』と。

佛、復た族姓子に告げたまはく『菩薩摩訶薩、耳識通を得ば、悉く十方衆生の有苦樂の聲の者、無苦樂の聲の者を聞き、善惡報を受くる聲の者、善惡報を受けざる聲の者を聞いて、皆悉く聞知して錯亂せず。是を菩薩摩訶薩、耳識通を具して所著な

照し、靑黃赤白、若しくは高若しくは下、城郭丘聚姓字名號、悉く能く自ら見て一一分別す。云何が族姓子よ、衆生無量にして形品同じからず、云何が日天子の光明、悉く彼を照して盡く同一色なる、日光中より無量光を出して無量形を照すと爲すや、一光より無量形を照すと爲すや』と。

爾の事〔時に〕に解釋菩薩、前んで佛に白して言さく『我が問ふ所の如きは、如來一音もて無量の諸法を出生したまふ、此の音聲は四大より出づ。當來過去今現在に出す所の言教は我れ則ち疑はず。今日光明の性分自ら爾なり、云何が言教の同じきを以てするや』と。

佛、族姓子に告げたまはく『如來の四大の出す所の音響は悉く各教あり、盡く能く一切諸法を出生す。諸佛世尊の說法したまふ時に當つて、亦念言して是を說き是を置かず。心寂然として滅して若干を念ぜず。猶ほ日天子の一光の照す所、普ねく諸城に遍ねきがごとく、亦我が照す所あるに、念あらずして其の光を蒙る者各所趣を知る。是を解釋菩薩よ、如來の捷疾自在の智は多く益する所あり、遍ねく十方有形の識を知り化して之を度すと謂ふ』と。

爾の時に解釋菩薩、復た佛に白して言さく『如來の出す所の音響は明あるも明なきも闇あるも闇なきも、皆能く進趣して道教を成ずるも、日光の照す所は多く所傷あり、闇を樂しむ者多し、何ぞ此を以て喩と爲すを得んや』と。

佛、族姓子に告げたまはく『人の空に遊ぶも意迷へば悟り難きが如し。汝今是の如く未だ吾が譬を解せず。吾が今說く所は如來の音響は四大より出でて、盡く能く一切諸法を出生し、日光天子の光は悉く能く遍ねく一切有形を照す。一は能く諸法を出生し、二は能く遍ねく有形を照す。何の差別あつて而も狐疑を懷くや』と。

爾の時に解釋菩薩、深く自ら思惟して豁然として大悟し、復た重ねて佛に白して言さく『善い哉、世尊。如來至眞等正覺は、無形法なるを以て形を以て教授し、無言教法なるを以て言を以て教授したまふ。今重ねて啓する所あり、唯願はくは如來、時を以て發遣して狐疑なからしめたまへ』と。

佛言はく『善い哉、善い哉、族姓子よ。如來當に權便を以て之を發遣すべし』と。

ばなり、如來の神智思議す可からず。佛識の念ずる所の如きは無量の行本を以て、悉く能く一切衆生の所應の果報を識知す。亦羅漢辟支佛の境界に非ず。是の故に如來は一音もて盡く能く一切諸法を出生す』と。

爾の時に解釋菩薩、復た佛に白して言さく『世尊、甚奇甚特なり。衆生の境界は思議す可からず。或は弘誓あつて大乘に趣き、或は羅漢辟支佛心を發し、或は空定無相無願を樂しむ、復た天人に在つて福を受くるを樂しむあり。此の如き等の類思議す可からず。彼彼の衆生彼彼の心識の、所念同じからず行亦一に非ず。云何が一音を以て諸法を出生し、盡く能く一切衆生に周遍するや』と。

爾の時に世尊、解釋菩薩に告げて曰はく『如來の神智は無形にして覩見す可からず。智あり、名けて速疾自在と曰ふ。盡く能く遍ねく衆生の心識に深きあり淺きあるを知り、皆能く分別す』と。

時に解釋菩薩、復た佛に白して言さく『衆生の神識は有に非ず。無に非ざるを、或は有常と計し或は無常と計す。云何が捷疾自在智を以て盡く能く一切智を出生するや』と。

佛、解釋菩薩に告げたまはく『今當に汝が與に喩を引くべし、智者は喩を以て自ら解す。云何が族姓子よ、日天子の四大身を受くるが如きは、十二由延にして、內宮牆壁は外牆壁を去る七由延、其の間光照して倍す明かなること無量なり。第二宮牆は、第三宮牆を去る、復た去ること七由延にして光明轉た減ず。乃至第七各相去る七由延にして光明の照す所各各如かず。最も第七牆外に復た衞護牆あり、相去る二由延にして光明轉た復た如かず。內第一宮牆に在るを名けて如意隨珠所作と曰ひ、其の間の熱きこと無根本火の如し。第二牆を名けて隨焰珠所造と曰ひ、其の熱きこと黑繩火の如し、第三牆を名けて焰光影と曰ひ、其の熱きこと焰火の如し。第四牆を名けて勇焰珠と曰ひ、其の熱きこと灰沸火の如し。第五牆を名けて極焰陰と曰ひ、其の熱きこと銅葉火の如し。第六牆を名けて琉璃と曰ひ、其の熱きこと紅蓮華火の如し。第七牆を名けて水精と曰ひ、其の熱きこと青蓮華火の如し。云何が族姓子よ。此の日天子、一日一夜に四域を周遍し行くこと極めて速疾にして、其の光明を四天下

豈諸法あらんや』と。

佛言はく、『是の如し是の如し、汝が言ふ所の如し。如來の諸法は空の如く無形なり。四大の音響は、四大を出づ。如來の音響と及び虚空界と豈異らずや』と。答へて曰く、『然らず。我が問ふ所の如くんば、如來の音響は本と四大を出でて、便ち一切諸法を出生すること、此れは則ち疑はず。云何が虚空復た諸法を出生すと言ふや』と。

佛言はく、『止みね止みね、族姓子、今、汝の問を發する者は皆是れ如來の威神なり。云何が族姓子、如來の音響は有なりや』と。答へて曰く、『無なり』と。

『云何が族姓子、如來の音響は、無なりや』と。答へて曰く、『如如なり』と。

佛、復た問ひたまはく、『如來の音響は有に非ず無に非ず。當に何とか此の法を名くべき』と。答へて曰く、『此の法は當に空と稱すべし』と。

佛言はく、『空は自ら無形なり。亦此に非ず亦彼に非ず亦中間なし。云何が空と爲すと稱するを得ん』と。

解釋菩薩、佛に白して言さく、『如來は廣長舌にして自ら空性を說きたまふ。有に非ず無に非ず亦若干なし。我が觀ずる所の如きは本と此の空なし。況んや我れ當に復た空の名號を立つべきや』と。

佛言はく、『族姓子よ、空は有に非ず無に非ず亦中間なし。我が今日、如來至眞等正覺の十號具足するが如きも、亦有に非ず亦無に非ず亦中間なし。說く所の諸法も亦復た是の如し。何ぞ以て如來を謗り、空の名號を如來より出づと言ひ稱するや』と。

爾の時に世尊、諸會の心中に疑ふ所を解せんと欲して、便ち四部衆に告げたまはく、『如來は一音もて便ち能く一切諸法を出生し、此れ虚に非ず不有に非ずと說きたまふ。是れ但だ衆生は計して著想を生ずるが爲の故に、迷惑に處して永く四流に在れ

爾の時に世尊、解釋菩薩の所問を聞いて卽ち報(こた)へて曰はく、『善い哉善い哉、族姓子よ、汝今乃ち空無形の法を問ふ。是れ羅漢辟支の及ぶ所に非ず。今當に汝が與に一一分別すべし。諦かに聽き諦かに聽き善く之を思念せよ。如來の音響は空の如く無形なるが故に、諸法を出生すること不可思議なり』と。

解釋菩薩、佛に白して言さく、『云何が世尊、如來の音響は空の如く無形なるや。云何が復た諸法を出生すと言ふや』と。

佛、解釋菩薩に告げて曰はく、『如來の音響は有形と爲すや』と。答へて曰く、『無形なり』と。

又問ふ、『音響無形ならば、響、何より出づるや』と。答へて曰く、『四大の因緣にて識あつて分別す』と。

佛、復た族姓子に告げたまはく、『汝が所問の如し。如來の音響は空の如く無形なり。云何が無形法を以て諸法を出生し、響は、四大に從ひ空法界に非ざるや』と。答へて曰く、『然らず』と。

佛、復た解釋菩薩に告げたまはく、『云何が族姓子よ、如來の音響本と四大より出でば、響滅せば復た何處に歸せん』と。

答へて曰く、『響は歸する所なし』と。

佛、復た問うて曰く、『若し異空ありて此の響を出すや』と。

答へて曰く、『然るに非ず、異空よりして音響を出さず』と。

佛言はく『亦異空に非ず、亦此の空に非ず。將如來は汝に於て咎[一]あるに非ず』と。

解釋菩薩、佛に白して言さく、『世尊、自ら如來の音響は空の如く無形にして便ち能く諸法を出生すと稱したまふ。審らかに知る、此の法は、如來の響に由つて乃ち諸法を出生するを、云何が復た虛空界に於て復た諸法を出生すと言ふや。人の冥に於て明を求むること、甚だ難得と爲す如し。今、我れ疑を懷くこと甚だしく彼に倍す』と。

佛、復た解釋菩薩に告げて曰はく、『云何が族姓子、今此の諸法の名生ず、云何にしてか有る、空に從ると爲すや。空に從らざるや』と、答へて曰く、『今、諸法の法性は自ら本と空なり。空性亦空なり。空空自ら空なり、

【一】咎に麗本各に作り三本宮本咎に作る

卷の第四

音響品第九

爾の時に世尊、復た重ねて如來神足の無量の法義を宣べんと欲して、便ち一偈を以て十方無量の世界に遍滿したまふ。爾の時に如來、卽ち頌を說いて曰はく、

有無は空より生ず、　彼の聲は我が有に非ず、　聲聲各各異る、　故に尊法敎を說く。」
佛行は量るべからず、　有に非ず亦無ならず。　一音もて諸法を演ぶ、　此に由つて成佛するを得。

と。

爾の時に世尊、此の偈を說き已つて便ち十方の諸佛世尊を見たまふに、各稱歎して說く『善い哉善い哉、諸佛は清淨に衆行は齊しく同じく、十方無央數の世雄最勝、同一音響もて諸法を演說す、六度無極にして一一の度中に、皆無量の諸佛の種姓あり、無盡の法にして思議すべからず』と。云何が種姓は思議すべからさる。十方佛の如きは盡く同一響にして、一偈の義を以て普ねく十方無量の衆生をして盡く無盡法門に入り、皆志趣を同じうして一日一時に悉く皆成道せしむればなり。復た一音を以て無量恒沙の刹土に遍滿し、彼の衆生をして此の音響を聞いて、自然に縛を識り永く解脫を得しむ。

時に菩薩あり、名けて解釋と曰ふ。卽ち座より起ちて威儀を執持し、已に衆望を捨てて諸法を曉了し、衆智自在にして不起法忍に逮る。偏へに右臂を露はし長跪叉手して前んで佛に白して言さく、『甚奇甚特なり、今、如來の一音一響を聞くに、一度の中に盡く法典を說き衆行を具足す。亦羅漢辟支佛の能く逮及する所に非ず、今、問ふ所あらんと欲す。云何が音響の中を以て如來衆行の法を具足するや。彼の衆生先に諸法を得、後に此の音を聞いて乃ち覺寤を得ると爲すや。音響中に諸法の名を出すと爲すや』と。

べし。云何が四と爲す。神足あり、名けて衆海と曰ふ。菩薩にして此の神足を得る者は、諸有の四使、趣來向門し、穢垢已に盡くれば便ち門に入るを得、心垢未だ盡きざれば門に入るを得ず。是を菩薩、九地中に在つて四神足を具すと謂ふ』と。

佛、復た族姓子に告げたまはく『菩薩、十地中に在つて四神足を具す。云何が四と爲す。神足あり、名けて光明と曰ふ。菩薩にして此の神足を得る者は、十方無數の佛土に遊騰して、盡く衆生の心中所念を觀じ、樹王の下に坐して結加趺坐す。[一〇]爾して乃ち〔爾の時〕弘誓の心を具足す。復た神足あり、名けて無量門と曰ふ。菩薩にして此の神足を得る者は、所趣を分別して盡く一乘に趣く。復た神足あり、名けて一念と曰ふ。菩薩にして此の神足を得る者は、盡く十方無量の衆生をして一念に成道せしむ。復た神足あり、名けて莊嚴と曰ふ。菩薩にして此の神足を得る者は、一日の中に、盡く共に諸佛刹土を莊嚴し、同字同時に一時に成道す。是を十[一一]住の菩薩摩訶薩、四神足法を具すと謂ふ』と。

【一〇】宮本爾時に作る。
【一一】住　元明二本に地に作る。

此の神足を得ば、遍ねく十方無量の世界に遊び、悉く衆生の所念を了つて、即ち法本を說いて法門に通達せしむ。復た受法神足門あり、是の神足を得ば、現行法報を以て之を度脫せしむ。是を菩薩、五住地に在つて是の四神足行を具足すと謂ふ』と。

佛、復た族姓子に告げたまはく、『菩薩六地中に在つて、復た當に四神足行を具足すべし、云何が四と爲す。神足あり、名けて墮落と曰ふ。菩薩にして此の神足を得ば、遍ねく十方無量の世界に遊び、盡く衆生の心中所念を觀じ、諸の惡果報もて應に淳淑なるべき者には、漸く與に說法して[七]墮落せざらしむ。復た無根神足あり、是の神足を得ば、遍ねく十方無量の世界に遊び、盡く衆生の心中所念を觀じて、其の根本を掘り永く斷じて生ぜざらしむ。復た神足あり、離垢出要と名く。此の神足を得ば、遍ねく十方無量の世界に遊び、盡く衆生の心中所念を觀じ、彼の衆生をして出要の道を得しむ。』と（梵本を了せず一事を闕く）

佛、復た族姓子に告げたまはく、『菩薩摩訶薩、七地に在るを以て、名けて不退轉法と曰ふ。便ち當に四神足法を具足すべし。云何が四と爲す。神足あり、名けて衆生身不淨と曰ふ。菩薩にして此の神足を得る者は、能く惡露の不淨を示現して、此に因つて無數の衆生を敎化す。復た神足あり、名けて道德と曰ふ。菩薩にして此の神足を得る者は、能く正道を以て三道を捨てて阿羅漢を得。復た神足あり、名けて覺正と曰ふ。菩薩にして此の神足を得る者は、能く衆生をして皆信地に立つて退轉せざらしむ。是を菩薩摩訶薩、七地中に在つて神足法を具すと謂ふ。』と。

佛、復た族姓子に告げたまはく、『菩薩摩訶薩、八地中に在つて四神足を具足し、廣大無邊にして聲聞辟支佛の能く及び知る所に非ず。云何が四と爲す。或は神足あり、[八]（本と未だ道心を發さず、）菩薩にして此の神足を得る者は、彼の衆生をして始めて信地に立たしむ、餘行未だ就らず。復た神足あり、名けて無生と曰ふ。菩薩にして此の神足を得る者は、一一に諸行の無我を觀察す。復た神足あり、名けて貪著と曰ふ。菩薩にして此の神足を得る者は、諸佛の相好を貪樂す。復た盡漏神足あり。菩薩にして此の神足を得る者は、能く一意をして諸の漏法を斷ぜしむ。是を菩薩摩訶薩、八地中に在つて四神足を具すと謂ふ』と。

佛、復た族姓子に告げたまはく、『菩薩、九[九]住（地）中に在つて、便ち當に四神足法を具足す

【七】麗本には令使墮落とあり。明本・宮内省本には令不墮落とあり。
【八】本未發道心　この一句は彼衆生にかゝるものなるべし。餘行未就とあるに對照して之を知る。
【九】住　三本宮本には地に作る。

と曰ふ。此の神足を得ば、遍ねく十方無量世界に遊んで、衆生の心中所念の垢欲の、心を纒ふを觀じ、便ち能く凡夫の識念を蠲除して聖諦に入らしむ。復た三巧便神足あり、菩薩にして此の神足を得る者は、遍ねく十方無量世界に遊び、衆生の心識所念を觀知して、能く後の意を建て三等法を立つ。是を菩薩摩訶薩、此の四神足法を得て、能く十方無量世界に遊び、則ち能く二地行法を具足すと謂ふ。』と。

佛、復た族姓子に告げたまはく、『菩薩摩訶薩は、三地中に在つて、復た四瓔珞神足あり。能く此の身を變じて無量形を成じ、還つて合すれば一と爲る。云何が四と爲す。本要神足あり、此の神足を得ば、遍ねく十方無量世界に遊び、普ねく衆生の心中所念を觀ずること、我が所念の如くにして之を度脫せしむ。復た法行然熾神足あり、菩薩にして此の神足を得ば、遍ねく十方無量世界に遊び、盡く衆生の心中所念を觀じ、喜怒あり、喜怒なき者を見て、然熾法を以て之を敎化す。復た無形神足あり、此の神足を得ば、遍ねく十方無量の世界に遊び、衆生の心中所念を觀じ、心識なきを以て之を敎化す。復た三清淨神足あり、此の神足を得ば、遍ねく十方無量の世界に遊び、衆生の所念を觀知して、三法行を說いて三想を滅せしむ。云何が三法行と爲す。一には空。二には識。三には我なり。是を菩薩摩訶薩、三地中に在つて四神足行を具足すと謂ふ』と。

佛、復た族姓子に告げたまはく、『菩薩摩訶薩、四地中に住して、復た當に此の四神足を具足すべし。云何が四と爲す、復た神足あり、名けて無相と曰ふ。菩薩にして此の神足を得る者は、遍ねく十方無量の世界に遊び、三色天より虛空際に至るまで普ねく衆生をして無相法を得しむ。復た除貪神足あり、此の神足を得ば、遍ねく十方無量の世界に遊び、盡く衆生の心中所念を觀じて、定意の法を以て之を敎化す。復た轉法輪神足あり、此の神足を得ば、遍ねく十方無量の世界に遊び、四無畏不死甘露の法を轉じて、久しく飢渴せる者をして充足を得しむ。復た等慧神足あり、此の神足を得ば、遍ねく十方無量の世界に遊び、盡く衆生の心中所念を觀じ、平等の慧を以て之を度脫せしむ。是を菩薩摩訶薩、四地に住して四神足行を具足すと謂ふ』と。

佛、復た族姓子に告げたまはく『菩薩摩訶薩、五地中に在つて、復た四神足あり、云何か四と爲す。神足あり、名けて無量門と曰ふ。菩薩にして是の無量門を得る者は、盡く衆生の心中所念を觀じ、解脫慧を以て之を度脫せしむ。復た行神足あり、

心意を印可す。是を第三果報と謂ふ。復た次に族姓子よ、若し善男子〔善〕女人、已に正法を聞くも、心の度る所に非ず念の測る所に非ず、皆平等にして二想あることなからしむ。是を第四果報と謂ふ。復次に族姓子よ、四神足行を具足することを得んと欲せば、亦當に此の四事の果報を念ずべし。云何が四神足なる。是に於て菩薩摩訶薩は、初發意・一地・二地より乃至十地まで、各神足行あり行同じからず。或は菩薩あり、已に一地に在つて便ち神識を得、十方無量世界に遊行し、未だ定意を得ずして衆生心を知る。復た菩薩あり、既に一地に在りて佛の色相衆好具足するを得、亦復た十方世界に遊觀して諸佛世尊を禮事供養し、身通を得と雖も、未だ衆生を敎化し佛國土を淨むるに堪任する能はず。復た菩薩摩訶薩あり、已に初地に在つて、諸佛世尊を禮事供養し、便ち能く説法して衆生を敎化す。復た菩薩摩訶薩あり、已に初地に在つて佛國を淨修するも、未だ自ら第一地の事を知る能はず。復た菩薩摩訶薩あり、未だ弘誓大乘の心を具せず、中に於て便ち猶豫想著を生ず。此の如き等の比(たぐひ)は必ず聲聞緣覺道の中に墮つ。復た菩薩摩訶薩あり、一地淸淨の行を修治し、復た神通を以て廣く十方無量世界に遊び、遍ねく衆生の心中所念を知るも、然も未だ彼の衆生を度して道撿に安處せしむる能はず。

復た菩薩摩訶薩あり、已に初地に在つて四神足を得、第一神足を名けて苦觀と曰ふ。菩薩にして此の神足を得る者は、恒に諸佛世界に遊び、諸苦の衆生を無爲に處ることを得しむ。第二神足を名けて音響と曰ふ。菩薩にして此の神足を得る者は、遍ねく十方無量世界に遊び、諸有の衆生の應に音響に從つて度を得べき者は、菩薩の所説を聞いて信解せざるなし。復た神足あり、名けて發意と曰ふ。菩薩にして此の神足を得る者は、遍ねく十方無量世界に遊び、諸有の衆生の意を發して道に趣くを、輒ち能く擁護して成就を得しむ。復た神足あり、名けて感動と曰ふ。菩薩にして此の神足を得る者は、遍ねく十方に遊んで衆生心を觀じ、應に空觀に從つて度者を得べし。是を初地の菩薩摩訶薩、是の四神足行を具足すと謂ふ。

二地の菩薩に復た四事あり、云何が四と爲す。菩薩は神足あり、名けて滅種と曰ふ。是の神足を得ば、遍ねく十方無量世界に遊び、盡く衆生の意識所念を知り、凡夫種を滅して聖諦境に入らしむ。復た滅神足あり、此の神足を得ば、遍ねく十方無量世界に遊び、盡く衆生の心中所念に善惡の想あるを觀じて、能く惡想を滅して聖諦に入らしむ。復た神足あり、名けて除苦

如來品第八

爾の時に軟首菩薩、佛に白して言さく、『世尊、諸の族姓子は、云何が無盡法藏を修習するや』と。佛言はく、『若し善男子〔善〕女人あり、無盡法を修することを得んと欲せば、當に五苦法門を修すべし。云何が五苦法門と爲す。若し衆生あり、十方界を見て、當に苦慧苦識を聞かば便ち能く形に隨つて往いて接度すべし。是を一法と謂ふ。復た次に族姓子よ、若し善男子〔善〕女人あり、無量世界の衆生の所念の空無所有なるを觀ぜんと欲し、空苦慧を得んと欲せば、當に此の意を建て亦不退轉なるべし。是を二法と謂ふ。復た次に族姓子よ、諸の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、皆平等意を得て、無盡慈を行じ、未だ獲ざる者に獲しめ未だ得ざる者に得しめ、未だ度せざる者を度す。是を三法と謂ふ。復た次に族姓子よ、若し善男子〔善〕女人あり、家に居て成就し、種姓亦爾り、皆苦慧を知りて心、樂に在らず、是を四法と謂ふ。復た次に族姓子よ、若し善男子〔善〕女人あり、如來無量の法門、無盡法藏衆智自在なり。是を五法無盡法藏と謂ふ。復た次に族姓子よ、若し善男子〔善〕女人あり、無盡法藏を具足するを得んと欲せば、復た五事あり。云何が五と爲す。諸佛世尊、常に等定に在り、時あつて虛空觀に入り、衆生を分別して、賢聖法律に在る有るも、賢聖法律に在らざるも、悉く能く安處して各其の願を充たす。是を一法と謂ふ、復た次に族姓子よ、若し天に生ぜんと欲せば、便ち當に諸天の戒法を修行すべし。有愛欲天あり、無愛欲天あり、或は時に天の愛樂に著し、愛樂に著せざるあり、能く二事を具足して悉く染著なくして、乃ち無盡法に應ず。復た次に族姓子よ、復た當に四果報行を具足すべし、便ち神通に乘じて無量世界に遊ばん。云何が四果報行なるや。諸佛如來は、恒に寂寞に處し、若し諸天・龍神・乾沓惒・阿須倫あり、如來に從つて眞實を聞かんと欲せば、未だ問を發せざる頃、如來已に此の族姓子の當に是の義を向ふべきを知りたまふ。是を一法の四果報行と謂ふ。』と。佛、復た族姓子に告げたまはく、『若し善男子〔善〕女人、心意寂然として法を聞かんと欲せずんば、如來悉く是れ、是に從ふべきや從ふべからざるや、斯れ法を聞かんと欲するや、法を聞かんと欲せざるやを知りたまふ。是を族姓子よ、第二果報と謂ふ。復た次に族姓子よ、若し善男子〔善〕女人、已に如來印を得ば、便ち能く衆生の

まで、一切衆生をして已の如く異らざらしめん者は、當に是の十無盡藏を習ふべし』と。

爾の時に如來至眞等正覺、將に說法して法輪を轉ぜんと欲して、便ち無盡藏定意に入り、十方恒沙の諸佛を感動し、時に應じて面見し、同時に一響もて各頌を說いて曰く、

現法は四義を離る、如來は行に著するなし、一を修して佛道を得、念進に怠あることなし。』三向平等空なり、號して無盡藏と曰ふ。十行の本を捨てず、是を如來藏と謂ふ。」佛法は不思議なり、空の如くにして所受あり〔無し〕[六]。我が識、我を見ず、是れ無盡藏に應ず。」佛行は盡あるに非ず、所演量る可からず。一切を慈愍するが故に、無所有を示現す。」如來諸佛の相は、成道すれば差特なし、彼の衆生の意に隨つて、相に高下あるを知る。」我れ今等あるなし、衆生苦を厭患して、道を以て自ら意を攝して、諸の外道を降伏す。」一切諸法の本は、緣なくしては亦合せず、道は平等覺に從つて、乃ち如來慧に逮る。」諸佛は不思議なり、法本は不思議なり、緣報は不思議なり、分別は不思議なり。」我れ住して千劫を經て佛佛自ら種難するも、未だ法藏を盡して、毫釐も損減ある能はず。』我等已に成佛して、空法身を具足せしは、昔、無盡藏を修して、自ら人中の尊を致せしなり。」欲界は塵勞多きも、欲を斷ずるは餘處に非ず、欲に於て能く欲を離るるは、皆無盡藏に由る。』住すと雖も住に處らず、亦形色相なし。分別は諸の識著なり、佛識に形相なし。」如來に色相なきも、衆生の爲に相を現ず。著なく染汚なく、如來身亦空なり。」十方界に遍滿すること、今の等正覺の如きは、本識不可思なり、無盡の義を演說す。」

と。

是の時、十方の諸佛、此の偈を說き已るや、八方上下に六反震動し、唐上に六百の比丘あり、本と羅漢に趣きしが、尋いで時に意を廻らして無盡藏に逮る。十三億の衆生あり、亦無盡法藏を得たり。

【六】有所受　有字元明二本には無に作る。

し、世尊。何を以ての故に。是の善男子善女人は、已に佛件に住し便ち名けて佛と爲す。況や復た十方無量の世界に、信地より乃至八地までをや。故に九地の菩薩摩訶薩の一念の徳に如かず』と。佛、言はく、『若し善男子善女人あり、十無盡藏を執持し諷誦せば、我の如く今日、如來至眞等正覺明行成爲善逝世間解無上士道法御法御天人師を成ぜんも、猶ほ尙ほ十無盡藏を得ず。若し善男子善女人あり、十無盡藏を修習するを得んと欲する者、盡く十方如來と一時に得道する者、同時に般泥洹する者、盡く衆生の心識想著を滅する者、前に在つて成佛せんと欲する者、衆生を攝して同じく佛心の如くならんと欲する者は、當に是の十無盡藏を修習すべし』と。

爾の時に釋迦文佛、大衆に在つて斯の頌を說きたまふ。

吾れ今成佛すと雖も、　昔の勸助の報に由る。　正法は移すべからず、　大道に若干なし。」　自ら過去世を念じ、承事して諸佛に供へ、　勸助するに道法を以てし、　捨形して無形に至る。」　復た無數劫に於て、　無盡藏を獲ず、意を建てて想あることなくして、　漸く無爲の岸に至る。」　如來等正覺は、　三達六通の慧もて、　勸助して衆行具はり、　乃ち無盡藏を獲たり。」　本願今報ゆるを得て、　故に天中天と號す。　斯れ勸助の福に由つて、　自ら無極尊を致せり。」　江海は竭盡すべく、　山河亦崩落し、　日月に虧盈あるも、　法藏は盡すべからず。」　諸佛の權慧の道は、其の力思ふ可からず。　諸の衆生を育養して、　慈愍して法を轉ず。」　或は現じて母胎に在り、　父母を化せんと欲し、復た轉輪王と作りて、　無數の土を統領す。」　快なる哉斯の果報、　此の無盡藏を獲るや。　修行して成佛するを得、變化に窮りあることなし。」　昔、無數世に在つて、　福を作り功德を建つ、　勸助を第一と爲す。　是の上に出づるものあることなし。」　金銀七寶具は、　色相に比あるなし。　皆勸助の報に由り、　無盡の諸法藏あり。」　虛空は無所有にして、　由つて形色相を造る。　此の法は甚だ深妙なり、　眞諦にして毀る可からず。」

と。

爾の時に釋迦文如來、此の偈を說き已つて、復た善男子善女人に告げたまはく、『若し菩薩摩訶薩あり、初發意より乃至成佛

告げたまはく、『若し善男子善女人あり、諸法を修行して四地を成就し、皆具足して上の信地二地三地の如くならしめば、其の福、寧ろ多きや不や』と。歎首、佛に白して言さく、『甚だ多し甚だ多し、世尊』と。佛言はく、『故に此の善男子善女人の、十無盡法を執持し諷誦するに如かず。其の福、彼の善男子善女人の上に勝る。』と。佛、復たた歎首菩薩に告げたまはく、『云何が族姓子よ、若し善男子善女人あり、誠諦を具足して法を狐疑せず、五地如來の法印を捨てず、及び信地乃至四地を行じて、十方無量世界に遍滿せば、其の福、寧ろ多きや不や』と。歎首、佛に白して言さく、『世尊、甚だ多し甚だ多し』と。佛の言はく、『故に此の善男子善女人の、十無盡法を奉持し修行するに如かず。其の福、甚だ多く以て喩ふべからず』と。佛、復た歎首菩薩に告げたまはく、『復た此を捨て已つて、若し善男子善女人あり、已に六地に在つて衆行を具足し、已に彼の空無相願を越ゆることを得て、必然として疑はず、幷に信地乃至五地を行じ、十方無量世界に遍滿す。云何が族姓子、其の福、寧ろ多しと爲すや不や』と。歎首、佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し』と。佛、言はく、『故に此の善男子善女人の十無盡藏を執持し諷誦するに如かず。其の福、彼の上に出づ』と。佛、復た歎首に告げたまはく、『云何が族姓子、若し善男子善女人あり、弘誓堅固にして、七地に在つて不退轉に住し、諸法を具足して彼我なく、信地より乃至六地まで、衆德具足し諸行皆備はらば、云何か族姓子、其の福、寧ろ多きや不や』と。歎首、佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し、世尊』と。佛、言はく、『故に是の善男子善女人の十無盡藏を執持し諷誦するに如かず、其の福、彼の上に出づ』と。佛、復た歎首菩薩に告げたまはく、『若し善男子善女人あり、已に七地を過ぎて前進して成佛し、「吾れ今已に彼此の想なきに住す、我が自覺の如きは必然として疑はず」と。此の如き等の類、十方に遍滿し、供養すること前の信地より乃至七地の如くんば、其の福、寧ろ多しと爲すや不や』と。歎首、佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し、世尊』と。佛、言はく、『故に是の善男子善女人の十無盡藏を執持し諷誦するに如かず、其の福、彼の上に出づ』と。佛、復た歎首菩薩に告げたまはく、『若し菩薩摩訶薩あり、已に無生無起滅法を得て、心、虚空の如く點汚すべからず、唯だ權慧を須つて樹王下に詣る。此の如き等の類、始め信地より乃至八地まで、衆行を具足し成佛久しからず、三千無量の世界に遍滿せば、云何が族姓子、其の福、寧ろ多しと爲すや不や』と。歎首、佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多

て、本と此の緣を造る。今復た報緣因緣もて窮ることを得たり。復た次に如來至眞等正覺は、大弘誓四等の心を發し、能く十方有形の衆生をして、一日にして成佛して衆相具足し、如實如願に皆佛道を成ぜしむ。復た次に如來至眞等正覺は、建意牢固にして本心を捨てず。復た無量の諸佛世界をして、普ねく共に一日にして盡く滅度を取らしめ、其の所念の如くにして亦違錯せざらしむ。是を十無盡如來法要と謂ふ。無畏座に昇つて此の法要を具し、如來の無窮盡の法を宣暢す、亦羅漢辟支佛の能く宣傳する所に非ず』と。

爾の時に世尊、軟首菩薩に告げて曰はく、『云何が族姓子よ、若し善男子善女人あり、空無相願を習行し、皆信地に立ちて菩薩行を修せば、其の福寧ぞ多しと爲すや不や』と。軟首菩薩、佛に白して言さく、『甚だ多し、甚だ多し、世尊、稱量すべからず、以て喩と爲すなし』と。

佛、軟首に告げたまはく、『善男子善女人、十無盡藏を執持し諷誦するに如かず、其の福、彼の善男子善女人の者の上に勝る』と。佛、復た軟首菩薩に告げたまはく、『云何が族姓子よ、若し善男子善女人あり、已に二地に在つて衆行を具足し、懈怠を懷いて下劣心あらず、幷に復た供養すること前の立信の如し、十方恒沙の諸佛國土も、皆此の類の如くんば、其の福寧ろ多きや不や』と。軟首、佛に白して言さく、『甚だ多し甚だ多し、稱計すべからず。何を以ての故に。若し善男子善女人あり、諸法を修行して、信地より二地に至り、此の如き等の類、十方無量世界に遍滿し、甚奇、甚特にして喩と爲すべからざればなり』と。佛、族姓子に告げたまはく、『故に此の善男子善女人の十無盡法を捧持し修行するに如かず、其の福甚だ多く甚だ多く喩と爲すべからず』と。佛、復た軟首菩薩に告げて曰はく、『若し善男子善女人あり、諸法を修行して三地を成就し、皆具足して諸法の本を成ぜしむ。幷に前の信地二地なり。十方恒沙の諸佛國土も、皆此の類の如くんは、其の福寧ろ多きや不や』と。軟首、佛に白して言さく、『甚だ多し甚だ多し、稱計すべからず。何を以ての故に。若し善男子善女人あり、諸法を奉修して信地より二地三地に至り、此等の類の如く、十方無量世界に遍滿し、以て喩ふべからず』と。佛、復た族姓子に告げたまはく、『故に是の善男子善女人の、十無盡法を奉持し修行するに如かず、其の福甚だ多く甚だ多く、以て喩ふべからず』と。佛、復た軟首菩薩に

爾の時に軟首菩薩、佛に白して言さく、『世尊、云何が如來の三品の妙行、所建同じからざる』と。爾の時に世尊報じて曰はく、『是の如し是の如し、汝の所言の如し。今當に汝が爲に一一演說すべし。何をか菩薩の三品妙行と謂ふ。如來至眞、初に定意業相三昧に入り、普ねく衆生の爲に一會に說法したまふ。此の如き等の無央數衆、心同一にして識所念亦同じく、苦の義を說くを聞くに餘の法典に非ず。此れ則ち如來の例に入在することを得。又復た族姓子よ、過去當來今現在の佛、彼の衆生の心中所念を知り、先づ等覺に從つて乃ち無上正法を成じたまひ、然して有法を說いて想著を離れずんば、此れ亦應に聖賢の例に在るべからず。又復た如來至眞等正覺、先づ十意を攝して亂想行なく、然る後、乃ち深妙の法藏を演べたまひ、衆生の類をして所聞の言教を誦いで解了を得しめたまふ。云何が十と爲す。如來は說法せんと欲する時、一向無礙にして悉く衆生を觀じたまひ、何なる法に應じて度脫を得ると爲すや。復た衆生あり、意に深淺あり、何なる方便を以て拔濟するを得るか、或は復た說法するに一行にして無二なり。今此の衆生、此の法に應ずと爲すや不や。無量空識心の所念は何なる法に從ふと爲すと觀じ、然る後、奮迅三昧を解することを得。無點汚を行じて、一念の頃に諸法悉く具し、悉く法界の無始無終を觀じ、諸の佛事を行ずるに亦罣礙なく、無量慧を以て普ねく一切を潤ほす。衆會已に定まれば、神足力を以て彼の心意を照し、皆本緣を識つて爲に說法す、乃ち聖例に在り。復た次に軟首よ、如來至眞等正覺は、無畏座に昇りたまふや、復た當に十無盡法を具足すべし。云何が十と爲す。諸の佛法藏は思議すべからず。佛身は無量にして法亦無量なり。如來至眞等正覺は、復た無盡無形の法海あり、爲に佛事を施す。復た無盡にして眼識の所攝に非ざるあり、普ねく十方の有形無形識を觀ず。如來至眞等正覺は、善權方便もて衆生を拯濟して本願を捨てず、普ねく一切を立てゝ十善行を修す。復た如來至眞等正覺は、內、常に一意にして外、說法を現ず、一定を以て寂然の法に應ぜず、說法を以て外、有亂を現ぜず。復た次に如來至眞等正覺は、說法の時に當つて甘露の法雨を降し、有情無情有識無識も、普ねく周遍して皆潤澤を蒙らしむ。復た次に如來至眞等正覺は、居家に色相殊特を成就す、正使大衆の處にも、高き者は伏心自卑して、自ら我が姓は豪貴なりと稱說せず、卑しき者は如來は本と族姓從り出でたりと說かず。復た次に如來至眞等正覺は、宿命智を以て前生を識り、無極にして計量すべからず、衆生を度し難ければ五趣に生在し

衆生あり、悲意斷たず、如來の悲を行じたまふと我と何ぞ異らんと、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、恒に歡喜を懷き、如來の歡喜と我と何ぞ異らんと、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、心に恒に放捨し、如來の放捨と我と何ぞ異らんと、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、心に恒に空を念じ、如來の空を行じたまふと我と何ぞ異らんと、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、心に摸留せず、如來の無願と我と何ぞ異らんと、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、想著を生ぜず、如來の無想を我と何ぞ異らんと、此れ亦捨置して聖例に在らず』と。

爾の時に世尊、軟首菩薩に告げたまはく『衆生の所處志趣同じからず。一切十方の諸佛世界、欲界色界無色界の衆生の心念は、各異りて同じからず。或は欲界の衆生あり、五欲を娛樂して五陰を捨てず、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、色は懷に存すと計して內に欲に著せず、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、無色を願樂す、告此れ亦捨置して聖例に在らず』と。

佛、軟首菩薩に告げて曰はく『衆生の類の心識、同じからず、所行各異る。然る所以の者は、皆顚倒して卒に寤るべからさるに由る。我が今日衆生の類を觀ずるが如きは、心の趣く所、何の道を願求するかを知る。十方界無數の刹土に至つて、一一了知して錯謬せず。猶ほ士夫有目の者の、躬自ら手に明月神珠を執れば、審然として惑はず他餘の想なきが如し。我れ今亦爾り。衆生の神識本行の所趣を分別す。或は衆生あり、意一念の頃に一行二行せば、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、一念の中に衆行を具足し、行亦無記ならば、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、戒あれども施なく、施あれども戒なくば、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、六行を具足すると六行を具せざると、此れ亦捨置して聖例に在らず。過去恒沙の無數の如來至眞等正覺は、先づ三品を具して後乃ち說法したまふ。正使将來恒沙の諸佛如來も說法せんと欲せば、亦當に此の三品の妙行を具すべし。云何が三と爲す。一には衆生の念を觀ずるに念念同じからず。二には諸佛は無畏道場を莊嚴したまふ。聲聞緣覺の能く此の場を建つるに非ず。三には本と未だ法を聞かざるも如來與に說きたまへば、悉く空慧に歸す。是を如來の三品の妙行と謂ふ。當に說法の時悉く缺減なかるべし』と。

根門を失はず。四には時を知つて說法して闕くるなし。五には自ら樂んで禁戒を演佈す。六には名句次第に相應す。七には大慈加被して施心を捨てず。八には佛の形像を覩て疑滯を懷かず。九には佛神通を得て自ら遊戲す。十には已に法界に入るも佛慧を捨てず。十一には無量の慧、無盡の藏を獲。十二には佛意無形にして皆悉く入るを得。十三には權慧無礙にして度あるを見ず。十四には誠諦慧に住して人皆篤く信ず。是を十四舌相の報と謂ふ。若し善男子善女人あり、此の十四舌相報を得ば、便ち能く此の無量の光明を放ち、諸の十方の諸佛刹土を照さん。皆、曩昔、言に欺詐なかりしに由る』と。佛、復た歎首に告げたまはく『若し善男子善女人あり、此の深法を執持し諷誦せば、便ち身相十無厭報を獲ん。云何が十と爲す。如來至眞等正覺は、無畏座に昇りたまふや、先づ平等觀を以て、意を攝し寂然として、內に自ら思惟すらく、「吾れ今衆に在つて人中の雄たり、今、此の座に坐す、大いに濟ふ所あらん」と。復た自ら思惟すらく「衆生の類は思議すべからず。或は信地に在つて退轉せんと欲する者、或は初地乃至六地に在つて退轉せんと欲する者は、宜しく且らく別置して聖例に在らざるべし。或は復た衆生、婬怒癡にして心に縛著偏へに多きは、此れ亦之を別にして聖例に在らず。或は衆生あり、意に豪貴を崇めて德本を造らず、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、無明心盛にして憍慢行を起す、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、心に幻法を解し、如來は此れ幻にして佛に非ずと觀見す、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、世俗の通を得て、佛神德は己と異るなしと觀ず、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、體性强記にして如來の總持の行を信ぜず、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、施心偏へに多く、如來の施を聞いて我と何ぞ異らんと、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、純ら戒心あり、如來の戒を聞いて我と何ぞ異らんと、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、心恒に慈忍にして、今世尊の忍と我と何ぞ異らんと、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、爲す所精進にして、世尊の精進と我と何ぞ異らんと、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、心に禪行を樂しみ、世尊の行禪と我と何ぞ異らんと、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、世の辯才を得て、世尊の慧を說きたまふと我と何ぞ異らんと、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は衆生あり、偏へに慈心あり、如來の慈を說きたまふと我と何ぞ異らんと、此れ亦捨置して聖例に在らず。或は

爾の時に如來、此の偈を說き已つて忽然として現ぜず。卽ち時に在會の十一那術の諸の衆生、悉く平等空慧の觀を得たり。復た無量の衆生、天龍鬼神あり、此の法を說くを聞いて、皆、無上正眞道の意を發しき。

諸佛勸助品第七

爾の時に世尊、自ら無畏座に昇りたまひ、舌相光明を放ち、普ねく三千大千世界を照し、及び十方無央數恒沙の諸佛國土を照し、及び十方恒沙の地獄・畜生・餓鬼、乃至十方虛空の衆生、悉く光明を見る。爾の時に世尊、無央數億百千の光明を放ちたまふ。彼彼の衆生自ら相謂つて言はく、『久遠より以來、未だ曾て此の微妙の光明を見ず、亦星辰日月天子も、此の光明あるに非ず。甚奇甚特なり。未だ曾て聞く所あらず、未だ曾て見る所あらず』と。爾の時に十方諸國の衆生、各此の念を生ずらく、『將に佛あり、世に出現せざらんとす』と。爾の時に世尊、卽ち十方の衆生の心中の所念を知りたまひ、諸の光明を現ずるに皆化佛あり、一一の化佛に皆無央數の衆あり、前後に圍遶して爲に說法す。所謂說法とは、無形相の法、無言教の法、無生無老無病死の法なり。後に此の音を聞くあり、諸の、光を覩形色を見ざる者は、皆、如來の說法の音響は空慧法慧もて無著心を說くと聞く。爾の時に世尊、諸の來會の四部衆に告げて曰はく、『汝等頗し此の舌相光明不思議の法を見ば、普ねく十方無央數恒沙の刹土に至り、悉く無量の衆生の類を照さん』と。及び諸の化佛も法を說いて言はく、『汝等衆生、見ると爲すや不や』と。

時に諸の神通菩薩大士、皆、佛に白して言さく、『唯だ、然り世尊、我等悉く見る』と。諸の凡夫に在る著欲の衆生、復た自ら陳說して前んで佛に白して言さく、『我等は、世尊よ、光明を見ると雖も、此の光は是れ何の瑞應なるかを知らず』と。

爾の時に世尊、彼の衆生の心中の所念を知り、狐疑を去り妄想に著せざらしめんと欲して、便ち軟首菩薩摩訶薩に告げて曰はく、『如來至眞は無上等正覺を成じ、身は黃金色にして圓光七尺、聲は鶏毘鳥の如く柔軟にして瑕なく、衆相もて身を嚴る。皆、過去無央數劫に、福を積み善を行じ衆德具足し、口過を犯さず、所說の言教に增減あることなきに由る。故に如來至眞等正覺をして今十四舌相報法を得しむ。一には言聲至誠にして欺くことなし。二には說く所、聞いて輒ち信解す。三には口行、

ば、　四大因緣合し、　此の識恒に變ぜざるを、　復た識現在すと稱す。」　且つ復た現在を捨つれば、　未來未だ生あらず、　彼の識亦今に非ず、　何ぞ由つて三世と稱せん。」　識性恒に自ら住して、　去今現在なし。　識の根本を求めんと欲せば、　窠窟は何の在る所ぞ。」　如來の無等智にして、　乃ち識の本無に達す。　空性恬然として一なり、　復た疑想あること勿れ。」　等正覺を成ぜんと欲せば、　想に染し行に著せされ。　悉く識性なしと知るが故に、　平等慧と號す。」

と。

爾の時に如來、此の偈を說き已つて忽然として現ぜず。下方、此を去る十一恒沙の刹を無減と名け、佛を普願如來至眞等正覺明行成爲善逝世間解無上士道法御天人師と名け、佛世尊と號す。彼の會に在つて頌を說いて曰く、

十方より諸佛集り、　平等にして二あることなく、　盡く空定を說いて、　寂然として行あることなし。」　衆生に常想あり、　謂爲、　空は有限なりと。　本に達すれば染汚なし、　是を悉く空に歸すと謂ふ。」　施心に縛著せされ、　本願行を失ふを以て、　遂に誹謗業を生じ、　佛法聖衆生なければなり。」　如來の戒德身は、　清淨にして瑕疵なし、　已に未度者を度して、　三世に觀想なし。」　空識に自ら名あり、　自ら生じ自然に滅す、　此の生は空識に非ず。　識の滅するも亦復た然り。」　彼れ本に達せざるに由つて、　流馳して識相を求む、　假に空を名けて識と爲す、　空と識と豈異あらんや。」　身相猶ほ無形なれども、　一を生ずれば復た一生ず、　但だ愚惑の人の爲に、　起識に若干あるのみ。」　衆智、法體を成じ、　相好自ら身を嚴る、　身滅して智、空に歸するも、　復た識ありと言ふべし。」　推尋するに三世なく、　識なく四大なくして、　乃ち法界に遊ぶを得、　有の亦不有なるを知る。」　諸佛の無量智、　權現するに增減なし、　此の無識形を以て、　遍ねく諸の佛刹に遊ぶ。」　此の疑久しく已に有り、　汝のみに非ず我れ亦爾り。　通慧普ねく悉く照して、　爾して乃ち佛識に應ず。」

と。

行に應ず。」　如來十力の聖は、　諸の邪見を降伏し、　無我の想を忍知す、　故に人中の尊を得。」　法の住不住を了して、　功德行を見ず、　生を盡して更に受けず、　是れ世雄の境界なり。」　衆の相好を成ぜんと欲して、　諸の善本を斷ぜず、　意を滅して想を起さず、　是を平等慧と謂ふ。」　我れ衆生の類を觀ずるに、　時に空を自ら知らず。　是の故に數疲勞して、　永寂の處に入らず。」　速かに道果を行ぜんと欲せば、　衆德もて身を莊嚴し、　但だ心本を斷ぜんと念ぜよ、　云何が孤疑を起す。」

と。

爾の時に世尊、此の偈を說き已つて、忽然として現ぜず。上方、此を去ること無數に佛土あり、衆生界を盡す。刹を廻轉と名け、佛を音響如來至眞等正覺と名け、十號具足す。彼の大衆に在つて頌を說いて曰く、

虛空無形の識は、　彼此の岸あらず、　衆生あるを見ず、　況や法界に遊ぶことあらんや。」　現在に道を求むる者は、空に遊んで空を求め、　己が識を淨めざる者は、　復た外空を求むるを爲す。」　愍念す、　此等の人は、　意に聖慧を解せざるを。　此の慧觀を思惟すれば、　亦た無常道を獲ん。」　今、三界の身を受け、　通慧もて自ら分別するに、定識に形想なし、　稱斷を道意と爲す。」　人自ら識を思惟して四大を窠窟と爲す。　正使外空に在るとも、　四大に異らず。」　但だ今、　未だ慧を得ざれば、　未だ内外の情を了せず。　此れ等は慈愍すべし。　衆祐は尤も責めず。」丈夫に等倫なく、　行過して想定無し、　是を諸佛の法と謂ふ。　迷惑して自ら我と計す。」　本と起盡の法なく、究竟するに悉く清淨なり、　梵行終竟に淨うして、　三世の念を生ぜず。」　前說は今說に非ず、　念念に自ら變易す。此を以て證と爲すべし、　何が故に孤疑を生ずる。」　我れ既に自ら稱せず、　權に假に凡人と爲り、　此の四大を思惟するに、　識法は何に從ると爲すや。」　過去法を宣說するに、　無形にして見るべからず、　未來識ありと雖も、亦未だ四大を受けず。」　現在を二品と爲す、　今爲に一一說かん。　各各、疑を此の平等慧に懷くこと莫かれ。」　過去識を分別するに、　死者は今形に非ざるも、　此の識、腐敗せざれば、　爲に過去識と稱す。」　設し識、　今現在せ

空性の法を解せず。」一人の念あるが如きは、自ら染は本と無なりと說くも、身心倶に礙を生ず、豈有無の想に達せんや。」妙觀、三世を照し、示現して諸法を說く、諸佛の體せる妙教は、有ならず亦無ならず。」世苦は無明に由る、平等は空にして猗るなく、觀了すれば有無を等しくす、故に平等慧と謂ふ。」時あり有無を識るは、此れ如來の慧に非ず、彼此に染せざる者、心平かなること響の應へるが如し。」八道は苦原を盡し、八解は心塵を洗ひ、八響は悉く空に歸し、八慧は生を起さず。」自ら離れ復た彼を離れて、中間に礙あるなく、識の染著する所に隨ふ、是を平等慧と謂ふ。」人は本と虛空に在り、識に染して三有の道あり、唐く自ら塵勞に著して、本無際に入らず。」本と初發意より、空性慧を滅ぜず、復た無量を經るに由つて、後乃ち此の定を獲。」吾れ衆會の心が、識を離れて空を求めんと欲するを解す、何ぞ自ら識を念ぜざる。內空にして外亦然り、」法法の無相なるが如く、慧見も亦復た然り。定を念ずれば亂を除去す、是を平等慧と謂ふ。」此の身は悉く空に歸し、永く寂して起滅なし。如來普ねく弘誓して、此の群萠の類を濟ふ。」

と。

爾の時に世尊、此の偈を說き已つて忽然として現ぜず。西北、此を去ること五十四億江河沙數に諸佛國土あり。刹を柔順と名け、佛を衆相如來至眞等正覺と名け、十號具足す。衆會に在つて頌を作つて曰く、

我が空行を觀ずるが如きは、一意に高下なし、有無是非の心は、皆生死に由つて起る。」佛の深藏を求めんと欲せば、諸行の本を究盡せよ、未だ曾て能く究暢せざるは、如來の神慧通なり。」一士夫あるが如し、劫より復た劫に至り、是の如くすること億百千なるも、其の數增減せず。」彼の人諸根具はり、六情缺減せずして、如來の慧を聞かんと欲するも、未だ便ち卒に果獲せず。」況や復た初發意に、平等慧に至らんと欲するをや。但だ自ら轉た損あるのみ、道法に益なし。」要ず大慈悲を修め、權慧もて自ら防衛し、無畏の誓を堅固にして、然る後乃ち心を降さん。」設し復た世界に遊んで、諸佛を供養せんと欲せば、所造の功を起さずして、自然に聖

の本に達せず、終に竟に胞胎に處して、災患を離れんことを求めず。」人の一念の頃に、純ら顚倒見を生じ、縛著遂に滋す甚しきが如し、況や復た道根を生ずるをや。」衆生の類を計念するに、三毒の本を愛樂し、五蓋、心神を翳ふ、眼なくして何ぞ覩あらん。」如來、大炬を執り、塵欲の本を消滅す、復た慧明を見ると雖も、猶ほ不篤信を生ず。」我れ十方世を觀じ、發意して道を求めんと欲し、行盡くるも復た生を受け、當に三塗の惱を更ふべし。」四處は本願に非ず、自ら四淵に投じ、四生門を離れず、四道果を成ぜず。」時ありて四法を離るるも、便ち五盛陰を生ず、增上慢に著することなく、放逸行を盡さず。」漸く無數法に至りて、聖行の原を覩ず、猶ほ人意の遊蕩して、心自ら防慮せざるごとし。」如來の六通行は、非空にして空に異らず、永く生死の本を去りて、乃ち平等慧に應ず。」本と自ら生死なきも、流轉して色に染著し、遂に法界色を成じ、有を滅して有に著せず。」道あれば則ち識あり、此の識は本無にあらず、能く道識を見ざれば、乃ち慧定法に應ず。」道は識、更樂に從つて、身を現ずる無數變なり、自ら定慧を成ずるを知れば、乃ち衆相變に應ず。」住なければ變易せず、疑、猶豫の想なければ、諸の塵勞を降伏して、乃ち平等慧に應ず。」人の行に三礙あり、想に由つて空を捨てず、未だ衆行の本を興さざれば、此の業、成ずるあることなし。」

と。

爾の時に如來、此の偈を說き已つて、忽然として現ぜず。西南、此を去る十三億に佛土あり。刹を廣勝と名け、佛を妙迹如來至眞等正覺と名け、十號具足す。大衆に在つて頌を說いて曰はく、

覺生すれば是れ幻法は、深法要に在らず、道に尙ほ名號なし、況や空に言迹を見るをや。」諸の外入內入は、分別すれば悉くあるなし、無形にして見るべからず、乃ち淸淨慧に應ず。」計欲は心に從らず、亦復た空に著せず、彼此染著なくして、最勝覺に逮成す。」愚惑にして未だ明を覩ざれば、心識に從つて起り、六法、六塵を生ずと計し、是に由つて疑想を起す。」識に因つて此の身を受け、自然に四大を成じ、輪轉して五趣に向ひて、

聲に因つて乃ち響あり、衆生に乃ち佛あり。」受化の衆生は等しく、常に身を厭患す。道能く非道を滅し、無有は眞法に非ず」。

と。

爾の時に如來、此の偈を說き已つて、忽然として現ぜず。東北方、此を去ること九十二億恒沙に刹土あり。刹を淨觀と名け、佛を法觀如來至眞等正覺と名け、十號具足す。此の大衆に於て頌を說いて曰はく、

色本と色あるなく、亦色相あるに非ず、痛法に起滅なく、亦更樂を生ずるに非ず。」意識は野馬の如く、水泡の如く久しく停らず、身慧なければ自ら淨なり。是を平等空と謂ふ。」一觀一意止、淸淨にして梵行を尊ぶ。吾我、有想に著すれば、有無の境に至らず。」自ら覺し復た彼を覺して、虛空慧に逹せしむ、衆生は自ら覺せず、是を以て猶豫を懷く。」性に上中下あり、善惡は常に對あり、惡を捨て善を行ずるも、空無慧を得ず。」能く善惡を見ざれば、心正しうして顚倒なし。爾して乃ち空を信解して、淸淨慧を逮得す。」本と平等の意に從つて、群萠の類を見ざれば、久久にして乃ち自ら逹し、無上道に應ず。」慧觀もて貪著を除き、心を洗へば淨うして無垢なり。仁智は空慧の如し、故に眞人の法と謂ふ。」世間の類を慈愍し、故に虛世の道を演べ、善惡の對を念ぜず。形なく情想なし。」我れ本と等意に從り、如來より斯の法を受け、聞いて輒ち空慧に逹し、淨觀の刹を化せんことを念ず。」命を受けて阿僧祇、說法して終に敎化し、無數人を導引して、此の法界の本に入らしむ。」

と。

爾の時に世尊、此の偈を說き已つて、忽然として現ぜず。東南、此を去ること一億に佛土あり、刹を極妙と名け、佛を微妙如來至眞等正覺と名け、十號具足す。復た頌を說いて曰はく、

識は本と五陰に因る。因緣共に合會し、流轉すること無數劫、自ら起き自然に滅す。」愚惑の衆生等、生死

在在處處に現はれ、現はれて群有を化せんと欲す。」更樂の縛著する所は、永く冥室に處る。道は本より無誓にして、然る後、離ることを得。」我が國土の人の如きは、心を攝して惡を造らず、終に至つて無爲を崇ぶ。是の如くして自ら道に近づく。」婬怒癡の垢薄く、亦大いに慇懃ならずして、自然に律行に入ること、華の時に隨つて敷くが如し。」道意移動せずして、苦樂の心永く斷じ、往來して刹土に詣りて、盡く空慧を修す。」我れ今既に一たび行じ、彼の衆も亦異ならず。今、能仁の尊を聞く、故に現に等慧を修す。」大聖皆雲集し、豪尊に高下なし、國土の異を現はすと雖も、修する所は同じく一法なり。」今、五趣人を觀ずるに、無明行に蔽はれ、生死に沒溺して、轉た勤勞の苦を增す。」何ぞ自ら意を建てざる。體信空慧道は、速かに解脫を得べきこと、外刹の衆生の如し。」

と。

如來、此の偈を說き已つて、忽然として現ぜず。北方、此を去る三恒沙に佛土あり、刹を普照と名け、佛を機辯如來至眞等正覺と名け、十號具足す。復た大衆に於て頌を作つて曰く、

如來道は一相なり、本と名色に從つて生ず、勤苦無數を經て、乃ち塵勞の患を盡す。」人の空を度らんと欲す。るが如し、巧方便を求めず、但だ空法を憶望するのみ、由つて果獲なし。」意想の縛する所、物を非常と計せず、不死地を求めんと欲するも、此れ亦未だ曾て得ず。」安住は離るる所以にして、有無の境に住せず。已に空慧を履むを得ば、自然に染著なし。」道は身本に從つて生じ、然る後、正覺を成ず、迷惑の心意は錯りて、心を離れて外に空を求む。」外苦に號ありと雖も、其の識想を離れず。法界清淨道は、乃ち清淨の慧に應ず。」衆生は生死に處り、沒溺して自ら拔けず。衆惱を離るることを得んと欲せば、先づ當に意識を去るべし。」如來の顯現する所、無比の法を暢演し、一想にも染汚なし、何に由つてか復た空に染せん。」最勝は三達智もて、已に有礙形を過ぎ、今念は本念に非ず、衆生を緣ずるに念あり。」諸法は不思議にして、有に非ず亦、無ならず。

あり、清淨無爲行なり。」言を說いて言あらず、有相の本に著せず、故に寂然定に應じ、行盡きて名號なし。「衆生心の趣く所、類に隨つて本識を起す。我の如く永の澹泊なれば、有無の行を見ず。」所以に無數劫に、求を斷じて有に著せず、不起滅を求めんと欲して、逮得して始めて成就す。」今、空無の身を以て、形を現ずる所趣の如く、佛慧、邊涯なければ、終に染する所と爲らず。」自然性淸淨にして、常想あるを見ず、道慧衆德具はる、故に號して離垢と名く。」自ら道果を成じてより、遍ねく虛空界に遊び、或は天帝釋、大尊梵天王と作る。」形を變化する所以は、彼の有に著する者を化して、盡く無生慧に趣き、淸淨にして究竟に至らせんとなり。」復た轉輪王と作り、無數の城を統領するも、捨てゝ學道を行じ、之を知る久長に非ざるを。」復た聲聞中に入り、道に及ばざるが如きを現じ、輒ち便ち師に從つて受け、諸想著結を斷つ。」復た淨居天に到り、淸淨を行ずる本を說きて、彼の天福を離れしむ、此等は苦を盡さざればなり。」無色、色の衆生は、常を計して想を去らず、憍慢にして自ら放恣なるを、盡く道門に入らしむ。」本と等正覺なく、所化に形あるなし、要ず[五]死生の本を盡せば、終に捨てずして寂に入る。」況や汝今四部は、初に聞いて便ち懈怠す、此の類は自ら期あり、速かに能く成ぜしむるに非ず。」。

と。

爾の時に如來、此の偈を說き已つて、忽然として現ぜず。西方、此を去る百億恒沙に、諸佛の刹土あり、刹を水精と名け、佛を淨尊如來至眞等正覺と名け、十號具足す。彼の土の衆生は、一法を捧持し、亦、六度衆行の業本なし。復た大衆に在つて斯の頌を說く、

八行に高下なく、亘然として滅盡に歸す。捨身復た受身して、但だ塵勞の垢を益すのみ。」虛空無二の法は、無住亦、無迹、八道平等の慧は、諸佛所遊の處なり。」吾れ昔、自ら行を建て、弘誓して法を轉じ、體信して無に歸し、今、人中の尊を得たり。」諸佛の居たまふ所の刹は、善權の法各異り、

【五】死・宋本無に作る。

ば染せられん、垢盡きて自ら尊を致し、復た起滅あらず。」已に平正の路に入りて、狹小の意に從ばず。我を計して心を生ずる無かれ得道是れより滅せん」吾が壽、劫數あり、所度量る可からず、意を斷じて永く滅寂す、豈人識に度るあらんや。」七たび瓔珞身を觀ずるに、道華の色變ぜず。無形にして諸趣に入る。斯を菩薩行と謂ふ。」如來に二業あり、道本と衆德具はる、權に幻化の法を現はし、乃ち起滅なかるべし。」天世衆生の類、形なく數あるなし、何ぞ有形人の、善く無色法を知るを得ん。」世雄は無盡藏なり、色欲の能く盡すところに非ず、況や復た未だ道を得ずして、平等の意を究めんと欲するをや。」百千劫を經と雖も、未だ曾て自ら意を息めず、衆生に懈怠あれば、中ごろ住まりて意を建てず。」大乘平等の法、聽受すれども何ぞ盡く可けん。今、粗ぼ空慧を說く、何ぞ復た空を疑はん。」

と。

爾の時に如來、此の偈を說き已つて、忽然として現ぜず。南方此を去ること十八億江河沙數、彼に佛刹あり、名けて嚴淨と曰ひ、佛を離垢如來至眞等正覺と名く。十號具足し、身に色相を現はし、極りなく巍巍たり。大衆中に在つて復た頌を說いて曰く、

「[四]吾れ本と道よりして有り、空平等の慧を聞き、十二劫を經て、乃ち此の定意を得たり。」前後來を思惟するに、六度四等行は、皆、空慧の業に由り、然熾は諸法の本なり」發意に階差あれども、弘誓に異あらず。慧觀の念に著するなかれ、人を化する若干なけん。」我が遊ぶ所の國の如きは、嚴淨の沙瓔珞あり、殊特の慧を頒宣し、國に三惡道なし、唯、空慧行を演ぶるのみにして、有無の處に著せず。我れ既に心行なし、云何が當に有を說くべき。」性に形相なきが如く、法界も亦淸淨なり。解了すれば已に盡く滅す、是の故に起滅なし。」復た嚴淨刹を過ぎて、十億の諸の刹土に、彼に乃ち此の法

【三】吾今雖成佛、懷有無所染。懷の字、宮本に壞に作る。然らば「有を懷りて所染無し」となる。此句は可なるも、上句の雖の字解し難し。

【四】吾本從道有。宋宮二本は本字を今に作り、三本宮本は道有を覺道に作る。宮本に從はば吾今從覺覺となる。

遠離菩薩曰はく『五陰に染あり著あるを見ず。何を以ての故に、五陰性、諸の法性は、常住にして變易せざればなり。是を空慧無著行と謂ふ』と。

賢護菩薩曰はく『諸法總持して有望無望を見ず、法に可說不可說あるを見ず、衆生を將護して不退轉に立つ。是を空慧無著行と謂ふ』と。

寶來菩薩曰はく『諸法は常定にして若干あることとなし、亦佛法を分別せず、菩薩法、俗法道法、有形法無形法、可護持法不可護持法も、亦分別することとなし。是を空慧無著行と謂ふ』と。

爾の時、座上の無數の四部衆、此の法空慧清淨無著の法を說くを聞いて、倍、狐疑を生じ究竟に達せず。世尊、即ち心中の所念を知り、空慧辯より緣會未だ至らざるに應じて、即ち自ら身を化して身の高さ四百由延となり、大音聲を出して十方世界に告げたまはく『諸の如來至眞等正覺、現に在して說法したまふ。聞聽して菩薩瓔珞を受けんと欲せば、悉く皆雲集せよ。忍界に詣らんと欲せば、菩薩無央數衆を遣化して、盡く十方の諸如來至眞等正覺を禮せよ。』「今、能仁如來、沙呵刹土に於て、菩薩瓔珞を演說したまふ。我等宜しく普ねく彼の土に集るべし。」是の如く十方の諸の如來は、著する所なく、尋いで其の像の如く威儀を攝持して、沙呵刹土に詣りたまふ。立信の菩薩と十住を得たる者は、盡く如來を見たてまつりて禮拜し供養し、各各次を以て無畏座に坐す。未だ信を立てざる人は、凡夫地に在り、未だ天眼を得ず、諸通未だ具せざるは、亦、如來を見たてまつらず。何を以ての故に。凡夫は意、小にして恐れて梵行を失へばなり、或は如來あり、此に定坐したまふも、身、梵天に至る。或は如來あり、身を變じて一千の刹土、二千の刹土、乃至三千大千の刹土に遍滿したまふ。何を以ての故に。衆生、化を受くれば、應に形を見て受法すべく、應に聽聞して受法すべければなり。

爾の時、東方二江河沙の刹土を過ぎて、如來あり、號して本淨と曰ふ。即ち大衆の與に偈に因つてて此の法を說いて言く、

虛空は邊涯なし、　想著すれば狐疑を生ず。本際行已に盡くれば、　二なく等侶なし。」　虛空相を說かんと欲するも、
本質に生兆なし、　何ぞ空慧を疑うて、　中に於て無を求めんと欲するを得ん。」　吾れ今成佛すと[三]雖も、有無を懷は

習苦菩薩曰はく、『諸佛世尊は悉く過去當來現在をり、自在慧に入つて妄見を起したまはず。是を空慧無著行と謂ふ』と。

慈意菩薩曰はく、『吾我は無形なり、專心に道を行ずれば他異の想なし、猗なく著法なし、自然に起滅す。是を空慧無著行と謂ふ』と。

寶計菩薩曰はく、『四無我行は無著無染なり、身あれば苦あり識想も亦苦なり、解すれば不起滅なり。是を空慧無著行と謂ふ』と。

善算菩薩曰はく、『諸法の有數無數を見ず、云何が諸法の有數無數なる。俗には是れ有數、道には是れ無數、有爲は有數、無爲は無數なり、數無數を見ざる者、是を空慧無著行と謂ふ』と。

盡生菩薩曰はく、『諸法は無生にして亦生を見ず、淨に淨想なし、生死已に盡くれば永く滅して起らず。是を空慧無著行と謂ふ』と。

梵行菩薩曰はく、『三三昧を習つて受身を念ぜず、空を念じて空を離れず、無相を念じて無相を離れず、無願を念じて無願を離れず、亦復た清淨福を受くるを念ぜず、是を空慧無著行と謂ふ』と。

光相菩薩曰はく、『三毒を分別して闇冥法と爲し、三達を見ざるを清淨法と爲す。是を空慧無著行と謂ふ』と。

所作菩薩曰はく、『一相を見ず、無相を分別す、苦を見ず離苦を見ず、無苦不苦にして亦所作なし。是を空慧無著行と謂ふ』と。

不受形菩薩曰はく、『四大本なければ亦境界の所在を見ず、一向無爲にして三意を生ぜず。是を空慧無著行と謂ふ』と。

無等菩薩曰はく、『世の苦樂を離れて八法に著せず、稱譽あるを見て以て歡と爲さず。設ひ毀謗を見るも憂感を懷かず、忍心地の如し。是を空慧無著行と謂ふ』と。

無垢菩薩曰はく、『內の六情、外の六塵を造るを見ず、六塵と六情と對を爲すを見ず。是を空慧無著行と謂ふ』と。

重觀菩薩曰はく、『外色、內識を起さず、識亦外色に著せず、識は我が色たるを知らず、色は我が識たるを知らず。聲香味細滑の法も、亦復是の如し。法は我が識たるを知らず、識は我が法たるを知らず、一切諸法各相知らず。是を空慧無著行と謂ふ』と。

十二無礙辯才なる。是に於て族姓子よ、如來初に功德相本を修し自ら弘誓を發すらく、「若し我れ後に無量等正覺を成ぜば、所生の國土衆生の類、無明婬怒癡の名を聞かざらん。我が國土をして淨きこと虛空の如く、淨居天の如く少欲知足にして、意、道に趣いて中間に滯ほることなからしめん。亦復た八無閑處に生ぜじ。豪貴の中に於て自ら貢高せず、卑賤を鄙しめじ。中に於て意を攝して布施の福を行じ、漿を求むれば漿を與へ、食を求むれば食を與へ、國財妻子も盡く之を施與し、心に無礙を施して亂想を生ぜじ。復た衆生をして持戒完具し、精進して一心に六重法を修せしめん。若し衆生あり百千の苦に遭はば、輒ち能く往いて度し墜落して賢聖の類を失はしめじ。是を八法もて虛空慧を修すと謂ふ。如來等正覺、法輪を轉ぜんと欲せば、先づ等定に入り自ら身意を攝したまふ。自ら時の至れるを知り、吾れ今宜しく衆生の類の與に無上法輪を轉ずべし。心、六通に遊び一一の毛孔より諸の光明を放ち、然る後、乃ち無上法輪を轉ず。不起不滅にして所著の法なく、一相無眞にして染汚法なし。所說空の如く言迹現はれず、衆生に增あり減あるを見ず。是を九法もて虛空慧を修すと謂ふ。復た次に如來、無生法界に從つて等正覺を成じたまひ、悉く諸法を幻の如く化の如しと觀じ、道果を成就する者を見ず、神通慧分別を失はず、如來の十力亦染著せず。是を十法、虛空慧を修すと謂ふ。』と。

爾の時、世尊、四部衆に告げたまはく、『汝等各〻、如來の前に於て、自ら空慧無所著の法を說け』と。

時に菩薩あり、名けて空行と曰ふ。此を去る東南五十六江河沙の諸佛の刹土の、彼の國より來り此の土に來至す。叉手して佛に白して言さく、『國土淸淨にして法說義說あることなく、淨不淨は悉く虛空の如しと知る。是を空慧無著の法と謂ふ。』と。

無我菩薩曰はく、『無見は空に非ず、見亦空に非ず、見を見ず亦無見を見ず。是を空慧無著の法と謂ふ』と。

法住菩薩曰はく、『未だ行迹を立てずんば染汚識を生ず、不可計の劫より、本と識性なし。是を虛空無著の法と謂ふ』と。

過行菩薩曰はく、『身口意に於て衆惡を造らず、定もて想を起さず、是を空行無著の法と謂ふ』と。

無行菩薩曰はく、『法身無盡にして猗著を見ず、定心一意なり。是を空慧無著行と謂ふ』と。

寶藏菩薩曰はく、『前後法界の處所を見ず、亦復た罪福惡報を見ず。是を空慧無著行と謂ふ』と。

出入の息を知る。息長きも亦知り、息短きも亦知る。前息にも亦前息を知り、後息にも亦後息を知る。漸漸に乃ち一禪の行を成ず。如來聖の禪に達する意、同じからず。四禪を修行し想に入りて滅を知る。此の如き定意は三乘共に有り。又復た如來の無上定意あり。云何が名けて無上定意と曰ふ。所謂無上定とは、心に上中下あるも、行人、定に入れば復た出入長短の息なく、惟、刹土を分別すること專心一意にして、過去未來現在を觀ずるなり。何となれば是れ我が所化にして我が所化に非ざればなり。復た自ら思惟すらく、「設ひ我れ閑靜處に在るも、衆生を分別せざるは、是れ我が宜に非ず。今當に無數の刹土に往至し、自ら化し地を化して乃ち我が願を成ずべし」と。是を初定亦毀るべからずと謂ふ。復た次に行人、初め定意に入るや、內に自ら思惟すらく、「苦あり樂あるは皆身本に由る。已に此の行を過ぐれば復た當に宣傳して、彼の衆生をして悉く之を知らしむべし」と。是を定に入りて二行を成就すと謂ふ。復た次に心法は有に非ず、無に非ず、無身にして身想あり、神通を得ずして十方に遊化し、意を攝し自ら撿めて其の種姓を淨うす。是を定意、法識を毀らずと謂ふ。心意識ありて止觀を思惟すれば、我れ自ら無我なり、況んや衆生あらんや。先づ自ら空を知りて却つて衆生を觀るに神足道を以てすれば、心神往化するも身彼に往かず。復た十方諸佛の刹土に於て、此の定意を以て無數百千の衆生を濟度す。彼に於て復た十虛空慧を修す。云何が十と爲す。所說の法敎、魔宮を摧却し、道場に進趣して無量覺を成じ、心、虛空の若く增減あることなし。是を族姓子、虛空慧を修すと謂ふ。復た次に族姓子よ、初に外道異學の類を化し、其の邪業を去りて正見に立たしめ、皆歸趣をして慳嫉なからしむ。是を虛空慧を修すと謂ふ。又復た世尊、衆生の類を化したまふや、其の所願に隨つて皆具足せしむ、此の法を說くと雖も心に所著なし。是を虛空慧を修すと謂ふ。復た無礙智神通道を以て、無量世界に遊至し、諸法を布現して衆生を化するも、衆生を見ず亦化を見ず。是を虛空慧を修すと謂ふ。復た如來智あり、名けて懷空と曰ふ。法界を成就して本性を毀らず、心を持すること空の如くにして染汚を生ぜず。是を虛空慧を修すと謂ふ。如來等正覺、或は一身を以て虛空界に遊び、或は無數身なり。或は復た滅盡泥洹を示現して一身に著せず、若干想を起さず、亦復た盡滅泥洹に著せず。是を虛空慧を修すと謂ふ。

諸佛世尊に、七十二無礙辯才十四舌相報あり、衆生を教化して智、停滯せず、衆生の類をして皆慧明を成ぜしむ。云何が七

無盡と曰ふ。已に定意を得れば、悉く一切三界の所趣を知る。或は衆生あり、常想ありや常想なきや、苦想ありや苦想なきや、定想ありや定想なきや、一一分別して染著を起さず。』と。

佛、復た族姓子に告げたまはく、『菩薩摩訶薩は當に三十七品道法の要を修行せんと念ずべし。何をか三十七と謂ふ。所謂四意止は婬怒癡を除いて永く三毒を滅す。復た當に四意斷の法を思惟すべし。念求を斷去し果報を生ぜずして、乃ち四神足を獲、已に神足を得て、往いて十方の諸佛世界に至り、自ら神足を稱説せず。如來の五根法身を成就す。戒身・定身・慧身・解脱身・解脱知見身、是を如來の五分法身と謂ふ。如來の神智、法身を毀らず。云何が五力と爲す。信力・精進力・念力・定力・慧力なり。所謂信力とは、一向無爲にして三界に染せず。正使恒沙の諸魔、形を變じ佛と作るとも、此の意を變動する能はず。是を信力と謂ふ。云何が精進力なる。所謂精進力とは、曾て有法法界識の、或は一由延に在り、百千由延に至り、或は一佛境界或は百千佛境界に在るを聞き、信を守り戒を立てて弘誓を捨てず。是を精進力と謂ふ。云何が念力と爲す。所謂念力とは、念を繼いで前に在り他の餘想なし、正使、恒沙の諸魔官屬、來りて此の定意の者を毀らんと欲するも、徒らに自ら勞苦するのみにして本願を獲ず。是を念力を成就すと謂ふ。云何が定力なる。所謂定力とは、根を立つる上位の菩薩摩訶薩の、意を攝し想を去りて狐疑を懷かざる、是を定力と謂ひ、亦壞すべからず。云何が慧力なる。所謂慧力とは、無量の法界思議すべからず、悉く諸慧善權の法本を攝し、法界慧性の行を毀らず。是を慧力の衆德具足と謂ふ。復た當に七覺意法を分別すべし。一切有形無形の心識所念を覺了し、欲界より色界無色界に至るまで、斯れ分別すべきや、是れ分別すべからざるや、意を攝して亂れず。是を定意慧性の八道平等と謂ふ。亦、恐畏なく空三昧に入り、一行無二にして本末すべからず、有限無限、已に生死を離れ、餘智を生ぜず。起滅の法の淨きを知りて衆想を生ぜず。是を八道淸淨無二と謂ふ。復た當に六十二見を思念すべし。有常想無常想・有道想無道想・有今世無今世・有父母想無父母想・有著身想無著身想。或は時に識あり諸道淸淨無瑕を分別し、一一に三處の愛本、五處の欲本、七處の婬行を分別す。有る時は行ありて閑靜處に在り、若しは樹下露地塚間に在りて、出入息を觀ず。有る時は長あり、有る時は短あり、有る時は寒あり、有る時は煖あり。諸法生生の因緣共會を、思惟分別して、意、錯亂せず。所以に行者は、

至眞等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、佛、世尊と號す。爲に法界無著の行を說く、夫れ法界とは一百七事なり。云何が一百七事と爲す。空行を求めず。有常を念ぜず。世を觀ずる夢の如し。自ら吾我を滅す。生識起らず。界相を分別す。永く妄見を斷ず。施心闕けず。心常に一定して衆に在つて亂れず。身識空識に若干想なし。菩薩は有數なれども名號に著せず。諸法を非一非二なりと觀了す。衆生、恚を起せば、便ち方便を爲し、說いて[二]無本身識の行を除く。十二因緣、四諦聖慧について、苦本を思惟するに、苦識ありや、苦識なきや。或時は識あり、眼耳鼻舌身意に在り。或時は識あり、眼耳鼻舌身意を離る。或時は識あり、色に著して識に染せず。或時は識あり、色に著せず識に染せず。此の識は微妙にして退轉するに非ざること、菩薩の能く了知する所なり。或時は識あり、聲に著して識に染せず。或時は識あり、聲に著せず識に染せず。亦音響なし、故に淸淨識と名く。或時は識あり、香に著して識に染せず。或時は識あり、香に著せず識に染せず。一一に分別すれば、法識を失はず。或時は識あり、味に著して識に染せず。或時は識あり、味に著せず識に染せず。亦復た分別すれば、次緖を失はず。或時は識あり、身の更樂に著して識に染せず、或時は識あり、身の更樂に著せず識に染せず、一一分別すれば想著を起さず。或時は識あり、諸法は起者なりや滅者なりや、有爲法なりや無爲法なりや、定ありや亂ありやを了知す。是を菩薩摩訶薩、識性を分別して亦染する所なしと謂ふ。

復た次に族姓子よ、四無量慧を分別し、慈悲喜護、一切に遍滿して衆生を救攝し、亦著する所なし。或は時に族姓子あり、定三昧に入りて一法を修行し、已に一法を行じて、便ち百千の總持法門を得。響の如く幻の如く、漸漸に乃至滅盡定意まで、身行淸淨にして惡本を造らず。心に慈心を念じて衆惡を施さず、三世を解知して縛著を除去す。是を族姓子、菩薩の正行に起不起ありと謂ふ。

復た次に定意法門あり、一切諸法皆來つて中に入り、身あるも身想なく、念あるも念竟なし、一なく二なく、亦復た識なし。吾れ昔、無數阿僧祇劫に、初めて法律に入り乃ち斯の行に應じたり。識法に十二ありて因緣の本を造る。無明の行に緣るより乃至老死まで、起滅を見ず。是を定意と謂ふ。名けて

【二】無字、三本宮本に九に作る。

を造り、身識と非身識とを識別す。是を法識、神足行を修すと謂ふ。無二の法に於て、一切諸法を分別し、中に於て等正覺を成ず。生識を見ず、等正覺を成じて、過去の億百千數悉く能く諸の陰入持を分別して、衆生本行の所趣を失はず。是を法識、神足行を修すと謂ふ。無化の法、變易を見ず、中に於て識を造り窮盡すべからず。是を法識、神足行を修すと謂ふ。是に於て入定して空界を分別す。復た自ら身を計する彼の如くにして異るなし。是を法識、神足行を修すと謂ふ。諸の世界を觀ずるに亦盡くるを見ず。一切世界の成界、不成界を、悉く能く了知す。是を法識、神足行を修すと謂ふ。夫れ法界識は五陰形を成し生あり滅あり。五陰に生滅ありと見ざる者、是を法識、神足行を修すと謂ふ。法界は無著にして形相を見ず、過識は今に非ず、今識は過に非ず。現在因緣の本末を見ず。是を法識、神足行を修すと謂ふ。一一に法性所起の一切諸法を分別して、窠窟を見ず、意を攝し想を滅して亦智を生ぜず。是を法識、神足行を修すと謂ふ。諸法不生として起滅を見ず。復た能く生滅の法を思惟すれば、本性自然にして一相無相なり。是を族姓子、菩薩所修の神足の行と謂ふ』と。

佛、復た族姓子に告げたまはく『無著法界に復た十事あり。云何が十と爲す。如來至眞等正覺、世に出現し、便ち能く三世身の識想を具足したまふ。是を法識、無我行を修すと謂ふ。漸く衆生を化するに三滅の法を以てし、亦滅を見ず亦不滅を見ず。是を法識、無我行を修すと謂ふ。句義を分別して一一了知し、復た權慧を以て本業を示現す。是を法識、無我行を修すと謂ふ。如來至眞等正覺は、四無量慧を分別思惟し、斷滅有常の想を見ず。是を法識、無我行を修すと謂ふ。復た妙慧を以て悉く衆生を化して大慈を捨てず。是を法識、無我行を修すと謂ふ。盡く衆生を觀ずるに淳淑あり不淳淑あり、類に隨つて化して其の性を捨てず。是を法識、無我行を修すと謂ふ。佛慧無量にして成敗を見ず、生あり滅あるは如來の本誓に非ず。是を法識、無我行を修すと謂ふ。如來は一相にして、過去當來現在に染せず、無猗行を修して乃ち至眞等正覺に逮る。是を法識、無我行を修すと謂ふ。如來至眞等正覺は、無數億千萬劫を以て、以て一日と爲し、一日の中に於て衆生を化度する、稱極すべからず、是を法識、無我行を修すと謂ふ。』と。

佛、復た豪賢菩薩に告げて曰はく『過去無數阿僧祇劫より、自ら無形法識を修行せんと念じ、佛あり、名けて弘誓無願如來

佛、豪賢に告げたまはく、『諦かに聽け、諦かに聽け、善く之を思念せよ。或は智識と非智識とあり、或は法識と非法識とあり。云何が法識非法識なるや。最第一義より辟支佛に至る、是を法識と謂ふ。見地・薄地・性地・無礙地より一生補處に至る、是を法識と謂ふ。法識に復た五事あり、云何が五と爲す。一には道慧に趣く。二には宿命を識る。三には分別慧に趣く。四には空門に入る。五には心の本を觀る。是を法識、五事を成就すと謂ふ。復た五事の法識を成就するあり。云何が五と爲す、一には梵行を修して三毒に猗らず。二には胞胎に處して生死に染せず。三には無相空無願の法を行ず。四には神通を修して神足無礙なり。五には覺意の一相無相を立つ。是を法識清淨を成就すと謂ふ。』と。

佛、復た豪賢菩薩に告げたまはく、『法識清淨に復た五事あり。云何が五と爲す。識不變を學んで學跡を思惟す。無學無跡にして法趣を見ず。有教を見ず亦無教を見ず。亦復た道性非道性を見ず。道意を生ずると道意を生ぜざるとあり。是を法識、五事を成就すと謂ふ。

法識の定を觀ずるに、復た五事あり。云何が五と爲す。一には定、本垢を滅して處所を見ず。二には無量の空寂定意を念ず。三には道本を建てて道と會せず、四には心に念を斷じて道場に坐せんを求む。五には福田を修して妄想を蠲除す。是を五事法識清淨と謂ふ。

無生法識に復た五事あり。云何が五と爲す。識もて過去を觀じて生滅を起さず。識もて現在を觀じて生滅を見ず。識もて未來を觀じて生滅を見ず。識もて本末を觀じて生滅を見ず。識もて如性を觀じて生滅を見ず。是を五事法界清淨と謂ふ。』と。

佛、復た豪賢菩薩に告げたまはく、『如來等正覺は、復た當に法識を修習すべし。音響通に十一行あり。云何が十一と爲す。法界無著にして識本を見ず。中に於て神足道行を具足す。法界識を淨修するを得んと欲せば、初意、山の如く牆壁の如し、漸漸に乃至身本を思惟して身の身を離るるを知る。復た身を捨て已つて心の心を離るるを知る。復た心を離れ已つて空の空を離るるを知る。復た空を捨て已つて、還つて一意より百千意に至りて、未化の意盡く能く之を修す。復た化法を知りて所有なし。是を法識、神足、道[一]〔行〕を起すと謂ふ。無身識を以て身識行を修し、或は身識を以て無身識行

【一】道明本に行に作る。

卷の第三

識界品第六

爾の時座上に菩薩あり、名けて豪賢と曰ふ。乃ち東方十六恒沙の刹土より來つて此の界に詣る。瓔珞の妙法を聽受して、卽ち座より起ち、偏へに右の臂を露はし、長跪叉手して、佛に白して言さく、『唯然り世尊、若し聽かれば、乃ち敢て陳啓せん』と。

世尊告げて曰はく、『善い哉、善い哉、族姓子よ、吾れ當に汝が與に一一分別すべし』と。

爾の時、豪賢菩薩、佛に白して言さく、『世尊、云何が識は諸の識境界を持するや。世尊の言の如くんば、識は有爲よりして無爲よりせず。又復た說いて言く、識は無爲よりして有爲よりせずと。云何が此の識と彼の識と、名けて識界と曰ふや』と。

佛、豪賢菩薩に告げて曰はく、『識は識あるに非ず法よりして識を生ず』と。

豪賢、佛に白して言さく、『云何が識は識あるに非ず法よりして識を生ずるや』と。答へて曰はく、『識は常の識に非ず法に隨つて識あり』と。

又問ふ、『云何が識と爲す』と。

『一切識に遍ねくして一切法を知る。是を識は常の識に非ずと謂ふ』と。

又問ふ、『識に智ありや、智なしと爲すや』と。答へて曰はく、『識は智あるも如如なり。識は智なきも如如なり。一切衆生の識は智ありて如如なり。無學賢聖の識は智なくして如如なり。是を族姓子よ、識あるも如如、識なきも如如と謂ふ』と。

又問ふ、『云何が識ありや。云何が識なきや。云何が識あるも如如なるや。云何が識なきも如如なるや』と。答へて曰はく、『悉く能く識智あり識智なきを分別するは如如なり。是を識界を分別すと謂ふ』と。

豪賢菩薩、佛に白して言さく、『如來今、定の義識の義を說きたまふ、倍狐疑を生ず』と。

佛復無頂相菩薩に告げたまはく、『復六事あり、云何が六と爲す、無盡法身と有盡法身なり、有無を分別するに法識清淨なり、是を一法清淨瓔珞と謂ふ。無爲の法性行に增減なし、法に善あるを知る、生法あるを知り滅法あるを知る、法識を曉了して法性を失はず、是を二法清淨瓔珞と謂ふ。（諸本に第三法小なし。）有常住身無常住身、法不常住にして不常住を知り、諸法常住にして亦常住を知る、諸法の住識無住識を思惟す、是を四法清淨瓔珞と謂ふ。諸法寂然として諸法色亦復寂然たり、有爲非識もて有爲識を知り、無爲非識もて無爲識を知る、思惟して法界を失はず、是を五法清淨瓔珞と謂ふ。法身は無數無形にして見る可からず、眼界の所攝にあらず、初發意より二想を起さず、諸法を分別して法身を失はず、是を六法清淨瓔珞と謂ふ。』と。

方ぶるに　我が今現在の如く　住に由つて證を成ぜず、」　如來の三達智は無偶亦無伴なり　行過滅すべからず　識の所在を見ず、」。

と。

爾の時に世尊、復重ねて菩薩に告げて曰はく、『無身の身識は身に身識なし、此の法に六あり、云何が六と爲す。若し善男子善女人あり、身入の十六に外塵垢を受くるも、身識を一一分別すれば、乃ち淨地に至らん、是を一法清淨瓔珞と謂ふ。無身の識を以て以て身識を起すも、中に於て分別するは悉く更樂に由る。是を二法清淨瓔珞と謂ふ。吾れ昔願ありき、其の身相を修するに行百五あり、乃ち身相と謂ふ。復百五ありて乃ち身相を成ず、是を三法清淨瓔珞と謂ふ。過去の久遠の衆生已に滅す、彼の受身に於けるや、有爲無爲、有行無行若しは好、若しは醜、有苦有樂なり、一一識別すれば法界に非ず、此の法界の身識は此れ法界の身識に非ず、是を四法清淨瓔珞と謂ふ。身識の色を造る、復十事あり、眞身の體を化する亦端緒なし、彼の身識は趣いて所趣なきを知る、是を五法清淨瓔珞と謂ふ。身識の本を了するに歳日同じからず、本身今身變易して住せず、本の受形今亦變易するを知るも、便ち能く中に於て身識を失はず、是を六法清淨瓔珞と謂ふ。

復次に族姓子よ、復六事あり、云何が六と爲す、身行清淨にして衆惡を爲らず、口亦清淨にして邪業を說かず、意に清淨を修して衆塵を造らず、是を一法清淨瓔珞と謂ふ。過身已に滅するも善あり罪〔惡〕あり、善身善福は善識を分別し、惡身惡業は惡識を分別し、一一善惡の身識を思惟す、是を二法清淨瓔珞と謂ふ。六身相法、善を離れ惡を離れ、復能く念を起して身識を捨てず、又時に衆生、身清淨にして清淨識ありと計し、身不清淨にして不清淨識ありと計す、中に於て〔清〕淨身識と不清淨身識とを分別す、是を三法清淨瓔珞と謂ふ。憶ふに本と所造の有爲身無爲身、過去未來現在身、悉く能く分別して身識を失はず、是を四法清淨瓔珞と謂ふ。心所念の法は一に非ず二に非ず、强記して忘れず智識の起る所なり、是を五法清淨瓔珞と謂ふ。無形識身に復五事あり、云何が五と爲す、有染著身無染著身、有形身無形身、有識身無識身、有俗身有道身、有一身有非一身、中に於て悉く皆分別す、是を六法清淨瓔珞と謂ふ。』と。

同じからず　妙空を說くを聞くも　根原を究めず、」　虛空無相　行一平等なり　云何が住識　乃ち淸淨なるや、」　如今時至れり　宜しく爲に演暢すべし　本際通慧　甚だ奇にして有り難し、」　四輩無畏にして　咸く聞知せんと欲す　住識と動識と　其の性を分別す、」　過佛常に爾り　法界平等なり　當來の諸聖の　法性亦然り、」　如今衆生　寂に入りて亂せず　復何の識に從つてか　定意を獲ん、」　今此の定意は　永く寂して無響なり　是れ住識と爲すや　是れ動識と爲すや、」　願はくは一一　法界の根本を說き　永く疑結を除いて　猶豫を懷かざらしめたまへ」。

と。

爾の時に世尊、復此の偈を以て無頂相菩薩に報じて曰はく、

過去の諸の如來の　神智窮りあることなし　身滅度を取ると雖も　住識變易せず、」　動識に二品あり　有住と不住識なり　設ひ無爲境に入るも　二の名號を見ず、」　如來は所著なく　安明山のごとく動かず　行過與に等しきものなく下劣者を愍度す、」　國界の諸の村落は　衆祇の經過する所　識の此に由らざるなし　爲に動住識を疑ふ、」　設し無數劫より　諸の如來を計り難く　如來の識の　動住と不動住とを　算へんと欲せんに、　佛慧邊崖なく　識は無量法に周ねく　身相弘誓備はり　無相にして見る可からず、」　我が初生の時に當つて　天地豁然として明かなり　執心の弘誓に牢く　無形無爲識なり、」　二足人中の尊にして　象の鉤鎖を離るゝが如く　自然の音樂の伎　虛空中に充滿す、」　無數の諸天人　各自ら禮敬を修し　各若干頌を以て　如來の德を歌歎す、」　以て等正覺に逮び　目視するに厭足なく　無上の法輪を轉じ　無比の法を演說す、」　一切衆生の類は　尊の聖敎を宗奉し　古來今を計せず　世雄は師子の如し、」　功を無數劫に積んで　總持の行を失はず　四等無所畏にして　一切人を潤益す、」　道果自ら莊嚴し　壽吾我を計せず無相にして應に正覺すべし　空覆無礙なるが如し、」　今日五眼を得るも　未だ不處住に住せず　無顚倒を懷き來つて無住にして識を見ず、」　如來奇特の慧　印するに無相法を以てし　行盡きて缺くる所なく　無財にして世榮に非ず、」　一行意一念にして　菩薩の觀は無亂なり　動識は衆識の妙にして　住識は第一に非ず、」　過去佛を思惟し及以當來に

又問ひたまはく、『無爲法は復現在なりや』と。答へて曰く、『不なり』と。

又問ひたまはく、『有爲法は復現在なりや』と。答へて曰く、『不なり』と。

又問ひたまはく、『有爲無爲の相は現に非ず無現に非ず、何をか所依と爲す』と。答へて曰く、『無所依に依る』と。

又問ひたまはく、『善い哉、識は有依なりや』と。答へて曰く、『識は無依なり』と。

又問ひたまはく、『云何が識は有依[一五]有界なりや』と。答へて曰く、『三界あり、身界、法界、空界なり是を三界と謂ふ』と。

時に無頂相菩薩、前んで佛に白して言さく、『染汚識と無染汚識とあり、云何が無染汚識、染汚識を成ずるや』と。

佛、無頂相菩薩に告げて曰く、『染汚識は動じて無染汚識と爲るも、無染汚識は染汚識と爲らず、何を以ての故に、識性常住にして亦變易せず、生滅著斷なければなり、是を以ての故に動識は住識と爲るも、住識は動識と爲らず』と。

爾の時に世尊、復無頂相菩薩に告げたまはく、『吾今成佛して三界特尊なり、衆相具足し、四無所畏十八不共法、衆德普ねく備へ、今住識を得たれども未だ動識を得ず』と。

時に無頂相菩薩前んで佛に白して言さく、『世尊、云何が住識は動識を得ざる』と。

佛言はく、『所謂動識は有爲法界なり、所謂住識は無爲法界なり、無爲識の有爲識を成ずるに非ず、是を以ての故に、動識は住識を成ずれども、住識は動識を成ずるに非ず、』と。

是の時に世尊、此の語を說く時に、無頂相菩薩及び百千の天人、皆無上立住の識行を發し、無數の衆生皆無上正眞道意を發しき。時に無頂相菩薩卽ち佛前に於て偈を作つて曰はく、

衆相具足して　如來身を成じ　三界に著せざること　空無我の如し、」　已に心垢を除き　神通自在にして　由つて動識に逮び　住識に逮ばず、」　法界は虛空にして　亦變易せず　如來は久しく如にして　當に住識に逮ぶべし、」　過去の如來は　數恒沙の如く　住識を得たりと爲すか　悉く動識か、」　我れ今疑ありて　法界に達せず　唯願はくは垂愍して　妄想をなからしめたまへ、」　衆生の志趣　性行

【一五】麗本、こゝに無字あり、三本宮本には無字なり。

又問ふ『四大を離るゝ識と泥洹を離るゝ識と、此の識未だ四大に在らず、未だ泥洹に在らず、復異りありや』と。答へて曰く『非なり』と。
又問ふ『四大識を離れ、泥洹識を離る、異らざるや』と。答へて曰く『異らず』と。
又問ふ『識は泥洹に處て無爲法を成じ、識は四大に處て有爲法を成ず、別ならずや』と。答へて曰く『別ならず』と。
又問ふ『若し別ならざらしめば、云何が此の有爲識此の無爲識、何の異あらんや』と。答へて曰く『有爲識は四大を成就し、無爲識は四大を成就せず、是の故に異あり』と。
爾の時に無頂相菩薩、前んで佛に白して言さく『世尊、四大を離るゝ識と泥洹を離るゝ識と亦一ならず亦二ならず、何を以ての故に、識は四大に在れば便ち過去當來現在あり、識は泥洹に在れば便ち過去當來現在なし、此の識と彼の識と復異ありや』と。答へて曰く『異らず』と。
又問ふ『何を以ての故に、此の四大識は此れ泥洹識と說くや』と。
答へて曰く『假號なり、誠諦教には非ず』と。
時に無頂相菩薩、内に自ら思惟すらく、我が今問ふ所は四大は識を離れて果報行あるなり、今無果報行を以て我に報ず、將た我れ非を問ふなきや、我に報ずるは非なりや』と。
爾の時に世尊、彼の無頂相菩薩の心中の所念を知り、便ち無頂相菩薩に告げて曰く『有爲四大識は無爲四大識に非ず、無爲四大識は有爲四大識に非ず、云何が四大識は此に非ず彼に非ざるや』と。答へて曰く『非なり』と。
又問ひたまはく『四大識に非ず泥洹識に非ずんば無識に非ずや』と。答へて曰はく『識滅し識滅せず、』と。
〔又問ひたまはく〕『云何が識滅するや』と。答へて曰く『現在に非ず』と。
〔又問ひたまはく〕『云何が識滅せざるや』と。答へて曰く『現在なり』と。
又問ひたまはく『識滅することありや』と。答へて曰く『現在なり』と。

り』と。
又問ひたまはく、『識獨りならば識と稱することを得るや』と。答へて曰く、『識獨りならば識に非ず』と。
又問ひたまはく、『識獨りにして識に非ずんば、云何が地水火風に依らんや、有爲なりや無爲なりや』と。答へて曰く、『是の如し』と。
又問ひたまはく、『識を離れて死胎に復處ありや』と。答へて曰く、『有り』と。
又問ひたまはく、『何者か苦の本を盡すや』と。答へて曰く、『無盡識是れなり』と。
時に無頂菩薩、復問ふ、『大が識を成就するや、識が大を成就するや』と。答へて曰はく、『大が識を成就するなり』と。
又問ふ、『識の猗る所なりや』と。答へて曰く、『諸大なり』と。
又問ふ、『地水火風空は、地水火風空を離れて、識所在すと爲すや』と。答へて曰く、『識所在なし』と。
又問ふ、『滅盡するや』と。答へて曰く、『非なり』と。
又問ふ、『非滅なりや』と。答へて曰く、『非なり』と。
又問ふ、『識は趣に非ず不趣に非ず、此の法は泥洹に非ざるや』と。答へて曰く、『非なり』と。
又問ふ、『識と泥洹と異ありや』と。答へて曰く、『異らず』と。
又問ふ、『泥洹に四大ありや』と。答へて曰く、『泥洹に四大なし』と。
又問ふ、『泥洹に識ありや』と。答へて曰く、『泥洹に識あり』と。
又問ふ、『地水火風識と及び泥洹識と何の差別ありや』と。答へて曰く、『地水火風識は轉じ、泥洹識は轉ぜず、是を差別と謂ふ』と。
又問ふ、『地水火風の識を離ると、泥洹の識を離ると、何の差別ありや』と。答へて曰はく、『四大は識を離るゝも、過去當來現在を離れず、泥洹は識を離るれば、永く過去當來現在を離る』と。

佛、無頂相菩薩に告げて曰はく、『云何が族姓子、聲は耳より出づるや、外より來ると爲すや』と。答へて曰く、『外識は內識に從はず』と。

又問ひたまはく『口に言教を出す、或は大或は小なり、口に由つて耳識聞くや、口に由らずして耳識聞くや』と。答へて曰く『或は口に由つて聞き或は口に由らずして聞く』と。

又問ひたまはく『云何が口に由つて聞き、口に由らずして聞くや』と。答へて曰はく『口に音響を出すは、此れ則ち口に由つて聞くなり、地水火風山河石壁は、此れ口に由らずして聞くなり』と。

又問ひたまはく『口に音響を出すは稱して識と爲すを得、地水火風は識なかる可きや』と。答へて曰く『地水火風は口識に非ず』と。

又問ひたまはく『云何が口識を成就せん』と。答へて曰く『四大なり』と。

又問ひたまはく『口は四大に非ず、今四大と言ふや』と。答へて曰く『有識四大は無識四大と言はず』と。

又問ひたまはく『云何が有識四大と言つて、無識四大と言はざるや』と。答へて曰く『有識四大とは口識是なり、無識四大とは地水火風なり』と。

又問ひたまはく『有識四大は豈地水火風に非ざらんや』と。對へて曰く『然り』と。

又問ひたまはく『無識四大は何者が是なるや』と。答へて曰く『地、水を離るれば則ち無識、水、火を離るれば則ち無識、火、風を離るれば則ち無識、風、空を離るれば則ち無識、空、識を離るれば則ち無識なり、是を四大無識と謂ふ』と。

又問ひたまはく『有識四大は音響を出す所ならば、地なりや水なりや火なりや風なりや空なりや識なりや』と。答へて曰はく『普ねく聚るなり』と。

又問ひたまはく『四大を除いて識所在すと爲すや』と。答へて曰く『識の猗る所なし』と。

又問ひたまはく、『地水火風は同聲同響なり、識を說かざるや』と。答へて曰く、『識は獨りにして無侶なるが故に無識な

神識の攝く所を知り、輒便ち說法して次緒を失はず、舌識清淨なり、是を二法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、口に說法して敎あり響ありと雖も、言は識より發し外輒ち化を受く、復彼の語を採つて爲に說法し、中に於て自ら攝して舌識清淨なり。是を三法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、舌に衆相あり相相同じからず、一一識を化し說法して窮りなく、四辯を失はずして舌識清淨なり、乃至無量恒沙の刹土も、言は語用に從つて信を受けざるなし、是を四法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、或は時に人あり彼の說法を聞いて、或は善、或は不善、或は邪見を說き、或は正見を說くと、復能く反詰して義趣を尋究し、中に於て具足して舌識を失はず、是を五法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、過去の諸佛の所說の言敎は、行あり智あり趣あり、當來の諸佛も行あり、智あり趣あり、現在の諸佛も行あり智あり趣あり。云何が過去の諸佛は行あり智あり趣ありや。是に於て族姓子よ、過去の如來は無所著等正覺にして身滅し相滅し色滅す。云何が身滅するや、過去の如來の身は常住ならず、色身變易して一に非ず、二に非ず、生生自滅すればなり、復久久に滅盡すと雖も、猶身ありて不滅と名く、此の有爲身は無爲境に入らず。如來身とは五分法性にして、常に定んで有佛無佛を變せず、是を身滅とは五分身滅に非ずと謂ふ。所謂相滅すとは、有相有色と有相無色となり、云何が有相有色有相無色なるや。眼識境界の外の六入の本なればなり、是を有相有色と謂ふ。有相無色とは、諸の有爲法無爲法、定法無定法は、眼識境界に非ざればなり、是を有相無色と謂ふ。所謂色滅すとは、色に三品あり、有形色と無形色と增大色となり。云何が有形色なるや、口に吐く所の敎、心識の造る行は前に隨つて染著す、是を有形色と謂ふ。云何が無形色なるや、今說く言の如く、善あり惡あり後に報あるを知り、必然として疑はず、今現在に處り、過去未來の行を造るも、今の眼識の所見に非ず、是を無形色と謂ふ。云何が增大色なるや、色に不盡あり色に盡あるに非ず、色亦盡あり色亦盡なし、是を增大色と謂ふ。是の如く族姓子よ、便ち六法清淨瓔珞を具す、』と。

爾の時に無頂相菩薩、前んで佛に白して言さく、『云何が舌識言敎は無量本慧の定意を演出するや。舌識は識に非ず亦平等に非ず、一切の音響は耳識の境界なり、外の諸の色像は眼識の境界なり、衆香好醜は鼻識の境界なり、口に說言する所は聲ありりて形なし、主は外法を知りて而も自ら知らず、云何が舌識は耳識の相を受けんや』と。

佛復無頂相菩薩に告げて曰く、『復當に六法を具足すべし。佛相は無相にして護持すべからず、莊嚴成道して以て自ら莊嚴す、云何が六と爲す。是に於て族姓子よ、佛樹下に坐して一相を修習し、衆生の所行不在〔差〕なるを觀見して、兜術天より神を母胎に降し、俗變を現ずと雖も賢聖を失はず、如來の禁戒の德香普ねく無量世界に遍する、是を一法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、鼻識相を修して、普ねく十方諸佛世界を知り、趣生する所の受形の同じからざるを知り、復神足を以て之を教化す、是を二法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、鼻識もて分別して相相厭ふなし、復十方無量世界を觀じて、悉く一生補處の菩薩を見、香氣十方世界に遍滿す、中に於て竟を攝して分散せず、是を三法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、初め佛樹に坐し內に自ら思惟すらく、今吾が成佛の必然て疑はざるを、何を以てか證驗せん、天龍鬼神乃至十方の諸佛世尊をして我が今佛樹下に坐するを知らしめん、卽ち諸の毛孔より一一衆香を放ち、十方界をして悉く來りて、菩薩を宿衞し擁護して、作佛を成ずるに至らしむ。是を四法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、樹王の下に於て已に等覺を成じ、衆相具足し、一夜の中に三明慧を成ず、初夜に自ら念ずらく、過去恒沙の諸佛世尊は此に在つて成道し、先づ何の法をか布き云何が教化したまへしや。と是の如く思惟して復中夜に至る、古昔諸佛此に在つて成道し、皆無量の諸度無極を說けり、我今亦應に諸佛の法の如くすべしと、便ち衆香無形の定意に入る。復定より起ち、復更に思惟すらく、古昔の諸佛此の處に於て成佛せりと雖も、先づ何人を度し云何が說法したまへしやと。爾の時便ち十方世界の一切の衆香を聞くに、各斯の音あり、應に度すべき者を度せよと。復此の處に於て一一思惟して乃ち後夜に至る、是の如く香界を退かず闕かず、是を五法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、已に鼻相を獲て內に自ら思惟すらく、世香は無常にして生死の法を種ゆ、何の方便を以て道德の香を求めんやと、便ち自ら定に入り、慧定の五分法身を分別し、識を以て別に往き、戒香もて身を攝し、定香もて意を攝し、慧香もて亂を攝し、解慧もて倒見を攝し、度智もて無明を攝す、是を如來の五分法香もて其の身を瓔珞すと謂ふ、是を六法清淨瓔珞と謂ふ。』と。

佛復無頂相菩薩に告げて曰はく、『如來の舌相は衆相中の妙なり、言教を演布して四過を漏さず、本と造りし所の願を說法教化す、口教清淨にして舌識を失はず、是を一法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、本と清淨を修して三行を守護し、彼の衆生の

是を四法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、或は時に耳識もて他方異刹の演説を聞き、五分の法身現に母胎に處り、塵欲に染せず、復現に出家して心改變せず、樹王下に在つて等正覺を成ず、中に於て意を攝して道俗を分別する者、是を五法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、耳識もて十方國土の諸佛世尊の虛空法輪を轉じたまふを聽察す、彈指の頃無量の衆生の類を拔濟して、自ら吾れ所度ありと稱說せず、中に於て意を攝して衆生を化すと計せざる者、是を六法清淨瓔珞と謂ふ。

佛、復、無頂相菩薩に告げて曰はく『彼の耳識に依つて當に六法を修行すべし、云何が六と爲す。是に於て族姓子よ、權方便を行じて本を造る所を記し、瓔珞を修習して次叙を越えず、是を一法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、行無我に猗つて身本を計せず、是を二法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、六法を具足して戒性を毀らず、是を三法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、耳識玄鑒通達無礙にして、弘誓大慈の心を捨てず、是を四法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、耳識進趣行步を了知し、斯の法は善道なるや斯の法は惡道なるや斯の法は有爲なるや、斯の法は有爲なるや斯の法は無爲なるやを、中に於て分別して耳識錯らざる者、是を五法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、耳識もて諸佛世界を分別し、殊特深妙の法を聽聞し、一一諸佛世尊に承事す、是を六法清淨瓔珞と謂ふ。

復六法あり當に修行せんことを念ずべし、云何が六と爲す。如來世尊は色身清淨にして愛欲身に非ず、身より衆香を放ち、普ねく十方無量世界に遍ねく、一一の香氣は、皆無量の瓔珞法門を演べ、衆生に猗らずして衆生想あり、中に於て鼻識を成就し具足する、是を一法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、如來世尊の無量の香界は、戒德香を以て、普ねく十方恒沙の刹土に周ねく、中に於て無量の衆生を攝取する、是を二法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、復鼻識を以て彼の香界を察し、應に三道に從ひて諸の縛著を斷じ、鼻識應行の本を失はざるべし、是を三法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、彼の鼻通に因つて無量審諦の敎を演出し、鼻識清淨にして衆行具足す、是を四法清淨瓔珞と謂ふ。復次に姓族子よ、鼻識に三あり、界の外より內識に入ると、善惡の香を嗅ぐと、八道十六聖迹を分別するとなり、是を五法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、鼻識もて一念一意を嗅香し、彼の衆生心所念の法を知り、一一無量の法門を演暢す、是を六法清淨瓔珞と謂ふ。』と。

し、常、無常乃至無我を計す、色性は虚寂にして永く起滅なし、是を五法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、色は是れ外より入り眼識は往いて受く、有色の有爲と有色の無爲と、有爲色識は便ち道根を敗り、無爲色識は果報成就す、有無の相を思惟分別する者、是を六法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、自ら色識を攝するに復六事あり、云何が六と爲す。是に於て族姓子よ、識相は無形にして萬端に流馳し、前に外塵あれば便ち塵勞を生ず、善なれば則ち善識惡なれば則ち惡識、惡識に善なく善識に惡なし、菩薩意を攝して善惡の識を起さざる者、是を一法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、眼識もて空を觀ずれば悉く無所有にして、便ち空想を生じて善惡の報なし、今生の後に復報を受くるを見ず、中に於て意を攝して顚倒想を起さざる者、是を二法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、無我を識別するに、或は時に根門の不淨を見て而も有淨と計するあり、或は復根門の有淨を念じて而も不淨と計するあり、中に於て意を攝して二想を起さざる者、是を三法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、彼の恚を識見するに善不善あり、善は常に善なりと謂ふ、不善亦爾り、中に於て意を攝して忍辱を具足する者、是を四法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、衆生を識知するに善に趣くもの善に趣かざるものあり、堅住行地不堅住行地あり、中に於て意を攝して心退轉せざる者、是を五法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、前色を識觀するに道あり俗あり、道を見て是れ道なるを知らず俗を見て是れ俗なるを知らず、中に於て意を攝して能く道俗を分別する者、是を六法清淨瓔珞と謂ふ。

耳識の想を起すに、復六事あり。云何が六と爲す。是に於て族姓子よ、若し耳に聲を聞くや十八に變動す、或は風聲樹木山の崩るるを聞き、或は時に鳥獸音樂の聲あり、聲に善惡可記不可記あり、中に於て意を攝して耳識を錯らざる者、是を一法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、時に衆生あり、便ち世俗の通徹の聽を得、或は百踰旬二百踰旬、復無數諸佛國土に至る、猶猛雄世尊の道場に進趣し等正覺を成ぜんと欲するが如し。爾の時天地六返震動す、音響を分別するに悉く虛空に歸す、中に於て意を攝して想著を起さざる者、是を二法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、耳識に聲を聞くに本と無所有なれども、便ち衆想を生じ若干の念を起す、中に於て意を攝して邪念なき者、是を三法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、耳通淸淨なれども、彼の受形に淸あり濁あるを知る、濁を見るも塵勞を起さず、淸を見るも道心を生ぜず、中に於て意を攝して彼我を起さざる者、

又問ふ、『云何が菩薩三三昧を行じて泥洹門に至るや』と。答へて曰く『如來の八道の徑路を捨てず』と。

爾の時に舍利弗、無數の方便を以て諸の會者のために、微妙法無礙瓔珞を說く。時に一千二百の比丘、信心堅固にして不退轉に立つ。復無數の天人あり、皆無上正眞道の意を發す。

時に菩薩あり無頂相と名く、卽ち座より起ち前んで佛に白して言さく、『甚だ奇なり甚だ特なり、未だ曾て所聞あらず、賢者舍利弗の說く智慧界の如きは有に非ず無に非ず、愛憎喜怒、諸法の相を見ず。我が十方世界の諸佛世尊の道教を敷演したまふを觀見するが如きは、或は有教を說き漸く無爲に至る、或は無教を說き亦無爲に至る、或は身苦を說いて厭患を知らしめ、或は識想を除いて本際を離るるを知らしむ、云何が菩薩普ねく諸法に入り、一一分別して增減を起さざる。今聞く如來身相の法は、有爲自爾にして行改易せず、無爲無形にして測度すべからず。今如來瓔珞の本を聞かんと欲す、唯願はくは解說したまへ。有爲色身は幾ばくの瓔珞ありて自ら嚴飾するや、無爲色身は幾ばくの瓔珞ありて自ら嚴飾するや、有爲無色身は幾ばくの瓔珞ありて自ら嚴飾するや、無爲無色身は幾ばくの瓔珞ありて自ら嚴飾するや』と。

爾の時に世尊、無頂相菩薩に告げて曰く、『善い哉善い哉、族姓子よ、乃ち能く如來の前に於て師子吼を爲すや。今當に汝が爲に一一分別すべし、諦かに聽き諦かに聽き善く之を思念せよ。菩薩摩訶薩は初發意より乃至成佛まで、恒に當に身口意を撿むることを具足し、六度を莊嚴し色は本と無なりと了り、色本を見ず、色に於て六瓔珞法を莊嚴し、如來の深藏瓔珞を逮得すべし。云何が六と爲す。是に於て善男子善女人、若し眼に色を見て彼の色を起すを知るは、衆生の婬怒癡なり、應に進むべくして便ち進み、應に退くべくして便ち退く、眼は彼の色に非ず色卽ち眼に非ず、彼の色を除かんと念じて眼想を起さず、是を一法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、色性は自然にして識亦自然なり、彼の色我が識は塵勞を興さず、速かに彼の縛を解いて我が有に染せず、是を二法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、諸善の根本は色に於て無形なり、分別思惟すれば、根本清淨にして色亦清淨なり、是を三法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、色の欲染に著するは、色に欲あるに非ず色性は本と無なり、況や復婬欲をや、是を四法清淨瓔珞と謂ふ。復次に族姓子よ、色を有常と計するは眼の境界に非ず、意識もて分別すれば便ち猶豫を起

又問ふ、『云何が如來の所に於て、賢聖默然として衆想を起さざる』と。答へて曰く、『寧ろ身命を失ふも戒を缺かず』と。
又問ふ、『云何が八百の根門を分別するや』と。答へて曰く、『持心連續して意を守り出入息念を失はず』と。
又問ふ、『云何が六堅の法を具足するや』と。答へて曰く、『不實の身、不實の命を、實の身命に易ふるなり』と。
又問ふ、『云何が無盡藏を具足するや』と。答へて曰く、『已に菩薩の無礙瓔珞を得て、便ち能く七財無盡を具足す』と。
又問ふ、『云何が世に於て少欲知足なるや』と。答へて曰く、『諸衆の智に於て相違背せざる、是を少欲と謂ふ』と。
又問ふ、『云何が心閑居に遊んで三有に染せざる』と。答へて曰く、『三界を願求せず』と。
又問ふ、『云何が智を用つて三世の患を覺るや』と。答へて曰く、『苦の元本を盡して塵勞を生ぜず』と。
又問ふ、『云何が三痛法に於て想念あることなきや』と。答へて曰く、『苦樂を見ざれば苦なく樂なし』と。
又問ふ、『云何が菩薩受けて所受なきや』と。答へて曰く、『五陰―色痛想行識―を分別す』と。
又問ふ、『云何が菩薩深く法本に入るや』と。答へて曰く、『外六入を捨て內六塵を造らず』と。
又問ふ、『云何が度を以て度するや』と。答へて曰はく、『諸道を分別すれば道果に染せず』と。
〔又問ふ〕『云何が菩薩慳を捨て施を施して想著を起さざる』と。答へて曰く、『一切衆生に於て心に三礙なし』と。
又問ふ、『云何が菩薩戒を守つて缺かざる』と。答へて曰く、『初發意より乃至成佛まで、道心を捨てず法忍に柔順す』と。
又問ふ、『云何が忍を修して恚怒を起さざる』と。答へて曰く、『心を伏し意を攝して空無形を計す』と。
又問ふ、『云何が菩薩は禪意廢けず、十方に遊至して心意錯らざる』と。答へて曰はく、『意等無二にして智慧を失はず』と。
又問ふ、『云何が慧眼もて普ねく無礙を照すや』と。答へて曰く、『一切諸法に形相を見ず』と。
又問ふ、『云何が菩薩慈等定に入り、衆生を攝取して度あるを見ざる』と。答へて曰く、『衆生の心意識の本を觀了す』と。
〔又問ふ〕『云何が菩薩、諸の不度者を愍念悲泣するや』と。答へて曰く、『法想を起さず高下あるを見る』と。
又問ふ、『云何が菩薩喜心絕たず無量定に入るや』と。答へて曰く、『行もと自然にして生滅を見ず』と。

時に舍利弗、佛の威神を承けて四部衆に告ぐ、

『云何が諸賢、汝等審らかに此の深法を解すや』と。對へて曰く、『唯然り、賢者舍利弗よ、永く塵勞を斷じ所作已に辨ず』と。

舍利弗言く、『云何が塵勞を盡すや』と。對へて曰く、『衆智雜へず、造に非ず不造に非ざるが故に。故に塵勞を盡す』と。

舍利弗言く、『善い哉善い哉、族姓子よ、塵勞の疇は是れ衆生の本なり、衆生中に於て無上道を成じ、如來福田に於て一切智を淨む』と。

舍利弗言く、『淨も亦無淨なり、云何が福田に於て一切智を淨むるや』と。對へて曰く、『未だ道果を得ざれば、一切智に於て未だ其の跡を淨めず』と。

又問ふ、『舍利弗よ、菩薩の一切智を淨むるに、凡そ幾品ありや』と。

舍利弗言く、『菩薩の一切智を淨むる、世法の拘はる所と爲らず』と。

又問ふ、『云何が世法の拘はる所と爲らざるや』と。

舍利弗言く、『諸法無著なれば倒見を懷かず』と。

又問ふ、『菩薩の瓔珞、云何が成就せん』と。答へて曰く、『佛道を失はずんば竟に成就するに至り、菩薩の瓔珞を失はず、是を族姓子よ、斯れ本行に由つて善願を失はずと謂ふ』と。

又問ふ、『云何が舍利弗、菩薩摩訶薩は云何が善知識に憑つて、菩薩の衆行瓔珞を成就するぞ』と。答へて曰く、『一切衆生に於て身命を惜まざる、是を菩薩摩訶薩の善知識と謂ふ』と。

又問ふ、『何等の智を用つて衆行瓔珞を成就するや』と。答へて曰く、『佛種を斷ぜず更に新を造らず、』と。

又問ふ、『云何が諸の如來に於て、承事供養し佛土を莊嚴するや』と。答へて曰く、『劫數を以て期と爲さず、是を佛土を莊嚴すと謂ふ』と。

佛言はく『云何が泥洹の盡くるが如きや』と。

舍利弗言く『盡、無盡の如し』と。

佛言はく『善い哉善い哉、舍利弗、汝が所言の如し、本と無礙と泥洹とは有爲相に非ず有爲識に非ず、無爲相に非ず無爲識に非ず、亦識に異なるに非ず、相は則ち無相にして別に名を立てず、云何が復無礙、泥洹は盡無盡の如しと言ふや』と。

時に舍利弗、佛に白して言さく『世尊よ、我が境界に無礙・泥洹を說くに非ず、但無礙、泥洹は無盡、非無盡なり』と。

佛、舍利弗に告げたまはく『吾れ今汝が與に喩を引かん、智者は譬喩を以て自ら解す、猶士夫の仰いで虛空を射るが如きは、空に於て空を求むるなり、復人に向つて說く、吾れ昔空に遊んで自ら淵に陷れり、今空を得て便ち射て讎を報じたり、何ぞ其れ快なる哉我れ所願を果せりと。云何ぞ舍利弗、斯人の志趣審らかに然りと爲すや不や』と。

舍利弗、佛に白して言さく『世尊よ、彼の虛空を射て其の怨を報ぜんと欲する、審然として虛しからず』と。

『云何が舍利弗、空に於て於て空を射て、箭空に著するや』と。對へて曰く『著せず』と。

佛言はく『云何が空に於て怨を報ぜん』と。

舍利弗言く『虛空は無相にして有報無報を見ず』と。

佛言はく『是の如し是の如し、汝が所言の如し、虛空は無報なり』と。

佛、舍利弗に告げたまはく『無礙泥洹も亦復是の如し、有爲相に在つて有爲識に隨ひ、無爲相に在つては無爲識に隨ふ、此の相に在らず彼の相に在らず、亦有識に非ず、亦無識に非ず、是を無礙泥洹は有識に非ず無識に非ずと謂ふ』と。

時に五百の比丘あり、此の虛空無盡の法を聞いて卽ち座より起ち、衣鉢を收攝し道を涉つて去る。何を以ての故に、斯等の比丘は空に於て空を求め空の怨を報ぜんと欲す、計心染著して空に空ありと謂へばなり。正使將來恒沙の諸佛前に立つて說法すとも、斯等の比丘は、空に於て空に染して終に解脫せざらん。爾の時座上の凡夫信を立て、學無學の人は未だ苦を盡して無爲界に至ること能はず。

『云何ぞ舍利弗、無礙の諸法は是れ常非常、有起有滅なりや』と。對へて曰く、『非なり、世尊』と。
佛、舍利弗に告げたまはく、『若し無礙の諸法して乃至泥洹をして、色に非ず無色に非ず、亦色に非ず亦無色に非ず、亦生滅斷著なく、形なくして見るべからざらしめば、云何が復泥洹の名を言ふや』と。
舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、泥洹は名なく、眼識の境界の能く見る所に非ず』と。
佛言はく『是の如し是の如し、舍利弗よ、汝の所言の如し、眼識の境界の能く見る所に非ず』と。
『云何ぞ舍利弗、識は有形なりや』と。對へて曰く、『其の形相に隨ふ』と。
佛、舍利弗に告げたまはく『汝が所言の如し、其の形相に隨つて則ち識あり、云何が復眼識の境界に非ずと言ふや』と。
舍利弗、佛に白して言さく『有形相に隨へば是れ有爲識、無形相に隨へば是れ無爲識なり。無礙と泥洹は有爲相に非ず有爲識に非ず、無爲相に非ず無爲識に非ず』と。
『云何が舍利弗、無礙と泥洹は有爲相に非ず有爲識に非ず、無爲相に非ず無爲識に非ず、有爲有識と無爲無識と、泥洹は此に非ず、彼に非ず更に識と異るや』と。
舍利弗、佛に白して言さく『非なり世尊』と。
佛、舍利弗に告げたまはく『泥洹は此に非ず、彼に非ず、亦識と異るに非ず、相は則ち相に非ず、云何が泥洹に別に名を立つるや。假使泥洹に別に名號を立つるも、其の形相に隨へば則ち識の生ずるあり、若し泥洹をして別に名號を立てさらしめば、無爲相に隨つて便ち無爲識あり、云何が說いて泥洹と言ふや、有爲相ならず有爲識ならず、無爲相ならず無爲識ならず、亦識と異らず、復別に名號を立つるに非ず、如今云何が泥洹と稱するや』と。
舍利弗、佛に白して言はく『世尊、泥洹は泥洹なり』と。
佛言はく『云何が泥洹は泥洹なるや』と。
舍利弗言く『泥洹の盡くるが如し』と。

ず、如來の變化は窮盡すべからず、乃ち能く瓔珞の妙法を演說したまふ。諸菩薩摩訶薩あり、瓔珞名を執持諷誦する者は、皆是れ諸佛の擁護する所なり。若し善男子善女人あり、如來の瓔珞を說法したまふに遭遇せば、便ち如來の法藏に値遇すと爲す』と。

爾の時に世尊重ねて四部衆に告げたまはく、『若し善男子善女人あり、一心一意に受持し諷誦せば便ち十無礙功德を得ん。云何が十と爲す、虛空藏を得て威儀深入し、所聞强記にして辯才を失はず諸念を觀了するに幻の如く化の如し、心解脫に遊んで亦常を計せず、恒に八法を離れて憒鬧に處らず、輒ち歡悅を聞いて心に二見なし、空無相を解して亦相に著せず、復能く深く寂滅定意に入る、神足無礙にして捷疾智を得、法の自生を知りて起滅を見ず、是を善男子善女人、便ち能く十無礙功德を具足すと謂ふ』と。

爾の時に舍利弗、卽ち座より起ち、偏へに右の臂を露はし、叉手し前んで佛に白して言さく、『唯然り世尊よ、諸法は無形にして覩見すべからず、無形の法は是れ羅漢辟支の及ぶ所に非ず、云何が世尊、善男子善女人の、十無礙功德を執持し諷誦せば、便ち道果を成じ泥洹門に入ると言ふや、無礙と泥洹と豈異法ならんや。泥洹は無爲にして無礙は無著なり、如來は現在等正覺に逮びたまふ、云何が無礙功德を以て泥洹を說かんや。若し衆生をして十無礙功德を得しめば、便ち已に泥洹を得たりと爲す。若し衆生をして已に泥洹を得しめば、則ち泥洹は泥洹に非ずと爲す、云何が世尊、十無礙功德を得ば便ち是れ泥洹なりと言ふや』と。

佛、舍利弗に告げたまはく、『汝が所問の如し、皆佛の威神なり、汝が境界に非ず、云何ぞ舍利弗、泥洹は色なりや』と。對へて曰く、『非なり』と。

『云何ぞ舍利弗、泥洹は無色なりや』と。對へて曰く、『非なり』と。

『云何ぞ舍利弗、泥洹は色無色なりや』と。對へて曰く、『非なり』と。

『云何ぞ舍利弗、泥洹は非色非不色なりや』と。對へて曰く、『非なり』と。

子よ、或は瓔珞あり名けて盡信と曰ふ、如來此の法門を得ば、地獄の衆生の苦惱を受くる者をして、衆患なからしむ。復等慈瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、彼の畜生形を受くる者をして、永く傷害なからしむ。復無忘[一三]〔妄〕瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、餓鬼の類をして永く飢渴の想なからしむ。復清淨瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、迷惑の衆生をして其の道徑を知らしむ。復徹聽瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、無聞の衆生をして悉く正教を聞かしむ。復自寤瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、愚癡の衆生をして心邪亂ならざらしむ。復撿意瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、衆生を教誨して十善行を行ぜしむ。復直信瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、邪見の衆生をして正見に安處せしむ。復弘誓瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、劫數を以て遠しと爲さず。復超越瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、懈怠の衆生をして正律を奉持せしむ。復無恚瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、恚害の衆生をして忍辱を修行せしむ。復勇猛瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、慢惰の衆生をして精進して廢せざらしむ。復一意瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、亂意の衆生をして禪定不斷ならしむ。復熾然瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、愚癡の衆生をして智慧を成就せしむ。復堅固瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、未だ道跡を履まざる者をして道跡を[一四]立せしむ。復多聞瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、少智の衆生をして强記不忘ならしむ。復威儀瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、無慚愧の衆生をして慚愧を知らしむ。復惡露瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、著欲の衆生をして不淨を知らしむ。復快樂瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、瞋恚の衆生をして永く無餘を斷ぜしむ。復普曜瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、悉く慧明に逮んで永く闇冥を除かしむ。復遍普瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、等分の衆生をして狐疑を起さざらしむ。復、形色變化瓔珞あり、菩薩此の瓔珞を得ば、無量の形色の變を覩見して皆無上正眞道意を發さしむ。是を族姓子よ、斯等の瓔珞八萬の法門至ると謂ふ。菩薩は窮盡すべからず、吾れ今略說して其の事を悉くさず。若し衆生あり劫より劫に至り、百千劫に至つて、菩薩の瓔珞行を盡さんと欲するも、此れ則ち然らず』と。

　時に菩薩あり名けて無形と曰ふ。立つて退轉せず。卽ち座より起ち偏へに右の臂を露はし、長跪叉手し、前んで佛に白して言さく、『甚だ奇なり甚だ特なり、未だ曾て聞く所にあら

〔一三〕三本宮本妄に作る。
〔一四〕立宮本には之に作る。

世雄最も第一なり、」　如來の三法本は　空無相無願なり　泥洹道に進趣して　利なく所染なし、」　立願甚だ堅固にして　行を積みて所違なく　念ぜず行に著することなく　亦三有に處らず、」　神足に四業あり　緣に隨つて其の壽に住し　行無邊涯に過ぐ　慈仁最も第一なり、」　既に生れて五濁に處る　合會は是非なし　眞人に染行なく　權を行じて衆生に入る、」　平等に五根信慧精進の力を行じ染せずして倒見を去る　清淨を第一と爲す、」　尊の德天世に過ぎ　永く八法に著せず　定意錯亂せず　是故に最勝と禮す、」　當に尊、神を下降して　三千世を震動し　久寐の衆生を覺まし此の三世の患を離れしむべし。」

と。

爾の時忉利諸天、此の偈を說いて佛を讚し已り、遶佛三匝して復た本の座に還る。爾の時に菩薩內に自ら思惟すらく、『今此の衆會は皆悉く普ねく十方世界より會す、六通聖智、一生補處、四等具足す。皆悉く雲集して法を聞いて不退轉地を得んと欲す、今我れ寧ろ、無畏法─衆行の本─を執つて其の身を瓔珞すること、諸の過佛の所行の法則の如くなるべし』と。即ち座上に於て自然無性三昧に入り、定意を分別して佛所行を觀る、菩薩の瓔珞に八萬品あり、其の德殊特にして以て喩と爲すなし。菩薩摩訶薩の此の纓絡〔瓔珞〕の法門を得る者は、便ち能く一意に道場に進趣し、未だ道跡に入らざる衆生をして、能く彼岸に至るを得しむ。

法門品第五

爾の時に世尊、廣長舌相を出し、光明普ねく三千大千世界を照し、四部衆に告げたまはく、『比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天龍、鬼神よ、諦かに聽け諦かに聽け、善く之を思念せよ、吾れ當に汝が與に菩薩の無相瓔珞を演說すべし。若しは善男子善女人、此の瓔珞もて身を莊嚴することを得る者は、便ち能く進趣して罣礙する所なからん』と。

爾の時に世尊、族姓子族族姓に告げたまはく『吾れ今當に菩薩瓔珞八萬の法門を說くべし。云何が八萬なるや。是に於て族姓

み、」　正に無央數　恒沙諸劫數に　苦行不邪念ならしめ　如今悉く願を果せり、」　將來の諸恒沙の　方に成佛せんと欲する者　彼此の願を捨てずんば　必ず如今の覺に至らん、」　捨命するは己の爲ならず　施等しうして高下なし　故に六度の慧を成ず、」　去來今現在に　生滅して本と窮りなし　生ずる者は[10]　生自ら空なり　本の根原を知る莫し、　十行は人身を離れ　五行は法王たり　思惟して本原を滅し　慈愍もて大法を演ぶ、」　或は復異時に於て經行し坐臥し念じ　斯れ總持を得るに由りて　四辯に疆界なし、」　菩薩一切を愍れみ　常想あるを計せず　世の非常に處するを念じ　安隱にして永く安きに至る、」　神力・四無畏　覺道八等行　如來十八法を　尊今已に具足したまふ、」　衆生自ら念を生じ獲ることなく獲べからずとし　遂に自ら深淵に墮し　解脫門に向はず、」。

と。

是の時怒害魔王、此の偈を說き已つて、遶佛三匝し復本の位に還る。爾の時に忉利諸天、諸の天衆を將ひて、往いて佛の所に至り、頭面もて足を禮し、一面に在つて立つ。斯須の頃、前んで佛に白して言さく、『我等世尊に於て、宿に福業あり、聖顏に遭ひ値ふ、神を閻浮利內に降し、法輪を敷演して三千世界に王となりたまへ、』と。復、華香の拘勿頭華・分陀利華・須乾提華を以て、如來の上に散ず。爾の時諸天復此の偈を以て、頌を讚して曰く、

世雄今降步し　此の閻浮提に王たり　既に八不閑　衆生の所居の處に生じ、　永く離れて染著せず　內に思想を生せず　無息寂然として滅す、　願はくば具さに法を演說したまへ、」　會の德は不思議なり　功勳記すべからず　衆相もて身を瓔珞すること　月の星明に在るが如し、」　行盡きて本を造らず　道場に端坐して　亦自ら心識なし　豈當に世の著に染すべけん、」　已に衆行の本を過ぎて　[11]德充ちて諸情を滅し　音響梵に過ぐ　自ら天中の天に歸しまつる、」　本と造りしは四魔に由れり　[12]魔欲生死を離れ　八等染汚せず　自ら無等倫に歸しまつる、」　尊今一法に趣き　泥洹して起滅せず　意を滅して意生ぜず　果報證を見ず、」　尊本と二行を修し　止滅して觀を起さず　行盡きて盡を見ず

【一〇】生自空。麗本には生自生とし、宮本には生自空とす。
【一一】麗本には德充滿諸情に作り、三本宮本には滿字を滅に作る。
【一二】麗本には魔欲離生死に作り、宮本には魔字を塵に作る。

明を求めて[illegible]若干の慧を采〔採〕取し　體を莊最すること極りなく　無形にして名くべからず、」　無信にして立つるに信を以てし　根力虧損せず　無畏にして彼此を離る　唯願はくは時に演說したまへ、」　三界の尊極りなく　正法もて一切を御す　非法は成道を壞す　永く吾我の想を除きたまへ、」　諸人は身に貪著し　玩習して離るる能はず　世苦に纒絡せらる　何に由つてか出期あらん、」　慧明世間を照して　貪愛の心を拔斷し　自ら度し復彼を濟ふこと　人中甚だ有り難し、」　惠施に吾我なく　已に三界の表を超え　一時一意念　平等にして男女なし、」　衆生倒見を懷いて　空無慧に達せず　發意して五欲に著し　身に實用ありと計す、」　是を以て五趣に墮ち　非常の證を覩ず　佛世間に現出して　彼の有無の想を滅したまふ、」　禪に入りて著貪せず　永く世の榮飾を除き　此を常形なく　非有非無なる者なりと觀ず、」

大慈もて衆生を濟ふこと　廣大にして邊涯なし　宿願今已に果したり　速かに起ちたまへ復坐することを爲んや、」

此の熾然の人を觀るに　流轉して自ら覺らず　如何ぞ尊靜かに默して　言なく所說なき　世垢に五難あり　佛法衆を覩ざると信を體すると、　中國に生ると、　父と母とを五事と爲す、」　[九]光相の色は無色にして　形質像を見ず　將に滅盡定に入らんとして　乃ち寂として音響なし、」　大衆遠方より集り　迦留、乾沓惒　尊の無脈の廣長舌の無爲を演べたまふを聽く、」　法あり不思議なり　化して自ら化を覺らず　本末を知らしめんと欲する　此れ亦未曾有なり、」　菩薩は不退轉なるも　且つ未だ其の法を獲ず　況んや復道門に向つて　本要を知らんと欲するをや、」　尊今四輩の志趣若干種なるを觀じ[illegible]幸に爲に法を敷演して　各得度を蒙らしめたまへ、」　衆生は三有に染し　縛を去離せんと欲求す　常想非常想　悉く照して滅盡に向けよ、」　魔鬼〔衆〕億千あり　皆十方より來り　信不起忍を得て　行地退轉せず、」　復た億千衆あり　意趣我等に隨ふ　斯等の族姓子は　必ず堅固地に至らん、」　復無數人あり　行地有に著せず　悉く空無相を求め　進趣して道場に向ふ、」　羅漢は意に自ら鄙み　類に隨つて其の俗に入り　說く所の苦は淺からざるも　終に一切智なし、」　亦是れ菩薩の印　彼の成道の果を印す　大乘行を稟受すれば　本無に若干なし、」　尊本と初發心より　四意止を修習し　行地に高下なし　唯道は慧より通ずるの

【九】麗本光明に作り、三本光相に作る。

を慕及するありと雖も、猶未だ大化の訓典に遭遇せず』と。

爾の時に魔王卽ち佛前に於て偈を以て頌して曰く、

億百千劫に於て　著する無きが時に乃ち出づ　華の塵水を離るるが如し　心淨きは彼に超ゆ、」　劫數窮りあることなく　經歷して苦行を積み　四弘誓を捨てず　金剛も沮むべからず、」　口に八無礙を演べ　天世間に充滿す　受くる者は永く充足し　復た老死の患なし、」　一生より百生に至り　名號に諸の種姓あり　悉く諸の根原を知り　化するに無比の慧を以てす、」　十住にして本際に還り　退いて成じ猶復進む　最勝にして此の難を度し　時に演べて疑あること勿し、」佛を去る恒沙數にして　盡く此の苑間[七]〔園〕に遊び　無上の法輪を轉じて　人を度せしこと量あることなし、」　正使當來世に　諸佛道果を成ぜんも　皆當に此の處に於て　當に尊の法輪を轉ずべし、」　曾て聞く如來藏は　如來祕要の慧なり　名けて普嚴土　菩薩瓔珞經と曰ふと」、　今日正に是の時なり　遇ひ難し値ふ可からず、　諸の苦厄を拔濟し　是より道慧を布け、」　或は衆生の類あり　處身の苦を厭患し　微妙の法を聞きて　四大法を蠲除せんと欲す、」　復た道撿に入り　生滅無常を知るものあり　空無の道を聞きて　悉く無所有を知らんと欲す、」　復た巖穴に處るあり　自ら守りて他想なく　身は久器に非ずと計して　想を興し念に著せず、」　復た道根を念ずと雖も　未だ聞かずんば寤ることを得ず　唯願はくは尊よ神を降して　彼をして疑滯なからしめたまへ、」　眼は青蓮華の如く　徹視して礙あるなく　三世は苦にして　塵曀染汚なる者と觀察す、」　尊本と經歷せし所　諸の世尊を供養し下下人と謙卑して　今形結[八]〔髻〕なきを獲たり、」　相に於て相に著せず　衆の好色を假らず　是の故に衆の賢聖　能く其の頂を見ることなし、」　眉間の淸淨光　普ねく無數の土を照す　光を見て熱惱を除くこと　夏に重蔭に遇ふが如し、」　尊一たび師子吼すれば　諸の異道を降伏し　邪見の林を摧碎すること　明の永く闇を除くが如し、」　說言は言妄ならず志趣必ず成辦し　說法は法の眞諦にして　至道は道の根原なり、」　憶ふに尊昔此に在せしこと　十二小中劫　展轉して共に相係はり　轉輪の種を斷たず、」　師を追ひ高

〔七〕三本宮本園に作る。
〔八〕無形結。結字、元明二本に髻に作る。

此に於て正覺を成ぜり　願はくは尊時に神を屈して　此の世榮を貪ることを爲んや、」　尊本と閑靜を樂しみ　無爲道を思惟し　已に本誓願を果したまへり　何爲ぞ憒閙に處せん、」　閻浮は五鼎の沸くごとく　湯火の熾なるよりも劇し　唯願はくは速かに出家して　世の貪欲の縛を離れよ、」　尊今如し疑あり　我が過去世を念ふに　諸佛の等覺を成ぜしは　即ち樹王の下に詣り　朝に坐して暮に成道したまへり、」　尊今如し疑あり　方に生死を樂しまんと欲せば　恩愛は朽城の如し　此の樂何ぞ貪るべき、」　世には生死の患あり　唯道のみ永く寂然たり　恩愛は過ぐる電の如く　幻化にして眞正ならず、」　世間は盡く闇冥にして　五蔽をして覆蓋せしむ　唯願はくは慧明を開き　普ねく照して眼を得せしめたまへ、」　變化形無數にして　前の衆生に應適し　其の本行願に隨つて　各禪力の行に充つ、」　如今何爲ぞ靜かにして　上法輪を轉ぜざる　唯願はくは時に敷演して　渇をして飽滿を得しめたまへ、」　憶ふに本と所造の福は　蓋し亦微少なるのみ　由つて天王の位を致り、　所領に疆畔なし、」　諸の過去の　如來等正覺に供養し　四佛の一補處たり　是の尊は將來に非ず、」　無數億那術　生死に沈溺すること久し　願はくは弘誓の輿を執り　運濟して彼岸に至らしめたまへ、」　今唯甘露無厭の法を說かんを勸請す　八解にして所著なく　汚なく染塵なし、」　尊今或は定に入り　不度にして應に國を度すべし　願はくは先に此の類の　執心して動かざる者を化したまへ、」　虛空は性無染にして　平等坦然として壹なり　趣きて見得せざるなり　唯願はくは疑あることなかれ、」　深妙無極藏は　劣の守掌する所に非ず　今天世師に遇ふ　願はくは開いて布現せしめたまへ、」　尊本と度を發願し　同日にして時を易へず　如今何爲ぞ默して　自ら濟ひて餘を度せざる、」。

と。

是の時に釋提桓因、此の偈を說き佛を讃し已り、佛を遶ること三匝して復た本の座に還る。爾の時に魔王あり名けて怒害と曰ふ、諸の魔衆を將ひて卽ち座より起ち、頭面もて足を禮し佛に白して言さく、『唯願はくは世尊、久しく狐疑を抱いて眞道を獲ず、今無比の法輪を說くを聞かんと欲す、唯垂愍せられ正教を演暢したまへ、我等久しく處りて法律に入らず、各心に空慧

て　說法すること駛流の如し　云何が今寂然として　慧明華を開かざる、」　尊光幽冥を照して　三世の闇を蠲除し　十力沾汚なし　唯願はくは時に法を演べたまへ、」　今日十方界の　諸尊菩薩集り　咸な悉く未曾所轉の法を聽聞せんと欲す、」　意淨うして無漏を行ずる　亦星の中の月の如し　[五]已に佛相願を過ぎたまふ　唯願はくは時に法を說きたまへ、」　衆生今沒溺して　生死海に流轉す　願はくは平等の舡を以て　彼の沒溺者を救ひたまへ、」　奇光甚だ魏魏として　日月の精を翳蔽し　熱惱の患を抑遏し　淸淨にして衆瑕なし、」　尊本と誓願を造し　勇猛にして虧損なく　慈悲平等の意もて　說法に增減なし、」　戒具はり以て禪寂して　神足力無畏に　空相無畏の法を　正受して疆界に遊ぶ、」　本と六度の法を行じて　憂感の心を懷かず　意を卑くして禮し恭敬し　師尊長を供奉す、」　故に尊の肉髻をして　敢て熟視する者なからしむ　何に況や欲施の心もて　如來の　[六]頂を觀覩せんをや、　十方もて哀れんで世に出で　步降をして群萠を度し　衆人咸な渴仰す　惟轉法輪を垂れたまへ。

と。

爾の時識乾梵天王、此の偈を以て讃し已り、起つて佛を遶ること三匝して、復た本との座に還る。是の時釋提桓因、即ち座より起ち、偏に右の臂を露はし衣服を整へ、長跪叉手し三度自ら稱號すらく、我は是れ天帝釋なり、名けて拘翼と曰ふと、菩薩の前に在つて頌を歎じて曰く。

不語にして寂然に應じ　不教にして行自ら具し　不習にして無際に應じ　自然にして無爲に應ず、」　本と無相の施を行じて　今空無果を獲たり　當に虛空神を禮すべし　寂然として言迹なし、」　在世に先づ覺寤して　危危の人を安隱にす　正見の路を導示して　盲冥に正行を受けしむ、」　衆生迷惑すること久しく　甘露の法を聞かんと欲す　願はくは無盡藏を開き　潤を天世人に及ぼしたまへ、」　慈を行じ德本を修して　善權に增減なく　無爲教を演布して　一切の人を充足せしめたまへ、」　生れて三十尊に遇ふこと難く　正法亦値ひ難し　賢聖の會に遭はんど欲する　亦復た得べからず、」　過去の諸の如來は

【五】已過佛相願。宋本宮は相を想に作り。佛たる相も願もなきまでに規程したまふの意か。
【六】項。大正藏に項に作るも頂の誤なるや疑なり。

法眼・慧眼・天眼を以て衆生の類を觀ずるは、賢聖の法律に應ぜず、我れ今乃ち肉眼を以て十方恒沙の刹土を觀見するに、證を受くべき者、禪定を修する者、或は一住に在り十住に至る者あり、復た善男子の成佛せんと欲するに臨んで、不退轉一生補處を得、道場に往詣して佛樹を莊嚴する者を見る、此等の類は、一生補處の菩薩に從つて平等の法諸法無二を聞き、道に志願して皆悉く成就すべし」と。

是の時寶瓔天子、慇懃に勸請すること乃至三四にして、復た此の偈を以て而も讃頌して曰く、

　金顔尊きこと無比にして　面像は百葉の華なり　地に墮ちて自ら稱號するや　聲梵天の音に踰ゆ、」　智慧の淵を建立し　説法して有無ならず　衆生に常想あるも　寂然として二を起さじ、」　光曜十方を照し　闇冥に悉く明を見る　人中の尊にして有り難し　今故らに重ねて自ら歸す、」　苦行無數世にして　慈悲に雙あり難し　功勳已に具足す　今我れ重ねて自ら歸す、」　正に尊足を歎ぜしめんに、　蹲跟膝髀腰　皮毛七處平かに　平立して左右亭し、　手臂指纎細にして掌文綫理に合ひ　無畏廣長舌にして　千葉の蓮華の文なり、」　含齒方に四十　色は白雪の珂の如く　其の説法する時に當つては　脣像珠火明かなり、」　八聲男女に非ず　亦雌雄の音に非ず　十方界を感動せしめ　聽聞して厭足なし、」　耳方に雙部に瑞あり　空の明月珠の如く　眼に白黑分を視　上下倶に眴かなり、」　頭髮の色は紺青にして　肉髻の毛は右旋し　相好邊涯なく　熟視するに金山の如し、」　衆德身を瓔珞し　亦衆化の敷くが如く　諸衆の塵埃を消滅し　三界に獨歩して尊し、」　斯等の衆生の類　普ねく十方より集り　尊の正法　無上至道の要を聽かんと欲す、」　天人龍鬼神渇仰して法を聞かんことを思ふ　願はくは一切を愍れむが故に　速に爲に法轉〔輪〕を轉じたまへ。

と。

　爾の時十方世界の大梵天王、八十四億の識乾天王を最も第一と爲す。卽ち座より起ち偏へに右臂を露はし、長跪叉手し佛前に在つて、偈を以て佛を歎じ而も頌を作つて曰く、

　著することなくして衆穢を捨て　漏盡きて欲汚なく　一を行じて尊教に應じ　意を空無慧に遊ばす　本と兜術天に在つ

不退轉地を講論せん、吾我の性を懷かじ、諸法の自然生者も亦爾り、人の根源に隨つて爲に說法せん、法性自爾にして變易あることなし、何に況や衆生に受法者あらんや。衆生は本と淨うして染汚せられず、智慧を建立し弘誓心を發す、尋究するに衆生は皆悉く淸淨にして、本淨自然、無我自然、無形自然、人物自然なり。

云何が本淨自然なるや、久遠より已來生死に流轉するも、發意して道を求むれば乃ち泥洹に至り本と自ら淸淨なり、斯れ乃ち名けて本淨自然と曰ふ。云何が無我自然なるや、本有今無、今有本無、亦我我は本と有より生ずと言はず、亦復た有は我より生ずと言はず、我は自ら無我を知らず、有は自ら[四]無有を知らず、斯れ乃ち名けて無我自然と曰ふ。云何が無形自然なるや、無形とは識なり、神なり、壽なり、此の三句の義常に存して變ぜず、空に在つては空となり、形に在つては形となり、有に在つては有となり、相に在つては相となり、無相に在つては無相となる、無形の識は空性自然なり、斯れ乃ち名けて無形自然と曰ふ。云何が人物自然なるや、人物を尋究するに窠窟を見ず、意識は幻化にして本源に達せず、愚惑相承して父と母と言ふ、國財妻子漸く衆想を生じ、三有に染著す、我れ今已に捨てゝ永く與に處らず、此を以て自然に空慧に明達す、空慧は自然にして諸法亦爾り、諸法自然にして正覺に逮ぶ者亦復た自然なり。一切諸法は但假の名號のみ、號に因つて名ある亦復た自然なり、論說自然なれば便ち論說と爲す、無起滅の法、斯れ則ち名けて人物自然と曰ふ。

吾れ今若し空寂の法を說くとも、衆生は信ぜず、倍、疑網を生ぜん、設ひ我れ復た形質の法を說くとも、根原を盡さず、況や當に滅度すべけんや、宜しく且らく寂然賢聖默然たるべしと。

是の時に天子あり、寶瓔と名く。聖心に通達し佛の性行に同じく、六道淸徹して一相に曉了し、永く八法を離れて塵勞に處らず、法輪を轉じて佛教を頒宣するに堪へ、四諦聖慧霍然として垢を除き、五分如來法身を具足す、六無礙神通の道果に逮び形神俱に遊んで觸礙する所なし、七覺意を得て自ら瓔珞し、八道具足して諸法不共なり、四無畏を得て力金剛の如く沮壞すべからず、菩薩賢聖の默然として、衆生の與に法敎を敷演せざるを知るを以て、時に天子寶瓔卽ち座より起ち、偏に右肩を露はし、叉手し前んで佛に白して言さく、「世尊よ、我れ今佛眼・

【四】麗本有有とし、三本宮本は無有とす。

長跪叉手し、偈を以て讃して曰く、

尊、今、無礙形にして三界の塵に染まず　洗ふに八解の湯を以てす　世水安んぞ堪ふ可き、」　心垢盡き淸明にして內外に陳礙なし　江海河泉の源　斯の浴久しく淨きに非ず、」　昔、瑠璃池の禪頭龍宮に在りし時　意を專らにして大乘を發し　要ず愛欲の魔を滅せり、」　今已に本願を果たし　三界に等倫なし　願はくは無畏座に昇りたまへ　何爲(なんすれぞ)洗浴を現じたまふ、」　天に生るること六十二那術の劫數中　天伎五樂至り　福響自然に報ゆ、」　法身の衆智具はり　無礙道を演說し　周ねく訖つて生を此の迦惟羅衞城に託したまふ。」　現世に三災あり　滅するに三明報を以てし　三慧三達に通じ　三要今具足したまふ、」　三等もて三世を觀じ　三界の有に染まず　三分法身具はる　當に三界の尊を禮すべし、」　諸の來會の衆生　諸の天、須倫鬼　咸各踊躍を懷き　敬承して供養を興す、」　前後の衞淸妙にして行いて瑠璃園に至り　右のかた蓮華の枝に攀ぢ　降神して閻浮に生じたまふ。」　生れて地に墮つる時に當り　淨きこと紫磨金の如く　天地六たび反動し　神感諸天に至る、」　地獄の諸の考〔拷〕掠　一時に皆休息し　淸淨にして瑕穢なきこと　華の水に著せざるが如し、」　十方の諸の佛刹　如來等正覺　各各其の國に於て　四部衆に宣告したまふ、」　今日忍世界に世雄降つて出現し　愍みを諸の衆生の永く三塗に在る者に垂れたまふ、」　當に正法輪を轉じ　鹿野淸明の園にて、久しく飢虛せる者の爲に　潤ほすに甘露の法を以てすべし、」　八道を尊獨寤し　十二緣を究盡し　無盡の江海の寶を　一切の人に充飽せしめたまふ。」

設ひ劫より劫に至り　佛佛其の德を歎ぜんも　猶尙宣ぶる能はざらん　況や我が螢火の光をや、」　昔、無畏刹の不眴佛土中に在り　初に無言の法を觀じ　未だ無生慧を得ず、」　誓つて言敎中に生じて　無窮法を敷演せん　今日期已に至る　願くは尊法輪を轉じたまへ」。

と。

是の時菩薩、心意澹然たり、默然として熟視して亦言說なし。內に自ら思惟すらく、如し我れ今日人の爲に說法せば、淸淨

復次に無畏菩薩摩訶薩よ、衆生は染著して身に猗〔倚〕つて空を解し、菩薩は空慧にして三世倚るなし、是を菩薩の空觀無我と謂ふ。

復次に無畏菩薩摩訶薩よ、諸佛世尊の教化若干、本無清淨にして亦異あらず、是を菩薩の空觀無我と謂ふ』と。

佛、無畏菩薩摩訶薩に告げたまはく『若し族姓子女にして度無極を行じ、無盡の法藏衆寶の華鬘、以て自ら嚴飾し、是の如く無盡にして亦盡を見ず、中に於て盡不盡を成就する者は、是を菩薩の空觀無我と謂ふ。

復次に無畏よ、菩薩摩訶薩は當に諸佛の色像は無量にして、本際寂然の法に入ると觀ずべし、義趣を分別して、色の本無を解し、普ねく法界に入つて衆生を化導し、色像を見ずして衆生を化する者は、是を菩薩の空觀無我と謂ふ。

「復次に無畏よ、菩薩摩訶薩は佛の聖慧深奥の藏を得て、四事無畏、八縛者を離れて八解脱を得、法を雨らし潤澤にして老死なく、爲に師子吼して志金剛の如く、彼此の中を離れて亦染著なし。是を菩薩の空觀無我と謂ふ。

「復次に無畏よ、菩薩摩訶薩は漸く當に親近して宿命通を習ひ、無數阿僧祇劫を觀察すべし。某國某佛諸佛世尊は、泥洹を現ずと雖も滅度を取らず、衆生の跡を淨めて懈怠を懷かず、劫數を以て衆生を厭惡せず、亦復、泥洹の快樂を以て滅度を取らんと欲せず、心は虚空の如くにして沾汚すべからず。是を菩薩の空觀無我と謂ふ。

復次に無畏よ、菩薩摩訶薩は無邊涯の智を以て衆生を拔濟し、正に極遠をして恒沙の表に在らしめ、一一の沙は盡く恒沙と爲し、是の如く計算して周ねくして復始め、是の如くして八方上下に遍滿し、亦虚空無量の境界に遊び、要ず衆生を濟ひて墮落せしめず、自ら通慧の果報を稱歎せず、是を菩薩摩訶薩の十無我の法と謂ふ』と。

一生補處の胎分盡くれば乃ち是の行に應ず。爾の時座上の色欲天子、十九姟の衆即ち頂忍を得たり。復た無數の諸天世人あり、空觀盡信の行を逮得し、諸の閱叉龍鬼は三尊に信向し三自歸を受けたり。

佛、復た族姓子に告げたまはく『爾の時に菩薩、金机上に在り、國王居士天龍鬼神十方の菩薩、各各敬を興し、菩薩を浴せんと欲す。時に菩薩あり名けて月精と曰ふ、衆の菩薩に於て最も上首と爲す、威儀法服を攝持し安詳として卽ち座より起ち、

に無數の中を以て有數の法を行ずべきや。無緣の對法は有緣の對なりや。虛空の法に形質ありや。此の事然らず。但だ如來世尊の大慈廣布の爲に、衆生を開化して牢固を立てしめ、道敎を敷演し諸法を分別し、言なく說なきも、世に愚惑多くして是非の心を興す、斯は是れ漏法なりや是れ漏法に非ざるや、是れ緣對の法なりや緣對の法に非ざるや、是れ護持すべきや是れ護持するに非ざるや、是の法は有我なりや是の法は無我なりや、是れ世俗の法なりや、是れ泥洹の法なりや、是れ法に染著するや是れ染著するに非ざるや、是の法は有數なりや是の法は無數なりや、是の法は斷滅するや是れ斷滅するに非ざるや、是の法は滓濁するや是れ滓濁するに非ざるやと、復た自ら相誡めて各是の言を說く、習は是れ、捨は是れ、學は是れ、置は是れ、學法なりや學法に非ざるや、此れ聲聞法辟支佛法なりや聲聞法に非ず辟支佛法に非ざるや、是れ菩薩の法なりや菩薩の法に非ざるやと。此の觀を以て最正覺を成ぜず。何を以ての故に、相〔想〕あつて觀に著すれば第一空觀に非ず、求なく相〔想〕なく亦知見なくして乃ち空を成ずればなり。

夫れ諸法を觀ずるに、無我無壽にして刹土を見ず境界を分別するに無依無所依なり、是を法觀と爲し空無所有なり。是の如く觀ぜば諸法亦寂、道果亦寂、受證亦寂なり。假使菩薩の空觀是の如きも、諸の悕望に於て便ち顚倒なく、衆生を祐利して大哀を發し、佛法を興建して衆生を度すと雖も衆生の想なし。空觀の菩薩豈度者を見んやとは、此の事然らず。若し菩薩摩訶薩あり、此の空觀を得れば便ち十無我法を具足するを獲、云何が十と爲す。是に於て無畏よ、菩薩摩訶薩若しくは族姓子族姓女、佛法衆に於て淨穢を見ず、亦復た彼此の念、—此は是れ法身にして此れ思欲身なり、—を起さゞれば、前に過去を知り後に未來を察するに、斯れ皆淸淨にして我想なし。是を菩薩の空觀無我と謂ふ。

復次に無畏よ、菩薩摩訶薩は法服齊しく整へ應器を執事し、當來過去現在の諸佛世尊の入城敎化を觀見するに、豪貴及び下劣見を見ず、中に於て吾我二見を起さず。是を菩薩の空觀無我と謂ふ。

復次に無畏よ、菩薩摩訶薩は無數の佛刹と嚴淨せる國土の坦然平正なるを玄見し、今日の佛土の穢惡を說かず、執意淸淨にして若干の想なく、念念一定して識流馳せず。是を菩薩の空觀無我と謂ふ。

根漸漸に微にして、果の熟して自ら落つるが如く、往來生死の苦、報を受くること無數變なり、」意局[三]して大誓なく、趣いて身患を免れんと欲し、意業想風を被り、猶豫して究竟せず、」是の如く生死に在つて、輪轉して出づる能はず、復六十劫を經て、寶瓔佛に値遇す、」權化して人を濟渡し、一乘にして二道なく、小節の名を聞かず、空慧盡漏の人なり、」道一相を敷演し、甚深純淑の行、始め彼に從つて發意し、弘誓の心沮み難し、」彼より今日に至る、七億阿僧祇、將つて正法を護順し、今乃ち自ら覺寤す。」

と。

佛、復た族姓子に告げたまはく、『爾の時に菩薩、諸の衆生鬼神八部の衆、及び諸の十方の神通菩薩と此の偈を歎說し、深妙の義を受く卽ち。座上に於ける八十四垓〔姟〕の人皆無上正眞道の意を發す。復た無數の衆生あり、法忍を逮得す』と。

佛、復た族姓子に告げたまはく、『若し衆生あり、此の一偈を聞いて諷誦讀持し、人の爲に解說し其の義を分別せば、衆魔の便を得る所と爲らず、何を以ての故に、斯等の衆生は皆過去の衆行具足し、曾て更に無央數の佛を供養し、誓願純淑にして各各發願せしに由る。若し我れ後生に要ず一生補處の菩薩に從つて正法を說くを聞かば、卽ち彼の佛に於て坦然として大寤し、無生無起滅の法を逮得せん。云何が族姓子、若し一人あり、便ち斯の言を說かば、「吾れ乃ち知る、無形の法は形を以て敎授し、虛空の相は實を以て敎授すと、此の人斯の意を興建せんこと、寧くぞ能くせんや不や』と。

時に無畏大護菩薩あり、此の三千大千世界を過ぎて佛土あり名けて賢豪と曰ひ、佛を普賢と名く、無畏大護菩薩は彼の刹より來り、總持を逮得し不退轉を立て、卽ち坐より起ち、偏に右肩を露はし長跪叉手し、前んで佛に白して言さく、『世尊よ、無形の法を形を以て敎授し、虛空無相を相を以て敎授するは、甚だ難し發だ難し終に逮ぶ可からず、所以は何、虛空無形は能く染汚することなし、況んや當に形質あらしめんと欲すべきをや。此の事然らず』と。

佛、無畏大護菩薩に告げたまはく、『族姓子よ、斯れ猶ほ獲べきも、一生補處の菩薩に從つて此の法を耳かんと欲せば、終に得べからず。何を以ての故に、諸法は無數なればなり、豈

【三】麗本に扃に作り、元明宮本に局に作る。

は記したまへり及び未來現在も、五濁衰微の世に、佛あり能仁と名くと、」今我れ自ら觀察するに、志性常に殊なり、名號既に虛しからず、父稱して悉達と爲す、」故に衆中に在つて、平視して畏るゝ所なく、淨總持の慧を得て、爲に不肖人を度す、」諸の法本の、起滅に處所なく、亦復成敗なきを見ずんば、寂然として慧觀すべし、」普ねく諸法の、悉く窠窟の處なきを分別すれば、澹然として歸趣なし、斯れ乃ち律行に應ず、」見無見を以てせず、求むることなく守る所なく、我人寂寞として空なり、無想願も亦然り、」夫れ厭くなき甘露微妙の味を飲まんと欲せば、想を妄〔亡〕じ諸著を除け、[一]斯れ菩薩の慧に應ず、」人なく壽命なくば、諸の佛藏を成就し、貢高心を摧碎して、自ら大意を興さず、」上智は數に著せず、常想有りと計せず、衆生染心を興せば、照して淨慧を知らしむ、」賢聖に若干品あり、衆生の根同じからざればなり、慧を以て未來を觀ずれば、盡く若干道なし、」佛法に深要あり、其の慧邊涯なし、唯空にして染著なきを、是を法界淨と謂ふ。」一生百生乃至無數劫を經て、我れ今永く以て〔已に〕捨て、背[二]〔首めて〕前んで證を取る、」設し我れ中間に於て、壽を計し法性に著すれば、恒沙の諸佛過ぐるも、空無の慧を履まず、」恒に自ら心を降伏して文字法を分別せば、是の故に自ら覺寤し、大弘誓を建立す、」昔吾れ初めて發意して、緣覺乘を志求し、閑淨〔靜〕無人の處に四十四億劫なり佛法聖衆なきこと、其の間七十劫なり、後、大通慧の大乘の迹を演暢するに遇ひ、」初めて未曾有の、聖慧無量覺、慈悲護の四等を聞きて、爾して乃ち微しく信解せり、」是より已來、功德業を興建し、無數佛を供養して、復た十九劫を經たり、」後、大國王飛輪皇帝王と爲り、七寶前に導從し、千子才藝具はる、」淸淨人梵行者を勸修する。九十七億姟供養し解脫心に著することなく、」及び國の貧窮孤寠にして歸する所なきものに施し、庫藏より珍寶を出し、周ねく濟ひて乏しきものなからしむ、」復た無數劫に於て、躬自ら淨行を修し、位を捨てゝ太子に授け、出家して法服を衣、」忍辱にして性仁和、燕居して寂として無念、漸漸に心疲惓し、猶人の淵に溺るるがごとし、」善

【一】空。麗本には定に作り、元明二本に空に作る。
【二】背。三本に首に作る。

たまへ」、諸の天世人民、咸く正法を聽かんと欲し、深法本を敷演したまふ、當に三界の尊を禮すべし。

と。

爾の時に世尊、直に東方を視まふに、顏色和悅して、諸の龍王の與に而も斯の偈を說きたまふ、

吾れ今以て〔已に〕形を降して、閻浮利に踔步す、苦惱の類を拔濟して、四等邊涯なし」、金體に明證あり、衆相日光の如し、當に未覺者を覺せしめ、今成佛すること久しからざるべし」。生を觀ずる無數世、形を受くる一類に非ず、上中下ありと雖も、未だ是の如きの像あらず」、快なる哉牢固の誓や、意を執して虧損せず、所現は果報に應ずれども、本と淨きこと虛空の如し」、世に三堅の法あり、身・命・財の寶貨なり、此れ猶ほ究竟にして、終始恃怙すべきに非ず」、吾れ今此の三を捨て、法身となりて空にして形なく、盡くることなく生命なし、自然に道根を成ず」、世寶には嶮危多く、幻の如くにして久しく停らず、今七寶財を獲たり、無形にして窮むべからず」、衆生の心意識は、三垢もて覆蓋せらる、今已に三明を獲て、初中竟通達す」、普ねく世天人の爲に、當に不死の法を轉ずべし、法輪大千を覆ひ、仁慈の心もて普く潤ほす」、生を受くれば四縛あり、三世の患を離れず、今四誠諦を得て、無縛にして復た染せず」、慧もて苦聖諦を觀ずれば、無智も其の智を寤り、淨性は無垢の如く、證を受けて永く澹泊たり」、本習は更樂を興し、染著し愛盡くることなし、彼の塵を我が心に受け、纒結遂に滋す甚し」、吾れ今本淨を觀じて、樂想を苦想と滅し、澹然として憂喜なく、永く生死と別る」、過去に三行あり、癡愛を生ずる本原なり、已に盡きて亦處らず、塵垢の心あることなし」、現在六十四、牽いて冥室の聚を致す、永く捨てゝ與に俱ならず、六十四明を獲たり」、未來無數の塵、人心を覆蔽するも、法雲三界に布いて、諸の不及を潤澤す」、淨教口に柔輭にして、言聲哀鸞の如し、斯れ無欺を行じて、說法に缺漏なきに由る」、衆生陰蓋を懷き、調戲して慚愧なし、今始めて慚愧を得て、貢高心を壞滅したり」、佛の世に出現したまふや、諸の邪衆を降伏し、座に昇りて師子吼し、本行の緣を演說したまふ」、過去の諸佛

巻の第二

龍王浴太子品第四

佛復た族姓子に告げたまはく『菩薩時に前みて金机に昇り、顔色安詳、顔貌容豫たり、諸天上に在つて散華燒香し、天の伎樂を作して菩薩を娛樂せしめ、世人下に在つて左右に侍衞し、異口同音にして聲天地を震はし、八十億姟の乾沓和子、鐘磬を搥つて歌ひ、菩薩を娛樂せしむ。

時に摩那斯龍王、文鱗龍王、伊羅鉢龍王、阿耨達龍王等八十四億あり、皆來つて雲集す。

時に諸の龍王便ち此の偈を以て讃頌して曰く、

「今日世垢を離れて、　閻浮利に降生し、　俗に隨つて母胎に處す、　願はくは浴して世塵を除きたまへ」、　昔、無數劫に於て、　功を積み衆の業をを造り、　誓願今已に果つ、　願はくは聖體をす沐することを聽したまへ」、　八十四億姟の　龍十方より來り、　各尊を供養せんと欲し、瓶を奉り香湯を貢ぐ」、　尊もと無數劫より　苦行せしは衆生のためなり、　巍巍たる德無邊なり、　愍を垂れて願はくは之を聽したまへ」、　世雄を渴仰すること久しく、　生死の苦を疲厭す、　今賢明を覩ることを得たること、　日の虚空を照すが如し」、　尊もと弘誓を發し、　未度者を度せんと欲し、最勝は已に解脫したり、　當に復た未解を脫せしむべし」、　過去恒沙の佛、及び當來現在の　功勳は量るべからず、尊今已に具足したまへり」　設ひ劫より劫に至つて、　人中の尊を宣揚すとも、　豈螢火の光を以て、　敢て佛日と競はんや」、　虚空は究竟すべく、　須彌は稱量すべく、　海水は竭盡すべきも、　尊德は邊涯なし」、　日月の光、摩尼明月珠の、　外闇冥を照すと雖も、　未だ無明を除く能はざるに比方するに、　今日等倫なき、　一毛の光明は　普ねく天世間を照し、　垢の婬怒癡を除く」、　過去の六如來、　盡く閻浮提に生れ、　盡く我等が供を受け、　香湯もて尊形を浴したてまつる」、　今復た天師の　億劫に乃ち出現したまふに遇ひ、今各足を頂禮す、　唯願はくは時に沐浴し

復た次に族姓子よ、如來至眞等正覺は四辯才を得て生滅智なく、三千大千世界に遍滿す。是を菩薩、第九難得の法を修行すと謂ふ。

復た次に族姓子よ、諸佛世尊は、無盡の法（法）門を行じて衆生を覆蓋したまふ。十力・無畏・十八不共は諸佛の法なり。是を菩薩、第十難得の法を修行して、道場に進趣し佛果を莊嚴すと謂ふ。』と。

【三八】麗本には法法門とあり、三本には法本とあり。

當に十法を思惟し、外道を降伏し魔羅網を壞り、諸天侍衞し、道場に進趣し佛樹を莊嚴し、乃至滅度まで終に捨離せざるべし。

云何が十と爲す。

是に於て族姓子よ、先づ當に魔を降すべし、身に慈仁の鎧を被り、手に慧劍を執りて善權前導し、頭に無畏の華鬘を戴きて、憍慢の衆を摧却して永く貢高を除く。是を族姓子よ、先づ當に此の第一難得の法を修すべしと謂ふ。

復た次に族姓子よ、復た當に玄妙廣義を思惟し、漏を斷じて證を取るべし。彼の外道を攝して上首と爲り、加ふるに神足神力無量を以てして、設し彼一を現ぜば我當に二を現じ、趣いて邪部をして正見に安處せしむべし。是を族姓子よ、菩薩當に此の第二難得の法を修すべしと謂ふ。

復た次に族姓子よ、菩薩大士は衆生を化度して法歡喜を受け、必ず堅固に至つて餘道に趣かず。是を菩薩、第三難得の法を修行すと謂ふ。

復た次に族姓子よ、諸佛世尊の恒に行ずる所の法は、日夜四時に衆生を觀察し、彈指の頃に十方恒沙の刹土に周遍し、周ねくして復た始より三界に著せず。是を菩薩、第四難得の法を修行すと謂ふ。

復た次に族姓子よ、無礙智を行じて三千大千世界に遍滿し、衆生を度すと雖も度あるを見ず。是を菩薩、第五難得の法を修習すと謂ふ。

復た次に族姓子よ、菩薩大士は神足力を以て遍ねく十方恒沙の刹土に遊び、遍ねく衆生の心識の所念を觀ず。或は一身を以て百千身に化し、還つて合して一と爲るも覺知する者なし。是を菩薩、第六難得の法を修行すと謂ふ。

復た次に族姓子よ、菩薩は四無礙慧を思惟す。亦羅漢辟支の修する所に非ず、亦天龍鬼神八部の衆の能く及逮ぶ所に非ず。是を菩薩、第七難得の法を修行すと謂ふ。

復た次に族姓子よ、如來の神力は思議すべからず。十方無量の諸佛の刹土、一塵孔に入り、周旋往來して罣礙あることなく還つて復た故の如く覺知する者なし。是を菩薩、第八難得の法を修行すと謂ふ。

に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

如來世尊世に出現して、恒に大悲を以て衆生を[三七]加被すること母の子を愛するが如く、心捨離せず。譬へば龍王伊羅鉢多羅の如し、須彌金福山の邊の七寶の宮殿に住して、諸の龍女と共に相娛樂し、若し忉利天宮に往至して供養を興致せんと欲せば身を七萬由延の三十二頭に化し、一一の頭は邊に七牙あり、一一の牙の上に寶浴池あり、一一の池中に七百の蓮華を生じ、一一の蓮華に七百の玉女あり、共に相娛樂し倡伎樂を作し、琴を彈じ瑟を鼓して音聲絕えず、復た七寶を雨らして乃ち膝に至る。菩薩大士亦復た是の如し。四等心を以て衆生を加被し、七覺意の無窮の法財を雨らして其の志趣に隨つて皆道果を成ぜしむ。是を菩薩、第五業を修して道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

如來世尊、權方便を以て隨時に適化したまふ、行ずべくして行を知り坐すべくして坐を知り、言ふべくして言を知り默すべくして默を知る。遍ねく衆生の心識所念に入り、病に隨つて療救して增減せしめず、普ねく永く無爲の岸に處らしむ。是を菩薩、第六業を修して道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

復た次に族姓子よ、如來出世したまふや、衆生を化導して自ら身の爲にせず、一人の爲の故に百千劫を經て、彼に代つて苦を受けて厭惓を懷かず、佛慧に安處して無上道を成ず。是を菩薩、第七業を修して道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

諸佛興出して法界を壞せず、法性自爾にして亦自爾に非ず、如爾眞際にして亦壞あらず壞あらざるに非ず、修して懼れず亦恐畏せず。是を菩薩、第八業を修して道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

如來出世したまふや、當に復た一相無相を具足すべし。彈指の頃、過去未來現在の法中に於て、三世の諸佛世尊を出生し、實にして異ならず亦變易せず。是を菩薩、第九業を修して道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

如來出世して衆生を慈愍し、一日の數を以て三世をして一劫たらしむるも、其の中の衆生は覺知する者なし。是を菩薩初めて生れ地に墮ち、左足を擧ぐるや、十業を修行して道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。』と。

佛復た族姓子に告げたまはく、『菩薩初めて生れ地に墮ち七步にして、其の中間に於て復た

【三七】大正藏如被に作る。

復た空觀神慧あり、菩薩此の神慧を得て、諸の佛土の成者敗者を見ること掌の珠を觀るが如し。
復た棄壽神慧あり、菩薩此の神慧を得て、壽の緣報たる捨形受形を觀ず。
復た無言說神慧あり、菩薩此の神慧を得て、說法して法想なく、亦若干の念なし。
復た無近遠神慧あり、菩薩此の神慧を得て、諸法の窠窟遠近を見ず。
復た無生滅神慧あり、菩薩此の神慧を得て、十二因緣の根本を分別して、生者滅者悉く無所有とす。是を菩薩摩訶薩、十神足慧もて道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。』と。

佛復た族姓子に告げたまはく『菩薩初めて生れ左の足を擧ぐる時、復た當に十業を具足すること無量究竟なるべし。云何が十と爲す。是に於て族姓子よ、諸佛如來の修行したまふ所、如來の降形し出世し敎化したまふや、三世十二牽連、三界五道の塵垢縛著を分別し、諸結を沐浴して永く塵曀なし。是を菩薩、第一業を修して道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

復た次に族姓子よ、如來の出世して諸の衆生を化するや、三乘を安處して其の所願に隨ひたまふ。或は衆生あり、意羅漢に趣いて佛門に向はず、或は衆生あり、緣覺行を習つて佛道に趣かず、或は衆生あり、無上道を修して聲聞緣覺辟支に向はず、或は衆生あり、佛道を退いて小乘を志慕す。爾の時に菩薩、前人を誘進して無上正眞の道を逮成せしむ、或は衆生あり、凡夫地に在つて方便を求めて上三乘に及ばずんば、菩薩勸進して三乘道を成ぜしむ。是を菩薩、第二の業（を修して）道場に進趣し、佛樹を莊嚴すと謂ふ。

如來出世して言敎を布現し、權方便を以て衆生を適化し、重擔を荷負して人の重任と爲り、或は衆生の與に現じて父母兄弟朋友と作り、或は國士尊長道士と現じ、或は大富長者神力鬼王と現じて、周ねく貧困に給し七寶を惠施し、道敎を開說して三乘の果を成ぜしむ。是を菩薩、三業を修習して道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

如來出世して無上法輪を轉じ、四辯を失はず、人心を觀察して十善行を授け、苦習盡道を分別演暢す。或は迷惑を生じて三界に沒溺せば、權を行じて拔濟して永く生死を離れ（しむ）。是を[三六]菩薩、第四業を修して道場

【三六】大正藏に菩薩に作る。

場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

復た次に族姓子よ、菩薩爾の時一念の頃、十方界の諸佛世尊をして各各手を舒べて菩薩を扶接せしめ、一切の衆會皆悉く之を見る。是を菩薩、道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

復た次に族姓子よ、諸佛の法藏は深奥にして測り難し。吾れ當に次を以て三乘―緣覺聲聞菩薩―の道を布現すべし、法を聞いて覺寤し、終に中滯せざれ。是を菩薩摩訶薩、道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

復た次に族姓子よ、「過去三世の諸佛世尊、吾れ今無爲大道を成ぜんと欲す、皆當に證明し我をして成道せしむべし。」諸佛善と稱し皆前に在りて立つ。「汝阿僧祇劫より苦行無數にして、布施持戒の六度具足し、國財妻子も悋惜する所なし、今當に成佛して廣く衆生を度すべし、我等扶接して上成佛に至り中ごろに住せしめず。」と。是を菩薩摩訶薩、道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

復た次に族姓子よ、菩薩の過去現在未來を分別するや空無想願なり、亦是れ諸佛の行に應ずる所の法なり。初發意より乃至成佛まで、要ず當に三向諸道、四等大慈、八無礙道を修習して、其の身を瓔珞すべし。是を菩薩摩訶薩、道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。』と。

佛復た族姓子に告げたまはく、『菩薩次に右足を擧げ地を踏む時に當つて、當に此の神足十慧不可思議を具足すべし。云何が十と爲す。神足慧あり名けて無著と曰ふ。菩薩此の慧を得て、盡く諸佛深要の法藏に遊ぶ。是を菩薩摩訶薩、道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

復た神慧あり名けて無形と曰ふ。菩薩此の神慧を得て、無厭定意に入り、十方諸佛の言教を諮受す。

復た無二神慧あり、菩薩此の神慧を得て、衆生を勸進して無上等正覺を成じて、聲聞辟支佛道を取らしめず。

復た虛空神慧あり、菩薩此の神慧を得て、盡く世界を空無我人と觀ず。

復た無相神慧あり、菩薩此の神慧を得て、諸法を演暢して一相無相を解し、亦生滅著斷の法なし。

多求は道に非ず、道は當に正見なるべし邪見は道に非ず」と。是の時菩薩復た是の念を作す。「過去の諸佛の行ぜし所の正法は何の謂と爲すや」と。復た是の念を作す、「過去の恒沙の諸佛世尊、世に出現し神足力を以て身の威德を現はしたまふ。十根本義思議すべからず」と。云何が十と爲す。是に於て族姓子よ、菩薩達士の先づ左足を擧ぐるや、三千の虚空境界に遍滿し、衆生の覺知なき者を嬈ばず。其れ衆生あり足の相輪を覩るものは、皆無上正眞道の意を發す、斯れ曩昔の禮敬の報に由る。是を菩薩摩訶薩、道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

復た次に族姓子よ、爾の時に菩薩、左足にて地を蹈み、心に自ら念を生ず、「古昔の諸佛說法したまふや、云何が句身の義味を分別せしや、云何が過去の諸佛世尊の進止行來の威儀法則なりしや、一句の義を以て無量の諸佛の法藏を演出せしや、劫より劫に至り、乃至百劫にも一句の義を究盡すること能はず、如來の祕要思議すべからず、是れ小節の能く測度する所に非ず」と。是を菩薩摩訶薩、道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

佛、復た族姓子に告げたまはく、『菩薩爾の時に一毛孔の光明を放ち、遍ねく無量の諸佛の刹土を照し、光明中に於て、六度平等の大法、空無想願不起法忍を演說し、亦衆生をして畢志堅固にして皆無上正眞道の意を發さしむ。是を菩薩、道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。』と。

復た次に族姓子よ、菩薩爾の時内に自ら思惟すらく、「吾れ今當に三昧正受を以て普ねく虚空の諸佛法界に遊ぶべし」と。爾の時に菩薩、卽ち無形想定意に入り、遍ねく虚空の諸佛法界に遊び、左右に翼從する天世人民、覺知する者なし、謂爲へらく、菩薩金机に進趣すと。是を菩薩摩訶薩、道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

復た次に族姓子よ、卽ち一形を化して三千大千世界に遍滿し、復た還れば故の如し、衆生の類覺知する者なし。是を菩薩、道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

復た次に族姓子よ、菩薩爾の時に慧明の光もて遍ねく三千大千の刹土を照し、一一の光中より皆音聲を出す。今日の釋迦文佛如來至眞等正覺は、閻浮利地に於て、當に法輪を轉じて未度の者を度すべく、衆生を福利して名稱遠く布く。是を菩薩、道

る所、天地をして六返震動せしむ。是を菩薩摩訶薩、道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

復た次に菩薩、足を擧ぐる時に當つて心に自ら念を生ず。「生分已に盡きて更に受胎せず、三界獨尊にして疇匹あるなし、當に號して佛如來至眞等正覺と爲すべし、十號具足す。十方の刹土の諸佛世尊、各各其の國土に於て、四部衆・天・龍・鬼神・乾沓和・阿須倫・迦留羅・緊陀羅・摩休勒・人と非人とに告げたまはく、今日忍界の釋迦文佛、世に出現し、衆相具足して星中の月の如し、衆生を福度し天人祐を蒙る。敬を興し彼の佛を供養せんと欲するあらば、宜しく是の時を知るべし」と。爾の時十方諸佛世界の神通菩薩、辯才具足し總持門を得たる、千七百七十七億那術の衆、皆來り雲集して此の忍界に詣り、供養を興致して、華、膝に至る。復た八十萬姟の天魔波旬あり、皆忍界に詣り、供養を興致して菩薩に給事す。復た百千億姟の神力龍王あり、各各七首なるが、香湯を獻奉して菩薩を浴洗す、斯れ曩昔、口に甘露無厭足の法を演べしに由る。是を菩薩摩訶薩、道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

復た次に菩薩、內に自ら念を生ず、「衆生有に著し迷惑し來ること久し、設ひ空無虚寂の法を聞くも、意に恐懼を懷き衣毛爲に竪つ、佛法深奧にして思議すべからず、漸く當に次を以て道の根原を說き、衆生の根原の由る所を分別し、三世の生法滅法を玄鑒し、想著を除去して貪悋の心なからしむべし。無數劫に行を積みてより已來、道を得ざりし所以のものは皆恩愛に由る。吾れ今當に恩愛の刺本を除き、衆生を拔濟して無爲に安處せしむべし」と。是を菩薩摩訶薩、道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

是の如く族姓子よ、菩薩大士の降神出生し地に墮ち右足を擧ぐるや、其の中間に於て十法を思惟し、道樹を莊嚴して亦退轉せず。

復た次に族姓子よ、菩薩の初めて生るる時、地に墮ち行くこと七步にして金机に趣かんと欲す。次に左足を擧け、內に自ら思惟すらく、「諸佛世尊の句義は無量に道法は淳粹に、應度無極にして起滅の法なく、行に生滅なく思議すべからず。是れ羅漢辟支の及ぶ所に非ず。道は當に一意なるべし多念は道に非ず、道は當に少欲なるべし多欲は道に非ず、道は當に知足なるべし

神慧無礙・辯才通達に逮る。斯等の衆生は久しく狐疑を抱いて、塵垢に沒溺し度脫を求めず。吾れ今當に智慧の火を以て心中の狐疑の叢を焚燒すべし」と。是を菩薩摩訶薩、佛樹を莊嚴し道場に進趣すと謂ふ。

復た次に菩薩、初に右足を擧げて地を蹈むの時、便ち復た念言すらく、「吾れ今已に無爲解脫を得たり、當に復た有爲解脫を接度すべし。過去恒沙の諸佛世尊、皆悉く我が無爲解脫と同じ、當來の諸佛も亦此の法を獲ん。快なる哉、福報斷滅することあらず、妄想已に盡き貪求する所なし」と。是を菩薩摩訶薩、道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

復た次に菩薩摩訶薩、初に右足を擧げて地を蹈むの時、復た此の心を生ず。「衆生永く邪見顚倒に處り、三向空無の慧を覩ず。我れ今當に護心淸淨を演ぶべし、無覺無觀法性虛寂なり、慚を知り愧を知るは衆行の本なり、苦・空・非身・無人・無壽なり、當に此の心を以て普ねく一切を覆ふべし」と。是を菩薩摩訶薩、道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

復た次に菩薩、初に右足を擧げて浴池に趣かんと欲す、琉璃水精七寶の園觀あり、梟鴈鴛鴦異類の奇鳥あり、諸天導き從へて稱量すべからず。「我れ今露形なれば乃ち其の宜しきに非ず、設し城村落衆に入るに當りては、人衆謂つて裸形にして慚恥を知らずと爲さん、宜しく袈裟を求めて以て體を障ふべし」と、時に天子あり名けて福蓋と曰ふ、即ち菩薩の心中の所念を知り、尋いで八萬四千の金縷もて織成せる袈裟を奉る、菩薩自ら念ずらく、「過去の諸佛の法服云何なりしぞ、進趣行來斯れ何の法をか用ひん」と。虛空神天、叉手して白して言さく、「過去の諸佛は皆織成せる金縷の袈裟を著せり、亦今日諸天の獻ずる所の如し」と、菩薩即ち八萬四千の織成せる金縷の袈裟を受け、道神力を以て合して一袈裟と爲して體に著すれば、三十二相八十種好、盡く皆外に現はる、斯れ曩昔、無想報を施し[三五]度無施〔極〕を行ぜしに由る、是を菩薩摩訶薩、道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

復た次に菩薩、右足を擧ぐる時、便ち此の心を生ず。「衆生は若干の性行同じからず、吾れ今當に智慧の光明を以て普ねく三千大千世界を照すべし」と。即ち頂相光明を放ち、普ねく十方の諸佛刹土を照す。衆生の類、光明を見る者、悉く來り雲集して忍世界に詣り、如來に奉事し香華もて供養す、威神の感ず

【三五】麗本度無施とし、三本宮本は度無極とす。

を得る者は、衆生の類をして道を懷き來らしむるが故に。復た無願法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、衆生を教化して願求を除去す。是を菩薩摩訶薩の八百の總持と謂ふ。略して其の要を說かんに、道場に進趣し佛樹を莊嚴して、心、金剛の如く沮壞すべからず。九には菩薩摩訶薩、此の三千大千世界を觀じて、一足二足三足四足無數足に至り、愛欲心ありや愛欲心なきや、瞋恚心ありや瞋恚なきや、愚癡心ありや愚癡心なきや、苦樂心ありや苦樂心なきや、一時に一起する一念の頃に皆能く分別し、爲に苦空無我の想を說く。是を菩薩摩訶薩、無想定を行じ道場に進趣して佛樹を莊嚴すと謂ふ。十には菩薩摩訶薩、復た三千大千世界を觀じ、當來過去現在の心の諸根寂靜にして、行は無上正眞の道に應ず。是を菩薩摩訶薩、道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。』と。

佛、復た族姓子に告げたまはく、『菩薩摩訶薩は、初に右足を擧げて第一步を行く、其の中間に於て十法を修行し、道場に進趣し佛樹を莊嚴す。云何が十と爲す。一には菩薩摩訶薩、右足を擧げて地を蹈むの時に當つて、自ら名號を稱ひ、三界の至尊(といふ)、過佛の恒沙なる皆七步を行き、當來の諸佛も亦皆當に然るべし。「吾れ今現在、世に出現し、三界獨尊にして亦等侶なし。」諸佛の標式漏脫すべからず。是を菩薩摩訶薩、道場に進趣し佛樹を莊嚴すと謂ふ。

復た次に菩薩、右足を擧げて地を蹈むの時に當つて、便ち是の念を作す。「吾れ今已に不退轉地に逮(いた)る、亦衆生をして我が所趣と同じからしめん」と。弘誓廣大の心を捨てず。是を菩薩摩訶薩、佛樹を莊嚴し道場に進至すと謂ふ。

復た次に菩薩、初に右足を擧げて地を蹈むの時、復た是の念を作す。「過去の諸佛は先に是の法を行ぜり、當に一生補處の菩薩の吾が處を紹ぐ者を觀ずべし。名號は是れ誰ぞ。」と、即ち自ら右旋し顧みて彌勒に謂ふ。「卿、後に我が如く成佛すること久しからざらん」と。百千の天人聞いて皆欣然として、[三四]異響同音に稱ふること無量なり。「快なる哉世雄、佛種斷たず」と。爾の時に當つて十一那術の諸天人民彌勒に印封を授くるを見て、皆無上正眞の道を發したり。是を菩薩摩訶薩、佛樹を莊嚴し道場に進至すと謂ふ。

復た次に菩薩、初に右足を擧げて地を蹈むの時、便ち是の念を作す。「吾れ今已に衆智自在、

【三四】響。麗本には嚮に作り、三本宮には響に作る。

の受に從はず。是を菩薩摩訶薩、道樹を莊嚴し心退轉せずと謂ふ。八には菩薩摩訶薩、八百の總持法門・德行法門を修行す。菩薩にして此の法門を得る者は、衆行具滿し道樹を莊嚴す。復た普忍法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、普ねく一切を潤ほし甘露の法を雨らす。復た無相法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、盡く空行不退轉地に入る。復た音響法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、八等行具はりて異音を聞かず。復た身行法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、身行清淨にして衆惡を造らず。復た口行法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、四過を作らず他の惡行なし。復た意行法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、意、想に馳せず寂然として滅盡す。復た無念法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、滅盡定に入りて無形を觀了す。復た究竟法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、此岸より彼岸に至ることを得。復た無著法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、生死の法に於て染著を起さず。復た無礙法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、通達往來して生死に滯ふらず。復た應聲法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、隨行進趣して彼の受を識らず。復た神足法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、變化自由にして諸佛に禮事す。復た清淨法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、智慧を淨めて土の想なし。復た空行法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、諸法は虛僞にして眞ならずと解知す。復た幻化法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、衆生の權詐合數にして摸像すべからずと觀了す。復た無形法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、衆生の根原究盡すべからず。復た道種法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、三十七道品を修して斷たず。復た意止法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、內外身に觀じて念念不斷なり。復た意斷法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、諸法を觀察して若干の想なし。復た神足法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、壽無數阿僧祇劫に住す。復た諸根法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、道慧甚深にして牢固無礙なり。復た神力法門あり菩薩にして此の法門を得る者は、諸法に安處して沮壞すべからず。復た覺意法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、覺意の華を以て塵垢の汚染する所と爲らず。復た道品法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、入定無礙にして心錯亂せず。復た空慧法門あり、菩薩にして此の法門を得る者は、衆生に安處して永く欲怒を離る。復た無相法門あり、菩薩にして此の法門

し心退轉せずと謂ふ。三には菩薩摩訶薩、普ねく三千大千世界を見、道場に進趣して喜心を捨てず。吾れ今成佛せんこと必然疑はず。我が法本を以て普ねく一切を潤ほし、悉く衆生と同じく黄金色にして、三十二相八十種好なり。無央數の衆、前後を圍繞し、魔羅網を壞し已が國土を成ず。是を菩薩摩訶薩、喜瓔珞を修し心退轉せずと謂ふ。四には菩薩摩訶薩、道場に趣かんと欲して佛樹下に詣り、盡く十方阿僧祇の刹を見るに、一生補處の菩薩大士、盡く護心を修して道樹を莊嚴し、無數の衆生をして已が護心に同じうし、一切の瓔珞定意を捨てざらしむ。是を菩薩摩訶薩、道場に進趣し護心正受して心退轉せずと謂ふ。五には菩薩摩訶薩、復た十方無數の刹土を見るに、一生補處の菩薩大士皆法輪を轉じ不退轉行なり。法に言說なく亦形貌なく一相無相、空界無形にして、空は猶無空のごとし、況や法界あらんや。是を菩薩摩訶薩空無無形の法を瓔珞すと謂ふ。六には菩薩摩訶薩、普ねく十方恒沙の刹土を觀るに、通慧の衆生は諸根淳淑に、意、三乘に向つて法忍を捨てず、慈悲喜護もて六重法を行じ、四無礙慧一向道忍もて自ら受決を知る。亦復た他に其の決を授くる者、或は羅漢辟支佛の決を授くるを見て、菩薩自ら念ずらく、吾れ無數阿僧祇劫より捨身受身せるは、皆是れ幻化にして眞實の法に非ず。今受決を得て、無上正眞の道に進趣して最正覺を成じ、遊空往來して罣礙なく、一時一處に總持定を得たり。諸佛の歎ずる所の苦習盡道は、此の苦は苦に非ず苦は何に由つて生ずるや、苦を無苦と解すれば乃ち明慧に應ず。習は愛に由つて興る、愛は本と無形にして亦見る可からず、生は本と無生なり、況や法に滅あらんや。衆生愚惑にして從つて更樂を起し是を習つて是を得るも、習を無習と解すれば乃ち明慧に應ず。諸法は無生にして磨滅の法と爲す、盡は無生にして亦盡あること無く、諸法無盡なり。衆生愚惑にして盡を非盡と謂ひ、中に於て想を興し、[三三]横に諸法を貿ふるも、盡は實に盡なり、是を明慧と謂ふ。道に相貌なく眼境界の能く見る所に非ず。八直平正にして坦然として無礙なり、是を明慧と謂ふ。是を菩薩摩訶薩、道樹に進趣し心退轉せずと謂ふ。七には菩薩摩訶薩、盡く三千大千の刹土を觀るに、衆生の根源に高下大小あり、或は如來の心識と同趣にして本行共に智に合ひて增減なく、大慈大悲もて其の身を瓔珞し、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧・善權・方便・十六妙行、百千の總持あり、其の心廣大にして褊狹たらず。羅漢辟支佛の行を見ると雖も、心に染着なく彼

【三三】横。麗本に莫に作り、莫貿諸法と爲す、元明二本には横に作る。

山の如く移轉す可からず、世界に獨步して畏るる所なく。四智辯を以て諸法を包納し、衆生に指示して道慧の要を知らしむ。內、實に質直にして諛諂なし、然る所以の者は、本淨を用つての故なり。

旣に衆垢なく諸冥消索し、慧光普ねく照して澤を蒙らざるなし、心は大弘廣にして邊[三三]岸〔崖〕なく、意の穢の沐浴して鮮明ならしむ、世の所好に隨つて悉く能く成辦し、佛の樹下に詣りて自ら法義を修し、一切法に於て狐疑あらず。諸の愍智に於て具足成就す。諸の所聞に順つて尠知を救濟し、瓔珞定意もて亂者を拔濟し、及び諸の所習常に寂定を得。賢聖八道の品を修行し、一切人を立して正諦を見しむ、是を寶王よ、菩薩識定瓔珞の要と謂ふ。

若し聞持して懷に在らしむる者あれば、未だ曾て諸佛世尊を遠離せず、無上正眞の道より退轉せざることを得』と。

佛、是の識定瓔珞を說きたまふ時、座上に無量億百千の天龍鬼神、人と非人とあり、皆無上正眞道の意を發しき。復た異方の菩薩六十二千人あり、不起法忍を得たり。復た八千の淸信の士女あり、塵を遠ざけ垢を離れて法眼淨を得たり。五千の比丘は漏盡き意解し、九萬の天子は諸の貪欲を離れぬ。

莊嚴道樹品第三

爾の時に世尊、諸の賢者に告げたまはく、『吾れ昔、無數阿僧祇劫より功を積み行を累ねて淸淨法を修し、坐臥經行に四等を捨てず、一時一行一念の頃も十法を修せり。云何が十と爲す。一には兜術天より降神下生して、盡く十方無數の佛刹を見るに、諸の菩薩の一生補處なるが、皆道樹に詣り淨瓔珞を修し、右足を擧げ道場に詣らんと欲するに當つて、衆生を慈愍して三千大千の刹土皆悉く震動するを見る。菩薩自ら念ずらく、吾が昔の誓願、今日已に辦ず、當に魔界を壞して佛土を莊嚴すべしと。是を菩薩摩訶薩の大慈瓔珞、道場に進趣し心退轉せずと謂ふ。二には盡く三千大千世界の菩薩大士の心識所念を見、又定意に入つて三昧亂れず。或は菩薩の空に於て成道するを見、或は閑靜樹下の處を見る。或は水光〔火〕空界三昧に入り、道樹を莊嚴し大悲を離れず。是を菩薩摩訶薩の大悲瓔珞、道場に進趣

【三三】岸。宋本宮本には崖に作り、元明二本には涯に作る。

て難と爲さず。有極を見ず無極を見ず、是を菩薩の識定瓔珞と謂ふ。

世の訓誨に隨つて尊長を恭奉して、其の報を望まず、百千劫に於て勤修精進して、道慧の法を具足成就す、諸の菩薩の平等持忍を宣べ、諷誦通利して啓受忘[三]〔妄〕れず、如來の法身五分の性、一一願暢して言跡飾らず、語、常に笑を含み心に所著なく、斷滅二見の想を起さず、若し大衆に在りては亦適莫なく、空無法に於て亦想念なし、內、實に充滿しつつ外に諸受を現じて、亦意を生ぜず、我れ過量を行じ彼に短乏あり。諸の利養を離れて希望する所なし、常に自ら思惟して身に主なきを知り、頭より足に至るまで本と無なりと達了す。六度を修行して無處所を解す。諸法を按計すれば悉く是れ假號にして、形質なきを知る、一切の諸法は覩見すべからず、音響を分別して亦所聞なし、是の如し寳王よ、菩薩大士の法瓔珞識定の法を修する者は、善を見て喜ばず惡を聞いて感へず、然る後、乃ち精進瓔珞に應じ、百千定に入りて恬然として無想にして、天雷地震龍電霹靂にも、山崩れ水漂ひ師子鳴吼すとも、心意寂定にして永く錯亂することなし。或は時に菩薩入定正受し、乃ち一劫及び百千劫を經るも、形體軟美にして復た食を仰がず、斯れ定慧に由つて、禪悅を食と爲し八解を漿と爲せばなり。或は時に菩薩、復た神足を以て三昧に入る、其の三昧の名號を普照と曰ふ、東方江河沙刹の諸の佛國土を見、禮事供養して威儀を失はず、是の如く南方西方北方の各江河沙の諸の佛國土に於て、悉く能く諸佛世尊を供養し、識定瓔珞を演暢思惟す、是の如く寳王よ、菩薩の定に入りて感ずる所是の如し。且らく十方江河沙の刹を捨てよ、一一の諸刹其の中に塵を滿し、復た一塵を擧げて諸の佛刹に著し、斯の塵猶盡くるも佛土量り難し、菩薩の三昧は皆悉く一切衆會を覩見し、亦彼の佛の瓔珞の神識定意を演說するを聞いて、諸法は本と虛寂にして主なしと了り、初め學を起してより乃至道場に思惟發意して道樹を瓔珞するまで、悉く諸縛婬怒癡の病を過ぎ、其の心堅固にして移轉す可からず、正使天魔衆億姟を將ひ、來つて識定意の者を毀壞せんと欲するも、終に彼の屈還する所と爲らず、邪部の爲に錯惧せられず、意弘きこと海の如く容受せざるなく、衆德瓔珞悉く成辨を爲す、恒に無常苦空非身を講ず、常は常あるに非ず豈身あらんや。諸の常を計する者は則ち定を離るること遠く、生死に墮ちて自ら濟ふ能はず、菩薩の修むる所、唯道を務むるのみ、其の心恬然として永く衆想なく、諸佛所造の德本を離れず。意、太

【三】三本宮本は妄に作る。

福業を興致す、我れ昔、佛に[三〇]五莖を上り、志を建て弘誓して自ら成佛を致し、道果朽ちず正法を興隆す、復た禁戒を以て衆垢を消除し、彼の衆垢を救ふこと頭の然ゆるを救ふ如し、衆の厄難をして必ず濟度を得しめ、自ら念ず往昔海に入り寶を求めて、摩竭魚及び水形山に遇ひ、吾れ導主となりて識定瓔珞に入る、尋で善神あり好道を將示し、快樂安隱にして本邦に還至す、斯れ願誓して精進退かざるに由る、入禪正受して若干の想なし、諸佛世尊の所遊の堂なり、勸めて衆生をして梵天及び無想天に生れしむ、皆是れ識定瓔珞の致す所なり。若し人間に在つては、十方國土に、隨俗染化して度世の道を講じ、復た十善諸道の果證を以て、衆生を利益して空慧に達せしめ、一切に宣示して聖教に違はず、本空を解知して都て所造なし、殖〔植〕うる所の德本は自ら己が爲にせず、皆道法の果を獲しむ、設し法傾沒せば能く重任を爲し、若し苦惱に遇ふも永く憂感なく、亦妄想識著の心なく、身口を將養して漏失せざらしむ、權方便を以て深く生死に入り、爲に八解正受の味を說く、世俗を建立し佛道を慕崇し、或は一教、或は若干品を演べ、趣引して聖賢律に入在し、漸漸牽示して之を滅度せしむ、能く正法をして若干劫に住せしむ、有餘の衆生をして無餘に至らしむ、寂然泥洹して生老死受形の患なく、四大―地水火風―に依らず、諸ろ邪見愚惑の部に在れば、示すに正見一道の法を以てす、若し閑處に在りては十二法勤苦の行を修し、樹下に燕坐して所猗なく、禪法を思惟して唯空を務と爲し、一心靜定にして謬錯なし。菩薩識定瓔珞の實、亦色の有相無相を念ぜず、相自ら虛寂にして種好亦爾り、分別する內外を之を了して一と爲す、三世空寂にして去來今なし、識定心を以て、復た五陰性諸衰持入の、何より來り復た何より滅すと爲すかを觀じ、一一分別して巧僞たるを知り、非有の生滅に希望を興さず。亦復た是あり非あるを見ず心意に因つて道教を發すを得ず、識興れば則ち興り識滅すれば則ち滅す、相像を見ず亦我想なし、亦復た佇立の處所に著せず內外六塵亦復た是の如し。耳目を計挍するに尙所有なし、何に況や當に見聞の事あるべき。此は則ち然らず、寶王當に知るべし、菩薩瓔珞の心、識定法は、不起不滅にして亦終始なし、內に自ら增減の意を思惟して、苦樂の想なし、然る所以の者は吾我の念を離るればなり。復た欲、衆惱の中に在りと雖も、心に染著なく、以て三界―欲色無色―に遠ざかり、意、金剛の如く沮壞す可からず。本の宿命を知り根元を究竟して、諸結を斷じ以

【三〇】五莖。麗本には五百に作り、元、明二本には五莖に作る。

場を嚴淨して衆品の宜を具へ麁獷を以て其の心を經しめず、志、常に一生補處に慕ひ、及び正法深遠の藏を總持す、意恒に百千三昧に遊戲し、感動變化以て喩を爲すなし、一切の萬物は悉く皆無常にして、得難き寶も恃怙すべからず、權方便を行じて所住なし、衆生の心惑ひて正道を解せず、心、吾我に著して無常を明らめず、菩薩、心に誓つて分別說を爲し、一切は空虛にして眞ならずと了り、大道を崇ぶと雖も二乘を捨てず、所遊の刹、慶を蒙らざるなく、轉た精進を加へて倍（ますく）道業を行ず、諸の經法に於て其の妄想を去り、菩薩の法要、十地を離れず、以て上位に次いで其の叙を越えず、加ふるに智慧を以て衆の塵勞を消し、道に及ばざる者は自ら道門を致し、恒に念じて剋責して意に自ら念言すらく『施は是れ誰が爲にし受くる者何人ぞ』と、財寶を觀ずるに皆主あることなきが如し、設ひ毀辱せらるることあるも當に自ら意を制すべし、後、若し報を受くれば端正殊妙なり、所遊の處、見て歡ばざるなく、若し貧匱裸形體の者を見ば、躬自ら海に入つて如意珠を致し、語るに正法を以てして返復を知らしめ、甘露の法を以て衆難を消竭して、念馳泆せず、是の故に賓王よ、菩薩道果の瓔珞する所、意に自在を得、復た勇猛大力の敎を以て、建立訓導すれば隨順せざるなし、若しは行くも若しは坐するも十念を離れず、心は三尊に在つて未だ曾て忽ちに忘れず、地獄の苦痛の惱を了知して、至心寂靜にして塵勞の垢を去り、衆惡犯さず能く廻轉するなく、正理に應じ禁法を奉修し、德光普ねく照して皆潤澤を蒙り、自ら所有を計して貪悋する所なく、佛衆僧に施して想著を興さず、或は權慧を以て[二九]王と交接し、輙ち能く王をして高位を捐棄せしめ、若し人あり來つて頭目眼耳鼻口を求索せば、卽ち能く惠施して人意に逆らはず』と。

爾の時に座上の一切の弟子、諸の菩薩等、此の功勳瓔珞の德を聞き、踊躍歡喜して自ら勝ふる能はず、思惟深邃に善心生じ、各自ら敬を興し僉（みな）共に供養し、衆の名華若干の珍寶を散らし、一時同聲に其の德を稱歎すらく『我等宿福にして善利に遇ひ、乃ち殊妙瓔珞の訓を聞く、若し當に衆生斯の法敎を聞くべくんば、菩薩識定の要を勸發し、諸福功勳稱量すべからず、所演に安住して諦かにして虛ならず、設し菩薩なり此の識定瓔珞に遇はゞ、諸法を觀了して無處所を解せん、識定瓔珞は神心澹然たり、復た食を貪らず念を樂みて食と爲す、勸助す可き所、

【二九】王。三本及宮本には國王と作す。

法を過ぎて罣礙する所なく、身口心意に未だ曾て欺くことあらず。復た權慧を以て衆生を救濟し、窮厄の士には其をして飽足せしめ、心を持すること地の如くにして三過を犯さず、日に其の道を進んで放逸を行ぜず、不退轉牢固の心に逮つて、不起法忍現在前す、十力不畏[二八]〔無畏〕にして正觀を覺道し、吾我及び人、壽命を捐棄し、有無の法を分別思惟し、無量佛國を感動變化す、斯れ神通に由つて自在を得るなり。菩薩の宣ぶる所の言辭瓔珞は、諸見を超越して復た希望なく、心は正道に向つて亦顚倒なし、辯才無礙にして留滯なく、周旋往返して想著を生ぜず、一切の諸縛結使を蠲除し、憍慢自大は永く滅して餘なし、其の聲の音響は師子の吼ゆるが如く、亦雷震の如く聲を聞かざるなし、永く究竟に立ち乃至滅度して、無極瓔珞の雲を發す、演法の雷吼、法鼓の電光は、解脱味を雨ふらし七覺意を宣ぶ、法の清淨ならんことを念じて三寶を離れず、心は明月の如くにして亦沾汚なし、通達往來して正業を除かず、衆相と殊勝の法を具足す。是を普照よ、菩薩の環珞は窮盡することなしと謂ふ。上中下善中間通利し、懷來炤曜して禁戒を失はず、過去當來の諸の恒沙の聖は、斯の菩薩の德を嗟歎せざるなし、是の如きは普照よ、賢聖の道品、妙法の藏は、珍寶の門にして盡すべからず。

識定品第二

爾の時に座上に寶王菩薩あり、卽ち坐より起ちて長跪叉手し、前んで佛に白して言さく『唯然り世尊、菩薩の習ふ所の意識瓔珞は、多く開痞する所、度を蒙らざるなきこと、今の十方恒沙の如來、及び去來今の諸の滅度者の如し、云何が戒品を修學瓔珞して、彼岸に至らしめ、衆生の類をして普く香熏を聞かしめん』と。

爾の時に世尊、寶王に告げて曰く『諦聽せよ諦聽せよ、善く之を思念せよ。吾れ今汝が爲に其の義菩薩は戒品瓔珞を習行して、功德香熏もて自ら身を瓔珞するを敷演せん』と。寶王對へて曰く『願樂くは聞かんと欲す』と。

世尊告げて曰く、『道法を奉遵し、乃ち戒定解脱の慧を修し、衆生の類を勸めて篤く戒を信じ、其の志性をして各所願を充たさしめんことを願ふ、曉了宜しきに隨つて本誓を失はず、兼ねて一切愚惑の心を除く、道

【二八】三本宮本無畏に作る。

傷害する所なし、是を普照よ、菩薩の瓔珞心に所著なしと謂ふ。

其の意平等、空にして遍ねからざるなく、妄想を懷かず、布施して以て備へ、意を調へ安庠〔詳〕[二七]として人の爲に法を說いて空の義を離れず、一切を慈哀して行漏失せず、其の衆生の受くる所の法識を觀じ、其の志性を知つて之を開化し、所遊の處に在つて爲に一切を導き、聖明を導修して道義を現はし、極りなき大哀は餘人を開度し、亦善權方便の力を以て、諸の外道異學の中に入り、彼の法則に隨ひ祠祀に順從し、其の志趣を觀て度脫を得しめ、諸の梵志をして興福無量ならしめ、或は惡部盜賊の中に在つて、將導牽致して其の行を顯はし、此に緣つて無數の衆生を化度し、往古の世に於て功德已に備はり、皆喜悅して恭恪せざるなきを見て、爲に甘露道法の味を雨ふらし、衆生の瞋恨の結を除去す。若し復た前人、若干の惱を以て來つて之を犯せば、以て厭患せずして爲に寂然の法を頒示し、其の所興の非眞非實なるを知らしむ。

是の如く普照よ、菩薩の修むる所の心意瓔珞は、而も其の中に遊んで常に此を樂しみ、所樂を見ず、樂に所樂なく、眞法性を以て之を娛樂す。明かに衆生の根本の所趣を知り、救濟し度して衆の塵勞なからしめ、危害の患は永く餘なからしめ、其の心を執御し平等にして空の如くならしむ、四大所興の起滅を分別し、衆生を化せんと欲して之を訓誨す、所說眞正にして憎愛あることなく、一切邪見の心を降棄し、堅固の幢を堅心瓔珞し、若干の法品もて而も興共に戰ふこと、猶ほ勇猛なる大軍の將の如く、外敵を降伏して法律に入らしむ、若し習俗に入れば法教を施設す、施せば便ち報を受け、戒を持てば天に生る、所造の德には皆報應あり、此を以て之を濟ひて無爲に至らしむ。

夫れ菩薩と爲りては自ら瓔珞に順ひ、心は初より未だ曾て惡友の語に隨はず、然る後乃ち大士の行を全うし、意に淸白を懷きて終に吾我なく、心を持すること山の如くにして行に缺漏なく、智は一切に遍ねくして猶ほ月の初めて照すがごとし、若し大衆に在るや能く及ぶ者なし、是を普照よ、菩薩の瓔珞は一切に周滿すと謂ふ。

虛寂にして空無所有なりと覺了して、所生の處恒に光明を見る、所聞を輒ち解して佛道を成ずるに至り、常に根門の要を頒宣せんことを念ず、自ら業を建立して侵害する所なく、本性の自然の起滅を覩見し、卌の八

【二七】三本宮本詳に作る。

穢行を去れば、乃ち智慧に應ず。普照よ、復た知る、神通の及ぶ所、其の報應を得、其の天眼を以て徹視することを得るは、皆施行禁戒を修奉するに由る。恒に正見に順じて毀犯する所なく、法瓔珞を修して天耳聽を致し、念行勸助して因て道意を發す。或は復た識念神通を成就し、過去世を憶ふ皆悉く自然なり。生類の爲の故に功を積み德を累ね、毎に自ら彼の證に及ばざるを剋責す、神通變化無極を懷き來りて、諸の識著を捨て禪定を思惟して平等無二なり、斯れ因緣報應の果を解く。慧神通を以て衆垢を消滅し、其の三昧に因つて聖法の不二入なるを究暢し、諸の有漏を盡して、道意を失はず、人をして德を修め、世俗布施の德を加慕し、施恩ありと雖も其の報を望まず、無數の人をして喜樂して法を務め、能く一切を知つて通暢せざることなからしむ、能く菩薩の法を奉行せしむ、皆精進に由つて懈怠を興さず、慈愍して彼を護り一切成就せしむ、衆生を用つての故に身命を惜まず、已身の珍寶の貨を貪らず、所生の處、因つて道義を奉じ、前人の求めし所亦疑難なし。慧を聞き施を信じて猶豫あらず、所行と言教と悉く共に信用す。如來至眞は罣礙する所なく、所行寂靜にして亦放逸なることなく、堅固忍辱にして閑居を樂しむ。復た衆生の自責及はざるを化し、禪思脫門正受亂れず、恒に神通に遊び以て自ら娛樂す。復た無極の光明の動〔照〕[三六]を以て、時に適ひ宜しきに隨つて一切の章句義理を分別し、諸患を消滅して藏匿する所なし。恒常に一心に聖慧を開道〔導〕し、無數の人に報應の果を示し、衆德具足し、勇猛力を以てするも侵す所とならず。三世の都て無所有なるを解して、去來今の事、增損あることとなし。然る後乃ち智度無極に應ず。以て能く布施して自ら道意を發し、衆生をして一切普ねく安く自ら諸結を散じて已身を患はさざらしめんと欲す。若し人、杖もて捶たば悉く以て能く忍び、亦他人を化して忍辱を行ぜしむ。衆の德本を具し加ふるに專心を以てして、諸佛の敎を修し諸の生類に勸む、出家して道を學び自ら惡露の萬物は不淨なりと觀じ、輒ち惡趣を厭ひ功勳究竟し、行ふ所、善業にして其の心悅豫し、智慧深達にして恨を懷かず、篤く禁戒を信じて自ら善德を致す、復た和心を以て慚愧して惑はず、常に神志を御して麁獷を執らず、地獄の湯火の痛苦を思惟し、天の受福無極の樂を歎じ、寂然として憂なく復た貪欲なく、惠施する所あつて自ら三想を去り、心、內に猗らず外塵を受けず、道法を修行して衆望休息し、分別智慧もて自ら其の心を悟り、空・無相・願もて脫門を建立し、顚倒を除去して

【三六】三本には照に作る。

た聖明なる一心定意を以て、深く四諦甘露の道を察し、直に無爲に至つて復た虚僞なし。是を智慧の瓔珞する所と謂ふ。

常に當に一意に其の心を純淑すべし、一切の所有は施して悋ならず、開化の功勳は空脱門を解き、若し行業に在つては訓導埀誠し、廣く衆生に接し隨順して之を度し、而して殊勝仁和の德あり、時に宜しく若干の品類を曉了し、其の慈心を宣べて苦樂に著せず、一切を悲哀して劇難を避けず、彼の衆生を寤まして正法の敎に應じ、心を施して世に滿ち護つて成就せしめ、瓔珞の光明は照曜せざるなく、普ねく一切を愍んで彼岸に濟はしめ、正に人あり隱蔽の處に在らしめば、其の闇を消除して永く餘なからしめ、無畏の力一切を愍育して其の老病を除き放逸行なからしめ、導師の至る所、敎に從はざるなく、含む所、海の如く他人に施すを聞く、塵勞を開化して妄想なからしめ、所居の處、華の如きも着することなく、一切の法は寂寞清淨なりと了り、其の所演の敎は因緣を分別し、所造の德本は習うて之を致す、世を愍み苦を哀むが故に生類を訓へ、虚空は實に非ず亦眞有に非ず、世法を泡の如く幻の如しと解知す。衆生寤めざるも習うて捨てず、居家に處ると雖も能く生難を離れ、道眼淸淨にして亦蓮華の如く、神德魏魏として稱計すべからず、正に世界の衆生の類をして咸く共に嗟歎し其の原を知ること莫からしむ』と。

是の時に世尊、重ねて普照に告げたまはく、『夫れ道行に坐すれば去來なきを解す、若し去來を見れば則ち想著あり、罪福を分別するに亦起滅なし、斯れ皆自然にして空無所有なり、相住主なく而して本末なし、亦願求して獲べき者なし、能く自ら此の如きの法を校計す。是を菩薩、聖道に趣くと謂ふ。

復た當に三世の法を分別し、無二無我無人及び諸の境界は虚にして無所有なりと解知すべし。若し來ありと見るは則ち是れ報應緣起の法なり、無起無滅は乃ち道敎に應ず。聲に音ありと計するも音に形像なし、文字を分別すれば斯れ皆無實なり、一切明達して通暢せざるなし。菩薩の瓔珞は眞實無虚にして亦罣礙なく、陰蓋を除去して悉く無所有なり。若し所施を建つれば在在に欲する所、設し建つることあらずんば斯れ施度に應ず。心に謹愼を懷いて衆の不可を棄て、此の心を持てば乃ち戒律に應ず、諸法を達了し自然無住にして亦本際なく、勤修思惟して處所を建立し、精進禪思して身口意を攝し、慧明自ら曜きて衆の

にして自大なく、好んで隱居を喜び、諸の貪嫉を除き、有行の者を見れば其に代つて歡喜す。功德力を以て道樹を瓔珞し、報力・心力及び乳哺〔哺〕力は、諸聖の居る所にして解脱の力なり。常に此の法を以て衆生を育養し、慈悲喜護して衆生を捨てず、諸の緣着を護つて根本を拔去し、三世を觀了して去來今なく、善惡の報應都べて所生なく、法法自ら滅し法法自ら生ず、法の滅するを見ず法の生ずるを見ず、心に想念なく我・人・壽なし、亦、往來なく歸趣する所なし。復、空法を以て諸根を瓔珞す、吾れ昔成佛せしは、皆淸淨空無の想に由つて、自ら正覺を致せしなり、善本を修行して諸緣を造らず、善法を興起して放逸行なく、世事を去離して俗法に處らず、演說すべき所十方に流布す。諸の佛世尊を親侍禮拜し、施す所淸淨にして貪を捨てて欲なく、心意鮮潔にして垢穢なし、慧は無邊際にして眼視通達し、三礙六塵永く已に消盡す、是を菩薩、法瓔珞と謂ふ。

菩薩は、復、當に弘誓心を發し、莊嚴瓔珞智度無極なるべし、其の本器に隨つて法を與授し、所聞の慧の如くして便ち能く建立す、斯の如き行に應じて則ち退轉せず、意を執すること堅牢にして善友に追從し、所行と言教と終に虛妄ならず、念は常に恭恪にして經業を違へず、心に深智を習ひ受けて失はず、常に心を專一にして念錯亂せず、病の深淺を了して後乃ち藥を投ず、意に忍辱を樂み行步審諦ならり所施の財物亦適莫なし、其の意淸密にして煩憒なく、根本を學習して心流馳せず。人、法を聞かんと欲せば尋常に指示して要道を知らしめ、設し困厄して自ら濟はざる者を見ば、便ち能く惠施して自ら珍寶を致し、加ふるに善本衆妙の行を以てし、人に持戒を勸め、所聞の智慧菩薩道を成ず、假使ひ學人梵志に處在するも復た能く建立す。所生を覺了して忍辱を離れず、家業を棄捐して精進を修し、無常因緣の本を觀達して、諸の憎愛に於て二想を興さず、所爲平等なり、衆生の類をして無所從生の法忍を得しめ、常に能く其の無極の大哀に憑つて、漸く訓へて弘誓の法を勸導す、一切に施して聞知するを得しめ、志性寂然として吾我なし、一心に禪思して其の智慧を興して斷絕せざらしめ、其の施設する所四恩を離れず、危厄を救濟して無爲に至らしめ、身口の過を護つて三事を犯さず、至眞無上の法を建立して、意斷意止眞如法性、修して失はず。是を普照よ、皆是れ菩薩瓔珞の建つる所なりと謂ふ。

復た次に普照よ、菩薩は復た當に思惟校計料度無極なるべし。施を行じ戒を修し和顏忍辱精進寂靜にして意止を失はず、復

薩は法を聞いて厭くことなしと謂ふ。(16)何をか菩薩は止觀に遊戲すと謂ふ。(17)何をか菩薩は禁戒を奉修すと謂ふ。(18)何をか菩薩は誓つて世法を離ると謂ふ。(19)何をか菩薩は家業に處らずと謂ふ。(20)何をか菩薩は著することなしと謂ふ。(21)何をか菩薩は一たび坐し一たび起つと謂ふ。(22)何をか菩薩の口密心[二四]非と謂ふ。其の所問の義の旨要是の如し』と。

佛、普照に言はく『善い哉、善い哉。乃ち如來に此の如きの義を問ふことや。汝今諦かに聽き善く之を思念せよ。戢めて心懷に在り、之を捨てゝ凡夫行に在らしむることなかれ』と。

普照對へて曰く『唯然り世尊、願樂はくは大聖の法を聞かんと欲す』と。

是の時に世尊、普照に告げて曰はく『菩薩道を行じ、當に十德を念じて其の體を瓔珞すべし。身口意の法に人の短を說くことなく、諸の同學に於て輕慢を興さず、心平かなること空の若く亦增減するなし。諸の惡趣を棄てゝ害を人に加へず、彼の衆生を視ること己の如くにて異ることなし。志の得るは身に由り、所知盡くるなく、復た四諦を以て衆生を教授し、持心寂然として寤めしめ成ぜしむ。復、衆智を以て妙門を瓔珞し、二乘を訓化して所趣に至ることを得、大乘の學を勸めて諸法を觀達せしむ。如來の行、功勳の德を修し、教導するに漸を以てし暴逸を行ぜず、自ら己が過を省みて彼の短を識らず、衆難を踰出して常に法を愛樂す。寂定にして亂なく、諸疑望[二五]〔妄〕見の事を蠲除し、猶豫ある者をして時に寤ることを得しむ。道心所造の德本を捨てず、又、人を教化して戒を毀らさらしめ、常に大哀を以て人の爲に經を說き、所遊の世界に諸佛を離れず、禁戒を宣示して一切智に逮ぶ。復、照曜瓔珞を以て、諸佛寶淨道場を莊嚴し、光明瓔珞は周遍せざるなく、悉く三千大千世界を照し、此の日月を蔽ひて光明なからしめ、正使神妙釋梵四王所有の威光悉く復た現れざらんも、如來至眞難測の光のみ、獨り明かに獨り顯はれ、及ぶ者あることなし。是を普照よ、菩薩道を修し、十德もて瓔珞して自ら纏裹すと謂ふ。

常に諸佛を念じ如來を供養し、聖教を咨歎し、衆生を勸化して道門に入らしむ。復、衆生に告げて大弘誓を發さしめ、其の趣向する所、佛の名號を聞く、萠類を將養して彼の國に生れんことを願はしむ、志、弘大にして普ねく怯弱を懷かず、深く聖慧に入つて下問を恥ぢず、常に微妙を樂しみ、言ふ所柔和

【二四】非。元明二本には誹に作る。
【二五】三本宮本には妄見に作る。

る。唯願はくは大聖、其の義を敷演して、諸の會者をして永く狐疑なからしめたまへ』と。

佛、普照に告げたまはく、『復た汝が座に還れ、吾れ當に汝がために一一に法瓔珞の義を分別し、根門を修立し妄想を超越し、一切智諸の通慧地に近づけしむべし』と。

爾の時に世尊、復た神足を以て諸菩薩所入の定意を觀じたまふ。其の法を名けて道樹瓔珞と曰ふ。諸の大士の莊嚴せる道場を淨め、正法を覺道して畏るゝ所なく、諸の聖慧に遊んで自在を得、所入の道門、辯才を失はず。復た神通を以て其の座を瓔珞し、不退轉地を演暢分別し、一法界は空無所有なりと解し、衆生の利鈍の性を觀察し、其の心を堅固にして一切法を決し、塵勞を除去して法要に隨順す。所言信用あり染着する所なく、應對疑なくして來往發遣す。無礙智を說いて永く縛著を離れ、功を積み德を累ねて希望を懷かず。說く所の諸法は眞如審諦にして、有爲を計せず當に成辨あるべし。相は則ち無相、[二〇]爲は相爲を興す。深妙なる十二緣起を曉了し、根源を尋究して限るべからず。

是の時に普照菩薩、復た座より起ち、前んで佛に白して言さく、『願はくは問ふ所あらんと欲す、[二一]唯然り、聽されなば、乃ち自ら宣陳せん』と。

佛言はく、『善い哉、問はんと欲する所に在り、若し疑あらば便ち自ら演暢せよ。如來當に爲具さに之を發遣すべし』と。

是の時に普照、聽されて喜踊し、尋いで時に問うて曰く、『[二二](1)何をか菩薩は法もて身を瓔珞すと謂ふ。(2)何をか菩薩は其の妄見を除くと謂ふ。(3)何をか菩薩は出世法を[二三]起すと謂ふ。(4)何をか菩薩は世界に遊至すと謂ふ。(5)何をか菩薩は如來に親近すと謂ふ。(6)何をか菩薩は母胎に處らずと謂ふ。(7)何をか菩薩は輒ち神識を生じて錯亂することあらずと謂ふ。(8)何をか菩薩は而も篤信を懷くと謂ふ。(9)云何が菩薩は自ら己の爲にせざる。(10)何をか菩薩は衆緣の苦を救ふと謂ふ。(11)何をか菩薩の法施財施と謂ふ、(12)何をか菩薩は空義を分別すと謂ふ。(13)何をか菩薩は其の陰蓋を除くと謂ふ。(14)何をか菩薩は廣く法戒を熾にすと謂ふ。(15)何をか菩

【二〇】爲興相爲。この四字の意不明なり。無相なるべきに、爲作ありとするを以て、之が爲に十二緣起の說ありの意か。
【二一】唯然。三本宮本には唯然を惟敢に作る。
【二二】何。こゝに二十二門あり。
【二三】起。三本宮本には超字に作る。然らば世法を超出すと訓ずべし。

る所の法は平等無二にして、成と未成とを以て、視ること同類の如し。功稱名[一二]動に常に自在を得、深法要を修し訓ふるに道教を以てし、若し大衆に在れば威相光[一三]光、神智妙達にして稱計すべからず。彈指の頃に、無量の諸の佛國土に遊び、十方の諸の正覺等を供養す。其の名を歡躍菩薩・山雷菩薩・慧密菩薩・普明菩薩・濟彼菩薩・總持菩薩・金剛菩薩・石磨王菩薩・雷震菩薩・雨渧菩薩・善算菩薩・智積菩薩・法上菩薩・息意菩薩・除幻菩薩・善稱菩薩・虛空藏菩薩・威力菩薩・焰光菩薩・識機菩薩・盡慧菩薩・無邊際菩薩・堅固志菩薩・月光菩薩・法熾菩薩・無見菩薩・無等菩薩・日盛明菩薩と曰ふ。是の如き十方の諸佛世界の衆菩薩等、普ねく來りて雲集し、[一四]忍世界に詣りて、如來の說法の瓔珞大智根門菩薩藏に趣く、不可思議權現無量なるを聽かんと欲す。及び賢劫中の彌勒、[一五]濡首、[一六]十六大聖颰陀恕等、[一七]八大神士、帝釋、四天王と忉利天人と倶なり。焰天・兜術天・不憍樂天・化自在天・魔子導師・梵天王・梵淨天王・善梵天王・梵具足天王・大神妙天・淨居天・離垢光天より、上は一善住天に至る。燕居[一八]無善神及び諸の樹神・山神・金翅鳥神、及び餘の一切の諸大尊神、一一の尊復た尊、及び諸の天龍鬼神・阿須倫・迦留羅・眞陀羅・摩休勒、人及び非人、各眷屬とともに來つて佛の所に詣り、稽首し畢つて立侍す。比丘比丘尼、淸信士淸信女、各自ら敬を修し、前んで佛の爲に禮を作し、各一面に坐す。

爾の時に世尊、若干百千の衆のために營從圍遶せられ、佛、嚴淨高廣の師子の座に昇り、諸の大衆のために法瓔珞を說きたまふ。佛の衆中に在すこと須彌山の如く、晃かなること金積の若し、威神光明世を超えて雙びなく、道德威儀魏魏として量なし、大光明を放ちて照さゞる所なし。復た神變を以て十方を感動す。時に應じて空中に、尋いで百千の寶[一九]玟珞の蓋あり、衆珍雜厠して遍ねく其の上を覆ふ。無價寶珠、照虛空珠、懸りて空中に處り、光、珠より出でて色像比なし。其の空中に於て、微雲を興して諸の香華を雨らし、時に空中の華積りて膝に至り、復た大音を出して世界に遍滿す。

時に菩薩あり、名けて普照と曰ふ。佛の聖旨を承け、卽ち座より起ちて長跪叉手し、前んで佛に白して言さく、「今神感する所、未だ會て見聞せず、此れ何の瑞應にてか、乃ち斯に至

【一二】動。宋宮二本に訓に作る。
【一三】三本宮本には光輝に作る。
【一四】忍世界とはこの娑婆世界をいふ。
【一五】三本宮本には軟首に作る。Mañjuśrī の略。
【一六】Bhadrapāla. 賢護と譯す。十六菩薩の一。
【一七】三本宮本には神王に作る。
【一八】無。三本宮本には天に作る。恐らくは無字なりしか。
【一九】元明二本には瓔珞に作る。

[一]菩薩瓔珞經[二]一に現在法と名く

姚秦涼州[三]沙門竺佛念譯

卷の第一

普稱品第一[四]

聞くこと是の如し。一時、佛、[五]摩竭界の普勝講堂に在して、大比丘衆と倶なりき。比丘十千、菩薩萬五千人、一切の大聖雲集せざるなし。諸德具足して[六]總持を捨てず、其の志弘普にして包まざる所なく、辯才通達して疑網を除去し、神通に遊んで深義を解説し、權方便を以て適化宜しきに隨ひ、慈、下劣に及んで彼岸に至るを得しむ。如來の三昧正受—諸佛嗟歎し天人の敬ふ所、—を宣暢し、所願自在にして罣礙なく、普ねく殊勝奇特の域に遊び、神足變化し衆相具足し、衆魔を降伏して法慧を曉了し、諸法を分別して、深く[七]本際を知り、衆生の普根原せし所を觀察し、道品の[八]空・無相・願なるを演暢す。世の[九]八事に於て染着なく、加ふるに大慈を以て衆生を救濟し、身口意を護つて邪見あることなく、志、精進を崇び、心、金剛の如く、勤勞を無數劫に執ると雖も、心恒に勇猛にして厭倦あることなし。諸の大衆に在つて師子の威を現じ、異學を降伏して[一〇]退あらざらしめ、聖[一一]別號を以て之を印可し、諸佛の遊ぶ所は悉く皆履行す、皆是れ正覺の修行する所なり。道場を嚴淨し魏魏たること無量にして、若しは行くも、若しは坐するも無底慧に入り、心恒に悅豫して亦、怯弱なく、講演す

【一】宋本、宮内省本には、佛説を冠す。
【二】宋本宮本には、この注はこゝになくして、普稱品第一の後にあり、又元明二本には報の次に經字あり。
【三】宋本宮本は、沙門の次に三藏を加ふ、又元本には念の次に第二を加ふ。
【四】宋元宮三本には、菩薩瓔珞を冠す。
【五】Magadha.
【六】dhāraṇi. 智慧の力用。
【七】諸法の窮極。
【八】空・無相・無願を三解脱門といふ、大乘に入らんが爲の必須の通路なり。
【九】又は八風といふ、利・衰・毀・譽・稱・譏・苦・樂行にして、人世を動かす力なり。
【一〇】完全に降伏して、再び異學に墮するなからしむるなり。
【一一】別。三本及宮本には莂に作る。聖別號とは將來成佛の記別を授くるなり。

る。蓋し一切が一乘の中に融合せられても、その中に亦無限の差別があるといふ事を說かんとするものであらう。これは言ふまでもなく「法華經」の二乘開會を豫想しての三道三乘である。

×

本經の國譯につきては、文學士林得成君、文學士加藤祐弘君を煩はした事を、最後に一言して謝意を表するのである。

昭和十年十一月末日

譯者　常盤大定　識

本有今無・今有本無の偈まで用ひられてある。
　無所住の「金剛經」、如々思想の「思益經」との交渉の如きは、言ふに及ばぬ。
　本經中にあらはれ來る菩薩の數は、到底枚擧に堪へぬが、阿羅漢は頗る少い。大迦葉(受迦葉勸行品)、須菩提(有行無行品・供養舍利品)、舍利弗(三道三乘品)、大目犍連(譬喩品)、邠耨文陀尼子(清淨品)、劫賓那(三世法相品)の六人だけであり、唯名だけなれば、有行無行品の中に、八大羅漢として大迦葉、阿若拘隣、舍利弗、大目犍連、賓頭盧、大迦旃延、離越、須菩提、邠耨文陀尼子を數へて居る。この中に於て、須菩提が特に多くの役割を爲して居る所に、「般若經」との連絡が見られる。
　斯くて本經は、「維摩」「法華」「華嚴」「涅槃」「般若」の如き諸大乘經との間に連絡があり、龍樹法門より無著法門への橋梁を爲すものと思はれる。
　本經には、三乘を混合して之を一乘に歸せしめてあるが、三乘を引き上げて大乘とした試みは、三道三乘品の中に、大乘の菩薩・辟支佛・聲聞といふ中に見られる。大乘菩薩は通有觀念であるが、菩薩のみでなく、大乘辟支佛といひ、大乘聲聞といふまでに至つて居るのは、他に見られぬ所である。經は菩薩三乘に各三品あり、辟支佛三乘にも三品あり、聲聞三乘にも三品ありとして、次の樣な複雜な名稱を編み成して居る。括弧の中のは、その説明中にあるものである。

- 菩薩三乘
  - 菩薩大乘
  - 菩薩辟支佛乘
  - 菩薩聲聞乘
- 辟支佛三乘
  - 辟支佛菩薩大乘(〃)
  - 辟支佛菩薩緣覺乘(辟支佛辟支佛乘)
  - 辟支佛菩薩聲聞乘(〃)
- 聲聞三乘
  - 聲聞大乘(聲聞大乘菩薩乘)
  - 聲聞辟支佛乘(聲聞菩薩辟支佛乘)
  - 聲聞無著乘(聲聞聲聞菩薩乘)

經に於ける之が説明は、因緣のみでせられてあるので、その內容が判然せぬが、名稱の上から見て、三乘を菩薩大乘中に取り込んだ上の分別である事は明白であ

は、何ぞ三者に限らんやであるが、予は是等の本無思想と識界思想と本淨思想とが、經中に於て思想的の觀點に立つ時に最も注目せらるべきものと思ふ。本經の歸趣は、夫れ或は三界品の住二無所住一而學レ道の境地にあらう。然らば龍樹法門の域を逍遙して居るのであるが、然し彼此の間に識界の風光が頗る隱見して居るから、こゝに無著の唯心法門への進出の基礎があると思ふ。經典でいふなれば、「華嚴」や「涅槃」より、「勝鬘」や「深密」などへの經過の中途にある樣に思はれるのである。

五、本經と他大乘經との關係

本經と他の大乘經との交渉を見るに、識界品に空行、無我等の二十菩薩が、各々空慧無所著法を說き出す光景や、有行無行品に、無頂相・廣進等の四十八菩薩が、各々有行無行を分別する光景やの中に、「維摩經」の入不二法門の面影がある。特に音響品の一音演諸法や、三界品の六十二見者、皆出二生菩薩一、出二生菩薩道果一などの中に、「維摩經」の色彩が濃厚に見られる。

受迦葉勸行品に、大迦葉が如來に三乘の分別なくんば我等も成等正覺せんものを、我等の羅漢たるは如來の咎なりと白したのに對して、佛說の偈の中に、大道無二三乘一、況有二四道果一といひ、六度曠大法、何有二聲聞名一といへる中に、又無著品に、明觀菩薩が無著の行を說きて、佛の記別を受けたが、その記の中に純有二一乘敎一、敎二化衆生一、不レ聞二緣覺弟子之名一とあり、而して授記を覺知すると覺知せざるとの八因緣を說いて後、波旬に對して、此彌勒菩薩、當三授レ汝得二菩薩號一とあるのは、「法華經」の二乘を開會して一佛乘に歸入せしめた趣があり、提婆への授記を徹底せしめて之を惡魔にまで及ぼした事が見られる。音響品の一音演諸法、使二我國人無二三乘之名一は、一音に一佛乘の內容を與へたものである。無斷品に、一度に六度を具すべきを說いて、緣覺に趣きしものを廻意して、無上道心を發さしめたといふのは、同じく「法華經」の回心向大に共通するものである。

光明品の十藏行・十事行、諸佛勸助品の十無厭法・十無盡法、如來品の十地の四神足、除垢品の十事功德業、應時品の十慧、十智品といひ、十不思議品といひ、其他十重の法門の頗る多い所に「華嚴經」との連絡が見られる。隨行品に五百五十餘の度無極が說かれてあるのは、十波羅蜜の廣說せられたものであらう。

等乘品の中に、一切衆生類、皆當レ成二道智一は、やがて「涅槃經」の一切衆生悉有二佛性一。凡有レ心者皆當レ成二菩提一である。龍王浴太子品の中には「涅槃經」の有名な

無染汚識との間に不思議の熏變を認める時は、「勝鬘經」の如來藏と生死との關係となる。

斯くて一方に本無思想があり、他方に識界思想があるが、是等兩者の致一する所に、識界品の達二識本無一があり、龍王浴太子品の無形之識、空性自然がある。淸淨品に修二習本無一相之法一、內自思惟分二別身相一、內外淸淨、不レ生二染著一とあるのは、本無一相の法たる識性空本無際に還住する時に、內外淸淨となるの謂であり、この境地はこゝに名づけてないが、即ち如來藏といひ、如々といはるゝものでなくてはならぬ。生佛品の中には、分別を打破したる境地に、如來如如・世界如・諸法性如・不思議如・未來如・劫數如・諸有如・諸法性空如と言ひ、この性空如々無法を得る時は、有も如々であり、無も亦如々であるから、有行によらず、無行によらずといつて、有行無行を超えた彼岸を唱導して居る。

斯の如く識界に本無が加はる所に、識空如々で、空如々の境地があらはれる。識空如々であるならば、そこに本淨思想が成立せねばならぬ。龍王浴太子品の中に、衆生本淨、不レ見二染汚一といひ、尋二究衆生一、皆悉淸淨、本淨自然、無我自然、無形自然、人物自然といひ、次いで一々之に說き入りて、本淨自然につきては、從二久遠一已來、流二轉生死一、發レ意求レ道、乃至二泥洹一、本自淸淨、斯乃名曰二本淨自然一とし、無我自然につきては、本有今無、今有本無、亦不レ言二我、我本生一有、亦復不レ言二有從レ我生一、我不三自知二無レ我有一、不二自知一レ有レ有、斯乃名曰二無我自然一とし、無形自然につきては、無形者識也、神也、壽也、此三句義常存不レ變、在レ空爲レ空在レ形爲レ形、在レ有爲レ有、在レ相爲レ相、在二無相一爲二無相、無形之識空自然、斯乃名曰二無形自然とし、人物自然につきては尋二究人物、不レ見二窠窟一、意識幻化不達二本源一、愚惑相承言レ父言レ母、國財妻子、漸生二衆想一、染二著三三有一、我今已捨永不二與處一、以レ此自然明二達空慧一、空慧自然、諸法亦爾、諸法自然、逮二正覺者一、亦復自然、一切諸法、但假名號、因レ號有レ名、亦復自然、論說自然、便爲二論說一、無二起滅法一、斯則名曰二人物自然一とし、而して吾今若說二空寂之法一、衆生不レ信、倍生二疑網一、設我復說二形質之法一、不レ盡二根原一、況當二滅度一、宜二且寂靜、賢聖默然一と言つて居る。これは釋尊が樹下成道の衆生觀を說いたもので、釋尊はこの深義を說くに躊躇せられた事としてあらはされてある。この中、無形自然と人物自然の中に、本淨の本より識界にあらはるゝ風光を說いてあるが、然し說いて詳でない。後の唯心說のあらはるべき理由が、こゝに伏在するのである。

本經の中に於て、注目せらるべき理趣

らくは本經を見るべき三大眼目であらうと思ふ。

識界品の中に、人本在二虚空一、染識三有法、唐自著二塵勞一、不レ入二本無際一とある偈の中の本無際は、本無思想の根本的なものであり、この本無際に識の風波が起つて三有に染する事となるのである。識の本無に體達する事によつて、本無際に還住するといふを表はして、又識界品の中に如來無等智、入二達識本無一、空性恬然一、切二復有二疑惑一といふ偈がある。無識品の中に、智生瓔珞、歎二本無一故とあるのも、清淨瓔珞、離生本無故とあるのも、有受品の中に得慧菩薩、深了二本無一とあるのも、無著品の中に本無無所著とあるのも、いづれも本無際を意味するものである。この本無際を達觀する時には本無法となるのが、有行無行品の於二本無法一中一、諸法皆空である。この達觀から起る行は本無行であり、本無行の歸著は本無慧である。有行無行品の從二本無行一至二一切智一とあり、無想品に本無慧無餘涅槃とあるのは、それである。この本無行慧を實現したものが如來であるから、こゝに本無如來の觀念が成り立つ。無想品の中に不レ住不二變易一、不レ壞二法界一故、號爲二本無如來一といひ、成道品の中に本無如來至眞等正覺といひ、無著品の中に本無無如來印といひ、舍利供養品の中に本無如來法、如レ空無レ有レ形といつて居る。

一方に本無思想が高潮せられると同時に、他方に識界の説述が可なりにある。識定品に識興則興、識滅則滅といひ、識界品に識非レ有レ識、從レ法生レ識、識非二常識一、隨レ法有レ識とあるが、この法は後に種子の概念中に攝められたものであると思ふ。供養舍利品の中に見られる夫三業者識界所攝、識非二色身一、色身非レ識の提示の如きは、三界唯心又は三界唯識と同一の内容を有するものであらうと思ふ。斯くて識は性空のものでなくてはならぬ。龍王浴太子品に無形者識也、神也、壽也、此三句義常存不レ變、在レ空爲レ空、有レ形爲レ形、在レ有爲レ有、有レ相爲レ相、在二無相一爲二無相一、無形之識、空性自然、斯乃名曰二無形自然一といふが如き、法門品の識隨二其形相一。……在二有爲相一隨二有爲識一、在二無爲相一隨二無爲識一、不レ在二此相一、不レ在二彼相一、一亦非レ有レ識、亦非レ無レ識、是謂二無礙泥洹、非有識非無識一也といふが如き中の識は、如來藏思想への道程であらう。識性の空なるに悟入する所に、無礙泥洹に入るのであるから、染識はやがて無染識への基礎となる。法門品の中に染汚識動爲二無染汚識一、無染汚識不レ爲二染汚識一、何以故、識性常住亦不二變易一、無二生滅著斷一とあるのは、それである。この無染汚識こそ、名を改めれば如來藏となるものでなくてはならぬ。無染汚識は染汚識とならぬとあるが、然し染汚識と

根寂靜の十法
諸佛勸助品―十四舌相報法・身相十無厭法三品妙行・十無盡法、
如來品―五苦法門・四果報行・十地四神足
音響品―六神通
光明品―光明十藏行・十事行
無斷品―八種五法・六度各具六度
賢聖集品―百三十五法門
三道三乘品―三道各具三乘

是等は前の四類の中に攝するとせば、第一の法瓔珞の中に屬せしめてよからう。經の主張は、本無の理と行とによつて、一切の矛盾對立を超えしめて、一相無相の域に入らしむるにあるから、その點からいふ時は、經の全部が無著を說いたといふ事にもなる。然し瓔珞は經題であるから、經の要求は菩薩行を微細に說かんとするにある。

前に一言せる如く、本經の菩薩は佛陀を含む意味のものであり、佛陀と菩薩との間に區別が見られぬまでに及んで居る。例せば「佛の菩薩道を修する無し」といふが如きが、それである。本經自身この問題に觸れて居る。卽ち淨居天品の中に、「菩薩摩訶薩は、一心定意し、想知滅して十事あり、三世を知りて、佛の所行の如く異なるなし」とて、佛の所行に異らざる菩薩の十事を擧げて後に、天子をして「佛の所行の如く、菩薩異らずば、何を以ての故に、名けて佛と爲さゞる」と問はしめて居る。之に對する佛說はあるが、何にせよ佛と菩薩との間に區別がなきまでに及んで居るは明白である。一方に「法華」や「涅槃」の佛陀があり、他方に「華嚴」の菩薩があり、兩々相幷んで開展して來たが、もと〱「法華」の佛陀以外に「華嚴」の菩薩があるので無い。同一人格の二面に過ぎぬ。若し菩薩の語そのものからいへば、成道以前の釋尊であるから、菩薩と佛陀との間には、前後因果の關係が見られる。事となるけれども、「華嚴」の菩薩の如きに至つては、最早や因位のもの、迷界のものと見る事が出來ぬ。隨類方便の形を取つたものと見るのが、最も似つかはしい。其後を承けた本經である以上は、菩薩の內容が佛陀と平等たるべき、素より當然とせねばならぬ。

四、本無と識界と及び本淨

本經は、他の多くの大乘經典と同じく、可なりに繁難で、又可なりに絢爛なものであつて、中に織り込まれてある法相は大抵なものを含んで居るから、一々之を取り出して來る時は、徒らに煩瑣なものとなる。之を通讀して最も多く寓目せらるゝものは、一方に本無思想の高潮があり、他方に識界に關する說述の多い事と、及び本淨思想の存する事である。これ恐

二十、何謂三菩薩無著一
廿一、何謂三菩薩一坐一起一
廿二、何謂三菩薩口密心悲一

二十二問は以上の如くに一列に列せられてあるが、その間には輕重があつて、第一の法瓔珞は經題に表はれるまでの重大なものである。經の多分はこの法瓔珞を說いたものであるから、今度はこの法瓔珞の組織が重要となつて來る。第一の法瓔珞の外では、第十二の分別空、第十六の遊戲止觀、第二十の無著が重大な意義を有する。本經は、是等の問題に對して、如何に答へて居るか。

第一の法瓔珞に答へたものとして、次のものを擧げてよからう。

普稱品—心意・堅心・自順・言辭・無極の五瓔珞
識定品—戒品・識定・精進の瓔珞
法門品—法無礙瓔珞、十種の六淸淨瓔珞
隨行品—成佛行としての十三隨行五百五十餘の度無極
無識品—總持・種姓・善權等の二十七瓔珞
十智品—大法瓔珞

第十二の分別空に答へたものとしては、次のものを擧げ得る。

識界品—二十菩薩說、空慧無所著法
聞法品—本末空慧
有受品—知一切法本空
本末品—五陰本末空
三世法相品—三世空平等
淸淨品—本無一相法

第十六の遊戲止觀に答へたものとしては、次のものを擧げ得る。

因緣品—十二因緣觀
四聖諦品—無量・行盡・速疾・臼等の四聖諦
無量品—十八慧明成就、九地に於ける各々三禪行成就
無量遝品—三禪行
淨智除垢品—定意正受六度具足、三昧十功德業
釋提桓因品—如幻三昧

第二十の無著に答へたものとしては、次のものがある。

心　品—無想行の六度具足
生佛品—分別打破の上の有行無行
本末品—五十四法不著空行
無識品—無識著想
有行無行品—四十八菩薩の有行無行分別
無著品—無著行

以上は互に關聯するから、或は分別空と無著とを分けないでもよいが、二十二問に分れてあるので、一應分けて見たのである。

以上の外にては、次のものがある。

莊嚴道樹品—慈・悲・喜・護・空無・明慧・廣大心・八百總持・無想定・諸

卷　四——普審品第九　因緣品第十　心品第十一　四聖諦品第十二　成道品第十三
卷　五——生佛品第十四　本末品第十五　非有識非無識品第十六　無量品第十七
卷　六——無量運品第十八　隨行品第十九
卷　七——隨行品第十九の餘　光明品第二十　無想品第二十一
卷　八——無識品第廿二　有行無行品第二十四(二十三)
卷　九——有受品第廿五(四)　無著品第二十六(二十五)
　　浄智除垢品第二十七(二十六)　無斷品第二十八(二十七)
卷　十——賢聖集品第二十九(二十八)　三道三乘品第三十(二十九)
卷十一——供養舍利品第三十一(三十)　譬喩品第三十二(三十一)
　　三世法相品第三十三(三十二)
卷十二——清淨品第三十四(三十三)　釋提桓因問品第三十五(三十四)
　　本行品第三十六(三十五)
卷十三——聞法品第三十七(三十六)　淨居天品第三十八(三十七)
卷十四——十方法界品第三十九(三十八)　十智品第四十(三十九)
　　應時品第四十一(四十)　十不思議品第四十二(四十一)
　　無我品第四十三(四十二)　等乘品第四十四(四十三)
　　三界品第四十五(四十四)

三、本經の綱領

本經の說かんとする所は、大法瓔珞といはるゝ菩薩行にある。その菩薩行は、如何なる風にか組織せねば理解し得られぬまでに夥しい。この澤山の菩薩行に說き入る問題は、最初の普稱品の中に、二十二問の形を以て表はされてある。是等二十二問に對して、之に答へた形としては、どこにも說かれてないが、經中に說かれるものは、是等二十二問のいづれにか答へたものと見る事が出來る。その二十二問とは、次の如くである。

一、何謂㆔菩薩法瓔㆓珞身㆒
二、何謂㆔菩薩除㆓其妄見㆒
三、何謂㆔菩薩起㆓出世法㆒
四、何謂㆔菩薩遊㆓至世界㆒
五、何謂㆔菩薩親㆓近如來㆒
六、何謂㆔菩薩不㆑處㆓母胎㆒
七、何謂㆓菩薩生輙神識不有㆑錯亂㆒
八、何謂㆔菩薩而懷㆓篤信㆒
九、云何菩薩不㆓自爲㆑已
十、何謂㆔菩薩救㆓衆緣苦㆒
十一、何謂㆓菩薩法施財施㆒
十二、何謂㆔菩薩分㆓別空義㆒
十三、何謂㆔菩薩除㆓其陰蓋㆒
十四、何謂㆔菩薩廣熾㆓法戒㆒
十五、何謂㆓菩薩聞法無㆑厭
十六、何謂㆔菩薩遊㆓戲止觀㆒
十七、何謂㆔菩薩奉㆓修禁戒㆒
十八、何謂㆔菩薩誓離㆓世法㆒
十九、何謂㆔菩薩不㆑處㆓家業㆒

經」は「梵網經」と共に、「華嚴經」の後を承けたもので、共に疑僞の論の盛んに行はるゝものであるが、然し竺佛念の加減があつたにせよ、此土の僞造であり得べきでないと思はれる。斯くて竺佛念に瓔珞經の名を有するものに、二種の譯があり、中に於て本經は第二出とせられるのである。

本經の翻譯は舊譯の黃金時代たる鳩摩羅什の直前で、譯經もやゝ成熟せんとせる時期のものであるから、相當に理解し得べき程度に表詮せられてあるが、然し因緣品や隨行品の如きにあつては、可なりに難解の部分があり、中には訓じ難い句もある。難解の一の理由は、譯語の古い爲である。卽ち後に十八界とせるものが、古のまゝに十八本持であり、蘊界處が陰持入であり、受が痛、觸が更樂であり、三十七道品には四意止・四意斷・七覺意の如きを用ひ、四無量心が四等心であり。慈悲喜捨が慈悲喜護であり、波羅蜜が度無極であり、佛の十號に明行成爲・道法御を用ひ、太山・江河の如きを用ひ、焰天・兜術や、泥洹やを用ひ、天龍八部に阿須倫・眞陀羅を用ひ、又濡首と文殊師利とを幷用し、殊に本無の文字が澤山に用ひられてある。舊くは眞如を本無と譯したのもあるが、本經には眞如の語もあるから、本無は本際空無の意味であらう。又、數に姟の字を用ひてあるが、これは俱胝などに相當するものであらうかと思はれる。斯の如く古い譯字が用ひられ、而も表現形式が古いので、その意味の捕捉し難い所が出て來るのである。

本經は、僧祐の「出三藏記」の中に、十二卷として錄せられ、慧皎の「高僧傳」の中にも同樣に錄せられ、費長房の「歷代三寶紀」の中には十四卷として、或十三卷とせられ、智昇の「開元釋敎錄」の中には、房を承くる外に、或十六卷とし、一名現在報とし、第二出とし、見在とせられてある。されば本經の卷數には、或は十二卷あり、或は十三卷あり、或は十四卷あり、或は十六卷あり、一定してなかつたのである。

譯時は、房開の二錄共に建元十二年七月としてある。而して一名現在報の註は「開元錄」に於て初めてせられ、又第二譯といふのも「開元錄」に於て初めてせられた事が知られる。高麗本には十四卷四十五品に分たれ、宋元宮の三本には十二卷四十四品に分たれてある。今譯は麗本に從つた。その卷品を表記すれば次の如くである。

卷　一――普稱品第一　識定品第二　莊嚴道樹品第三
卷　二――龍王浴太子品第四　法門品第五
卷　三――識界品第六　諸佛勸助品第七　如來品第八

と謂ひ、毎に塋飾の文句を存して、その繁長を減ぜり」と言つてある。以て竺佛念の譯風が、力めて支那の風尚に適應せしめんとして、時に義辭を雜え、或は繁長を減ぜるを知るべきである。元來、佛敎が支那の學界に進出する樣になつたのは、譯者のこの加減頗る效果的であつたのであるから、符秦の頃までの譯業は、概ね斯の如くであつた。獨り竺佛念をのみいふべきでないと言つてよい。然し道安や法和の時代に來つて、一轉回が起り原文のまゝを傳ふる事を要求する樣になつたから、道安や法和はこの加減を欲せず、務めて原典のまゝならんを期して、阿毘曇や婆須蜜を更出せしむるに至つたのである。然し竺佛念の譯に、誤謬があるといふのでは無い、唯加減があるといふのである。

「瓔珞經」の翻譯は、建元十二年七月であつた。而して本經は更出せられてないから、本經の中には、道安の所謂義語を雜え、法和の所謂繁長を減じた事のあり得べきを想定してよい。本經そのものについて之を判別する事は出來ないが、この事を頭に置いて見ると、本末品の中に五十四法の不著空行を說かんと宣して、第一の五陰本空のみを說いてあるのは、或は他の五十三法を省略したものではなからうかといふ事に氣づかしめられる。本經には四十四品あるが、その長短頗る不同である。もと品名は原典になく、譯者が便宜の爲に之を安じたものであらうから、長短の出來るのも當然であるけれども、それにしても心・四聖諦・成道・生佛・本末・非有識非無識・光明・無想・有受・十智・應時・十不思議・無我の十三品の著しく短いのは、或はその中に省略せられたものがあるでは無からうかと思はれる。これは單に想像であるが、研究する場合にこの事を念頭に置く事も、必要な用意であらうと考へられる。然し法門品の中には「諸本少二第三法一」といふ註があり、如來品の中には「不レ了二梵本一、闕二一事一」といふ註があり、淸淨品の中には「經本從レ此已下少二七偈一。順レ本記レ之。譯人語也」の註がある程であるから、左程に加減したものでなく、成るべく原文のまゝを譯せんとした事も想定せられる。彼の評と此の註とを對照し來る時は、原文のあまりに簡潔の個所には義語を雜えた部分もあり、あまりに繁長な部分には省略を加へた部分もあるといふ程度のものであつたあらうと思つて、大過はあるまい。

本經は「開元錄」に於て第二譯と決せられた。第二譯といふのは、同じく竺佛念譯「菩薩瓔珞本業經」二卷に對して言はれるのである。この「瓔珞本業經」は、僧祐錄にては失譯雜經錄の中に錄せられ、房が之を竺佛念の譯とせるより、開も之に從つて同人の譯としたのである。「本業

王浴太子品や、十方法界品や、供養舍利品の中に、正しく見られる。卽ち道樹品の中に、過去無數劫の間捨てざりし十法として、慈・悲・喜・護・空無・明慧・廣大心・八百總持・無想定・諸根寂靜を說き、その修行の德力として、右足を擧げて第一步を行く中間に十法を修行し、左足を擧げて十根本義を、右足を擧げて地を蹈む時に神足十慧を、左足を擧ぐる時に十業を、七步に思惟十法を修すといふが如きは、釋尊が樹王下に至る時を言ふのである。又龍王浴太子品の中に、衆生の本淨なるにつきて、本淨自然、無形自然、人物自然を說き、而してこの空寂の法を說かば衆生は疑を起すであらうから、聖默然たるに如かずと思惟せられし時、こゝに寶瓔珞大子と怒害魔王との對立があらはれ、さて忉利諸天の供養によりて世尊は廣長舌相を出されたとあるのは、梵天勸請の事實を基礎とせるものである。猶又十方法界品に於ても、この事に說き及び、却後九十日にして般泥洹せんとして、昔を懷想し、當時成佛して摩竭國法樂講堂にありし時、十方の菩薩雲集して說法を勸進せりとて、こゝに百十五菩薩が大法瓔珞を說かんを勸請せるを叙してあるが、說法の勸請を描いたものとして、斯くまで華麗なものはあるまいと思ふ。而して又供養舍利品に於て、法身と色身と全身舍利の供養の功德を校量して法身供養の功德を高潮するは、舍利八分の事實より肉身法身の對立に說き及んだもので、また佛傳を豫想して興味を惹くものである。却後九十日般泥洹せんとあるのは、「遺教經」を說かんとせられた時の事であつて、釋尊末後の說法の意味がこもつて居る。末後說法の點は「法華」や「涅槃」に共通したものであつて、また成道最初の說法勸請は「華嚴」に脉絡するものである。

二、傳　譯

竺佛念は、凉州の人、家世々西河にあり、方語に洞達して華戎の音義を兼ね釋し、符秦の建元年中に、曇摩持や、鳩摩羅摩提や、僧伽跋澄や、曇摩難提等やが來つて長安に入るや、釋道安・趙政等が、是等諸三藏に請うて、衆經を出すに當り、竺佛念は建元元年（西曆三七六）を以て長安に迎へられ、推されてその譯業に從ふ事となつた。二「阿含」の初めて顯はれたのは、全く竺佛念の功で、安世高や支讖以後の第一者と稱せらるゝまでに至つたのである。然しその業績に關して、道安の阿毘曇序には、竺佛念の譯傳について、「頗る義辭を雜え、龍蛇淵を同じくし、金鍮肆を共にす」と酷許し、未詳作者（竺法和ならん）の僧伽羅刹經後記には、「竺佛念、學內外に通じ、才辯奇多し、常に西域の言の繁質なるを疑ひ、此土を華を好む

菩薩瓔珞經解題

一、經　題

經題は、高麗本には「菩薩瓔珞經」とあり、其下に「一名現在報」と夾註せられてあるが、宋本宮本には、その上に「佛說」の二字を冠じ而してこの夾註がない。譯主を高麗本には「姚秦涼州沙門竺佛念譯」としてあるが、明本には「涼州」の二字がなく、又宋本宮本には沙門の下に「三藏」の二字を加へ、而して又元本には「第二譯」としてある。南條目錄には、西藏々經には缺としてある。譯主と第二譯については、後に讓りて、さて經題の菩薩瓔珞とは如何なる意味を有するであらうか。

菩薩とは成道以前の釋尊を指し、その觀念は、本生經に於て發達したのであるが、この菩薩が、佛陀を通して來る時に、佛陀と菩薩との間に限界がなくなり、判然と應現の意味を含まぬにせよ、求道者としてのみのものでなくなる。本經の菩薩も、語そのものとしては成佛以前の釋尊を指すのであるけれども、佛陀を內含した未成佛の菩薩であるから、本經に於ては、終始を通して佛と同格に用ひられて居る。三界品の中に「佛及菩薩道、便生二一見一……便墮二邪部一」といひ、「無二佛修二菩薩道一」といふのは、佛道と菩薩道とを一如として居るのであつて、この佛は釋尊でもあり、又一般的佛陀でもある。人間としての釋尊が、一般化して斯る意味の菩薩となり、佛となるに至つては、早や人間の域を超えて、普遍の內容を取るに至るのである。

瓔珞とは他經に用ひられる莊嚴の語に相當するものであらう。本經は、題號に瓔珞を有するだけあつて、瓔珞の語が實に夥しく用ひられて居る。最初の普稱品の中には、法瓔珞として心意・堅心・自順・言辭・無極の五瓔珞を說き、識定品の中には意識瓔珞の問に應じて、戒品・識定・精進の瓔珞を說き、法門品の中には、十種の六法清淨瓔珞を說き、無識品の中には總持・種姓・善權・化生・淨敎・法身・受入・衆生・滅度・生盡・無量・劫數・知生・道德・大乘・解脫・法王・無厭・文字・法界・法本・法性・弘誓・眞如・清淨・無礙・法起の二十七瓔珞を說くが如きがそれである。これ等すべてを大法瓔珞の語の中に攝し來つて、この大法瓔珞を說く所に、本經の經名が起るのである。

菩薩瓔珞といふのは、菩薩としての佛陀卽ち釋尊を取扱つたものであるから、本經の背後に佛傳が伏在する。本經の背後に佛傳の存する事は、莊嚴道樹品や龍

る者の微塵數の衆、佛の所說を聞いて、皆大いに歡喜し信受奉行す。

大乘密嚴經（終）

で佛體清淨を成じて　諸天の欣仰する所なり。　初菩薩位より　或は轉輪王と作り、　或は乾闥婆に主とし、　阿修羅王等として　大乘法を了悟して　如是身を獲、　漸次に修行して決定して成佛するを得。　是の故に諸佛子　宜しく應に一心に學ぶべし。[一五一]所有の雜染の法も及び清淨の法も　恒に生死中に於て　皆賴耶に因つて轉ず。　此の因勝れて比なし　證實者は宣示す、　能作自在等と　相似たるに非ず。　世尊の此の識を說きたまふは　諸の習氣を除かんがためなり。　清淨に了達するも　賴耶は得べからず、　賴耶若し得べくんば　清淨は是れ常に非ず。[一五二]如來清淨藏は　亦無垢智と名く。　常住にして終始なく　[一五三]四句の言說を離る。[一五四]佛は如來藏を說いて　以て阿賴耶と爲す。　惡慧は藏の卽ち賴耶識なるを知る能はず。　如來清淨藏と　世間の阿賴耶とは　金と指環の如く　展轉して差別なし。　譬へば巧金師の　淨好眞金を以て　指嚴具を造作し　以て指を莊嚴せんと欲するが如し　其の相衆物に異るを　說いて名けて指環と爲す。　現法樂の聖人は　自覺智境を證し、　功德轉た增勝して　自も共も能く說くなし。　現法の諸定者は　境の唯心に了達して　第七地を得て　悉く皆轉滅す。　心識の緣ずる所の一切の外境界は　種種の差別を見るも、　境なく但唯心のみ。　瓶　[一五五]依等の衆幻は　一切皆あることなし。　心變じて彼に似て現れて　能取所取あり。　譬へば星月等の須彌に依つて運行するが如し。　諸識も亦復た然り。　恒に賴耶に依つて轉ず。　賴耶卽ち密嚴にして　妙體本と淸淨に　無心亦無覺にして　光の潔きを眞金の如し。　分別を得べからず性と分別と離れ　體實に是れ圓成するを　瑜伽者當に見るべし。　意識境を緣ずれば　但愚夫を縛するのみ、　聖見れば悉く淸淨なること　猶ほ陽焰等の如し。』と。

[一五六]爾の時に世尊、是の經を說き已るや、金剛藏等の無量の菩薩摩訶薩、及び他方より此の會に來れ

【一五一】惡分別の問に答ふ。

【一五二】外疑を釋通す。

【一五三】四句言說。諸法を分別するに有空等の四句あり。一有門二空門、三亦有亦空門、四非有非空門なり。

【一五四】佛說如來藏。この四行は、唯識家の如來藏阿賴耶の別體說に對して、華嚴家の同體說の主張の根據とせらるゝ所にして、佛性論研究者の大に注意せるものなり。

【一五五】依。衣の誤なるべし。

【一五六】第三流通分なり。

ゆべき。已に[一四〇]堪任する者を見るに、皆諸佛の子なり。』即ち時に告げて言はく、『汝等當に諦聽すべし。我れ今汝が爲に轉依の妙道を說かん。我れ諸佛子他化自在衆の爲に以て三摩地を得たり大乘[一四一]威德と名く、此の定中に住して清淨の法眼を演べん。亦億塵刹の所有の諸の善逝[一四二]那庾多塵億なるが前に在りて讃歎するを見る「善い哉汝が所說や、此は是れ瑜伽道にして我等悉く皆是の如き三摩地に行く。斯に於て自在を得れば清淨にして正覺を成ず、十方一切の佛皆此の定より生ず。當に知るべし最殊勝にして思量の及ぶ所に非るを。若し諸菩薩あり此の定中に住するを得ば、即ち不思議諸佛の境界に住し、自智境を證し三摩地佛を見る。變化すること百千億乃至微塵の如し。自覺聖智の境は諸佛の安立する所なり。此の法は諸相なく聲色を遠離す。[一四三]名は相より生じ相は因緣より起る。此の二は分別を生ず。諸法の性は如如なり、斯に於て善く觀察する是を名けて正智と爲す。名は遍計性なり。相は是れ依他起なり。名相を遠離するを、是を第一義と名く。[一四四]藏識は身に住し隨處に流轉し習氣は山積の如く[一四五]染意に纒はる。[一四六]末那に二門あり意識して同時に起る。五境は現前に轉じ諸識身和合す。猶ほ我人ありて身內に住在するが如し。藏識の暴流水は境界の風に飄はされ種種の識浪生じて相續して恒に斷ゆることなし。[一四七]佛及び諸佛子は能く法無我を知り、已に如來を成ずるを得て復た人の爲に宣說す。[一四八]諸蘊を分析して人無我性を見るも法の無我を知らざるを、是を說いて聲聞と爲す。菩薩所修の行は善く二無我に達し觀已つて卽便ち捨てゝ[一四九]實際に住せず。若し實際に住せば便ち大悲心を捨て功業悉く成ぜず正覺を成じて希有の難思智もて普く諸の有情を利するを得ず、[一五〇]蓮の淤泥より出でて色相甚だ嚴潔に諸天聖人等之を見て愛敬を生ずる如し。是の如く佛菩薩は生死の泥より出

【一四〇】堪任。麗本には任字を住に作るも、「他の三本には任に作る。地婆譯にも任とし堪とす。
【一四一】威。「麗本には成と作し、地婆譯も他の三本も威に作る。
【一四二】那庾多(Nayuta)億。
【一四三】五法の間に答ふ。
【一四四】八種識境界性不同の間に答ふ。
【一四五】染。麗本深に作り、地婆譯も他の三本も染に作る。
【一四六】末。麗本求に作り、地婆譯も他の三本も末に作る。
【一四七】無我の間に答ふ。
【一四八】諸。麗本は說に作り、地婆譯も他の三本も諸に作る。
【一四九】不住。不住涅槃をいふ。
【一五〇】微妙法の間に答ふ。

せず、所有の諸の音聲は 但本願力に由るのみ。 眉額及び頂より 鼻端、肩と膝とまで猶ほ變化の自然に 妙音を出すが如く、普ねく諸の大衆の爲に 法眼を開示す。 勇猛金剛藏 自在宮に住し、 最勝子圍遶し 清淨にして嚴潔なり。 鵝王の[134] 地に在るや 群鵝の翼從するが如く、 大定金剛藏 師子座に處れば、 一切所有の 修行人を映蔽すること、 猶ほ月の空に在りて 列宿に光映するが如く、 月と光明との 差別あることなきが如く 金剛藏の威德と 佛とも亦復た然り。』

[135]爾の時に如實見 菩薩の大力あり 修行中の最勝にして 瑜伽道に住するもの 卽ち座より起ち 大衆を觀察して言はく、

『奇なる哉大乘法 如來微妙の境や、 一切佛國中の 佛子應に頂禮すべし。・無思離垢の法は 諸佛の觀察したまふ所、 希有甚だ微密なり。 大乘淸淨の理は 惡覺の境界に非ず 轉依の妙道なり。 八種識差別し 三自性同じからず 五法、二無我 各各開示す、[136]五種智の緣ずる所 諸の妄分別を生ず、 此の微妙法を見るに 淸淨なること眞金の如し、 眞性を得る者は 則ち[137]佛の種性に住す、 如來性は微妙にして 聲聞外道を離る。 密嚴は諸刹の勝なる 證者乃ち能く往く。 尊者金剛藏 已に何の等持をか得たる。 所說の淨法眼は 是れ何の等持の境なるや』と。

時に無量の菩薩 復た金剛藏を禮すべく、

『大智金剛尊 願はくは我が爲に開演したまへ。 何の三摩地に住して 能く是の法を說くや、 此の諸の佛子等 一切皆聞かんと樂ふ』と。

爾の時に[138]金剛藏 自在宮殿に處りて 大會を觀察し 自ら心に念言すらく、

『此の法は不思議にして 十力微妙の境なり、 慧に由つて持せらる。 [139]誰か當に聽受するに堪

【一三四】地。他の三本には池に作る。

【一三五】**第八節、如實見等金剛藏に對して大乘三昧を問答分別す。**

【一三六】五種智。四諦に迷ふ及び修所斷を言ふ。

【一三七】住佛性。眞如は諸佛の體性にして、初地に始めて得、之を住佛性といふ。

【一三八】金剛藏菩薩の答。

【一三九】誰、麗本には離に作り、他の三本には誰に作る。

して善く能く觀行の心を開示するもの、倶に座より起ちて互に相觀察し、金剛藏菩薩摩訶薩に問うて偈を說いて言はく、

[127]金剛自在尊　能く法眼を示したまへ、　諸の加護する所、　菩薩皆宗仰す。　善く地相に達して　巧に能く建立す、　佛子大力衆　心を同じうして皆勸請す。　定王願はくは哀愍して　密嚴に於て　佛及び佛子等の　甚深奇特の事を顯示したまへ。　[128]此の法最も清淨にして　言說を遠離し　化佛諸菩薩の　昔未だ開敷せざりし所。　自覺智の所行にして　眞無漏界を見、　微妙の現法樂　清淨にして最も無比なり。　衆の三摩地　無量の陀羅尼　諸の自在解脫　意成身の十種を具す。

[129]殊勝色清淨にして　法界を照明する　善逝は不思議なり　嚴刹亦是の如し。　佛及び諸菩薩は　身量極微の如く　乃至毛端の　百分中の一の如し。

[130]密嚴の殊妙刹は　諸土中の嚴勝なり。　是の如く觀行者　咸く來つて此の中に生ず、　是れ皆何の所因ぞや。　佛子願はくは宣說したまへ』と。

[131]爾の時に金剛藏　菩薩摩訶薩、身は師子[132]臆の如く　三十二相を具し　隨好を以て莊嚴し將に廣く開示せんと欲し、　彼の大會を觀察するに、　猶ほ師子王の如く、衆の古仙佛の秘旨を　聽聞するに堪ふるを知り、『我れ今法眼を演べん　能所覺を離れよ』と。

金剛藏卽ち　清淨梵音の聲　[133]迦陵頻伽の聲　廣長舌相の聲　巧妙にして麁擴なき　世間稱歎の聲　廣略美暢の聲　克く鐘律を諧にするの聲　高語明徹の聲　乾駄羅中の聲　雄聲と直聲と蜀尸迦哀の聲　歌詠相應の聲　急聲及び緩聲　深遠和暢の聲を發し　一切皆具足す。　衆德以て相應し　之を聞くに著を離れ　心に厭倦あるなく　一切皆欣樂す。　悉く能く盡く通達し所有の音聲の相　自然にして普ねく應じ　無作無功用なり。　金剛藏菩薩　口に未だ曾て言說

【一二七】一に勸請。

【一二八】二に所說の法を嘆ず。

【一二九】三に大衆の德を嘆ず。

【一三〇】四に密嚴の勝德を嘆じて、請說を結ぶ。

【一三一】一身は金剛藏の說。

【一三二】臆、胸。

【一三三】迦陵頻伽 (Kalaviṅka) 鳥の名。好聲鳥、和雅鳥と譯す。

『佛子に大力あり　譬へば[二二一]毘嵐風の如く、　聲聞に定智なきこと　黒山の搖動するが如し。惑分別を離ると雖も　尙習氣の泥に染み　實際を分證するのみ　未だ諸習を斷ぜず。　若し諸の[二二二]麁重を捨つれば　必ず當に菩提を得べし。　汝、微細の境に於て　巧慧もて諸論を具し、[二二三]帝釋世間の明　彼の法に於て通達し、　及び緊那羅論　如來淸淨の理　善く諸地の相に於て明了にして決定す。　寶殿中に端居して　眷屬共に圍遶し、　光明の淨嚴好なる　猶ほ盛滿月の如し。　觀行自在を得　衆に處りて能く問答し、　我に界丈夫の　云何が心より起るやを問ふ、　汝及び諸佛子　咸く應に一心に聽くべし。』

其の諸界內の如き　心を名けて丈夫と爲し、　諸界は此に因つて生ず　是の義我れ當に說くべし。　津潤は水より生じ　焰盛は火より生じ　諸の作業を動搖して　斯に因つて風界を起す。　色の分齊に從つて　虛空及び地あり。　識と諸の境界と　習氣と能く身を生じ　眼及び諸色等　相狀各同じからず。　此の無門作門より　諸有恒に相續す。』と。

[二二四]時に摩尼寶藏　自在宮殿の　持進大菩薩と　諸の最勝子と、　倶に是れ座より起ち　稽首して禮を作す。　各妙供具を持して　金剛藏を供養し、　覆ふに寶羅網を以てし　聲を同じうして佛を讚す、　聖者善く　菩薩の法雲地に安住し　如來境に悟入し　應現して實に量り難く、能く諸大士の爲に　佛知見を開示すること。

時に[二二五]緊那羅王　幷に諸の綵女等　供養して讚歎すらく、

『金剛藏無畏　摩尼寶宮殿　嚴淨勝道場にて　我等の爲に　如來微妙の法を開演したまへ』と。

[二二六]爾の時に聖者觀自在菩薩摩訶薩・慈氏菩薩摩訶薩・得大勢菩薩摩訶薩・曼殊室利法王子菩薩摩訶薩・神通王菩薩摩訶薩・寶髻菩薩摩訶薩・天冠菩薩摩訶薩・總持王菩薩摩訶薩・一切義成就菩薩摩訶薩・是の如き等の菩薩摩訶薩、及び餘の無量の勝定を修する者、皆是れ佛子にて、威德自在、決定無畏に

【二二一】毘嵐（Vairambhaka）暴風の名。

【二二二】麁重。地婆譯には習氣に作る。

【二二三】地婆譯には帝釋世間明及び緊那羅論の句に相當するものなく、簡明にして意義通ず。

【二二四】**第六節、持進及緊那羅王、金剛藏を供養す。**

【二二五】緊那羅王の供偈讚。

【二二六】**第七節凡大菩薩密嚴土の功德を問答分別す、**これに四あり。

の理は　喩に因つて開敷せらる。我れ密嚴を現じて　今汝が爲に宣説せん。密嚴は甚だ微妙にして　定者殊勝の處なり』と。

一九
爾の時に金剛藏　是の如きの語を説き已つて、復た大樹緊那羅王に　告げて言はく、
『大樹緊那王　汝應當に觀察すべし。云何が諸の法性　性空無所有なるや、是の如き見相應は　定に於て迷惑せず。飯の一粒熟せば　餘粒卽ち知る可きが如く、諸法も亦復た然り一を知れば卽ち彼を知る。譬へば攢酪者の　之を嘗むるに指端を以てするが如し、是の如く諸の法性は　一を以て觀察すべし。法性は是れ有に非ず　亦復た是れ空に非ず、藏識の所變にして　藏は空を以て相と爲す』と。

二〇
大樹緊那王　卽時にして向うて曰はく、
『云何が心量中に　界丈夫あるぞ。云何が諸界の　堅濕及び煖動を生ず』と。
爾の時に金剛藏　菩薩摩訶薩　其の所説を聞き已つて　是の如き言を告ぐ、
『善い哉大樹王　能く甚深の問を發して、修定者をして　眞實に詣るを得しめんを願ふこと。
我れ今汝が爲めに説かん　琴師應に諦聽すべし。汝、昔、自他化にて　諸眷屬と倶なりき、鼓樂空より來り　寶宮殿に乘じ　是の如き諸の天侶と　同じく佛會に詣れり、妙寶琴を撫奏して　其の聲甚だ和雅なり。聲聞の會に在る者　各遞に相謂つて言はく、
『我れ樹王緊那衆の遊戲し、及び所乘の宮殿の　妙寶以て莊嚴するを見るを樂しむ』
汝、琉璃琴を奏するや　衆心皆悦動し　迦葉聲聞等　覺えず起つて舞ひ、妙音和樂に由つて本心を持する能はず。時に天冠菩薩　迦葉等に告げて言はく、
『汝等離欲の人　云何にしてか舞戲する』と。
是の時大迦葉　彼の天冠士に白す、

【一九】第五節、金剛藏緊那羅王に對して性空無所有を問答分別す。

【二〇】緊那羅王の問答辨了。

る　六界の淨丈夫は　但是れ諸界の合して　因に隨つて以て流轉するのみ。　譬へば衆の飛鳥の　空中に其の跡を現はすが如く、　又木を離れて　火の熾然を得るが如し。　空中に鳥跡を見　木を離れて火あるは、　我及び諸の世間に　未だ曾て是の事を覩ず、　鳥飛ぶに羽翰を以てし　空中に跡あるなし。　仁者は丈夫と　鳥跡との相似たるを說く。　云何が諸有に於て輪廻の義あるを得、　而して界丈夫の　常に生死に流轉して　諸の苦樂の果を受け　所作の業失なきを說く。　農夫の作業の　功必ず唐捐せず、　此の果成熟し已つて　能く後果を生ずるが如し。　身は身中に於て　善行を修し　前生後生の處に　恒に人天の樂を受く。　或は常に福德を修し　資糧もて佛因と爲し、　解脫及び諸度もて　無上覺を成ず。　生天して自在果あり　觀行して眞我を見、　若し趣丈夫を離れば　一切悉くあることなし。』

業業の果報に於て　所作に虛棄なし、　下阿鼻獄より　上諸天に至るまで　趣丈夫有りて　生死に流轉するを謂ふ。　內外の諸世間は　[二四]種　[二五]牙を生じ果を生ずるなり。　此の法彼に似彼れ此より生ず。　若し趣丈夫を離れて　輪廻あるを得ば、　石女の子の　威儀にして進退し、　兎角に銛利あり　沙より油を出すと言ふが如し』と。

[二六]會中の諸菩薩　諸天及び天女　是の如きの語を說き已つて　應供者　即ち金剛尊　及び諸菩薩衆に供養す、　供養の事畢已りて　同じく是の如き言を作す。

『法眼具して缺くるなく　喩に因つて皆莊嚴し、　能く諸の異論　外道の諸宗の過を摧き、　既に他を降伏し已つて　自宗を顯示す。　是の故に大勇猛なり、　宜しく速かに開演を爲すべし。
我等咸く聞かんを願ふ、　大慧者應に說くべし』と。

[二七]爾の時に金剛藏　菩薩摩訶薩　[二八]問諸、天の殷請に　即時に告げて言はく、
『汝等諸天人　一心に應に諦聽すべし。　此の法は深難思なり　分別は及ぶ能はず。　瑜伽清淨

供養。

【二四】牙。他の三本には芽に作る。
【二五】種現牙生果、この一句地婆譯には五力而生起と作す。
【二六】四、菩薩諸天等の請問。
【二七】五、金剛藏菩薩の答。
【二八】問。聞の誤ならん。

と倶に 生死を增長し 轉依して正覺を成ず。
[100]善く淸淨行を修して 十地を出過し、 佛地中に入りて 十力皆圓滿す。 正に實際に住して
常恒に壞滅せず、 種種の變化を現じつゝ 地の分別なきが如し。 春の衆花の色の 人鳥
皆欣翫する如し、
[101]執持識も亦然り [102]定者は多く迷取す。 是の如く諸の佛子 慧なく眞實を離れ 義に於て善く
知らざれば [103]妄言し決定を生ず。 非法離間の語 有情を誑惑し、 [104]諸法別異に住し [105]別に言
說を起す。 [106]譬へば工幻師の 善く呪術を用つて、 亦種種の花を現はすも 花果實にあるこ
となきが如し。 是の如く佛菩薩は 善巧智の方便もて 世間に別異に住し 別異にして變現
し、 種種の教門を說き 誘誨するに窮已なくして、 決定眞實の法もて 密嚴中に顯現す。
[107]六界と十八と 十二處は [108]丈夫の 意繩に牽かれて 有情以て流轉す。 八識の諸界處 共
に起つて和合し、 意繩に從つて轉じて 前身復た後身あり。 此の流轉の丈夫は 世因に隨
つて示現し 是の一切身は 續生して斷絕なし。
[109]『六界の丈夫と 及び十二處 十八界の意行を 說いて自在者と爲す。』と。
[110]爾の時に金剛藏 菩薩摩訶薩 諸界處の 丈夫の義を說き已るや、
[111]他化淸淨宮 摩尼寶藏殿の 諸の無畏佛子 悉く皆稽首禮す。
[112]他方の佛菩薩の 來りて此の會に居する者は 悉く皆共に同聲に 讃して「善い哉」と言
ふ。
[113]復た諸菩薩 諸天及び天女あり 皆本座より起つて、 合掌し一心に敬ひ 遞に共に相瞻顧し
て 是の如き言を作す、
『定中の上首尊 善く諸菩薩の爲に 妙丈夫の義を說きて 外道の論を遠離す 最勝子の宣示す

【一〇〇】**第四段、金剛藏の答。**前間中の定所待緣に答ふ。初二行、定所待緣。次二行、出二定體一次六行、釋二定障一
【一〇一】執持識。阿賴耶識の異名。
【一〇二】定者。凡夫二乘の修觀者。迷とは二乘、取とは凡夫なり、心外の諸法を執しつゝ、修定するが故に迷取といふ。
【一〇三】妄言。言の理に當らざるをいふ。生決定。自を執し他を非するをいふ。
【一〇四】別異住。三世は有法、各自性を守りて雜亂せざるをいふ。
【一〇五】別言說。小乘を揚げて大乘を謗るをいふ。
【一〇六】**六行、定行現用、亦名釋所以。**
【一〇七】自下**六行は定行顯法。**
【一〇八】丈夫。亦士夫といふ。靈魂の事なり。
【一〇九】この一偈二行は地婆訶羅になし。
【一一〇】**第四節、大衆の聞法修行併養。これに五分あり、**
【一一一】一、已得無畏菩薩の身業供養。
【一一二】二、他方來菩薩の口業供養。
【一一三】三、菩薩諸天等の妙法

の如く　本來自性なし、　貪愛の繩に繫縛せられ　境界に牽動せらる。　微妙の空理を說いて　爲に諸見を淨む、　其れ智慧ある人は　應當に一心に學ぶべし。　譬へば工幻師の　諸の呪術力を以て　草木等の衆[九二]數　隨意に作らるゝ如し。　根及び愛色明と作意とに依りて[九三]眼識を發生するも　實なきこと幻焰の如し。　是の識は來處なく　亦餘方に去らず　諸の識性皆爾り[九四]有無に著すべからず。

[九五]毛輪兎角及び　石女兒の如し、　本來體あることなきに　妄に名字を立つ。　師子虎熊羆馬驢駝の類　黿龜と瑇瑁と　彼等は皆角なし、　何故に分別せざる、　唯兎に角なしと言ふ。[九六]最勝談論の人　云何ぞ成立せざらん。　慧者の爲に顯示するを　但彼れ妄に分別し、　外道衆の迷惑すること　瘖及び聾瞽の如し。　彼に超度の智なく　亦內證の法なく、　但他語に隨つて轉ずるのみ、　何を用つて分別する事を爲ん。　若し妄に分別を起せば　密嚴に生ぜざるも定者にして等至を獲ば[九七]及び能く此の國に生ず。

[九八]譬へば天宮殿の　日月及び衆星の　妙高山を環遶するに、　皆風力に由つて轉ずるが如し。七識も亦是の如く　阿賴耶に依り　習氣の持する所　處處に恒に流轉す。　譬へば大地に依つて　能く卉木の類　一切の諸の有情　乃至衆の珍寶を生ずるが如し、　是の如く賴耶識は　衆識の所依なり、　譬へば孔雀[九九]鳥は　毛羽に光色多く　雄雌相愛樂し　鼓舞して共に歡遊するが如し。　是の如く阿賴耶の　種子及び諸法の　展轉して相依りて住するを　定者は能く觀見す。」

譬へば百川注いで　日夜大海に歸するに　衆流に斷絕なく　海も亦分別せざるが如し、　是の如く賴耶識は　甚だ深くして涯底なく　諸識の習氣　日夜に常に歸往す。　地に衆寶あり　種種の色相殊に　諸の有情の受用の　福に隨つて招感する如し、　是の如く賴耶識は　諸の分別

【九二】數。他の三本には緣に作る。
【九三】眼識。大正藏には明識に作る。地婆訶譯を見るに眼識なり、色・明作・意等によつて起るものは眼識ならざるべからず。
【九四】大正藏はこの一句を、有無不變著に作る。變の字僻し離し。地婆訶譯を見れば不應著有無とあり。變は應の誤寫なるべし。
【九五】**四に外人の疑を通釋す。**
【九六】この下の賢首の釋に脫文あり。
【九七】及。乃字の誤りか。
【九八】**第三段、金剛藏の答。**於何所定に答ふ。
【九九】鳥。大正藏誤つて烏に作る。

び意識　有情の阿賴耶　普ねく世間に現ずること　幻師の物を造るが如し。　若し能く唯識に入れば　是れ則ち轉依を證し、　若し空性を說けば　則ち相唯識を知る。　瓶等は本と境なく體相皆心の作なり。　瓶に非ずして瓶に似て現ず、　是の故に說いて空と爲す。　世間所有の色　諸天等の宮殿　變異して見る可し、　皆是れ阿賴耶なり。　有情身の所有　頭より手足に至るまで、　頓生なるも或は漸次なるも　阿賴耶に非ざるなし。　習氣の心を濁すを　凡愚は了る能はず。

[八四]此の性は是れ有に非ず　亦復た是れ空に非ず。　人の諸物を以て　瓶等を[八五]擊破するが如し、物體若し是れ空なれば　即ち能所破なし。」

[八六]「我」は妙高山の如くなるも　此の見未だ礙と爲さず。　憍慢にして空に著せば　此の惡は彼に過ぐ。[八七]自處を相應と爲す　非處は說くべからず、　若し非處を演ぶれば　甘露即ち毒と爲る。一切の諸の有情は　種種の見を生ず、　諸見を斷ぜしめんと欲して　是の故に空理を說く。空を聞いて執して實と爲せば　諸見を斷ずる能はず、　此の見除く可からざること　[八八]病醫に捨てらるゝが如し。[八九]譬へば火の木を燒くに　木盡くれば火留まらざるが如く、　見木若し已に燒けば　空火亦應に滅すべし。　諸見滅するを得る時　智慧の火を生じ、　普ねく煩惱の薪を燒いて　一切皆清淨なり。　牟尼は此の智を以て　密嚴にして解脫す。

[九〇]兎角を以て　大山を觸壞するを見ず、　曾て石女兒の　箭を執つて物を射るなし。　未だ聞かず鬪戰せんと欲して　兎角の弓を求むるを　何ぞ石女兒あつて　能く宮室を造らん。　一切法は空性にして　法と常に同體なり、　始め胎藏の時に於て　色生じて便ち壞滅す。　空を離れて[九一]色あるなく　色を離れて空あるなし。　月と光明との　始終恒に異らざるが如し。　諸法も亦是の如く　空性之と一なり、　展轉して差別なく　所爲皆成ずるを得。　是の身は死屍

【八四】自下四十一行、「唯兎に角なしと言ふ」まで、後段、空慧の執を破す。これに四あり。**初に中道の理を擧げて破す。**

【八五】大正藏には繫破に作るも、地婆譯に對照して、明に擊破なるを知る。

【八六】「我れ妙高山の如く」より以下「定者は能く觀見す」までは空理を說いて正道を示し捨邪就正を勸む。

【八七】自處爲相應、不應非處說の二句、地婆譯にては空性隨應說、不應演非處と作す。非處は自處を否定せんが爲のものなれば、說くべからずといふなり。

【八八】病醫。麗本には病醫に作り、地婆譯も三本も病醫に作る。ここは醫ならざるべからず。空は諸見を治する醫藥なり。その空は見病去る時に不用となる。若し之に執せば、之を治すべき醫藥なしといふなり。

【八九】**二に空見者が空智を願すと執するを破す。**

【九〇】**三に空見の執を捨てんを勸む。**

【九一】色、麗本には滅に作り、地婆譯にも他の三本にも色に作る。

然り、空中の虹霓 雲霞等の衆彩の如し、[七五]思惟は骨瑣の如く 世間に遍滿す。及び遍處の想觀に 諸大等を觀じて 身に色ありや色なきやを、定者は常に諦思す。若し一心を緣ずるに於ては 卽ち緣を淸淨と說くも、其の分別する所の如きは 卽ち彼れ所緣を成じ、定に非ず定者に非るを 妄計して以て定と爲す。定者は定中に在りて 世の皆藏識なるを了り、法及び諸の法相を 一切皆除遣す。勝定を獲たる者は 善く諸定を說いて 諸の定を修する人の 妄智もて知る所の法を破す。若し人劣慧を生じ 法及び我を取りて 自ら誠諦の言もて、善く巧に諸法を說くと謂ひ、諸法の相に計著せば、自ら壞し亦他を壞し 能相所相なきに 妄に差別見を生ず。

[七六]甜味は能く熱を除き 苦酸鹹は[七七]痰を止む 辛味は冷を除いて 鹹能く風疾を已む。黄痰變異するが故に 共に瘧病を生じ、或は時に但風に因り、或は三和合に因りて、疾に旣に差別あり。[七八]古仙は衆方を設け 石蜜等、六分 沙糖及び諸味もて 能く有情身の 種種の諸の瘧病を除く。若し法に自性 及び諸相あれば、藥に除病の能なく、病者應に差ふべからず、云何ぞ世は咸く 服藥して病の消除するを見ん。

[七九]定者は、世間は 但是れ賴耶識の 變異して相續すること、譬へば衆の幻獸の如しと了す。能相所相なく 蘊及び蘊者なく 亦支分の德及び 支分あることなし。世間に能作なく 亦所作あることなく、塵積の世間なく 方處に往く者なし。初最の微細の 漸次に一指の如く、乃至三指量の [八〇]寶物轉じて和合するなり。[八一]求那の各差別 是の如きの義皆無し。勝性の世を作るに非ず、亦時の能く生ずるに非ず、愛樂性[八二]及び 三法の所作に非ず。亦因あるなくして 自然にして有るを得るに非ず。

[八三]斯の業の習氣 内心を擾亂するに由りて 心及び眼根に依つて 種種に妄に分別し、意及

【七五】思惟以下の三頌は、二乘定を說く。骨瑣とは八勝處觀なり、遍處想觀とは十一切入なり。

【七六】**有執の法性を破す。**

【七七】止痰。麗本は上淡と作す。地婆譯も三本も止痰と作す。

【七八】古仙。良醫の意。

【七九】**十二行、正を擧げて外道を非す。**

【八〇】寶。他の三本には實に作る。

【八一】求。他の三本には末に作る。

【八二】及。麗本には乃に作り、地婆譯には及と作す。及の方可なるべきを以て、今之に改めたり。

【八三】**十三行、唯識の道理を示して以て有執の破を結ぶ。**

此の衆咸く一心に　復た更に重ねて思惟す、
『何者か是れ定なる　云何が非定と爲ん、　復た何に於てか所定たり　又復た何の法を以てか定の所待の緣と爲る。
彼の諸の佛子等[六四]復た何の所定に於て　三摩地力を以て　密嚴土中の　淸淨最勝子を見るに、菩薩衆の王は　首に寶冠を戴き　三十二相及び　隨形好を具し　嚴飾を作す。　彼の諸佛子等　悉く皆定より起ちて　微妙の寶瓔を挂け、　無量の佛土より　此の會に來り、　同じく共に一心を以て　金剛藏を瞻仰す。
[六五]大力瑜伽尊　彼等が皆思惟するは　法樂を得んと請ふを。
[六六]金剛藏見已つて、　周ねく四方を顧み　和雅音を發し　微笑して告げて曰はく、
『[六七]汝等諸佛子　一心に咸く諦聽せよ。　瑜祇定の境界は　甚深不思議にして　分別の知る所に非ず、　定及び緣も亦爾り。
[六八]欲不善及び　諸の散動を遠離して　尋、伺の喜樂あり　寂靜にして初禪に入る。　是の如く漸く次第に[六九]四[七〇]八より[七一]十に至る。
[七二]著我の諸の外道は　常に此の定を修習す、　聲聞、辟支佛も　亦復た皆是の如し。　各世間の諸法の自相を知れば　蘊處は空聚の如く　一切皆無我なり。　思なく動作なく　但、三和合して生じ　機關起屍の如く　本と能作者なし。　外道は此の定を修して　空性見を起し　此の人、法相に迷つて　一切法を壞す。　若し佛の妙定を修し　善く蘊の無我なるを知れば、卽ち勝福聚を發し　諸の惡見を滅除す。　一切皆唯心にして　能相所相なく　界なく亦蘊なく一切皆無相にして　分析して極微に至るも　此れ皆所住なし。[七三]愚夫は妄に彼の　地水等の性を分別す、　其の性を知らざる者は　是の如きの相を取る。　妙色及び惡色[七四]似色、　餘も亦

【六四】復於何所定。この句に相當すべきもの、地婆譯にては作是念已と作す。
【六五】この一偈、地婆譯にては金剛藏菩薩摩訶薩、周顧四方見諸大衆便生覺念、將欲說法と作す。本譯には大力瑜伽尊、彼等皆思惟、得法樂而請金剛藏見已と作す。本譯文の主客、辯じ難し。
【六六】自下、**金剛藏菩薩の答**。これに定、非定、何所定、定所緣に答ふるの四段あり。
【六七】「汝等諸佛子」より以下「卽ち能所の破なし」までは外道小乘の偏見を破し大乘唯識の正理を示す。
【六八】**第一段、定の問に答ふ。**
【六九】四、四無量定を指す。
【七〇】八。八勝處或は八解脫を指す。
【七一】十。十一切入を指す。
【七二】**第二段、非定の問に答ふ。**この段頗る長し、大體有空の二執を破して、唯識の道理を示すにあり。先づ初に外所を擧げて正を示す。
【七三】**他宗の邪執を破す。**これに有執と空執とあり。先づ有執の法相を破す。
【七四】似色。賢首は無作色を似色とし、無記色を餘色とす。

[五七] 意等の諸轉識は　心と共に生じ　五識は復た更に　意識に依つて因起し　是の如く一切時に大地と倶に轉ず。

[五八] 頼耶は愛の爲に　熏ぜられて增長し、　既に自ら增長し已つて　復た餘識を增し、　展轉して斷絕せざること　猶ほ井輪の如し。　諸識あるを以ての故に　衆趣に生起し、　是の諸趣中に於て　識復た增長するを得。　識と世間法と　更に互に以て因と爲り、　譬へば河水の流れて　前後して斷ぜざるが如く、　亦芽と種と相續して　轉た生ずるが如く　各各相の差別　分明に顯現す。[五九] 行識亦是の如く　既に三和合し已つて　而して復た更に和合し　差別の相にして生じ、　是の如く流轉して　常に斷絕あることなく、　内外一切の法　皆此に因つて起る。愚は唯心を了せず　汝等勤めて觀察せよ』と。

[六〇] 時に衆色王等　復た金剛藏に向ひ　是の如き言を作す、

『金剛藏は無畏にして　善く密嚴に入り　能く一切法を演ぶ。　佛及び諸の佛子　正定にして思惟し　無比なること甚だ奇特に　法相を顯明す。　金剛藏無畏　見を垂れて爲に宣說せよ。尊、摩尼宮に處り　師子勝座に居り、　最勝子圍遶して　密嚴定に[六一]住す。　願はくは諸佛子の爲に　瑜伽の勝法を說きたまへ。　此は是れ月幢佛　衆の爲に開演する所　彼の衆當に此に來るべし　願はくは說いて倦むなかれ』と。

[六二] 此の月幢如來、　亦多神變を現じ、　欲界の宮殿　及び色界中に於て　佛子の與に圍遶せられ　諸天皆侍衞す。　所說の勝理趣は　密嚴無畏の法なり。　彼の諸の瑜伽者　是の如く說くを聞き已つて　自覺聖智　內證の境界を得、[六三] 尼夜摩及び　正位の樂を悕れ　實際に住せず。定中に互に觀察し　而して皆各念言すらく、

『誰か已に實相を證せる　觀行の上首なる　願はくは斯の人を見るを得ん』と。

【五七】 第十九、三心倶起の義を明す。

【五八】 第二十、諸法の空を明す。

【五九】 行識。他の三本には識行に作る。

【六〇】 第三節、衆色、金剛藏に對して定、非定、定所緣を問答分別す。初に衆色王菩薩の問。

【六一】 住。麗本には往に作り、三本には住に作る。地婆譯のこゝに當る所に、安住とあり。

【六二】 次に月幢如來分身所譯の大衆來りて問ふ。

【六三】 尼夜摩(Niyāma) 決定と譯す。地婆譯には、この語に相當するものなく、この二句の代りに心不樂於正位之樂とあるのみ。

なきを。若し悟れば則ち皆空にして　轉依して恒に盡くるなく、　密嚴に住して月の如く影十方に現ず。

[四七]應に知るべし、賴耶識は　蘊稠林を行くに、　末那を先導と爲し　意識能く　色等の一切境を決了し　及び五識身は　根、境と和合して　現境界を了す、　自境の所取は　皆是れ阿賴耶なるを。

[四八]藏識と壽、煖　及び觸と和合性なり、　末那は此の識に依り、　識復た意に住し、　所餘の五種識は　亦自根に住す。

[四九]心意及び諸識は　蘊に安住し、　業習の爲に繫縛せられて　流轉して窮りあるなし。　是の如き所有の業は　皆貪愛に由る、　既に業を以て身を受け　復た身を以て業を造る。　此の身を捨て已つて　更に餘身を受け、　前後以て因に依り　徐行すること水蛭の如し。　心及び諸の心所　相續して諸趣を生じ、　更に展轉積集して　諸の蘊稠林に住す。

[五〇]壽煖及び識　若し身を捨離すれば、　身は則ち覺知なきこと　猶ほ木石の如し。

[五一]藏識是を心と爲し　我に執するを名けて意と爲し、　能く諸境界を取る　是を以て說いて識と爲す。

[五二]採集業を心と爲し、　意を遍採集と爲し、　意識能く遍ねく了し、　五識現に分別す。　心は能く身を持し　末那は諸趣に著し、　意識は能く遍ねく了し　五識は自境を緣ず。

[五三]藏識以て因と爲して　是より餘識を生じ、　意、意識の緣ずる所　無間にして流轉す。　五識復た更に　增上緣を待つて生ず、[五四]同事自根の事　是を增上緣と爲すが故なり。

[五五]是の身は起屍の如く　亦熱時の焰の如し、　行の因緣に隨つて轉じ　妄に非ず亦實に非ず、[五六]愛の牽く所と爲り、　性空にして我あることなし。

【四七】第十一、賴耶在蘊の所以を明す。

【四八】第十二、諸識の所依に差別あり。

【四九】第十三、十二緣の輪廻無窮を說く。

【五〇】第十四、緣關散壞を明す。

【五一】第十五、三心の體を出す。

【五二】第十六、一心の歸用を說く。

【五三】第十七、識起る時の具緣の多少を說く。

【五四】この二句、地婆譯には以同時自根、爲增上緣と作す。本譯の同事の事は恐らくは時字の誤ならん。

【五五】第十八、身の無我を說く。

【五六】愛、麗本には受に作り、地婆譯も他の三本にも愛に作る。

【四一】分別は皆是れ意の　世間を分別するなり、　此の分別見は　本來實あるなし。　譬へば畫中の質の如く　亦虹霓の像の如し。　及び雲中の物（の如し。）　翳眼に毛輪を見（る如し）　女人の鏡容を窺ふ（如し）　夢に衆物を觀るが如し。　帝弓と谷の響きと　樹影と乾城と　熱時の陽焰の水と　池中の明月の像の如し。　是の如き諸の計度は　賴耶に於て妄に取るなり。　是等を觀察する時　唯藏識なりと諦了す。　卽ち世間相の　所依の一切法は　是れ諸の分別見なりと達すれば　卽ち皆轉滅す。

【四二】賴耶は是れ意等の　諸法の習氣の依にて　常に分別心の　擾濁する所と爲る。　若し分別を離るれば　卽ち無漏道を成じ、　常恒にして變ぜざること　猶ほ虛空の若し。　若し阿賴耶に於て三摩地を獲得せば、　則ち無漏法。　如意定解脫　及び四無畏　十力幷に善巧　自在と神通と　是の如き諸功德を生じ、　十究竟願を起し　意成の微妙身、　永く所依を轉じ　識界常に安住し、【四三】體、虛空性に同じく　不壞亦不盡なり。　如來悉く明かに見るに、　世間に增減なく、　有情復生ぜず、　涅槃は滅に非ず。　此の刹及び餘の刹は　一法性に同じ。　諸佛世に出づるも　或は世に出でざるも、　法性は本と常住にして　不常亦不斷なり。【四四】又若し解脫せば、　有情界滅すとせば　卽ち如來の　一切の智性を壞し　三世諸佛の境　平等なるを得ず。　又若し般涅槃して　有情界滅せば　是れ誰か苦を離れ　有餘無餘を得るぞ。　魔を降し邪見を伏するは　皆應に是れ妄說なるべし。　是の故に應當に知るべし、　諸の勝觀行者にして　若し解脫を證せば、　其の身則ち常住にして　永く取蘊を離れ　諸の習氣を滅除すること、　譬へば熱鐵を以て　之に冷水に投ずるに、　熱勢已に除くと雖も　其の鐵體壞するなきが如し。

【四五】諸仁應當に知るべし、　阿賴耶は海の如く　常に戲論の麁重風の爲に擊たれ、　五法、三自性　諸の識浪相續し、【四六】所有の境界の　其の相飄動して、　無義處中に於て　義に似て實に體

【四一】第七、分別見は生死の本なり。

【四二】第八、分別習氣等を遠離すれば、無漏の功德を成す。

【四三】第九、衆生本來寂靜なり。

【四四】この一偈、地婆譯には若解脫者、衆生界滅、云云と作す。解脫涅槃に入る時、斷滅に歸すといふならばの意なり。小乘の灰身滅智思想に反對して、不住涅槃を主張するなり。

【四五】第十、阿賴耶識は緣によりて似現す。

【四六】この一偈、本譯にては所有於境界、其相而。飄動、於無義處中、似義實無體に作る。於而の二助辭あるが爲に訓じ難し。地婆譯には、所有境界、其相飄動於施無義處中、似義而現とし、其意明了なり。以て於而の二字は、單に字數を具へんが爲の助辭に外ならざるを知るべし。

猶ほ盛赫日の　光を舒べて地を照すとき　蒸氣すること水流の如く　渴獸之を望んで走るが如し。　賴耶も亦復た爾り、　體性は實に色に非ずして　而も色に似て現ず。　惡覺の妄に[三五]著を生ずるは　磁石の鐵を吸ひて　迅速に轉移するが如し、　情識なしと雖も　情識に似て動ず。是の如く賴耶識は　生死の爲に攝せられて　諸趣に往來し　我に非ずして我に似ること、　海中に物を漂はすに無思にして水に隨つて流るゝが如し、　賴耶は分別なくして　身に依つて運動す。

[三六]譬へば二象の鬪ふや　傷けられし者の永く退くが如く、　賴耶も亦是の如し　染を斷じて流轉なし。　譬へば淨蓮華の　泥を離れて皎潔に、　人天皆受用して　咸く珍敬せざるなきが如し、　是の如く賴耶識は　習氣の泥より出で　轉依して清淨を得れば、　佛菩薩の重んずる所なり。　譬へば殊勝の寶は　野人に輕賤せらるゝも、　若し用つて冕旒を飾れば　則ち王の頂戴と爲るが如し、　是の如く賴耶識は　是れ清淨佛性なり、[三七]凡位は恒に雜染するも　佛果は常に寶持す。　美玉の水に在るや、　苔衣に纒覆せらるゝが如し、　賴耶も生死に處れば　習氣に縈はれて現はれず。

[三八]此の賴耶識に於て[三九]二取相ありて生ずるは、　蛇に二頭あるが　樂に隨つて同じく往くが如し。　賴耶も亦是の如く　諸色と相具し　一切諸の世間は　之を取つて以て色と爲す。　惡覺者は迷惑し　計して我我所と爲し、　若くは有若くは非有　自在に世間を作る。

[四〇]賴耶は變現すと雖も　體性恒に甚深なり　諸の無知人に於て　悉く覺了する能はず。　譬へば幻師の　種種の獸を幻作し　或は行き或は走り　有情に似るも實に非ざる如し、　賴耶も亦是の如く　世間の一切諸の有情を幻作するも　體性に眞實なし。　凡愚は了る能はず　妄に取著を生じて　微塵、勝性　有無の異分別　及び梵天と　丈夫等の諸見を起す。

【三五】本譯は妄生者とするも、地婆譯も、他の三本も者字を著に作る。

【三六】**第四、賴耶の染分緣起を說く。**

【三七】凡位。凡夫位の略。

【三八】**第五、凡愚は賴耶に迷惑す。**

【三九】二取相。能取所取の相。

【四〇】**第六、賴耶所變のものは有に似て實は無し。**

威光は猶ほ日月の如し、　修行して正定を得て　演說すること道に相應す。　諸佛灌頂を與へて　咸く皆其の位を授け、　如來所證の法　見るに隨つて轉依す。　密嚴場に處ると雖も物に應じて變化し、　彼の愛樂法に隨つて　空に住して演說す。』と。

[29]是の時金剛藏、復た大衆に告げて言はく、

『[30]賴耶は無始より來　戲論熏習の爲に　諸業に繫縛せられて　輪轉して窮りあることなし。　亦大海の　風に因つて波浪を起すも　恒に生じ亦恒に滅して　不斷亦不常なるが如し。　自心を悟らざるに由つて　識に隨つて境界現ず、　若し自心を了れば　火の薪を焚き盡すが如し、無漏に通達するを　則ち名けて聖人と爲す。　藏識は衆境を變じて　世間に彌綸し、　意は我我所を執して　思量して恒に流轉し、　諸識類は差別して　各各自境を了る。

[31]積集業を心と爲し　遍ねく積集するを意と名け　了別を名けて識と爲す　五識は現境を取る。翳の毛輪を見て　見るに隨つて迷惑するが如く、　似色の心中に於て　非色を色と計す。

[32]譬へば摩尼珠の　日月の光に照され　其の應現に隨つて　各自類の物を雨らすが如し。　阿賴耶も亦爾り、　如來淸淨藏は　習氣に和合して　變現して世間に周ねし。　無漏と相應して　諸の功德法を雨らすこと、　譬へば乳の變異して　酪を成して酪漿に至るが如し。　藏識も亦是の如く、　變じて衆色に似ること　翳の毛輪を見るが如し、　有情も亦復た爾り。[33]惡習氣の翳　藏識に住するを以て眼中の、　諸の非色處に於ける　此の所見の諸色は　猶ほ陽焰の如し　有無を遠離す。[34]皆賴耶の所現なり。

仁者、眼色に依りて　似色識を生ずること　幻の眼中に住する如し。　飄動すること猶ほ熱焰のごとし。　色は皆是れ藏識の色習と相應して　變似せるにて體有るに非ず。　愚夫は妄に分別して　諸の昏醉放逸より　坐臥に及び狂走に　頓に諸の事業を起すも　皆是れ賴耶識なり。

【二九】**後段、遮難重釋なり。**上に賴耶が一切法の所依たるを說くも、未だ理を盡さざる故に、この段あり。文に二十節なり。

【三〇】**第一、賴耶は不斷不常なり。**

【三一】**第二、三心の業用を說く、**初の二句、地婆譯には心積集業、意亦復然と作す。積集業の業は動作の集起をいふ。善惡感果をいふにあらず。

【三二】**第三、如來藏の染淨緣起を說く。**

【三三】こゝの一偈地婆譯には、以習氣醫住藏識、眼生諸似色、此所見色、譬如陽焰、遠離有無とありて、其意明了なり。本譯の眼中の中字は恐らくは生の誤ならざるか、今は中字のまゝとし斯く訓じたり。

【三四】皆。麗本には習に作り、地婆譯にも、他の三本にも皆に作る。

あることとなし　境界亦復た然り、　心は習氣に因つて生じ　境は心をして惑亂せしむ。　賴耶識の一切の諸の種子に依止して　心が境界の如くに現ずるを　是を說いて世間と爲す。　七識と阿賴耶と　展轉して互に相生じ、　是の如き八種識は　不常亦不斷に、　一切の諸世間は有に似て安布す。」

[二五]有計、諸衆生、　我等とは三和合して　種種の識を發生して　諸境を了別す。　或は妄計して言ふあり　作者が業因の故に梵天等の　內外の諸世間に生ると。　世間は作者、　業及び微塵の作にあらず、　但是れ阿賴耶　變現して境に似たるのみ。　藏識は緣の作に非ず[二六]　藏も亦緣と作らず。　諸識は流轉すと雖も　三和合あるなし。　賴耶の體常住にして　衆識と之と俱なり、　輪と水精との如く　亦星の月と共なるが如し。　此より習氣を生じ　新新自ら增長し、　復た餘[二七]　識を增長す、　餘識も亦復た然り。　是の如くして生死轉ずるも　悟者の心は轉ずるなし。

[二八]譬へば火の木を燒くに　漸次に轉移して　此の木旣に已に燒くれば　復た更に餘木を燒く如し、　賴耶識に依止する　無漏心も亦然り、　漸く諸の有漏を除いて　永く輪廻の法を息む。　此は是れ現法樂にして　三摩地を成就せるなり　衆聖是に由つて生じて　刹より刹に至る。」譬へば微妙の金の如し　鑛に在りて見る能はざるも　智者巧に陶鍊すれば　其の金乃ち明かに顯る。　藏識も亦是の如く　習氣に纏はるゝも　三摩地淨除して　覺者常に明かに見る。　酪の未だ攢搖せざれば　酥終に得べからざるが如し、　是の故に諸の智者は　酪を攢して酥を得。　藏識も亦復た然り、　諸識に纒覆せらるゝも、　密嚴の諸定者は　勤めて觀じて乃ち能く得。　密嚴は是れ大明なり　妙智の殊稱なり　佛子勤めて修習すれば　此の刹中に生ぜん。　色及び無色界　空・識・非非想　彼に於て常に勤修して　是の處に來生せん。　此の中の諸の佛子の

【二五】**外を破りて正を示す。**初の一偈全く地婆譯に同じく、有計諸衆生、我等三和合云云に作る。

【二六】麗本は藏亦不非緣と作るに、地婆譯にも、他の三本にも藏亦不作緣に作る。

【二七】麗本には、載に作り、地婆譯も他の三本にも識に作る。

【二八】**鍊陶歸本を說く。**

如く、寶洲の妙藥の如く、普ねく能く饒益を作し　諸の有情を長養す。[二〇]諸法は不生滅なり　不斷亦不常なり　不一亦不異なり　不來亦不去なるに、妄りに種種の名を立つ　是を遍計性と爲す。　諸法は猶ほ幻の如く　夢と乾城と　陽焰、水中の月　火輪雲雷等の如し、此の中妄に取る所　是を遍計性と爲す。　彼彼の名詮に由りて　以て彼彼の法に名くるに　彼に於て不可得なり　是を遍計性と爲す。　一切世間の法は　名色を離れず、　若し能詮を離るれば　所詮得べからず。　是の如き遍計性を　我れ說いて世間と爲す。」

眼色等を緣と爲し　三和合に因つて起る　聲の桴鼓に依つて發するも　芽の地種從り生ずるも　宮殿と瓶衣とも　[二一]衆緣より起るに非ざるなし。　有情及び諸法は　此れ悉く他性に依る。」

若し法是れ無漏なれば　其の義捨つ可からず、　自覺聖智の境　此の性を[二二]眞實と名く。」

諸法の相の差別　已に其の自性を說けり、　若し自性門を離るれば　諸法明了ならず。　衆物和合して　幻化形を現作するが如く、　衆色同じからずと雖も　性皆決定なし。　世事悉く是の如く　種種皆實に非ざるを　妄情の執する所　遍計して餘あるなし。　譬へば摩尼寶の　色に隨つて像の現ずるが如く、　世間も亦復た然り、　但分別に隨つて有るのみ。　體用の所在なき　是を遍計性と爲す。　乾闥婆城の　城に非ずして似たるを見るが如く、　亦因あるなくして　而も能く是の如く見るに非ず、　世間の種種の物も　應に知るべし亦復た然るを。　日月等の宮殿　諸山及び寶山は　煙雲相擊觸するも　未だ嘗て雜亂あらず。　共なく自[二三]性なく體性皆有に非ず、　但是れ分別する所　遍計の自性なり。　諸物は因生に非ず　亦因あるなきに非ず、　若しは有なるも若しは有に非ざるも　此れ皆情の執する所なり。

[二四]名は相に依つて起り　二は分別より生じ、　正智及び如如は　分別を遠離す、　心は相の如く顯現し　相は意の所依と爲り、　意と五心との生ずるは　猶ほ海の波浪の如し。　習氣に始

【二〇】自に三自性について名の所住を出す。

【二一】この一句麗本には無依衆緣起に作り、他の三本には無非衆緣起に作る。この一偈地婆譯と全同なり。地婆譯は非字に作るを以て本譯の依字は誤寫なること註なし。

【二二】眞實。麗本具實に作り、他の三本には眞實に作る。地婆譯して眞實とす。

【二三】性。他の三本には他に作る。

【二四】**五法について名の所住を說く。**

のみ。諸大和合中　分別して以て色と爲すも　若し諸大を離れば　體終に得べからず。德の瓶處に依るが如く　瓶の名に依るも亦然り、[一七]者を捨てゝ瓶を取らんに　瓶終に得べからず。是の如き定瓶は瓶體に住せず　名豈名に住せんや。二合して分別生ず　名量亦有に非ず。是の如き定に住せば　其の心動搖せず。」

[一八]譬へば金石等の　本來水相なきも　火と共に和合して　水の若くに流動するが如し。藏識も亦是の如く　體は流轉の法に非ざるも、諸識共に相應して　法と同じく流轉す。鐵の磁石に因りて　周廻して轉移する如し、二俱に思あるなきも　狀思覺あるが如し。賴耶と七識と　當に知るべし亦復た然るを、習氣の繩に牽がれて　人なきも而も有るが若し。有情身に遍滿して　險趣に周流すること、鐵と磁石との如く　展轉して相知らず。[一九]或は險趣を離れて　地に住することを得。神通自在力　如幻首楞嚴　乃至陀羅尼　皆成滿せざるなく、佛の實功德を讃して　之を以て供報と爲す。或は無量身を現じて　一身に無量の手あり　肩、頭、口及び舌　展轉して皆無量なり。十方國に往詣して　諸の如來を供養し、花及び衣服頭冠と瓔珞とを雨らして　種種の寶莊嚴　積んで須彌等の如きを　薩婆若　佛及び諸の佛子に供養す。或は寶宮殿を作り　雲の如く衆彩を備へ、諸の天女を化現して　其の中に遊處し、妓樂衆妙の音もて　諸佛に供養す。或は佛菩薩と　遊止常に共に俱にし　一切の諸魔怨を　自在に降伏し　自覺聖智を得て　正定以て莊嚴し、已に所依を轉じて　卽ち法無我。五法、三自性　及び八種識を見、能く諸明を成就し　定に住して常に供養す。」
或は身を現じて廣大に　或は現じて微塵の如く　種種の諸色身もて　諸佛を供養す。或は身を諸剎に納め　剎を芥子中に入れ　大海を牛跡と爲し　牛跡を或は海と爲すに、其の中の諸の有情　逼惱せらるゝあるなく　平等に資用を施すこと、地及び日月の如く　水と火風との

【一七】この四句全く地婆譯に同じ。地婆譯は捨名而取瓶と作す。本譯の捨者は捨名の誤寫なるべし。

【一八】自下、**藏識の緣起は末那を離れざるを說く。**

【一九】自下、**觀法の利益を說く。**

『[一〇]一切は唯名あるのみ、　亦唯想の安立するのみ、　能詮異るに從るが故に　所詮得べからず。四蘊は唯名字のみ、　是の故に說いて名と爲す。[一一]摩納婆と名くるが如く　但名のみにして體あることなし。　諸佛及び佛子は、　名は唯相に在りと、　相を離れて名ありとも、　分別するを得べからず說く、　是の故に諸相に依つて　分別して諸名あるも、[一二]匿兎未勿の如く　假名にして不可得なり。　相の無所有に於て愚夫は妄に分別す、　世間も亦是の如し、　相を離れて名あるなし。　瓶衣車乘等は　名言の分別する所、　名相說く可しと雖も　體性は無所有なり。　世間の衆色法は　但相のみにして餘あるなく　唯相に依つて名を立つ、　是名は實事なし。　王應に世法を觀ずべし、　名を離れて無所有なり、　但分別心を以て　取著を生ずるのみ。[一三]若し分別を離るれば　取著卽ち生ぜず、　無生卽ち轉依して　無盡法を證す。　是の故に大王等　常に應に想事を觀ずべし、　但是れ分別心にして　此を離れて卽ち有るなし。　想名及び分形相體の增長し散壞する、[一四]質と身と　是の如き等の衆名は　皆唯色の想のみ。　若し名字を捨離して　物の體を求むるに、　過去に及び未來に　此れ皆不可得なり。　但諸識の轉變のみ、　所知の法あるなし、　所知は唯是れ名のみ、　世間は悉く是の如し。　名を以て法を分別するも　法は名に稱はず、　諸法の性は是の如く　分別に住せず。　法は唯名なるを以ての故に、　相は卽ち體あるなし、　相無なれば名も亦無なり、　何れの處にか分別あらん。[一六]若し無分別を得ば　身心恒に寂靜なること、　木を火燒き已りて　畢竟復た生ぜざるが如し。」　譬へば人負擔せば　是の人を負者と名け、　其の擔の殊あるに隨つて　擔者の相差別あるが如し、　名は所擔の物の如く、　分別を擔者と名く、　名の種種なるを以ての故に　分別各同じからず。　杌を見て人ど爲し　人を見て以て杌と爲すが如く、　人杌の二分別は　但名字ある

【一〇】金剛藏の問答、兩段あり。初段は答問、後段は逐離重釋なり。先づ世間法の唯名なる所以を明す。
【一一】摩納婆。儒童・年少或は勝我と譯す。
【一二】如匿兎未勿の一句、地婆譯には譬如袟吐等に作る。いづれもその意不明。
【一三】自下、**反現有利を說く。**
【一四】質。麗本贅に作り、他の三本には質に作る。地婆譯も質に作る。增長散壞等の異なるも、一色の上にたゞ名の增減あるのみ、更に別法なしといふなり。
【一五】義。麗本には儀に作るも、地婆譯には義に作る。
【一六】自下、**所得の益を明す。**

唯識性を覺悟せざるに由るが故に[五]耶慧を思渴して、往來馳騖し生殺輪轉す。諸佛菩薩の善友を遠離し、解脱に違背し正慧を動搖し、八支聖道を修治する能はず、彼の三乘乃至一乘に於て都て所證なし。執著を起すに由つて聖諦を見ず、密嚴の名號に於てだも尙聞くを得ず、何に況んや其の土に能く入るを得んや。

仁主よ、諸の深定者は咸く此の識に於て我見を淨除す。汝及び諸の菩薩摩訶薩も、亦應に是の如く、旣に自ら勤修して、復た人の爲に説き、其をして速かに密嚴佛土に入らしむべし』と。

阿賴耶[六]卽密嚴品第八

[七]爾の時に金剛藏、此の藏識卽ち密嚴の義を明さんが爲に、如實見に告げて言はく、

『磁石の鐵を吸ふが如く　常に能く自ら轉動し　蘊車の性定まるが如く　轉動するは習氣に由る。
草木土竹等　及び繩以て舍を成し　和合して見る可し、　身蘊も亦是の如し。　起屍磁石鐵は　轉動して有情の如し、　一切皆亦然り、　是の如く蘊は無我なり』と。

[八]時に寶手菩薩、衆色王に白して言はく、

『王今應に金剛藏に定者を請問すべし、　一切諸世間の　所有の衆[九]法は、　覺なく覺を離れ諸の言詮を遠離す。　相應不相應の　二種の名字の　彼の世間の所有の　自性は、云何が住する。　此の會の諸佛子　專心に咸く聞かんと願ふ』と。

衆色最勝王　卽ち義に隨つて問ふ、

『名相等の境界　一切世間の法は　唯是れ分別と爲すや、　分別を離れて有りと爲すや、　其の立つる所の名の如き　是の名は何に依つて住するか』と。

金剛藏聞き已つて、卽ち色王に告げて言はく、

【五】耶慧。恐らくは邪慧の誤寫なるべし。これに該當すべきもの、地婆譯になり。

【七】卽密嚴。地婆訶羅譯には微密に作る。上來諸法は唯賴耶の變作なるを說けり。外人疑ふ、賴耶は見るべからず、之あるを必せずと。故に此品あり、有りと雖も微密なるを說くなり。此品分つて八節と爲す。

【七】第一節、金剛藏、如實見に向つて無我を說く。此一節地婆譯に無し。

【八】第二節、寶手衆色二菩薩金剛藏に對して、名想等の世間諸法を以て問答分別す。

【九】識。麗本は汝に作り、他の三本には識に作る。こゝの二句は一初諸世間、所有於衆汝に作らる。於衆汝の三字に何等かの寫誤なるに似たり。地婆譯は一切世間所有衆法と作し、その意味通徹す。今は地婆譯に參照して、斯く訓ぜり。

卷[illegible]の下

[一]我識境界品第七

爾の時に金剛藏菩薩摩訶薩、遍ねく十方を觀て、髻珠中より大光明を出して、諸の世界及び他化自在天宮幷に密嚴中の諸佛子衆を照し、斯の光を放ち已つて、卽ち一切佛法如實見菩薩に告げて言はく、『仁主よ、雪山の中に一惡獸あり、名けて能害と爲す。百千に變詐して以て諸獸を取り、應に食ふべき者は殺して之を食ふ。[二]若し壯獸の能之と名くる者を見れば、卽ち須く便ち子を呼ぶの聲を爲して害して之を食ふべし。若しは時に或は有角の獸を見れば、便ち有角を現じて、其と相似て往いて親附し、所畏なからしめて殺して之を食ふ。牛羊等の種種の諸獸を見れば、悉く彼の形に同じくして其の害を肆(ほしいまゝ)にす。仁主よ、彼の能害の種種形を現じて以て諸獸を殺すが如く、一切の外道も亦復た是の如し。阿賴耶所生の我見に於て、我相に執著すること、猶ほ惡獸の種種形を變ずるが如し。亦彼彼の如く、自類の我を計するに各各差別あり、乃至極小なること猶ほ微塵の如し。

仁主よ、是の諸の我執は何に依つて住するや。餘に住せず、但[三]自識に住するのみ。我を計するの人、我と意・根・境と和合して、識ありて生ずと言ふも、本と我あることなく、花と衣と合して卽ち香氣あるが如し。若し未だ和合せざれば、衣に卽ち香なし。是の故に當に知るべし。但(たゞ)唯識心、及び心法あるのみ。若し識心、心所法を離れば則ち我あるなし。器中の菓の如く、燈の瓶を照すが如く、[四]伊尸迦文闍の草の如し。而も得べき者は但因緣を以て心心法生ずるのみ。此の中我なく亦生あることなく、微妙の一相本來寂靜なり。此は是れ勝觀行を覺悟せる者の自證の境界なり。彼の惡獸の傷殺する所多きが如く、然も諸の外道も亦復た是の如し。世間の惡見を養育增長して、法智を知るなく、强ひて分別して有を執し無を執し、若しくは一若しくは多の我我所の論あり、所以は何。

【一】我識。地婆訶羅譯には自識に作る。上來諸法心なきを說けり。外道は猶我執を計して唯識を識らざるを以て、之を破して無我の理に入らしめんとするを、此品の趣旨とす。賢首は自識を解していふ。自に三あり。一には阿賴耶なり、一切法は賴耶を體と爲すを以てなり。二には妄意をいふ。顯識の時、見相二分一時に起るが故なり。三には事識なり、所識の我等は唯是れ自心にして心外に無きが故なり。此三自を具するを、自識と爲す。

【二】若見壯獸名能之者、卽須便爲呼子之聲害而食之。地婆訶羅譯には之を若見牝鹿有子之者、便爲子聲悲鳴相呼に作る。

【三】住自識。麗本には自住識と作し、地婆譯も三本も住自識と作す。

【四】伊尸迦。矢を造るに用ふる堅き草。

に非ず。鐵の磁石に因りて　向ふ所に轉移する如し。　藏識も亦是の如く　分別種に隨つて一切諸の世間　處として周遍せざるなし、　日、摩尼寶の　思及び分別なきが如し。　此の識の諸處に遍ねきを　之を見て流轉と謂ふも、　不死亦不生　本と流轉の法に非ず。　夢に生死を見るが如く　覺悟すれば卽ち解脫す、　佛子若し轉依せば　卽ち解脫者と名く。　此は卽ち是れ諸佛の　最勝の教理なり、　審かに一切法を量れば　稱の如く明鏡の如し。　照曜すること明燈の如く　試驗すること金石の如く　正道の標相は　斷滅を遠離す。　勝定を修習する者は　皆清淨の因に由り、　諸の雜染を離れ　轉依して顯現せしむ』と。

[二二七]『無畏の諸佛子よ　是の如き賴耶の體を　云何が見聞せざる。　衆身の所依なり　性淨にして恒に染なく、　三十二の佛相　及び輪王を具足し、　三界中に遍ねく　種種の色を現ず。　猶ほ淨空の月の　衆星に環遶せらるゝ如し、　藏識と諸識との　身に住するも亦是の如し。　亦欲天主の　天女衆圍遶して　寶宮殿に顯はるるが如し、　藏識も亦是の如し。　江海の諸神の水中に自在なる如く、　藏識の世に處する　當に知るべし、亦是の如きを。　龍の水天に依るが如く　百川の海に歸するが如く、　樹王の地に依るが如し、　現心も亦是の如し。　日の宮殿に在りて　妙高山を旋遶し、　諸天皆敬禮する如し、　佛地心も亦爾り。　十種の諸地中に　一切行を修行し　菩薩身に在りて　[二二八]大法を顯現し　遍利して安樂を與へ　如來を常に稱讚し、　地地皆清淨なり　故に號して佛子と爲す。　菩薩身に在りては　是を卽ち菩薩と名く、佛と諸菩薩と　皆是れ賴耶の名なり。　佛及び最勝子　已に授け、當に授記すべし、　廣大なる阿賴耶　當に等正覺を成ずべし。　卽ち此の賴耶の體を　密嚴者は能く見る、　最勝瑜伽に由りて　妙定相應するが故なり。　諸佛と緣覺と　聲聞及び外道、　證理無畏の人の　所觀は皆此の識なり。　種種の諸の識境は　皆心の所變に從る、　瓶衣等の衆物　是の如きの性は皆無なり。　悉く阿賴耶に依つて　所見皆迷惑し　[二二九]諸の熏習を以て　妄に能所取を生ずと謂ふ。體は幻化の如きに非ず、　陽焰毛輪に非ず、　生に非ず不生に非ず　[二三〇]空性、空遠離、　有無に同じく起る有らざるを觀る。　有情の分別する所　幻を見る可し(とする)如し。　陽焰毛輪の相は　二倶に不可得なり、　一を離れ亦二なし　過世當世なし。　此れ皆識の變異にして皆無性なり　長短等亦然り。　智者は幻事を　此れ皆唯幻術のみ。　未だ曾て一物の　幻と與幻なく幻の名なし　諸性は無所得　是れ幻幻の所作なり。　世間に迷惑あれば　其の心自在ならず、　妄に能幻ありて　種種の物を幻成すと說く。　動搖し及び往來して　見ると雖も皆實

【二二七】これより以下前述の義を偈頌を以て重說す。

【二二八】大法。麗本大海に作り、三本大法に作る。地譯は大乘法と作す。

【二二九】この二句、地婆譯には以諸習氣故、所取能取轉とありて諸の字なり。

【二三〇】この一句、地婆譯になり。

も　循環の體は是れ一にして　其の性に增減なきが如し。　愚夫の分別する所　月に增減あるを見るも、　四洲に往來して　實に盈缺なし。　是の如く藏識は　普ねく有情界に現ずるも、其の體に增減なく　圓潔にして常に光明あり。　愚夫の妄りに分別して　恒に賴耶識に於て增減ありと計著するも　應に知るべし亦是の如きを。　若し此の識に於て　能く正しく了知する有れば　卽便ち無漏を得　轉依の位に差別あり。　是の如き差別法を　得るは甚だ難しと爲す。　藏識も亦是の如く　七識と倶に轉じ　熏習以て相應するも　體性に染無し。　猶ほ河中の木の　水に隨つて以て漂流するに　而も木と流と　體相各差別する如し。　藏識も亦是の如く　諸識習氣と倶なるも　而も恒に性清淨にして　其の[一二四]所業と爲らず。[一二五]　清淨と雜染と皆阿賴耶に依る、　聖者の現法樂　等引の境界　人天等の諸趣　一切の佛刹土、　是の如き染淨の法は　如來藏を因と爲す、　彼に由つて悟つて佛と成り　諸乘の種性と爲る。　一切諸の衆生の　威力を具ふるあるも　自在の諸功德　殊勝の諸吉祥　乃至險惡趣　上中下の差別あるも、　賴耶恒に中に住して　遍ねく爲に依止と作る。　悉く是れ諸の有情の　無始時來の果なり、　諸業の習氣を以て　能く自ら增長し、　亦復た所餘の七識を　增長す。　是に由りて[一二六]諸の愚夫　執して以て內我　能作所依我と爲し、　生死に輪廻す。　意識の身中に在るや　迅疾なること風の轉ずるが如く、　業風に吹動せられて　遍ねく諸根に住し、　常に七識と倶にして　流轉すること波浪の如し。　微塵と勝性と　自在も及び時も方も　悉く是れ淨賴耶なるに、中に於て妄分別す。　賴耶は業力に由り　及び愛以て因と爲し　諸の世間の　種種の品類を成就す。　愚夫は恒に了せず　之を執して作者と爲す。　此の識の體相は　微細にして甚だ知り難し。　未だ眞實を見ざれば　心迷ひて覺る能はず　常に根境意に於て　愛著を生ず』と。

金剛藏復た言はく、

【一二四】所業。誤字ならん。地婆訶羅譯には所雜に作る。
【一二五】第三節、緣起門を釋す。
【一二六】諸愚夫。麗本には之愚夫と作し、三本に諸愚夫と作す。

智慧最も無比にして　唯佛のみ能く知る所なり。　釋迦の已に人中の　勝師子を獲たるが如し、　汝等咸く當に得べし、信を生じ疑を懐くこと勿れ。　信を卽ち佛體と爲す　必ず當に解脱を得べし。　或は彼の天主と爲り、　及び諸の[二七]粟散より　乃至梵宮に生じて　轉輪王と作り、　轉じて蓮花藏に生じて、　彼の佛會中に在り、　蓮花より化生して　大精進力を獲、此に由つて魔衆　及び欲熏習の因を降し、　志意に怯弱なく　一道法を證成し　佛事を紹繼して　諸の國土に王となるを得。　若し作佛を得んと欲せば　當に[二八]佛性道を淨むべし。　種[二九]姓既に淨め已れば　諸佛卽ち授記し　瑜祇もて轉た覺悟し　久しからずして當に成佛し、　一切修行者の　爲に依怙と作るべし。　譬へば彼の大地の　亦衆の所依と爲るが如く、　妙行者の能く　一切の病を療するが如し。　覺者も亦是の如く　能く虛妄の疾を除き　無分別心を得ん支解せらるるも傾動せず。[三〇]內外の境界　皆唯識なりと了達し　能く我を遠離し　亦我所を離れ　能害所害　及び害具なく、　一切皆悉く是れ　意識の境界なり。　皆阿賴耶に依つて是の如く妄に分別す。　珠の日光に合して　相感じて火を生ずる如し、　此の火は珠より出づるに非ず　亦日より生づるに非ず。　心意識も亦爾り、　根境意和合して　能く諸心を生ずること、　海に波浪を起すが如し。　此の性は陽焰に非ず、　亦夢幻に非ず、　是の如き等の迷惑の所取に同じきに非ず、　龜毛及び　兎角に同じきに非ず。　又雷電の合して　震發して火を生ずるが如し、　此の火は水よりと爲すや　雷電より生ずと爲すや。　竟に定んで此の火の　從つて生ずる處を知るあるなし、[三一]火は水より　瓶等を造作すと爲すが如し。　欲等の諸の心法は　心と共に生じ、　和合して定性なし　當に知るべし亦是の如きを。　心境は不思議なり　密嚴者は知見す。[三二]有情の[三三]藏護は　無始より妙に倶に生ず、　涅槃、虛空　擇滅無爲性の如く、　三世を遠離し　淸淨にして常に圓滿なり。　月に虧盈あり　諸の國土に顯現する

【二七】粟散。輪王より以下一國一州を領する者を粟散王と云ふ。粟を散じたるが如く多きの義。
【二八】佛性道。地婆譯には佛種姓と作す。
【二九】姓。他の三本には性に作る。
【三〇】「內外」以下「覺者を生ず」までは、前述の諸法は畢竟識の所現なりとして、唯識を明す。これに三節あり。**第一節、心境二法の非有似有を説く。**
【三一】地婆譯には、如見陶師造於瓶等と作す、本譯の如火爲從水造作於瓶等は、訓じ難し。
【三二】**第二節、藏識の依持用を説く。**
【三三】藏護。阿賴耶識の異名。蓋し護は識の誤ならん。地婆譯は、一切衆生阿賴耶識に作る。

思なり。　瑜祇の種種色は　是れ佛の境界なり。　諸仁應當に知るべし、　佛、昔、菩薩たり、彼の[一二]歡喜地より　離垢　發光及び焰慧　難勝と現前と　遠行及び不動　善慧法雲地に至るを得、[一三]陀羅尼を獲得して[一四]無盡の句義を生じ、　首楞嚴等の定　及び意成身　細性と輕性と大性及び意樂　尊貴欲壽等　斯の八自在を獲、　應の如くに顯現し　密嚴に遊戲し　名稱妙光明の　功德皆成就す。　轉た復た清淨なるを得て　等正覺を現成し、　化して佛菩薩と爲り種種の妙色像　自然に一切に遍ねくして　妙法輪を轉じ、　速かに諸の衆生をして　智を以て諸惑を斷ぜしめ、　諸趣を利樂し已つて　還つて密嚴中に住す。　或は諸大士あり　佛の身色を現ずるを見るに　莊嚴の祥相より　光明自然に發し、　熾盛なること化聚の如く　蓮花宮に住し　諸の觀行人と　安樂定に娛遊し、　三摩地自在にして　處所最も殊勝なり。　或は大樹　緊那羅王身の　百千億の　種種の變化を現はし　光明皎きこと月の如く　遍ねく諸[一五]國土を照すを見る。　或は兜率天の　無量の諸佛子の　身は帝青色の如く　功德相もて莊嚴し、首に摩尼冠を飾り　殊勝殿に坐し　光明普ねく照曜して　一切智通達するを見る。　或は普賢の　大威力を具有し　一切智　四無礙辯才を得、　身相より光明を現じ　獨勝にして倫匹なく、滿月殿　密嚴の定海に住し　遍ねく衆の色像を現じ、　賢聖の稱歎する所　無量の諸天衆　及び乾闥婆等　明仙及び國王　眷屬衆の圍遶するを見る。　或は最勝子　幷に諸の觀行師の、寂靜にして禪に住し　儼として睡眠に在るが如く、　沈息を遠離して　諸佛の敎に順行し、勤苦して淸羸なる　外道に同じきを示し、　六欲天及び梵天　有頂より贍部に至るまで、　中に於て多種の　光明を現化し　神通調御者の　赫奕として熾盛なるを見る。　或は導師と爲りて、　降胎し幷に誕育し　出家して靜慮を修し　乃至般涅槃するを見る。　佛智不思議にして一切皆圓滿なり、　自在無爲を得　人天等歸依す。　[一六]仁者應當に知るべし、　諸佛の體性は

【一二】歡喜地乃至法雲地大乘菩薩の修行の階梯たる十地なり。

【一三】陀羅尼(Dhāraṇī)總持と譯す。その力用に四あり。忍一法持、二義持、三呪持、四持なり。

【一四】無盡句義。一句一句に無量の義を含むを云ふ。

【一五】國土。麗本には國王に作り、三本には國土に作る。

【一六】「仁者」以下「支解せらるるも傾動せず」までは、佛性は甚深微妙にして明らめ難きも、信を得て如法に修行せば解脫を得べきことを明す。

ば　瓶亦其の色の如し。　或は時に彼の匠者　兼ねて雜色の泥を用ふれば、　燒き已つて成るに至る比　各其の泥色に隨ふが如し。　箭竹より葱を生じ　角より蒜(にんにく)を生ず、　穢蠅と敗蜜と　各蟲を生ずることを得。　當に知るべし世間の果は　因に似たるも因に似ざるも　皆變壞に由るが故に　乃ち果を生ずることを得。　[一〇四]衆塵の成所作は　體性變壞せず、　皆是れ世の愚夫の　妄分別を生ずるなり。　能作我、內我　勝我は得べからず、　亦意我なし。　[一〇五]亦積聚の因　及び親生の因なし、　識は緣に從つて有ならず。　[一〇六]智者の境界は　善巧力の生ずる所なり、煩惱刺を拔除し　魔幷に眷屬を降し　世間の貪愛盡きて、　蜜の能く瘦を消すが如し。　諸仙は貪あるに由つて　流轉して諸趣に生じ、　多時に熏習せらるゝこと　譬へば瞋恚の蛇の如し。煩惱の火燒然して　險惡趣に流轉す　貪を離れて卽ち解脫し　[一〇七]當に觀行を勤修すべし』と。

[一〇八]趣入阿賴耶品第六

爾の時に金剛藏　菩薩摩訶薩、　復た諸の大衆に告ぐ、

『[一〇九]仁等應當に知るべし、我れ昔佛力の加持を　蒙つて妙定を得、　明に倶胝刹の　世定を修行する者　諸佛と佛子との　清淨なる所住の處を見るに、　中に於て唯密嚴のみ　安樂最も第一なり、　諸佛蓮花に坐して　[一一〇]殊妙殿の如きあり。　我等定より起ち　一心に以て瞻仰し。　自ら密嚴に住し　佛子衆の圍遶するを見る。　復た解脫藏を見るに　宮中に住在し、　身量指節の如く　色相甚だ明朗なること　空の淨滿月の如く　阿恒思花の如し。　我れ卽ち心に自ら念ず「[一一一]是れ誰が難思の事なるや」　卽便ち己身の　彼の腹內に在るを見、　亦中に於て普ねく　一切諸の世間を見る。　蓮花藏の佛子　佛の神力を以ての故に　亦皆是の如く見て　咸く不思議を歎ず。　天中天作し已つて　卽ち威神力を攝むれば　大衆悉く故の如し、　希有にして妙難

【一〇四】自下、外人の執を破す。
【一〇五】亦積聚。この三句、地婆譯は大に異りて、境界諸根、和合爲因而生於識とあり。
【一〇六】自下は擧益勸修なり。
【一〇七】當。麗本には當に作り、他の三本には常に作る。
【一〇八】趣入阿賴耶。地婆訶羅譯には阿賴耶建立に作る。上に唯心を明せり。心に多種あり、何の心なるかを說くを、此品とす。
【一〇九】「仁等」より以下「人天等歸依す」までは、佛神力の不可思議を現じて信樂を勸生す。
【一一〇】殊妙殿。地婆訶羅譯には蓮華藏に作る。
【一一一】地婆譯にては、こゝを流暢の二句とし、「此爲是誰」而有如是不思議事」と作す。

有を利益し、 則ち貪欲の分を斷じ 及び瞋恚癡を離れて、 能く大密嚴 寂靜殊勝の處に詣るべし。 彼は無死の境界なり 亦識の所行に非ず、 諸相を遠離し 分別の所得に非ず。此を微妙處 瑜伽者の相應と爲す、 是の故に觀行を修して 彼の土を希求せば、 既に貪恚に勝ちて 無我亦無人なり、 勝定を汝應に修すべし[九六] 三毒を生ずること勿れ、 若し境界を執すれば 則ち[九七]二覺ありて生ず。 猶ほ美しき女人の 曼臉にして縝髮なるが如し。 多欲の者は見已つて 愛著して思惟し、 迷惑して染覺を生じ 專想して餘念なく、 行來及び坐起に 飲食と眠睡とに 彼女の容姿 常に心想に現ず。 是の如きの惡慧は 皆妄境に由つて生じ 境の淤泥に溺在す 是の故に應に著すべからず。[九八] 或は諸の世間の 邪慧もて妄に分別する如し、 牛及び山羊[九九] 設婆と[一〇〇]麋鹿とに於て、 彼に角ありと見るが故に 之に執して以て實と而も彪兎等に於て 便ち無角の解を生ずるも、 若し牛角を見るに非ずんば 兎に於て寧ろ無を執せんや。 世間も亦復た然り 妄に有所得と見るも、 後に求めん體實に非されば、便ち言ふ法は定んで無なりと、 未だ分別を捨てざる來（このかた） 常に是の邪覺を生ず、 仁應に審かに觀察すべし、 心行の諸の境界は 皆妄所得の 角と無角と等の如し。[一〇一] 若し諸の修行者能く是の如き觀を作せば、 其の意樂する所に隨つて 或は轉輪王と作り、 空に昇りて往還し 具に大威力あり、 或は日月殿 及び諸の星宿宮 四王、忉利天 焰摩及び兜率 化樂と他化との 摩尼寶殿中 色界の梵衆身 幷に十梵天處 無煩及び無熱 善見と善現と 阿迦尼吒宮の 自在遊戲、[一〇二]空、識、無所有、 非想非非想に生ず。 彼に住して漸く欲を除きて乃ち諸佛の刹に至り、 常に微妙定 解脱の境界に造ぶ。[一〇三]譬へば瓦を破るに因つて 而して乃ち瓦を成すが如く、 壞性刹那に現じて 常に於て無常を見る。 種子は芽を生じ 芽は種を生じ已つて壞す（る如し）。 又彼の陶匠の 泥を以て甁を作るに、 泥若し是れ奢摩なれ

み能く修する所なるを明す。

【九五】 薩埵。梵語 Sattva の音譯で有情の義なるも、今これは菩提薩埵卽ち菩薩の略稱なり。

【九六】 三毒。貪・瞋・癡の三を云ふ。

【九七】 二覺。その裏の意卽ち二過を指す、一には貪等を生じ、二には境界を逐求して縛せらるるを云ふ。

【九八】 此より以下「解脱の境界に遊ぶ」までは、通じて疑義を釋し修行を勸む。

【九九】 設婆。不明。

【一〇〇】 麋鹿。おほしかとしか。

【一〇一】 自下、擧益勸修。

【一〇二】 空乃至非非想。これを四空處といふ。

【一〇三】 これより以下上述の義を重ねて說く中、初に正理を示す。

く「一念盡きて餘なし。　諸の業習暗冥　無始の熏聚も、　牟尼の智燈起れば　刹那に頓に皆滅す」』と。

[84]辯觀行品第五

爾の時に金剛藏　菩薩摩訶薩、　復た大衆に告ぐ、[85]『諸仁應に諦聽すべし、　[86]譬へば空閑地に、　宮室を造立せんと欲するが如し、　匠人土木に資りて　然る後成すことを得るも、　諸物中を諦觀するに　[87]一一皆舍なし。　亦衆指の　和合して以て拳を成すも、　指を離れて推求するに　拳體得べからざるが如し。　軍師及び車乘　城邑と園林と　[88]雲物は山川を須ち　瓶衣等の諸相、　皆是れ假和合なり。　智者は夢の如しと了す。　是の如く身舍宅は　諸界の集成する所、　蘊積して猶ほ　[89]崇山のごときも　敧危なること朽屋の如し。　不生亦不滅　自に非ず亦他に非ず、　乾闥婆城の如く、　雲の如く亦影の如く、　復た熱時の焰の如く、　亦繪事を觀るが如し。　相は自ら妄に於て現ずるも　性は淨くして有無を離る、　亦盲と跛との　相假りて行くを得るが如し。　[90]自性の能く持するなし、　凡愚の身も亦爾り、　分析して極微に至れば　空名にして實物なく、　極微は得べからず、　諸法も亦是の如し。　[91]瑜伽淨慧者　是の思惟を作す時、　便ち色聲等に於て　覺念を遠離し、　一切の意息み已つて　泰然として解脫を得、　有情を愛せず。　常に　[92]等持を樂しみ、　設ひ諸の天仙　姝麗の女人等の　來りて供覲する者あるも　夢を觀るが如くにて染するなし。　身此に住すと雖も　外道は見る能はず、　持明と梵天と　亦其の頂を覩ず。　當に　[93]摩尼宮に生じ　自在にして遊戲し、　諸の明妃衆と　欲を離れて常に歡娛すべし。　此の　[94]觀行の法は　[95]薩埵の境界なり、　仁應に速かに修習して　勇猛心を發すべし。　當に光明宮に生じて　三

【八四】辯。地婆訶羅譯には分別に作る。此品は前に道理を明せる後を承けて順法修行を說く。

【八五】以下「欲を離れて常に歡娛すべし」までは、諸法を觀察するに衆因緣より成り皆假名にして有に似たれども、體性を推究するに畢竟無なるを明す。

【八六】自下、**法の假有無自性を說く。**

【八七】一一皆無舍。麗本は二皆無舍宅に作り、他の三本には一一皆無舍に作る。地婆譯にも一一物中、無舍可得とあり。二皆にては意味不明なるを以て、一一皆を用ひたり。

【八八】雲物須山川。この一句、地婆譯になし。

【八九】崇山。高山。

【九〇】自性無能持。地婆譯には無處定性とあり。

【九一】自下、**法に依つて修行せば離過得益すべきを說く。**

【九二】等持。定の別名。

【九三】摩尼宮。色界の天宮。

【九四】此より以下「是の故に應に著すべからず」までは、以上の觀行法は大乘の菩薩の

なし。[七六]諸色を分析し　乃至、極微を觀るに、　自性無所有なること　[七七]譬へば兎角の如し、
無分、無分別　蘊、有蘊亦然り。　幻の所作に同じく　一切皆是の如し。　此の中に業果なく、
亦作業の人なく、　能作の世間なし。　設し作能作あらば　能作は作に待す、　何をか能作
の人と名けん、　此の言は過患を成す——作者を清淨を說きて　我は諸境を成し　地輪は水輪
に依り　及び有情世間　次第に安布し、　諸趣各差別あり　彼此互に往來し、　事に於て諸根
を起して　能く境を取るといふこと。　此等は我に由るに非ず　皆是れ分別に於てし、　展轉
して變異すること　[七八]乳酪酥に同じく、　是の如く生住滅す。

[七九][八〇][八一]業と　非業と計す、　定者常に此を觀ずる　乾城と夢との如し。　無始來の戲論　有情に熏
習し、　種種の過咎より　分別業を生ず。　諸根は猶ほ幻の如く　境界は夢に同じ、　能作所
作の業を　定者は能く遠離す。　惡覺微劣の者は　迷惑して妄計を生じ　一切の諸世間を能作
すと分別す。　或は謂ふ摩尼珠　金銀等の衆礦、　鳥獸の色の差別　刺端銛して以て利なる、
此等の皆同じからざるにて　應に知るべし作者なきを。

世間の相の差別は　皆分別より生ず、　勝性、微塵　無因、自然等に非ず。　惡覺者は妄計し
て　其の體性を知らず、　業と爲し非業と爲し　是の如く分別を起す、　毒の乳に在るが如し。
隨變と相應と　一切處に分別す、　諸法も亦是の如し。　是の性亦生ぜず、　是の性亦滅せざ
るも、　惑者は了る能はず　種種に異分別す。　世間は唯積集のみ、　定者は乃ち能く觀る
汝等應に勤修して　業非業を思ふことなかるべし。　有情の互に來往するは　日月の超𢌞する
に　空に在りて所依なく　風に隨つて運轉するが如し。　業性は甚だ微穩なり　密嚴者のみ能
く見る。　諸の勝觀行を修すれば　[八三]其の爵する所と爲らざること、　火燎長く焚いて須臾に灰
燼と作るが如し。　智火の業薪を焚くも　當に知るべし亦是の如きを。　又燈の闇を破るが如

【七六】第三節、捨離因緣等の文を釋す。
【七七】譬。麗本は譬に作り、他の三本には譬に作る。
【七八】乳酪酥。酪は乳より出で酥は酪より製するもの、即ちこの三種物はその體一にして形異る。
【七九】第四節、一切凡夫等の文を釋す。
【八〇】業。善惡等の業。
【八一】非業。無記法を非業と云ふ。
【八二】第五節、正理を結示す。
【八三】其。麗本其に作り三本其に作る。

如し。　此より長大し　乃ち正に心に了知す。　我れ諸の有情を觀ずるに　生生悉く此の如し、父母に數あるなく　妻子も亦復た然り、　諸の世間中に於て　處として周遍せざるなし。　譬へば彼の石女　夢に已に忽ち子を生み、　生み已つて方に歡樂し　尋いで又其の亡を見て、悲哀自ら勝へず、　忽然として睡より覺むれば　其の子の初生　及び後終を見ざるが如し、又夢に山川に遊び　城邑と園苑と　一切諸の境界、　世間共に受用し　彼此互に相見　馳騖して往來し、　運轉と屈伸と　無量の境界あり、　睡より覺むるに及んで　一切皆有に非ず。亦多欲の者の　夢に女人を見るに、　顏貌甚だ端嚴、　服玩皆珍綺　種種に歡樂を恣にするも、覺め已れば悉く皆無なるが如し。　一切諸の世間も　當に知るべし亦是の如し。　王位及び營從　父母等の宗姻は、　但愚夫を誑かすのみ　體性は皆實に非ず。　汝、三摩地に於て　何故に勤修せざる。　無量の諸聲聞　獨覺及び菩薩は　山間樹下　寂靜修禪の處に住し、[六五]摩羅耶、乳海[六六]　頻陀婆利師[六七]　摩醯因陀羅[六八]　雞羅、雪山等　或は[六九]圓生樹に止り、　或は[七〇]嬌微那に住し、須彌半腹に處り、　或は如意樹に憩ふ、[七一]　絆住劍摩羅　中に於て宴默し、　或は贍部果を食ひ及び甘露味を飲み、　諸神通を具足して　常に此の觀を修す。　過去未來世に　蓮華臺に坐し　結加して[七二]　等引に住し、　是の如く常に觀察す。　善く諸根を攝するが故に　一切境に散ぜざること　鉤を以て象を制するが如し、　定に住するも亦復た然り。　世間若しくは出世の一切諸の餘定にて、　佛定は淨無垢にして　貪愛皆遣除す。[七三]　遍愛無色定　無想等の禪中に彼の日月の形と、　蓮華と深險とを見る　空火衆色の如きは[七四]　耶定なり究竟に非ず。　是の如きの相を拂除し　淨を得て分別なければ、　則ち倶胝剎を見　諸佛等引に住す、　同時に共に手を舒べ　水を以て其の頂に灌ぎ、　即ち佛地に入りて　衆の色形を示現す。　既に種種身を得て　則ち[七五]　薩婆若を具ふ。　力通及び自在　正定陀羅尼　是の如き等の功德　皆成就せざる

【六五】 摩羅耶 (Malaya) 山の名。こゝに七金山と譯す。
【六六】 頻陀婆利師。これを雞羅婆利師としてこゝに小鐵圍山と譯す。(賢首の疏に因る)
【六七】 摩醯因陀羅(Mahendra) 賢首の疏に因れば、こゝに大鐵圍山と譯す。
【六八】 雞羅雪山。地婆訶羅譯にはこれを須彌(陀)與腹陀とし、賢首はこれを平壤と譯し七金山と乳海との中間の平壤を指すと注してゐる。因みに地婆訶羅譯を示せば次の如し。
或住於乳海　及以摩羅延
須彌與腹陀　摩醯因陀羅
雞羅婆利師　乃至雪山等
【六九】 圓生樹。忉利天善見城の東北にある樹、諸天その下に集つて欲樂を受ける所なり。
【七〇】 嬌微那。地婆訶羅は拘耕羅と譯し賢首は之を此の樹は諸天子聚集して戲論する處なりと注してゐる。
【七一】 絆住劍摩羅。地婆訶羅は半挂婆羅とし、賢首は之に注して、是は石の名で諸天子等が此の石上に集つて贍部果を食ふ處なりとする。
【七二】 等引。定の別名。
【七三】 地婆譯は遍處無色定と作す。
【七四】 耶定。邪定なるべし。
【七五】 薩婆若(Sarvajña)一切智。

心を超えて　妄情の境界に非ず。　如來密嚴刹は　終なく亦始なし、　微塵、自性に非ず　樂欲に由るに非ず。　大自在の作に非ず、　無明愛業に非ず。　但無功用なる妙智の　所生に由るのみ、　欲色無色を出で　無想の暗網を超ゆ。　密嚴微妙土は　是れ[五八]阿若悉檀なり。　諸の因明者の　所量の境界に非ず、　勝性[五九]自在と[六〇]聲論と　及び吠陀等の宗の　能く開顯する所に由るに非ず、　乃至[六一]資糧位の　智慧も了する能はず、　唯是れ如來　及び十地の智境のみ。　仁者今諦聽せよ　愚夫は世間に迷ふ、　業及び非業の爲に　我れ今此の義を演べ、　勝定を修する者をして　安樂を獲得せしめん。[六二]內外の一切物　見る所唯自心のみ。　有情心に二性あり、　能取及び所取なり、　心體に[六三]二門あり　卽心に衆物を見る。　凡夫性は迷惑して　自に於て了する能はず、　瓶の色相を現ずる如きも　無體にして唯自心のみ、　羸定及び諸仙は　此の義に於て惑亂し　眞實理を捨てて　分別路を行く。　是の心に二性あり、　鏡像、月影の如し、　目に翳あれば、　妄に毛輪を見るも　空中に毛輪なく　應に珠瓔珞なかるべき如し。　但病翳眼に從つて　斯の若くにして顯現するのみ、　虛妄計著者は　覺せずして恒に執取し、　廣く諸の嚴飾、　種種の梵等の相を現ず、　一切諸の有情と　及び瓶衣等と、　內外の種種の事　皆悉く心より起る。[六四]此の密嚴の妙定は　餘の所有に非ず、　若し修行者あらば　衆福地に生ぜん、　或は欲自在に生じ、　或は色界天、　乃至無相宮　色究竟天處、　空識無所有　非想非非想(に生じ)、　種種の諸の宮殿に於て　漸次に貪欲を除き、　久しからずして彼の　密嚴觀行宮に生ずるを得、　衆の佛子圍遶し　自在にして遊戲せん。　汝應に此の定を修すべし、　如何ぞ親屬に著する、　親屬は常に繫縛にして　輪廻生死の因なり。
男女の意惑亂し　精血共に和合すること、　蟲の泥より生ずるが如し、　此の中生も亦爾り。
九月或は十月に　彼の體漸く增長し、　時至りて出胎し已ること、　譬へば蟲の蠕動するが

【五八】阿若悉檀。完全に成就された義。
【五九】自在。自在等因宗の略で卽ち自在天外道なり。
【六〇】聲論。婆羅門師の所說で四吠陀を崇拜すれば其の聲は諸法の實義を詮せし梵王の聲なれば是れ常住なりと。
【六一】資糧位。三乘のこと。
【六二】自下廣答。これに五節あり。

第一節、衆生之心等の文を釋す。

【六三】二門。見分相分なり。顯識中所現の見分が還つて自心所現の相分を取る。故に卽心見衆物といふ。
【六四】**第二節、密嚴佛土の下の文を釋す。**

情の縛因なり、慧に因つて解脫を得れば安樂にして自在なり。』と。
[五四]時に寶髻菩薩殊妙の座に坐し、金剛藏に向つて是の如き言を作す、
『諸の俱胝刹に遍ねく尊者を上首と爲す。最妙智を成就し所知法に了達し、無量の悉檀に於て皆已に明見を得たり。今修行衆に在りて能く彼の疑を淨め、有情身の一切の本起を覺察し、妙音を以て演暢す劫を窮むるも盡す能はず。應當に衆會の爲に、諸の逆順を離れたる似非似等の因及び眞實の法を說き、此の諸智者をして心淨うして疑あるなく、諸蘊の因を捨て久しからずして解脫を得しむべし。蘊の因たる法非法は此身後身を生ず。智は則ち能く苦を脫し受は則ち堅縛と爲す。有情心の起る所は色及び明に由る。作意等の衆緣は諸境に馳散し、迅疾なること奔電より[五五]甚しく覺知を得べきこと難く、無明及び愛業之を以て濁亂す。諸法は意を先導とす、意は速かに意は殊勝なり、法と意と相應して皆意を以て性と爲すこと、譬へば摩尼寶の衆彩を顯現するが如し。是の如きの妙義佛子何ぞ說かざる。衆色摩尼の色に隨つて顯現する如く、仁者の瑜祇中に照曜することも亦是の如し。如來像を具足して恒に自在宮に住し、佛子衆圍遶す、宜しきに隨つて應に爲に說くべし。』と。
[五六]爾の時に金剛藏菩薩摩訶薩法に於ける自在者、復た大衆に告げて言ふ、
『密嚴微妙土は是れ最勝寂靜なり、亦是れ大涅槃解脫淨法界なり。亦是れ妙智境及び大神通なり、諸の觀行を修する者の所依の妙刹なり。不斷亦不[五七]壞常住無變易なり、水も亦濡す能はず、風も亦燥(かはか)す能はず。瓶等の體の如く勤勇にして成じて壞するに非ず、似不似の因の二種もて成立する所に非ず。宗及び諸分を立つるは皆是れ不定法、宗及び因を以てするは各差別を執るが故なり。密嚴微妙刹は體は是れ轉依識にして、分別

【五四】自下後段、問答によつて廣く道理を陳ぶ。
【五五】甚。麗本其に作り、三本甚に作る。地婆譯は其心速疾とす。
【五六】金剛藏の答。初に略答、後に廣答。
【五七】壞。麗本境に作り、他の三本には壞に作る。地婆譯には不壞不滅とす。

熏習に染するなきこと、蓮の水に著せざるが如く、猶ほ空の塵に染せざるがごとく、日月に雲翳なきごとし、瑜伽者亦爾り、速かに是の觀行を修せば　如來に攝持せらる、之を沐するに淨戒の流(を以てし)　飲むに智慧の液を以てし、勝戒智を修するに由つて　生死に解脫を得ん。　天主應當に知るべし、有情の[五〇]蘊處界は　衆法の合成する所にして、悉く皆無所有なり。　眼色等の因緣にして　識を生ずることを得ること、猶ほ火の薪に因つて熾なるがごとく、識の起るも亦復た然り。　境の轉ずるは妄心に隨ふ　猶ほ鐵の磁石を逐ふがごとく、乾城陽焰の如し、愚に渴の取らるゝごとし。　中に能造物なく　但心に隨つて變異するのみ。　復た乾城の人の　往來皆不實なるが如し、衆生身も亦爾なり　進止悉く眞に非ず。　亦夢中の見の　寤めて後卽ち有に非ざる如し、妄に蘊等の法を見るも　覺め已れば本と寂然たり。　四大微塵の衆も　心を離るれば無所得なり、世間の[五一]持すべきもの　孰れか四大成に非ざる、譬へば風疾の緣より、或は諸境を現見するごとし、起屍に作者なき如し、世間の法も亦然り、汝等諸佛子　應當に善く觀察すべし。　世間の諸の動植は　猶ほ水の聚沫の如し、瓶衣等の妄想は　不實なること陽焰の如く、苦樂等の諸受は　之れを水上の泡に方ふ。　衆行は芭蕉の如く　中に堅實あるなし、是の識は幻事の如く　虛僞にして悉く眞に非ず。　彼の三界中に於て　動と不動の法と　皆夢境に同じく　迷心の所現なり。　亦幻化の事　及び乾闥婆城の如く、　但愚夫を誑かすのみ　初より眞實あるなし。　佛子此の法を覺れば　其の心無所畏にして、　慧火諸の患を焚いて　卽ち密嚴國に生ぜん。　世間は皆無相なり　相に繫縛せらる、　無相を吉祥と爲す、　相は[五二]乃ち心の境界なり。　心の境界は眞に非ず　眞は慧の境界たり。　衆相を遠離す、[五三]慈悲の所行なり。　無相にして一切に遍ねくば　三界皆淸淨なり、　色聲等の衆相を　名けて三界の法と爲す。　一切の諸根境は　有

【五〇】蘊處界。五蘊・十二處十八界の略名。

【五一】持。麗本には特に作り、地婆譯他の三本も持に作る。正藏は執に作るも、地婆譯に執非大種之所合成とあり。

【五二】乃。麗本には及に作り、三本に乃に作る。地婆譯に相是心境とあり。

【五三】慈悲三所行。地婆譯には非心所行に作り賢首は忘心所行に非ずと解せり。

境に住せば、 即便ち聲色の爲に 誑惑せられて取著を生ず、 堅固を得る能はず 亦散動心と名く、 斯の邪定の縛を以て 流轉して三界に生ず。 若し勝瑜祇あれば 善く三摩地に住し、 能所取を遠離して 寂然として心生ぜず、 是を眞實修。 無相觀の行者と名く、 密嚴土に生ぜんと欲せば 常に應に是の如く觀ずべし』と。

〔四五〕自作境界品第四

爾の時に金剛藏 菩薩摩訶薩 復た螺髻梵に告ぐ、
『天主應に當に知るべし、〔四六〕八種九種の心 常に無明と轉じて 能く諸の世間を生ずるは 皆心心法の現なり。 彼の流轉に由るが故に 諸識と諸根と 無明の變異する所、 本心は堅くして動かず。 世間及び根境は 皆〔四七〕十二支よりし、 能生及び所生は 刹那にして滅壞す。梵世より悲想に至るまで 亦因緣に從る、 唯天中天あり、 能く作所作を離る。 有情及び無情〔四八〕 動と〔四九〕不動法と 皆瓶等の如く 滅壞以て性と爲す。 天主應當に知るべし、 諸識は甚だ微細に遷流して速疾なり 是れ佛の境界なり、 諸仙及ひ外道は 假に是れ牟尼と稱するも 言を以て互に相縛し 而して種種の心を貪る、 此に於て生滅の識を 悉く皆知る能はず。
假使ひ一千歲 四吠陀を思唯し* 施を行じて梵天を得るも、 還つて當に退落あるべし。或は四月苦行し 祠祭して獲る所の果、 或は異類壇を修し 事火して求むる所の福、 或は三趣法を修し 宰羊して以て祈禱し 果を得るも還つて退あり、 梵王何ぞ悟らざる、 三德の果繫屬して 堅からざること芭蕉の如し。 唯智を以て解脫して 密嚴土に生ずるを得、定者は斯の境を證して 方に能く彼の宮に往く、 是の故に大梵天 應當に善く修習すべし。密嚴中の人は 生死の眷屬なく、 一切有情識は 斷ぜず亦壞せず。 諸業は染著なく、 亦

【四五】自作境界。地婆訶羅譯には顯示自作に作る。前二品の妙生の欣ぶべきも、胎生の厭ふべきも、唯一心作なるを說くを、此品の趣旨とす。
これに二段あり。
初段は金剛藏自ら唯識の道理を述ぶ。

【四六】八種九種心。八種とは眼識乃至阿賴耶識の八識を云ひ、九種とはこれに更に阿摩羅識を加へて九識とす。眞心に二門あり。依持門、緣起門なり。門を分たざれば八識と說く。二門を分てば、九識と說く。緣起眞心は賴耶なり、依持眞心は阿摩羅なり。

【四七】十二支。六根と六境をいふ。または六根と六識を擧ぐ。

【四八】動。欲界の業をいふ。

【四九】不動。上二界の法をいふ。

慕する所、最上の瑜伽者　地地に進修し、一切法を了知し　皆心を以て性と爲し、善く阿賴耶の　三性法無我を說き、其の身轉じて淸淨にして　密嚴國に生ぜん』と。

胎藏生品第三[三七]

爾の時に金剛藏　菩薩摩訶薩　復た螺髻梵に告ぐ、

『天主應當に知るべし、一切の有情身は　[三八]九物以て性と爲す、有爲相遷動し　能造所造倶に精血共に和合して　不淨を增長し、無量の諸業の　常に覆纒する所と爲る。毒樹の生ずる所　扶踈として蓊欝なるが如く、貪瞋等の煩惱の　增長するも亦是の如し。九月或は十月　滿足の時に生じ、既に胎藏より出づれば　顚危して諸苦を受く。天主應當に知るべし、此の諸の有情の類は　皆業力に由るが故に　驅馳運動して生ず。或は人中より來り　或は傍生を以て趣き、天と羅刹　龍及び諸鬼に非ず。或は[三九]持明族を以て　天趣の勝身たり、或は瑜祇中に於て　三摩地を退失し、輪王の貴族として　此の中に來生す。是の如く既に生じ已つて　諸根遂に增長し、親近の宿習に隨つて　復た諸業を造り、斯の業の大なるに由るが故に　諸趣中に輪廻す。若し諸の智者あり　法を聞いて覺悟することを得ば、文字分別を離れて　[四〇]三解脫門に入り、眞實理を證するを得、[四一]淸淨の殊勝　[四二]上上最も淸淨にして即ち密嚴に往き、能く倶胝刹に遍ねく　宜しきに隨つて應現す。天主是の如き生は　永く諸の險趣を脫せん、是を名けて丈夫と爲し、亦名けて智者と爲す、亦天中天と名け、佛子衆圍繞す。[四三]天主應當に知るべし、胎藏身は虛僞なり、自性より生ずるに非ず、癡愛の業よりに非ず。[四四]皆相に因りて有るを以て、了達せば滅して餘なし、亦分別及び　文字を離る、能く斯の如く觀ずる者は　即ち密嚴場に往かん。若し諸の修定の人　定の攀緣

【三七】胎藏生地婆訶羅譯には胎生に作る。此品は、前品中に說ける有身の者の所生を說くなり。此品に二段あり。**初段、衆生身の因成法を說く。**

【三八】九物。四相（生・住・異・滅）と四大（地・水・火・風）と不淨精血の九を指す。

【三九】持明族。陀羅尼を誦持し又は藥力を以て通力を成就せる仙人をいふ。

【四〇】三解脫門。無漏定を得る時にあらはれる三德目。一空解脫門、二無相解脫門、三無願解脫門。

【四一】淸淨。第八地に於て煩惱總て盡きるが故に言ふ。

【四二】上上最淸淨。十地に至つて細習都て盡きるが故に言ふ。

【四三】**自下後段、胎藏所生の生死果報の厭ふべきを說く。**

【四四】地婆訶羅譯には無明愛業因相而有とあり。

冠以て飾と爲し　圓光及び輪輻　種種皆成就し、宮殿を照曜して　能く外道の憍を除く。諸佛四時の中　恒に密嚴に依りて住し、而も一切處、現生に及び涅槃に　純善少滅の時に、惡生及び濁亂に於て　彼の意樂に隨つて　諸の有情を利益し、業用暫くも停ることなく密嚴刹に常住す。[三〇]此の清淨處　瑜祇安樂宮に、濁亂少減の時　如來相を顯示す、譬へば淨滿月の　影の衆水に遍ねきが如し。佛は一切身を以て　隨宜に應化す、如來の淨智境を觀行者は皆見る。或は大自在と現じ、或は那羅延と現じ、[三一]迦毘羅に成現して　空に住して說法す、或は園陀者、常行及び妙喜、童天及び[三二]尸棄　羅護都牟盧と現ず。或は緊那羅　甘蔗月種姓　及び諸の國王等と現じて、一切の瞻奉する所、或は大醫王と作りて衆人に示現す。金剛等の衆寶、銅鐵及び諸礦、明珠と鉛錫と、紅碧の二頗梨を、彼の諸の有情の愛樂に　隨つて顯現し、佛の加持力に由つて　彼をして悉く安樂ならしむ。天女も及び龍女も、乾闥婆の女も、欲界自在者も　其の心を動ずること能はず。欲境界を超勝し　及び色界色に勝り　空處及び識處　無所有の處　非想非非想も　彼に於て迷惑せず。[三三]無想の諸定者は　未だ惑纒を離れず、安に非ず淸淨に非ず　諸有に流轉す、有身者の生ずる所にて、密嚴國の如きに非ず。密嚴微妙の土は　清淨福を嚴と爲し、解脫知見の人の　最勝の依處なり。[三四]十種の自在[三五]六通三摩地を具ふるもの、皆以て意身を成じて佛の如く、彼に於て現ず。十地[三六]檀等の　波羅蜜を修行し、一切相好の花　常に以て嚴飾と爲す、分別を遠離するも　亦覺了なきに非ず、我が意根あるなくして　惠根もて常に悅樂す。施等の諸の功德　淨業悉く圓滿して　佛の勝所依たる　密嚴の淨國を得。此の土は最も微妙にして　日月の明を假らず、佛及び諸菩薩の　清淨光恒に照し、密嚴中の衆聖其の光聚日に逾ゆ、晝夜の時あることなく　亦老死の患なし。殊勝密嚴宮は　諸天の希

【三〇】自下、牟尼の所說は見るを得べき難きを說く。
【三一】迦毘羅(Kapilavastu)悉多太子の生處。
【三二】尸棄(Śikhin)火と譯す。大梵天王の名。
【三三】自下、如來の密嚴に住して業用の停まらざるを說く。
【三四】十種自在、一命自在、二心自在、三資具自在、四業自在、五受生自在、六解自在、七願自在、八神力自在、九法自在、十智自在。
【三五】六通。三乘の聖者の得る所の神通。前掲。
【三六】檀。檀那(Dāna)の略。布施と譯す。

の邊を遠離す。是れを最清淨　中道の妙理と名く、密嚴の諸定者は　此に於て能く觀察し、著を離れて轉依し　速かに如來地に入る』と。

[二六]時に諸の佛子衆　尊より是の語を聞いて、頭面に雙足を禮し　恭敬して白して言さく、『我等法を[二七]愛樂すること　渴人の飮むことを思ふが如く、遊蜂の蜜を念ふが如し。瑜伽自在尊　唯願はくは正しく宣說して　諸の菩薩衆をして　定に於て自在を得しめたまへ。智慧大威德　及び諸刹土の王　深く觀行を解する者、咸如來所說の　甚深の法を聞かんと欲す、皆尊者の　微妙梵帝の聲を聽かんことを願ふ。如來の悅可する所の　深遠善巧の聲もて殊勝の義を演說して　悉く明了なるを得しめたまへ』と。

金剛藏告げて言はく、

『如來所說の義は　眞實甚だ希有にして　相を離れ見る可きこと難し。空中に物なきに、影を見ることを希有と爲す如し。如來所說の義の　希有なるも亦復た然り。空中の風鳥の跡は　其の形見るべからず、牟尼の妙理を演ぶる　見難きことも亦復た然り。世間の事の喩は　智者能く明了するも、諸佛の宣說したまふ所の　譬喩は知る能はず。[二八]今我が所見は夢乾城等の如し、此の會に觀行あり　大智慧を具ふる者、眞實義に通達して　皆明了ならざるなきも、云何ぞ是の人　佛の難思境を說くことを爲ん。然るに今開演する所は　佛の威神力に憑る、一切最勝子　至心に應に諦聽すべし。如來の妙言說は　句義皆相應す、心境界を超越し　譬喩を遠離すること、猶ほ蜂の花を採るに　先づ精粹を取り　是の諸の後至者　皆悉く其の餘を味ふ如し。勝牟尼も亦然り　先づ妙法味を得て　我れは則ち其の餘を飮み　今衆の爲に宣說す。[二九]天中天の境界　諸の明智を增悅すること、實に意の測量し　言象の能く表はすべきに非ず　人の形色に示同して　相好以て身を嚴り、勝妙宮に現じて　實

【二六】自下、第二の別問廣答。

【二七】愛樂。麗本愛樂に作り、三本愛樂に作る。

【二八】今麗本令に作り、他の三本には今に作る。

【二九】自下、如來所說の語義眞實を說く。

是の如く勸請し已つて　各勝座に坐す。　梵王、佛力を承けて　還つて此の會中に來り、　復た金剛藏に白して　是の如き問を作す。

『今此の諸の大會の　嚴飾未曾有に、　悉く是れ尊弟子の　聰慧等倫なるが、　皆尊者の處に於て　渴仰して求法す。　我れ今猶ほ未だ知らず　向ふ所何等と爲すやを。　憍臘と勝墮と　及び頂生、　輪王なりや、　是れ少年馬と爲すや、　是れ古仙傳と爲すや、　甘蔗種の子　千弓持國王なりや、　欲色無色中の　人天等の法なりや、　是れ菩薩行　獨覺及び聲聞なりや、　乃至、修羅明　星象等の衆論たりや。　唯願はくは是の如きの事　次第に演說したまへ、　我等及び天人　一心に咸く聽受せん』と。

爾の時に解脫月　持世虛空藏、大勢、觀自在　總持自在主　寶髻と天冠と　金剛手、寂慧　及び寶手大士　幷に諸の最勝子、　皆倶胝剎より　來りて蓮華宮に坐し　咸く金剛藏に請ふ

『唯願はくは大慧もて　過去及び未來の　牟尼の淸淨智を說きたまへ、　仁の　佛より親受せるを　明了に心に疑はず、　此の衆皆聞かんと樂ふ　願はくは尊時に演說したまへ』と。

定王金剛藏　普ねく大衆に告げて言はく、

『如來所說の法は　我が具さに能く演ぶるに非ず　唯佛菩薩　威神の所護を除くのみ。　我れ今至心に　自在淸淨宮　摩尼寶藏殿の　佛及び諸弟子を禮す。　我れ敬心を以て　如來淸淨智を說き、　能く佛種を紹がしめん　汝等應に諦聽すべし。　此れ諸王の論　及び輪王の軌儀に非ず、　但密嚴如來の　種性を示すのみ。　正定者の境界、諸佛の勝事、　如來の微妙智なり能所覺を離る、　是の故に我が力の　能く此の甚深を演ぶるに非ず、　但佛の威神を以て　佛より聽受せんのみ。　此の智甚だ微妙にして　是れ三摩地の花なり、　佛は密嚴中に在して正受して開演したまふ。・諸の言說及び　一切見　若しくは有若しくは無等の　是の如き四種

在者は　彼の能く詣る所に非ず、〔二三〕空處〔二四〕識處と　及び〔二五〕非非想と、　幷に餘の外道宗の　邪定者の能く往くに非ず、　云何が善巧を作して　密嚴に至るを得ん。　或は天中天の　威神力の加護を以て　能く至亟し行いて　密嚴宮に會するを得しめん』と。

螺髻梵聲を發し　即時に盡く歸命すれば、　佛の空界に滿ち　威光の熾然たるを見る。　彼の梵王に告げて言はく、

『汝當に本殿に還るべし、　如來の密嚴刹は　是れ觀行の境なり、　非想すら尚ほ階し難し、色者何ぞ能く往かんや』と。

梵王諸佛に從つて　是の如く告ぐるを聞き已つて、　退いて本處に還り　尋いで梵天宮に至る。

時に淨居諸天　各各相共に議す、

『螺髻梵天主の　威神もてすら往く能はず、　當に知るべし密嚴土は　勝妙にして思議し難し、

如幻定に非ざるよりは　誰か能く斯の刹に詣らん』と。

此の會、天衆の　稱讚功德の聲を聞いて　奇特心を生じ、　乃ち金剛藏に白さく、

『我等皆聞かんことを樂ふ　唯深法を垂演したまへ』と。

爾の時に金剛藏、即ち大衆に告げて言はく、

『如來所說の法は　誰か能く盡く敷演せん、　自覺の聖智の　境界は不思議なり。　深觀行の人に非ずんば　云何が開示すべき』と。

時に持進夜摩　自在の諸佛子、　異口同音に言はく、

『唯願はくは速かに宣說したまへ』と。

神通と曼殊と　慈氏、緊那王　及び餘の修定者　咸く皆是の請を作す、

『諸天持明仙　空中に衆樂を奏し　同心にして勸請す、　唯宣說を爲すことを垂れたまへ』と。

〔二三〕空處。無識界のこと。また四空處の一、空無邊處の略名。

〔二四〕識處。識無邊處をいふ。

〔二五〕非非想、非想非非想處の異名。

ずること、猶ほ海波浪の　風縁の動ずる所たるが如く、　洄複して騰轉し　斷絶の時あることなし。　識浪も亦是の如し、　境界の風に撃たれて、　種種の諸分別　内より執取す。　地に分別なきも　庶物依つて以て生ずるが如し、　藏識も亦復た然り、　衆境の依處なり。　人己が手を以て　還つて自ら其の身を捫るが如く、　亦象の鼻を以て　水を取つて自ら霑灑するが如く、　復た諸の嬰孩の　口を以て其の指を含むが如し。　是れ識分別の　現境に還つて自ら縁ずるを知る、　是の心の境界　普く三有に遍ねし。　久しく觀行を修する者にして　能く善く通達すれば、　内外の諸世間は　一切唯心の現れなり』と。

二　爾の時に金剛藏　是の妙法を說き已り、　默然として止住して　法界を思惟し、　微妙普遍の定もて　則ち諸佛の境に入り、　無量の佛子の、　當に修して密嚴に住すべきを見、　即ち禪定より起ち、　光を放ちて普ねく　欲色と無色と　及び無想天宮を照し　是の如き光明中に復た諸の佛刹を現ず、　悉く無量佛を見るに　相好妙端嚴にして　種種の微妙色　皆佛身より出で、　其の愛樂する所に隨つて　世間に利益を作す。　皆彼の佛子をして　密嚴の名を稱讃せしめ、　欣然として相顧視し　復た是の如き說を作す。

『密嚴は妙無垢にして　能く一切の罪を除く、　觀行者の勝處にして　其の土最も殊妙なり。我等名字を聞きて　心に大喜悅を生じ　各其の所住より　倶に來りて密嚴に詣る。』と。

三　色盡螺髻梵と　及び淨居天と、　此の密嚴の　佛子所生の處を希慕す、　同心にして共に聚まり　咸く梵王を請して言はく、

『我等今云何が　密嚴土に至るを得ん、　天王若し彼に往かば　我等當に營從すべし』と。

爾の時に螺髻梵　諸天衆の言を聞き、　遽かに卽ち與に同行し　中路にして適く所に迷ふ。

梵王先づ覺悟し　慧を以て審かに觀察す、　彼の勝觀行の境　何階にして至る可き。　欲色自

【二】　自下、第三、一重の問答によつて廣く密嚴淨土の功德を明す。これに二節あり、初は總問略答、後は別問廣答なる。

初に總問略答。

【三】　色盡。色究竟のこと。

業風に轉ぜられる。陶師輪杖を運びて　器成りて所用に隨ふが如く、藏識と諸界と　共力して成ぜざるなし。内外の[一五]識世間　彌綸して悉く周遍すること、譬へば衆星の象の　布列して虛空に在り、風力に持せられて　運行して常に息まざるが如し。空中の鳥跡の　之を求むるも能く見るなきも、若し虛空を離るれば　飛翔得べからざるが如く、藏識も亦是の如く　自他身を離れず。海に波濤を起すが如く　空に萬像を含むが如し、丈夫識も亦爾なり。諸の習氣を蘊藏すること、譬へば水中の月　及び諸の蓮華の　水の相雜らず　水の著する所と爲らざるが如く、藏識も亦是の如く　習氣能く染するなし。目に[一六]童子あるも　眼終に自ら見ざるが如く、賴耶は身に住して　諸の種子を攝藏し　遍ねく[一七]壽煖識を持すること　雲の世間を覆ふが如く、業用曾て停らざるも　有情の能く見るなし。[一八]身は衆色より成り　又能く諸色を作すこと、陶師の依らずして泥を以て　衆器を成すが如し。世間妄に分別して　牛等に角あるを見て、角の有に非ざるを了らず、因つて兎に角なしと言ふ。分析して極微に至るまで　角を求むるも所有なし、要ず有法を待つて　無見を起す。有法本と自ら無なり、無見何ぞ待つ所あらん。若くは有若くは無法　展轉して互に相因る、有無の二法中　分別を起すべからず。若し所覺を離るれば　能覺即ち生ぜず、譬へば旋火輪　翳幻乾城等の如し。皆少所見に因つて　是の諸覺を生ず、若し所因を離るれば　此の覺即ちあるなし。名相互に相繫り　習氣に邊あるなし、一切の諸分別は　意と倶に起る。有情は流轉するが故に　圓成則ち證せず。無始の時より積集し　諸の妄境に沈迷し、戲論して熏習し　種種の心を生ず。[一九]能取及び所取、有情心の自性なり　瓶衣等の諸相、實を[二〇]見るに聞くべからず、一切皆覺あるのみにして　所覺の義皆なし。能覺所覺の性　自然に是の如く轉ず、愚夫は除斷せず　習氣もて心迷惑す。賴耶及び七識　時ありて頓に生

【一五】識。他の三本には諸に作る。綸字、麗本には給に作るも、地婆譯も三本も論に作る。

【一六】童。他の三本には瞳に作る。

【一七】壽煖識。壽は命、識はあたゝかさ、識は意識の義、一括して生命を指す。

【一八】この四句、地婆譯になし。

【一九】能取。見分心をいふ、所取とは見分塵なり。自性とは自體分なり。

【二〇】地婆譯には離心無所有と作す。

唯惑亂して　亦住ありと爲すや。　梵王の所作と爲すや、　那羅延の作なりや、　雄猛及び勝論なりや、　數論の自作なりや、　勝性の所作なりや、　自在自然なりや、　時に無明の所生たり　愛業の所作なりや、　天仙及び世定(の人)は　皆悉く疑惑を懷く。　先に體あるなしと爲すは　猶ほ幻夢の如く、　亦熱時の焔及び　乾闥婆城の如く、　無始の妄分別　彼彼に隨つて相續し、[7]能取所取を起すは　蛇に二頭あるが如く、　亦起屍の行き　木人は機に轉ぜられ、空中に垂髮及び　旋火輪を見るが如くなるや。』と。

[8]爾の時に金剛藏菩薩摩訶薩、普賢衆色大威德菩薩摩訶薩及び餘の大衆に告げて、偈を說いて言ふ、

『世間の衆色像は　作者より生ぜず、　亦[9]劫比羅[10]因陀羅等の作に[11]非ず　亦祠祭の果に非ず。亦[12]圍陀の敎の　彼に多因種あり、　修行常に住せざるに非ず。　亦復た、　能持世間因　有るなきに非ず　第八[13]丈夫を謂ふ、　是を名けて藏識と爲す。　此に由つて衆色を成ずるは衆瓶を轉輪するが如く、　油の遍ねく麻に在り　鹽中に鹹味あるが如く、　無常の色に遍きが如し、　丈夫識も亦然り、　香の沈麝に在り　及び光の日月に居するが如し。　能所作及び有無宗を遠離し、　亦一異、一切の　外道の過を離る。　智の尋求する所に非ず、　分別を得べからず。　定心解脫者の　自覺の所證なり。　若し阿賴耶を離るれば　即ち餘識あることなし、　譬へば海、波浪の如し、　海と異らずと雖も、　海は靜かにして波は去來す、　亦一と言ふ可からず」。

譬へば修定者の　內定淸淨心　神通自在の人の　所有の諸の通慧の如し、　觀行者は能く見るも　餘の了する所に非ず、　是の如き[14]流轉識は　彼の藏識に依つて住す、　佛及び諸の弟子定者は常に觀見す。　藏識の世を持するは　線を以て珠を貫くが如し、　輪と車と合して

【七】　取。麗本耶に作り、他の三本には取に作る。下も同じ。地婆訶羅譯も能取所取と作す。

【八】　第二、頌金剛藏の答。初三行は破邪、後行は顯正。

【九】　劫比羅。仙人の名。また四天王の別名。

【一〇】　因陀羅。天帝の異名。Indra.

【一一】　非。麗本如に作る。三本は非とし、地婆譯も非とす。

【一二】　圍陀（Veda）婆羅門所傳の經典、前揭。次下三句を地婆譯には毘陀所說因、互違無定義の二句に作る。圍陀敎の說く所區々として一定せざるをいふ。

【一三】　丈夫。八識の中に於て最勝なるが故にいふ。

【一四】　流轉識。八識中第八識を本識と云ふに對し他の七識を流轉識と呼ぶ。

卷の中

入密嚴微妙身生品之餘

[一]爾の時大會中に普賢衆色大威德菩薩摩訶薩と、其の同類の持世菩薩摩訶薩・持進菩薩摩訶薩・曼殊室利菩薩摩訶薩・神通王菩薩摩訶薩・得大勢菩薩摩訶薩・解脫月菩薩摩訶薩・金剛臍菩薩摩訶薩・大樹緊那羅王菩薩摩訶薩・虛空藏菩薩摩訶薩等乃至摩尼大寶藏殿の無量の諸天と有り。復た密嚴土中の諸の瑜祇衆と、彼の無量倶胝の佛刹より來りて法を聽きし者と有り、密嚴甚深の功德を[二]聞便し、法に於て恭敬して定んで轉依を得、恒に此の土に居て餘所に生ぜず、咸く共に未來世中の一切の有情を悲愍し、普ねく等慈もて爲に饒益を作さんと欲し、各共に金剛藏菩薩摩訶薩を瞻仰して、一心同聲に偈を以て問うて曰く、

『尊者辯才を具ふ　唯願はくは開示せられよ。　世間の諸の色像は　其れ誰の所作なるか。　工の瓶を造るに　泥輪以て埴を埏すが如しと爲すや、　奏樂者の　擊動して音を成す所の如しと爲すや、　一物體に　三種の自性あるが如しと爲すや、　已成未成は　咸く一物に在りと謂ふや。　云何が種種色を　一物にして建立するや、[三]兜率の所作と爲すや、　夜摩の所作なりや、　他化自在の作なりや、　大樹緊那羅なりや、[四]善見天の所作なりや、　色究竟天なりや、　螺髻梵王の作なりや、　無色天の作なりや、　一切天主の作なりや、　自然の所作なりや、　變化の所作なりや、　諸佛の所作なりや、　餘の世界中の　佛子の所作と爲すや。　是の諸の作せる衆色は　惑亂して建立するなり、　惑亂を起す所　鹿の陽焰を見るが如し。[五]譬へば瓶處を　德の所依と爲すが如し、　一切諸の世間は　能く[六]處に住するとは　德者は德に屬するに非ず、　德は德者に依るに非ず。　展轉和合するが故に　衆德の集成する所なり。　諸色は

[一]自下、第二、諸大衆金剛藏との問答によつて釋す。これに二節あり。**第一節は大衆の問。**

[二]聞便。地婆訶羅譯に聞說に作る。便恐らくは說字の誤寫なるべし。

[三]兜率乃至緊那羅は欲界中の大力者を擧ぐ。

[四]善見乃至螺髻梵王は色界諸天の主。

[五]譬へば以下外道の所計を破す。微塵合成して瓶あり、瓶に水を盛るの德あり。處は微塵を指す。

[六]住。依をいふ。

り。

【二三四】施無遮。無遮とは寛容にして遮ぎることなきをいひ故に施無遮とは六波羅蜜中布施に當る。

【二三五】金剛藏以下廣釋長行、これに六節あり。

【二三六】善逝。佛十號の一。

【二三七】第一節、入證行を說く。

【二三八】力。麗本には方に作り地婆譯にも他の三本にも力に作る。

【二三九】第二節、證有行を說く。

【二四〇】首楞嚴定。健相定・健行定などと譯す。この定を得れば諸魔も壞すること能はず。

【二四一】第三節、歷事諸佛を說く。

【二四二】第四節、衣住道行を說く。

【二四三】第五節、不住生死を說く。

【二四四】第六節、對治の法を說く。

【二四五】相。麗本には於に作り、地婆譯にも他の三本にも相に作る。

貪病衆苦に煎らるゝも、下賤と形殘と、之に安んじて憂惱せず、蜂の船上に處るが如く、大海中に飄然して沿泝して往來すること須臾に數萬里爲に非我の法生死の速無常なるを說きて、其をして滅壞して刹那も暫くも住せざるを知らしむる。[二三五]或は說く諸佛及び諸菩薩明かに衆の有情の、醉うて渴愛に在り、分別に苦逼せられて無[二三六]相法中に於て妄に種種相を取り、能所取に計著し心恒に纒紲せられて、解脫を得る能はず、生死海中に溺れて馳蕩して休息なく、貧賤にして孤露往來に所依なきこと、譬へば大海中の蛛蝥の網の住み難きが如し。諸佛及菩薩は彼の住船者の如く、普く諸の有情を憐んで生死の難より運出し、其の若干類に隨つて爲に差別身を現じて施戒等の門種種の諸の勝行を說くを』と。

五樂變化天、六他化自在天をいふ。
【一八七】梵摩梵天(Brahmadeva)のこと。
【一八八】怛麗本には恒に作り、三本には怛に作る。怛の字可なり。捨軍怛羅族を地婆訶羅譯には舍君羅帝族に作る。Śakuntala。賢者は昔の日輪王、是れ如見の祖とす。
【一八九】決定種性。たゞ頼耶なれば決定成佛す。これによつて悉皆佛性といふ。
【一九〇】第二節、五法門を釋す。
【一九一】外相、所緣緣を指す。麗本には外想と作し、地婆譯も三本も外相と作す。
【一九二】心習氣、因緣法を指す。分別心より生ずればなり。
【一九三】末那。法執末那と人執末那とあり。
【一九四】諸根。眼等の五根を指す。
【一九五】意。意根を指す。
【一九六】緣。六塵を指す。
【一九七】正智麗本に王智に作り、三本も地婆訶羅譯正智とす。
【一九八】此正智をいふ。能證所證の平等一味なるを眞如非異此といふ。
【一九九】諸眞俗の境界一に非るを諸といふ。
【二〇〇】第三節、三性門を釋す。
【二〇一】名句及文身。非色非心の意。
【二〇二】意。意識なり。
【二〇三】我生盡。小乘の四智は分段生死につきていふ。今このは大乘四智にして、變易生死につきていふ。
【二〇四】第四節、二無我門を釋す。
【二〇五】第五節、逐難重釋。
【二〇六】別異。分別の意、地婆訶羅譯には簡異に作る。
【二〇七】動非動。無漏は三界を動出するが故に動と言ひ、有漏は三界を出でず恒に生死に在るが故に非動と言ふ。
【二〇八】意識因所緣。此句中の因の字、三本には同に作る。地婆訶羅譯には意識を所緣とす。此の方明了なり。
【二〇九】因、地婆訶羅譯には依と作す。
【二一〇】鞦韆。ぶらんこ。
【二一一】此の三。前揭の火輪垂髮乾闥婆城の譬、及び鏡中の像の譬の三を指す。
【二一二】第六節、持進以下密嚴國を歎ず。持進とは大乘の菩薩中に於て神通の勝れた菩薩。
【二一三】翠目乾連。小乘中に於て神通第一と稱せらる。
【二一四】極樂。西方無量壽國。妙喜剎。妙喜はまた現喜ともいひ、東方妙喜世界。
【二二五】十地等。この經が諸經の母なるを歎ず。
【二二六】第七節、世尊以下如來所現の種種身を釋す。
【二二七】修觀行者。觀世音・大勢至等の菩薩をいふ。
【二二八】孔雀等の三句、地婆訶羅譯には孔雀素羅瞿、珊瑚蓮電等の二句に作る。
【二二九】拘摩 Kgama. 麻衣。
【二三〇】帝青寶。帝釋天所有の青珠の寶玉をいふ。
【二三一】文。書文のこと。
【二三二】商佉 śaikha 蠡貝のこと。
【二三三】先。麗本光に作り、地婆譯にも他の三本にも先とあ

すを得べからず。　彼れ皆蓮華生にして　無量壽を恭敬し、　善く三摩地を修して　佛の功德を愛樂す。　專精に廻向する者は　悉く皆彼の國に生じ、　衆相以て莊嚴し　皎鏡に塵垢なし」と。

[二三六]金剛藏說き已つて　自ら己身を現ずること、　或は指節の如く　或は復た芥子の如く、　或は細きこと毫端の、　百分の一分の如し。　或は[二三七]善逝身、　聲聞と緣覺と、　衆色及び餘類乃至種種形を現じ、　各其の宜しき所に隨つて　諸法を說く。　或は[二三八]說く菩薩　諸地に入りて、　五法、三自性　八識、二無我を了知し、　如幻定、　隨意所成身、　自在諸神通、十[二三九]力四無畏を得、　不退轉に住して　淨の所依を得、　佛地中の　無漏の蘊界に入りて、永く餘の變易を離れて　寂然として常住するを。　或は[二四〇]說く菩薩、　善妙にして遊履すること　猶ほ夢像水月のごとく、　瑜祇所行の道もて[二四一]首楞嚴定を得、　十種如幻身　十無盡願圓かにして　成等正覺を證し、　妙蓮華座に據りて　相好甚だ端嚴に、　無量の諸佛子　恭敬して圍遶するを。[二四二]或は說く、諸菩薩、　願力もて衆形を現じ、　遍ねく十方に遊んで　恒沙の佛に歷事す。　是の諸菩薩等は　其の身甚だ微妙　出入常に自在にして　有無中に住せず。譬へば天神仙　及び諸の健達縛の如く、　彼の妙高に依つて住し、　或は虛空に處るも、　地行の諸の有情　之に對つて而も見ず。　是の如く諸菩薩の　形を現はすも亦復た然り。　觀行を修する人に非ずんば　能く之を觀る者なきを。[二四三]或は說く、諸菩薩　勝靜慮を得て　處處に現じて生を受け　無餘界に入るを示すを。　或は說く、　諸菩薩　能く定力を以て　自在に所依を轉じて　眞實際に住せず、　無量の有情の處に　隨つて差別身を現ず。　身は種種に殊ると雖も　其の心は一平等なること、　猶ほ地水の如く　亦日月の如きを。[二四四]或は說く、　諸菩薩　常に大悲心を以て　諸の有情を憐愍し　輪廻して生死に處し、　跉跰して窮獨を受け、

【一七二】一往來。斯陀含を指す。
【一七三】一間滅度。阿那含を指す。
【一七三】中般、欲を離れ已つて來た初禪に至らず、其の中間に於て涅槃を得るをいふ。
【一七四】生般。初禪の報を受けて涅槃を得るをいふ。
【一七五】有行。初禪に生れながら鈍根の故に而も精勤修行して涅槃を得るをいふ。
【一七六】無行。利根の故に初禪に生れ已つて無漏を起し涅槃を得るをいふ。
【一七七】上流。阿那含身は上二界に受生するを指す。
【一七八】下中上。聲聞・緣覺・菩薩のこと。
【一七九】十一。一苦智・二集智・三滅智・四道智・五等智・六比智・七法智・八他心智・九盡智・十無生智、十一如實智を指す。
【一八〇】十二。初の四智の各各に三智を開く。
【一八一】十六。四諦智の各各に四智を開くを指す。
【一八二】此。根を指す。
【一八三】彼。境を指す。
【一八四】自下後段。前の所作を廣釋す。これに七節あり。
第一節、八識門を釋す。
【一八五】賴耶。如來藏心を賴耶と名く。これ體を出すなり。
【一八六】六天。一四王天、二忉利天、三夜摩天、四兜率天、

すべし。　欲色無色界　無想等の天宮を　如來は逈に已に超え・密嚴に依つて住したまふ。　佛及び諸
此の土の諸の宮殿が　蓮の衆飾を被る如く、　是の一切如來は　淨智の妙相なり。　自の難思
菩薩　常に其の中に在したまひ、　[二二七]世尊恒に禪に住し　寂靜にして最も無上なり。　極樂莊嚴國
定に依りて　衆妙色を現じ、　色相に邊あることなく　餘の能く見る所に非ず。
の　世尊は無量壽なり、　諸の[二二八]觀行を修する者の　色相皆亦然り。　或は天中天を見るに、
赫奕として衆彩を含み　瞻蔔雌黃色にして　眞金明月の光なり。　[二二九]孔雀の頭(の如く)蓮の如く
相思子の聚(の如く)　虹霓珊瑚の色(の如し)、　或は淸羸身を現じ、　或は[二三〇]芻摩衣を著し、
或は草茅等に寢ね、　或は蓮華上に處りて　猶ほ千日光の如し。　或は諸菩薩を見るに、
頂に盤龍髻を飾り　金剛の[二三一]帝の青寶もて　莊嚴して寶冠と爲す。　或は輪・幢・[二三二]文　魚　商[二三三]
佉等の相を見、　或は光麗色の蜺の空を挖くが如きを見る。　或は須彌山を以て　之を掌內に
置き、　或は大海水を持して　牛跡の中に安んず。　或は現じて人王と作り　冕服して軒宇に
當り、　輔佐皆恭敬し　共に國化を宣ぶ。　或は密嚴場に　寂靜なる修定者と現じて、　自證
境に於て[二三四]先佛所知の法を說く。　或は轉依を得て　心慧皆解脫するを說き、　自在三摩地に
して、　如・幻無礙身なり。　或は境に染せざるを現じて、　諸の取著業を斷じ、　智を以て
見薪を燒きて　諸有を受けず、　譬へば膏炷盡き燈滅して涅槃なるが如し。　或は諸度を修し
て　大會[二三五]施無遮に　持戒苦行等の　種種諸の儀則を示す。　極樂莊嚴國の人は、　胎藏生に非
ず、　微妙の金色身にして　光明淨く圓滿なり、　彼の衆の境界は　皆悉く瑜伽を具ふるも
若し密嚴に比すれば　百分の一にだも及ばず。　極樂界中の人は　自然に念に隨つて食し、
牟尼勝自在にして、　定を甘露味と爲す。　種種の寶樹林　其の下に遊憩し、　金沙其の地に
布きて　殊勝刹を顯現し、　淨妙の寶蓮は　功德水に開敷す、　是の如き殊勝の境も　喩を爲

【一六二】緣。賢首の疏には「禪」の誤ならんとある。四禪とは初禪、二禪、三禪、四禪をいふ。
【一六三】無色住。禪定に依つて得る所の正報。一空無邊處、二識無邊處、三無所有處、四非想非非想處の四あり。
【一六四】根力及神道。五根五力五神通のこと。
【一六五】覺支、心の偏正を觀察する法を覺と云ひ、その覺一に非ざれば支と云ふ。七覺支を指す、即ち七菩提分のことなり。
【一六六】等。八聖道を指す。
【一六七】苦法忍法智。欲界及び上二界の八諦を證する智を八智と云ふ。一苦法智、二苦類智、三集法智、四集類智、五滅法智、六滅類智、七道法智、八道類智、又八諦を觀じて正しく煩惱を斷ずる無間道の位を忍と呼ぶ。之に八忍あり。一苦法智忍、二苦類智忍、三集法智忍、四集類智忍、五滅法智忍、六滅類智忍、七道法智忍、八道類智忍、八智、八忍を合して十六と爲る。
【一六八】第八。道比智心を指す。
【一六九】七返有。須陀含を得て後阿羅漢を得て無漏智を起すまでに七生あるをいふ。
【一七〇】家家。須陀含より阿羅漢までの受身を指す。

す。　短長等の諸色と　音聲と香界と　甘苦堅滑等とは　[二〇九]意識因の所緣なり。　所有の諸の善惡　有爲無爲の法、　乃し涅槃に至るまで　斯れ智の境たり。　念念常に遷轉するは　皆識に因つて以て生ず。　末那の藏識を緣ずるは　磁石の鐵を吸ふが如く、　蛇に二頭あるが如く、　各別に其の業を爲す。　染意亦是の如く　阿賴耶を執取し、　能く我が事業を爲し　我所を增長す。　復た意識と倶に[二一〇]　因と爲りて轉謝す。　身に於て煖觸を生じ　運動して諸業を作し、　飮食と衣裳と　物に隨つて受用し、　騰躍し或は歌舞して　種種に自ら嬉遊す。　諸の有情身を持するは　皆意の功力に由る、　火輪垂髮　乾闥婆の城の如し。　唯自心なるを了せず　妄に諸分別を起す　身相器世間は　[二一一]鞦韆を動ずる勢の如し。　無力にして堅固ならず　分別も亦復た然り、　分別は所依なく　但自境を行く。　譬へば鏡中の像の　識種動じて見ゆるが如く、　愚夫は此に迷惑す　諸の明智者に非ず。　仁主應當に知るべし　此の[二一二]　三は皆識の現なり、　斯に於て遠離する處　是れ卽ち圓成實なり。[二一三]　持進等の菩薩　及び[二一四]　聖目乾連、　聲を尋ねて與に遍ねく　百千萬億の刹を觀るに、　種種の寶もて嚴飾し　綺麗なること等雙なし、　彼の微妙境に於て　密嚴最も殊勝なり。[二一五]　極樂・妙喜刹　下方倶胝國の　一切諸の世尊　皆斯の如き土を讃して、　終始あるなく　威德の化自然なりと謂ふ。　本と昔佛の居ませし所にして　三界を超出し、　豐樂非執受にして　寂然として自ら無爲に、　自利及び利他の　功業悉く成滿す。　欲界中に於ては　成佛して佛事を作さず　要ず密嚴土に往いて　無上覺を證し、　倶胝の諸の世尊　中に佛事を施さんと欲して　先づ此の國よりして　化して無量億と爲り、　正定常に相應し　神通以て遊戲し、　諸の國土に遍きこと　月の見ざるなきが如く、　諸の衆生の類に隨つて　所應にして化益す。[二一六]　十地花嚴等　大樹と神通と　勝鬘及び餘經は、　皆此の經より出づ。　是の如く密嚴經は　一切經中の勝なり、　仁主及び諸王　宜しく應に盡く恭敬

に合、五に結なり。

【一五〇】著喩乃至於此壞の四句地婆訶羅譯にては顚倒不顚倒、因異法斯壞の二句と作す、賢首は同異を苦相自相と解せり。

【一五一】他宗。外道小乘の人法を指す。

【一五二】初際。本劫卽ち過去を指す。

【一五三】諸見。本劫（過去）本見（常見を起すこと）の十八と末劫（未來）末見（斷見を起すこと）の四十四との六十二見を指す。

【一五四】**第八節、正道理を示す。**

【一五五】**第九節、安樂修行の問に答ふ。**

【一五六】三種。戒增上・定增上・慧增上をいふ。

【一五七】解脫亦復然。解脫・般若・法身の三の中最初の解脫に就てかく云ふ。

【一五八】四諦。釋尊最初に說かれた眞理。一苦諦、二集諦、三滅諦、四道諦をいふ。

【一五九】神足。神足通のこと。五通の一。

【一六〇】念處。智を以て境を觀察するを念處と云ふ。一身念處、二受念處、三心念處、四法念處の四念處を指す。

【一六一】無礙解。菩薩の說法に滯りなきを云ふ。之に四種あり、一法無礙、二義無礙、三辭無礙、四樂說無礙なり。

[一九一]外相と[一九二]心習氣となり、第七[一九三]末那識　應に知るべし亦復た然り。[一九四]諸根と[一九五]意と[一九六]緣と會して　五識を發生し、心所と相應す　住身は宮室の如し。[一九七]正智もて常に觀察するに、一切諸の世間は　是の如き因に從つて　彼の諸果を生ず、[一九八]眞如は　此に異るに非ず[一九九]諸法は互に相生ずるなり。　理と相應する心は　明了に能く觀見す。　此は卽ち是れ諸法にして究竟圓成性なり。　亦妄所計と爲す、一切法は不生なり。　諸法の性は常に空にして　無に非ず亦有に非ず、　幻の如く亦夢の如く　及び乾闥婆城のごとし。　陽焰と毛輪と　烟雲等の衆物、[二〇〇]種種の諸形相[二〇一]名句及び文身、　是の如き執著生じて　遍計性を成ず。[二〇二]根境意和合し熏習して種を成ず。　心と別異なく　諸識此に由つて生じ、　互因力を資く、　是を依他起と謂ふ。　善く自覺智を證し　現に法に於て樂住す　是れ卽ち圓成と說く。　衆聖の境界なり　佛及び諸の弟子の　此を證するを聖人と名く。　若し人斯の法を證して　卽ち實際を見、唱言す、[二〇三]我が生盡き　梵行亦已に立ち　所作成ぜざるなく　後有を受けずと。　一切苦を解脫し　動搖を斷滅し、　熏習皆已に焚きて、　劫盡きて猶ほ轉ぜざるが如し。[二〇四]生法二つながら無我　照見悉く皆無なり。　無始より來積集せる　種種の諸の戲論、　無邊の衆の過患一切皆已に除く。　譬へば熱鐵團の　熱去りて鐵に損するなきが如し。　是の如く解脫する者は　惑盡きて淸涼を得、　無漏界の　密嚴之妙國に入る。　此の土は最も微妙にして　餘者の及ぶ所に非ず。　唯佛と菩薩の　淸淨の所居なり、　三摩地現前して　此を以て食と爲す。斯の刹に生れんと欲する者は　善く勝瑜伽を習ひ　復た諸の有緣の爲に　分別して廣く開示せよ。[二〇五]名は本と相よりして生じ　相復た緣よりして起る　相より分別を生じて　圓成性に契はず。　根境瓶衣等は　假法の共に和合せるなり、　分別は此よりして生ず　了知して而も[二〇六]別異す。　若しは[二〇七]動も若しは非動も　一切諸の世間は　皆癡暗に因つて生じ　愚冥以て體と爲

【一三三】無色無想定。無色界の觀法。滅盡定の異名。
【一三四】逆順而入出。順入と逆入となり。初禪より入りて非想に至つて出づるを順入と云ひ。非想より入り初禪に至つて出づるを逆入と云ふ。
【一三五】諸地。十地。
【一三六】三和合。根と境と識の三の和合すること。
【一三七】四種緣。因緣・等無見緣・所緣緣・增上緣をいふ。
【一三八】**第三節、現法樂住の問に答ふ。**
【一三九】**第四節、轉所依止不住實際の問に答ふ。**
【一四〇】麁重。種子の異名。
【一四一】十種意成身。十地の一一に一意成身あり。故に十種となる。
【一四二】**第五節、意生身の問に答ふ。**
【一四三】**第六節、內證の境の問に答ふ。**
【一四四】色心乃至無爲。五法といふ。これ小乘の五法なり。
【一四五】如の異名にして、別異なきを觀ずるなり。
【一四六】名乃至如如。大乘の五法なり。
【一四七】**第七節、逐難重釋。**
【一四八】自宗。大乘唯識を指す。
【一四九】五種の論。凡そ論を立てるには要ず五分を具ふ、一に宗、二に因、三に譬喩、四

處に於て然る後に般涅槃するとなり。是の如き一切種の諸智の品位觀行を修行する者は[一七八]下中上同じからず、菩薩の增上修は功德最も殊勝なり。[一七九]十一と[一八〇]十二と及び[一八一]十六に於て、此の諸の修定者は復た漸く心を滅す。盡す所は是れ心に非ず、亦心共住に非ず。未來心は未だ至らず、未だ至らざるが故に有に非ず。心緣和合せずば[一八二]此に非ず[一八三]彼の生に非ず。第四禪は無心なれば、有因は害する能はず。有因とは諸識——意識及び五種——を謂ふ、妄想にして覺知せず、流轉すること波浪の如し。」[一八四]定者は[一八五]賴耶を觀じて能所分別を離れ、微妙無所有り轉依して壞せず。密嚴佛刹に住すれば顯現すること月輪の如く、密嚴の諸の智者は佛と常に共に倶なり。恒に定境中に遊んで一味にして差別なし、難思觀行の境は定力の生ずる所なり。王は應に常に相應微妙定を修習すべし。欲界に[一八六]六天あり[一八七]梵摩に復た十二なり。無色及び無想の一切諸地中、若し密嚴國に生ぜば彼に於て天主と爲る。密嚴土を求めんと欲せば應に十種の智を修すべし。法智及び類智他心世俗智苦集滅道の智盡智無生智なり。仁主、汝の生るる所[一八八]捨軍怛羅族と月王甘蔗と種姓は而も平等なり。彼の族中に於て汝が族最も殊勝なりと雖も、當に密嚴國を求むべし疑退心を懷くこと勿れ。羊の牽拽せられて喘懼して前却するが如く、未那の身中に在るや、幻の鹿の住するに似たり。亦幻の樹影河中の葦荻の如く、王の園苑に戲れて身の支分を運動するが如し。意及び意識心心法は共に倶なり此の法の無自性なること猶ほ雲聚の實に非るがごとし。藏識一切種は習氣に纒覆せらるること、彼の摩尼珠の緣に隨つて衆色を現ずるが如し。有情身に住すと雖も鵝王の無垢なるが如し、是の[一八九]決定種性は亦大涅槃を爲す。[一九〇]名は相に從つて生じ、相は因緣に從つて起る、諸の形相を以ての故に分別を起す。分別は二因に由る

所說を釋す。前段中に九節あり。

第一節、如實見の問を嘆ず。

【一一九】十信中創めて比法を開くをいふ。

【一二〇】四天下。四大洲の異名。

【一二一】帝釋。忉利天の主。須彌山の頂喜見城に居て他の三十二天を統領す。梵名釋提桓因 Sakra devānām Indra.

【一二二】蘇焰。欲界六天中第三天の名。梵 Suyāma、時分、善分と譯す。

【一二三】化樂。六欲天の第五。梵名 Uirmānaratya.

【一二四】生、N麗本王に作り、三本は生に作る。

【一二五】轉依。轉とは滅なり、變易依を轉識するをいふ。

【一二六】**第二節、不隨他行の問に答へて外道を破す。**

【一二七】十業十善。業道心に三品あるを以て三乘の差なり。

【一二八】衆生有始有終の難。賢首は佛地論師に對せるものとす。

【一二九】無餘涅槃をいふ。

【一三〇】これより道理を說く。

【一三一】遍處。觀法の名、靑黃赤白地水火風空識の十法を觀じ、其の一一に於て一切處に周遍せしむるもの。十遍處或は十一切處と云ふ。

【一三二】靜慮。梵 Dhyāna の譯。之に定靜慮と生靜慮の二種がある。

て無を成ずと言はば　斯の人諸有に住して　畢竟出づる能はず。　既に[一三六]三和合　因等の[一三七]四種緣を壞せば、　眼色內外の緣、　和合所生の識、　世間內外の法、　互力以て相生ずる、是の如き等の衆義　一切皆違反す。　[一三八]若し唯識現を知りて　心の所得を離れば　分別現前せず亦其の性に住せず。　爾の時に所緣離れて　寂然として心に正受し、　[一三九]世間中の　所取能取の見を捨て、　轉依して　[一四〇]麁重を離れ、　智慧思議すべからず。　[一四一]十種　[一四二]意成身　衆妙を嚴好と爲し　三界の王と作りて　密嚴に生ず。　[一四三]色心及　[一四四]心所　所相應、無爲、　內外の世間に於て　[一四五]別異なきを諦觀する　是の如き諸の智者は　密嚴國に來る。　[一四六]名と相と分別と　正智と及び如如と、　牟尼の三摩地に　體性皆平等ならば　應當に密嚴　佛の、稱讚する所の土に往くべし。　[一四七]若し三和合　及び四種の緣を壞せば、[一四八]自宗に固からず　諸の妄分別に同じ。　惡習分別者は　彼の　[一四九]五種の論、　譬喩成立せず、　諸義皆相違す。　彼の五悉く過を成し、　覺智眼を惑亂し、　[一五〇]著喩も及び似喩も　顚倒も不顚倒も　是の如き虛妄の執より一切此に於て壞す。　自宗を捨離して　[一五一]他宗の法に依止すれば、　[一五二]初際等の　[一五三]諸見　皆滅壞よりして生ず。

[一五四]大王應に當に知るべし、　有情の三界に在るは、　輪の運轉するが如く　初際得べからず。

如來は悲願を以て　普ねく諸の有緣に應ず、　淨月光明の　處として周遍せざるなきが如し。彼の先業の類に隨つて　機に應じて說法するを、　若し涅槃を壞せば　佛に何の功利あらん。[一五五]增上に　[一五六]三種あり、　[一五七]解脫も亦復た然り、　[一五八]四諦及び　[一五九]神足、　[一六〇]念處・　[一六一]無礙解、　[一六二]四緣・[一六三]無色住、　[一六四]根・力及び神通、　[一六五]覺支・諸地　[一六六]等の　有爲無爲の法、　乃至衆聖人は　皆識に依つて有り。　[一六七]苦法忍・法智、　苦類忍・類智、　集智の四亦然り、　滅道も亦是の如し。　是の如き十六種　之を名けて現觀と爲す。　學人の數に十あり、　[一六八]第八と　[一六九]七返有と　[一七〇]家家と　[一七一]一往來と、　[一七二]一間にして滅度すると、　[一七三]中般と　[一七四]生般と、　[一七五]有行と及び　[一七六]無行と、　[一七七]上流して處

は之を一徧計所執性、二依他起性、三圓成實性とす。

【一〇九】二種の無我。人無我と法無我。

【一一〇】賴耶。阿賴耶（Ālaya）の略。唯識所說八識中の第八識。一切の事物の種子を含藏して執持して沒失せず、その種が外緣に打たれて現起して萬物を生ず。故にこの識を藏識・執持識・無沒識・根本識などといふ。

【一一一】**第三節、心起の時の頓漸の義を釋す。**

【一一二】若干の體なし。八識同體をいふ、同體とは如來藏眞心より、又妄心中の顯識以前の無差別相よりいふ。

【一一三】**第四節、釋心常淨不改之義。**

【一一四】藏識。阿賴耶識の異名。

【一一五】**第五節、釋賴耶與諸法性不一不異之義。**

【一一六】能熏。第八識に對して七轉識をいふ。

【一一七】定非定常淸淨。地婆訶羅譯は定不定別。體常淸淨と作す。賢首は人に定性不定性の別なるも、佛性の體常に淸淨なりと釋せり。

【一一八】自下、廣釋前義。之に二段あり。前段見聞覺悟者より、妄想として覺知せず流轉して波浪の如しまでは如實見の間に答ふ。後段は廣く長行

常住にして　波潮の轉移するが如し、　賴耶も亦復た然り　諸地に隨つて差別あり。　修に下中上あり　染を捨てて明顯はる』と。
[118]金剛藏復た言はく、『如實見菩薩よ　見聞覺悟者は　自性如實の慧なり、　十方一切國の　諸王の衆會中　汝已に我に從つて聞けり　應に隨て廣く爲に說かん、　[119]若し人法を聞き已つて　漸く阿賴耶を淨め　或は人中の王と作り　[120]四天下に轉輪し、　或は復た　[121]帝釋　兜率　[122]蘇焔等と爲り、　乃至　[123]化樂宮に　欲界自在主と爲る。　或は色界處に　[124]生じ、　或は無色天に生じ、　無想有情中に　靜慮して安樂を受く。　眞を證して住せざるは、　猶ほ師子の吼ゆるが如し　諸定に於て自在にして　法喜以て相應す。　一心に密嚴を求めて　三界に染著せず、　密嚴に至り已つて　漸次に開覺す。　[125]轉依して安樂を獲　寂靜にして常に安住し、　無量の諸の佛子　圍遶して以て莊嚴す。　法自在王と爲り　衆中の最上たり　[126]外道の說の如く　壞滅を涅槃と爲すに非ず。　壞は應に有爲に同じかるべく　無有は復た過を生ず、　[127]十業の上中下にて、　三乘以て出生す。　最上は密嚴に生じ　地地轉じて昇進し　解脫智慧を得て　如來微妙身なり。
云何が涅槃は是れ　壞滅の法なりと說かん、　[128]涅槃若し壞滅せば　有情に終盡あらん。　有情に若し終あらば　是れ亦初際あらん、　應に非生法にして　而も始て有情を作る有るべし。
非有情にして　而も有情界に生ずる有る無し。　有情界既に盡きば　佛に所知の法なし。　是れ則ち能覺なく　亦涅槃あることなし。　解脫を妄計する者　解脫を說くらく、　[129]燈滅し薪の盡くるが如く　亦芭蕉の種の如し。　彼の證せる解脫性は　是れ有を壞して無を成ずるなり、
解脫の妙樂に於ては　遠離して說くこと能はず。　[130][131]遍處及び　[132]靜慮に　[133]無色無想定に　[134]逆順して入出し　力通皆自在に　彼に於て退還せず　亦恒に沈沒せず、　法相に了達して　[135]諸地に善巧を得、　是の如くにして　莊嚴し當に密嚴刹に來るべし。　若し解脫性は　有を壞して以

の廣釋所以にて、ここに結前生後の一節あり、左の如し、爾時金剛藏菩薩摩訶薩、說是語已、復告如實見菩薩言この下五節あり。

第一節。釋諸世間に譬妄無實。

【九九】畫。麗本畫に作り、三本盡に作る。地婆迦羅譯には續像中とあり。

【一〇〇】師。麗本には歸に作り他の三本には師に作る。

【一〇一】僞。麗本は爲に作り他の三本には僞に作る。

【一〇二】**第二節、釋諸世間唯心所造。**

【一〇三】習氣。惑妄を現行と種子と習氣の三に分ち、現行を伏し種子を斷ずるも尙惑の氣分ありて惑を現ずるを習氣といふ。佛は全く之を斷す。

【一〇四】戲論。非理の言論。

【一〇五】末那。梵 Manas 意と譯す。唯識論所說八識中の第七で第八阿賴耶識を所依として、且つ第八識の見分を所緣として生ずる識である。

【一〇六】意識。六識の一。意根に依つて起り外界の對象を了別する心王をいふ。

【一〇七】五法。三性五法と熟して共に森羅萬象の自性を分別する語。一相、二名、三分別、四正智、五如如。

【一〇八】三性。一、分別性、二依他性、三眞實性をいふ、又

[九四]佛體は有無に非ず　已に蘊樹を焚燒し、　魔王衆に超勝して　密嚴國に住し　覺する所淨無垢なり　仁主歸依すべし。[九五]覺量を遠離す。[九六]無所有を證せる　密嚴の諸定者に、　仁主歸依すべし。[九七]淨勝密嚴刹は　衆聖の所依處なり、　觀行者充滿す　應に密嚴に歸すべし。[九八]當に世間を觀ずること[九九]盡に高下あるが如くなるべし。　夢中に美色を見　石女急に誕生する(如し)。亦乾闥城の如し、　火輪空中の髮(の如)し。　種種の幻形　人馬菓樹の如し。[一〇〇]幻　師の變化する所にして　一切盡く眞に非ず。　奔電浮雲の如し、　皆[一〇一]僞にして實に非ず、　匠の瓶等を作るが如し　分別の所成に由る。[一〇二]仁主應に諦聽すべし、　世間諸の有情は[一〇三]習氣常に心を覆ひて　種種の[一〇四]戲論を生ず。[一〇五]末那と[一〇六]意識と　幷に餘の識相續し、[一〇七]五法及び[一〇八]三性[一〇九]二種の無我　恒に共に相應すること、　風の暴水を擊つや、　諸識の浪を轉起して　浪生じ流れて停らざるが如し。[一一〇]賴耶も亦是の如し　無始の諸の習氣は　猶ほ彼の暴水の如く　境風の動ずる所と爲り、　而して諸識の浪を起して　恒に斷絕する時なし。[一一一]八種流注の心は[一一二]若干の體なしと雖も、　或は緣に隨つて頓起し　或時は漸生す、　境を取る亦復た然り　漸頓の差別あり。　心轉じて舍宅と　日月と星宿と　樹枝葉花菓と　山林及び軍衆と　是の如き等の處に於て　皆能く漸頓生じ、　多分は能く頓に現じ　或は漸く差別を起す。　若しは時に夢中に於て　昔所更の境と　及び想念の初と生　乃至老死と、　算數と衆物と　句義を尋思すると　異文彩を觀ると　諸の好飲食を受くるとを見、　是の如き境界に於て　漸次に能く了知し、　或は時に頓に生じて　能く之を取る者あり。[一一三]心性本と淸淨にして　思議するを得べからず。　是れ如來の妙藏にして[一一四]金の礦に處るが如し。　意の生ずるは　藏識よりし　餘の六も亦復た然り、　識の六種或は多くは　三界を差別す。[一一五]賴耶は[一一六]能熏　及び餘の心法等、　染淨の諸の種子と　同じく住すと雖も、　染なし。　佛の種性も亦然り[一一七]定も非定も常に淨なり。　海水の

に轉・依といふ。
【八六】自下、世間の分別見生を說く。分別世間に約し及び變易煩惱業因に約して分別見を明し後に變易果に就いて分別見を釋す。
【八七】無我。以來藏性をいふ、法界に遍して一相あるなきを以てなり、この無我は初地所證の眞如にして、之に歸する時に諸見を捨つるを得るなり。
【八八】無我。この無我は八地無功用行所證の眞如なり。變易煩惱業因を盡して證するなり。
【八九】無我。金剛乃至佛果所證の眞如なり。諸惑とは變易果報にて、金剛心末後一念にその報盡くるなり。
【九〇】自下、見世間體を說く、
【九一】及。麗本に乃に作るも、地婆譯にも三本にも及に作る。擊壞とは諸法を斷滅するをいひ、喩とは言說をいふ。
【九二】自下二行、三昧を說く現法樂とは三昧の體なり。
【九三】自下の問答は歸依處を明す。
【九四】佛寶を擧ぐ。
【九五】法寶を擧ぐ。
【九六】僧寶を擧ぐ。
【四七】依上知を擧ぐ。
【九八】地婆譯にては自下第二

る(如く)世間相亦然り、[七九]能相所相の因なり 無なるを妄に分別す。 能覺は所覺より生じ所覺は能に依つて現はる、 彼を離るれば此なし、 光影の相隨ふが如し。 心なければ亦境なく 能所量倶になし。 但一心に依つて 是の如くに分別す。 能知所知の法は 惟心量の所有なり、 所知の心旣になければ 能知得べからず。 心は法の自性たり、[八〇]有性に擾濁せらる、 八地に淸淨を得 九地に靜慮を獲。 覺慧を十地と爲し 灌頂は如來を證す。 法身は無盡なるを得 是れ佛の境界なり、 究竟は虛空の如し。 心識亦是の如し、 無盡無所壞にして 衆德已に莊嚴す、 恒に不思議の 諸佛密嚴土に在り。 譬へば[八一]瓶破れ已つて[八二]瓦體顯現し 瓦破れて[八三]微塵顯はれ 塵を析して[八四]極微を成すが如し。 是の如く有爲に因つて無漏法を成ずること、 火燒き薪盡くるが如し。 復た餘處に於ても然り。 如を證し[八五]轉依を得ば 分別を遠離し 不動智に住して 密嚴中に顯現す。[八六]無生より現ぜる衆色は 諸の世間に住せず 能く一切見を斷ず、 此の[八七]無我に歸依せよ。」

相續流注斷じて 壞なく亦生なく 能く一切見を盡す、 此の[八八]無我に歸依せよ。 諸惑皆已に滅し 寂靜にして不思議に 能く一切見を淨む、 此の[八九]無我に歸依せよ。[九〇]世間種種の法は 本來無我の性なり、 擊壞に由つて無なるに、[九一]及び喩の所顯に非ず。 火の薪を燒き已つて 中に於て自ら息滅するが如し 三有を觀察する 無我智も亦然り。[九二]是を現法樂 內證の境界と名く、 此に依つて諸地に入り 無始の惡を淨除し、 世の所依を捨離す。 世を出でゝ安住せば、 其の心うたた淸淨にして 恒に密嚴土に居せん。』

[九三]爾の時に如實見菩薩摩訶薩及び諸王等、金剛藏に向つて咸く是の言を作す、『我等今歸依せんと欲す、惟願はくは我が歸依の處を示さんことを』と。是に於て金剛藏菩薩摩訶薩、偈を以て答へて曰く、

六通の略。
【七四】所依止を轉ず。生死に住せざること。
【七五】實際に住せず。涅槃に住せざること。
【七六】眞多摩尼。梵 Cintā-maṇi 如意寶珠と譯す。
【七七】此一行は、大乘唯識の道理、法無我の宗を標するなり。心に三種あり、一は本覺眞心、二は妄識心、三は分別事識。
【七八】この一偈二行、地婆譯には一切世間是分別見、見世間體卽於行緣師得三昧とありて、意義明なり、本譯の捨於分別の捨字、或は取の誤ならざるか。世所緣とは世間の體性たる如きなり。
【七九】此一行、地婆譯又は以諸不實相、無而妄分別とす。
【八〇】有性所擾濁。地婆迦羅譯には及人之所濁に作る。心は眞心なり、一切はこれより起る。これを知らずして執して諸法と爲すを有性といふ。
【八一】瓶。分別事識に答ふ。
【八二】瓦。四惑末那に答ふ。
【八三】塵。顯識乃至無明に答ふ。
【八四】極微。如來能性に答ふ。
【八五】轉依。轉は滅なり、所依の無明の體を轉滅すれば、能依の緣修亦立つを得ず。故

物を顯はすが如く　因能く果を了す。　初に所得相なく　後壞するも亦復た然り。　過去中に於て　體の得べきあるに非ず。　未來も亦是の如く、　緣を離れて性あるなく、　一一諸緣の內に　遍く求むるも體あるなし。　亦有無の性を見るに　亦無有の見なきに、　微細に我、有情　瓶衣等を分別す。　邪宗の正道を壞るもの　三百有六十、　生死中を往來して　涅槃の法あることなし。

と。

入密嚴微[六七]　妙身生品第二[六八]

[六九]爾の時に一切佛法如實見菩薩摩訶薩、無量威力世中自在寶瓔珞もて其の身を莊嚴し、座より起ち、右膝を地に著け、金剛藏に白して是の言を作さく、『尊者、善能く三乘世間に通達し、心に現法樂住に達するなき內證の智を得、大定師と爲りて定自在に於て能く隨順して諸地の相を說き、常に一切佛國土中に在りて、諸の上首の爲に深妙の法を演ぶ。是の故に我れ今佛子を勸請す、諸毘者の[七〇]不隨他行の現法樂住內證の境を說きたまへ。今我及び諸の菩薩摩訶薩衆、斯の法を見ることを得て、安樂に修行して佛地に趣き、[七一]意成身及び[七二]言說身を獲、[七三]自在力通皆具足するを得、[七四]所依止を轉じて[七五]實際に住せざること、猶ほ衆色の[七六]眞多摩尼の諸の色像を現じて能く諸趣天王宮殿及び一切佛密嚴國中に於て密嚴行を說くが如くならん』と。

爾の時に金剛藏菩薩摩訶薩、偈を以て答へて曰く、

善い哉天人王　菩薩中の殊勝、　密嚴無我の法性に入るを說かんことを請ふ。[七七]應に分別境は、心の所取の相なるを覺すべし。[七八]若し分別を捨つれば　即ち世分別を見る。　世の所緣を了すれば　即ち三摩地を得。　我れ今爲に開演せん、　仁主應に諦聽すべし。　熱時に陽焰を見

【六七】入密嚴徵。地婆訶羅譯にはこの四字なし。賢首の疏は、この卷よりあり。以下こゝに從ふ。

【六八】妙身生。賢首いふ、舊釋するに三義あり。(一)は十地中所受、(二)は密嚴中所受(三)は如來所變化身。

【六九】此品大に分つて三とす、第一如實見、金剛藏の問答、第二普賢衆色、金剛藏の問答、第三諸天菩薩の問答。

【七〇】不隨他行。初地已上の菩薩は小乘の狹劣自益に隨はず常に大乘の無緣大悲を行ずるの意にて、これは敎道の體を出せるなり。樂住は無分別智の現證にて、これは證道の行を出せるなり。

【七一】意成身。證行の結果として得る報身のこと。

【七二】言說身。應化身をいふ。

【七三】自在力通。八自在・十力

に於て所染なく、動及び所動なく　無染路に住し、　微妙の諸天倶に　[55]乾闥　[56]修羅等　衆仙及び外道　讃嘆し常に供養したてまつる。　彼に於て驚喜せず　心に動搖する所なきは　瑜伽の本淨に由る、　是の故に彼岸を超ゆ。　化を以て佛、跡を現じ　[57]天人の爲に亦業あり　佛は彼此の現に非ざること　猶ほ日月の如く、　圓應智に住して　離欲にして人間に現じ、　異類の諸の外道、　宜しきに隨つて悉く調伏す。　種種の衆智法　王論　[58]四吠陀は　悉く是れ諸如來　定力にして說を持す。　國王朝會　及び諸國法令　山林修道處を現ずるは　悉く皆佛の化を示すなり。　十方衆寶藏より　清淨寶を出生するは、　悉く是れ　[59]天中天の　自在威神の故なり。　三界の善巧慧　種種の諸才智　所作方便業は　佛に因つて成就す。　璽を持して群品の爲にし　業行　[60]者は因を示し、　衆の善巧を戲笑し　常に歌詠論を說く。　或は現じて　[61]兜率より降り　天女衆圍遶し、　歌舞交歡して娛み　日夜常に遊集す。　或は現じて魔王の如く寶冠以て首を嚴り(かざり)、　世の繩とする所を執り　與奪して招放す、　一切衆を放ちて　現じて明智者と爲ると雖も、　常に密嚴中に在りて　寂然として動作なし。　此の　[62]大牟尼境を　凡愚の妄に分別すること　人の翳目を患ふるが如く、　鹿の陽焰を見るが如く、　世の幻夢中に於て　諸の所取を觀るが如し。　天中天の境界　佛子悉く　[63]眞を具ふ、　殊勝を見るに由るが故に　夢より覺めたるが如し。　[64]那羅　[65]伊舍梵　珊那單妙喜　童子劫比羅　首迦等亦想ふ。或は彼の境界を亂し　正瑜伽を見ず、　當來の苦行仙　過去及び現在　習氣心を覆ふが故に悉く亦了る能はず。　善い哉金剛藏　普く諸地中を行き、　復た佛威神を以て　密嚴土に居る。此の金剛藏は　示現して　[66]等持に入る、　正定者の境界は　此に由つて相應するが故に。或は妄分別あり　勝性と微塵と、　工匠の物を製するが如く　種種相差別あれども、　生ずるは唯是れ法生じ　滅するは亦唯法滅す。　一切物を妄計して　細塵能く造作す、　譬へば燈の

【五五】乾闥(Gandharva)樂神、八部衆の一。乾闥婆の略。
【五六】修羅。阿修羅(Asura)の略。八部衆の一、常に帝釋と戰鬪する神。
【五七】爲天人亦業。他の三本には爲人天示業とある。
【五八】四吠陀。吠陀(Veda)は印度婆羅門教の經典世界最古の文献。之に四種あり。一リグ吠陀(Rg-veda)　二サーマ吠陀(Sāma-veda)　三ヤジユル吠陀(Yajur-veda)　四アタルヴ吠陀(Atharva-veda)。
【五九】天中天。佛の尊號。
【六〇】者。已續には佛とあり。
【六一】兜率。梵語 Tusita 天の名。欲界の天處、夜摩天と樂變化天との中間に位し、天處を內外の二院に分ち、內院を彌勒菩薩の淨土とし、外院は天衆の欲樂處である。
【六二】大牟尼境。牟尼(Muni)は寂默の義、即ち大牟尼境とは聖者の寂靜の妙境をいふ。
【六三】具眞。他の三本には見眞とある。
【六四】那羅。那羅延(Nārāyaṇa)の略。天上の力士の名。
【六五】伊舍。伊舍那(Iśāna)の略。欲界の第六天に居る天神。
【六六】等持。麗本は等流に作り、三本は等持に作る。この一偈、地婆譯になし。

す。　密嚴中の人は　一切佛相に同じく、　刹那壞を超越して　常に三摩地に遊ぶ。　世尊は定中の勝にして　衆相以て莊嚴し　如夢觀を得て　諸法を顯現す。　衆は佛の化身にして　兜率より降れりと謂ふも、　佛は常に密嚴に住し　像は現じて其の國に從ふ。　眞に住して正受し　緣に隨つて衆像の生ずること、　月の虛空に在りて、　影の諸水に臨むが如く、　[五一]摩尼の衆影の　色合して明現するが如し。　如來正定に住して　影を現ずる亦復た然り。　譬へば形と像との　一に非ず亦異に非ざるが如く、　是の如き勝丈夫は　議の事業を成ず、　極微勝性に非ず、　時に非ず自在に非ず、　亦餘緣等に非ず、　而も世間を作る。　如來は因緣を以て其の果體を莊嚴し、　世の所應に隨つて　種種に皆明現じ、　三摩地に遊戲し　內外爲さざる無し。　山川及び林野　朋友諸の眷屬、　衆星と日月と　皎鏡にして像を垂る。　是の如き諸の世間を　身中に盡く苞納し、　復た堂內に置きて　散擲すること芥子の如し。　佛、定に於て自在に　牟尼最勝尊なり、　能く世間を作るなく　惟佛の所化なり。」

愚翳無智の者は　惡覺惑に縛せられ、　有無の論に著して　我及び非我を見、　或は一切を壞ると言ひ、　或は少分と言ふ。　是の如き諸人等　常に自ら其の身を害す。　佛は是れ[五二]三有に遍く　觀行の大師なり。　世を觀ること[五三]乾城の、　所作の衆事業の如し、　亦夢中の色の如く、　渴鹿の陽焰を見る(如く)　屈伸等の作業は　風繩にして進退す、　佛は方便智に於て自在にして知見したまふ。　譬へば土巧匠の　善く機發を守る如し。　亦海船師の　柁を執つて搖動する如く、　無邊最寂妙　具足せる勝丈夫なり。　利根者は能く證し　鈍根者は遠離す。　是れ定を修行する者の　妙定の依る所　一切定慧の人は　明了心中に住す。　佛體は最も清淨にして　有に非ず亦無に非ず　能所覺を遠ざけ　及び根量を離る。　妙智相應の心　殊勝の境界なり、　諸相は妄の[五四]所現　相を離るるは是れ如來なり。　能く諸の煩惱を斷じ　定

毛孔生靑色相、十三身毛上靡相、十四身金色相、十五常光一丈相、十六皮膚細滑相、十七七處平滿相、十八兩腋滿相、十九身如獅子相、二十身端直相、二十一肩圓滿相、二十二四十齒相、二十三齒白齊密相、二十四四牙白淨相、二十五頰車如獅子相、二十六咽中津液得上味相、二十七廣長舌相、二十八梵音深遠相、二十九眼色如紺靑相、三十眼睫如牛王相、三十一眉間白毫相、三十二頂上肉髻相。

【五一】　摩尼(maṇi)珠。

【五二】　三有。三界の異名。

【五三】　乾城。乾闥婆城の略。尋香城又は蜃氣樓と譯す。彼の樂人乾闥婆巧に樂を奏すれば空中に樓閣を現ずるをいふ。

【五四】　所現。麗本は行境と作す。今は三本に從ふ此の二句、地婆訶羅譯には知相皆無性、是即見如來と作す。

くにして漸く開誘し、爲に一切欲界天王自在菩薩の淸淨摩尼寶藏宮殿の諸の安樂處、乃至諸地次第を說き、一佛刹より一佛刹に至り、富樂功德莊嚴を示現し、盡く未來に於て機に隨つて應現すること、猶ほ成就[四五]持明仙等及び諸の靈仙宮殿の神の人と與に行止するも而も見る可からざるが如し。如來變化の所爲の事畢りて、眞身に住して隱れて現はれざること、亦復た是の如し』と。爾の時に世尊、偈を說いて言はく、

『根蘊は蛇の聚れるが如く　境界緣の觸るる所、無明愛業生じて[四六]熏習の縛解き難し。[四七]心心所の惡覺の　纒遶すること蟠龍の如く、　忿毒之に因つて[四八]興り　烽たること炎盛の火の如し。諸の觀行を修する者は、　常に應に是の如く觀じて、　諸の蘊法を捨てんが故に　一心にして懈らざるべし。　虛空中に於て　樹なくして影あるを　風衢及び馬跡を　此れ見ること悉く難しと爲すが如く、　能造所造・色及び非色中に於て、　如來を見んと求めんと欲する、　其の難きこと亦是の如し。　眞如實際等　及び諸佛の體性　內證の所行は、　諸の語言の境に非ず。[四九]涅槃を名けて佛と爲し　佛も亦涅槃と名く、　能所分別を離れたり、　云何にしてか見る可けん。　金礦を碎末にし　礦中に金を見ざるも、　智者巧に融鍊すれば　眞金方に乃ち顯はる。諸色を分剖し　乃至極微と爲し、　及び諸蘊を析求して　若しくは一若しくは異性なるも佛體は見る可からず、　亦佛あるなきに非ず。」

定者は如來を觀るに、[五〇]勝相三十二あり　苦樂等の衆事　施作皆明かに顯る。　是の故に如來は定んで　是れ無なりと說くべからず。　三摩地佛　善根善巧佛　一切世勝佛　及び正等覺佛、是の如き五種佛あり、　所餘は皆變化なり。　如來藏は　三十二勝相を具有す、　是の故に佛は無に非ず、　定者は能く觀見す。　三界に超越せる　無量の諸佛國、　如來の微妙刹には淨佛子充滿す。　定慧互に相資け　以て堅固性を成し、　密嚴刹に遊んで　佛の威德を思惟

【四五】持明仙。陀羅尼を誦持し、或は藥力を以て通力を成就せる仙人をいふ。
【四六】熏習。身口意に現はれる善惡の行爲及び思想が、その氣分を眞如或は阿賴耶識に留めること恰も香の衣に於けるが如きをいふ。
【四七】心心所。心王と心所で共に心作用を司る。心王は外境の對象を了別し心所は之に對しにて是非善惡等の判斷を下す。
【四八】興。麗本與に作り、三本興に作る。
【四九】涅槃(nirvāṇa)の音譯。意譯して滅・寂滅・無爲等といふ。
【五〇】勝相三十二。印度の人相說で普通に三十二大人相と云ふ。一足安平相、二千輻輪相、三手指纖長相、四手足柔軟相、五手足縵網相、六足跟滿足相、七足趺高好相、八腨如鹿王相、九手過膝相、十馬陰藏相、十一身縱廣相、十二

は幻師の弟子の、草木瓦礫に依りて色像を示現し、人及び諸の象馬を幻作して、種種の形相具足し莊嚴するが如し、愚幻は貪求するも、明智者に非ず。識も亦是の如く、餘に依つて住し、遍計分別して能取所取の二種の執生ずるも、若し自ら了知すれば卽ち皆轉滅す、是の故に體なきこと、幻士に同じ。金剛藏よ、如來は常住にして恒に變易せず、是を念佛觀行を修するの境を如來藏と名く。猶ほ虛空の壞滅すべからざるが如し。涅槃界と名け、亦法界と名く。過現未來の諸佛世尊、皆此に隨順して宣說したまふが故なり。若しは如來出世するも、若しは出世せざるも、此の性常住なれば、法住性・法界性・法[四三]尼夜摩性と名く。金剛藏、何の義を以ての故に尼夜摩と名くるや。後有一切過を遠離するが故なり。又此の三摩地は能く決定して後有の諸惡を除く。是の如きを以ての故に尼夜摩と名く。若し此の三摩地に住する者あれば、諸の有情に於て心に顧戀なく、實際及び涅槃を證すること、猶ほ熱鐵を諸の冷水に投ずるが如し、有情を棄つるが故に、諸の菩薩捨てゝ證せず。所以はいかん。大精進大悲諸度を捨て、佛種を斷じて聲聞乘に趣き、外道邪見の逕を行くこと、猶ほ老象の淤泥に溺在するが如く、三摩地の泥の沈沒する所と爲る。味定境界も亦復た是の如し。一切諸佛の法門を退轉して、究竟の慧に入るを得ず。是の故に菩薩は捨てて證せず、近住するのみ。究竟慧を以て佛法身に入り、如來廣大の威德を覺悟し、當に正覺を成じて妙法輪を轉ずべし。智境の衆色を資用と爲して、如來定に入り涅槃境に遊ぶ、一切の如來定より起たしめ、漸次加行して第八地を超え、善巧決擇して、乃至法雲に、如來廣大の威德を受用し、諸佛內證の地に入り、[四四]無功用道の三摩地と相應し、遍く十方不動の本處に遊び、而して恒に密嚴佛刹に依止し、金剛自在にして大變化を具へ、佛土を示現して自在を成す、所依智三摩地を轉じ、及び意成身力通具足し、行步の威德猶ほ鵝王の如し。譬へば明月の影の衆水に遍きが如し、佛も亦是の如く、諸の有情に隨つて普く色相を現じ、諸衆會に於て益する所空しからず、復た當に密嚴佛刹に詣るべからしむ。其の性欲の如

【四三】尼夜摩。Niyāma の音譯。決定と譯す。

【四四】無功用。造作をからざる自然の作用を言ふ。七地以前を功用と云ひ、八地以上を無功用と云ふ。

爾の時に佛、金剛藏菩薩摩訶薩に告げて言はく『善い哉善い哉、金剛藏よ、[三八]十地は自在にして分別境を超えて大聰慧あり、能く是の法性佛種の最勝[三九]瑜祇を顯はさんと欲す、唯汝が今佛菩提所覺の義に於て、希有の念を生じて、我に請問するのみには匪ず。賢幻等の無量の佛子あり、咸く此の義に於て希有の心を生じ、種種に思擇して佛體を求む、如來とは是れ何の句義なるや、色を是れ如來と爲すや、異色是れ如來なるやと。是の如く[四〇]蘊界處の諸行の中に於て、內外に循求するも如來を見ず、皆是れ所作滅壞の法なるが故なり。蘊中に如來なく、乃至分析して極微に至るも、皆悉く見ず。所以はいかん、妙智慧定意を以て諦觀するに、見る所なきが故なり。蘊は麁鄙の故に、如來は常法身の故なり。善い哉佛子、汝能善く甚深の法界に入る。諦(あきら)かに聽け諦かに聽け、善く之を思念せよ。當に汝が爲に說くべし』。金剛藏菩薩摩訶薩、唯然りとて敎を受けぬ。

佛言はく『善男子よ、三摩地勝自在金剛藏如來は、蘊に非ず亦蘊に異るに非ず、蘊に依るに非ず蘊に依らざるに非ず、生に非ず滅に非ず、[四一]智に非ず所知に非ず、根に非ず境に非ず。何を以ての故に。蘊處界の諸の根境等は皆鄙陋なるが故なり。內外にして應に如來を見るべからず。且つ色は覺知なく思慮あるなし、生じ已りて必ず滅すること、草木瓦礫の類に同じ。微塵積成して[四二]水の聚沫の如し。受くるに二法を以てし和合して生ずること、猶ほ水泡瓶衣等の想の如し。亦二和合の因緣もて生ずる所は、猶ほ陽焰の如し。譬へば盛熱に地氣の蒸涌するが如く、照し已りて日光は水波浪の如し。諸の鳥獸等、渴の爲に逼られ、遠く之を望みて眞水の解を生ず。想も亦是の如く、體性あることなく虛妄不實なり。分別智者は、性見各別にして、體相名字の得べき有るが如し。定者審かに觀ぜば猶ほ兎角の如し、石女兒等は但假名あるのみ、夢中の色の如く、唯想の妄見にして覺悟せば有に非ず。無明の夢中に男女等の種種の色を見るも、正覺を成ぜば卽ち所見なし。行は芭蕉中に堅實なきが如く、身境を離るれば卽ち體性なし。識は幻事の虛僞不實なるが如し。譬へば幻師若しく

地婆譯も三本も著とす。

【三七】五種識。眼・耳・鼻・舌・身の五識をいふ。

【三八】十地。菩薩修行の階梯。一歡喜地、二離垢地、三發光地、四焰慧地、五極難勝地、六現前地、七遠行地、八不動地、九善慧地、十法雲地。今この十地とは第十法雲地を指す。

【三九】瑜祇。Yogin の譯。相應（Yogin）行ずる人師の意。

【四〇】蘊界處。五蘊・十八界・十二處をいふ。

【四一】智。三本知に作る。地婆譯には非智非不智とす。

【四二】水。麗本には來に作り、如來聚沫と爲す。地婆譯も三本も水と作す。

於て、心に限量を生じて如來に請問するに匪ず。此に菩薩摩訶薩あり、名けて持進と曰ふ。曾て佛所に於て限量の心を生じ、便ち神通を以て上方に昇る、百千[二七]倶胝乃至[二八]殑伽沙等の諸佛世界を過ぎて、一たびも如來を見る能はざるの頃に、心に希有を生じて、佛菩薩の不可思議を知り、還つて[二九]娑訶世界の名稱大城に至り、我が所に來りて已が過を悔謝し、佛の功德の無量無邊なること猶ほ虛空の如く、自證境に住し、密嚴刹に來りたまふを讚ぜり』と。

爾の時會中の[三〇]金剛藏菩薩摩訶薩、善能く諸地の相を演說し、微妙決定して其の源底を盡す、座より起ちて偏に右の肩を袒ぎ、佛の足を頂禮し、右の膝を地に著け、合掌して佛に白して言はく、『世尊、我れ如來應正遍知に於て、少しく諸問せんと欲す、唯願はくは哀愍して我が爲に宣說したまへ』と。佛、金剛藏に言はく、『汝、我が所に於て問ふあらんと欲せば、如來應正等覺は、汝が疑ふ所に隨つて汝が爲に開演せん』と。

爾の時に金剛藏菩薩摩訶薩、佛の許を承け已つて佛に白して言はく、『世尊、佛とは是れ何の句義ぞ。覺る所は是れ何ぞ。唯願はくは世尊、勝義境を說き、法性佛を示して、過去未來現在の菩薩行を修する者をして、――諸の色相積集の見に於て、及び餘の外道は異論執著あり、分別境を行じて微塵、勝[三一]性、自在時、方、虛空、我意、[三二]根境和合、是の如き諸見を起す。復た無明愛業、眼識と[三三]明とを計[三四]著するあり、是の時復た[三五]觸及び作意、是の如き等の法を[三六]因緣・等無見緣・增上緣・所緣緣と爲して、和合して識を生じ、行に執著する者有り、有無等の種々の惡覺を起す、我が法中に於て復た諸人あり、蘊の有情に於て空性見に墮す、――是の如きの妄分別覺を斷ぜんが爲に、唯願はくは世尊、[三七]五種識の所知相を離れ、能く諸法に於て最も自在なる者、佛大菩提の覺知する所の義を說き、聞くことを得る者をして、其の所知の五種を了悟するが如くに、正覺を成ぜしめたまへ』と。

譯眞實心即ち如來藏心をいふ。

【二五】 瞻蔔 (Campaka) 樹の名。金色果樹と譯し、其の花香氣あり、遠く熏ず。

【二六】 十無盡願。一者敬禮諸佛、二者稱讚如來、三者廣修供養、四者懺悔業障、五者隨喜功能、六者請轉法輪、七者請佛住世、八者常隨佛學、九者恒順衆生、十者普皆廻向の十を言ふ。

【二七】 倶胝(Koṭi) 億。

【二八】 殑伽沙(Gaṅgā-nadīvālukā) の略稱。恒河の砂の意、物の數の多きに譬ふ。

【二九】 娑訶 (Sahā) 即ち娑婆のことか。

【三〇】 金剛藏。梵語 Vajira-garbha の譯。密敎に於ける金剛界の賢劫十六尊中の一。本經は主として此の菩薩の所說に係る。

【三一】 性自在。麗本には自在性と作すも、地婆譯も宋元明三本も性自在とあり。よつて勝性、自性と訓ず。

【三二】 根境。六根(眼・耳・鼻・舌・身・意)と六境(色・聲・香・味・觸・法)。

【三三】 明。麗本には眼に作り、地婆譯他の三本も明と作す。

【三四】 著。麗本には者と作し、

【三五】 觸及作意。共に心作用の名。

【三六】 因緣乃至所緣緣を四緣といふ。

刹の如し。餘の諸の佛土は嚴飾細妙にして微塵に同じ。密嚴世界は諸の佛國に超え、遠く星宿及び日月を離れ、無爲性の如く微塵に同じからず。此の密嚴中の佛及び弟子幷に餘の世界より此の會に來る者は、當に涅槃及び虛空の如く[三二]摽滅性に非ざるべし。

爾の時に世尊、彼の世界の佛及び菩薩の威神功德の勝妙なることを現はし已るや、復た佛眼を以て遍く十方の諸の菩薩衆を視、一切佛法如實見菩薩摩訶薩に告げて言はく、『如實見よ、今此の世界を名けて密嚴と曰ふ。是の中の菩薩は悉く欲色無色無想有情の處に於て、三摩地力を以て智慧の火を生じ、色貪及び無明を焚燒し、所依止を轉じて意成身を得、神足力通以て嚴飾と爲し、竅隙なく骨體なきこと、猶ほ日月・摩尼・電光・[三三]帝弓・珊瑚・[三四]紇利多羅・黃金・[三五]瞻蔔・孔雀・花月・鏡中の像の如し。是の如き色身は諸地に住して無漏因を修し、三摩地に由つて自在を得、[三六]十無盡願及び廻向もて殊勝身を獲て密嚴刹に來る』と。

爾の時に一切佛法如實見菩薩摩訶薩、座より起ちて偏に右の肩を袒ぎ、佛の足を稽首し、右の膝を地に著け、合掌して佛に白して言はく、『世尊、我れ今に於て問ふ所あらんと欲す、惟願はくは如來應正遍知、哀れみ許して爲に說きたまへ』と。佛、如實見に告げて言はく、『善い哉善い哉、汝の問ふ所を恣にせよ、當に汝が爲に說きて汝が心をして喜ばしむべし』と。

爾の時に一切佛法如實見菩薩摩訶薩、佛の開許を承けて、卽ち佛に白して言はく、『世尊、唯此の佛刹は欲色無色及び無想有情界を超越するのみなるや』と。佛言はく、『善男子よ、此より上方、百億の佛刹を過ぎて、梵音佛土・娑羅樹王佛土・星宿王佛土あり、是の如き佛土を過ぎて復た無量百千の佛刹あり、廣博崇麗にして、菩薩衆會の莊嚴する所なり。彼の中の諸佛は、咸く菩薩の爲に、現法樂住の自覺聖智、分別を遠離せる實際眞如、大涅槃界究竟の法を說きたまふ。是の故に常に知るべし、此の界外に是の如き等の無量の佛刹あることを。如實見よ、唯汝が今佛國土の菩薩の衆會に

Avalokiteśvara Bodhisattva mahāsattva の譯。

【二二】 得大勢。Mahāsthāma-prāpta の譯。三阿彌陀の一。

【二三】 曼殊室利。Mañjuśrī の音譯。普賢と共に釋迦如來の脇立で常に左に侍して智を司る。

【二四】 金剛藏 Vajragarbha の譯。金剛界の賢劫十六尊中の一。本經の始終多く其の所說に係る。

【二五】 三摩地 (Samādhi) 舊譯に三昧に作る。定・正受等に譯す。

【二六】 三有。三界の意。

【二七】 如來。梵語 Tathāgata の譯。佛十號の一。

【二八】 應正遍知。應と正遍知。佛十號中の第二と第三。應は應供 (Arhat) の略。正遍知 (Samyak-Saṁbuddha) は又正等覺ともいふ。

【二九】 三摩地。(Samādhi) 舊譯の三昧、定又は等持と譯す。

【三〇】 雷。三本には電に作る。地婆譯には虹電光とす。

【三一】 光網。地婆譯も三本も光明網と爲す。

【三二】 摽滅。涅槃・無爲法などの異名。

【三三】 帝弓。天帝の弓、虹の異名。

【三四】 紇利多羅 (Hṛdaya) の

大乘密嚴經

開府儀同三司[一] 特進[二]試鴻臚卿 肅國公 食邑三千戶 賜紫贈
司空[三] 諡大鑑正 號大廣智 大興善寺三藏沙門不空奉 詔譯

卷の上

密嚴道場品第一[四]

是の如く我れ聞く。一時、佛[五]薄伽梵、[六]欲色無色等の想を超越し、一切法に於て自在無礙にして、神足力通の遊戲する所の密嚴世界に住したまふ。而して此の世界は彼の[七]外道[八]聲聞緣覺の所行の境に非ず、諸の勝[九]瑜伽を修習する者と、十億の佛刹の微塵數等の[一〇]菩薩摩訶薩と倶なりき。其の名を摧一切外道異論菩薩摩訶薩、大慧菩薩摩訶薩、一切佛法如實見菩薩摩訶薩、[一一]聖觀自在菩薩摩訶薩、[一二]得大勢菩薩摩訶薩、神通王菩薩摩訶薩、[一三]曼殊室利菩薩摩訶薩、[一四]金剛藏菩薩摩訶薩、解脫月菩薩摩訶薩、持進菩薩摩訶薩と曰ひ、而して上首と爲す。皆三界の心意識の境を超え、智、身を成じて所依を轉じ、如幻の首楞嚴法雲[一五]三摩地を成就し、無量の諸佛手づから其の頂に灌ぎ、[一六]三有を離れたる蓮華宮に處る。

爾の時に[一七]如來[一八]應正遍知、現法樂住自覺聖智甚深境界微妙奮迅無量衆色に現顯せらる、[一九]三摩地より起ち、帝[二〇]雷光妙莊嚴殿を出でて、諸の菩薩と無垢月藏殿中に入り、密嚴場師子の座に昇りたまふ。世尊坐し已つて四方を觀察し、眉間の珠髻光明莊嚴より無量百千の淨光を出し、圍遶交映して光明網を成したまふ。是の[二一]光網流照の時、一切の佛刹の莊嚴の相分明に顯現すること、一佛

【一】開府儀同三司。將軍總督などの尊稱。
【二】特進。三司卽ち三公の下に位する官名。三本には開府以下の四十三字を、單に三藏沙門大廣智不空と作す。
【三】司空。三公の一。
【四】密嚴道場品。地婆訶羅譯は密嚴會品。地婆訶羅譯に賢首の疏あり。以下、この疏に從つて解說す。但、惜むべきは初二卷の疏を缺けることなり。
【五】薄伽梵。梵語 Bhagavat の音譯世尊の義。
【六】欲色無色。欲界・色界・無色界の三界をいふ。
【七】外道。佛教以外の邪法。
【八】聲聞緣覺。前者は Śrāvaka 後者は Pratyekabuddha の譯。共に小乘の修行者で之を二乘といふ。
【九】瑜伽（Yoga）。相應と譯す。
【一〇】菩薩摩訶薩。菩提薩埵摩訶薩埵（Bodhisattva m.hāsattva）の略。菩提薩埵は道衆生、摩訶薩は大衆生と譯す。
【一一】聖觀自在菩薩摩訶薩

大唐新翻密嚴經序

朕[一]、聞く、西方に聖人あり。不言の言を演べ無敎の敎を垂れ、權實を啓迪し聾瞽を發披す。其の善に遷る者は疾からずして速に、其の益を階にする者は聖に卽して自ら凡、蒙求を擊つに娑婆丘陵を以てし、達觀を示すに密嚴世界を以てす。染淨は我が實に是非に遊ぶに在るに匪ず、而も梵越念中に生じ、及び目下に缺頓す。彼の魚藏水鳥逝く、其れ是の若きか。欽なる哉、密嚴の迹三有を超え、量法界に周ねく、相極微を離ること、聲聞の所聞に非ず、豈色見の能見ならんや。嘗て已が主[二]妙を潔うし允に恭しく付屬す。是れ泉識浪を靜め珠意源を淸めて、賴耶能變の端を窮め、自覺湛然の境を照さんと欲して、深く心極に詣るは其れ唯是の經のみ。夫れ翻譯の來るや抑由あり。方に言に異ありと雖も、本質須く存すべし。此の經は梵書並に是れ偈頌なるを、先の譯者は多く散文と作せり。蛇化して龍と爲る、何ぞ必ずしも鱗介を變へん、家の國を成す、寧ぞ卽ち姓氏を改めん。矧んや訛[三]異輕重或は異同あり、再びして詳悉せば善を盡すと爲す可し。大興善寺三藏沙門不空は、像敎の棟梁、愛河の舟楫なり、戒珠握に在り明鏡懷に入る。雪涉雲征、鹿野の眞諦を窮め、帆飛海宿、馬鳴の奥[四]音を究め、聲八轉を詠じ言兩方を善くし、[五]之れ闕如を窺鑑し、了義を抑揚す可し。詔して京城の義學沙門飛錫[六]等、翰林學士柳抗等を集め、斯の文及び護國の經等を詳譯し、[七]貝多を對執して諸の簡牘を翻じ、其の本夾に憑りて依るに頌言を以てせしむ。大羹の味遺らず、淸月の魄恒に滿つ。豈美しからずや豈美しからずや。朕が詞淸華に乏しく文[八]道麗に非ず、志祕賾を流衍し、將に無窮に布濩せんとす。聊か虛懷を課して、之が篇首に序すと云爾。

【一】朕。唐代宗。

【三】主。他の三本には至に作る。

【三】異。卍藏には略に作る。

【四】音。他の三本には旨に作る。

【五】之。他の三本には足に作る。足の字可ならん。

【六】等。他の三本には等の字なし。

【七】貝多。貝多羅の略。貝多羅とは Pattra 葉の義。但し傳說には多羅（Tāla）樹の葉を言ふ。三藏の經典皆之に記す。

【八】道麗。道或は道の誤寫か。

賴耶識と密嚴淨土とであつて、密嚴淨土の高潮せられる所に、本經成立の時期を規定せしむるのがあるといふ事になる。然らばその年代は如何といふ事になれば、それは適確に指示する事が出來ぬのは、他の經典と同樣であるが、初譯者地婆訶羅の來朝せる西曆六七六年以前なる事は言ふまでもない。西曆六七六年は最下限である。然らばその最上限はどの邊まで遡るかといふに、盛唐の文化的力能から考へると、印度の最高思想は、成立するや否や直に東流したに相違ないから、恐らくは地婆訶羅同時又はその直前の成立であつたらうと思はれる。然らばその最上限は西曆六〇〇年の頃であつたらう。

斯の如くにして本經の成立を、西曆六〇〇――六七六の間に置いて、大過はあるまい。此の時代は、印度の大乘思想は、蘭菊美を爭ふの域を通過して、それ等が調和せられ折衷せられて、思想としては進步の餘地がなく、何等か他の方面への轉化を方向して居たらうと思はれる。その轉化はこの後直に東流せる密教であるから、本經は顯教の最後に屬し、而して密教の原頭に立つものと見る事が出來やうと思ふ。

×

最後に本經の國譯につきては、文學士林得成君を煩はした事を附言して、感謝の意を表する。

昭和十年十二月一日

譯者　常盤大定　識

四、成立年代

本經は、如來藏と阿賴耶識との二而不二を說く所からすれば、唯心系及び唯識系の教義の成熟した後にあらはれたものでなくてはならぬ。如來藏系の經典としては、之に先だつて「如來藏經」や、「無上依經」や、「不增不減經」や、「勝鬘經」や「楞伽經」の如きものがあつたらうし、唯識系の經典としては「大乘阿毘達磨經」や「解深密經」やの如きものがあつたらう。同時に論部の中にても、「佛性論」や「起信論」の如きがあり、又「攝大乘論」や「瑜伽論」の如きが既に行はれて居たに相違ない。經中に於て「中論」の八不を說いて居り、「維摩經」の思想を取り入れてあるのは、素より當然の事である。本經それ自身から、他の大乘經典との關係を見ると、明白に「十地・華嚴等、大樹與神通、勝鬘及餘經、皆從此經出」の一偈があるから、「十地經」や「華嚴經」や「大樹緊那羅經」や「勝鬘經」やより後のものたるは、些の疑を容れぬ所である。その屢々五法・三性・八識・二無我に關說してある所からすれば、「瑜伽論」や「佛性論」や「楞伽經」等の組織を繼紹して居る事を看取すべきである。「楞伽經」は如來藏系の經典としては、可なりに後期なものと推定せられるが、同經に於て如來藏と阿賴耶識との關係の一なるが如くまた二なるが如きに比すれば、本經は一步を進めて、全く之を一體二面とするまでに至つて居る。その點から見る時は、如來藏系のものと見るべきか、阿賴耶識系のものと見るべきか、之を判別しがたいが、大體に於て如來藏思想によつて阿賴耶識を統括したと見るが事が出來る。然し種々の大乘教義を折衷調和せんと試みたものであるから、强い主張が見られぬ缺點を伴ふのである。これが爲に、唯識宗にても傍依の經とせられるし、華嚴宗でも傍依の經とせられる。兩宗によつて同樣に依憑とせられる事は、要するに一方に取りて强き證權とせられぬ事を語るものでなくてはならぬ。

本經に於て如來藏と阿賴耶識との外に猶大に注意すべきものは、題號に見らるる密嚴淨土の提唱である、密嚴淨土は卽ち後に密教の理想境とせられるものであるから、本經中には猶未だ密教の分子が多くないが、本經成立の時代には、既に密教的雰圍氣が大に動いて居たものと見てよいだらう。この點からする時は、印度の大乘思想は、既に絕頂に達して、密教に移るべき經過中にあり、その氣運に乘じてあらはれたのが本經であり、又かゝる大乘經典の構成せる空氣によつて、密教が次第に勃興したものと見ねばならぬ。

斯くて本經の三大眼目は、如來藏と阿

- 初、問
- 後、金剛藏答二
  - 一、偈答二
    - 一、答名想等境界三
      - 一、釋世法唯名
      - 二、藏識不離末那
      - 三、觀法利益
    - 答所立名何所住四
      - 一、約三自性出名所住
      - 二、就五法藏明名所住
      - 三、牒計示正理
      - 四、陶練歸本益
  - 二、逐難重釋二十
    - 一、賴耶不斷不常
    - 二、三心各別業用
    - 三、如來藏本來清淨凡聖善別緣起
    - 四、賴耶山染分
    - 五、凡愚迷惑賴耶
    - 六、所變衆生似有無實
    - 七、虛僞爲生死本
    - 八、遠離不分別習氣
    - 九、衆生本來寂靜
    - 十、賴耶被緣似現
    - 十一、在蘊諸賴耶識
    - 十二、諸識有所依差別
    - 十三、緣輪迴無窮
    - 十四、緣缺散壞
    - 十五、出三心體
    - 十六、明三種心所有業用
    - 十七、識起時具緣多少
    - 十八、身無我
    - 十九、三心俱起之義
    - 二十、諸法空

第三、普賢色身對金剛藏問答辨請二

- 一、問——衆色王問及月幢分身大衆問
- 二、金剛藏答四
  - 一、定
  - 二、非定二
    - 一、牒外計示正
    - 二、破他宗邪執二
      - 一、破有性執
      - 二、破空見執
  - 三、何所定
  - 四、定所待緣五
    - 一、定所待緣
    - 二、定體
    - 三、定障
    - 四、定所現用
    - 五、定所厭法

第四、大衆聞法修行供養五

- 一、身業供養
- 二、口業供養
- 三、妙法供養
- 四、菩薩諸天請問
- 五、金剛藏答

第五、大樹王對金剛藏性空問答

第六、持進菩薩供養

第七、觀自在等八大菩薩密嚴土問答

第八、如實見等對金剛藏大乘三昧問答

- 一、問
- 二、答——五法、八識境界性不門、無我、微妙法惡分別

第九、流通分

二、顯正六
- 四、答無始分別
- 五、答如起屍行等喻
- 六、總結唯識道理

第三、廣明密嚴淨土功德二
- 一、總問略答
- 二、別問廣答三
  - 一、如來所說語義眞實
  - 二、牟尼所說義趣難可得見
  - 三、如來四時

（三）胎藏生品——大分爲二

第一、釋衆生身所因成法

第二、釋所得果報虛僞可厭

（四）自作境界品——大分爲二

第一、金剛藏釋唯識義五
- 一、立宗略釋
- 二、因緣有無自性
- 三、對虛顯實淨
- 四、理無情有

第二、問答廣陳道理
- 一、問
- 二、金剛藏答二
  - 一、略答
  - 三、廣答五
    - 一、答衆生之心
    - 二、釋密嚴淨土
    - 三、答諸蘊因緣
    - 四、釋一切凡夫
    - 五、結示了理

（五）辯觀行品——大分爲二

第一、辨行因得成威德五
- 一、明法假有
- 二、依法修行離過得益
- 三、觀行法者
- 四、釋通疑情
- 五、舉益勸修

第二、結前義三
- 一、示正理
- 二、破外人執
- 三、舉益勸修

（六）趣入阿賴耶品——大分爲二

第一、廣釋三
- 一、廣示佛力
- 二、明佛性甚深
- 三、標心外無法三
  - 一、心境二法非有似有
  - 二、藏識中作依持之用
  - 三、緣起用

第二、結釋

（七）我藏境界品——大分爲四

第一、金剛藏放光現瑞

第二、引喻顯示

第三、廣示唯識道理

第四、結勸令修

（八）阿賴耶即密嚴品——大分爲九

第一、金剛藏對如實見說蘊無我

第二、寶手衆色對金剛藏名想等世間法門答分別二

たものであるが、之を不空譯にそのまゝあてはめても差支がない程に、兩譯は一致して居る。兩譯に於て長行と偈頌との差はあつても、行文に於ても順序に於ても多くの變更がないのは、本經そのものが、成立以後變更の無かつた事を知らしめる。時に地婆訶羅譯に缺けて居て、不空譯にのみある所もあるが、全體の上から見る時は差支へになる程の相違でない。

（二）妙身生品——大分爲三

- 第一、如實見對金剛藏問答辨釋二
  - 一、釋修因行成德二
    - 一、如實見問
    - 二、金剛藏答四
      - 一、標唯識宗
      - 二、世間分別見生
      - 三、見世間體
      - 四、於所緣得三昧
  - 二、明歸依處問答二
    - 一、表宗略答
    - 二、廣釋四
      - 一、總釋五
        - 一、世間虛妄
        - 二、世法唯心所造
        - 三、心起時頓滅義
        - 四、心常淨不改
        - 五、賴耶諸法非一非異
      - 二、廣釋九
        - 一、歎如實見問
        - 二、答不隨他行問
        - 三、答心法樂住問
        - 四、答賴耶所依止不住實際
        - 五、獲意生身等
        - 六、內證之境
        - 七、逐難重釋
        - 八、以大乘理示諸外道
        - 九、安樂修行
      - 三、略表七
        - 一、釋八識門
        - 二、釋五性門
        - 三、釋三性門
        - 四、釋二無我門
        - 五、逐難重釋
        - 六、歎密嚴土
        - 七、釋如來色相
      - 四、宗釋六
        - 一、說入證行
        - 二、說隨有行
        - 三、說歷事諸佛
        - 四、說不住道行
        - 五、說不厭生死
        - 六、說退治法
- 第二、大衆對金剛藏問答二
  - 一、大衆問
  - 二、金剛藏答二
    - 一、破邪
      - 一、明世間因唯是賴耶
      - 二、答如幻等喩
      - 三、答世間若干色像

第七我識境界品に於て、かくの如く一切諸法は唯心の作なりと雖も、諸の外道は我執のために唯識の理を識らざるを以て、この邪執を除き無我の理を知らしめんがために、此の品を說く。

第八阿賴耶卽密嚴品に於て、其の名の示すごとく、阿賴耶卽密嚴の所以を示して曰く、たとへば妙金の礦中に在るも、愚者は見得ないが、智者が巧に陶錬すれば、其の金乃ち明かに顯はるるが如く、阿賴耶識は習氣に纏覆されてゐるために、愚者は見得ないが、密嚴の諸定者は三摩地力を以てその習氣を淨除するが故に、常に明かに阿賴耶識を體認することができる、卽ち密嚴とは大明妙智の殊稱なり、云云。又曰く、阿賴耶識は恰も大海の如く、常に諸の戲論に擊たれて五法三性等の諸の識浪を生じて飄動してゐるけれども、勝觀行を修する者は、恰も熱鐵を冷水に投ずるが如く、永く取蘊を離れ諸の習氣を滅除して、密嚴國に住し常住無礙なること、明月の遍ねく森羅萬象を照すが如しと。而して更に如來藏と阿賴耶識との關係を、金と指環とのそれに譬へ、

佛說㆓如來藏㆒　以爲㆓阿賴耶㆒
惡慧不㆑能㆑知㆓　藏卽阿賴耶㆒
如來清淨藏　世間阿賴耶
如㆘金與㆓指環㆒　展轉無㆗差別㆖

と說いてゐる。此の偈は甚だ有名なもので、華嚴宗や唯識宗の學者によつて、數々引用せられた。

是の如く本經中には、一方には不增不滅不生不滅の如來藏を說き、他方には萬法は唯識の所現に外ならぬとして阿賴耶識を立て、至る所空觀を背景として、如來藏系阿賴耶系の諸經論の共通組織であつた五法三性八識二無我を繰り返して說き、更に三密を以て莊嚴せる初地以上の菩薩の依處たる淨土密嚴國を說き、最後に已上の如來藏・阿賴識・密嚴の三者は別のものではなく、全く同一のものの異名に過ぎぬとして之を調和し、就中如來藏を以て之を統括せんとしてゐる。而して阿賴耶識に關說してゐる所から、法相宗所依の經典の一に數へられ、如來藏を强調する所から、華嚴宗の學者の依用する所となり、又密嚴淨土を說く所から、「金剛頂一切瑜祇經」と共に密敎に關係を持つ。かくの如く本經は、大乘の敎理を列擧して抱括して說いてゐるので、或る意味からすれば、正しく大乘經典の總結と見ることが出來やう。

三、本經各品の科段

今、賢首の疏に從つて、內容の大體を表示せんが爲に、その科段の大綱を出して見る。惜しい事には、初の密嚴會品の疏が逸して居るから、この一品の科段が見られぬ。賢首の疏は地婆訶羅譯に加へ

には、全五卷中第一卷(密嚴會品)の疏は散逸して傳はらない。

二、大　意

佛、出過三界密嚴國に住し、時に金剛藏菩薩あり、佛に第一義法性を問ひ、佛、如來藏の不生不滅を以て答ふ、次に金剛藏菩薩が初地以上の諸菩薩に對して、如來藏・阿賴耶識等の大乘の法相を開演し、最後に如來藏卽阿賴耶識卽密嚴なる所以を示すといふ構想になつてゐる。而して一經の始終主として金剛藏菩薩の所說に係る。之を各品について更に詳述せば、

第一密嚴道場品に於て密嚴國を說明して曰く、密嚴國は他受身の報土であつて、三摩地力を以て智慧の火を生じ、色貪及び無明を焚燒して、分段生死を斷じ、意成身を得たる初地以上の菩薩の生ずる極樂莊嚴國である。時に會中に金剛藏菩薩あり、佛に如來の體性を問ふ。佛答へて曰く、如來は根境の和合によつて生ぜず、蘊處界の分散によつて壞せず、不生不滅不增不減淸淨無垢であつて、吾人これを見んと欲するも見る能はず、只三摩地力によつてのみ如來を觀見する。この念佛觀行によつて得る境を如來藏と言ひ、この如來藏を體驗する時に、密嚴刹に生じて無量壽を得る。

第二入密嚴微妙身生品に於て、如實見・普賢衆色及び淨居諸天等の諸大菩薩、金剛藏菩薩に向つて、如何にすれば密嚴淨佛國土中に生るるを得るかを問ひ、金剛藏菩薩之に對して、世間は虛妄にして唯心所造であるから、一心に歸依して淨業を修し、五法三性八識二無我の法相に了達し、一切は唯識の所現なるを覺悟せば、卽ち彼に生るるを得るを答へ、諸菩薩之を聞いて、如法に作禮修行するを說く。

第三胎藏生品に於て、有情身は因緣生にして、常に諸趣に輪廻して出脫を得ることなし。須らくこの虛僞なる衆生身を厭離して、密嚴國に生れんことを希ふべきを述べてある。

第四自作境界品に於て、已に妙生身の欣求すべく胎生身の厭患すべきを說いたが、是の如き二法は、之を究盡するに唯一心の作であつて、心を離れて別に法なしとて、萬法唯識の道理を說く。

第五辯觀行品に於ては、前品に於て萬法の假有と唯識の道理とを示したので、此の品に來りて、如法に修行せば正に成就すべく、この修行は初地以上の菩薩にしてはじめて可能なる所以を說く。

第六趣入阿賴耶品、上來諸法は唯心の所作にして心外無法なるを說いたが、然し心に數種あり、如何なる心を指してかく言ふのであるかと疑を立て、其の心とは卽ち阿賴耶識なりとて、この識に依持の用と緣起の用とあるを說く。

大乘密嚴經解題

一、飜　譯

梵名を Mahāyāna ghana-vyūha sūtra といひ、譯して大乘密嚴經といふ。これに前後二譯あり、唐の地婆訶羅（Divākara 日照）譯と同じく唐の不空金剛　（Amoghavajra）譯で、兩つながら現存してゐる。共に大乘密嚴經と呼び、同じく三卷八品より成る。而してその譯出年代については、不空譯は「貞元錄」及び「宋高僧」傳によれば代宗の永泰元年（七六五）に譯し畢つたことが明示されてゐるが、地婆訶羅譯については、「開元錄」には「大乘密嚴經三卷見大周錄」とあり、「大周錄」には「大乘密嚴經一部三卷六十三紙 右大唐三藏地婆訶羅譯」とあるのみで、その譯出年時を明記してゐない。故に彼の在留期間卽ち儀鳳砌（六七六）——垂拱末（六八八）の間（一説には六八〇——六八七）に譯されたと概算するより外はない。兩譯を比較表示すれば左の如くである。

（譯者）	地婆訶羅譯	不空譯
（譯出年代）	（六七六—六八八）	（七六二—七六五）
（經名）	大乘密嚴經三卷	大乘密嚴經三卷
（品名）	(一)密嚴會品	(一)密嚴道場品
	(二)妙身生品	(二)入密嚴微妙身生品
	(三)胎生品	(三)胎藏生品
	(四)顯示自作品	(四)自作境界品
	(五)分別觀行品	(五)〃辯觀行品
	(六)阿賴耶建立品	(六)趣入阿賴耶品
	(七)自識境界品	(七)我識境界品
	(八)阿賴耶微密品	(八)阿賴耶卽密嚴品

右の二譯は、大體同一であつて大差はないが、各の特長を言へば、不空譯の篇首に冠する唐代宗の序にあるが如く、地婆訶羅譯は主として長行と偈頌と相半し、不空譯は多く偈頌韻文を以て譯出し、又前者は多くは語を節略にし、時には數行削除してあるように思はれる箇所もある。今この國譯は、便宜上不空譯に依つたが、他を比較對照する事を努めた。不空譯は恐らくは原文に忠實であつたらうと思ふが、然し前譯をそのまゝに踏襲した所も澤山に見られ、而して傳寫の間に誤謬を來したと見え、幾多の誤字があるので、之を地婆訶羅譯によつて改め、其旨脚注を施して置いた。地婆訶羅譯については、賢首大師の「密嚴經疏」があり、學者の依用すべきであるから、これによつて科段を切り、注釋を加へた。章句の切り方に於て、改めたい所もあるけれども、特に賢首のまゝに從つた。唯惜しいこと

目次

經集部十六

常盤大定譯

國譯一切經

大東出版社藏版